静岡県指定史跡

横地城跡

総合調査報告書　資料編

静岡県菊川町教育委員会
二〇〇〇

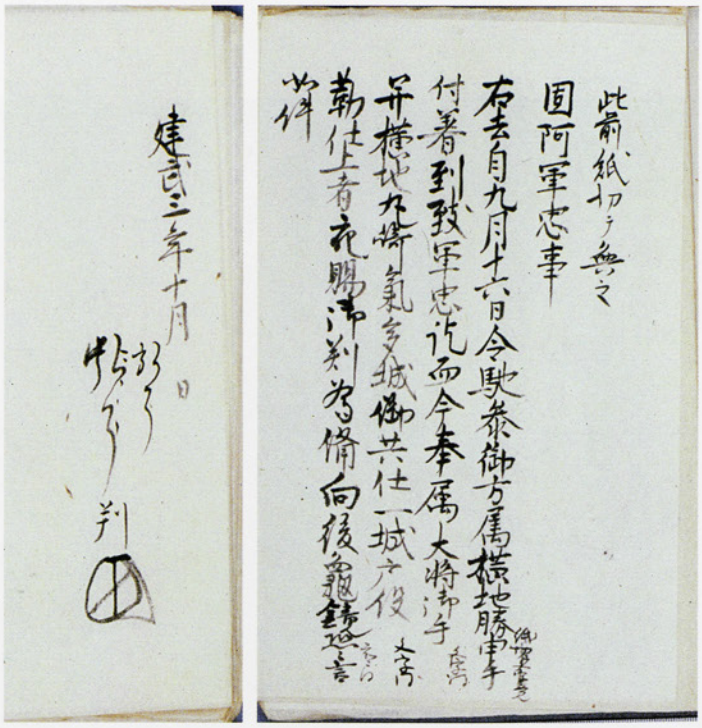
静岡県指定史跡

横地城跡

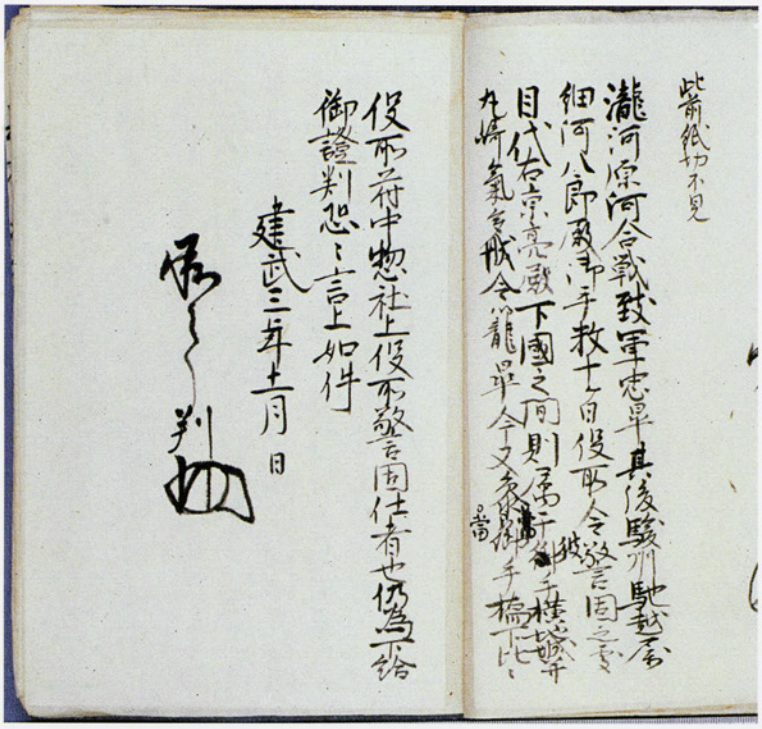
総合調査報告書　資料編

静岡県菊川町教育委員会

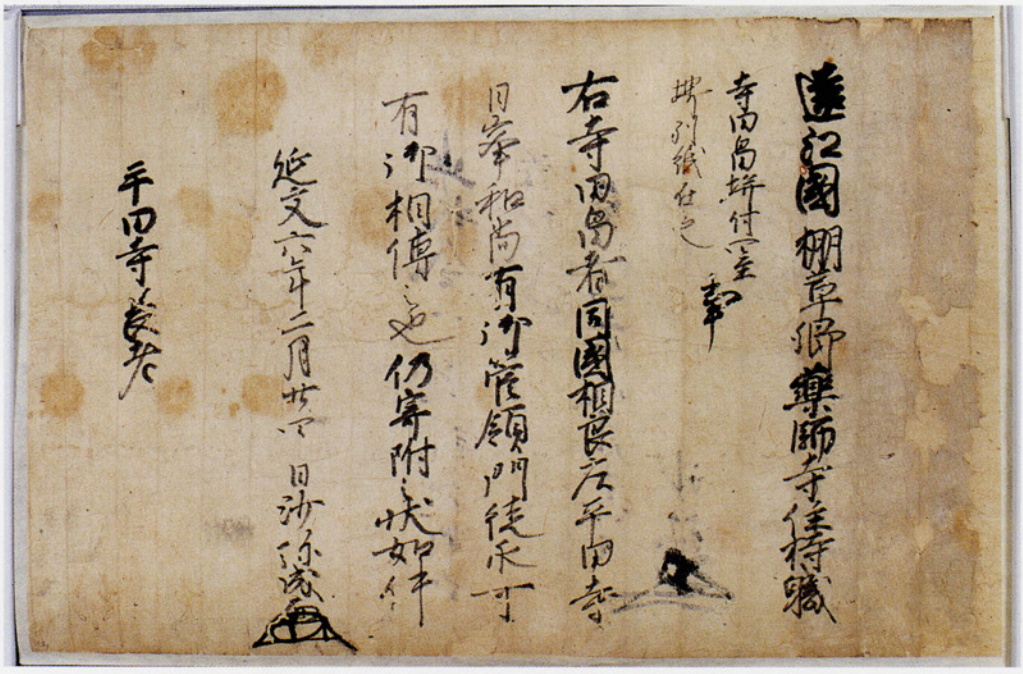
二〇〇〇



27　円阿軍忠状写



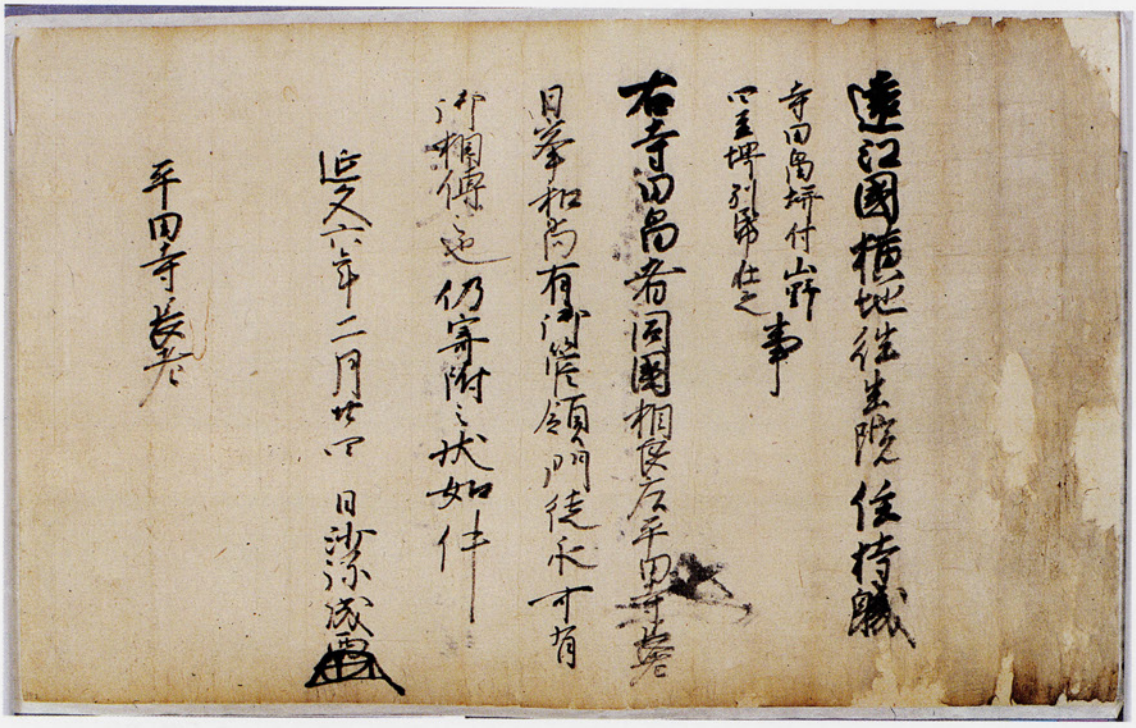
28　某軍忠状写



35　成西寄進状



35　成西寄進状（裏書）

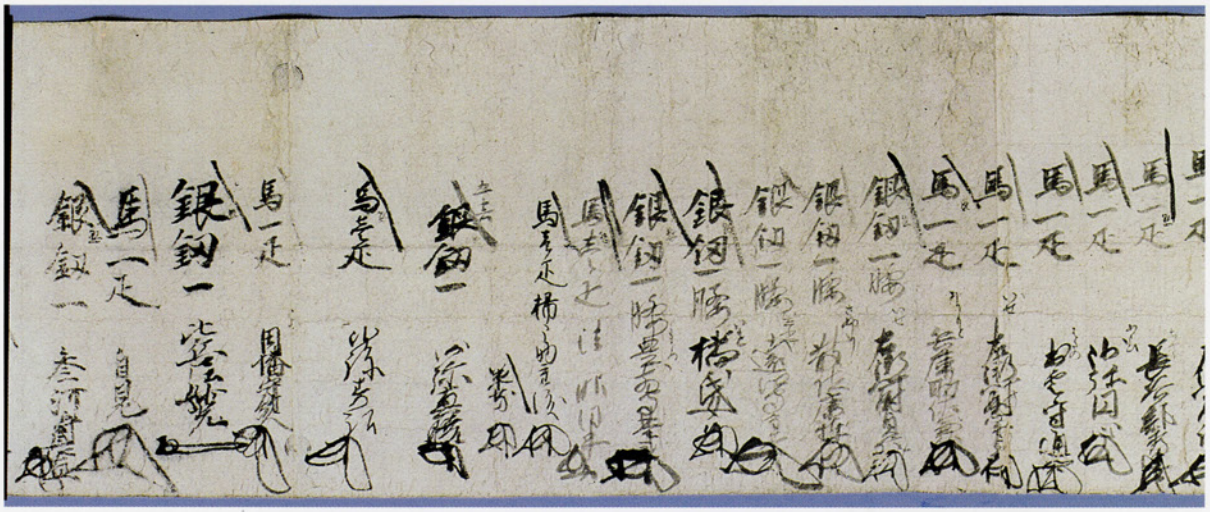


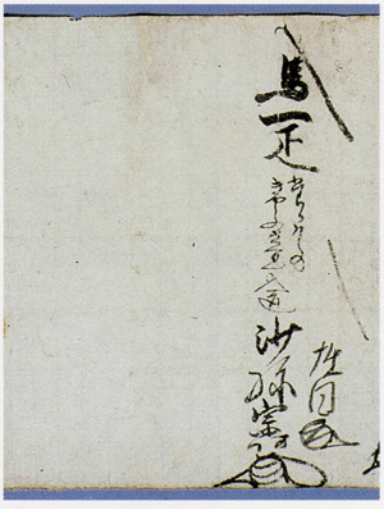
36　成西寄進状



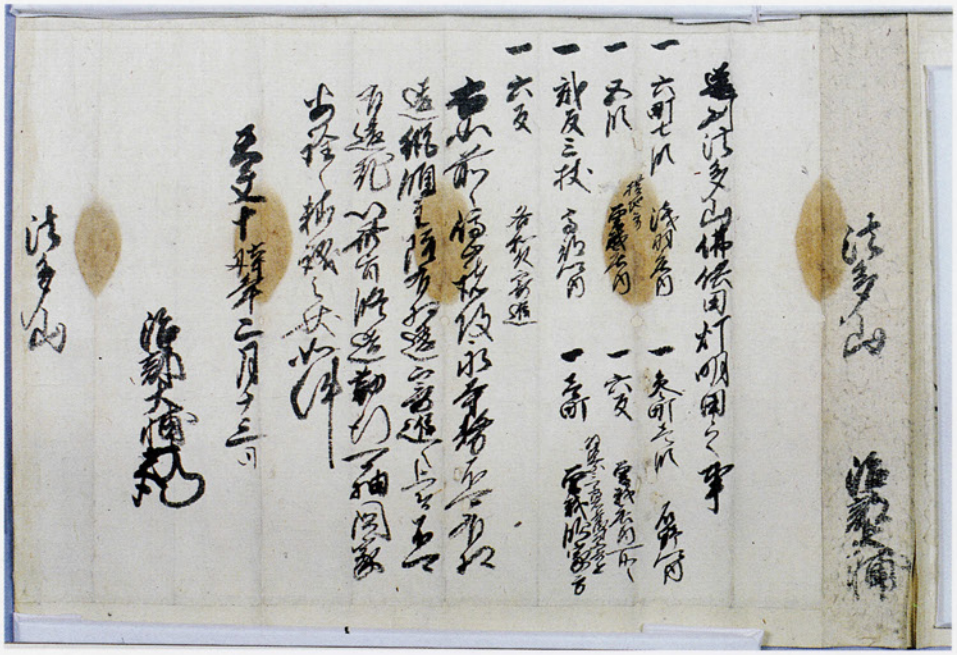
36　成西寄進状（裏書）



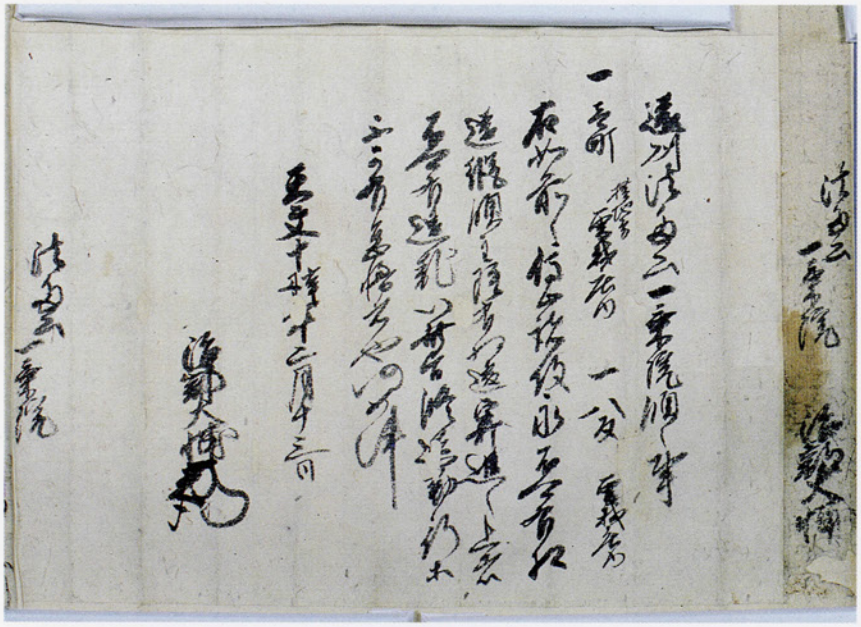




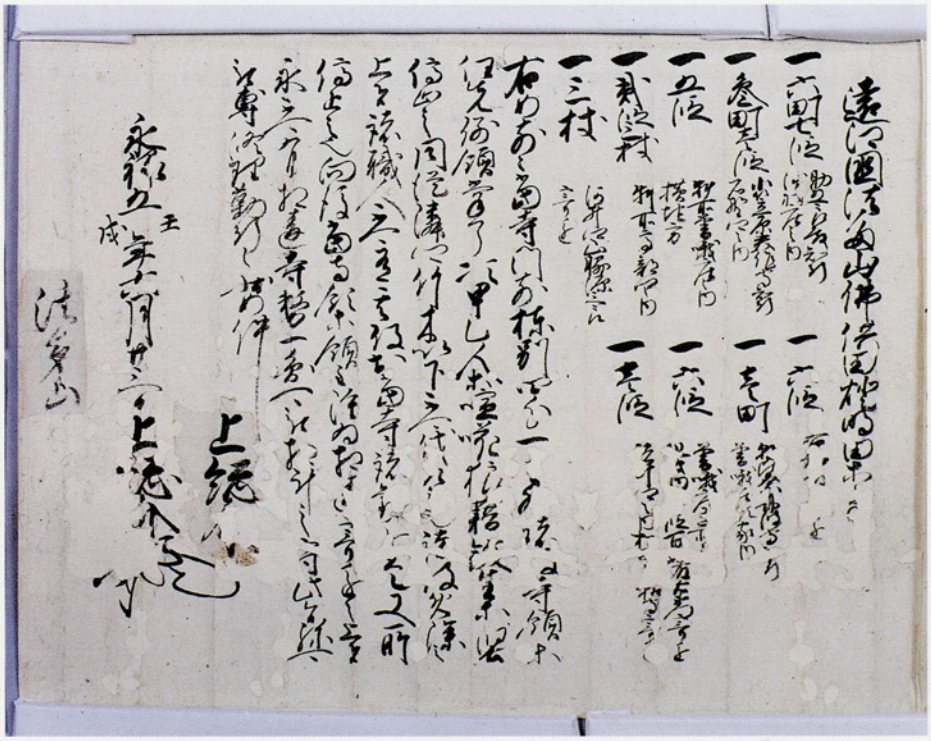
40　足利義詮近習連署奉加状



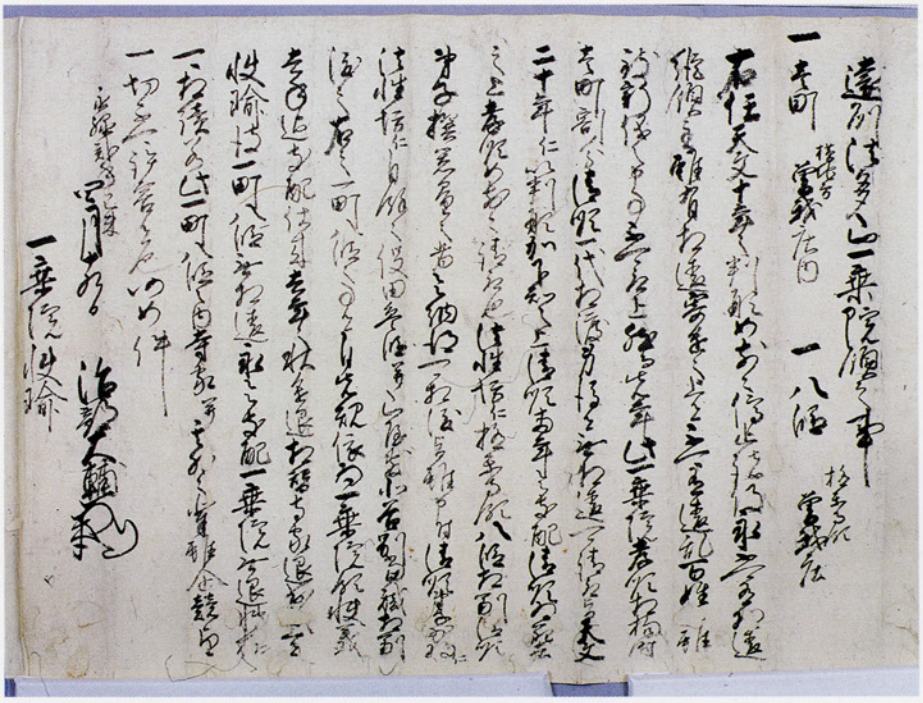
60　今川義元判物



61　今川義元判物



63　今川義元判物



64　今川氏真判物



伊平遺跡北区完掘状態



殿ヶ谷遺跡礎石建物跡



三光寺裏横地氏一族石塔群



伝横地太郎塔



慈眼寺境内五輪塔

『横地城跡総合調査報告書資料編』の発刊に寄せて

横地城跡総合調査委員長　向坂鋼二

横地城跡は、地元では当然古くから知られて大事にされてきた城跡であるが、昭和四十四年国学院大学による調査が行なわれ、縄張図が作られてから、急速に注目を浴びるようになった。地元には横地古城保存会ができ、現在の横地城保存会へと発展してきたし、静岡古城研究会による調査も行なわれ、改めて精密な平面図や縄張図が作成された。昭和四十六年三月には、静岡県指定の史跡となった。

横地城は、その多くが公有地であって、県立公園や県指定史跡に指定されたために、開発の手から逃れて今日まで良く保存されてきた。しかし、周辺特に奥横地地区にも、工業化や住宅化の波が押し寄せてきて、自然との調和や歴史的景観の保全が、このままでは難しい状況になってきた。そこで、この貴重な文化財を歴史文化学習の場として整備し、町民憩の場としても活用できるようにして、積極的な保存対策を講ずる方針が打ち出された。

保存整備を行うには、現地の調査研究が不可欠であるから、まず、整備に必要な基礎資料の作成とその歴史的位置付けを行うために、横地城跡総合調査委員会が設置された。調査委員会は、平成七年九月に第一回目が開催され、昨年度一杯をもって、その役割を終えた。この三年余に亘る総合調査によって、横地城跡の詳細な地形図と精度の高い縄張図が作られたことはいうまでもない

が、文献資料を網羅することで、横地氏の出自や動向を従来になく明らかにすることができた。また、現地に残る寺院跡や石塔群、地下に埋れた遺構・遺物から、横地城の築城と廃絶、横地氏一族の日常生活空間とその盛衰などが、はじめて明らかにされ、城跡だけ保存するのでは不充分であることが分った。こうした総合調査の成果については、平成十一年度に『横地城跡　総合調査報告書』として、公刊したものであるが、その調査の基礎資料まで網羅するには、時間的にも予算的にも困難であったので、改めて別途資料編として公けにすることにした。それが本書『横地城跡　総合調査報告書資料編』である。先に刊行した報告書の根拠となるデータがつまっているので、両書合わせて利用していただくことを希望する。本書刊行に向けて諸資料を提供下さった方々をはじめ、調査にご協力いただいた関係者各位に対して、深く感謝するしだいである。

凡例

1　本書は、横地城跡総合調査による調査研究によって得られた資料を『資料編』として収録した。

2　横地城跡総合調査事業は、平成七年から平成十年にかけて県費補助事業として実施したもので、平成十一・十二年度に資料編の作成を行った。

3　資料編作成事業の事務局は、菊川町教育委員会社会教育課があたった。

4　本書の構成は、第一章文献資料、第二章中世城館、第三章考古資料、第四章石造物、第五章論考からなり、各部門別とした。

5　資料の掲載や記載方法については、各章ごとに凡例で記述した。

6　本書の執筆・編集は各委員が担当し、向坂鋼二が監修した。

7　本書の第二章から第四章までの挿図作成にあたり、萩原紀江の協力を得た。

8　本書で使用した写真・カラースライド等の記録は、菊川町教育委員会において保管・管理している。

横地城跡総合調査報告書資料編関係者一覧

平成十二年十月一日　現在

〔調査委員〕

委員長	向坂鋼二	静岡県考古学会会長
副委員長	小野正敏	国立歴史民俗博物館助教授
委員	鈴木哲太郎	横地城文化財保存会
委員	齋藤慎一	江戸東京博物館学芸員
委員	関口宏行	静岡県中世城郭調査研究員
委員	原廣志	鎌倉考古学研究所研究員
委員	桃崎祐輔	筑波大学歴史・人類学系助手

〔協力調査員〕

中山文人	松戸市立博物館学芸員
藤澤良祐	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター学芸員
古川久雄	摂津文化財調査研究所研究員

〔事務局〕

菊川町教育委員会

教育長	鈴木静夫(平成十一年三月～九月)
教育長	坪井照彦(平成十一年十月～　)
事務局兼	落合偉之(平成十一年度)
社会教育課課長	青野敏行(平成十二年度)
社会教育係長	高柳和弘
社会教育専門員	平松秀規
社会教育係	塚本和弘
社会教育係	須田裕美

調査整理員　堀内初代　三ツ井しの　萩原紀江　長谷山敏男

資料提供者一覧（個人・機関）

浅羽町教育委員会
新居町教育委員会
磐田市教育委員会
小笠町教育委員会
掛川市教育委員会
蒲原町教育委員会
相良町教育委員会
大東町教育委員会
天竜市教育委員会
榛原町教育委員会
浜岡町教育委員会
袋井市教育委員会
富士宮市教育委員会
水窪町教育委員会
森町教育委員会

興嶽寺（菊川町）
潮海寺（菊川町）
清浄寺（榛原町）
尊永寺（袋井市）
平田寺（相良町）
六波羅蜜寺（京都市）

伊藤清久
福井貴義
横地勝則

宮城芳雄
匂坂三郎

国立国会図書館
彦根市立図書館
（財）静嘉堂文庫
柳川古文書館
鎌倉考古学研究所
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

調査協力者（個人）

足立順司　手塚直樹
渥美賢吾　戸塚和美
飯塚晴夫　鳥居もえぎ
池谷初恵　永井義博
石原玲子　中川律子
泉敬秀　中野晴久
磯部武男　贄恵子
伊藤裕偉　野澤則幸
大三輪龍彦　日高慎
岡本聡　平田美生
笠井信孝　福田誠
加藤賢二　本間岳人
加藤理文　馬龍亮道
金子健一　松井一明
河合修　松下義和
鬼澤勝人　馬淵和雄
木村美代治　山崎克巳
国囲洋子　山田猛
久保田裕美　山本義孝
栗原雅也　横山裕一
小林康幸　吉沢悟
小松原宏美　渡井英誉
柴田睦
白澤崇
須佐直子
辻村春香

目次

口絵

序文　「横地城跡総合調査報告書資料編」発刊によせて　横地城跡総合調査委員会委員長　向坂鋼二

凡例

第一章　文献資料　（齋藤慎一）……一

第二章　中世城館　（関口宏行）……六五

第三章　考古資料　（小野正敏・原廣志・塚本和弘）……一〇九

第四章　石造物　（桃崎祐輔）……二〇三

第五章　論考……二九五

○　清浄寺過去帳について　（中山文人）……二九七

○　遠江出土の瀬戸美濃焼　（藤澤良祐）……三〇三

○　遠江の出土陶磁器組成の特徴　（小野正敏）……三二五
　―貿易陶磁器を中心に―

○　横地城周辺における中世石造物　（桃崎祐輔）……三四七
　の展開とその意義

第一章　文献資料

凡例

1、本章には、横地城跡総合調査によって得られた文献資料のうち、中世古文書・中世記録・軍記物・系図を収録した。

2、漢字表記については、特殊な場合を除いて常用漢字を使用した。

3、句読点、並列点を適宜加えた。また、人名・地名・干支などには、必要に応じて傍注を付した。

4、各資料については、読者の便宜をはかるため簡単な解説を付した。

5、各資料には通番を付した。

6、資料の配列は、原則として年代順とし、その後に系図を収めた。無年号文書については、推定可能なものについては該当する部分に収めた。年代不明の資料については適当な場所に収めた。

7、資料名、特に文書名については簡略な一般的な呼称に従った。

8、古文書の形態がわかるものについては、文書名の下にそれを（竪紙）・（切紙）・（竪切紙）・（折紙）などと示した。

9、各資料には資料名の左下にその典拠とした資料集名を（　）で示した。

10、古文書の改行は基本的に追い込みとした。但し、原資料もしくは写真版を調査したものについては、その底本に基づき、改行した。

11、資料を一部省略した場合は、（前略）・（中略）・（後略）と記した。

12、変体仮名、合字は原則として現行の表記に改めた。異体字については常用漢字に改めた。

13、資料の中で文意が通じない箇所には（ママ）、明らかな誤字・脱字の訂正・推定は〔　〕で傍注を施した。

14、脱字と思われる部分には（〇〇脱）、推定可能な部分には（〇〇脱カ）と、それぞれ傍注を施した。

15、抹消、書き換えがある場合には、当該部分に■■の符号を付し、訂正文字は左傍に注記した。また、当初の文字が判明する場合は右傍に〔　〕で注記した。

16、重字については、々（漢字）、ゝ（ひらがな）、ヽ（かたかな）、〳〵で示した。

17、衍字については、右傍に（衍）、推定されるものには（衍カ）と付した。

18、欠字・平出・抬頭については、原則として資料の体裁を尊重した。

19、虫損などにより判読・解読不能な部分は、その字数を推定して□□□と示し、推定不能な場合は状態に応じて⌊、□、⌈と示した。また塗抹の場合は■■■と示し、字数推定の不能の場合は　と示した。

20、欠損部分がある場合には、部分によって、前欠については⌐、後欠については⌊と示した。

21、行間の補記については、適宜、横傍に注記するよう心がけた。

22、花押・印章については、原本の花押は（花押）、写本は（花押影）とし、印章は原則としてその輪郭を示し、印文が明らかなものは（　）内に注記した。紙背に据えられたものは（裏花押）と記した。

23、資料本文以外の部分については、上下に「　」を付し、その部分の性質に従って、（裏書）・（端書）、（封紙）・（押紙）・（付箋）　などと右傍に注記した。

24、後筆・異筆・朱筆については、上下に「　」を付し、それぞれ（後筆）・（異筆）・（朱筆）と右傍に注記した。

25、原資料を調査し得たものについては、適宜、写真を口絵等に付した。

26、原資料を閲覧できた資料については、【付記】として観察記録を記した。

27、資料は、その当時の政治あるいは社会状況を反映しているので、現在においては差別と思われる語が存在することがある。しかし収録に当たっては、判断を加えず歴史的事実としてそのまま掲載した。

文献資料目次

1 保元元年七月十日
2 養和元年閏二月十七日
3 文治二年二月六日
4 文治三年八月十五日
5 建久元年十一月七日
6 建久六年三月十日
7 暦仁元年二月五日
8 暦仁元年二月六日
9 暦仁二年正月一日
10 寛元二年三月二日
11 寛元二年三月二日
12 建長二年三月一日
13 正嘉二年正月六日
14 正嘉二年正月十一日
15 正嘉二年正月十五日
16 弘長元年正月九日
17 弘長元年正月十四日
18 弘長三年正月八日
19 弘長三年正月十二日
20 文永二年正月十二日
21 文永三年正月十一日
22 年未詳十二月五日
23 年未詳
24 建武三年二月八日

保元物語
吾妻鏡　養和元年閏二月十七日条
吾妻鏡　文治二年二月六日条
吾妻鏡　文治三年八月十五日条
吾妻鏡　建久元年十一月七日条
吾妻鏡　建久六年三月十日条
吾妻鏡　暦仁元年二月五日条
吾妻鏡　暦仁元年二月六日条
吾妻鏡　暦仁二年正月一日条
法然上人絵伝　四十三巻
浄土惣系図
吾妻鏡　建長二年三月一日条
吾妻鏡　正嘉二年正月六日条
吾妻鏡　正嘉二年正月十一日条
吾妻鏡　正嘉二年正月十五日条
吾妻鏡　弘長元年正月九日条
吾妻鏡　弘長元年正月十四日条
吾妻鏡　弘長三年正月八日条
吾妻鏡　弘長三年正月十二日条
吾妻鏡　文永二年正月十二日条
吾妻鏡　文永三年正月十一日条
伏見天皇綸旨
他阿上人家集
参考太平記　第一

25 建武三年八月廿日
26 建武三年九月廿八日
27 建武三年十月　日
28 建武三年十一月　日
29 建武四年七月五日
30 康永三年十二月廿八日
31 観応二年十一月晦日
32 文和三年十二月六日
33 文和四年八月廿九日
34 延文三年十二月十八日
35 延文六年二月廿四日
36 延文六年二月廿四日
37 年未詳十月七日
38 年未詳十月十八日
39 年未詳十月十九日
40 貞治二年三月
41 貞治六年三月廿九日
42 応安三年四月九日
43 応安四年
44 応安四年
45 応安五年二月十日
46 永和元年三月廿七日
47 永和元年四月廿五日
48 至徳三年六月廿七日
49 明徳三年八月廿八日
50 永享十年九月十日
51 永享十年九月十日

鶴岡社務記録　乙巻
鶴岡社務記録　乙巻
円阿軍忠状写
某軍忠状写
松井助宗軍忠状写
鶴岡社務記録　乙巻
参考太平記　第三十
後光厳天皇綸旨
足利義詮御判御教書
宝篋院殿将軍宣下記
成西寄進状
成西寄進状
某挙状
後光厳天皇綸旨
西園寺実俊施行状
足利義詮近習連署奉加状
太平記巻　第四十　中殿御会事
花営三代記　応安三年四月九日条
今川記　一
今川家譜
花営三代記　応安五年二月十日条
花営三代記　永和元年三月廿七日条
花営三代記　永和元年四月廿五日条
室町幕府管領斯波義将奉書
相国寺供養記
永享記　箱根早川尻合戦の事
今川記　四

52　文安元年五月～同六年正月　文安年中御番帳
53　宝徳二年正月～享徳四年正月　永享以来御番帳
54　寛正六年　今川記　四
55　寛正六年十月十六日　蜷川親元書状写
56　寛正六年　今川家譜
57　文明七年春　今川家略記
58　文明七年春　今川記　四
59　明応元年五月十九日～同二年正月十七日　東山殿時代大名外様附
60　天文十年二月十三日　今川義元判物
61　天文十年二月十三日　今川義元判物
62　永禄二年四月十九日　今川義元判物
63　永禄五年六月廿三日　今川氏真判物
64　永禄十二年閏五月二日　今川氏真判物写
65　寛永諸家系図伝　藤原氏支流　癸二十五
66　寛政重修諸家譜　巻第千百十
67　横地系図（藤谷神社所蔵）
68　系図略（柳川古文書館蔵）

【参考】　近世横地系図一覧

1　保元物語　上　官軍勢汰へ並びに主上三条殿に行幸の事

（『静岡県史　資料編4　古代』一七六九号）

（前略）

其後義朝甲の緒をしめ、既うちいてけるか、義朝馬をひかへて、紅の扇を開つかひゐて申されけるは、義朝いやしくも武備の家に生れて、此事にあふはみの幸也、日来私軍の合戦の時は、朝威に恐れて思様にもふるまはす、今度におゐては宣旨を承る上は、憚所もなし、芸を此時にほとこし、名を後代にあくへし、とて、白旄の旗をなひかし、黄鉞の鉾をかゝやかし、魚麟・鶴翼の陣を全し、星旄電戟の威をふるつていさみ進てうち出し、刑勢ことから、あはれ大将軍也とそみえし、

相随ふ輩ほ誰々そ、鎌田次郎政清・河内源太朝清、近江国には、佐々木源三・矢嶋冠者、美濃国には、吉野太郎・平野平太、尾張国には、熱田大官司、舅なりけれは、我身はのほらす、家の子郎等差遣、三河国には、設楽兵藤武者、遠江国には、**横地**・勝田・井八郎、駿河国には、入江右馬允・藁科十郎・奥津四郎・蒲原五郎、伊豆国には、藤四郎・同五郎、相模国には、大庭平太・同三郎・山内刑部丞・子息滝口・海老名源八・波多野小二郎、安房国には、安西・金鞠・沼平太・丸太郎、上総国には、介八郎、下総国には、千葉介常胤、武蔵国には、豊嶋四郎・中条新五・新六・成田太郎・筈田次郎・河内太郎・別府二郎・奈良三郎・玉井四郎・長井斉藤別当・同三郎・丹治成清・榛沢丹六、児玉には、庄太郎・同三郎・秩父武者・栗飯原太郎、猪俣には、岡部六弥太・金平六・河匂三郎・手薄加七郎、村山には、金子十郎・山口六郎・仙波七郎、西には、日次悪次・平山、高家には、河越・諸岡、上野国に、瀬下四郎・物射五郎・岡下介・那波太郎、下野国には、八田四郎、常陸国には、中郡三郎・関次郎、甲斐国には、志保見五郎・同六郎、信濃国には、舞田・近藤武者・桑原・安藤二・安藤三・木曽仲太・弥中太・根井大弥太・根津神平・熊坂四郎・志津間小二郎、これらを初として、宗との兵四百余騎、都合一千余騎にて馳向ふ、

安芸守清盛に相臨ふ兵は、嫡子中務少輔重盛・二男安芸判官基盛・舎弟常陸守頼盛・河内守教盛・大夫経盛、郎等には、季貞・貞能・盛国・盛俊・難波二郎・瀬尾太郎・古市伊藤武者・子息伊藤五・伊藤六・山田小三郎惟行なとを初として、其勢六百余騎にて向たり、其外、兵庫頭頼政百余騎、陸奥新判官義康百余騎、周防判官季実百余騎、佐渡式部大輔重成七十騎、平判官実俊七十騎、以上四千五百余騎、我も〳〵と勇諍て、うちむれ〳〵ける、兵庫頭頼政は、一陣にこそすゝみけれ、

（後略）

【解説】保元元年（一一五六）七月、京都において後白河天皇と崇徳上皇、及び摂関家内部の対立を要因として、保元の乱が起こった。この時に天皇方には源義朝・平清盛が、上皇方には源為義・平忠正が属した。横地氏は勝間田・井伊両氏とともに源義朝に随ったと『保元物語』には記載されている。記事が簡便で、また他見がないことから詳細は不明であるが、横地氏の動向を示す初見資料となる。

2　吾妻鏡　養和元年閏二月十七日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十七日癸亥、安田三郎義定、相率義盛（和田）・忠綱（岡部）・親光（狩野）・祐茂（宇佐美）・義清（土屋）并遠江国住人**横地太郎長重**・勝田平三成長等、到于当国浜松庄橋本辺、是依前武衛（源頼朝）仰也、此所為要害之間、可相待平氏襲来之故也、

【解説】、養和元年（一一八一）閏二月十七日、遠江守護安田義定・横地長重・勝間田成長ら、同国橋本で平氏軍の襲来を待つ。

3　吾妻鏡　文治二年二月六日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○六日甲寅、左典厩（一条）能保、帰洛、相伴室家姫君二人等、去夜、二品（源頼朝）被遣御馬十疋以下餞物、御台所（北条政子）令進長絹三百疋於室家并姫君給、又左典厩昇進事、及同室家可為禁裏御乳母歟事、二品所令執申給也、次為御共被差進当参在国御家人等、所謂岩原平三・中村次郎（盛平）・比企藤次・土肥弥太郎（遠平）・小揚土藤三・**横地太郎**（長重）・勝田三郎（成長）等也、此外宿次兵士事、兼日被定下云々（後略）、

【解説】文治二年（一一八六）二月六日、一条能保の帰洛にあたり、遠江国横地長重・勝田成長ら、御供を命じられる。

4　吾妻鏡　文治三年八月一五日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十五日癸未、鶴岡放生会也、二品（源頼朝）御出、参河守（源）範頼・武蔵守（大内）義信・々濃守（加々美）遠光・遠江守（安田）義定・駿河守（源）広綱・小山兵衛尉朝政・千葉介常胤・三浦介義澄・八田右衛門尉知家・足立右馬允遠元等扈従、有流鏑馬、射手五騎、各先渡馬場、次各射訖、皆莫不中的、其後有珎事、諏方大夫盛澄者、流鏑馬之芸窮、依慣伝秀郷朝臣秘決也、爰属平家、多年在京、連々交城南寺流鏑馬以下射芸訖、仍参向関東事、頗延引之間、二品有御気色、日来為囚人也、而被断罪者、流鏑馬一流永可陵廃間、賢慮思食煩、渉旬月之処、今日俄被召出之、被仰可射流鏑馬之由、盛澄申領状、召賜御厩第一悪馬、盛澄欲令騎之刻、御厩舎人密々告盛澄云、此御馬於的前必馳于右方也云々、則於一的前寄于右方、盛澄為生得達者、押直兮射乏、始終无相違、次以小土器、挿于五寸之串、三被立之、盛澄亦悉射畢、次可射件三ケ串之由、重被仰出、盛澄承之、既雖思切生涯之運、心中奉祈念諏方大明神、拝還瑞籬之砌、可仕霊神者、只今垂擁護給者、然後、鏃於平仁捻廻天射之、五寸串皆射切之、観者莫不感、二品御気色又快然、忽被仰厚免云々、今日流鏑馬、

一番　射手　長江太郎義景　的立　野三刑部丞成綱
二番　射手　伊澤五郎信光　的立　河勾七郎政頼
三番　射手　下河辺庄司行平　的立　勅使河原三郎有直
四番　射手　小山千法師丸　的立　浅羽小三郎行光
五番　射手　三浦平六義村　的立　**横地太郎長重**

【解説】文治三年（一一八七）八月一五日、鶴岡八幡宮放生会の流鏑馬において、横地長重が五番の的立を勤める。

5　吾妻鏡　建久元年十一月七日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○七日丁巳、雨降、午一剋属晴、其後風烈、二品（源頼朝）御入洛、法皇（後白河）密々以御

車御覧、見物車轅毂立河原、申剋先陣入花洛、三条末西行、河原南行、令到六波羅給、其行列

先貢金辛櫃一合

次先陣

畠山次郎重忠（著黒糸威甲、家子一人郎等十人等相具之、）

次先陣随兵（三騎列之、一騎別張替持、一騎青腹巻行騰、又小舎人童上髪負征箭、著行騰、各在前、其外不具郎従、）

一番　大井四郎太郎

二番　山口小七郎

（中略）

次後陣随兵

一番　梶原刑部丞

二番　大井次郎

（中略）

卅三番　塩谷太郎

卅四番　浅羽三郎（遠江）

卅五番　高橋太郎

卅六番

（後略）

大田太郎

熊谷小次郎

鎌田太郎

大河戸太郎

毛利田次郎

新野太郎

印東四郎

高田太郎

小倉野三

品河三郎

豊田太郎

平子太郎

横地太郎（長重）

須田小大夫

【解説】建久元年（一一九〇）十一月七日、源頼朝の入京に際し、横地長重が後陣三四番に従軍する。

6　吾妻鏡　建久六年三月十日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十日乙未、将軍家（源頼朝）為令逢東大寺供養給、着御于南都東南院、自石清水、直令下向給云々、

供奉人行列

先陣

畠山二郎

和田左衛門尉（義盛）各不相並

次御随兵（三騎相並、各家子・郎従、同著甲冑列傍路、其人数所随合期也、）

江戸太郎　大井次郎

（中略）

次御随兵（三騎相並、家子・郎等事同先陣）

小山左衛門尉　北条五郎

奈古蔵人　徳河三郎

南部三郎　村山七郎

（中略）

笠原十郎　堀藤次

伊井介　**横地太郎**（長重）

吉良五郎　浅羽庄司三郎

（中略）

品河太郎

平賀三郎

毛呂太郎

毛利三郎

大野藤八

勝田玄番助（成長）

新野太郎

及夜半、有南都行幸、今日往亡日也、於城外行幸、無被用此日之例云々、

【解説】建久六年（一一九五）三月十日、源頼朝が南都東大寺に赴くに際して、横地長重が隋兵として従軍する。

7　吾妻鏡　暦仁元年二月五日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○五日辛巳、晴、懸河（遠江国佐野郡）御宿、為匠作御沙汰、仰遠江国御家人等、兼被造御所、**横地太郎兵衛尉長直**為奉行云々、

【解説】暦仁元年（一二三八）二月五日、遠江国御家人に横地長直を奉行として、掛川宿で将軍藤頼経が宿泊するための御所を造営するよう命じられる。

8　吾妻鏡　暦仁元年二月六日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○六日壬午、霽、今暁、諸人乗替以下、御出以前進発、挿王覇之忠、不及狐疑、欲競渡天龍河之間、浮橋可破損歟、雖加制敢不拘之由、奉行人**横地太郎兵衛尉長直**等馳申、仍左京兆（北条泰時）鶏鳴之程、出懸川宿（遠江国佐野郡）、到于河辺、着座敷皮、雖不令発一言給、諸人成礼猶余、自然令静謐訖、将軍家（藤原頼経）御通之後、乗馬供奉云々、此河水俄落、供奉人所従等者、不能渡浮橋、無乗船沙汰、大半渡河、水僅及馬下腹云々、酉刻入御池田宿（遠江国豊田郡）、

【解説】暦仁元年（一二三八）二月六日、横地長直が天竜川の舟橋が破損している旨を報告する。

9　吾妻鏡　暦仁二年正月一日条

（『国史大系吾妻鏡』）

正月小○一日壬申、天霽、垸飯匠作御沙汰、如例、御劔周防右馬助光時（北条）束帯、御弓矢武蔵守朝直（大仏）布衣、御行騰沓肥前守（佐原）家連、

一御馬　置鞍　相摸式部大夫（北条）時直　本間次郎左衛門尉信忠

二御馬　相摸右近大夫将監（北条）時定　**横地太郎兵衛長直**

三御馬　佐原太郎左衛門尉家胤　同四郎左衛門尉光連

四御馬　佐原七郎左衛門尉政連（北条）　同六郎助連

五御馬　相模七郎時弘　橘右馬允公高

【解説】横地長直、暦仁二年（一二三九）正月一日の垸飯に際して二御馬を引く。

10　法然上人絵伝　四十三巻

（『静岡県史　資料編五　中世一』九二一号）

遠江国**横路**（城飼郡）といふ所に侍ける西蓮といふ僧、上洛して、辺土の利生をすゝめ申によりて、寛元々年の秋の比、花洛をいでゝ、かのくにゝ下向、おなしき二年正月、癰瘡を発す、門弟等療治をすゝめ申といへとも、つゐにこれをゆるさす、やうやく危急におよふあひた、食事をとゝめ、二月廿一日より、門弟におほせて、別時念仏を修せしむ、こゝに苦痛ことゝくにや

み、瘡平復することもとのごとし、人奇特の思をなす、高声念仏時々に勇猛なり、三月二日の夜半より、こゑ漸くよはれり、卯のはしめにいたりて、門弟をしてかねをならして、高声に念仏せしめて、かのこえにつけて、念仏すること百余遍、こゑととまりてのち、唇舌をうこかすこと七八遍、すなはちいきたえにけるとなん、

【解説】寛元二年（一二四四）三月二日、西蓮が遠江国横地で病死する。

11 浄土惣系図　円通寺文書

（『静岡県史　資料編五　中世一』九二二号）

信イ
心寂上人　鳥部住、幡州朝日住、明恵上人作権（摧）邪倫（輪）破選択集之時、作破文顕難者之非、
寛元々年下向遠州横地（城飼郡）、同二年三月二日往生、

【解説】心寂上人が寛元二年（一二四四）三月二日に遠江国横地で往生する。心寂上人は前号にみる西蓮と同一人物と思われる。

12 吾妻鏡　建長二年三月一日条

（『国史大系吾妻鏡』）

三月小〇一日丁卯、造閑院殿雑掌事、為被進覧京都、云本役人、云始被付分、今日悉被注緝之、深沢山城前司俊平・中山城前司盛時等為奉行云々、

其目録様

（中略）

自二条北自西洞院面東廿本

二本有垣形一本　方穂六郎左衛門尉
三本　益田権介跡
二本　近藤七跡
二本　山東太郎入道跡
一本　細川宮内丞
二本　吉河藤太兵衛尉
一本　**横地人々**
一本　小野寺中務跡
一本　岡部兵衛尉跡
一本　近藤太郎左衛門跡
二本　加治人々
一本　高橋十郎跡
一本　安西三郎
一本有垣形一本　安芸前司

（中略）

建長二年三月日

【解説】建長二年（一二五〇）三月一日、造閑院殿の造営に際して雑事が賦課され、横地氏にも配分される。

13 吾妻鏡　正嘉二年正月六日条

（『国史大系吾妻鏡』）

〇六日丙辰、御的始射手事、内々被定人数、雖何ケ度、撰旧労可被用之旨、有相州（北条時頼）禅室厳命、而知久右衛門五郎（信貞）者、雖為多年勤仕射手、当時在信濃国、

仍今度被漏風記之処、諏方兵衛入道蓮仏（盛重）、今明之間定可参上之由就拳申、被書載云々、蓮仏去此遣飛脚於彼国云々、

射手風記

渋谷左衛門太郎
平新左衛門尉
諏方四郎兵衛尉
周枳兵衛四郎
知久右衛門五郎
岡本新左衛門尉
横路左衛門次郎（長重）
本間弥四郎左衛門尉
工藤弥三郎
横溝弥七
萱間左衛門二郎
小嶋弥次郎
周枳兵衛四郎頼泰
小嶋弥次郎家範
五番
多賀谷弥五郎重茂
横溝弥七郎
六番
藤澤左近将監時親
横溝七郎五郎忠光
七番
岡本新兵衛尉重方遅参初五度不射之

【解説】正嘉二年（一二五八）正月六日、御的始めの射手に横地長重が選ばれる。

【解説】御的始めの射手の選定に横地長重が加わり、二番に射る。

14　吾妻鏡　正嘉二年正月十一日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十一日辛酉、被撰定御的始射手、已上十三人、二五度也、而藤澤左近将監時親与岡本新兵衛尉重方被番之処、重方遅参之聞、以横溝七郎五郎忠光、為時親合手、重方自後之五度射之、

一番
二宮弥次郎時元
知久左衛門五郎信貞
二番
小笠原彦次郎政氏
横路左衛門次郎長重
三番
平新左衛門三郎頼綱
加久帳小次郎
四番

15　吾妻鏡　正嘉二年正月十五日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十五日乙丑、於御所弓場有御弓始、射手十人、一五度射之、而山城三郎左衛門尉近忠者、兼日不被仰之間、被撰定之時雖不承、臨期被召加之、今年依少可然射手也、為弓箭面目云々、

一番
二宮弥次郎時光十
知久左衛門五郎信貞
二番
山城三郎左衛門尉近忠
横路左衛門次郎長重
三番
藤澤左近将監時親
多賀谷弥五郎重茂
四番
周枳兵衛四郎頼泰十
横溝弥七忠景
五番
岡本新兵衛尉重方
小嶋弥次郎家範

【解説】正嘉二年（一二五八）正月十五日、横地長重が御所弓場での御弓始めの射手を勤める。

16 吾妻鏡 弘長元年正月九日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○九日辛未、於前濱有御的始射手之試、相摸太郎（北条時宗）殿令監臨給、工藤三郎右衛門尉光泰候御共奉行之、此外、南部二郎（実光）・小笠原彦二郎（政氏）等為御共、越後守（北条顕時）実時故障、子息四郎（北条）主相具平岡左衛門尉実俊行向、同奉行云々、射手十二人、一五度射之、

一番
　二宮弥二郎
　横地左衛門二郎（長重）
二番
　栗原平内
　周枳兵衛四郎
三番
　渋谷新左衛門尉
　望月余一
四番
　構溝弥七
　平嶋弥五郎
五番
　本間弥四郎左衛門尉
　小嶋又次郎
六番
　平井又二郎
　小曽六郎

射訖之後、被定仰云、今度令勤人数不幾之上、各宜令皆参者、

【解説】弘長元年（一二六一）正月九日、前浜において横地長重等の御的始めの射手が試射を行う。

17 吾妻鏡 弘長元年正月十四日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十四日丙子、霽、御的始、射手十人、二五度射之、今日、越後守不出仕、相摸太郎殿一所令奉行之給云々、

一番
　二宮弥次郎時光
　横地左衛門次郎長重
二番
　本間弥四郎左衛門尉忠時
　小島弥次郎家範
三番
　望月余一師重
　周枳兵衛四郎頼泰
四番
　平井又次郎有家
　小曾六郎隆俊
五番

渋谷新左衛門尉朝重
平嶋弥五郎助経

【解説】弘長元年（一二六一）正月九日、横地長重、御的始めの射手を一番で勤める。

18　吾妻鏡　弘長三年正月八日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○八日己丑、於前濱被撰御的射手、左典厩（北条時宗）依所労不被出仕、十八人、一五度射訖、退散云々、

一番　山城三郎左衛門尉　早河次郎太郎
二番　渋谷新左衛門尉　**横地左衛門次郎（師重）**
三番　伊東与一　冨士三郎五郎
四番　松岡左衛門四郎　平嶋弥五郎
五番　伊東新左衛門尉　小沼五郎兵衛尉
六番　小嶋弥次郎　渋谷右衛門四郎
七番　栢間左衛門次郎　本間対馬次郎兵衛尉
八番　落合四郎左衛門尉　神林兵衛三郎
九番　早河六郎　下山兵衛太郎

【解説】弘長三（一二六三）年正月八日、御的始めの射手の選考を前浜で行う。その選考において横地師重が二番で射る。

19　吾妻鏡　弘長三年正月十二日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十二日癸巳、有御弓始、射手十二人、二五度射之、

一番　山城三郎左衛門尉親忠　早河次郎太郎祐泰
二番　**横地左衛門次郎師重**　対馬次郎兵衛尉忠泰
三番　渋谷右衛門四郎清重　伊東与一祐頼
四番　小沼五郎兵衛尉孝幸　早河六郎祐頼
五番　松岡左衛門四郎時家　冨士三郎五郎員時
六番　渋谷新左衛門尉朝重　平嶋弥五郎助経

【解説】弘長三年（一二六三）正月十二日の御的始めにおいて横地師重が二番の射手を勤める。

20　吾妻鏡　文永二年正月十二日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十二日壬午、天晴、有御弓始、

射手

一番　二宮弥次郎時元　**横地左衛門次郎師重**
二番　波多野八郎朝義　早河六郎祐頼
三番　松岡左衛門次郎時家　栢間左衛門二郎行泰
四番　小沼五郎兵衛尉孝幸　海野弥六泰信
五番　渋谷左衛門尉朝重　平嶋弥五郎助経

今日被行評定始、去六日者臨時儀也、仍就吉日故被始之、師連・泰盛持参

事書云々、

【解説】文永二年（一二六五）正月十二日、御弓始めにおいて、横地師重が一番の射手を勤める。

21　吾妻鏡　文永三年正月十一日条

（『国史大系吾妻鏡』）

○十一日乙巳、自去夜雪降、午剋属霽、今日有御弓始、

射手

一番　伊東刑部左衛門尉　　渋谷新左衛門尉
二番　**横地左衛門次郎**　　小沼五郎兵衛尉
三番　早河次郎太郎　　栢間左衛門次郎
四番　海野弥六　　堤又四郎
五番　山城三郎左衛門尉　　平嶋弥五郎

今朝、相州（北条時宗）被参鶴岡八幡宮云々、

【解説】文永三年（一二六六）正月十一日、御弓始めにおいて、横地師重が二番の射手を勤める。

22　伏見天皇綸旨（宿紙）　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編5　中世一』　一四七九号）

熊野山新宮長床衆申、造営料所遠江国新免・新給・新堀・新作以下事、不帯宣旨・院宣并関東御下知等所々、早返付国衙、可致営作之由、可有御下知之旨、

天気候（所脱カ）也、以此旨可令申入給、仍執達如件、

十二月五日　　治部大輔（藤原）雅俊

□房

【解説】横地氏の名字の地は荒木郷に属したと推定され、同所は国衙領であった（後掲39号参照）。遠江国衙領は造営料所として紀伊国熊野速玉大社が権益を有していた。ただし、その起源は明らかではなく、かつ後掲の32号文書との関連も明らかではない。

なお、『静岡県史』は奉者雅俊が正応四年十月十五日五位蔵人・治部大輔に任ぜられ、永仁三年六月二十三日左少弁に転じたことから、正応四年（一二九一）から永仁二年（一二九四）に至る間の発給としている。

23　他阿上人家集

（『静岡県史　資料編5　中世一』一六一八号）

西行カ歌ニ、年タケテ又越ヘシト思ヒキヤ命也ケリ小夜ノ中山、ト読侍ケルヲ思出テヨメル、
ト読侍命モテ又見ルヘシト覚ヘネハ　今日越終ル小夜ノ中山
キヽヲキシ昔ヲソ見ルウツノ山　今越カヽル蔦ノホソ道
紅葉セシ秋ニモ越ツウツノ山　枯葉ニナレハ道ソサヒシキ
同時、**横地九郎左衛門入道新西**、我亭ヘイレ奉リテ後ニ奉リケル、
雲霞カサナル山ハヘタツトモ　我ヲ心ニ常ニワスルナ
難波舟ワレトハノリモナラハネハ　唯ヨシアシヲ風ニ任セン
此程ハ忝クモロナレツ　私シナラヌ南無阿弥陀仏

返事

雲霞カサナル山ハアシカラヤ　心トトムル関守ハナシ
ヨシアシノシケキ入江ノ難波舟　ノリナラヒテモ風ニ任セヨ
阿弥陀仏ト忝クモ口ナレハ　私シナラヌ身トソ知ヘキ

【解説】年次不詳ながら、時宗二世遊行上人真教が関東に下る途中、横地九郎左衛門入道新西の屋敷を訪れたときの歌を載せる。真教の歌には足柄山を越えることが読み込まれている。また新西はこの後に舟に乗り恐らくは畿内に赴くものと思われる。新西の旅への不安が窺える。

24　参考太平記　第一

（国書刊行会刊『参考太平記』）

○今川家、毛利家、北条家、南都、天正本竝云、建武三年二月八日、将軍ハ兵庫奥御堂ニテ、佐竹刑部大輔義敦ヲ召テ、東国ノ事心元ナク覚ユレハ、急馳下テ義兵ヲ挙、御方ノ機ヲ失ハヌ様ニ相計フヘシトテ、武略ノ為ニ帰サル、仁木頼章ヲハ、今川家本作二頼春一、非也、丹波へ遣サル、北条家、南都本云、備前児島ニ著給ヒケル時、云々、石橋左衛門佐和義ニ今川家本作二知義一、非也、田井、飽浦、内藤、松田一族共ヲ附テ、三石辺ニ支ヘテ、京ヨリ討手下ラハ、防ケトテ停ラル、細川定禅、同刑部大輔頼春ヲハ、一族ヲ引マトメ、四国勢ヲ附テ、京都ヲ襲ヘトテ讃岐ニ残シ、此下天正本不レ同、別出二于下一、上杉民部大輪ヲハ上杉、毛利家本作二上野一、石見ヘ遣サル、方々ノ計略ヲ運シ、北条家、南都本云、中国ノ兵ハ各暇申テ、己カ国々ニ留ル、云々、山名、石堂、畠山、高、上杉、小田、宇都宮、**横地**、勝間田ヲ始トシテ、東国ノ兵少々召具セラル、同二日十三日、多々良濱ニ著給フ、下同二本丈一　天正本云、上野民部大輔頼兼ヲハ、石見国ヘ遣サル、如レ此方々ヘ大将ヲ差分テ、国々ヘ遣サレ、尊氏卿ハ宗徒ノ氏族、外様ノ大名、東国ノ兵少々召具セラレ、海路仔細ナク、二十三日多々良浜ニ著給フ、云々、

【解説】建武三年（一三三六）二月、京都奪回に敗れた足利尊氏は九州を目指して落ちて行く。この後、筑前国多々良浜の合戦で菊池武敏を破り、再度、京都に上ることとなる。この九州落ちの軍勢に横地氏が加わっていたことが記載されている。

25　鶴岡社務記録　乙巻　建武三年八月廿日条

（鶴岡叢書第二輯『鶴岡社務記録』）

廿日、亥刻、悪党五十余人乱入社頭、而欲奪取神宝之処、**横地養子小栗十郎**為宿直番、而出向下宮而防戦、即追帰了、小栗多蒙疵、於上官廻廊妻令死去了、無双高名也、

【解説】建武三年（一三三六）八月廿日、鶴岡八幡宮に悪党五十人が乱入した際、宿直にあたっていた横地養子小栗十郎が奮戦して追い払ったものの、本人は死去したことが記載されている。横地養子小栗十郎の詳細は不明。ただし小栗氏は常陸国に所領を持つ御家人。

26　鶴岡社務記録　乙巻　建武三年九月廿八日条

（鶴岡叢書第二輯『鶴岡社務記録』）

廿八日、悪党寄来宝蔵之処、**横地己下**出向而追帰了、手負死人等、悪党等取之帰了、

【解説】前号に引き続き、建武三年（一三三六）八月廿八日に悪党が再度、

鶴岡八幡宮宝蔵に来襲した。この日も横地氏が防戦に当たっている。

27 円阿軍忠状写

益田到知什書写

此前紙切テ無之、
固阿（円カ）軍忠事、
右、去自九月十六日、令馳参御方、属**横地**・勝申手、（田）紙切テ文字不見
付着到致軍忠訖、而今奉属大将御手 文字同
并**横地**（城飼郡）・丸崎・気多（高智郡）城御共仕、一城戸役 文字同
勤仕上者、宛賜御判、為備向後亀鏡、恐々言 前ニ同
如件、
建武三年十月　日
承了（承了）
■■判（花押影）

【解説】建武三年（一三三六）十月、内田一族と推定される円阿が同年九月十六日以来の軍忠を申請した文書の写。署判者は不明。本文書によると円阿は当初、横地・勝間田両氏の指揮下にあったことが確認できる。また戦場の内の一カ所が横地城であったこともわかる。ただし、この「横地城」は現在の遺跡名称として呼ばれる横地城と同一であるとは確認できない。

【付記】本状は近年まで「内田文書」として紹介されきた。確かに同家に伝来したであろう文書群の一点である。しかし「内田文書」の原本は現時点では確認されておらず、その名称は永田瀬兵衛政純書写『右田毛利家文書』所収『永田秘録』巻六十四「工藤号内田後称益田」九十点と同巻六十三「工藤系或内田伊豆国」九点、および伊藤清久氏（山口県須佐町）所蔵「益田到知什書写」（益田兼寧書写）九十二点からの復元して付与された。その成果は鈴木國弘編『日本大学総合図書館所蔵　俣賀文書』（一九八六発行）である。

伊藤氏の協力により菊川町教育委員会が「益田到知什書写」（二五・一cm×一八・〇cm　五九丁袋綴じ）を調査し、同本を底本とした。なお本号は採録に当たって底本の改行に合わせた。

28 某軍忠状写

益田到知什書写

此前紙切不見、
滝河原河合戦致軍忠畢、其後駿州馳越、属
細河八郎殿御手、数十ケ日役所令警固之処、
目代右京亮殿下国之間、則属于■（例）手、**横地城**（城飼郡）并
彼（当）■
丸崎（城飼郡）・気多（潮智郡）城令籠畢、今又参。御手、橋下（敷智郡）・比々
役所・符中（豊田郡）惣社上役所警固仕者也、仍為下給
御証判、恐々言上如件、
建武三年十一月　日
承了　判（花押影）

【解説】前号とほぼ同じ内容の軍忠状でる。花押は不明ながら前号とは異なる。なお本号も採録に当たり、改行は底本に合わせた。

29　松井助宗軍忠状写

蠹簡集残編所収松井利兵衛所蔵文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』一六三号）

山城国御家人松井八郎助宗申軍忠事、今月四日建武四遠江国井伊(引佐郡)城前於三片(敷智郡)原御合戦、致忠節、御前懸先、御敵頸取井伊一族云々、其外凶徒両人切落畢、此条**横地治部丞**・朝夷彦五郎見知訖、然者為後証下賜御証判、弥致軍忠為成勇、恐惶謹言、

建武四年七月五日

見知了、(証判)（花押影）(今川範国)

【解説】南朝方の井伊氏と北朝方の軍勢が建武四年（一三三七）七月四日に遠江国三方原において戦った。その合戦に横地治部丞が北朝方として参戦した。本状においては松井助宗の軍忠の証人として登場している。

30　鶴岡社務記録

乙巻　康永二年十二月廿八日条

（鶴岡叢書第二輯『鶴岡社務記録』）

廿八日、**横地**小房焼失、

【解説】詳細不明ながら「横地小房」が焼失した記録が載せられている。25・26号資料で鶴岡八幡宮の警護で奮戦する横地氏が確認できること、および「鶴岡社務記録」という記録の性格を考慮すると、横地氏は鶴岡八幡宮の警護に関する何らかの職掌を得ており、同宮の近くに屋敷を持っていた可能性が考えられる。

31　参考太平記

第三十

（国書刊行会刊『参考太平記』）

十一月金勝印本作二十月一、或作二十二月一、非也、晦日、駿河薩埵山ニ打上リ、東北ニ陣ヲ張給フ、相従フ兵ニハ、仁木左京大夫頼章、舎弟越後守義長、畠山阿波守国清兄弟四人天正本載二国清弟畠山尾張守義深、左近大夫将監、式部大夫国煕一、按二系図一、国清弟無二国煕一、而有二式部大輔義煕一、今作二国煕一、非也、今川五郎入道心省、子息伊予守天正本作二上総介範氏一、本文此下又作二上総介一、相離齟齬、按、伊予守者、範氏弟貞世也、武田陸奥守、千葉介天正本云、名貞幸、恐非也、諸本前後作二貞胤一、長井兄弟北条家、南都、天正本、作二長井治部少輔一、西源院本無二兄弟字一、作二長井某一、同治部少輔一、金勝院本無二長井兄弟字一、同治部少輔一、出二于武田下一、金勝院本蓋訛乎、二階堂信濃入道、同山城判官天正本載二細川顕氏、勝田三河守、宇都宮三河三郎、**横地遠江守**、土岐刑部大輔頼康、佐々木道誉、同判官秀綱、同五郎左衛門高秀、同大原判官親信、同黒田備中判官一、其勢僅三千余騎ニハ過サリケリ、去程ニ将軍已ニ薩埵山ニ陣ヲ取テ、宇都宮カ馳参ルヲ待給フ由開ヘケレハ、高倉殿、先宇都宮へ討手ヲ下サデハ難儀ナルヘシトテ、桃井播磨守直常ニ長尾左衛門尉左、毛利家本作レ右、西源院本或作二新左衛門一、前後不レ一、并ニ北陸道七箇国ノ勢ヲ附テ、一万余騎上野国へ差向ラル、高倉禅門モ同日ニ鎌倉ヲ立テ、薩埵山へ向ヒ給フ、一方ニハ上杉民部大輔憲顕ヲ、西源院、天正本、作二顕憲一、非也、大手ノ大将トシテ二十万余騎二十、天正本作レ十、天正、由井蒲原へ向ラル、一方ニハ石堂入道、子息右馬頭頼房ヲ搦手ノ大将トシテ十万余騎十万、天正本二五万一、宇都部(ウツフサ)佐へ金勝寺本作二宇津山一、天正本作二宇都屋一、廻テヲシ寄ル、高倉禅門ハ、寄手ノ総大将ナレハ、宗徒ノ勢十万余騎ヲ従ヘテ、イマタ伊豆府ニソ控ラレケル、

【解説】室町幕府を築いた足利尊氏・直義の兄弟が、分裂して戦うことになった。観応の擾乱である。その最中の観応二年（一三五一）十一月、尊氏は直義を討伐すべく鎌倉に向けて京都を立つ。途中、駿河国薩埵峠で両軍が対陣した。『天正本太平記』では、この合戦において尊氏軍に横地遠江

守が従軍したとしている。

32　後光厳天皇論旨　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』五四六号文書）

熊野山新宮衆徒神官長床等申、造営料国事、所被付安房・遠江両国也、可有御下知者、
天気如此、以此旨可令申入［　　］
　文和三年十二月六日　　右少弁（花押）奉
謹上［　　］

【解説】文和三年（一三五四）十二月六日、後光厳天皇は、遠江・安房両国を、熊野新宮造営料所として寄進した。国衙領には横地が含まれると推定される荒木郷がある（後掲39号参照）。

33　足利義詮御判御教書　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』五五八号文書）

熊野山新宮造営料所遠［江］□国事、解状副具書如此、子細見状、任去年十一月六日綸旨、沙汰居雑［掌］□、可令全国務之状如件、
　文和四年八月廿九日　　（花押）［足利義詮］
　今川入道［心省］殿［範国］

【解説】文和四年八月二十九日、足利義詮、後光厳天皇の命をうけて、遠江国を熊野新宮造営料所として交付する。

34　宝篋院殿将軍宣下記

（『群書類従　第二十二輯　武家部』）

延文三戊戌年十二月十八日之午刻、為二勅使一以二日野時光一征夷大将軍宣旨也、有二御頂戴一、同廿二日御参内之品々、

一　同月廿一日、自二巳剋一禁裏御門共為二警固一参仕、侍大将以上十二人也、大将一人ニ随兵三百騎宛、其外精兵之射手五十騎宛、大将一人ニ都合三百五十騎にて一門を警固也、侍大将之事、
　佐々木備前守高久、　山名伊豆守時氏、
　土岐伊予守直氏、　安東信濃守高泰、
　二階堂但馬守秀則、　長沢遠江守利正、
　長尾弾正大忠景元、　鳥山若狭守光武、
　曾我美濃守氏助、　小串但馬守詮衡、
　佐々木尾張守高信、　土岐右馬頭氏光、
　　以上十二人、
赤松大夫判官光範は五百余騎にて、御門之順［巡カ］見之役也、

一　同廿二日卯剋御車并諸侍之先ニ乗騎馬之事、
　左之先　細川右馬頭頼之、　右之先　畠山治部丞持国、
　荒川但馬守、　嶋津修理亮、
　蜂屋近江守、　高山伊賀守、
　厚東駿河守、　里見兵庫助、
　今峯駿河守、　明智下野守、
　戸山出羽守、　舟木兵庫頭、
　諏訪信濃守、　戸山遠江守、
　曾我対馬守、　芳賀伊賀守、
　小原備中守、　宇都宮紀伊守、

結城備後守、　杉原周防守、
海老名信濃守、　二階堂丹後守、
服部伊賀守、　矢野下野守、
大内壱岐守、　小串播磨守、
佐脇三河守、　鳥山伯耆守、
都合三十騎二行ニ乗、
右四脚御門ニ伺公シ、奉レ待ニ御成一也、
一　其次ニ随身馬上、
秋山佐渡守高重、　松尾美作守堅信、
陰山出羽守吉道、　粟飯原弾正少弼詮胤、
本間左衛門佐茂景、　嶋田土佐守是平、
大原阿波守元種、　海老名讃岐守詮秀、
宇都宮遠江守能重、　風間右馬允信忠、
多瀬左馬助長利、　久世対馬守正方、
甘富河内守縄家、　高梨越後守光範、
以上十四騎也、
赤き金襴の上着ニ豹虎の尻鞘の太刀、滋藤の弓ニ尻籠負総の尻鞦掛て、
左右を分二行ニ乗也、
一　其次ニ白丁の歩者百人、十人宛竝十通に歩行也、
一　其次ニ御物十荷、唐縫のゆたん掛て左右を行也、
一　其次ニ歩行兵三百人、各家紋付たる直垂剱帯也、
左の先伊勢勘解左衛門伊勢守貞行、右之先佐々木佐渡判官時秀、左ノ跡
曾我兵庫頭助光、右之跡二階堂大和守近昭、各二行中之分不レ及レ記、
一　其次ニ御長刀二振、御同朋、右同前の上着ニ而馬上にて持、
一　其次ニ御笠、
一　其次ニ御車の少先ニ烏帽子、直垂、剱帯の兵侍二十五人、五人宛竝ニ五通
也

本郷左近将監、　中根左馬助、
諏訪因幡守、　後藤弾正大忠、
横大地山城守、　湯浅兵庫頭、
西郷兵庫頭、　朝倉丹波守、
瀬世飛騨守、　工藤大夫判官、
小嶋掃部頭、　杉原伊豆守、
山内美作守、　摂津掃部頭、
野地左衛門尉、　蜂屋左衛門尉、
後藤伊勢守、　鹿嶋左衛門尉、
今藤尾張守、　荻野出羽守、
久下筑後守、　猿子伊賀守、
波多野出雲守、　浜名参河守、
八代信濃守、　以上廿五人、
一　其次ニ御沓役、佐々木新蔵人秀詮、征夷大将軍之宣旨モ、秀詮請取之、
一　其次ニ御車、牛二疋、御牛飼六人、
御車御跡左右供奉歩行十五人組、布衣也、
青山伊豆守、　児玉左衛門尉、
小田原相模守、　高井大和守、
山代信濃守、　高梨能登守、
赤松出雲守、　一色右兵衛尉、
土肥右馬助、　沖尾弾正少弼、
諏訪越前守、　**遠地山城守**、
河津駿河守、　宇都宮三河守、
石飼武蔵守、
一　其次ニ輿、将軍御連枝鎌倉殿也、参議従三位兼左馬頭源基氏、
一　其次ニ輿、武衛也、斯波中務大輔左兵衛督兼武蔵守源義縄、又足利トモ名乗也、

一　其次、
細川兵部大輔時氏、　畠山民部大輔義就、
吉良治部大輔貞義、　今川刑部上野介頼貞、
一色宮内大輔直氏、　山名民部少輔氏清、
石塔刑部少輔右馬頭頼房、
石橋大蔵少輔忠友、
赤松式部丞信濃守詮範、
荒川新蔵人政弼、　大内修理大夫直光、
畠山式部少輔基家、　細川左近将監家氏、
一色修理大夫範光、　鳥山大炊助忠時、
里見掃部頭為利、　仁木弾正少弼頼勝、
宇都宮大膳亮景興、　土岐中務丞頼夏、
二階堂杢頭範清、
以上廿騎、
一　御剱之役、渋川式部大輔直保、
一　御太刀之役、吉良右近将監為貞、
一　御沓、佐々木新蔵人秀詮渡ス、今川兵部大輔頼近請取なをす也、此外平侍入道集、御所之御警固、都合其勢九千四百五十余騎、

右将軍宣下記以横田茂語本校合

【解説】延文三年（一三五八）一二月一八日、足利義詮は征夷大将軍の宣下をうけた。本資料はその際の記録。文中の廿二日の条に警固兵として「横大地山城守」が見える。後掲の太平記（41号史料）に「横地山城守」が見え、横地氏が将軍の近習として活躍していることが他の史料からも確認できることから、本資料の「横大地山城守」は横地山城守であると推測される。また本号の後段に「遠地山城守」なる人物も見ることができる。両者とも注意を要する人物である。

35　成西寄進状（竪紙）　平田寺文書

遠江国棚草（城飼郡）郷薬師寺住持職
寺田畠坪付四至堺別紙在之、事、
右、寺田畠者、同国相良庄平田寺
日峯和尚有御管領、門徒永可
有御相伝之也、仍寄附之状如件、
延文六年二月廿四　日沙弥成西（花押）

平田寺長老

（裏書）
「此状令一見訖、仍所加
証判之状如件、
貞治二年八月十六日　沙弥（心省）（花押）（今川範国）」

【解説】延文六年（一三六一）二月廿四日、成西が棚草郷薬師寺住持職を相良庄平田寺長老日峰和尚に寄進する。平田寺は現在の相良町大江にある。また寄進の対象となった棚草郷薬師寺は現在の小笠町棚草に旧在したと推定される。

寄進者の成西は詳細不詳である。しかし、次号は同人が横地往生院の住持職を寄進し、横地に何らかの権益を保持していること。23号資料で「横地九郎左衛門入道新西」が登場し、入道名の二字目に「西」の文字を共通して使用していること。この二点から成西も横地氏である可能性がある。

この場合、横地氏は棚草郷にも何らかの権益を保持していたことになる。

【付記】本紙は四六・六cm×三一・〇cm。楮紙。竪紙。袖に破損があるものの四辺に裁断ない。折り筋もよく残り、文書の奥より折り畳んだと思われる。現状は本紙を二枚に剥ぎ、それぞれに裏打ちを施す。ただし裏書の料紙は三三・六cm×三〇・五cmの大きさ。また裏書の本文と日付の筆致が異なる。なお、本号の改行は原資料に合わせている。

36　成西寄進状（竪紙）　平田寺文書

遠江国**横地**往生院住持職
寺田畠坪付・山野事、四至堺別紙在之
右、寺田畠者、同国相良庄平田寺長老
日峯和尚有御管領、門徒永可有
御相伝之也、仍寄附之状如件、
延文六年二月廿四　日沙弥成西（花押）

平田寺長老

（裏書）「此状令一見訖、仍所加証
判之状如件、
貞治二年八月十六日
沙弥（心省）（今川範国）（花押）」

【解説】前号と同日に成西が平田寺に横地往生院の住持職を平田寺長老日峯和尚に寄進している。

【付記】本紙は五〇・八cm×三一・一cm。楮紙・竪紙。四辺は袖に破損があるものの裁断はない。文書の奥より折り畳んだと思われる。現状は紙を二枚に剥ぎ、それぞれに裏打ちを施す。ただし裏書の料紙は三四・一cm×三一・二cmの大きさ。なお、本号の改行は原資料に合わせている。

37　某挙状　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』　六五九号文書）

熊野山新宮雑掌申造営料所遠江国々衙間事、解状副具書等、如此、子細見状候歟、
忩被仰武家候之様、可令申沙汰給之由［　　］申旨候、恐々謹言、

十月七日（安居院行知）
謹上　蔵人右中弁殿

【解説】熊野山新宮造営料所遠江国に関する訴訟が北朝に提訴される。以下の二点も含めて一連の文書である。なお『静岡県史』は本文書を康安元年か翌貞治元年のものとする。

38　後光厳天皇綸旨（宿紙）　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』　六六〇号文書）

熊野山新宮申造営料所遠江国吏務職事［　　］状副具書、如此、子細見状歟、
可尋沙汰由、可被仰遣武家之旨、
天気所候也、仍言上如件、
行知（安居院）誠恐頓首謹言、
十月十八日　　右中弁平行知奉

進上　　右大将（西園寺実俊）殿

【解説】前号を受け、北朝は熊野山新宮造営料所遠江国吏務職の訴訟について、幕府への伝達を西園寺実俊に命ずる。なお『静岡県史』は康安元年か翌貞治元年のものとする。

39　西園寺実俊施行状　熊野速玉神社文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』　六六二号文書）

熊野山新宮造営料所遠江国吏務職事、行知（安居院）奉書副具書、如此、子細見状候歟、仍執達如件、

十月十九日　　右大将実俊（西園寺）

謹上　　鎌倉宰相中将（足利義詮）殿

（別紙貼継）

平河郷	（城飼郡）	二百十二石八斗八升七合
向笠郷	（豊田郡）	三百四石三斗五升四合
宇苅郷	（周智郡）	三百卅石六斗五升九合
二俣郷	（豊田郡）	十二石五斗二升九合
垂木郷	（佐野郡）	廿五石八斗九升四合
友永郷	（豊田郡）	廿九石二斗七合
貫名郷	（山名郡）	六十九石五升三合
石河郷	（周智郡）	廿八石六斗九升五合
久野郷	（佐野郡）	七十四石七斗二合
小高郷	（佐野郡）	廿二石三斗三升三合
富部郷	（佐野郡）	百十一石二斗一升一合
家代郷	（佐野郡）	十九石七斗四升
新開郷	（城飼郡）	十三石四斗九升二合
荒木郷	（豊田郡）	百九十五石五合
岡田郷	（長上郡）	九石一斗四升一合
市野郷	（周智郡カ）	三石三斗九升四合
菅谷郷		七斗二升八合
日吉今免		五十一石七斗九升七合
春日社		廿四石
富士社	（城飼郡）	十石六斗四升六合
棚草郷		九十石八斗九升三合
福田恒永一色	（山名郡）	中紙三百帖弁之、
三宮不入計		一石六斗九升八合
浜部社		九斗
用武一色	（引佐郡）	一石二斗二升九合
井伊郷	（長上郡カ）	廿一石二斗一升二合
中田郷		卅石四斗七升二合
元遠一色	（豊田郡）	三石五斗三升五合
野部郷		二石九升九合
長溝郷	（豊田郡）	廿石二升八合
高薗郷	麦	
上嶋田郷	麦	
八幡新宮	（豊田郡） 中泉 麦	

三十三郷

以上千七百廿一石五斗三升三合歟、

【解説】前号および前々号を受け、西園寺実俊が熊野山新宮造営料所遠江

国吏務職に関する訴訟を幕府に伝達する。貼り継がれる所領注文に荒木郷・平河郷・棚草郷などが見える。

『遠淡海地志』（天保五年（一八三四）一二月成立）によると、荒木郷を継承したと思われる荒木庄は土橋村・東横地村・西横地村・三沢村・奈良野村で構成されている。また『遠江国風土記伝』によると前掲の村を含み、河村庄・平河郷の地までも広がる二八か村を荒木郷としている。従って荒木郷の範囲は確定することはできないが、河村庄・内田庄・平河郷・棚草郷の存在を前提として考えれば、『遠淡海地志』が書き記す土橋村・東横地村・西横地村・三沢村・奈良野村を中心とした地域を荒木郷とするのは蓋然性が高い。従って、横地は荒木郷に属したと考えておきたい。

なお『静岡県史』は本文書を康安元年（一三六一）か翌貞治元年（一三六二）のものであるとする。

40　足利義詮近習奉加状　六波羅蜜寺文書

（包紙カ・異筆）
「御所（足利義詮）近習連署奉加状」

奉加　六波羅蜜寺

馬壱疋（懸）
馬壱疋
馬壱疋

明光（花押）　矢部殿

中条（懸）
沙弥至元（花押）

あい（懸）
沙弥性成（花押）

おかへ
若狭守貞義（花押）

馬一疋
馬一疋
馬一疋

よこち
但馬守直宣（花押）

ほんま
源季信（花押）

よこち
因播守秀長（花押）

ほんま
左兵衛尉惟季（花押）

（紙継目）

のせ
判官代頼澄（花押）

あくたかへ
平詮信（花押）

いせ
沙弥照禅（花押）

わた
沙弥理圭（花押）

わた
散位重道（花押）

たむら
沙弥禅観（花押）

わらしな
左衛門尉貞清（花押）

ゑひな
左衛門尉詮頼（花押）

ちやう
長谷部秀連（花押）

あらひ
沙弥円心（花押）

はたの
出雲守通郷（花押）

いせ
左衛門尉宗貞（花押）

（紙継目）

ありもと
兵庫助佐兼（花押）

いせ
左衛門尉貞信（花押）

さふり
散位康棟（花押）

志ふや

馬一疋
馬一疋
馬一疋
馬一疋
馬一疋（懸）
馬一疋
馬一疋
馬一疋
馬一疋
馬一疋（懸）
馬一疋
馬一疋
馬一疋
馬一疋（懸）
馬一疋
銀釵一腰（懸）
銀釵一腰

銀釼一腰　遠江守重基

〳〵懸　銀釼一腰　（花押）

〳〵懸　銀釼一腰　いせ橘氏女（花押）

〳〵懸　銀釼一腰　まった豊前守基盛（花押）

〳〵懸　馬壱疋　法眼円忠（花押）

馬壱疋　掃部助重俊（花押）

五十六　〳〵　銀釼一　〳〵　承慶（花押）

〳〵懸　銀釼一　沙弥恵暁（花押）

〳〵懸　馬壱疋　沙弥寿弘（花押）

（紙継目）

〳〵懸　馬一疋　いよ因幡守経久（花押）

〳〵懸　銀釼一　比丘尼妙光（花押）

〳〵懸　馬一疋　自見（花押）

〳〵懸　銀釼一　（勝間田）参河守長直（花押）

〳〵　馬一疋　たかハしのきようふさへもん入道　〳〵性円（花押）

沙弥宗阿（花押）

【解説】貞治二年（一三六三）三月、僧観実が六波羅蜜寺の造営の勧進を行った。本状は日付を欠くものの同寺に伝存する他の奉加状から、この時の奉加状と考えられる。包紙に「御所近習連署奉加状」とあることから、将軍足利義詮の近習が連署した奉加状と確認される。連署者に横地但馬守直宣と横地因播守秀長の二名の横地氏を見ることができ、近習として活躍していた横地氏の動向を知ることができる。なお横地一族のものとして確実な花押は本状のみである。

なお最後から三人目の「三河守長直」は当該期に勝間田氏の当主が「三河守」の官途であること、および実名の偏諱に横地・勝間田両氏の通字である「長」が使用されていること、勝間田氏も近習・奉公衆として活躍することから、勝間田氏であると考えられる。

【付記】楮紙。本紙は四紙継ぎで冒頭に懸紙の断片と思われる紙が貼り継がれている。紙継目裏には後代の丸黒印が捺される。全体に天地は裁断される。縦の折れ線が観察される。懸紙断片＝四・三cm×三一・二cm。第一紙＝四二・〇×三一・三cm。第二紙＝四二・九cm×三一・三cm。第三紙＝四六・五cm×三一・四cm。第四紙＝四四・二cm×三一・三cm。

横地直宣署名・花押



横地秀長署名・花押



41　太平記巻　第四十

（日本古典文学大系『太平記』三　岩波書店刊）

○中殿御会事

貞治六年三月十八日、長講堂へ行幸アリ。是ハ後白河法皇ノ御遠忌追貴之御為ニ、三日マデ御逗留有テ法花御読経アリ。安居院ノ良憲法印・竹中僧正慈照、導師ニゾ被レ参ケル。難レ有法会ナレバ、聴聞ノ緇素不二随喜一云者ナシ。惣ジテ此君御治天ノ間、万ヅ継レ絶、興レ廃御坐ス叡慮也シカバ、諸事ノ御遊ニ於テ、不レ盡云事不二御座一。故ニ中殿御会ハ、累世ノ規模也。然ルヲ此御世ニ未無二其沙汰一。仍連々ニ思食立シカバ、関白殿其外ノ近臣内々被二仰合一、中殿ノ宸宴ハ大儀ナル上、毎度天下ノ凶事ニテ先規不快由、面々一同ニ被レ申ケレバ、重テ有二勅定一ケルハ、聖人有レ謂、詩三百一言思レ無レ邪ト。サレバ治レル代ノ音ハ安シテ楽ム、乱レタル代ノ音ハ恨テ怨ルトイヘリ。日本哥モ可レ如レ此。政ヲ正シテ邪正ヲ教ヘ、王道ノ興廃ヲ知ハ此道也。サレバ昔ノ代々ノ帝モ、春ノ花ノ朝・秋ノ月ノ夜、事ニ付ツヽ、哥ヲ合セテ奉ラン人ノ慧ミ、賢愚ナルヲモ知食ケルニヤ。神代ノ風俗也、何レノ君カ是ヲ捨給ン。聖代ノ教誡也、誰人カ不レ咲レ之。

（中略）

然ニ今年ノ春ハ九城ノ裏ノ花香ク、八島ノ外ニ風治レル時至レリ。早ク尋二建保芳躅一、題并序ノ事、関白可レ被レ献レ之由強テ有二勅定一シカバ、中殿ノ御会ノ事内々已ニ定リニケリ。征夷将軍モ、此道ニ数奇給フ事ナレバ、勅撰ナンド被二申行一上、近比ハ建武ノ宸宴、贈左府ノ嘉躅非無二由緒一、被二仰出一シカバ、不レ及二子細一領掌被レ申ケリ。因レ茲蔵人左少弁仲光ヲ奉行ニテ、三月廿九日ヲ被レ定。勅喚ノ人々ニ賦レ題。「花多春友。」ト云題ヲ、任二建保例一兼日ニ関白被レ出ケルトカヤ。

既ニ其日ニ成シカバ、母屋ノ廂ノ御簾ヲ捲テ、階ノ西ノ間ヨリ三間北ニシテ、二間ニ各菅ノ円座ヲ布テ公卿ノ座トス。長治元年ニハ雖レ為二行一、今度ハ関白殿ノ加様ニ座ヲ被レ設。御帳ノ東西ニハ三尺ノ几帳ヲ被レ立、昼ノ御座ノ上ニハ、御剱・御硯箱ヲ被レ措タリ。大臣ノ座末、参議ノ坐ノ前ニハ、各高灯台ヲ被レ立タリ。関白直廬ヨリ御参アレバ、内大臣已下相随ヒ給フ。任二保安例一今日既ニ直衣始ノ事アリ。前駆・布衣・随身ノ褐衣如レ常ナレバ、差タル見事ハ無リケリ。丑刻許ニ将軍已ニ参内アリ。其行粧見物ノ貴賤皆目ヲ驚カセリ。公家家礼ノ人々ニハ、為秀・行忠・実綱卿・為邦朝臣ナンド庭上ニ下テ礼アリ。左衛門ノ陣ノ四脚ニ、将軍即参入アリ。先帯刀十人左右ニ相番テ曳レ列。左ハ佐々木佐渡四郎左衛門尉時秀、地白ノ直垂ニ金銀ノ薄ニテ四目結ヲ挫タル紅ノ腰ニ、鰄ノ金作ノ太刀ヲ帯ク。右ハ小串次郎左衛門尉詮行、地緇ノ直垂ニ、銀薄ニテ二雁ヲ挫タル白太刀ヲ佩ク。次伊勢七郎左衛門貞行、地白ノ直垂ニ、金薄ニテ村蝶ヲ押テ白太刀ヲ佩テ左ニ歩ム。右ハ齊藤三郎左衛門尉清永、地香ノ直垂ニ、二筋違ノ中ニ、銀薄ニテ葩菱ヲ押タル黄腰ニ、鰄ノ太刀ヲ佩タリ。次ニ大内修理亮、直垂ニ金薄ニテ大菱ヲ押ス。打鰄ニ金作ノ太刀ヲ帯ク。右ハ海老名七郎左衛門尉詮季、地黒ニ茶染直垂ニ、金薄ニテ大茄籠ヲ押シテ、黄ナル腰ニ白太刀帯タリ。次本間左衛門太郎義景、地白紫ノ片身易ノ直垂ニ金銀ノ薄ニテ十六目結ヲ押、紅ノ腰ニ白太刀ヲ佩ク。右ニ山城四郎左衛門尉師政、地白ニ金泥ニテ州流ヲ書タル直垂ニ、白太刀佩テ相随フ。次ニ粟飯原弾正左衛門尉詮胤、地黄茣ニ銀泥ニテ水ヲ書、金泥ニテ鶏冠木ヲ書タル直垂ニ、帷ハ黄ナル腰ニ白太刀ヲ帯タリ。由々敷ゾ見ヘタリケル。此次ニ征夷大将軍正二位大納言源朝臣義詮卿、薄色ノ立紋ノ織物ノ指貫ニ、紅ノ打衣ヲ出シ、常ノ直垂也。左ノ傍ニ山名民部少輔氏清、濃紫ノ指貫ニ款冬色ノ狩衣著シテ帯剱ノ役ニ隋ヘリ。右ハ摂津掃部頭能直、薄色ノ指貫、白青織物ノ狩衣著テ沓ノ役ニ候ス。佐々木備前五郎左衛門尉高久、二重狩衣ニテ御調度ノ役ニ候ス。本郷左近大夫将監詮泰ハ、香ノ狩衣ニテ笠ノ役ニ随フ。今河伊予守貞世ハ侍所ニテ、爽カニ冑タル隋兵、百

騎許召具シテ、轅門ノ警固ニ相随。此外土岐伊予守直氏・山城中務少輔行元・赤松大夫判官光範・佐々木尾張守高信・安東信濃守高泰・曾我美濃守氏助・小島掃部助詮重・朝倉小次郎詮繁・同又四郎高繁・彦部新左衛門尉秀光・藤民部五郎左衛門盛時・八代新蔵人師国・佐脇右京亮明秀・藁科新左衛門尉家治・中島弥次郎家信・後藤伊勢守・久下筑前守・荻野出羽守・**横地山城守**・波多野出雲守・浜名左京亮・長次郎、是等ノ人々思々ノ直垂ニテ、飼タル馬ニ厚総係テ、折レ花盡レ美。将軍堂上ノ後、帯刀ノ役人ハ、皆申門ノ外ニ敷皮ヲ布テ列居ス。先依二別勅一御前ノ召アリ。関白殿御前ニ被レ参。其後刻限ニ至テ、人々殿上ニ著座アリ。右大臣・内大臣・按察使実次・藤中納言時光・冷泉中納言為秀・別当忠光・侍従宰相行忠・小倉前宰相実名・二条宰相中将為忠・富小路前宰相中将実遠ナンドゾ被レ参ケル

【解説】貞治六年（一三六七）三月二十九日、清涼殿において、和歌と管弦の御遊をする中殿の宴が催された。この宴に将軍足利義詮も招かれており、参上する行列に横地山城守が従っている。

42　花営三代記　応安三年四月九日条

（『群書類従　第二十六輯　雑部』）

四月
九日戊時、御社参（六条新八幡宮、北野社・祇園社）、御輿、
帯刀、
　左**横地左京亮**（為長）、斎藤三郎左街門尉、
　小串次郎右衛門尉、
　右大和六郎、　真下左衛門太郎、
　市三郎左衛門尉、
役人、
　御幣、　仁木左馬助、
　御劔、　吉見修理亮、
　御調度、佐々木越中四郎左衛門尉、
　御沓、　星野左近大夫、
　次近習人々、
　次佐々木四郎兵衛尉、
　次土岐左馬助、
　次摂津掃部頭、
　次執事武州、
　後陣侍所佐々木治部少輔、

【解説】応安三年（一三七〇）四月九日、室町幕府三代将軍足利義満は六条新八幡宮・北野社・祇園社に参ずる。その御輿の行列に横地左京亮が加わる。横地氏で左京亮の官途を名乗るものに長連がいる（後掲48号資料）。本号で登場する左京亮は後に因幡守を称する人物と同一と推測される。恐らくは本号の左京亮（後の因幡守）は、年代と官途の継承から長連の父である為長と推測される。

43　今川記　一

（『静岡県史　資料編6　中世二』八二四号）

一了俊（今川貞世）は範氏（今川）御早世の後、心省（今川範国）の御跡継として京都に祇候有て、宝筐院（足利義詮）殿に昵近し、康安・貞治の比、侍所にて御座有し也、鹿苑院（足利義満）殿の御時、西国の御敵の蜂起せしかは、九州の探題に了俊を被仰付しに、已に発向のとき、遠江国の守護職を惜く思召けるにや、管領細川殿へ岩栖院かくよみてつかはされけり、

何となくこゝろに懸て思ふ哉　浜名の橋の秋の夕暮

と有しかは、御分国ゆめ〳〵相違不可有との御返事有りとかや、扨ては心安とて御発向有り、永和（ママ）元乙卯（ママ）年三月より戦はしまり、筑前国せふり（背振）山に陣とり、九州の御敵菊池・松浦・千葉の人々をうちしたかへ給ふ、味方にも遠江国**横地**・奥山以下のともから、あまた討死しける、

【解説】今川了俊は応安四年（一三七一）に九州探題に就任し、鎮西の南朝方と対峙する。この了俊の九州下向に横地氏等の遠江・駿河の武士も動員された。横地氏は九州にて戦死したことが記載されている。

44　今川家譜

（『静岡県史　資料編6　中世二』八二五号）

（今川貞世）了俊ハ永和（ママ）元卯（ママ）年三月、九州ニ下着シ、筑前国セフリ（背振）山ニ陣取、御敵千葉・菊池・松浦・大村ト十三年カ間、合戦ニ相伴フ侍、遠江・駿河ノ人々、**横地**・勝間田・奥山・井伊・笹瀬・早田・河井悉討死シ、九州ノ御敵無残処打平ケ、太平ノ探題ト呼レ玉フ、

【解説】前号の解説参照。

45　花営三代記

応安五年二月十日条

（『群書類従　第二十六輯　雑部』）

十日戊時、御社参（六条新八幡宮、但北野・祇園両社、後日内々可有御参云々、）、
帯刀、
左小串次郎右衛門尉、齋藤三郎左衛門尉、
横地左京亮（為長）、
右嶋津五郎左衛門尉、真下太郎左衛門尉、
勝田三河太郎、
御輿、
役人、
御幣、一色刑部少輔、
御剱、同右馬助、
御調度、佐々木能登四郎右衛門尉、
御沓、千秋駿河左近将監、
供奉人馬打次第、
山城三郎左衛門尉元栄、赤松出羽守、
山名宮内少輔于時侍所小、細川右馬助、
佐々木治部少輔于時侍所、
御下向之後、日夜若公御料御参、役人供奉人同前、

【解説】応安五年（一三七二）二月十日、足利義満は六条新八幡宮に参じる。前号と同様に横地為長が同行する。

46　花営三代記

永和元年三月廿七日条

（『群書類従　第二十六輯　雑部』）

廿七日、石清水八幡宮御参詣午時御出京、
路次供奉人次第、
御馬、（自東寺前被）

御車召御輿、
役人、
御幣、　畠山兵部少輔、
御劔、　畠山左近大夫将監、
御調度、佐々木青地六郎左衛門尉、
御沓、　千秋左近将監、
次近習人々次第不同、
小串下総守、　**構地因幡守**（為長）、
小嶋太郎、　浜名左京亮、
三淵又三郎、　松田備前守、
杉原伯耆四郎、　杉原伯耆守、
彦部次郎左街門尉、佐脇左京亮、
宮下野四郎、　宮下野守、
次
佐々木大膳大夫、　赤松出羽守、
佐々木四郎兵衛尉、土岐刑部大輔、
赤松蔵人将監、
次管領、
次侍所細川右馬助頼元、
次管領并侍所後騎、
次佐々木大膳大夫、同四郎兵衛尉、土岐刑部大輔、赤松蔵人将監以下後騎、
次摂津掃部頭　数十町引下之、後騎六人召具之、
次小侍所　于時山名弾正少弼数十町引下之、後騎五十人召具之、
八幡御師善法寺坊着御也、有御浄水御参詣、
帯刀、
勝田修理亮、　宮三郎、
長次郎左衛門尉、齋藤三郎左衛門、
嶋津五郎左衛門、真下勘解由左衛門、
以上六人路次相交近習人々、自善法寺為当役供奉之、其外役人并供奉人同前、凡今度御社参供奉人之内、馬打之前後、路次之遅速、違先規之輩相交歟、希代事也、

【解説】永和元年（一三七五）三月廿七日、足利義満が石清水八幡宮に参詣する。随行する近習の内に横地為長が見える。

47　花営三代記　永和元年四月廿五日条

（『群書類従　第二十六輯　雑部』）

四月、
廿五日巳剋、神人三人為閇籠、自西門令乱入石清水八幡社壇之処、二人者防留之、一人者已入籠、社壇閇籠之、于時警固人、即日破出了、土岐刑部大輔、
役人、
御劔、　細川右馬助頼基今夜為小侍所、後改為一元、
御沓、　摂津掃部頭、
御調度、佐々木越中四郎左衛門、
次近習人々次第不同、
勝田修理亮、　**横地因幡守**（為長）、
齋藤三郎左衛門　長次郎左衛門、
宮三郎　嶋田五郎左衛門、
真下勘解由左衛門、海老名備中四郎、
松田彦次郎、　松田備前守、
小串下総守、　彦部次郎左衛門、
三淵又三郎、　浜名左京亮、

杉原伯耆四郎、　佐脇左京亮、
長嶋次郎左衛門、　千秋、
宮下野二郎、　宮下野守、
次管領、
次佐々木四郎兵衛尉、
次佐々木佐渡五郎、
次土岐刑部大輔、
次長井左近大夫将監、
次波多野肥後守、
次二階堂山城三郎左衛門、
次伊賀美作四郎、
次赤松蔵人将監、

【解説】永和元年（一三七五）四月廿五日、足利義満が社参する。随行する近習の内に横地為長が見える。

48　室町幕府管領斯波義将奉書　富田仙助氏所蔵文書

（『静岡県史　資料編6　中世二』一〇四四号）

遠江国大峰（豊出郡）・平山（豊出郡）・犬居（豊田郡）村地頭職事、**横地左京亮長連父為長**、去正平六年、就掠給之、可遵行之由、度々雖被仰守護人今河入道心省（範国）、任御事書之旨、心省観応三年八月十三日、成安堵之間、依不沙汰付、康暦二年十二月廿六日、**長連**申成料所之処、永徳二年八月廿五日、被止料所之儀畢、雖然、**長連**猶以就歎申之、去月廿一日、有其沙汰之処、於正平御下文者、申成料所之間、令棄置歟、至料所之段者、既被止其号之間、旁所被閣**長連**訴訟也、此上者、可被全領知状、依仰執達如件、

至徳三年六月廿七日　左衛門佐（斯波義将）（花押）

天野遠江入道（景隆）殿

【解説】遠江国大峰（現静岡県龍山村大嶺）・平山（現静岡県佐久間町・龍山村）・犬居村（現静岡県春野町）地頭職を巡って、横地為長・長連と天野景隆が相論する。同所は天野氏の所領であったらしく、一時的に料所と成ったことにより横地氏が権益を得ていた。横地氏が料所の期間が終了しても支配を継続しようとしたために相論となった。結果は至徳三年（一三八六）に天野氏の勝訴となっている。

【付記】本号の改行は原資料の改行に合わせている。

49　相国寺供養記

（群書類従　第二十四輯　釈家部）

明徳三年歳次壬申八月廿八日丁丑、天顔快晴、秋気清爽、今月万年山相国承天禅寺供養也、兼被レ尋二日次於刑部卿安倍有世卿一、吉曜之由択申之一、去廿五日、先被レ成下准二御斎会一宣上、上卿左大将、職事蔵人左少弁藤原宣俊也、奉行家司右兵衛権佐重房（万里小路大納言息也）、参仕公卿等、奉二令旨一悉相触之一、殿上人者前左京権大夫惟宗、行冬朝臣為二御布施取一催レ之、依レ為二本所職事一也、随兵・帯刀・衛府等者、飯尾美濃守貞之・中沢次郎左衛門尉氏綱、両人相二催之一、寺家方事、以宗西堂・源逢西堂・中淵西堂・良芝西堂・有濬西堂・周崇西堂、梵晃西堂・如像都聞等、執二沙汰之一、刻限可レ為二卯一点一

之由被二相触一、侍所畠山右衛門佐郎等数百人着二甲冑一、警二固総門・脇門左右番屋一、勢多大夫判官大判事中原章頼着二布袴一、候二山門西方一守護之一、万里小路大納言雖レ可レ為二御供一、先参二御寺一可二奉行一之由被二仰出一之間早参、今度御次第、自二執柄一被レ作二進之一、

堂荘厳、

仏殿奉レ安二置釈迦三尊像一（安座点眼、供先畢）、本尊前卓上有二供備菜一、脇士前有二供具一、其左勧二請諸神（有二十三一、膳供具一）、其右奉レ安二置祖師像一（有二七膳供具一）、後門図二観世音菩薩一（有二供具一）、山門内庭立二左右楽屋一（各三間葺、幔引幔、其内敷二赤縁畳一）、其前西方立二大鼓・鉦鼓・桴等一、仏殿前立二舞台一、四角立二旗台一、上敷二緑布一、四角有二高欄一、前後有二登階一（綵色）、仏殿左壇下、立二御誦経幄一（其内立レ案、積二御誦経物一）、仏面西間敷二両面畳二帖一為二御座并大臣座一、其末敷二青縁畳一為二納言・参議座一、座末折レ北敷レ之（此畳寺家用意之）、仏前立二大蝋燭四本一（本尊左右脇士前）、東廊構二桟敷一、懸二翠簾一、青蓮院宮、梶井宮・常住院准后・聖護院門主・経弁僧正等分二賜之一、其余廊為二当寺僧衆集会所一、西廊構二桟敷一懸二翠簾一、女中御見物在所也、荘厳映二朝日一而増レ輝、音楽和二秋風一而添レ響、一場壮観、万人称美、寅剋神分乱声、辰剋打二衆僧集会鐘一、巳剋御入寺、出御以前、於二御所一先被レ召二随兵等於南階上一、左衛門佐義将朝臣申沙汰之、十一番、次第称二見参一（各一番）退出、其中進退依レ家異レ礼、佐々木備中守満高、同義綱、弓弦向レ内候二御目一、佐々木三郎左衛門尉高光、同高数、自二弓与一レ弦間一候二御目一、是彼家例云々、自余作法大略如レ前、出御之時、有世卿（着二束帯一）、候二反閇一、自二中門廊妻戸下一御扈従、公卿・殿上人列二立庭上一（公卿・殿上前扉下、東上南面、殿上人御車宿前、東上北面）、御沓役頭右大弁重光朝臣、即兼二御裾役一、於二門前一御乗車、御簾役右大将勤二仕之一、

路次行列、室町南行、一条東行、至二妙荘厳域門一、

先侍所畠山右衛門佐源基国（黒糸鎧、薄香直垂、文鶴菱、太刀懸、駮金赤銅相交、引両丸、馬鹿毛、貫熊皮、甲冑一）

子息一人召二具之一、

尾張守満家（薄紫鎧、地紅直垂縫レ萩、太刀・刀皆金作、馬栗毛、）

遊佐河内守国長（紫糸馬黒）

遊佐豊後守助国（濃浅黄糸、馬黒、）

斎藤次郎基則（赤糸、栗毛、駮、）

隅田彦次郎家朝（萌黄糸、鴾毛駮、馬）

遊佐孫太郎基光（赤糸、栗毛駮、）

古山次郎胤貞（紫糸、鹿毛）

紳保宗三郎国久（浅黄糸、鹿毛駮、）

飯尾善六清政（浅黄糸、黒駮、）

遊佐五郎家国（赤糸、黒、）

門真小三郎国康（紫糸、河原毛、）

三宅四郎家村（赤糸、栗毛、）

三宅次郎慶明（白糸、鴾毛、）

誉田孫次郎（練貫威、鴾毛、）

酒匂次郎国頼（紅梅威、佐目、）

斎藤彦五郎利久（浅黄糸、栗毛、）

斎藤四郎国家（浅黄糸、栗毛、）

槇嶋次郎左衛門尉光基（萌黄糸、栗毛、）

槇嶋三郎光貞（萌黄糸、鴾毛、）

杉原五郎貞平（白糸、鹿毛駮、）

井口彦五郎奉忠（浅黄糸、）

郎等三十騎（皆總鞦、着二）

齋藤次郎左衛門尉利宗　鴾毛、
佐脇孫五郎久隆　浅黄糸、毛、浅黄糸、鴾
椎名次郎長胤　浅黄糸、鴾毛、
吹田孫太郎国道　浅黄糸、鹿毛、
齋藤孫左衛門尉利房　浅黄糸、鴾毛、浅黄糸、
松田孫左衛門尉秀久　黒糸、鴾毛、
稲生平左衛門尉基宗　浅黄糸、栗毛駮、
和田太郎正友　白糸、黒駮、
紳保肥前守氏久　浅黄糸、佐目、
紳保四郎左衛門尉国氏　浅黄糸、黒
次先陣随兵　以レ左為レ上、騎馬總歟也、
一番、
（中略）
五番、
今川遠江守源貞秋　黒糸、香直垂、金銀二引両、其上蔦置物。馬黒槽毛駮、白鞍金覆輪、刀・太刀金作、上帯引、貫、
張替役　掻副柴兵庫助藤原家秀
長瀬駿河守藤原泰貞
横地尾張守藤原長連
笠役　勢多修理亮藤原朝昌
床子役　寺嶋但馬守藤原泰行
敷皮役　加茂七郎藤原助頼
今川左馬助源氏秋　鎧已下同上、紅ノ直垂、馬佐目、鞍同前、
張替役　掻副佐竹安房守源秋古
英比信濃守小野氏信
井伊修理亮藤原朝藤
菅谷掃部助菅原秋政
床子役　栗生右京亮藤原氏広
敷皮役前白　富田八郎藤原言泰
六番
（後略）

【解説】本資料は明徳三年（一三九二）八月二十八日に行われた相国寺建立供養の記録。作者は東坊城秀長（一三三八～一四一一）。将軍足利義満の行列の次第が書き記されており、先陣随兵の五番に「横地尾張守藤原長連」を見ることができる。

50　永享記　箱根早川尻合戦の事

（『続群書類従　第二十輯上　合戦部』）

去程に、同九月十日、京都よりの討手大勢、足柄・箕根二手に分押寄る、箕根へは**横地**・勝間田の軍兵共、伊豆の守護代寺尾四郎左衛門尉を案内者として、既に山を越んとしけれは、大森伊豆守（憲頼）・箱根の別当之（実雄）を聞、水呑の辺に、究竟の悪所の有ける所をかたとり、掻楯かいて待懸たり、箕根山と申は、四方嶮岨にて、谷深く切れ岸高く峙り、敵を見おろし、我勢の程敵に不見、虎賁狼卒かはる〳〵射手を進めて戦ひけれは、敵縦何万騎あり

とも、難近付見へけれとも、寄手は大勢、防く兵は小勢なれは、何まて此山に悚へきと、哀なる様に覚て、掌に入たる心地しけれは、五百騎皆馬より下り、射向の袖を差簪し、太刀・長刀の鋒を揃へて、只一息にあかりける、大森か兵箱根の衆徒、石弓を懸、一度にはつとはなす、数万の軍勢、是にまくり落され、遥の深き谷底へ、人雪頽（ナダレ）をつかせて落重なれは、敵に討たれ死する者は少といへとも、己か太刀・長刀に貫れて、死する者数を不知、大森伊豆守勝に乗て、短兵急に撫んと、揉に揉んて攻ける間、石巌苔滑にして、荊棘道を塞たれは、引者も不延得、返す者も敢て不被打といふ事なく、**横地**は討死す、寺尾兄弟三人共に深手を負けれは、十方へ分れて落行ける、軍散して四五ケ月は、山中草腥して、血野草に淋き、尸は路径に横たはれり、大手の軍は味かた打勝といへとも、搦手の軍勢、足柄山を越て、相州西郡まて押寄ると聞へしかは、（後略）

【解説】永享十年（一四三八）八月に永享の乱が勃発した。関東公方足利持氏は上野国に出奔した関東管領上杉憲実を攻撃するため、同年八月十六日武蔵国に出陣した。これに対して幕府軍は九月八日箱根・足柄の二手に分れて、攻撃をかけた。このうち大手の箱根に向かった軍は横地・勝間田両氏が主たる軍勢であったと記されている。しかしこの合戦で横地・勝間田両氏は鎌倉方の大森氏等の軍勢に敗れ、特に横地氏は討ち死にしたとされている。

なお『永享記』は、永享の乱を中心として鎌倉公方足利持氏の衰亡の過程を記した軍記物語。

51　今川記　四

（『静岡県史　資料編6　中世二』一九五五号）

一京都より持氏（足利）公の討手の大将として、故禅秀（上杉氏憲）の子息上杉中務少輔持房・同治部少輔教朝、御旗を給りて発向しける間、遠江国住人**横地**・勝間田先陣として、伊豆代官寺尾左衛門案内者に頼、同九月十日（永享十年）、箱根山を越ける程に、持氏の御味方、大森伊豆守・箱根法印等わつかに百騎計にて、水呑（伊豆国田方郡）の辺にまちかけ、高山より一文字に突てかゝりし程に、京方人々散々打負、**横地**は爰にて討死し、三河・遠江の人々、多以て此所（政康）にうたれ、寺尾左衛門兄弟深手負て引退く、第二度目の合戦に、河野・小笠原（信重）・武田一つに成て、同十一日攻来る処に、箕根別当・大森の人々くつきやう（屈強）の悪所に引かけ、先のことく山上より懸下しけれは、京勢引退き、三島（伊豆国田方郡）にもたまり得す、沼津（駿河国駿東郡）真門に陣を取て、しはらく息をそ休めける、

【解説】前号と同じ永享の乱に関する記事。ここにも横地氏の動向が記載される。

52　文安年中御番帳

（『群書類従　第二十九輯　雑部』）

公方様御番衆　自一番　至五番　文安年中、

一番、
（中略）
二番、
桃井民部大輔、　同孫次郎、
伊勢下総次郎、

結城勘解由左衛門人道、
海老名信濃守、　山下左近将監、
飯川兵庫助、　波々伯部（ハウカベ）越中守、
武蔵遠江守、　富永孫五郎、
芝山修理亮、　後藤能登入道、
富永筑後入道、　結城十郎、
結城七郎、　飯河中務入道、
土肥三郎右衛門尉、　小早河中務少輔、
片岡大和余五郎、　芝山右京亮入道、
朝倉兵庫助、　設楽兵庫助、
同平左街門尉、　同次郎左衛門尉、
蜷川主計允、　同彦三郎
小田又二郎、　同掃部助、
西部筑前入道、　飯川修理亮、
蜷川新三郎、　三吉彦三郎、
安藤駿河入道、　二階堂深矢部隠岐入道、
松田修理亮、　西山出雲入道、
同彦六、　疋田新三郎、
蜷川左京亮、　安威二郎、
広戸因幡守、　海老名左衛門四郎、
山田備中守、　河原又三郎、
佐々木延福寺対馬守、　同平四郎、
佐々木延福寺兵庫助、　井上孫八、
足助（アスケ）掃部助、　佐波善四郎左衛門、
高嶋孫太郎、　富水左近将監、
武藤孫三郎　佐々木井尻能登守、
丸巻善七郎、　三浦八坂小法師丸、
佐脇道祖若丸、　肥田兵庫助、
横地太郎、　陰山修理亮、
土岐深坂治郎少輔、　山下兵庫助、
国分彦二郎、　遠山神野左京亮、
小嶋新蔵人、　大屋伊豆守、
詰衆
遠山明智大蔵少輔、　後藤左京亮、
（中略）
右五箇番衆以下訖、
（中略）
右諸大名・外様衆・番頭・奉公衆、依其家之守臈、諸侍之礼義并書札以下、可有分別者也、

【解説】文安年中御番帳は室町幕府の奉公衆を五番に編成した台帳。福田豊彦『室町幕府と国人一揆』（一九九五　吉川弘文館刊）によれば、文安元年（一四四四）五月～文安六年（一四四九）九月の成立とする。横地氏はこの番帳において二番に編成されている。なお横地太郎の実名は不明。

53　永享以来御番帳

（『群書類従　第二十九輯　雑部』）

一番、五ケ番着到於御前注之、
（中略）
二番、
桃井弥九郎、　吉見七郎、

土岐深坂次郎、　土岐小柿式部少輔、
土岐稲木四郎、　伊勢次郎左衛門尉、
佐々木延福寺五郎、　井尻能登入道、
富永左近将監、　富永筑後入道、
山下辰法師、　山下兵庫助、
結城越後入道、　結城十郎、
西郡筑前入道、　小川又次郎、
武田遠江守、　武田又三郎、
足助宮内少輔、　丸豊前七郎、
土肥三郎、　広戸因幡守、
飯川修理亮、　飯川兵庫助、
佐脇兵庫助、　安威次郎、
片岡与五郎、　松田助太郎、
三浦平次郎、　肥田兵庫助、
深矢部次郎左衛門尉、　波々伯部小法師、
疋田新三郎、　小早川安芸守、
横地孫太郎、　後藤左京亮、
蜷川主計允、　蜷川新三郎、
海老名左衛門四郎、　高嶋孫太郎、
海老名左京亮、　海老名信濃入道、
遠山大蔵少輔入道、　遠山弥六、
遠山神崎左京亮、　小嶋新蔵人、
小嶋掃部助、　川原修理亮、
井上除八、　大屋修理亮、
朝倉兵庫助、　朝倉掃部助、
西山出雲入道、　西山彦六、
設楽兵庫助、　芝山左京亮入道、
三吉加賀入道、　三吉太郎、
佐波善四郎左衛門尉、　山田与次郎、
安東平左衛門尉、

三番

（中略）

右五ケ番之着到事、永正九壬申冬比、一番之中条従三河有上洛、為外様衆可有出仕旨被申上候間、一番衆言上之趣者、往古者雖為外様衆、慈照院殿（足利義政）様御代、中条依有自訴子細、一番衆被入出頭、無其隠者也、所詮先々惣番着到可備　上覧之由申上、伊勢守貞陸注置着到を楢葉近江入道借出備　上覧候処、則被聞召分、為一番衆可致出頭趣破仰出訖、然間其剋、此着到各写置、所持之候者也、

（中略）

伊勢貞丈勘物

年中恒例記云、朔日ヨリ六日迄ハ一番衆御番也、七日ヨリ十二日迄ハ二番、十三日ヨリ十八日迄ハ三番、十九日ヨリ廿四日迄四番、廿五日ヨリ晦日迄ハ五番衆勤被申也、又云、正月三日惣番衆御礼出仕ノ条ニ云、惣番衆参次第事、一番ヨリ始テ五番マデ番次第ニ御目ニカヽル也、又就御祝儀、御太刀ナド時ニ参候時ハ、当番ヨリ始テ御太刀進上之由也、仮令晦日ナドニ御太刀参者、先五番衆、次ニ一番衆、次ニ二番、次ニ三番、次ニ四番衆、如此ナルベシ、自余以之シルベシ云々、万書抜条々ニ云、五ケ番御通リ之事、昔ハ其番々ニテ盃替タル事候、然者番頭先祇候ニテ、大方家々之次第ニスヽミ被申也、

右永享以来御番帳以伊勢貞春本書写校合了、

【解説】「永享以来御番帳」は室町幕府の奉公衆を五番に編成した台帳。福田豊彦『室町幕府と国人一揆』（一九九五　吉川弘文館刊）によれば、宝徳

二（一四五〇）正月～享徳四年（一四五五）正月の成立とする。横地氏はこの番帳においも前号と同じく二番に編成されている。なお横地孫太郎の実名は不明。

奉公衆の御番帳としては、52・53号のほかに「長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座当時在陣衆着到」（長享元年（一四八七）九月～長享三年（一四八九）三月以前の成立）が著名であるが、同御番帳には横地氏および勝間田氏は見えない。両氏の滅亡の反映と考えるのが素直であろう。

54　今川記　四

（『静岡県史　資料編6　中世二』二四七一号）

一　今川殿は上杉と御一味にて、毎度御加勢有といへとも、範忠（今川）其時分御病気也、御息五郎義忠若輩にて御座ける故、今度は御加勢の為に、越山もなかりける、又故了俊（今川貞世）の御跡六郎治部少輔（範将カ）殿、御逝去有りしかは、その御領河井（遠江国豊田郡）・掘越（遠江国山名郡）・中村・湊の領家屋形より、御支配有へけれとも、先□京都の御下知を蒙り、ともかくも御はからひ有へけれとて、京都へ御申の事有り、伊豆国住人狩野介入道・同七郎左衛門（右）、先年禅秀（上杉氏憲）に一味し、伊豆国には安堵せすして、遠州に有りしか、理不尽に申かすめ、かの御跡を拝領しける、天鑑私しなくして、謀略を以押て申給し故に、無程おこり上意に背申、遠江国横地（鶴寿）・勝間田等に京都より被仰付、寛正六年八月三日、父子共にうたれ、自害して亡ひ失けり、

【解説】遠江国において狩野氏が反乱をおこすという事件が起きた。この事件の討伐を横地氏らは室町幕府から命じられ、寛正六年（一四六五）八月三日に鎮圧した。

55　親元日記　寛正六年十月二十四日条

（『続史料大成』親元日記）

廿四日、戊戌、天晴、例日、
（中略）
就狩野七郎右衛門御対治事、御状自備前殿奉之、
去八月廿二日、同廿三日令発向狩野七郎右衛門尉館、被官輩数多被疵致粉骨、被責落要害之旨注進之趣、奉行人披露畢、神妙候、仍被成下御感奉書候、御面目候、向後弥可被励忠功候、恐々、
十　十六
勝田修理亮へ
横地鶴寿へ
去ル同前、披露畢、尤以神妙之由候、仍戦忠之輩、就被注申之、被成御感奉書云々同前、
狩野加賀守へ
以上三通整候畢、杉原、

【解説】前号に見た狩野氏の反乱について、寛正六年（一四六五）十月二十四日に、幕府が横地鶴寿らの功を賞した。このことを蜷川親元が日記に記している。

56　今川家譜

（『静岡県史　資料編6　中世二』二四九六号）

扨又、遠江国ハ先祖拝領ノ所也、然ニ京都ノ乱ニヨリ、武衛方ヨリ八十余

年押領セラレ、国衆過半尾州へ附タリシヲ、義忠（今川）此忠功ニ遠州ヲ賜リテ、千余騎ニテ入部シケル、狩野宮内少輔ト云地侍、三河国住人巨海ト云者ヲ語ヒ、義忠入部ヲ防ケルヲ、義忠押寄攻落シ、狩野カ首ヲ打取、同十二月帰国ス、手勢千余騎堀越陸奥守（貞延）ニ添ヘテ、参河ノ堺引馬（遠江国敷智郡）ト云処ニ陣トラセ、明年、遠江ノ浪人**横地・勝間田**蜂起シ、小夜ノ山口ニテ合戦アリケル時、一族堀越陸奥守（番名貞延）討死ス、

【解説】「今川家譜」によると寛正六年（一四六五）に今川義忠は遠江国守護職を得て、入部したとする。そして翌年に小夜の山口にて浪人横地氏と勝間田氏の反乱があったとする。義忠の遠江守護職および横地・勝間田の反乱とも他見がない。恐らくは文明七・八年（一四七五～六）の政治史と混乱を起こしていると思われる。検討を要するが、ここに掲げる。

57　今川家略記

『静岡県史　資料編6　中世二』二六三（〇号）

文明七年春、遠州の住人**横地・勝間田**等謀叛す、義忠（今川）進発、是を攻む、竟に城陥る、**横地・勝間田**等討死す、子息郎従等敗北す、困て義忠帰陣、其夜塩貝坂（遠江国城飼郡）に至るの処に、一揆不意に起り、味方狼狽、従士多く爰に戦死す、義忠流矢にあたつて重創、終に卒去す、維時文明七年乙未四月六日と云、法名長保寺殿桂山昌公大禅定門と謚す、葬地未詳、

按するに、義忠戦死後、遺骸ハ駿州に引取れて葬送ありしなるへし、今の世、長保寺殿の廟所・菩提寺等、此国に亡ひて不知、遠州高橋村（城飼郡）正林寺に、今長保寺殿位牌木像並に塚等あり、是は氏親（今川）の代、駿州より正林寺に申達せられて、長保寺殿の香花院と定られたるなり、按に、正林寺ハ義忠戦死の地、塩貝坂に近き辺なる故、其寺を香花院とせられたるへし、

【解説】次号と共に横地氏の滅亡に関する基礎資料。今川義忠によって横地・勝間田両氏は攻められ、滅亡に至る。帰途、今川義忠は塩買坂において討死にする。なお「和漢合符」は今川義忠が勝間田氏を伐ったのが文明七年（一四七五）七月二十三日（『静岡県史　資料編6中世二』二六二六号）とし、討死を文明八年（一四七六）二月とする。さらに「妙法寺記」は義忠の討死を同じく文明八年とする。従って、今川義忠の遠江国攻めは文明七年に開始され、翌八年まで続いたと考えられる。勝間田氏は文明七年に伐たれたことが見えることから、横地氏は最後まで抵抗したものと思われ、同氏の滅亡は文明八年と推定されよう。

58　今川記　四

『静岡県史　資料編6　中世二』二六三一号）

一文明七年の春、遠江国住人横地四郎兵衛・勝田修理亮謀反を起し、武衛（斯波義敏）殿に内通し、故狩野介か館を城郭にかまへ楯籠、悪逆しきりなりしかは、今川義忠駿河を打立、久野佐渡守・奥山民部少輔・杉森外記・三浦次郎左衛門・岡部五郎兵衛御供にて、五百余騎を二手に作り、**横地・勝間田**か城を取巻、夜昼息をもつかせす攻戦ひ、七日に当る夜中、両人ともに討死し、子共・郎等とも皆敗北しけれは、御本意をとけられ、頓て駿河へ御馬を返さるゝ時、不図に一揆起り、塩見（買）坂にて切てかゝりしかは、俄の事にては有り、夜中の事なれは、御供人々さはくといへとも、義忠はすこしもさはき給はす、御馬を立なをし、自身切て落し、東西を乗まはし下知して、一揆の輩皆追落し討捕給ふ、然といへとも、いつくより来りけん、流失一つ飛来り、大将の御わきにのふかに立、いたてにて次

第次第によはり給ふ、其後町屋へ入奉り、色々いたはり申けれ共、甲斐なく、其明朝、御年廿八にて御逝去あり、御供の人々せんかたなくして、御死骸の御供申、駿河国へ帰りて御葬礼いとなみ奉る、長保寺殿と号し申、御道号は桂山宗公と申ける、

【解説】前号と共に横地氏の滅亡に関する記録。本号においては横地・勝間田両氏は遠江国府中の狩野介館を城郭化して、今川義忠に抵抗したことが記載されている。また両氏は府中での籠城戦に敗れ、討死にしたとも記載されている。

59　東山殿時代大名外様附　京都大学文学部国史研究室所蔵

（今谷明『室町幕府解体過程の研究』一九八五　岩波書店刊）

（前略）

一番衆　次第不同

細河左京売　同孫九郎
天竺三郎　上野与三郎
同上淵次郎　長井大郎
曾我上野介　同小次郎
同備中守　同因幡守
同肥前守　同下総守
同上野介　同□靄丸
同弥八　同与一
同新九郎　同弾正忠
同遠江守　同帯刀宮内丞
今河大夫判官
上淵伊賀守
同長明丸
伊勢守
同左京亮
同備後守
同掃部助
同兵庫助
同又六
同又七
同平三左衛門尉
丹比下総守
竹藤右京進
松田上野介
同備前守
斎藤疋田修理亮
勝田越中守
結城左近将監
中条刑部大輔
斎藤本庄
門真尉法師丸
土岐本庄民部少輔
宮常陸介
白井
宇津木平次
矢部八郎左衛門尉
同次郎
結城九郎左衛門尉
本間
安東平四郎
毛利民部大輔
佐々木大原左馬助
小田上野介
同六郎
斎藤兵庫助
毛利宮内少輔
佐々木吉田弥三郎
金子左衛門三郎
同与三郎
楢葉近江守
土岐揖斐孫太郎
同原四郎
本郷兵庫助
壱岐次郎
太田上野介
同八郎
関口源三郎
鑓左兵衛大夫
本郷大夫判官
小嶋新蔵人丞
同次郎
同四郎
同民部丞
同又次郎
同疋田左京亮
横地
同又四郎
内嶋又五郎
倉光次郎
同与次郎
同尾黒次郎
門真弾正忠
角田弥平次
松任修理亮
同七郎大郎
雅楽備中守
依田左兵衛大夫
土屋
小倭十郎
（後略）

【解説】本号は今谷明『室町幕府解体過程の研究』（一九八五　岩波書店刊）の分析に依れば明応元年（一四九二）五月十九日以降、同二年正月十七日以前という約半年の期間内の成立とされている。横地氏は名字のみ記載されていることが見える。また勝間田越中守の記載も見ることができるが、両家とも文明七～八年の滅亡以後の記事であり、やや不審が残る。また横

地氏も従来の二番から一番へと変更されていることも注意を要す。両家を中心に据えると更なる検討を必要とする可能性がある。

60 今川義元判物（竪紙） 尊永寺文書

（封紙ウハ書）
「法多山　治部大輔」

遠州法多山仏供田・灯明田之事
一 六町七段 浅羽庄内 一 参町壱段 石野郷内（山名郡）
一 五段 横地方（佐野郡） 曾我庄内 一 六反 曾我庄内所々
一 弐反三杖 高部郷内（山名郡） 一 壱町 朝比奈三郎右兵衛尉寄進 曾我領家方
一 六反 各和殿寄進
右、如前々停止諸役、永寺務不可有相違、縦領主雖有相違、寄進之上者、不可有違乱、以此旨修造・勤行、可抽国家安詮（全）之精誠之状如件、

天文十辛丑年二月十三日
治部大輔（今川義元）（花押）

法多山

【解説】天文十年（一五四一）に尊永寺に出された今川義元の安堵状である。書き立てられた所領の一つに「横地方」の肩書きが見える。曾我庄内に横地氏の所領が存在していたことを示すものであろう。以下三点の文書にも同様の肩書きが見られる。

【付記】楮紙。竪紙。寸法＝三一・五cm×四四・二cm。封紙断片＝三七・九cm×五・〇cm。折れ目は確認できず。なお、本資料は以下の三点とともに巻子に仕立てられている。なお本号は原資料の改行に合わせて採録した。

61 今川義元判物（竪紙） 尊永寺文書

（封紙ウハ書）
「法多山　一乗院　治部大輔」

遠州法多山一乗院領之事
一 壱町 横地方 曾我庄内 一 八反 曾我庄内
右、如前々停止諸役、永不可有相違、縦領主雖有相違、寄進之上着、不可有達乱、以此旨修造・勤行等、不可有怠慢者也、仍如件、

天文十辛丑年二月十三日
治部大輔（今川義元）（花押）

法多山一条院

【付記】楮紙。竪紙。寸法＝三二・二cm×四三・八cm。封紙断片＝三六・

五cm×四・一cm。なお本号は原資料の改行に合わせて採録した。

62　今川義元判物（竪紙）　尊永寺文書

（封紙ウハ書）
「一乗院快瑜　　治部大輔」

遠州法多山一乗院領之事

一　壱町　横地方　曾我庄内　一　八段　極楽寺領　曾我庄

右、任天文十年之判形、如前々停止諸役、永不可有相違、縦領主雖有相違、寄進之上者、不可有違乱、百姓□雖致新儀之申事、不可取上、然而、先年此一乗院孝順相拘時、壱町割分清順一代相渡、身後者無相違可請取旨、天文二十年仁以判形加下知之上、清順両年令支配、清順為死去之上、孝順如前々請取也、法性坊仁極楽寺領八段相副、清順弟子撰器量之者、令納得可相渡旨、雖申付清順弟子少将仁、法性坊仁自余之役田参段、并山屋敷北谷別当職相副渡之、右之一町八段之事者、自先規依為一条院領、快義去年迄支配仕来、去年之秋、進退相替寺家退出之上者、快瑜彼一町八段無相違永令支配、一乗院無退転様可相続、若此一町八段之内、寺家并其外之輩雖企競望、一切不可許容者也、仍如件、

永禄弐年己未
四月十九日　　治部大輔（今川義元）（花押）
一乗院快瑜

【付記】楮紙。竪紙。寸法＝五三・五cm×三七・九cm。封紙断片＝三七・九cm×四・七cm。なお本号は原資料の改行に合わせて採録した。

63　今川氏真判物（竪紙）　尊永寺文書

遠江国法多山仏供田・燈明田等之事

一　六町七段　助五郎殿知行　浅羽之庄内　一　六段　各和□□（殿寄カ）進
一　参町壱段　小笠原美作知行　石野郷之内　一　壱町　朝比奈丹後守（親徳）□（知カ）行　曾哦庄領家内
一　五段　料所曾哦庄之内　横地方　一　六段　曾哦庄□（有カ）所々　但此内□段百□藤右衛門寄進
一　弐段三杖　料所高部郷之内　一　壱段　諸井郷之内松□□和守寄□（寄）
一　三杖　河井郷山脇源三郎寄進

右、如前々当寺門前棟別・四分一之外、諸役寺領等、任先例領掌了、次甲乙人等喧呶・狼藉・殺生等、堅停止之、同従隣郷竹木以下不可伐取□（者カ）也、諸役免除之上者、諸職人不可有其役、於当寺諸勧進、是又所停止之也、向後当寺領等、領主雖為相違、寄進之上者、永不可有相違、寺務一円可被相計之、守此旨、弥可被専修理・勤行之状如件、「上総介」

永禄五壬戌年六月廿三日　上総介（今川氏真）（花押）
「法多山」

【付記】「　」の部分は封紙ウハ書を切断して貼付したものと推測される。

楮紙。堅紙。寸法＝四八・六cm×三六・二cm。天地は裁断ないものの、左右は裁断される。なお本号は原資料の改行に合わせて採録した。

64 今川氏真判物写

記録御用所本古文書十二

（『静岡県史　資料編7中世三』三七五八号）

父元辰年来令所務知行分之事
一駿州（有度郡）沓谷米銭之事
一於広野、三浦長門守・平九郎に譲置田地之事
一駿州清金分、父味知元辰仁譲置田地之事
一於富士又七郎分、弐拾壱貫九百文余之事
一於遠州河合郷、長門守・平九郎等譲置米銭之事
一**遠州横地分**之事
一藤枝（駿河国志太郡）若王寺代官職之事
一遠州山中・徳谷崎・平代方分之事
一河東於須津ニ百俵

右条々領掌畢、然者代々之判形、於朝比奈谷失却云々、雖然所務仕来分之儀者不可有相違、守此旨弥可励奉公者也、仍如件、

（永禄十二）閏五月二日　　氏真（今川）判

三浦小次郎（義次）殿

【解説】三浦義次宛の永禄十二年（一五六九）閏五月二日付の今川氏真の安堵に「遠州横地分之事」という項目が見える。横地氏が滅亡して九十年が経過するが、横地氏の所領単位が継承されているのが窺える。

65 寛永諸家系図伝

藤原氏支流　癸二十五

（続群書類従完成会刊『寛永諸家系図伝　第十二』）

横地

●元貞
多左衛門尉　生国遠江
武田信玄につかふ。
天正十年、甲州没落の後、めされて東照大権現（徳川家康）につかへたてまつり、大番をつとめ、食邑をたまはる。
慶長五年、奥州ならびに関原陣に供奉す。
同十三年五月、五十一歳にして病死。法名円徹。

安信
木工右衛門　生国甲斐
慶長七年、酒井雅楽頭忠世・土井大炊頭利勝をもつて先容とし、台徳院（徳川秀忠）殿に謁したてまつり、大御番をつとむ。
同十九年、仰をかうふり総州舟橋の御殿御作事の役をつとむ。
このゆへに大坂御陣にしたがひたてまつらず。
元和元年、大坂再陣のとき、諸士に旅宿をわりあたふる事を役し供奉をつとむ。其後将軍家（徳川家光）につかへたてまつり、大御番をつとむ。
同九年、御入洛のとき、供奉す。
寛永元年、御納戸番の組頭となる。
同五年、食禄をくはへたまはり、都て五百石を領す。

同十四年、奥方の御番頭となる。

安次
左門　生国武蔵。
寛永十二年、はじめて将軍家に謁したてまつる。
同十九年、御書院番をつとむ。

忠重
一郎右衛門　生国武蔵。
台徳院殿・将軍家につかへたてまつり、大坂金銀の奉行をつとむ。

正義
一郎兵衛
忠重やしなひて子とす。実は坂部五右衛門尉正重が子なり。
将軍家につかへたてまつる。

家紋　亀甲

実父坂部が先祖

某
又大夫　生国参河。
長親主ならひに信忠主・清康君につかふまつる。
五十五歳にして死す。

某
又大夫　生国同前。
長親主・信忠主・清康君につかふまつる。
六十三歳にして死す。

正家
造酒佑　生国同前。
広忠卿・大権現につかへたてまつる。
参州石瀬合戦のとき、供奉をつとめて高名を得たり。
江州姉川合戦にしたがひたてまつりて、また高名あり。

正重
左五右衛門　生国同前。
大権現・台徳院殿につかへたてまつり、其後将軍家につかふまつる。

家紋　木瓜

横地

●某
主水　生国尾張

織田信長ならひに信雄につかふ。
天正十八年八月、五十四歳にして病死。

吉次
勘之丞　生国同前。
慶長二年、大権現（徳川家康）につかへたてまつる。
同五年、関原御陣に供奉す。
大坂両度の御陣にしたがひ奉る。

吉綱
次郎左衛門　生国山城。
元和八年、台徳院殿（徳川秀忠）につかへたてまつり、其後将軍家（徳川家光）につかふまつる。

家紋　三亀甲

横地

●政吉
所左衛門尉　生国遠江。
武田信玄につかふ。甲州没落の後、めされて大権現（徳川秀忠）につかへたてまつり、其後台徳院殿・将軍家（徳川家光）につかふまつる。
寛永三年六月十八日に死す。

政次
所左衛門　生国佐渡。
寛永十一年二月二十八日、将軍家（徳川家光）に謁したてまつる。
同三月六日、大御番をつとむ。

家紋　亀甲

【解説】『寛永諸家系図伝』は江戸幕府が寛永年間（一六二四～四四）に編纂した系図の書。諸大名及び旗本の系図の所載する。江戸時代、横地氏の一部は幕臣となったことが確認される。

66　寛政重修諸家譜　巻第千百十

（続群書類従完成会刊『新訂寛政重修諸家譜　第17』）

藤原氏　支流

横地

今の呈譜に、源氏（同族の譜清和源氏）にして横地渋谷助元次久野城にをいて戦死す。元貞は其長男なりといふ。

●元貞
弥三　多左衛門（今の呈譜太左衛門）
武田信玄をよび勝頼につかへ、天正十年武田家没落のゝち、九月

三日めされて東照宮（徳川家康）に拝謁し、甲斐国のうちにをいて百五十貫文の旧地を賜ひ、御朱印を下され、大番をつとむ。十九年七月三日武蔵国高麗郡のうちにをいて采地二百石をたまひ、この年また上総国市原（いちはら）郡の内にをいて百石を加へられ、すべて三百石を知行す。慶長五年上杉景勝御征伐のときしたがひたてまつり、また関原御陣にも供奉す。十三年五月死す。年五十一。法名円徹。

安信
杢右衛門　母某氏。

（中略）

横地（よこち）

今の呈譜に、清和源氏にして義家の流なり。先祖遠江国横地村に住せしにより、其地をもつて称号とす。其後裔渋谷助元次の長男を義次とし、二男を太左衛門（はじめ）弥兵衛　元貞とせり。これによれば寛永系図第一の横地譜　今左門忠澄が家　と祖をおなじうす。しかれども今さゝぐるところの譜くはしきに過て疑ふべきものあり。よりて一に旧にしたがひてあらためず。

●政吉（まさよし）

喜三郎　所左衛門　今の呈譜に、義次に作る。

武田信玄につかへ、天正十年勝頼没落のゝち、めされて東照宮（徳川家康）につかへたてまつり、のち長久手及び小田原の役に供奉し、十八年関東にうつらせたまふの後、武蔵国高麗（こま）郡のうちにをいて采地二百二十石をたまふ。慶長五年関原の御陣にしたがひたてまつり、九年仰により佐渡に至る。十九年故ありて御勘気かうぶり、後ゆるさる。寛永三年六月十八日死す。年七十。法名法薫。采地高麗郡篠井（さゝゐ）村の西方寺に葬る。

政次（まさつぐ）
所左衛門　民部左衛門　母は某氏。

（後略）

【解説】『寛政重修書家譜』は江戸幕府が寛政年間（一七八九～一八〇一）に編纂した系譜の書。本書において横地氏が藤原姓から源姓に変更した状況が確認できる。

67 横地系図　藤谷神社所蔵

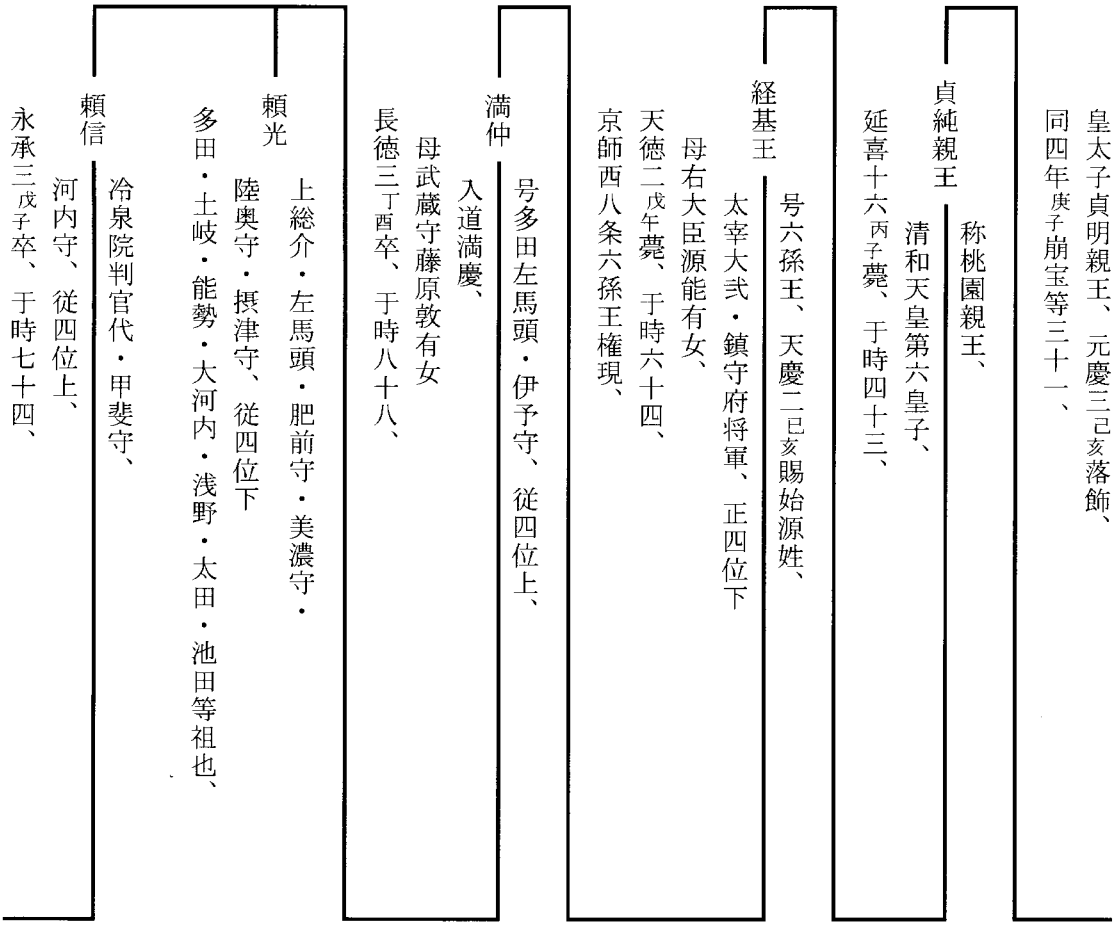
奉納遠江国
藤谷大明神宝庫
横地系図

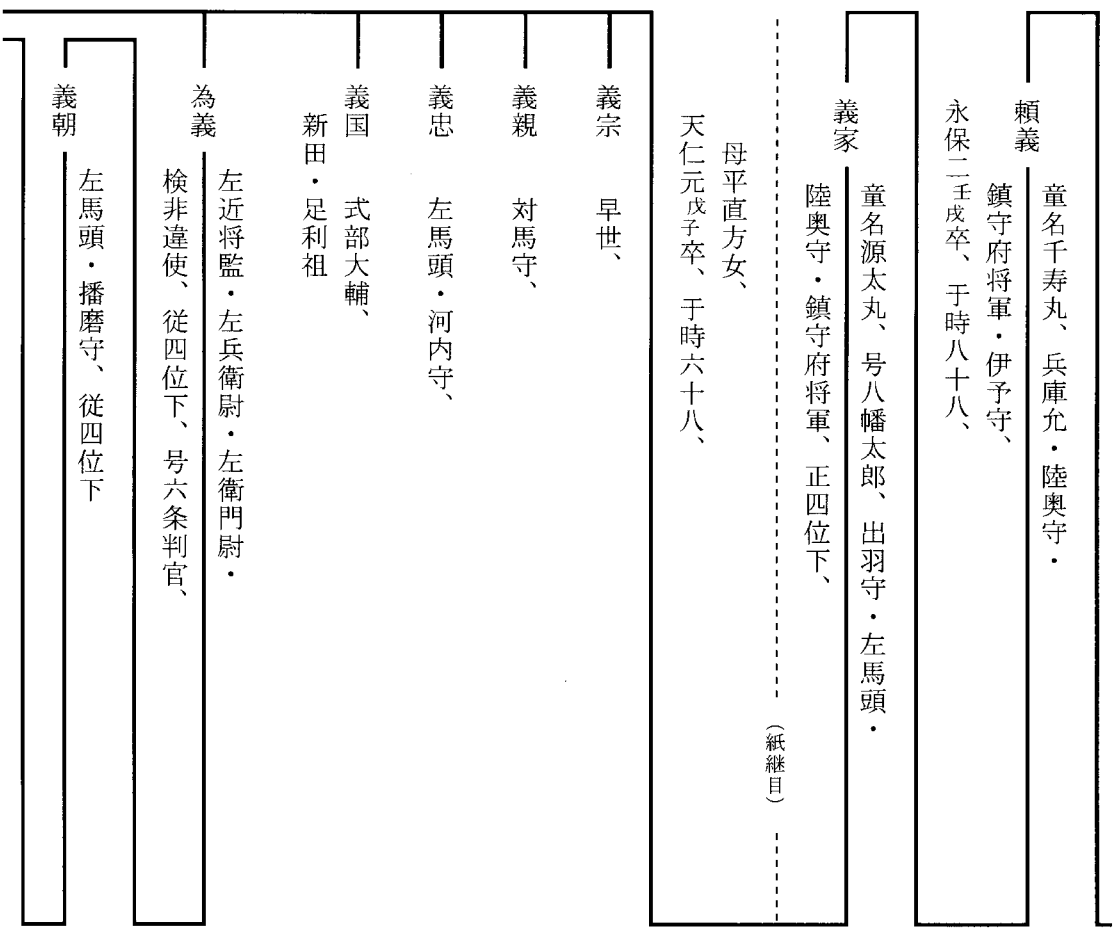
源姓　家紋　亀甲　鶴丸　打違柏

人王五十六代
○○　諱惟仁、号水尾帝、
○○　清和天皇　文徳天皇第四皇子、
母染殿后太政大臣藤原良房女、
嘉祥三庚午降誕、同年立太子、
天安二戊寅即位、貞観十八丙申譲位、

（朱線）

横地系図（藤谷神社所蔵）


皇太子貞明親王、元慶三己亥落飾、
同四年庚子崩宝等三十一、
貞純親王
称桃園親王、
清和天皇第六皇子、
延喜十六丙子薨、于時四十三、
経基王
号六孫王、天慶二己亥賜始源姓、
太宰大弐・鎮守府将軍、正四位下
母右大臣源能有女、
天徳二戊午薨、于時六十四、
京師西八条六孫王権現、
満仲
号多田左馬頭・伊予守、従四位上、
入道満慶、
母武蔵守藤原敦有女
長徳三丁酉卒、于時八十八、
頼光
上総介・左馬頭・肥前守・美濃守・
陸奥守・摂津守、従四位下
多田・土岐・能勢・大河内・浅野・太田・池田等祖也、
頼信
冷泉院判官代・甲斐守、
河内守、従四位上、
永承三戊子卒、于時七十四、


頼義
童名千寿丸、兵庫允・陸奥守・
鎮守府将軍・伊予守、
永保二壬戌卒、于時八十八、
義家
童名源太丸、号八幡太郎、出羽守・左馬頭・
陸奥守・鎮守府将軍、正四位下、
母平直方女、
天仁元戊子卒、于時六十八、
（紙継目）
義宗
早世、
義親
対馬守、
義忠
左馬頭・河内守、
義国
式部大輔、
新田・足利祖
為義
左近将監・左兵衛尉・左衛門尉・
検非違使、従四位下、号六条判官、
義朝
左馬頭・播磨守、従四位下

頼朝　権大納言・右大将、正二位、
　　征夷大将軍
頼家　左衛門督・正三位、
　　征夷大将軍
実朝　右大臣・左大将、正二位、
　　征夷大将軍
横地先祖
家永　横地太郎
　永承六辛卯生於遠江国
　母相良太郎藤原光頼女
七十代後冷泉院、永承辛卯、奥六郡司
安倍頼時始名頼長謀反、為追討使頼義朝
臣任陸奥守兼鎮守府将軍、嫡子義家、次
男義綱俱、下奥州之時遠江国宿見付府、
依霖雨逗留、義家当国住人召相良太郎
藤原光頼女、口数日、霽後下于奥州之時、
彼女告義家曰、為懐妊之由、感霊夢云云、
義家亦同有夢告謂、其女曰、若生女子則
汝可養育之、若生男子則包此衣有亀甲内花菱
紋添於此矢、可捨置原野、終下于陸奥矣、
其後及期生一男子、任義家教、件包衣、添
鳴鏑捨見付府上野也、于時白鶴二羽飛
来一者伸羽翼、覆於嬰児、一者飛行于虚
空永来食餌与之為如此、経三日而後同
国横地村住人有二俣弾正近永者、来此
所見此形容、為不審称可有故、而携彼嬰
児帰私宅、養育之、白鶴同来于横地、翻翻
于野外、其後経於十二年、康平五壬寅、誅
戮夷賊、同六癸卯春二月義家朝臣帰洛、
于時近永聞為此児義家落胤之巷説、彼
誘小童郊迎于同国新坂・佐夜中山、以告
之義家、義家問其証、則出彼衣及鳴鏑也、
義家頗浮涙、重而問、彼鶴、答以舞遊荒原
八町内之事、義家曰、予敬信春日大明神
有年于此矣、鶴者則彼明神使鳥也、仍守
護嬰児者乎、就此童于当国縁深、以遠江
国十四郡内、自汐見坂限大井川道南方
象南陽、永代可為知行因以、加首服号横
地太郎家永、二俣弾正宜可補佐之、近永
者勧詣南都春日大明神、於当国藤谷山、
可勤神職社領者、横地村之内九町八反
所令寄附之也、荒原八町者、可為遊戯白
鶴之地、遺厳命、上洛矣、仍随彼命建春日
大明神社於藤谷山矣、遠江国六十二社
之内奈良神社則是也、横地家紋用亀甲
内花菱者、彼衣紋也、雖為武将正嫡、然落
胤、具為多病故、不及上落、依無位無官、終
一生云云、

（紙継目）

大治元甲辰歿、于時七十四、

頼兼　又改頼長、横地太郎
嘉承二丁亥生於遠江国、
康保元壬戌歿、于時三十六、

長宗　横地太郎
長承元壬子生於遠江国
保元元丙子、
崇徳院御合戦時、従源義朝朝臣参于内
裡有戦功、
平治元己卯、義朝謀叛時、与之、義朝京都
没落後帰蟄于遠江国、
安元二丙申歿、于時四十五、

長重　横地太郎
応保二壬午生於遠江国、
右大将頼朝卿、自揚義兵始従之、治承五
辛丑閏二月、自京師下向討手時、属安田
三郎義定、到于遠江国浜名庄橋本辺守
禦要害、
寿永三甲辰二月、属義経朝臣手於摂津
国三草山・同市谷有戦功、
文治二丙午二月左馬頭藤原能保朝臣
帰洛時、送之、
同三丁亥八月十五日、鶴岡放生会流鏑
馬役的立、
同六庚戌十一月、頼朝卿上洛時、勤後陳
随兵、
建久六乙卯、南都東大寺供養、頼朝卿上
洛時、勤先陣随兵、
貞応元壬午歿、于時六十一、

長直　横地太郎兵衛尉、左衛門少尉、
建保二申戌生於遠江国
嘉禎戊戌二月、将軍頼経卿上洛時、御
宿于遠江国掛川為沙汰、北条修理亮時
房朝臣兼而被造御所、長直奉行之、
暦仁二己亥正月朔日、北条修理亮時房
朝臣献埦飯、于時長直弟二引馬、相手者
北条左近大夫将監時定、
建長二庚戌三月被造閑院殿筑地事、役
之、
建治二丙子歿、于時六十三、

師重　横地左衛門次郎、達弓箭芸云云
嘉禎元乙未生於遠江国
正嘉二戊午正月十一日、将軍宗尊親王、
被撰定御的始射手十三人、二五度也、師
重第二番射手也、相手者小笠原彦次郎
政氏、
同十五日、於御弓場有御弓始、射手十一

人、一五度射之、師重第一番射手也、相手者二宮弥次郎時光、
文応二辛酉正月九日、将軍家於前浜、有御的始射手試、射手十二人、一五度射之、師重第一番射手也、相手者二宮弥次郎時光、
同十四日、御的始、如試射時、
弘長三癸亥正月八日、於前浜被撰御的始射手十八人、一五度射之、師重第二番射手也、相手者渋谷新庄衛門尉朝重、
同十二日、有初弓始射手十二人、二五度射之、師重第二番射手也、相手者対馬次郎兵衛尉忠泰、
文永二乙丑正月十二日、有御弓始、師重第一番射手也、相手者二宮弥次郎時光、
同三丙寅正月十一日、有御弓始、師重第二番射手也、相手者小沼五郎兵衛尉孝幸、
同七月、宗尊親王依露顕謀叛、御帰洛時師重送之、
此後毎年御弓始、師重勤仕之、
建治三丁丑歿、于時四十三、

師長　横地太郎兵衛尉、任山城守、叙従五位下、
正嘉元丁巳生於遠江国
弘安四辛丑、襲来蒙古時、師長守禦京都、
同八乙酉十一月、秋田城介泰盛謀叛時有勲功、
正応二己丑九月、将軍惟康親王御謀叛時、有勲功、
嘉元三癸亥正月、北条宗方謀叛時、有勲功、
徳治二丁未歿、于時五十五、

長国　横地権之助、太郎兵衛尉
弘安二己卯生於相模国
延慶元戊申七月、将軍久明親王御帰洛時、長国送之、
元弘元辛未加東兵、攻笠置城、有勲功、
正慶元壬申歿、于時五十四、

長則　横地太郎、叙従五位下、任遠江守、
正和三甲寅生於相模国、
正慶二癸酉、上洛尊氏卿時、従之、
建武三丙子二月、下向尊氏卿於筑紫時従之、於西国度々有戦功、
同四丁丑、義詮卿自鎌倉追奥州勢跡上洛時、従之、有戦功、
観応二辛卯十月、属尊氏卿、於相州（駿州）薩埵山細川顕氏・宇都宮弥三郎・勝田参河守倶有戦功、
康安元年辛丑歿、于時四十八、

家長　横地大三郎、叙従五位下、任山城守、
建武四丁丑於遠江国、
貞治六丁未三月、中殿御会時、供奉義詮
卿、
永和元乙酉八月、於義満公館、被行献芹
慶賀時、警固殿中、
康応・明徳頃、度々有武功、
応永十六己丑歿、于時七十三、

長豊　横地太郎兵衛尉、叙五位下、任遠江守、
永徳三癸亥生於山城国、
応永十四丁酉正月、上杉禅秀乱時、自京
都為加勢、下向于鎌倉、有軍功、
永享九丁巳歿、于時五十五、

（紙継目）

長泰　横地兵衛尉、
応永二十癸巳生於山城国、
永享十一己未二月、依鎌倉持氏朝臣謀
叛、将軍義教公被差向討手時、伴上杉中
務大輔持房、於相州箱根水呑、勝間田弾
正忠・井伊弥太郎俱討死、于時二十七、

長秀　横地太郎兵衛尉、叙従五位下、任遠江守、
永享六甲寅生遠江国、
寛正二辛丑、左兵衛督政知卿下向関東
時、長秀従之、
同五甲申四月、将軍義政公於糺河原見
猿楽時、供奉、
同六乙酉三月、義政公見犬追物時、供奉、
応仁元丁亥、細川勝元・山名宗全擾乱時、
警固御所、
其後、天下悉入戦国、而帰住本国遠江、
明応三甲寅歿、于時六十一、

秀国　横地兵藤
寛正六乙酉生於遠江国
永正三丙寅五月、為国仇、於遠江国汐見
坂討死、于時四十二、
曩祖家永、遠江国自大井川西、自白須賀
東、海辺知行之（当代知行而十二万石余云云）至秀国十
四代、而流落息元国、赴于甲斐国、

元国　横地弥三
永正二乙丑生於遠江国
父秀国討死時、元国二歳嬰児也、彼乳母
抱元国、走于広野、于時襲来仇敵、乳母恐
懼、捨去嬰児於叢中、其翌軍散後、乳母倡
来村夫分草捜求之、尋得於柏樹下也、雙
白鶴翼下隠之、一匹狼傍直宿之、見乳母
来、渡嬰児而鳥獣去、其後乳母携行於元

国于甲斐国、撫育之、長仕武田信虎及晴
信矣、鶴丸及以柏葉為家紋、起于此也、
且横地氏族狼不結襲云云、当氏類葉不
食鶴及狼、若誤犯之時、直有咎、曩祖家永
有白鶴之守、元国亦有此護、可謂希代矣、
天文二十三甲寅歿、于時五十、

元次　横地渋谷介
大永三癸未生於甲斐国、
仕武田信玄、永禄十一戊辰十二月信玄
遠州久野城主攻久野三郎左衛門宗能時、
属秋山伯耆守信友、於鼻闕溯要害討死、于
時四十六、

正家　横地造酒佑
奉仕、
大神君、元亀元庚午六月於江州柿川御
陣、松平勘四郎信一・同源次郎直乗・内藤
三左衛門信成・同四郎左衛門正成・菅沼
山城守貞政・大久保三郎左衛門忠政・加
藤勘右衛門正次・都筑惣左衛門秀綱・天
野□右衛門忠次・成瀬藤蔵正吉・同吉右
衛門一齋・横地造酒佑正家・森川金右衛
門氏俊・青山虎之助長利・野々山藤兵衛
之政・杉浦弥市郎親次・山本忠兵衛正義
丹羽四郎左衛門・松下惣左衛門・大河内
善兵衛・飯島才蔵、又菅沼新八郎陳代今
泉四郎兵衛延伝、且小笠原与八郎長忠・
同新九郎長元・同喜三郎貞慶・同左衛門
重広・同彦七郎貞頼等、倶有戦功、

国久　横地小十郎　主水
慶長五庚子春、被召出、
大神君同九年供奉濃州関原御陳、其後
秀忠公勤御扈従、

秀弘　横地監物
仕北条氏康及氏政、

照弘　横地監物
武州八王子城主
仕北条氏政及氏直、天正十八庚寅、八王
子落城時、入深山自殺云云、

秀定　横地同備前守
武州八幡山城主
仕北条安房守氏邦、

（紙継目）

泰久　横地勘之丞
母尾州小牧城主川尻玄蕃女
奉仕
家光公大坂城番及御幕奉行、

長久　横地次郎左衛門尉
母野尻彦太郎女、
奉仕
家光公・家綱公
承応三甲午歿、

某　横地数馬
依早世家断絶、

義次　横地喜三郎　所左衛門尉
弘治三丁巳生于甲斐国
仕武田信玄及勝頼、天正十壬午三月勝
頼滅亡、同年十月被召出
大神君、于時義次三十八、
同十二甲申供奉小牧・長久手御陳、
同十八庚寅供奉小田原御陳、
同年八月関東御入国時、於武蔵国笹井
村拝受弐百二十石、
慶長五庚子供奉濃州関原御陣、其後佐
渡国奉行、加増四千石、都合領四千二百
弐拾石、
同十九甲寅、有故被没収領地也、旧領蟄
居于笹井村、
寛永三丙寅六月十八日、於武蔵国笹井
村歿、于時七十、

元貞　横地弥兵衛尉　太左衛門尉
永禄元戊午生於甲斐国
仕武田信玄及勝頼、天正十壬午十月被
召出、
大神君、同十八庚寅、拝受於武蔵国笹井
村三百石、
慶長十三戊申五月歿、于時五十一、

（紙継目）

安信　横地木工右衛門尉
奉仕
秀忠公・家光公御納戸組頭及御広敷番
之頭、加増拝受弐百石、都合領五百石、
承応三甲午歿、于時七十、

元知　横地市郎右衛門尉
奉仕
秀忠公・家光公大御番、拝受二百石
寛永十六己卯大坂御金奉行、

承応二癸巳二月廿四日歿、

横地七之助　市郎右衛門尉

元尭
奉仕
家綱公
承応三甲午十一月廿四日歿、

正高
奉仕
家光公・家綱公・綱吉公大御番
天和二壬戌二月六日歿、

横地六左衛門尉

正賀
奉仕
綱吉公・家宣公・家継公・吉宗公大御番、
享保十六辛亥五月六日歿、于時八十三、
法号法立院一石日悟、

横地小右衛門尉

賀篤
奉仕
綱吉公・家宣公・家継公・吉宗公御納戸組
頭及西丸御広敷番之頭、
元文五庚申八月四日歿、于時六十八、
法号玄理院浄信日敬

横地小十郎

正久　横地東化齋

成和　荒木源兵衛
仕水野壱岐守忠定、

某　小野十大夫
仕戸田越前守忠余

（紙継目）

正芳　横地勝之助　小左衛門尉

正義　坂部外記

元春
奉仕
家綱公・綱吉公、寛文三癸卯六月十二日
大御番、
貞享元甲子八月十八日新御番、加増五
拾石、都合領二百五十石、
元禄十二己卯十二月七日、致仕、
同十三庚辰八月廿日歿、

横地十兵衛尉

元賢
奉仕
綱吉公・家宣公・家継（公脱）・吉宗公、元禄六癸酉

横地半助

横地系図（藤谷神社所蔵）

大御番
同十七甲申大御番組頭、加増二百石、都合領四百五十石、
正徳二壬辰五月廿九日、致仕、
元文丙辰十月五日歿、

元納
同市之丞
早世

政永
吉田次郎三郎
母方祖父継吉田新兵衛家

元孝
横地大十郎
嫡子元納、依早世、継元孝家

安平
横地市左衛門尉　太左衛門尉
寛永二乙丑生於武蔵国
奉仕
家光公・家綱公・綱吉公御書院番、
元禄十五壬午歿、于時七十八、

貞信
横地太郎左衛門尉
慶安四辛卯四月六日

家光公御病中附　宰相綱重卿於櫻田
御書院番、
延宝三乙卯五月十日歿、
法号無勤、

宗信
横地善左衛門尉
実水谷久兵衛次男、
仕　宰相綱重卿櫻田御書院番、
元禄十一戊寅七月廿四日歿、
法名秋白、

定継
横地又市
延宝八庚申生於武蔵国、
実美濃部佐次右衛門尉菅原茂英次男、
於櫻田奉仕
家宣公御小姓組、
宝永元甲申
家宣公入御西丸、焼火間御番、
同六乙丑致仕、
享保十己巳正月廿日歿、干時四十六
法名陽覚

定成
横地万次郎　善左衛門尉
元禄十三庚辰生於武蔵国

（紙継目）

実美濃部勘右衛門尉菅原茂敦次男、
奉仕
吉宗公・家重公大御番、
延享三丙寅七月十九日、実姓甥美濃部
左伝次、依乱心横死、

致信　横地左吉

安隆　横地太郎左衛門尉
万治元戊戌生於武蔵国
奉仕
綱吉公・家宣公御書院番、
享保十四己酉歿、于時七十二、

安親　横地弥三郎
寛文十一辛亥生於武蔵国
奉仕
家宣公・家継公・吉宗公御小姓組御番、
享保十六辛亥歿、于時六十一、

安正　横地弥一郎　渋谷介
奉仕
吉宗公・家重公御書院番、

安側　同弥源次

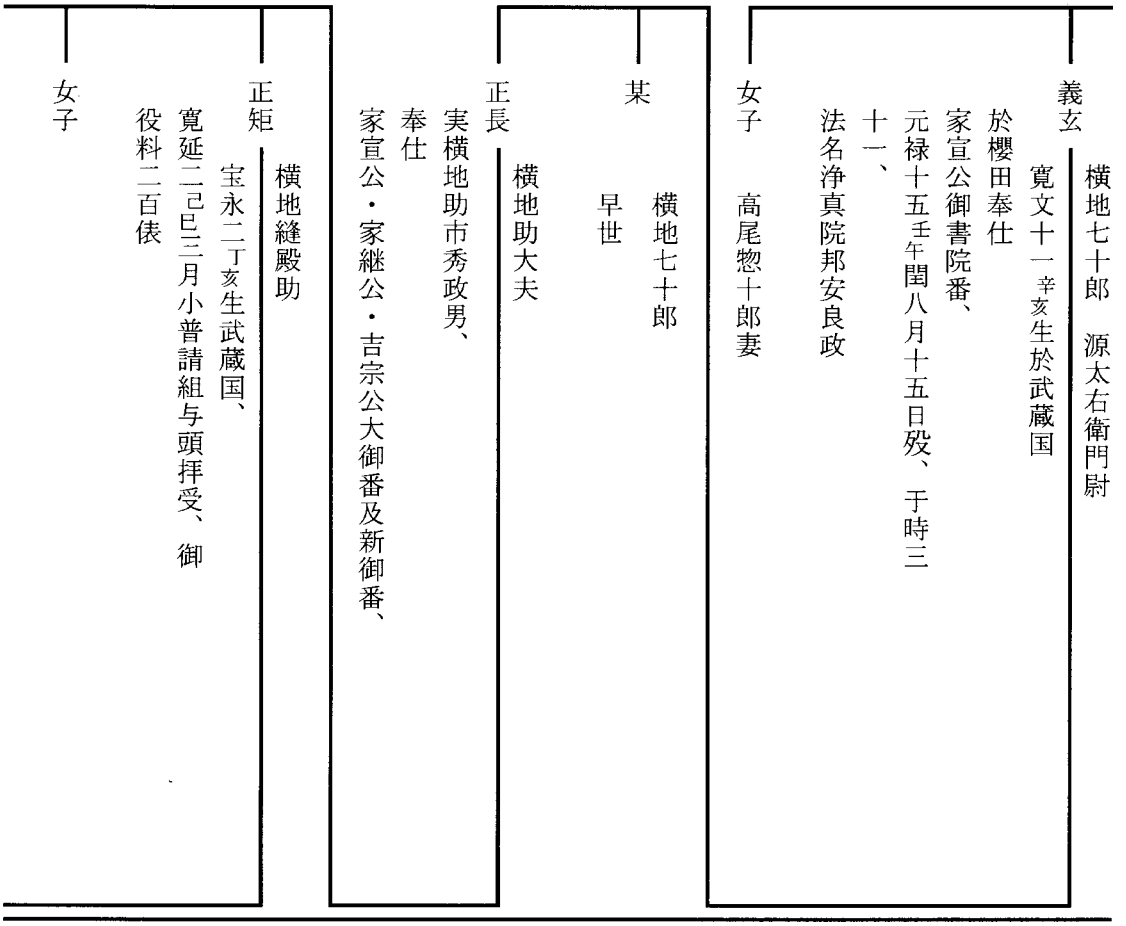
（紙継目）

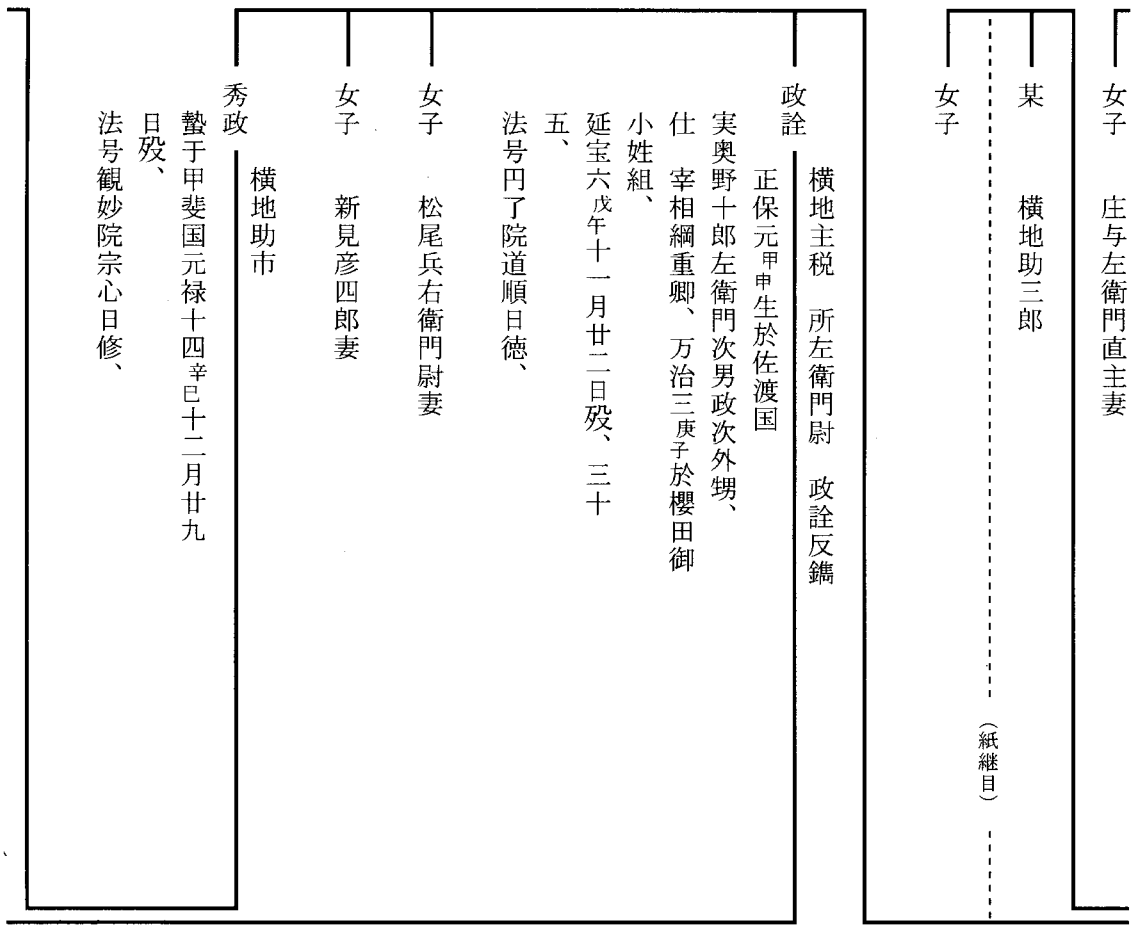
政次　横地所左衛門尉　民部左衛門尉　政次反恣
慶長十二戊申生於佐渡国
寛永九壬申
秀忠公薨、依被行大赦、被召出被授旧領
笹井村、于時二十五
慶安四辛卯四月六日
家光公御病中附　長松君後甲府宰相綱重卿為、
小十人頭及御先弓頭、領四百六十石有
故差上旧領笹井村今蔵米也、
延宝三乙卯八月五日歿、于時六十八、
法名智光院浄栄日達、

義長　横地喜右衛門尉　薙髪後号遊身
寛永二己丑生於武蔵国笹井村
仕　甲府宰相綱重卿御目付役、領四百
俵、
元禄十三庚辰五月廿七日歿、于時七十
六、
法号光専院鉄叟雄心、

女子　奥野十郎左衛門妻

横地系図（藤谷神社所蔵）


義玄
横地七十郎　源太右衛門尉
寛文十一辛亥生於武蔵国
於櫻田奉仕
家宣公御書院番、
元禄十五壬午閏八月十五日歿、于時三
十一、
法名浄真院邦安良政
女子　高尾惣十郎妻
某
横地七十郎
早世
正長
横地助大夫
実横地助市秀政男、
奉仕
家宣公・家継公・吉宗公大御番及新御番、
女子
正矩
横地縫殿助
宝永二丁亥生武蔵国、
寛延二己巳三月小普請組与頭拝受、御
役料二百俵
女子


女子　庄与左衛門直主妻
某　横地助三郎
女子
（紙継目）
政詮
横地主税　所左衛門尉　政詮反鐇
正保元甲申生於佐渡国
実奥野十郎左衛門次男政次外甥、
仕　宰相綱重卿、万治三庚子於櫻田御
小姓組、
延宝六戊午十一月廿二日歿、三十
五、
法号円了院道順日徳、
女子　松尾兵右衛門尉妻
女子　新見彦四郎妻
秀政
横地助市
蟄于甲斐国元禄十四辛巳十二月廿九
日歿、
法号観妙院宗心日修、

正長　横地助太夫
継同氏源太左衛門尉義玄家、
松尾弥三郎
時賢
継松尾喜兵衛尉喜依家
従三位月光院御方附、属御侍及御用達、
延享元甲子御広敷番之頭、
某　小田切半助
某
横地伝八郎

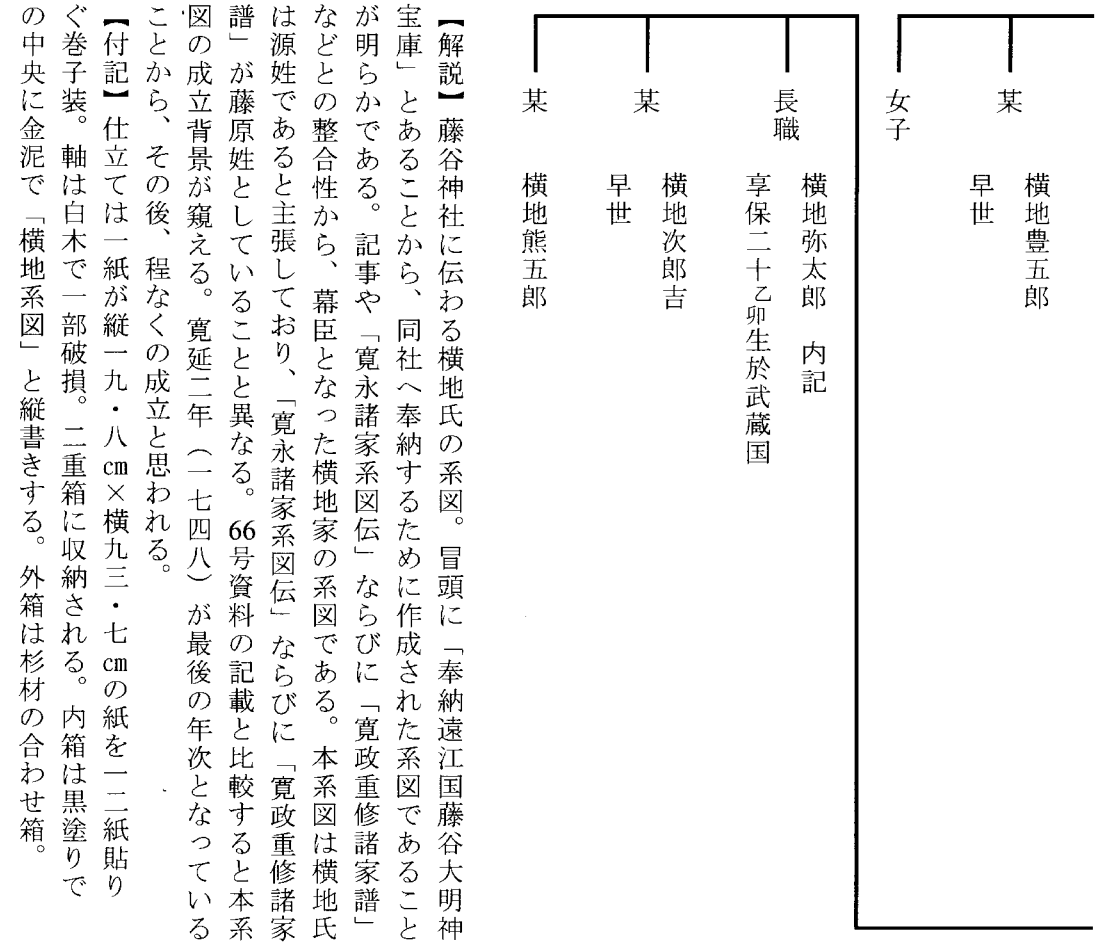
詮長　横地伝十郎　新之丞　所左衛門尉
民部左衛門尉　詮長反昌
寛文元辛丑生於武蔵国
実岡部八郎五郎藤原吉宗次男、
奉仕
家宣公・家継公・吉宗公、
延宝七己未於櫻田御書院番、
元禄九丙子甲府御鉄砲頭、
宝永元甲申
家宣公入御西丸時、桐間御番、
正徳三年癸巳御小姓組、
享保五庚子致仕、
同十乙巳三月十四日歿、于時六十五、
法号徳蔵院浄心日円、

長救　横地八十郎　所左衛門尉　長救反胄
貞享四丁卯生於武蔵国
実羽太勘兵衛藤原正弘次男、
奉仕
家宣公・家継公・吉宗公、
宝永六己丑御書院番、
正徳四甲午進物御番、
享保六辛丑致仕、
元文四己未八月隠居、同十月薙髪、
号催暮亭主人貞麻呂岫残月、
（紙継目）

長孝　横地内記　三郎兵衛尉　長孝反棹
宝永四丁亥生於武蔵国
元文四己未八月家督、
寛保元辛酉十月廿八日西丸御書院番、

長時　横地左膳
早世

長周　横地求馬
早世



【解説】藤谷神社に伝わる横地氏の系図。冒頭に「奉納遠江国藤谷大明神宝庫」とあることから、同社へ奉納するために作成された系図であることが明らかである。記事や「寛永諸家系図伝」ならびに「寛政重修諸家譜」などとの整合性から、幕臣となった横地家の系図である。本系図は横地氏は源姓であると主張しており、「寛永諸家系図伝」ならびに「寛政重修諸家譜」が藤原姓としていることと異なる。66号資料の記載と比較すると本系図の成立背景が窺える。寛延二年（一七四八）が最後の年次となっていることから、その後、程なくの成立と思われる。

【付記】仕立ては一紙が縦一九・八cm×横九三・七cmの紙を一二紙貼りぐ巻子装。軸は白木で一部破損。二重箱に収納される。内箱は黒塗りでの中央に金泥で「横地系図」と縦書きする。外箱は杉材の合わせ箱。

68　系図略　柳川古文書館蔵

（包紙）
「系図略
外ニ書付色々
横地氏」

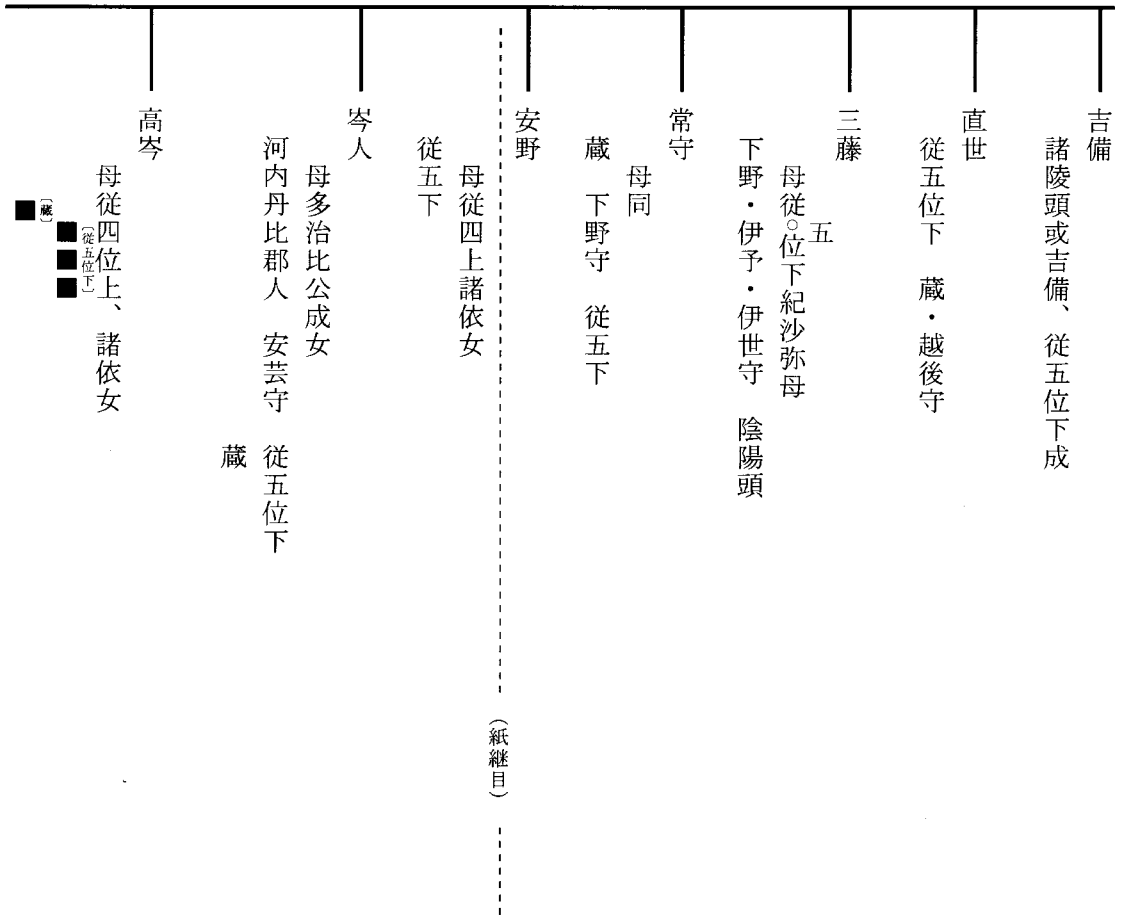
（包紙端裏）
「沙汰別」

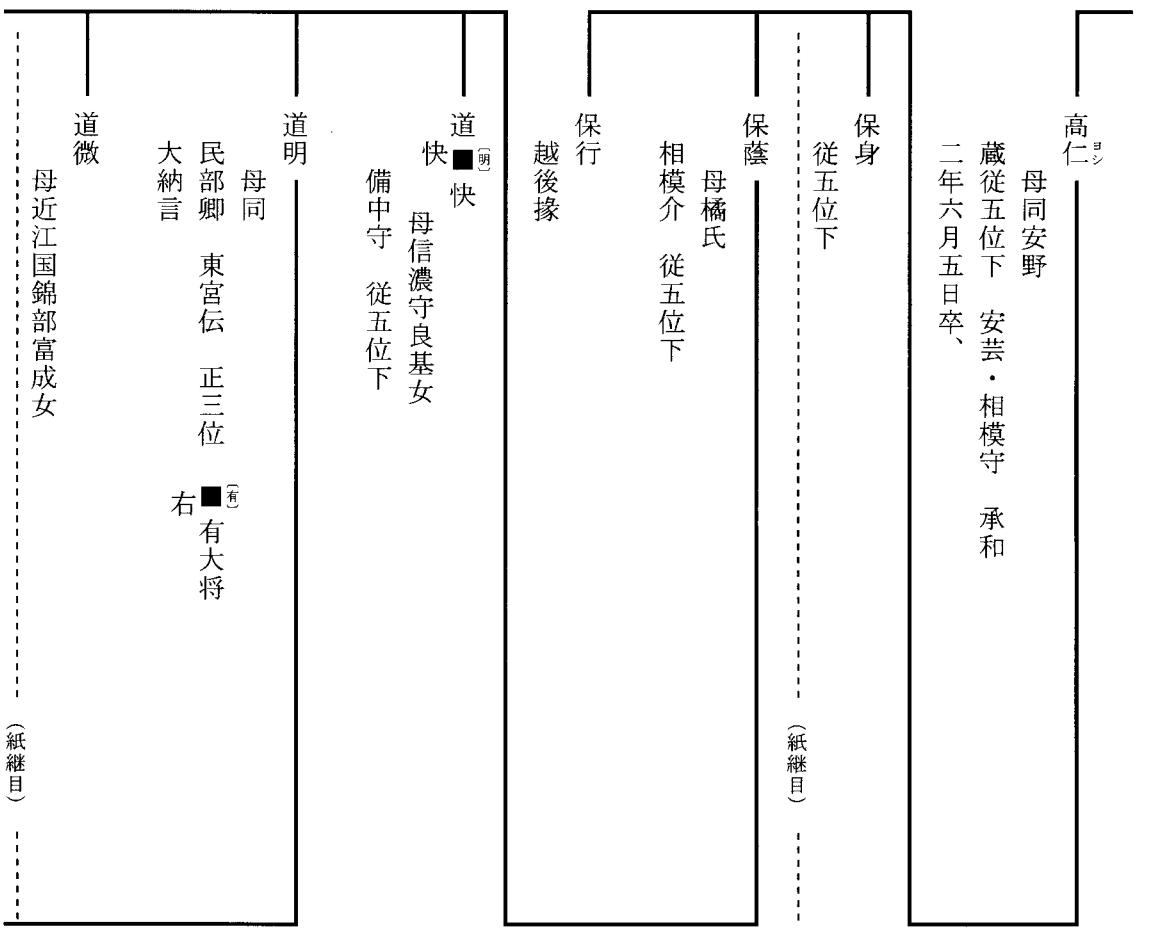
（系図袖裏書）
「前ノトコロ磨滅〆ヨミ難シ、
長矩公ヨリマヘノ処、別系ト引合セ相済、此系図□〔義カ〕□殿御手筆ノ由、
譜諜　横地□」

（墨線）

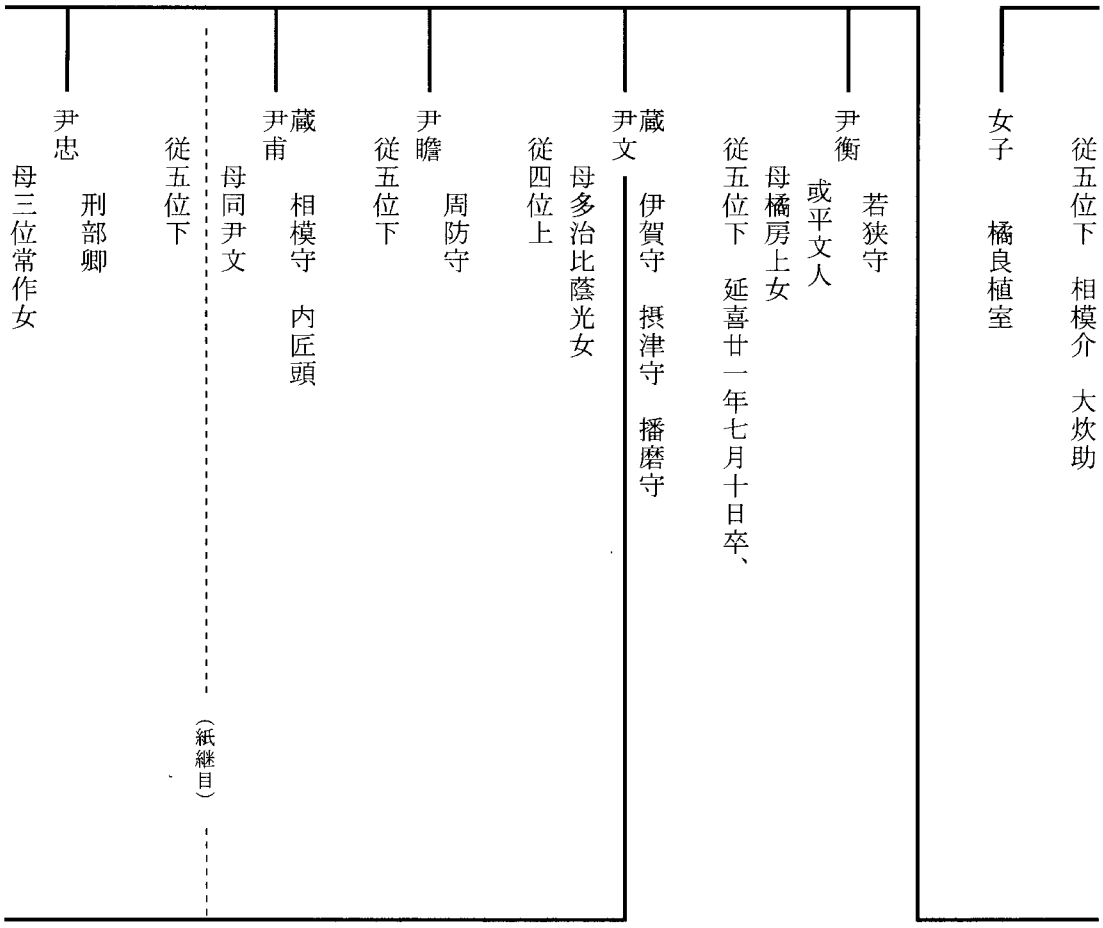
宮内卿　民部少輔　右京大夫
皇后宮大夫　備前・山城等守
頭従三位　中納言
巨勢麿十三男
貞嗣
母右大臣永平公女
弘仁十五正月四日薨、寿六十六歳、

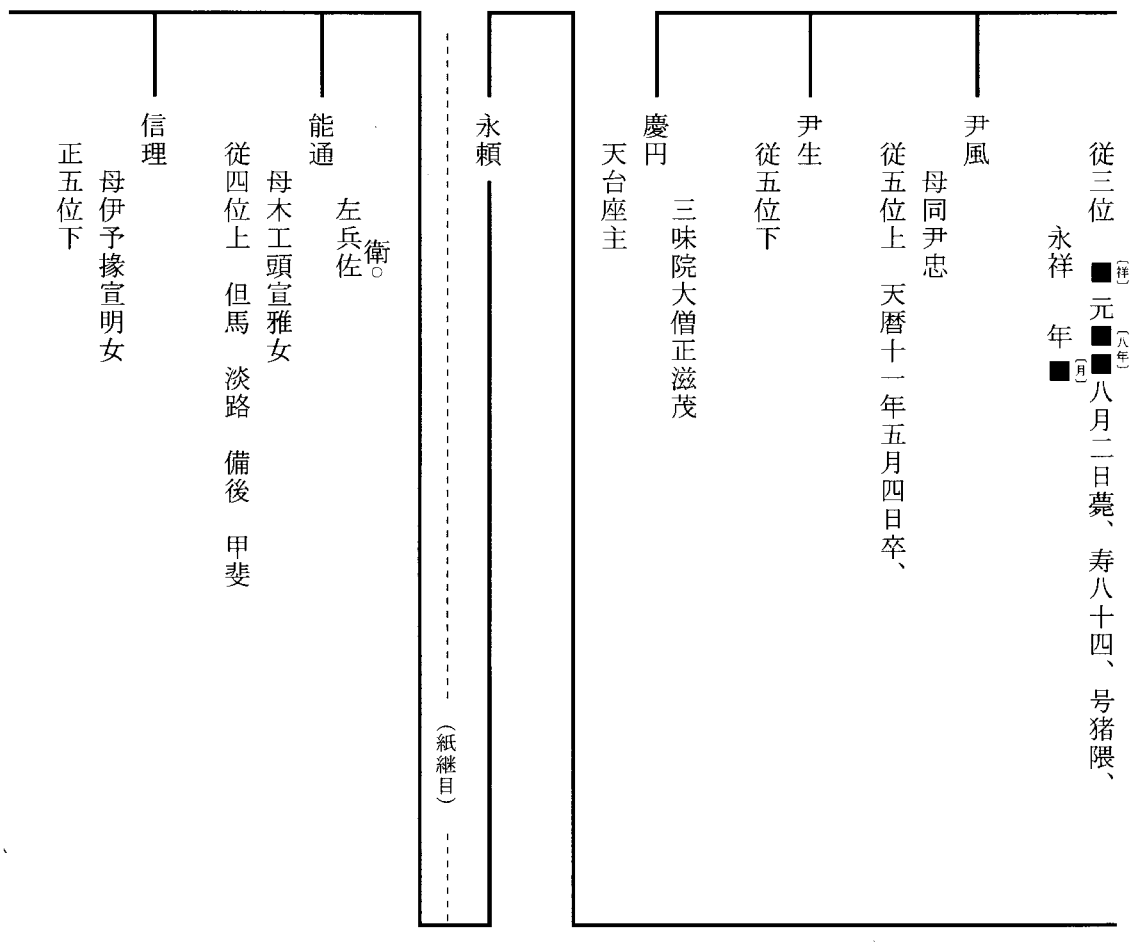
（朱線）


吉備
諸陵頭或吉備、従五位下成
直世
従五位下　蔵・越後守
三藤
五
母従○位下紀沙弥母
下野・伊予・伊世守　陰陽頭
常守
母同
蔵　下野守　従五下
安野
母従四上諸依女
従五下
岑人
母多治比公成女
河内丹比郡人　安芸守　従五位下
蔵
高岑
母従四位上、諸依女
■〔蔵〕
■
■〔従五位下〕
■
（紙継目）


高仁〔ヨシ〕
母同安野
蔵従五位下　安芸・相模守　承和
二年六月五日卒、
保身
従五位下
保蔭
母橘氏
相模介　従五位下
保行
越後掾
（紙継目）
道■〔明〕快
母信濃守良基女
備中守　従五位下
道明
母同
民部卿　東宮伝　正三位　■〔有〕有大将
大納言　右
道微
母近江国錦部富成女
（紙継目）

系図略（柳川古文書館蔵）


従五位下　相模介　大炊助
女子　橘良植室
尹衡　若狭守
或平文人
母橘房上女
従五位下　延喜廿一年七月十日卒、
蔵尹文　伊賀守　摂津守　播磨守
母多治比蔭光女
従四位上
尹瞻　周防守
従五位下
蔵尹甫　相模守　内匠頭
母同尹文
従五位下
（紙継目）
尹忠　刑部卿
母三位常作女


従三位　■[祥]元■[八年]八月二日薨、寿八十四、号猪隈、
永祥　年■[月]
尹風
母同尹忠
従五位上　天暦十一年五月四日卒、
尹生
従五位下
慶円
天台座主
三味院大僧正滋茂
永頼
（紙継目）
能通　左兵衛佐
母木工頭宣雅女
従四位上　但馬　淡路　備後　甲斐
信理
母伊予掾宣明女
正五位下

言通　少納言　兼遠江守　伊賀・常陸介
　母同能道　○遠江国司乎
　従四位下
保相　三河守　尾張守
永信　遠江守
従五位下　小一条院判官代
（紙継目）

長通　太郎
　母池田長女
　居遠州横地、保元之乱、従源義朝、
成長　三郎　又平三
　母同長通
　居遠州勝田、保元之乱、従源義朝、
長重　太郎
治承五年■（辛）廿一月十七日、使安田三郎
義定相率和田義盛・岡部次郎
忠綱・狩野五郎親光・土屋次郎
（紙継目）

佐
義清・宇○美三郎祐茂、遠州横地
太郎長重・勝田平三成長、屯于
浜松庄橋本、武衛命曰、此要害之
地也、為可防平氏襲来也、
文治二年丙午二月六日、左典厩能保
帰洛、室家者武衛之婿也、使岩原平三・
中村次郎・比企藤次・土肥弥太郎・小楊土
藤三・横地太郎・勝田平三扈従之、
建久元年庚戌十一月七日、頼朝公上洛、先陳
畠山次郎重忠、隨兵六十列、後陣四十六列、
浅羽三郎・新野太郎・横地太郎在于後陳
三十四番、
建久六年乙卯二月十四日、頼朝公上洛、後陳
二十三列、■■■（伊井介）・横地太郎・勝田玄蕃助、
「「吟味」」
（紙継目）

信連　太郎
遠藤冠者実安、承久之役戦死、有女■（田）
太和善射、嫁于信連故伝射之妙、新羅
三郎義光・下河辺八郎朝綱・源三位頼政
下河辺○経盤・那須与一宗高・曽根正須・遠藤
冠者■（自）実安■（ヨリ到）於信連「至」八人、

長直　太郎左衛門尉
嘉禎四年戊戌正月廿八日、将軍頼経上洛、
二月四日、宿於懸河使二遠州之士営一■〔於〕旅邸、
横地長直主レ事、諸士輻重競二渡天龍河一、
浮橋甚危制レ之、不二敢聴一、長直告二左京兆一、
左京兆於二河辺一、坐不レ接レ言而定、
暦仁二年己亥正月朔日、御馬○始一○「御馬相模式部大夫
時直・本馬次郎左衛門信忠、二御馬相模
右近大夫時貞・横地太郎兵衛尉長直三・四・五略之、（紙継目）

師重　左衛門次郎
善射　正嘉二年戊午正月六日、弓始十二人撰之、其一、渋谷左衛門太郎朝重・横地衛門次郎師重、自二已下略之、此後毎歳充其撰、

基重　太郎左衛門
信真　兵庫介
信勝　左衛門

（紙継目）
長勝　弾正
常久　弥次郎　又主馬助
家長　山城守
応安元年義満将軍、加冠諸候賀之、家長等十五人、守営中、
敏長　加賀介
信資　右馬助
長保　左兵衛
永享十一年、義教将軍、使小河原信濃守政康・今川上総■〔助〕範忠・武田太郎信重・朝倉介（紙継目）
小太郎教景等、討鎌倉持氏、横地長保・勝田某、伊豆国守寺尾四郎左衛門具重、二千余騎過箱根、陣二水飲宿一、与持氏家士大森伊豆守・箱根別当等七百余騎■〔塵〕戦、軍不レ利横地・勝田戦死、

次郎
長定
実長保弟

太郎
長治

右兵衛
守重

主水正
重宗
仕二信長公一
領尾州椹腰　上尾　中尾　下尾　山辺等
「御加増
（紙継目）

法名好善

主水正
重尚
仕二信長公（織田信雄）一後、常真公ニ仕フ、
領地同重宗、

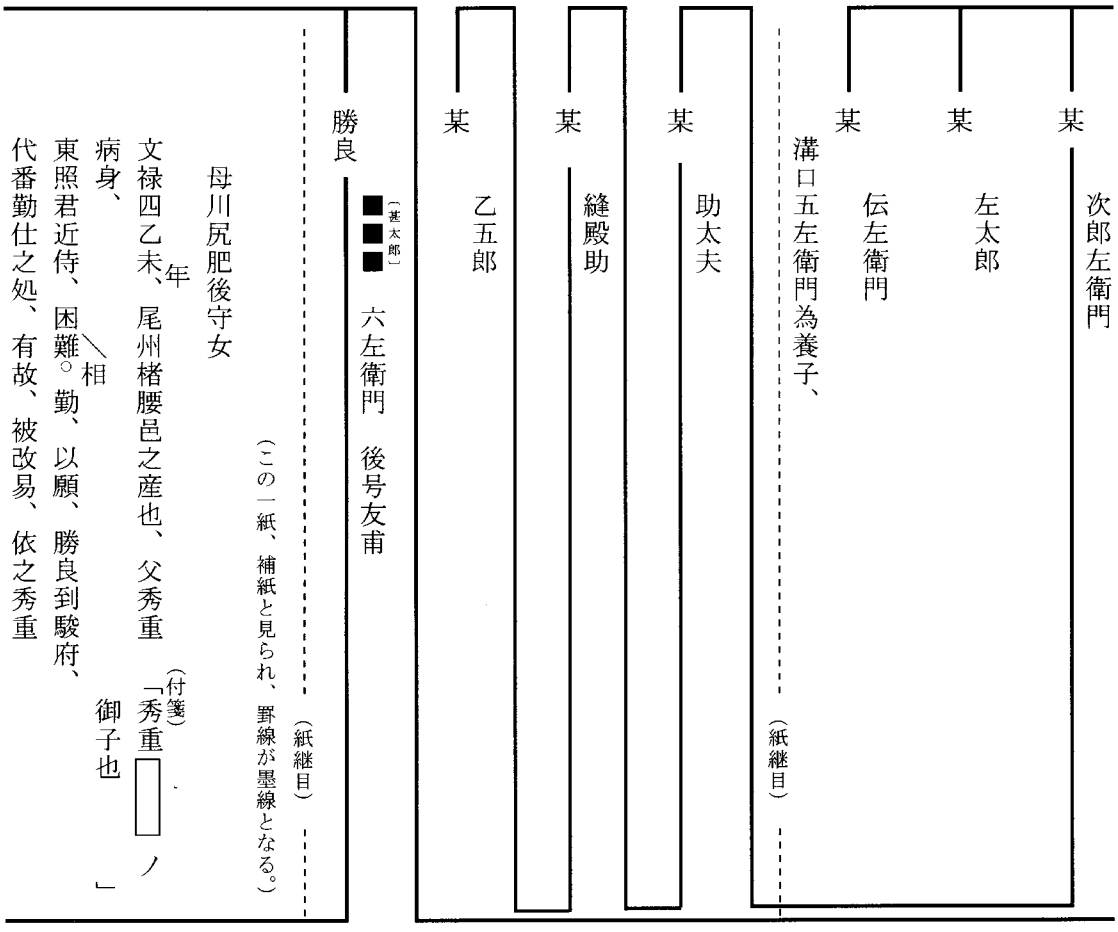
女子　嫁服部半右衛門

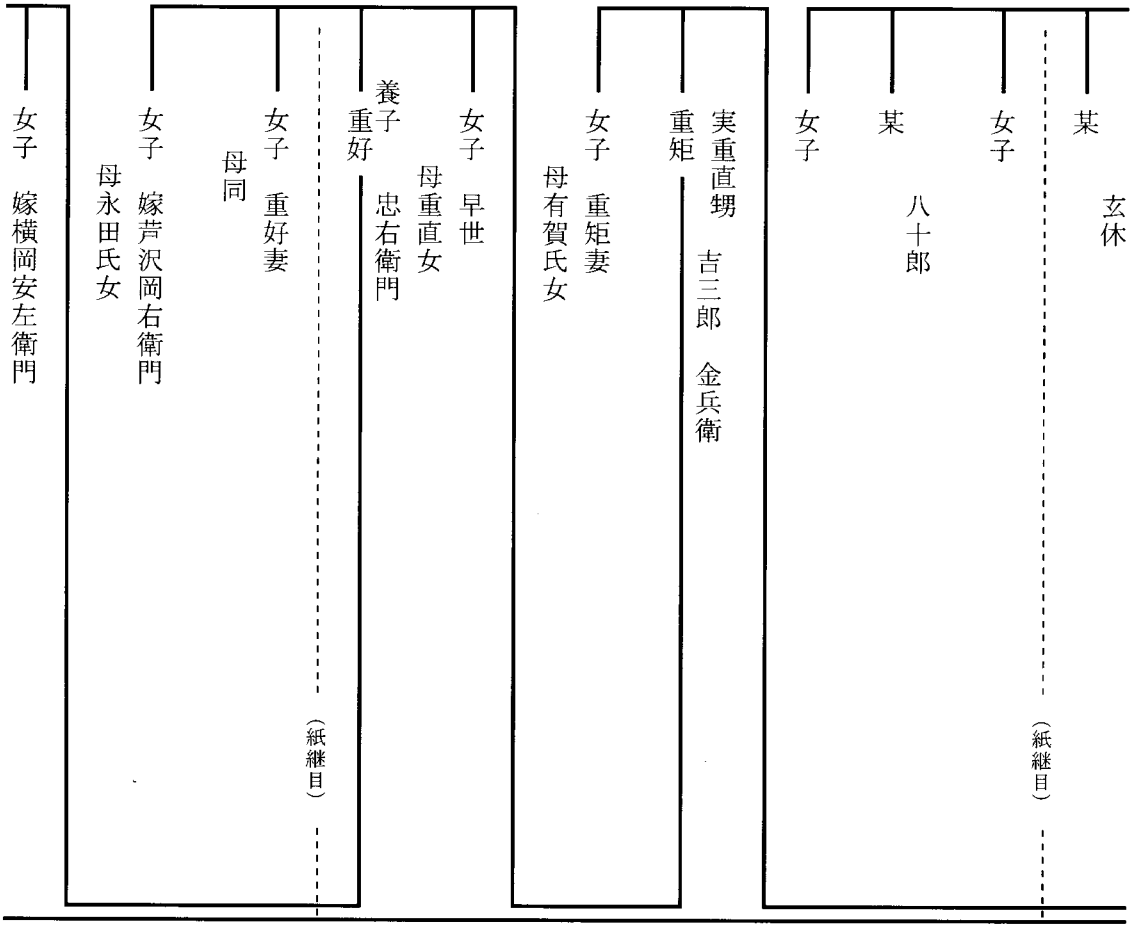
四郎右衛門　又忠右衛門
秀重
母川尻肥後守女
邑
永禄十二巳巳尾州椹腰之産也、事織田
一ニ信長公ニ改ハ是ニ近シ、○与
常真公　天正十二年甲申秀吉公○常■（信）公　真
一行ケツ
不レ睦、常真公遣二价ヲ於　東照君一、請二後援一、
東照君（衍）請後援○
○質二於尾州之士八人一秀重其一人也、
尓来事二東照宮御隠居之節、到一
以レ願
駿府後依二病身一○嫡男勝良来二駿府一、
（紙継目）
勤仕之処、有レ故被二改易一、因レ茲、秀重
再勤、晩年牢落、寛永十三年丙子
七月朔日卒、寿六■（月）十八歳、法名、
五イ□　清意涼雲居士

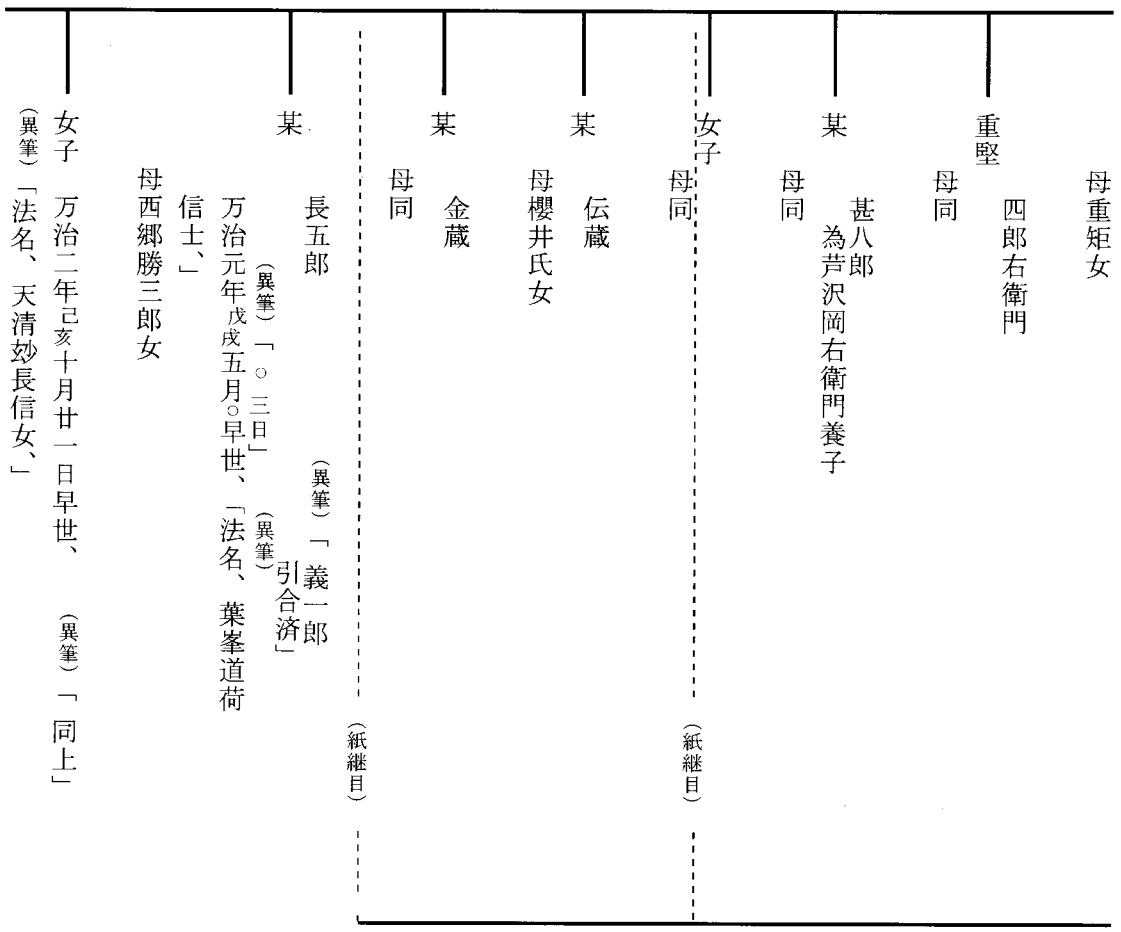
勘之■（勤）
丞

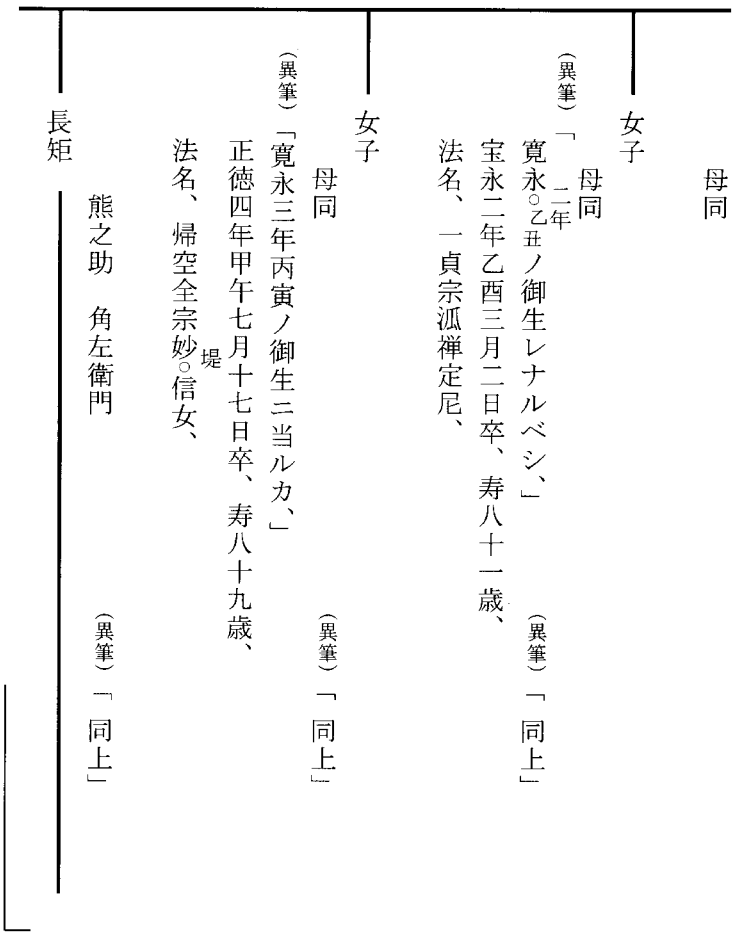
重信
一ニ重親ト有之、御旗本也、（「東照君」の文字の上に張紙をする。）
尾州椹腰邑之産也事、
東照君

某
武兵衛


某 次郎左衛門
某 左太郎
某 伝左衛門
溝口五左衛門為養子、
（紙継目）
再勤其後、
宗茂公懇〇而／因被〇相招勝良、来於立花家
為合力三百俵并資用金等賜之、
格別重然処、父秀重於駿府就卒去、
忠茂公江勝良成預、延宝五年丁巳
三月六日卒、寿八十三歳、法名、
宗安友甫居士、
重次 吉三郎 金兵衛 全心
母
慶長十四■（丁カ）己酉年、城州之産也事、
保科家 元禄八年乙亥三月十三日
卒、
女子 嫁中尾太左衛門
（朱線）
某 喜内
某 半四郎
（紙継目）
（朱線）
重直 伝四郎 竹右衛門 四郎右衛門
某重元 源大夫 別系アリ
某 助太夫
某 縫殿助
某 乙五郎
勝良 ■■■（甚太郎） 六左衛門 後号友甫
（この一紙、補紙と見られ、罫線が墨線となる。）
（紙継目）
母川尻肥後守女
文禄四乙未年、尾州楮腰邑之産也、父秀重 （付箋）「秀重□ノ御子也」
病身、
東照君近侍、困難〇相勤、以願、勝良到駿府、
代番勤仕之処、有故、被改易、依之秀重


某
玄休
女子
（紙継目）
某
八十郎
女子
実重直甥
吉三郎
金兵衛
重矩
女子
重矩妻
母有賀氏女
女子
早世
母重直女
養子
重好
忠右衛門
（紙継目）
女子
重好妻
母同
女子
嫁芦沢岡右衛門
母永田氏女
女子
嫁横岡安左衛門


母重矩女
重堅
四郎右衛門
母同
某
甚八郎
為芦沢岡右衛門養子
母同
女子
母同
（紙継目）
某
伝蔵
母櫻井氏女
某
金蔵
母同
（紙継目）
某
長五郎
（異筆）「義一郎
引合済」
（異筆）「○三日」
万治元年戊戌五月○早世、「法名、葉峯道荷
信士、」
母西郷勝三郎女
女子
万治二年己亥十月廿一日早世、
（異筆）「同上」
（異筆）「法名、天清妙長信女、」



【解説】柳川藩士横地家で作成された系図。後欠のために成立年代は不詳。同家の系図では横地氏は藤原南家に系譜を引く。また中世部分も幕臣横地家の系図と人名が異なる。

本系図の案と思われる「系図案」（柳川古文書館蔵）が今一本残る。同系図は欠紙があるが、後半部分は本系図よりも後の天保年間まで書きとどめている。

【付記】太字部分は本系図の案と思われる「系図案」（柳川古文書館蔵）から補った。

【参考】近世横地系図一覧

本一覧作成に当たっては、横地勝則編『横地家譜史料集』の成果に依拠した。

『横地系図』	（藤谷神社蔵）	67号資料
『寛永諸家系図伝』	（内閣文庫蔵）	65号資料
『寛政重修諸家譜』	（内閣文庫蔵）	66号資料
『断家譜』	（内閣文庫蔵）	
『江戸城多聞櫓文書』	（国立公文書館蔵）	
『尾州植田横地氏由緒』	（坂井喚三氏蔵）	
『尾州植田横地氏碑銘』	（坂井喚三氏蔵）	
『系図略』	（柳川古文書館蔵）	68号資料
『系図案』	（柳川古文書館蔵）	
『横地金兵衛系図』	（柳川古文書館蔵）	
『横地家譜略』	（柳川古文書館蔵）	
『横地譜略』	（柳川古文書館蔵）	
会津藩『諸士系譜』	（会津若松市立会津図書館蔵）	
尾張藩『士林沂泗』	（蓬左文庫蔵）	
『横地斧十郎勤書先祖親類及根一札』	（横地意保氏蔵）	
萩藩『閥閲録』［横地七郎兵衛］	（山口県古文書館蔵）	
萩藩『譜録』［横地七郎兵衛勝貞］	（山口県古文書館蔵）	
水戸藩『水府系纂』［横地玄常正務］	（水府明徳会蔵）	
『彦板藩士系図』	（彦根市立図書館蔵）	
彦根藩『侍中由緒帳』［横地佐平太］	（彦根城博物館蔵）	
『彦板藩士戸簿薄』［横地松二郎］	（彦根市立図書館蔵）	

富山藩『藩士由緒書』［横地正澤重惇］（富山県立図書館蔵）
金沢藩『諸士系譜』（石川県立図書館蔵）
『先祖由緒一類附帳』［横地和次郎］（金沢市立図書館蔵）
『由緒一類附帳』［横地大十郎］（金沢市立図書館蔵）
『先祖由緒并一類附帳』［横地大十郎］（金沢市立図書館蔵）
『先祖由緒并一類附帳』［横地金三郎］（金沢市立図書館蔵）
『先祖由緒并一類附帳』［横地弥兵衛］（金沢市立図書館蔵）

第二章　中世城館

目次

一、横地城……六七
二、小太郎砦……七四
三、武衛原館……七六
四、堀田城……七八
五、富田城……八一
六、火剣山砦……八四
七、高田大屋敷遺跡……八六
八、勝間田城……八九
九、高天神城……九二
十、掛川城……九四
十一、殿谷城……九六
十二、久野城……九八
十三、笹岡城……一〇〇
十四、高根城……一〇二
十五、蒲原城……一〇四
十六、湯島城……一〇六

一、横地城（よこちじょう）

所在地　小笠郡菊川町東横地
型　式　山城
規　模　東西約四〇〇m、南北約四六〇m

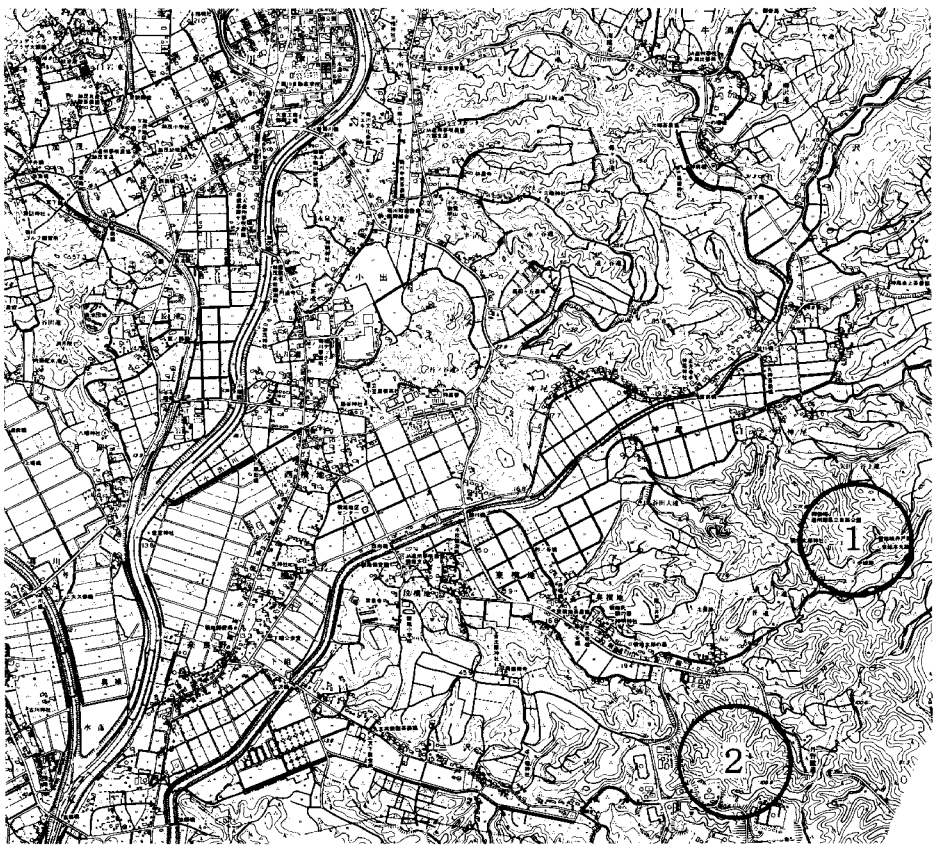
城跡は、牧ノ原台地の支脈が複数西方に向けて延び、そのうち菊川の支流牛淵川による開析平野の南側にある半島状の台地上に位置する。この台地の南側山麓は、奥横地川が東から西に向かって流れ浸食谷を形成している。北側は、南面と大きく相違し、大小の浸食谷が無数に形成され、地形がかなり複雑である台地状地形から牛淵川に向かい、大小の支尾根が派生した形状をしている。

城跡は、台地状地形のうち東半分の地域に立地する。城域は、全体を大きく四区画に区分することができ、西側の峯を利用した「西の城」、南側の「大手曲輪と千畳敷」、千畳敷の東隣に連なる「中の城」、東側の峯を活用した「東の城」である。特に「西の城」・「中の城」・「東の城」は尾根上の三つの頂部を巧みに活用した築城法であるが、全体としては、典型的な連郭式縄張ではない。小規模な城を峯上に構え細尾根で連結した形態（一城分郭型）である。

東の城は、標高一〇一mの東の峯に立地し、三つの城の中では、最高地点に構えられている。曲輪の規模や配置、工法から「本城」部分と推定される曲輪群である。東方は、一条の大堀切が存在し、遺構の東限である。

東の城の区画は、標高一〇一mの南区画と大堀切を隔てた北区画の二区画より構成されている。曲輪配置は、同心円状でなく、西側から北側、東側の三方に階段状に設けられており、曲輪・平場とも小規模であることが特徴である。最高所の曲輪は、長さ約三〇m、幅約一〇mの略長方形であり、南端部から北側にかけて低土塁（高さ一m余）を巡らせている。虎口遺構は、明確でないものの、東縁の北端部と推定されている。北区画との間に大堀切を設けて、北側からの侵入に対して防御を強化した。東の城の北側斜面に、一本の竪土塁が現存し、これは谷間からの敵を想定した構えであろう。

北区画は、自然地形を生かしながら、尾根上を削平して、曲輪・削平地を設け、竪堀・土塁を配置させ、北面を防御していることが特徴である。



第1図　位置図（1横地城・2小太郎砦）

中の城は、西城と東の城の中間地点の峯上に構築された曲輪群の一つである。標高九〇mに位置し、城域は、東の城に向かう尾根上部分と土塁を伴う頂面の広い曲輪の二区画より構成されている。西の城や東の城に比較し、縄張も単純で小規模な削平地より成るため、機能的には、東の城の馬出し的な要素を有したものだろう。中心的な曲輪には、長さ約三〇mの土塁が残存しており、南端部の開口部は、虎口と推定される。なお土塁の西側外方に城内唯一の横堀が一本設けられている。

千畳敷は、西の城の南側に位置し、中の城と結ぶ地点にある。東西約九〇m、南北十六m～三〇m余で、不整形の空間地である。土塁や堀切や虎口等の防御遺構は残存せず、形状や位置関係等から、城の存立期に平場として位置していたか疑問の残る箇所である。

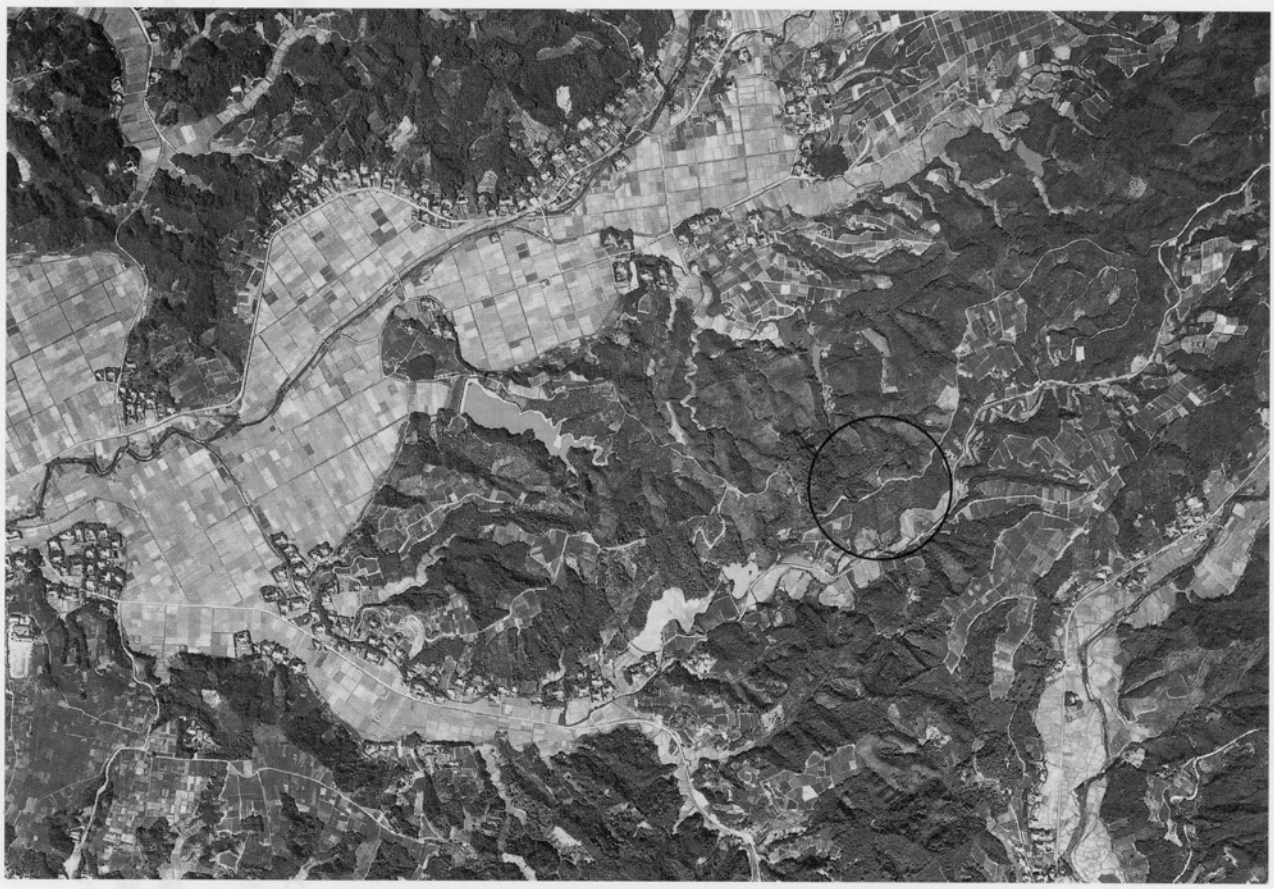
大手曲輪は、千畳敷の南側下段に位置する。農道脇の右斜面上に、土橋を伴う二本の竪堀の存在が確認され、登り切った箇所が平坦面の削平地であることから、大手口と推定された。虎口に土塁は設置されていない。

西の城は、西側方面の防御を目的として構築したもので、主軸に対して直交する位置にある。北側に派生する尾根上を階段式に削平し、要所には堀切、横堀を設けており、小尾根上には、すべて小段を連続的に構えており、西方に対しての厚い防御とした。主曲輪の南方部には、大堀切と大土塁を構えて尾根を遮断した。土塁は、主曲輪南下方の曲輪のみに構えられている。

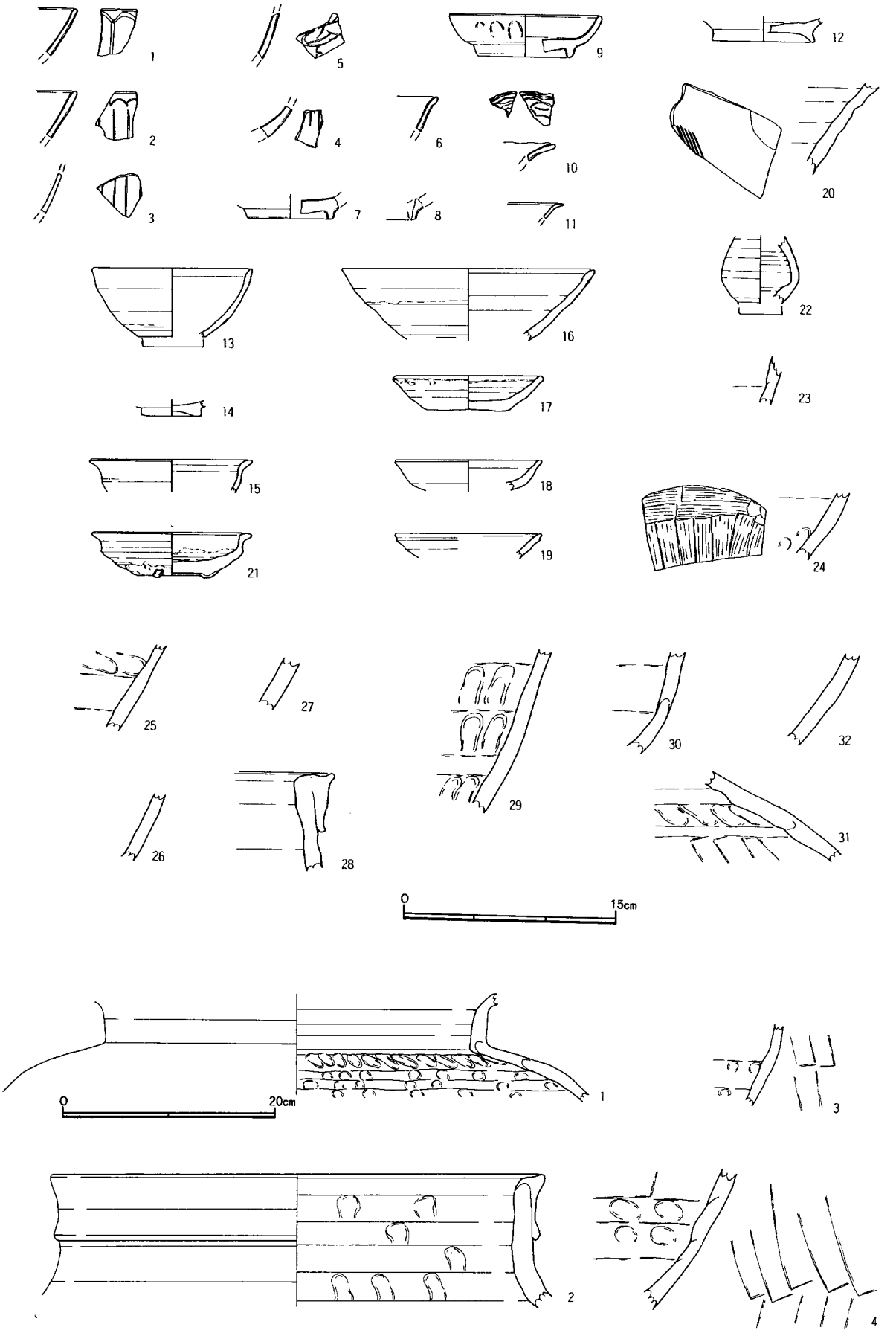
城跡は、一部神社地や参道、農道の造成により破壊を受けているが、全体的には、室町末期の国人領主の本城として、縄張遺構を良好に残している。

昭和四十六年三月に県指定史跡となった。

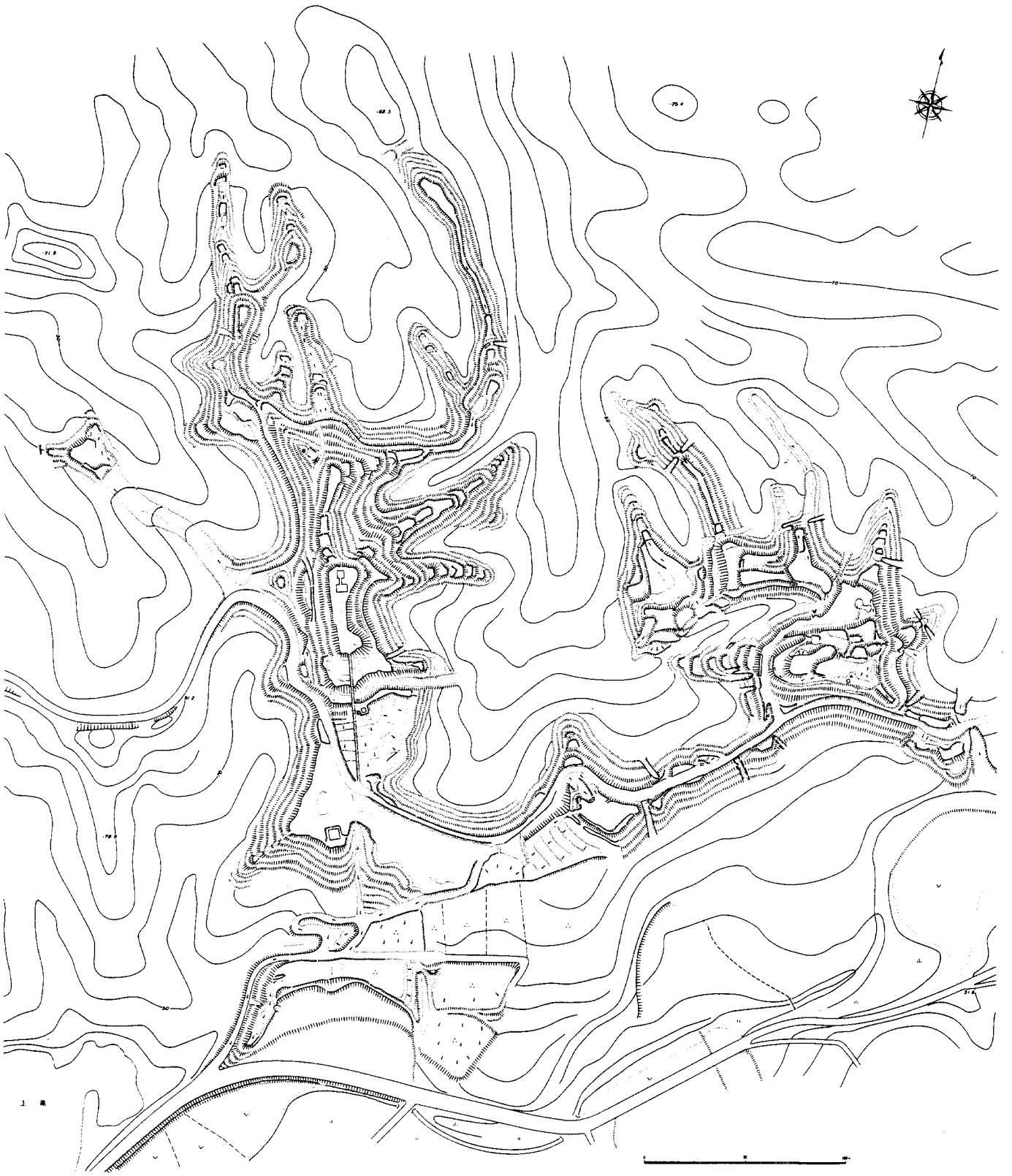
参考文献　横地城跡総合調査報告書　一九九九　菊川町教育委員会



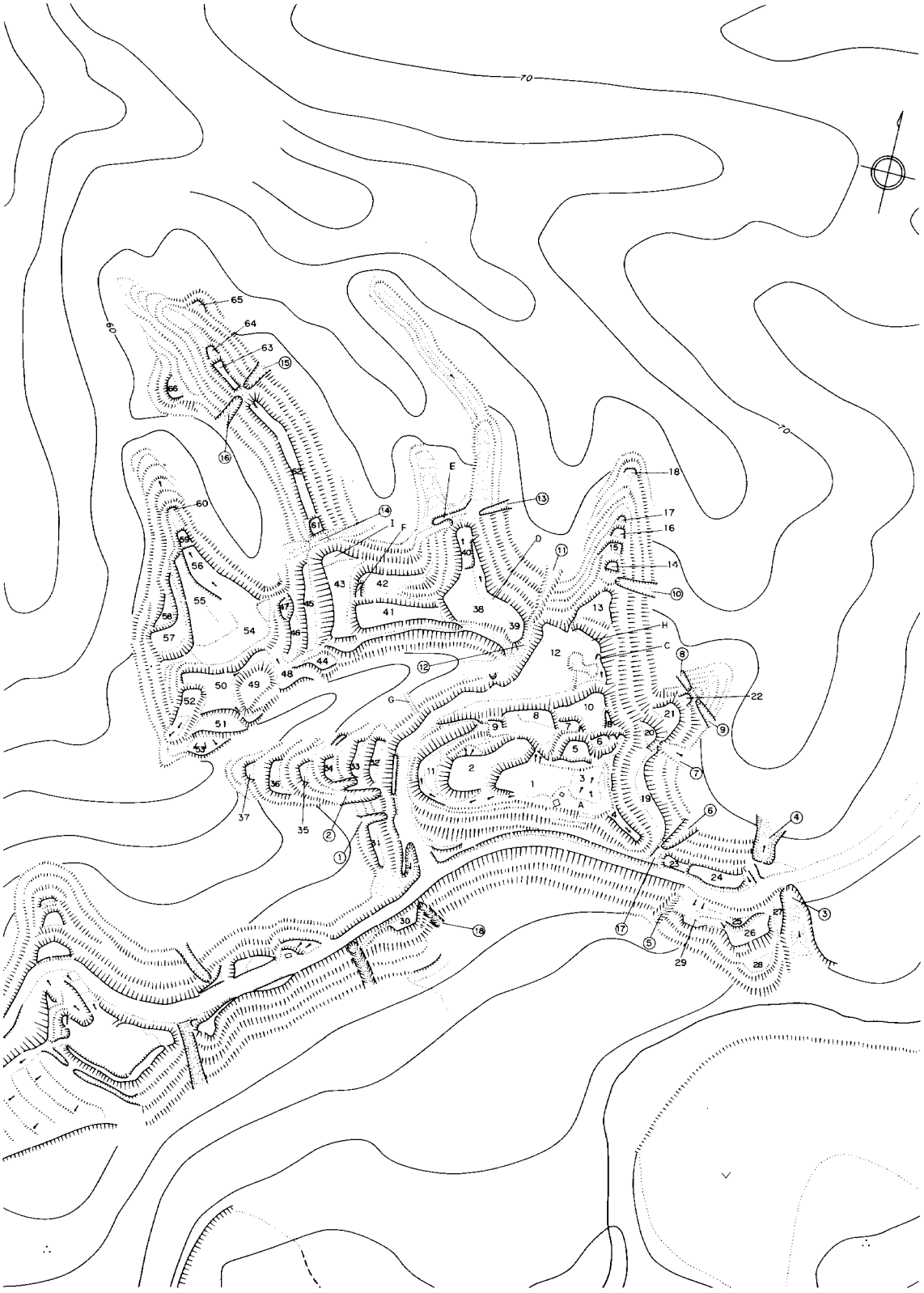
1　横地城周辺航空写真（昭和50年建設省国土地理院撮影）



第2図　横地城跡出土遺物（上段 1～11舶載陶磁器　12山茶碗　13～31国産陶磁器
下段 1渥美産甕　2～3常滑産甕）



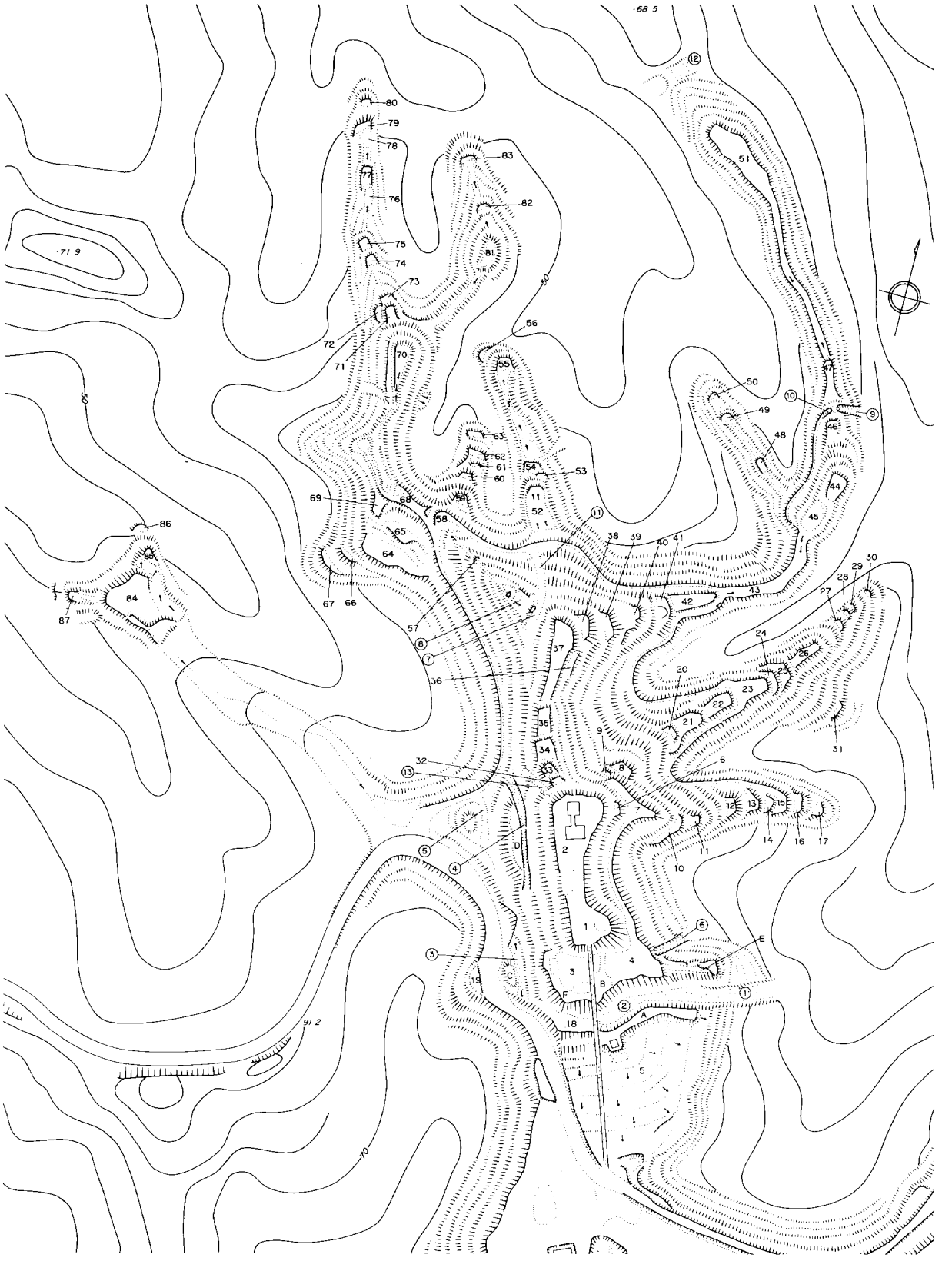
第3図　横地城縄張図（作成　関口宏行）


70
60
70
65
64
63
15
16
60
E
18
13
17
16
14
I
F
D
11
10
H
C
8
12
22
9
G
7
6
4
24
3
27
25
26
29
28
5
17
16
30
18
37
35
2
1

第4図　東の城　縄張図



第5図　中の城　周辺縄張図



第6図　西の城　縄張図

二、小太郎砦（こたろうとりで）

所在地　小笠郡菊川町東横地字小太郎
型　式　山城
規　模　東西約一㎞、南北二〇〇ｍ

小太郎砦址は、横地城の「西の城」より南南西方向に谷地を挟んで、約一㎞の地点にある。即ち東横地の東方に延びた谷地の南側に連なる山陵上に位置する。伊平遺跡背後の山上一帯に遺構群が存在し、最高地点は、標高一〇八・九ｍである。山容は、細尾根により連続しており、多くの浸食谷が複雑に入り込み、深いＶ字形を形成している。

砦の縄張は、横地城の西の城や東の城のように、一つのピークを中心として前後や一方向に階段式に尾根上を削平して、小曲輪を構え、堀切を設けるなど山城に共通する連郭式縄張ではない。複数の連続する尾根から成る複合的な形態を持つ特殊な縄張である。

連続している細尾根上を部分的に加工をしてはいるものの、ピーク上は自然地形のまま残している。尾根のやや下方に、土塁を伴う腰曲輪を単独に設けたり、ピーク下方に段状の不規則で複数の削平地を構えるなど、総体的な防御法は、通常の山城形態とは異なる。本城の築城と違い、小太郎砦南遺構との関連を考えると、防塁としての性格が深く、加工度は最小限度に抑えて、自然地形を生かした要害性に依存している傾向にある。

砦の主曲輪は、最高地点の箇所である。北から西に向けて、四本の支尾根が派生し、このうち三本に加工が確認された。主曲輪は、三六〇度の展望が可能であり、本城・支城・各物見台との連絡も容易である。地表面はほぼ水平面であり、外周に土塁は認められない。形状は、四隅突起型の平面形状となって、長さ約三四ｍ、幅二〇ｍである。尾根に接続する二方向を除き、四周は切岸によって防御されているため、下方からは、岐立した櫓台の形状に見える。

主曲輪の西方下に二段余の削平地が付属しており、不整形な形状ではあるが、小尾掛けが可能な面積を有している。第七地点曲輪の上方尾根は、北へ延びて谷へ降下するが、ここに三段の小削平地がある。又第九地点の急斜面に形成された小削平地は、明らかに谷底を意識した防御である。

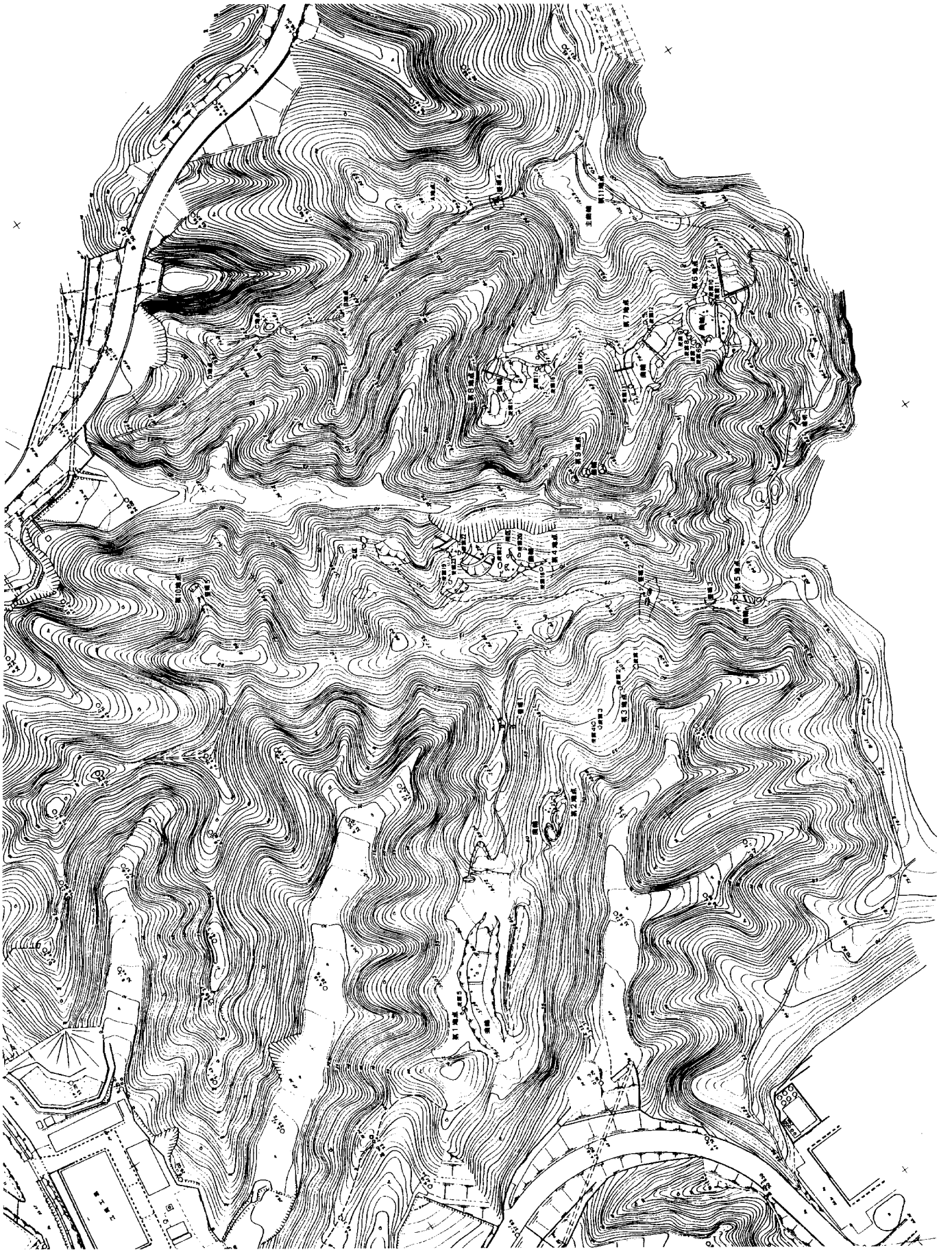
第五曲輪（標高九〇・一ｍ）は、第四地点曲輪を通過し、主体部に至る中間地点にある。虎口の手前に竪堀を設け、通路幅を減少させると同時に第五曲輪への防御を容易にし、通路を直角に曲げ、回り込むように意図的に通路を設けている。しかも西側外縁部に低土塁を巡らし、左側は下り土塁状の施設を設けて、通路はその間を通し上り勾配となっている。尾根上のピークを防御地点と設定した第五曲輪では、地形上の位置を活用して、その優れた防御工法を見ることができる。第五曲輪より、北西方向へ孤状に尾根が延びており、この方面にも細尾根を二条の堀切（標高八六ｍ）が設けられている。深さ、上幅も小規模である。

第二地点曲輪は、尾根上より西側斜面下に設けられた小規模な曲輪であり、保存度のよい土塁を伴う腰曲輪である。しかし曲輪内の面積に対し、基底幅が多く、高さも一ｍ余で、機能的には、南寄りの斜面にある曲輪と連動させることにより、斜面の強化を図ったものだろう。

第一地点曲輪は、尾根の中央部を軸方向に深く削平し、通路状としたようだが、底部の中央部付近に、複数の柱穴が認められる他は、建造物らしき跡はない。性格の位置づけは未だ不明である。

小太郎砦の性格は、横地城の南方部を押え、物資の輸送路である尾根道を確保する目的で築造されたものと推定され、城下集落の防御を兼ねていたと考えられる。

城郭遺構の分布や位置については、北側に延びた尾根上に展開しているが、砦の南側に連続する尾根上の遺構（土橋、竪堀、小曲輪）でも総合的に検討するならば、横地城の防御ライン（外郭）と認めてよいであろう。



第7図　小太郎砦平面図

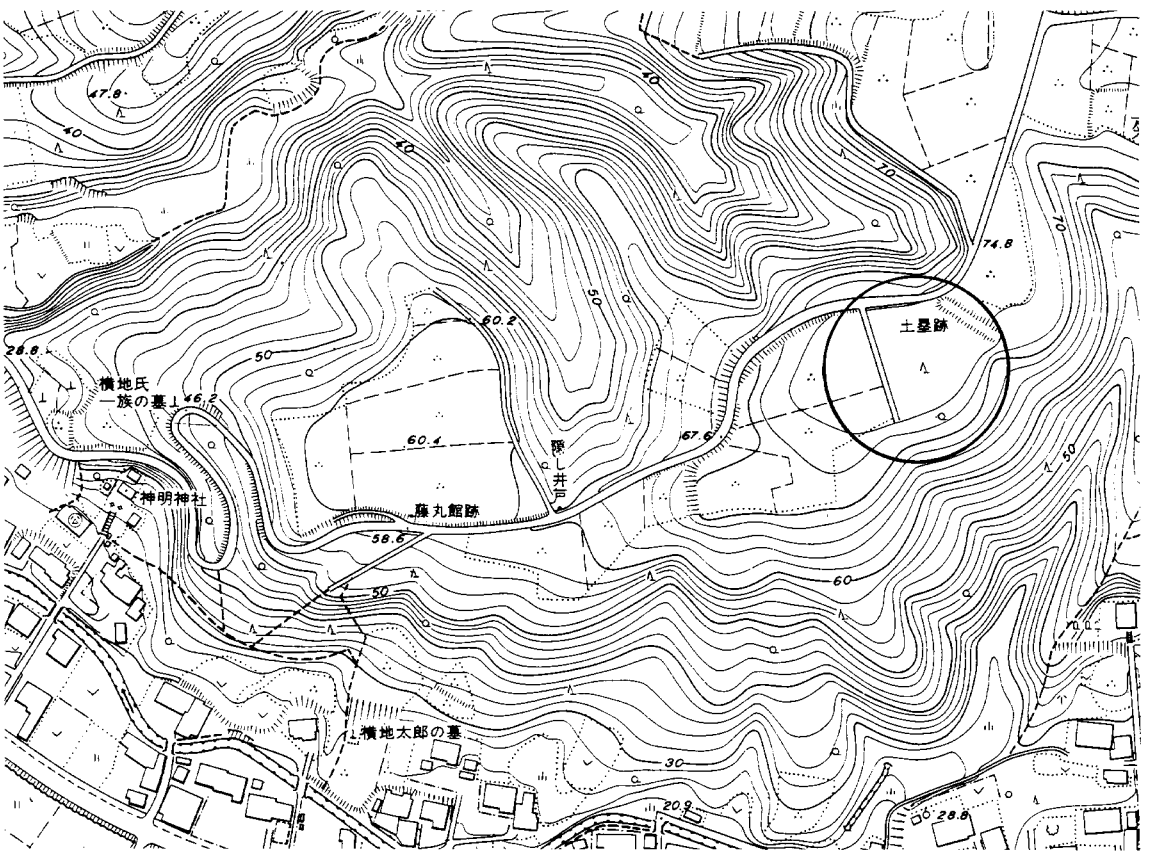
三、武衛原館（ぶえばらやかた）

所在地　小笠郡菊川町東横地字殿ヶ谷
型　式　（居館）

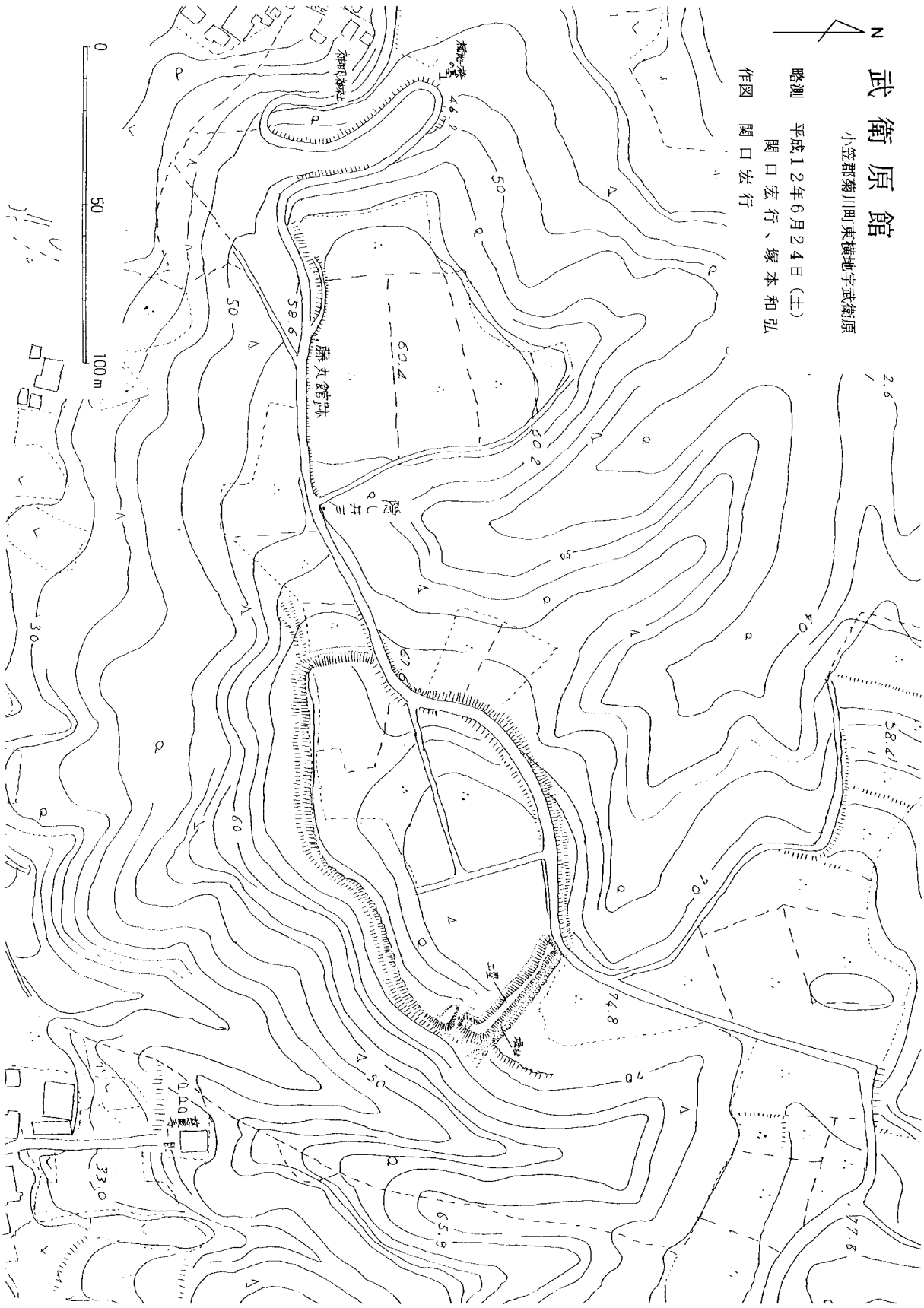
横地城跡のある台地状地形は、その西側に数ヶ所の遺跡が存在する。西端から横地氏の菩提寺とされる三光寺跡、山上に出て北側に藤丸館址、その先には、室町期に横地氏が室町幕府管領の斯波氏を歓待した屋敷との伝承を有する武衛原館址がある。これを通過すると、尾根道は更に細くなり、一騎駆と伝える箇所を通り、横地城西の城の下に達する。

現在、『武衛原』と称する場所は、茶畑と雑木林となっており、東側に土塁が尾根を遮断するように一条残る。この土塁の外方には、堀切が設けられているが、土塁の上面幅は二m余であり基底幅は七～八m余りの規模である。堀切が横地城側に対して設けられていることは、どのような目的や性格をもつのか検討を要する。又土塁が、四周を巡っていたのか、あるいは、東方・西方の両面のみか、開墾によって撤去されたのか不明である。土塁の平面形状は、直線でなく、東側にてわずかな曲線を描く。土塁の南端部に開口部（幅三m余）が存在するものの、本来のものかどうか今後の研究課題である。土塁の内部は、地表面に段差や、斜面の箇所が認められ、南下方との連絡路とも解釈できる地形を残存させている。

武衛原館址の一帯は、茶畑等で平坦面を成すものの、形状は地形に沿うものであり、方形でなく北側に突出している部分もあり、一定ではなく、西端では、三m余の段差を有すので、館址と判断するには、発掘による遺物や遺構も検出されていないため断定はできないものの、何らかの施設が内部に建造されたであろう。但し、横地城との関連や構築の年代観等は、これからの研究課題となろう。武衛原館の西下方にある藤丸館は、昭和六十二年に部分発掘がされた。その結果、遺物として、かわらけや土師器、染付皿の細片が出土したが、横地城との関連までは判断されなかった。



第8図　武衛原館位置図



第9図　武衛原館縄張図（作成　関口宏行）

四、堀田城（ほったじょう）

所在地　小笠郡菊川町堀田
型　式　山城
規　模　東西二〇〇m、南北一八〇m

堀田城は、ＪＲ菊川駅より西へ約一・二kmの西方地区堀田に位置する。標高七十二mの山上に構えられた中世の山城であり、小規模な山城だが、堀切を多用している城として縄張の特異性を有している。

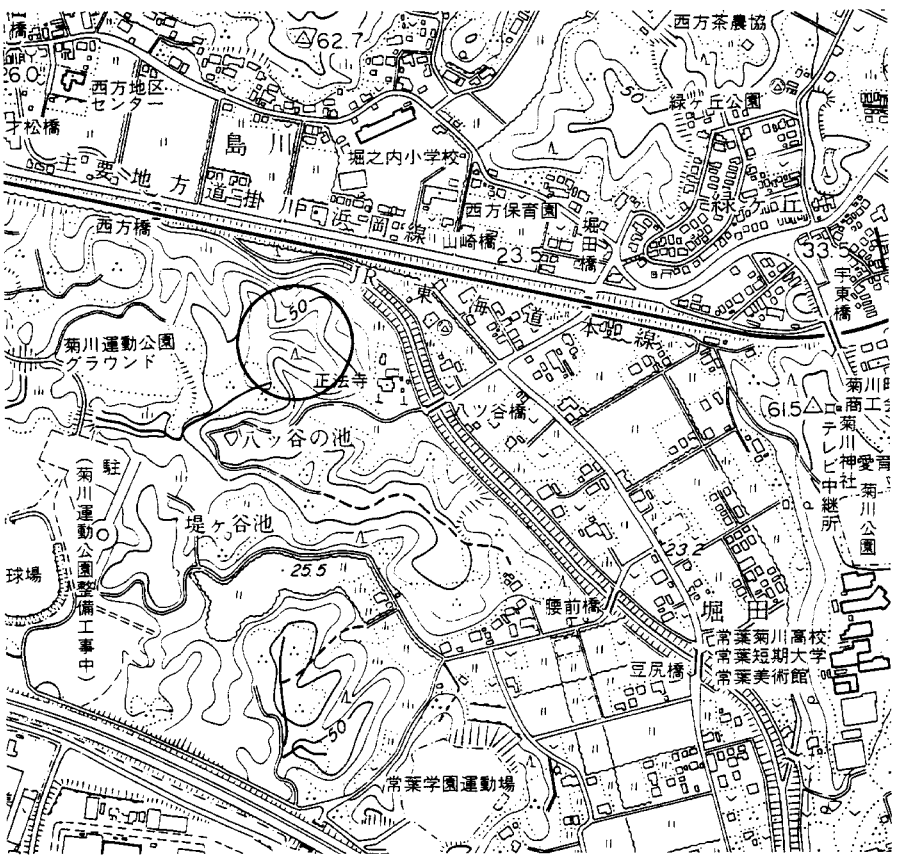
創築年代については、確実な史料が認められないため城主名や城史等については不明である。地元に『堀田の城山』として、戦国期の土豪である松下嘉兵衛の城とする伝承がある。しかし、根拠を示す資料はなく、松下氏は今川氏の被官人として頭陀寺城主であるため、可能性はない。

堀田城は、西方掛川方面からの山波が谷間に突出し、その一角の尾根上を削平して、中小の曲輪群と多くの堀切、小規模な竪堀から構成された室町・戦国期の複合式の山城である。

主軸尾根は、東側の「くの字」形の尾根で、その中心部の最高地所に位置する曲輪1と2が本曲輪であり、西側の大堀切を隔てて位置する長さ約三〇m、幅七～一〇mの曲輪が二の曲輪と考えられる。

本曲輪は、全長約二六m、幅九～一三mの不整形な曲輪で、西側に向けて突出部があり、堀切に面している。曲輪の中間地点よりやや南側に東側から堀切（幅四m、長さ九m余、深さ〇・八m余）が構築されており、西端を掘り残して土橋としている。掘込式虎口の箇所は、はっきりしないが、区画2の西隅下方に幅一m、長さ三mのテラス状の小段が付属しており、ここが虎口の可能性が強い。

曲輪6は、後世の改変をやや受けているものの、長さ約一四m、幅一二mの不整形な出曲輪的存在である。南方部から谷間に入る敵の動きを監視したり、東方一体の物見が可能である。この曲輪6の南側下方に突出する大型の曲輪7は、山裾に迫った敵を上部から攻撃できる有効な場所に構えられた曲輪だが、その構造については、近世以降、墓地の造成を受けたため地形の改変があり、旧状は不明である。この曲輪は、山腹の付け根に一条の堀切を設けていたことが、発掘調査によって判明している。曲輪7が、曲輪として構築された時期は、山上の諸曲輪の規模・形状・配置等から推定して戦国期の改修と考えられる。



第10図　堀田城位置図

曲輪11は、台形状の水平面をもち、西・北・東の三方に向かって一八〇度以上の範囲を展望できる位置にある。この曲輪は先端部にあって、小屋掛けをするに充分な面積を持ち、しかも曲輪1と同規模の面積を有することから本曲輪と比較し、構築の時期差を示すものと考える。この曲輪は、河川改修工事に伴う工事で発掘調査が実施され、柱穴八基が検出され、遺物として擂鉢（十五世紀～十六世紀前期）とかわらけが出土した。

この曲輪から北方へ延びる尾根は、全長約六五m余で、三〇m前方で九〇度屈折し、尾根の軸方向が北へ突出している。曲輪4に接して、堀切（幅約八m、深さ五m余）を設け、更に小規模な堀切を設けるなど二重堀切の構造である。

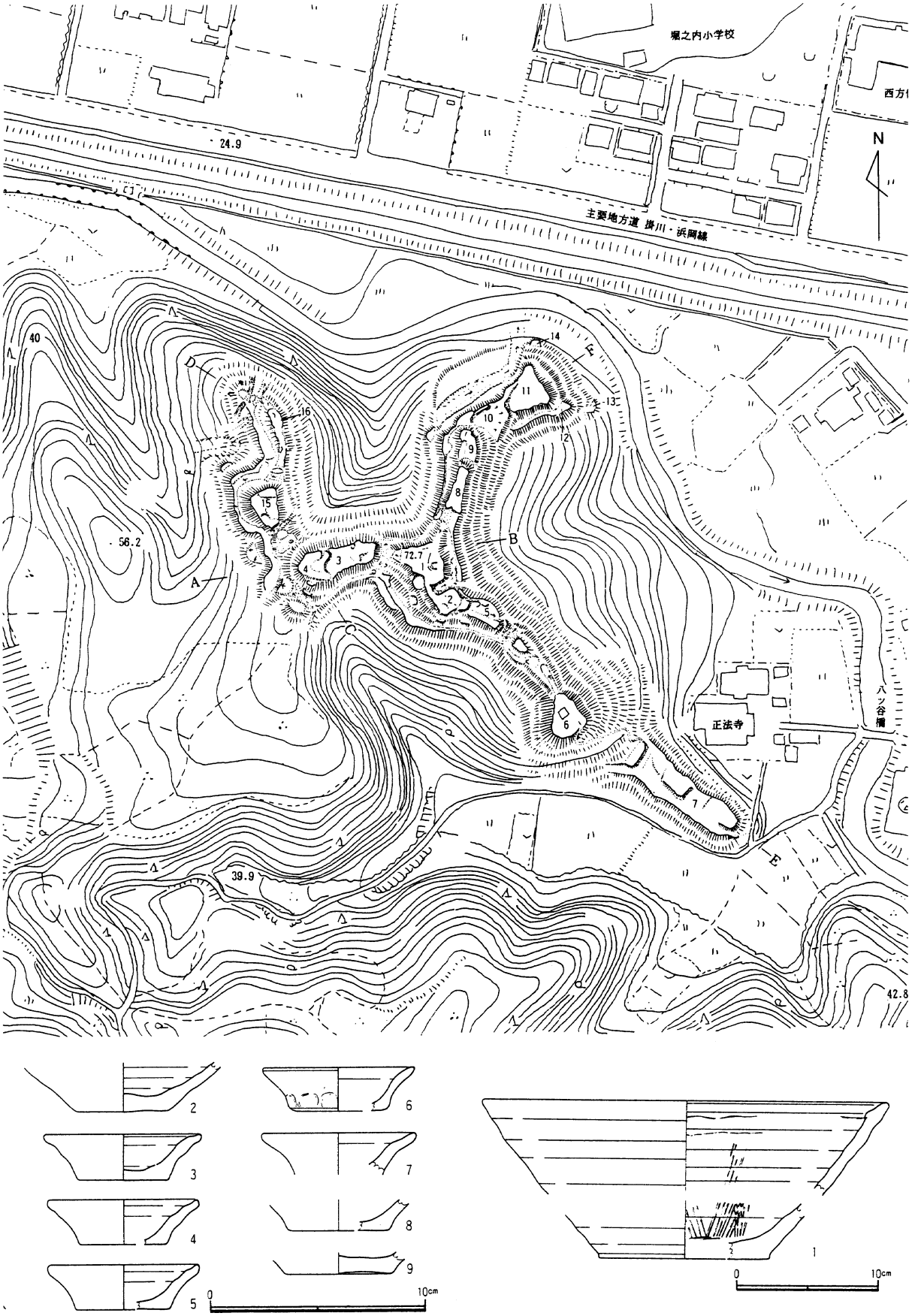
曲輪4の西下方に帯曲輪状の犬走りの存在が認められて右に折れ低土塁と斜面下の間を通り、幅を拡大させる部分を持ちながら更に北進する。単なる室町期の山城であれば、連郭式縄張で尾根を遮断する堀切を構築する築城方式が一般的であるが、堀田城の場合は、細部にわたり複雑な築城様式が認められる。この城の虎口や虎口空間の構え方は、未発達の段階を示す城郭である。

創築は、室町中期頃の横地城の支城として機能したものであろうが、戦国期には、陣城として改修されたと考える。永禄十一年（一五六八）の掛川城攻めの陣城、又は、天正三年（一五七五）徳川軍による諏訪原城攻めの陣城等、この地城の軍事的緊張時に活用したことが考えられる。

参考文献　堀田城跡（第2次調査）一九九七　菊川町教育委員会



2　堀田城跡遠景（空中写真）



第11図　堀田城縄張図（作成　関口宏行）と出土遺物（1擂鉢　2～9かわらけ）

五、富田城（別称長行山城）

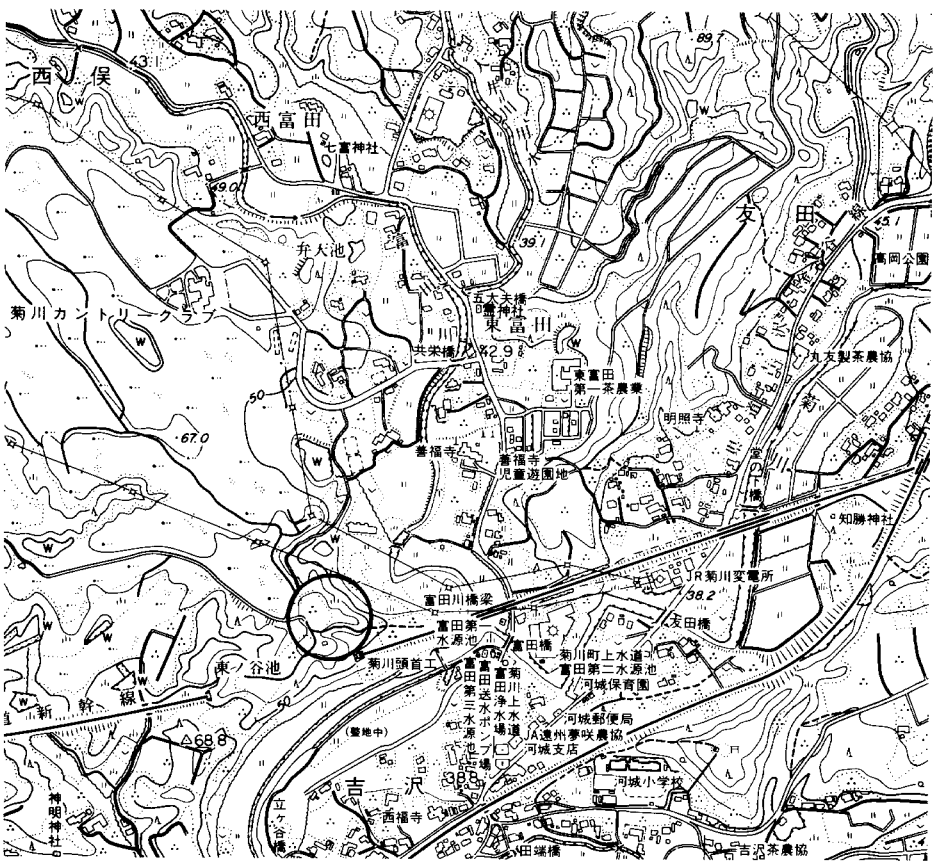
所在地　小笠郡菊川町富田段前、長行平、東ノ谷
型　式　山城
規　模　東西約二〇〇m、南北約三七〇m

城跡は、菊川町富田地区のほぼ南端で、北東の山間部より流れる菊川と北方の谷間から流れ出る富田川の合流点の山上に位置する。城は、この山の南北に長い尾根と東西に連なるT字形の尾根を階段式に削平して、大小の曲輪を配置したほぼ連郭式山城である。

城の存立期の全体構造は、ゴルフ場造成のため消滅した地域もあって明確ではないが、ほぼ二つの曲輪群（北曲輪群・南曲輪群）から構成され、尾根が連続する場合は、複数の堀切を構え防御していたと考えられる。北曲輪群には、現在曲輪13が一ヶ所のみ現存するにすぎない。北に向けて突出するように尾根の先端に構築されたもので、全長約三五m、幅平均一三mの小規模な曲輪である。

縄張調査では、南曲輪群の方が、富田城の主体部を構成しており、図1～4とそれに伴う小規模な削平地が本曲輪と推定される。本曲輪からは、四方に尾根が派生するため、いずれも堀切をもって遮断し、防御を強化していることが特徴である。本曲輪は、かつて三方を高土塁が巡っていたと伝えられているが、後世削平を受け、現在は痕跡を残すだけである。本曲輪から南方に続く尾根の茎部に略方形の小郭4を付属させている。南端には、軸方向と直角に長さ六m、高さ〇・六mの小土塁を設け、尾根よりの侵入をこの土塁によって阻止したと考える。

さて本曲輪の虎口の位置であるが、曲輪の南側の外縁部を一部内側に凹ませている箇所がその推定地である。虎口の外方前面に略台形状の削平地7が設けられており、虎口防御の小段7である。この小段7とほぼ近接して、斜面上に土塁（長さ三m余）が一ヶ所直線的に残存している。小段とこの土塁で、虎口の前面を守る二重防御である。下方より延びてきた大手道はこの土塁とテラス状の小段7を通過して本曲輪の虎口に達したと推定される。従ってこの虎口の外方の斜面は、すべて切岸としてあり、本曲輪防御の手法として室町期の築城法を示している。



第12図　富田城位置図

本曲輪のうち曲輪2は、長さ約三一m、奥行一三m余で、曲輪1より約一・八m下方に位置し、東西の西端部を残して土塁とし、北側を開口している。曲輪内は平坦でなく、北西へ向けて傾斜している。

曲輪3は、略台形の曲輪で、西側に土塁状の高まりを残すにすぎないが曲輪内は水平に近い。東側の北端部分から細尾根が北に延びているが、ここに小規模な二条の堀切を入れている。

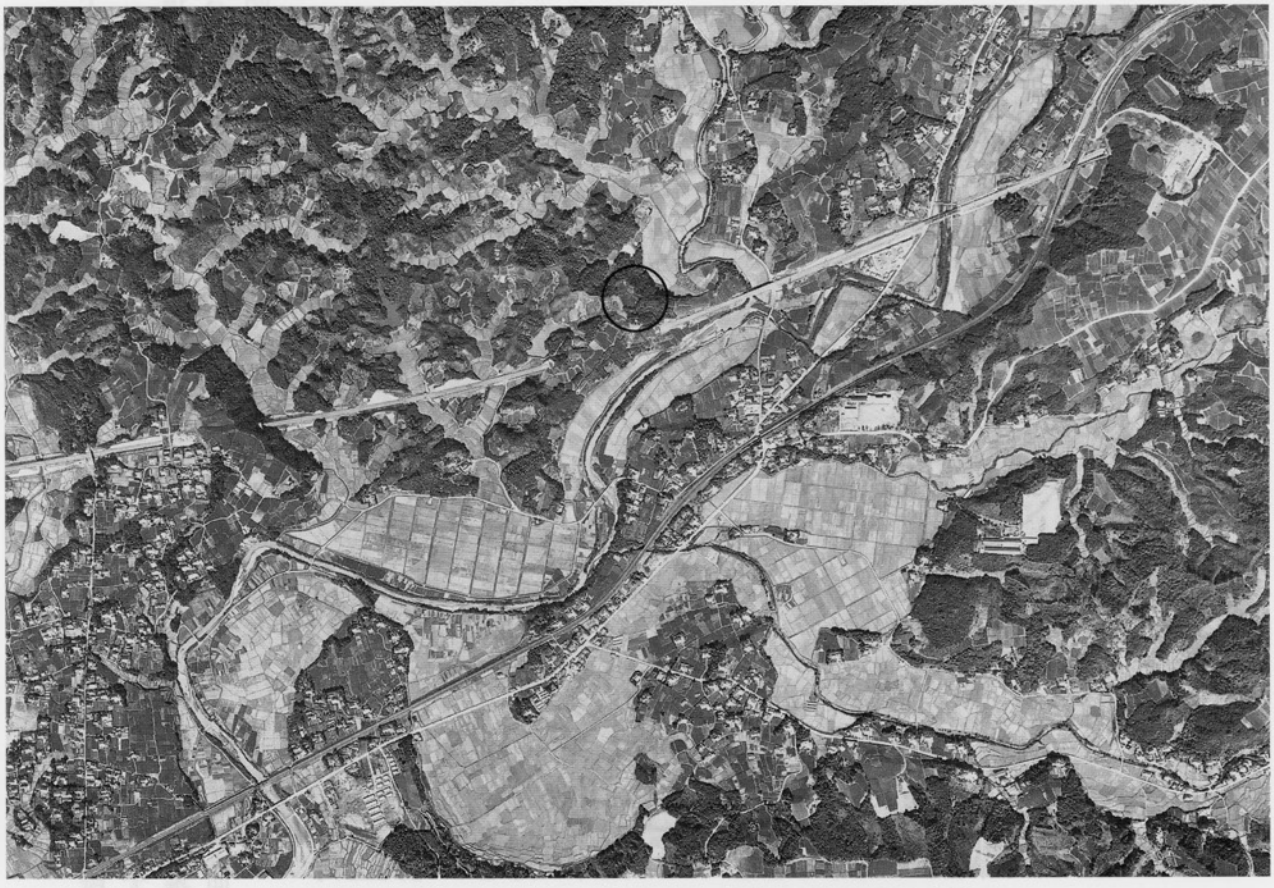
本曲輪と二の曲輪（9～11）間は、段差をつけた大堀切によって遮断されている。堀より本曲輪上まで約四mの高さをなし、幅五～一〇m余である。現在曲輪2と3には明瞭な虎口遺構は確認されていない。

二の曲輪は、不整形な形状であり、神社のある高段以外、目立った遺構は認められない。神社の南側の下方に、三角状の斜面地（11）が存在するが、曲輪であり東縁部に小規模な土塁を設けている。この曲輪は、南西方向に延びていると考えられるが、後世の開墾や農道の造成等により、旧形状や城郭遺構は不明である。

富田城は、全体の縄張と現存する遺構から考えると、曲輪の規模や形状・配置、土塁や堀切の規模、方向等からいずれも素朴で、小規模であることから、戦国期よりも室町期の形態と推定される中世城郭である。

富田城の東側で富田川の東岸台地での発掘調査で、中世の掘立柱建物跡群が検出されている。遺物の年代は、出土遺物によって、十四～十五世紀と推定された。また台地の北側に善福寺があり、敷地内に土塁が築かれ、方形に巡っている。周辺に「殿前」の地名が残ることから、総合的にみて、善福寺遺跡は、中世居館であり、富田城がその詰城である可能性が高い。

参考文献　善福寺遺跡　一九九四　菊川町教育委員会



3.富田城周辺航空写真（昭和50年建設省国土地理院撮影）



第13図　富田城縄張図（作成　関口宏行）

六、火剣山砦（ひつるぎさんとりで）

所在地　小笠郡菊川町富田字叶薬師
型　式　山城
規　模　東西三二〇m、南北二五〇m

砦址は、菊川町の北端部で標高二八二・六mの火剣山に位置する。三角錐状をなす急斜面の多い山容である。

城郭遺構は、最高地所の山頂部と南北に連続する細尾根上を活用して曲輪を構築したものである。最高地点の山頂部は、現在日剣神社があるが、これが本曲輪（1）と考えられ、一二m四方余の方形であり、西・北・東の三方に低土塁（高さ一・一m、幅一～一・五m）が巡るものの、東西の土塁は、南端まで存在せず、中間地点までしか残存していない。日剣神社の造営で土塁の基部が削土されており、基底幅は、二・五m余と考えられる。土塁の長さは、北側で約一二m、東西で各約五m余を推定できる。西側土塁の端より、西側尾根に下る小径が付けられている。本曲輪より北側へ一〇m余下った位置に、台形状（幅六m余、奥行三m）の削平地があり、小曲輪（2）として構築されたものである。この小曲輪の外方に、堀切と推定される箇所があるものの、崩壊した岩石で埋没しており、形状や規模は明確でない。

堀切の対岸は、狭長の空間地となって自然地形に近いが、堀切側の東隅は、削平の痕跡が残り、外方は切岸としてある。この狭少の空間地（3）は長さ約一三mで、幅は堀切側で五mを有し、西側でやや膨み上段の小曲輪側へ回り込んでいる。この北方は、幅約三mの細尾根（4）が約二五m余延びて北端では、やや丸味を帯びた形状をしている。この細尾根に約三mの段差をつけ、しかも尾根の主軸方向をずらして小段（5）を構築している。台形状で、先端部は、一・八m、基部幅約四・五m、奥行五m余となり、完全な削平地である。この削平地の北方の尾根上には、自然地形で緩斜面をもつ長さ約三〇m余の空間地（標高二五八・四mの地点）がある。人工の跡は全くみとめられないが、砦の存立期には、活用された可能性もある。この緩斜面から尾根上を東へ下ると二段の平場がある。手前の平場は、削平地であり、三角状をなし、先端部の右脇に土盛り状の部分が確認できる。地元では、この削平地を「月の輪」と称しており、旧薬師堂の跡としている。現在礎石等は埋没しているのか認められない。なおこの削平地の背後に、長方形の平場が造成されているが小祠の跡であろう。

「月の輪」からは、東方一帯を展望できる最適の場所であり、火剣山東麓を通る古道の監視所として機能したことも考えられる。「月の輪」の下段にある平場は、不整形だが、何らかの施設（軍事・信仰等）があった可能性を考えても良いだろう。

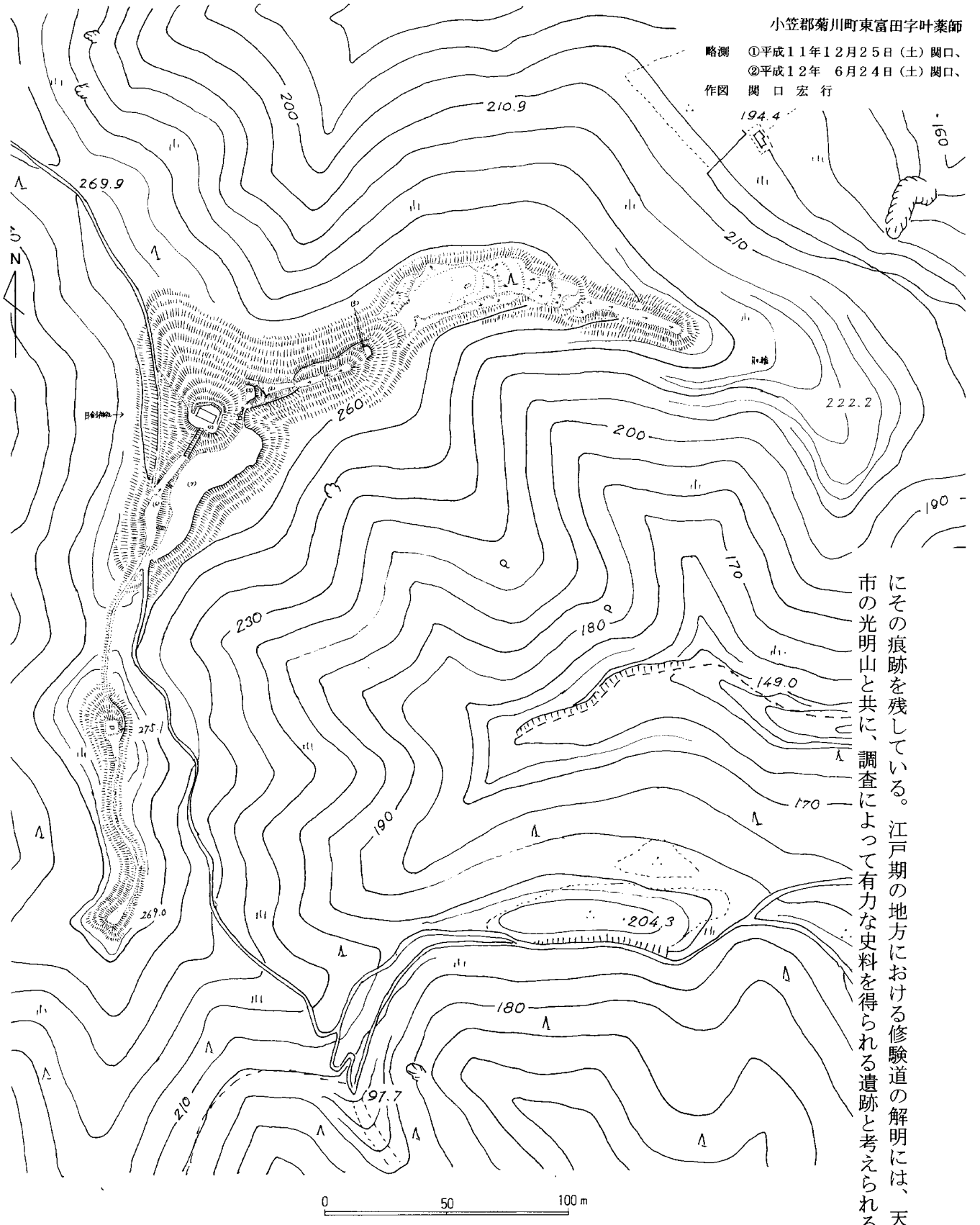
本曲輪から石段を下ると前方部は尾根上であり、幅約五m、長さ四〇m余の平場（6）がある。土塁や堀切などは設置されていないが、曲輪として活用できる面積を有する。平場（6）の東下方は、かつての真言宗光竜寺境内地（7）である。境内地の形状や面積が、砦の時期のまま継承されたものでなく、東の斜面地を観察すると、後世拡張された跡が明確である。しかし、砦の守備兵が小屋掛けをするには、西側の尾根が遮断物となって可能である。しかし、井戸跡が発見されていないため、水の確保は山水か湧水に依存したのか不明である。平場（7）の北隅からは、小径を伝わり、平場（4）に連絡することができる。境内地から南の尾根上を歩くと、二つの峯に達する。細尾根上の峯で、極めて狭い面積であり、北の標高二七五・一mの箇所は現在鉄塔が建っている。造成で旧地形が消失したため、城郭遺構としての形状は、明確でない。このことは、南側標高二六九mの地点も同様である。曲輪というより、山下からの侵入を監視する物見台を設置したものと推定される。

火剣山は、江戸時代に修験道の道場として使用されたため、山内の諸所

火剣山砦

小笠郡菊川町東富田字叶薬師

略測　①平成11年12月25日（土）関口、
②平成12年　6月24日（土）関口、
作図　関口宏行



第14図　火剣山砦縄張図（作成　関口宏行）

にその痕跡を残している。江戸期の地方における修験道の解明には、天竜市の光明山と共に、調査によって有力な史料を得られる遺跡と考えられる。

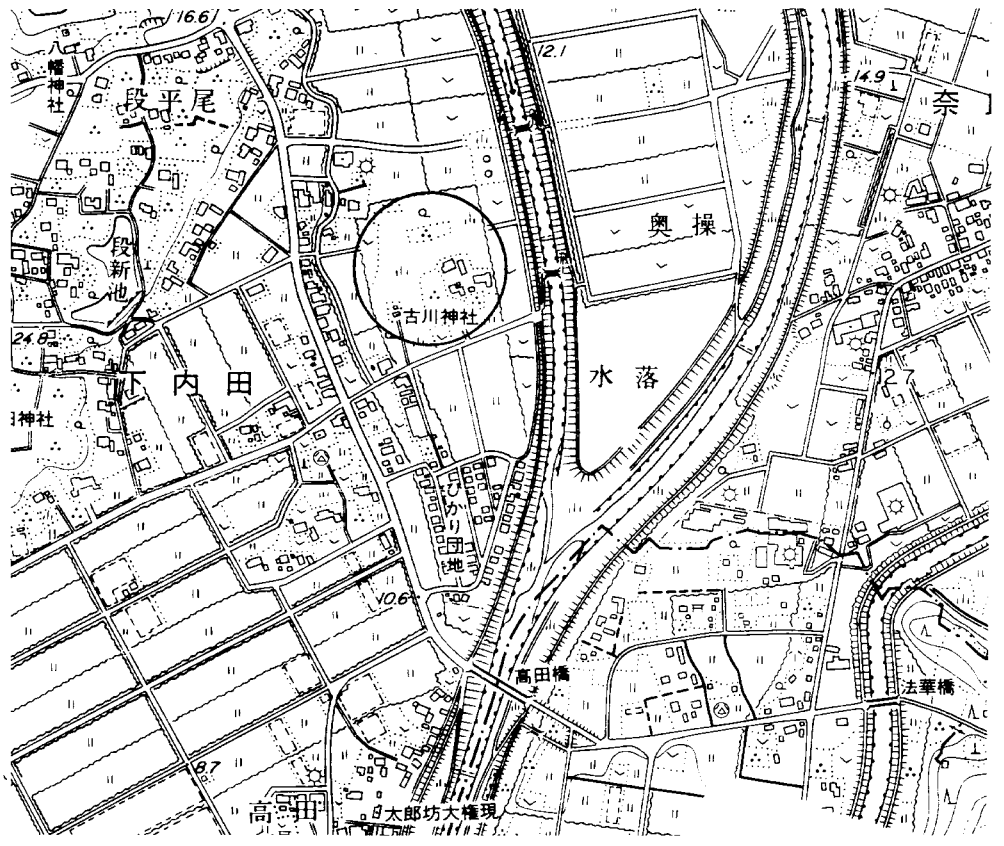
七、高田大屋敷遺跡

所在地　小笠郡菊川町下内田水落
型　式　中世居館
規　模　東西七〇m、南北九三m

遺跡は、鎌倉期の方形館址である。遺跡の位置は、東名菊川インターの南側、約三kmの地点にある。この遺跡は、上小笠川と菊川とによって形成された自然堤防上に立地し、二つの川の合流点から上流約四〇〇mの西岸に位置している。

北から東にかけては、上小笠川の蛇行した流路の名残りが現在も認められる。館の型式は、平地式の方形居館であり、発掘調査により南北九三m、東西七〇mの長方形であることが判明した。現在、土塁の開口部は、西・東・南の三ヶ所あるが、西と東は後世の所作であり、本来は南側東寄りに虎口を推定できる。現在、東側と西側からの土塁線が、喰い違いをみせているが、館の存立期のままか否か不明である。館地は、現在も四周に土塁を明確に残しており、基底幅六mで、高さ一mの規模である。鎌倉期の現存土塁として比較的保存度は良いものの、本来は二m以上の高さを有したと推定され、上面は後世の削平により高さを減じている。土塁は、粘土で固めながら版築法で仕上げている。

土塁の北側から、北北西に一本の土塁が孤状を描くように構築されている。この土塁は、高さ一～一・五m、幅五m余あり、掘り上げた土を盛土したものでなく、一層ずつ突き固めた版築の方法で造成されていた。孤状の土塁は、川の洪水から館を守り、館の南側一帯に作られた耕地を守る堤防の役目を果たしていたものと考えられる。屋敷地は、約六五〇〇m^2余の面積があり、地籍図によれば、西側と古川神社の間に帯状の土地を認めることができるため、湿地となっているが、発掘によって、土塁の西側から南側にかけて、幅一〇m以上の人工的な堀が巡っていた。平成五年度の発掘調査により、南側の土塁は、外方に空堀と堤状遺構が確認された。空堀は、幅三mで、V字形に掘られており（薬研堀）、堤状遺構は、平坦面が二m幅もあり、堅固な工法がとられていた。従って、現在南側土塁の外方



第15図　高田大屋敷遺跡位置図

に、防御遺構を認めることはできないが、館の南側は、土塁と堤状遺構と二重の空堀によって防御していたことが判明した。よって館の虎口は、南側に構築したとみなしてよいだろう。

この遺跡は、地元で「高田の大屋敷」と呼称されてきたが、遺跡の年代や性格に結びつく伝承もなく、江戸期の地誌にも記述は認められない。

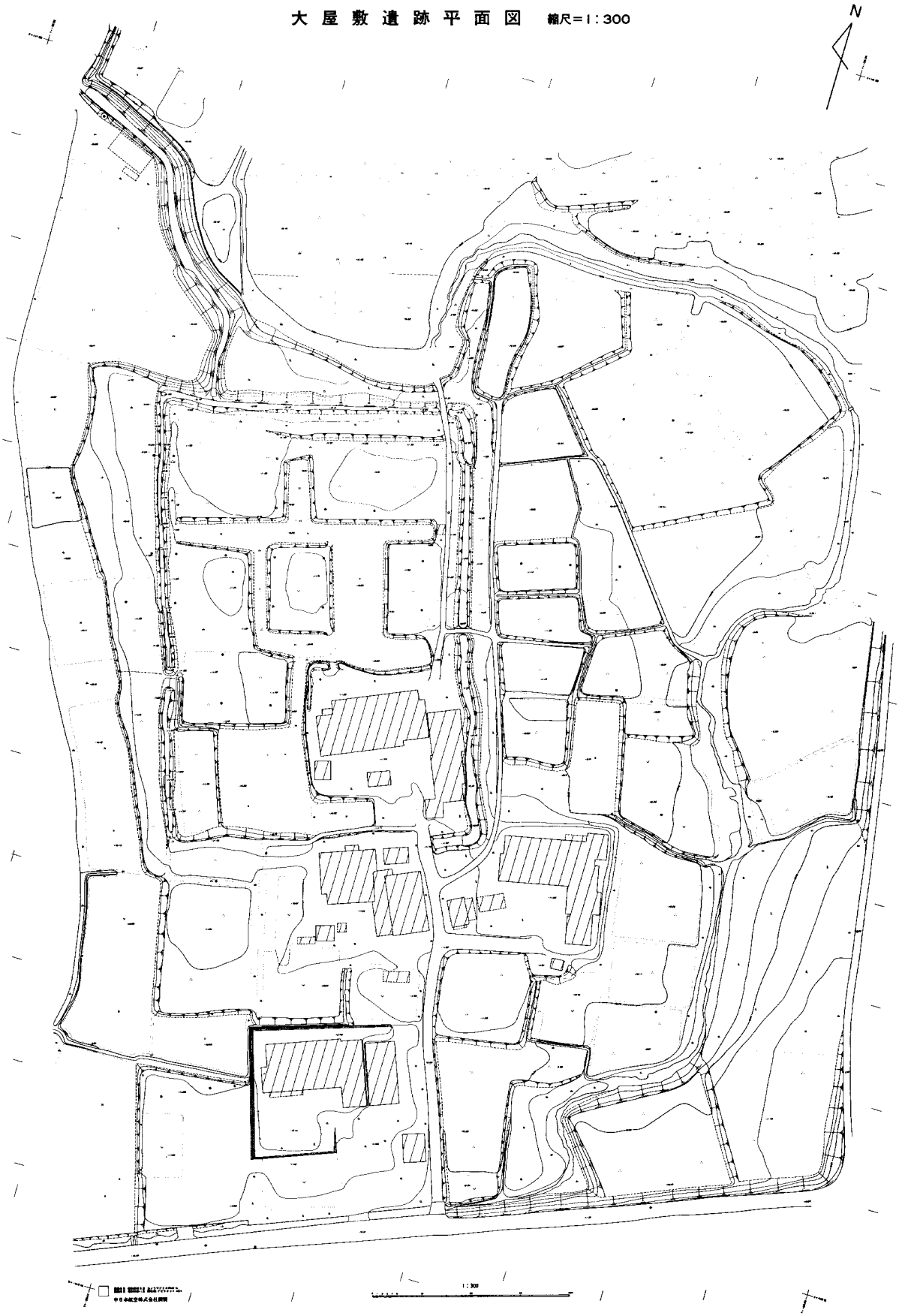
最近、中世文書である『内田家文書』の所在が確認された。文献資料として詳細に調査した結果と発掘調査による知見等を総合的に分析して、高田大屋敷跡は、立地・規模等から、鎌倉期の地頭内田氏の居館である可能性が高いと判断された。

鎌倉時代の内田の地には「内田荘」という園城寺領の荘園が存在していた。嘉禎二年（一二三六）の「北条時房安堵状写」によると、内田致茂が嫡子致員に内田荘下郷の地頭職を譲ることを北条時房が安堵していることが分かる。文献によれば「六月　日ノ譲状」で内田庄下郷地頭職と名田畠は「代々相伝之所職」との文書がある。二男・三男への譲渡が可能だったことから、所領は、分割されながらも、数代にわたり一族間で継承されていったようである。下郷初代の地頭致茂は、承久の乱の戦功により幕府から石見国貞松（島根県浜田市）と豊田（島根県益田市）の地頭職を与えられた。正平十四年（一三五九）五月、長門探題足利直冬は、内田荘下郷地頭職を内田致行に安堵した。これ以降、内田荘下郷は資料上に表れない。従って内田氏は、これ以前に本拠を石見国に移したと考えられる。本拠地移転の理由として、内田荘下郷の一族間の所領争いや、遠江国人領主横地氏との確執を恐れて逃れたとも言うが、資料上からは確認できない。

参考文献　高田大屋敷遺跡　第8次調査報告書（排水路北部）
一九九三　菊川町教育委員会



4　高田大屋敷遺跡遠景（航空写真）



第16図　高田大屋敷遺跡平面図

八、勝間田城（かつまたじょう）

所在地　榛原郡榛原町勝田（桃原・小山段）入山沢
形　式　山城
規　模　東西三〇〇m、南北二五〇m

城跡は、勝田地区内の小山段と称する山地を占め、背後に牧ノ原台地が広がる。位置的には、牧ノ原台地を南東に開析する勝間田川流域の上流部にある。小山段は、牧ノ原台地の一支脈上にあり、開析谷を無数に形成し細尾根の末端は断崖となっている。従って山容は、かなり複雑な地形である。段丘上に、主要な曲輪が配置され、しかも求心的な縄張である。

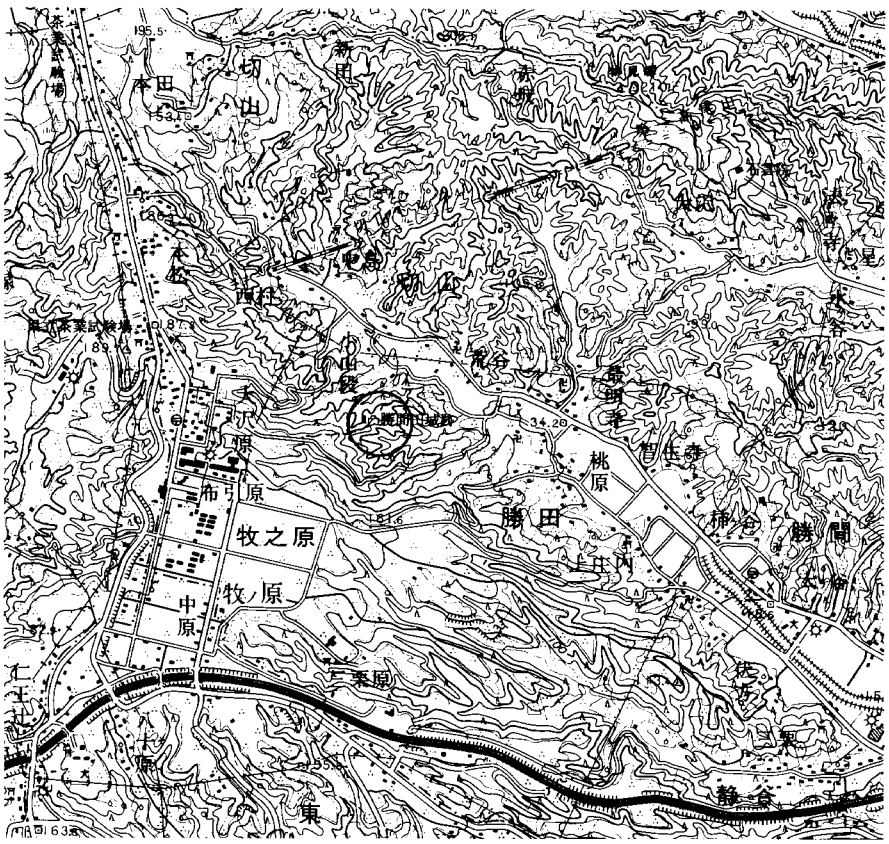
西南から北東にかけて降下する尾根上を階段式に削平して、一直線状に曲輪を配置した連郭式縄張である。西南端が最高北所であり、ここより順次、南曲輪、本曲輪、東尾根曲輪、北尾根曲輪、二の曲輪、三の曲輪、西三の曲輪、北端部に「的場」と称する出曲輪がそれぞれ構築されている。

総体的には、南側（南城）と北側（北城）の二区画より成り、構築年代の時期差が、縄張上から認められる室町期の山城である。

南城の中心に本曲輪が位置し、その前後左右を防御するように四つの曲輪が構えられており、特に、南曲輪の方が高所にあるため、堀切を一条構えたり、東に延長する尾根が弱点とならないよう五本の堀切を設けるなど、谷地形を考慮した築城法が特色となっている。

南城と北城の縄張で特徴的なことは、南城がどの曲輪も狭小であることに比較し、北城は、一区画が広いことである。加えて、曲輪の外縁部に東側の一部を除いて、西側から北側にかけて土塁が設置されていることである。しかも、三の曲輪の土塁線は、数カ所で「折れ」を設けており、一見戦国期の築城法を見る思いがする。三の曲輪の一角には「馬洗場」の通称を残す井戸状遺構がある。

二の曲輪の土塁は、東側を除き北・西・南の三方に設置されている。二の曲輪が、北尾根曲輪と接する箇所で、尾根幅が狭くなり堀切が一条設けられており、両端部は竪堀となって降下している。北尾根曲輪と二の曲輪とは四m余の段差をつけており、本曲輪への防御を一層強化していることが判明する。北尾根曲輪は、略方形をなし、東側から北側へ「L字形」の低土塁を巡らせている。

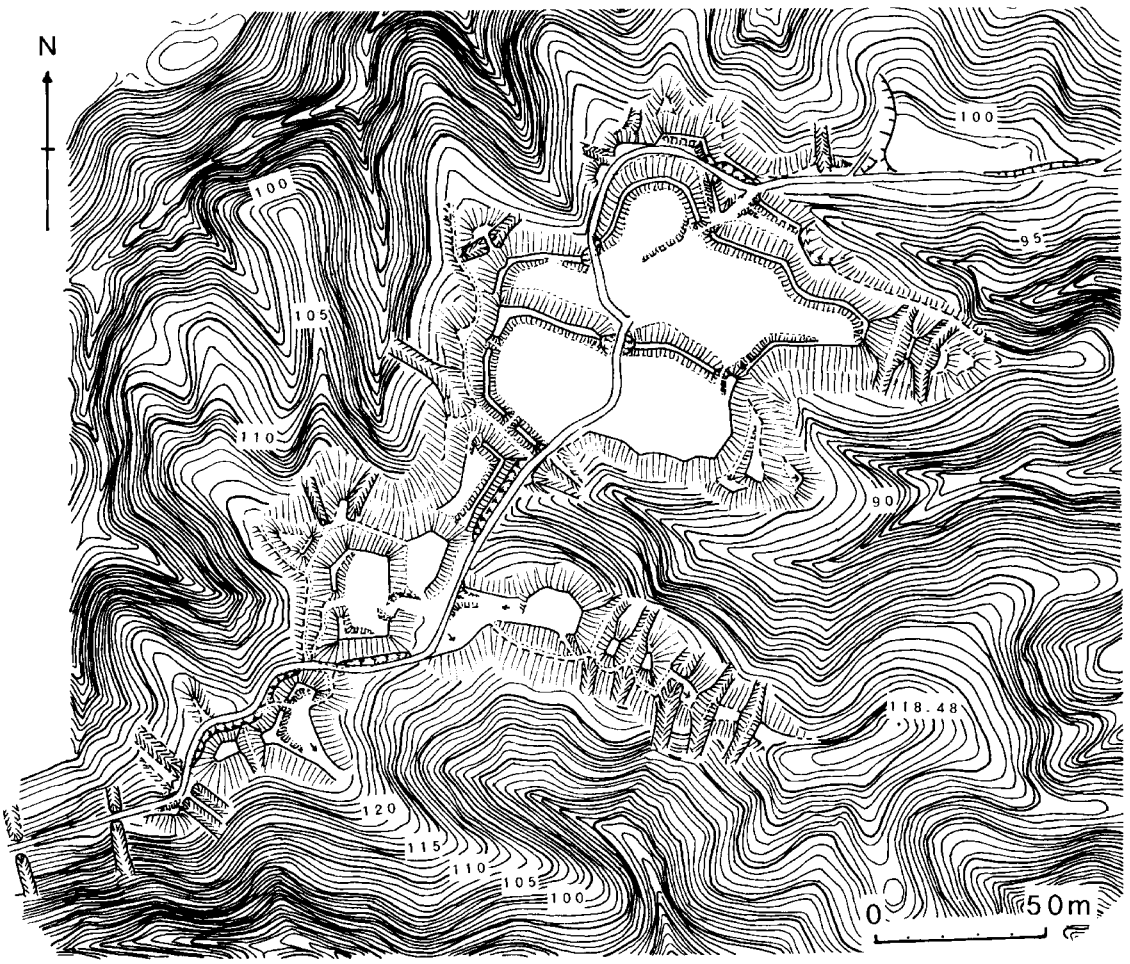


第17図　勝間田城位置図

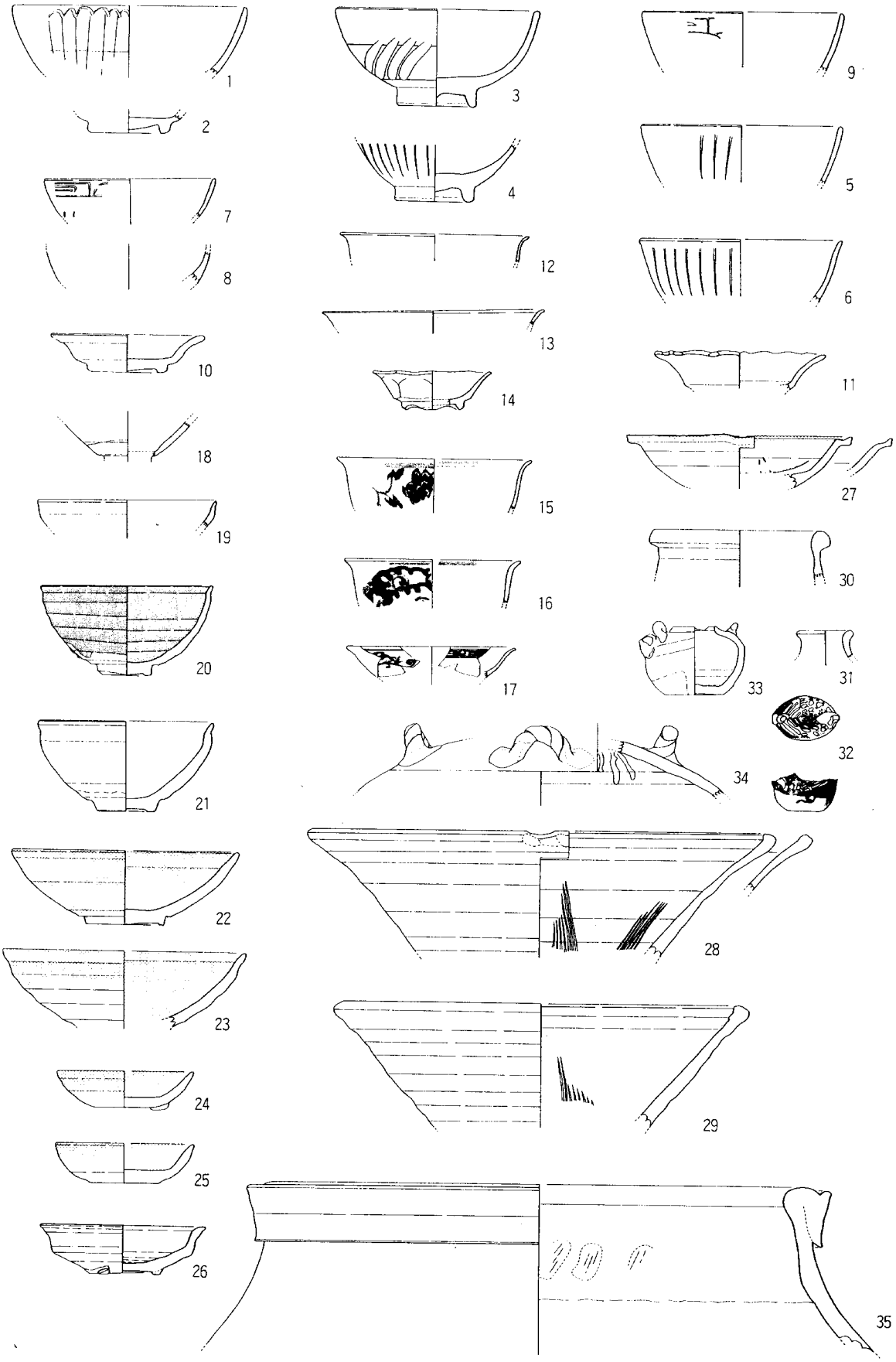
勝間田城は、昭和六十年度から数次にわたる発掘調査が実施された。これによって多くの遺構や遺物が検出され、築城年代、建物遺構、城内の生活の実態が少しずつ解明されてきた。「馬洗場」の発掘では、楕円形の形状で深さ二・五m、長径九・八m、短径六mの規模をもつ井戸状遺構が検出された。底より土師質土器、陶磁器（多くは瀬戸・美濃産天目茶碗・縁釉小皿・擂鉢・瓶子）、建築材、木製品（桶・箱・箸・自在カギ・曲物・漆椀）・木簡・竹類・ぞうりなど生活用品を含む豊富な出土品があった。木簡は、全部で五点が出土している。その内容は釈文から「笠原殿」、「殿様より□□也　池田衆陣所」、「もミ　かきケや　三斗俵　九郎兵衛入道」、「竹廿四本」等の文字があり、一行又は、二行書きの木簡もある。これらの内容から、笠原を姓とする武将の存在や池田衆と呼称された土着の兵力まで城内に在城していたこと、籾や竹を調達して食料や武器・建物に利用していたことなどが推測される。勝間田城は、山麓に居館を設けず、山上生活をし、その生活居住空間が三の曲輪であったと考えられている。平成五年度には、北尾根曲輪が発掘調査され掘立柱建物跡が検出され、舶載や国内産の陶磁器や、中でも水滴や水注が出土したことは注目される。

勝間田氏は、室町期に活躍した横地氏と共に有力国人衆の一人であったが、応仁の乱の頃、守護の今川氏と対立し、文明八年（一四七六）、今川義忠の攻撃で落城し滅亡したと文献上考えられている。出土した考古資料では、木簡の時期が特定されないものの、同一地層より出土した陶磁器で、十五世紀後半の年代観が与えられており、これ以後の使用や居住を示す出土品がないことから、文明八年の廃城後は、使用されなかったと考えられる。

参考文献　昭和五十九年（一九八四）県指定史跡。
勝間田城跡Ⅰ～Ⅶ　榛原町教育委員会



第18図　勝間田城縄張図（作成　齋藤慎一　調査1996年5月18日）



第19図　勝間田城出土遺物（1～11青磁　12～14白磁　15～17染付
18・19唐物天目　20～35国内陶磁器）

九、高天神城（たかてんじんじょう）

所在地　小笠郡大東町上土方嶺向
形　式　山城
規　模　東西約五〇〇m、南北五〇〇m

城跡は、小笠山山塊が東南部に延びた尾根の末端、標高一三二mの鶴翁山と称する山上にあって、周囲は、開析谷が入りこんだり、急斜面や断崖が各所にあり、天然の要害となっている。

高天神城の縄張は、東西の峯を城域内にとり入れ、東の峯に本城を構え西の峯に西の丸・二の丸・堂の尾曲輪などを配置した東西二峯を連結した二城連郭式の山城である。

東峯の中心は本曲輪である。東西が約二四m、南北が約五〇mで土塁が巡っていたと考えられているが、現在は西側にその一部が残存している。本曲輪の東南部分が一段と高くなっており、一つの曲輪（御前曲輪）として機能していた。本曲輪の西側一段下がったところに的場曲輪があり、その下段に鐘曲輪があった。御前曲輪より南に少し下りると、三の曲輪（与左衛門平）があり（東西約四〇m、南北二〇m）、大手道を監視する機能を有していた。

東峯を西峯を結ぶ曲輪が、井戸曲輪である。井戸は西の曲輪の山裾に現存している。井戸曲輪より、西峯の裾より回り込んで、二の曲輪に入る。現在高天神社が造立されているため、城の存立期の旧状を想定できないが上段は、土塁が西側を主として巡らされていたようである。この曲輪の北側に接して、「堂（塔）の尾曲輪」が構えられていた。尾根上を削平し、西側に土塁、その斜面下に、長大なる横堀を構え、西方の緩斜面を防御した。又、この曲輪は、南側に堀切を一条設けたり、北端に虎口、その外方に馬出し的な空間を構え、小さな張り出し状の地形に小規模な堀切と竪堀を構えるなど、城内では巧妙な縄張を持つ曲輪であり、最終段階での大改修を受けた区域である。馬出し状空間地の外方は、堀切を更に設けるなど、当城では、尾根伝いの敵を阻止する施設を各所に配置している。

長大な横堀は、最近の発掘調査により深さ二m以上を有し薬研堀状であり、掘り上げた土を外に積み土塁とした。この横堀形状は、丸子城西側の横堀と酷似しており、内部で仕切りや段差をつけるなど、堀底移動の阻止を目的とした構築法をみることができる。堂の尾曲輪のある尾根上（約一三〇m余）に四本の堀切を設けたことは、高天神城の攻め口の一つになることを想定した防御の構えを今日に残しているとみてよい。



第20図　高天神城位置図

二の曲輪の南西に、堀切を隔てて尾根上を削平した縦長の曲輪がある。「馬場」と称しているが、本来の呼び名が後世改変されたものであろう。曲輪内に土塁や明確な虎口は認められない。この曲輪の先が、「犬戻り、猿戻り」と呼ばれ、極めて細い尾根となり、脱出口に想定された箇所である。

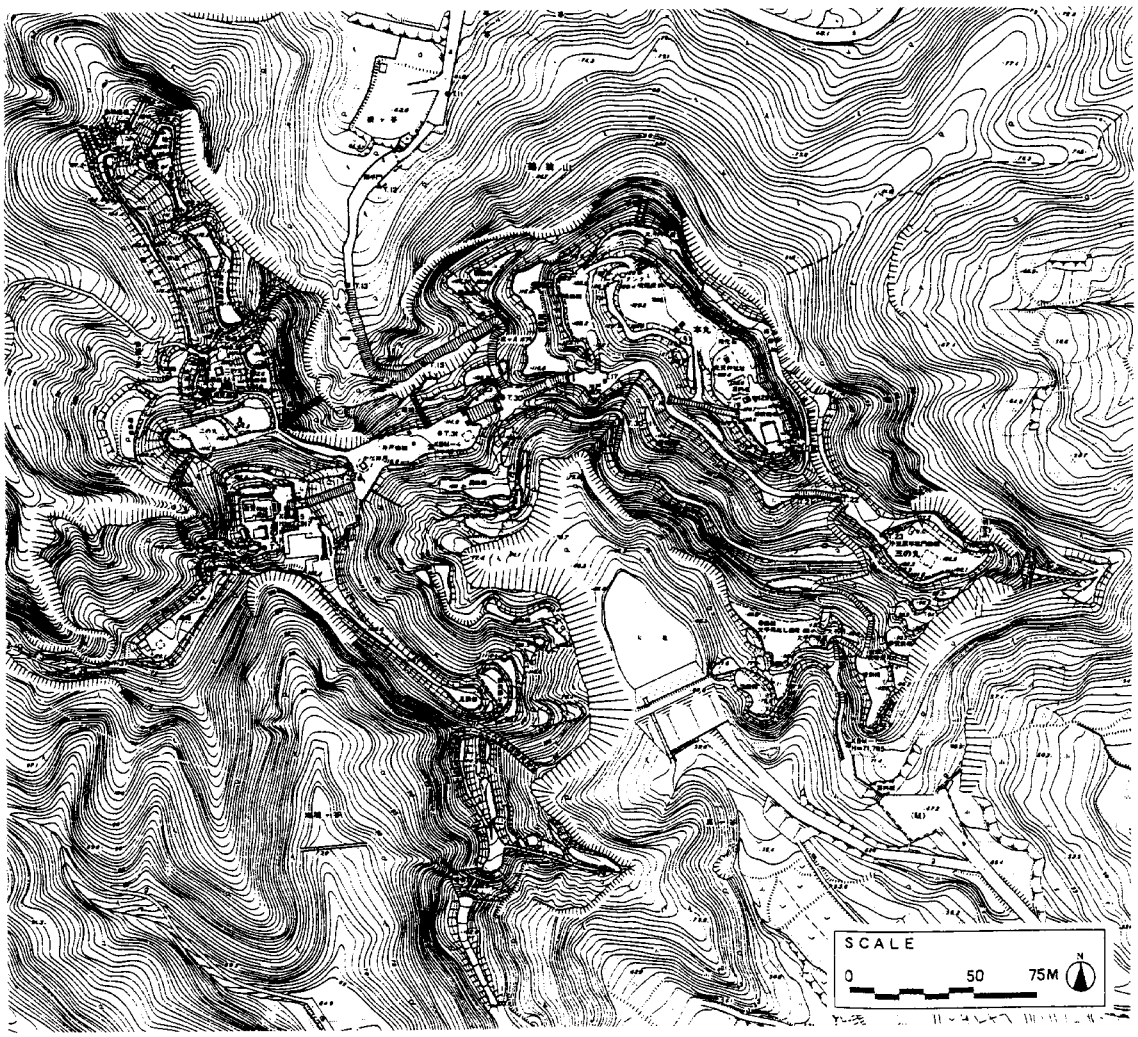
高天神城の絵図は、江戸期に各種作成されているが、浅野文庫蔵の「諸国古城之図」では、東峯区域を「本城」とし、西峯区域を「西城」と表記している。

高天神城の創築を示す確実な資料はない。引佐郡の「大福寺文書」によって十五世紀かに十六世紀の初め頃、今川氏の被官人により築城されたと推定される。

天正二年（一五七四）、武田勝頼は徳川方（小笠原長忠）の高天神城を攻略し、これを開城させて、遠江の支配の南の拠点とした。その後天正三年以後、徳川氏による反攻作戦が開始され、家康は高天神城の周辺に大小の付城を築き、包囲網を張った。天正九年（一五八一）三月、徳川軍の総攻撃に、籠城した武田軍は、壮絶な戦いの後壊滅した。力攻めによる落城は、難攻不落の城であったことを示す戦国の堅城として有名になった所以である。

昭和五十年十月国指定史跡。

参考文献　史跡　高天神城跡保存管理計画策定報告書
一九九六　大東町教育委員会



第21図　高天神城縄張図（作成　大東町教育委員会）

十、掛川城（かけがわじょう）

所在地　掛川市掛川城中
型　式　丘陵
規　模　不明

掛川城跡は、中世の掛川城と中・近世の掛川城の二ヶ所があり、二つの城は、近接した位置にあり、両城とも丘陵である。中世の掛川城は、一般に「掛川古城」と称され、竜華院のある天王山を示し、中・近世の掛川城は、現在天守閣のある山全体と山麓を城地とした一帯を含むものである。

掛川古城（天王山城＝掛川市掛川字元郭内）は、近世掛川城の東北三五〇m余の丘陵天王山（海抜六五m）を利用して築城されたものである。現在国道一号線、消防署建設、宅地化等開発によって、当初の姿を見ることはできないが、過去の表面調査による縄張図をみると、曲輪は主として東西方向に一直線状に並び、本曲輪と二の曲輪の中間に大堀切を設けた。北側に北曲輪群、南に方形の曲輪を配置し、大堀切を堀底道として南北の曲輪を連絡していたと考えられる。しかしこの掛川古城は、永禄十一年（一五六八）末からの掛川城包囲戦の際、徳川家康の陣城として使用されたこともあり、縄張上からも、曲輪群を二分する大堀切（深さ一〇m、長さ四〇m余、上幅一〇m余）の築城法は、社山城の大堀切と酷似しており、徳川軍の改修になることも考えられ、その後山内一豊が掛川城の大改修をする際、一時的に入城していたことも推定される。従って、現在の掛川古城の遺構をそのまま朝比奈氏までもっていくのは適切ではない。

掛川古城の本曲輪は、東西約六〇m×南北約三五mの広さを有し、この曲輪は、方五〇mの略台形であった。

今川氏が、中遠に勢威をもった国人領主原氏を滅亡させ、重臣の朝比奈泰熙に命じて、新城を古城の西約五〇〇m先の龍頭山に築城させたと言う。

朝比奈氏が、原氏の居城である高藤城（殿谷城）を自らの居城としなかったのは、高藤城が東海道より北側へ寄りすぎていたためや、中遠を押えるには、掛川盆地の中央にある丘陵地を選定し、軍事行動や経済流通路を確保するのに最適の地としたからであろう。

朝比奈氏が、天王山に築城工事を開始した時期については、確実な資料はない。『駿国雑誌』では、「文明年中」とあり、文明八年（一四七六）に横地城を今川義忠が攻めて落城させているので、文明八年直後の築城も考えられる。朝比奈泰が掛川古城での在城年数や龍頭山（標高五七m）の掛川新城に移城した時期も不明である。掛川新城の完成は、永正十年（一五一三）とされている。しかし、連歌師宗長の著『宗長手記』に「大永二年（五月）、此地を旅行、（中略）懸川、泰能亭に逗留、このころ普請最中、外城を巡り六七百間堀を支え、土居を築き、凡そ本城と同じ（後略）」とある。又大永五年頃にも、掛川城に滞在し「…本城に井あり。前備中守泰熙、当国の事承はじめ、此山を見たて筑といへども、水かたし。…」と記載して、築城工事が盛んに行われている様子を観察し記録したのである。

朝比奈氏在城時（泰熙－泰能－泰朝）の掛川城の規模や面積は不明であるが、近世掛川城の天守丸・本丸・二の丸・三の丸の地域と思われる。

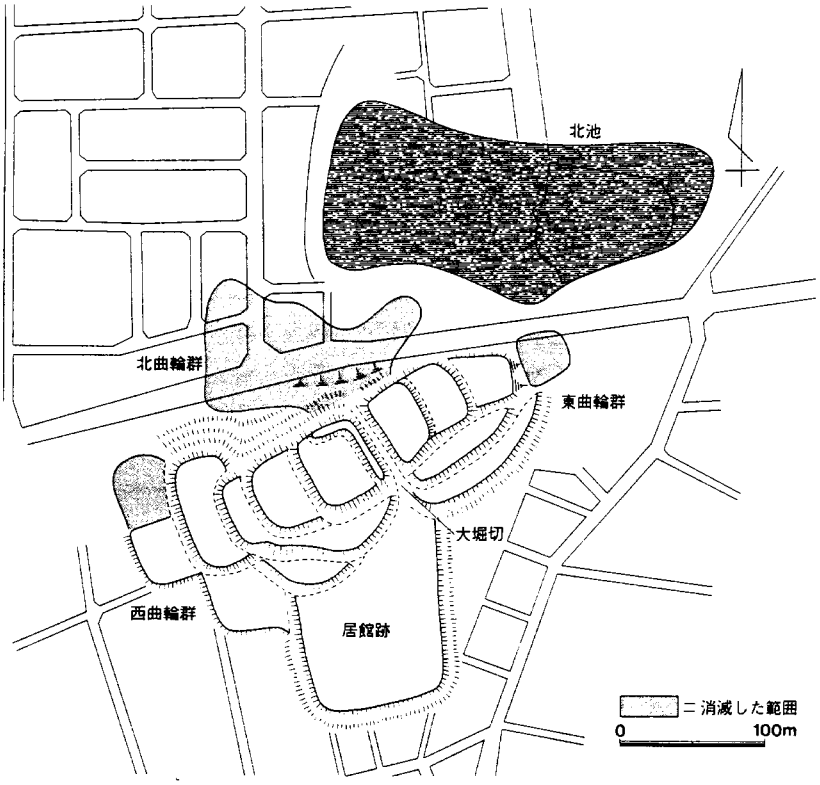
発掘調査は、①平成四年六月から平成五年三月に天守丸と南側斜面、本丸等で実施された。この結果、多くの新事実が判明したが、特筆すべきことは、本丸の地がかつて谷地形であり、これを埋土した後中世墓地が造成されていたこと。これを埋めて本丸の用地を確保したことである。

②平成十年七月より約一年間の発掘調査は、市文化センター跡地で実施され、江戸期の武家屋敷の下層面で、掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸、土坑等が検出され、朝比奈氏時代かその後の城主石川氏の頃の屋敷地と推定された。出土物として、江戸期以外では、かわらけ、舶載品や国産品の陶磁器片が出土し、中でもかわらけに金箔片が貼らされたもの二点や金箔片

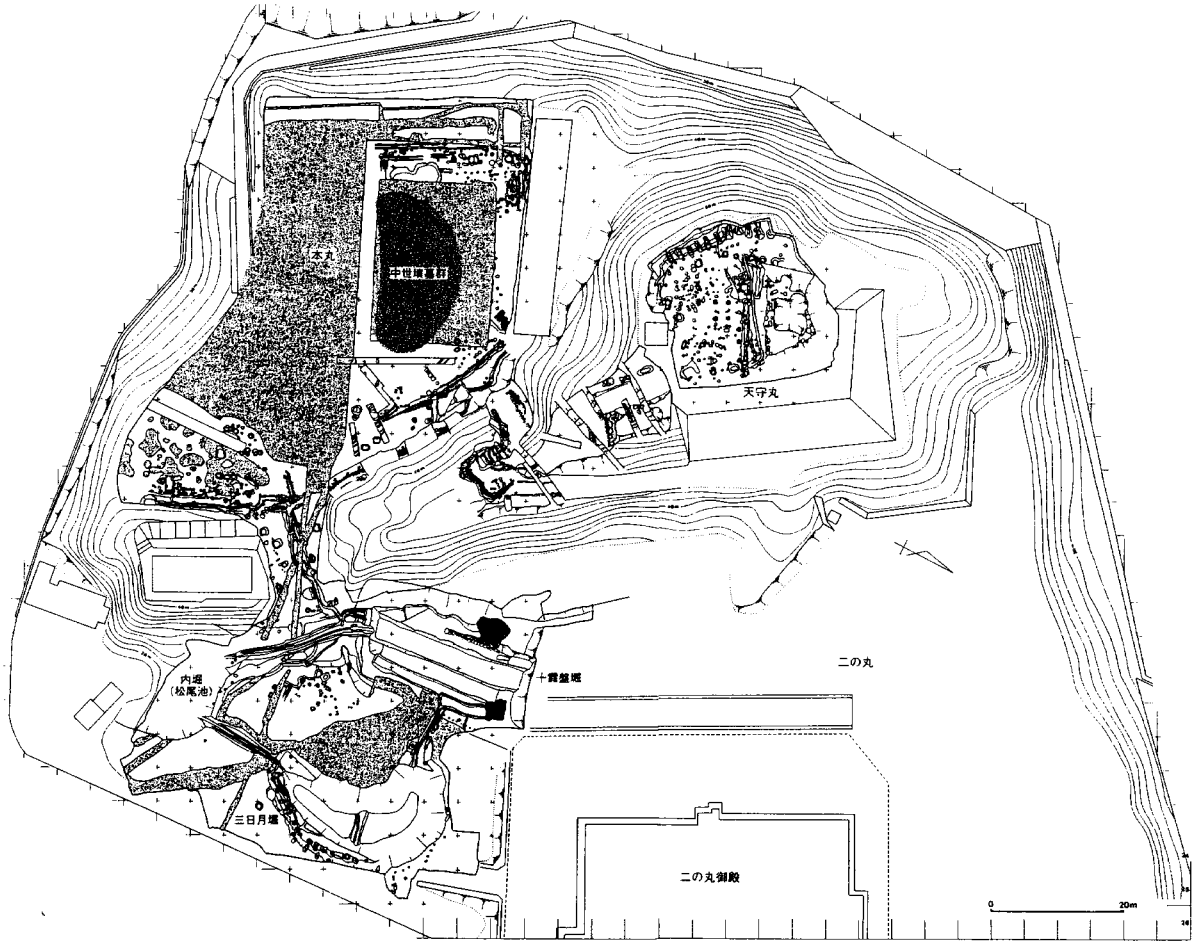
が付着した木片も発見されている。

朝比奈氏時代の掛川城は、近世掛川城へと改修を重ねて存続したため絵図、記録もあまりなく、加えて破壊や埋土等のため地上遺構は皆無であり、実態の把握は容易ではないが、今後の公園、町並み整備の中で少しずつ解明されいくことであろう。

参考文献　掛川城復元調査報告書　一九九八　掛川市教育委員会



第22図　掛川古城縄張図（作成　掛川市教育委員会）



第23図　掛川城遺構全体図

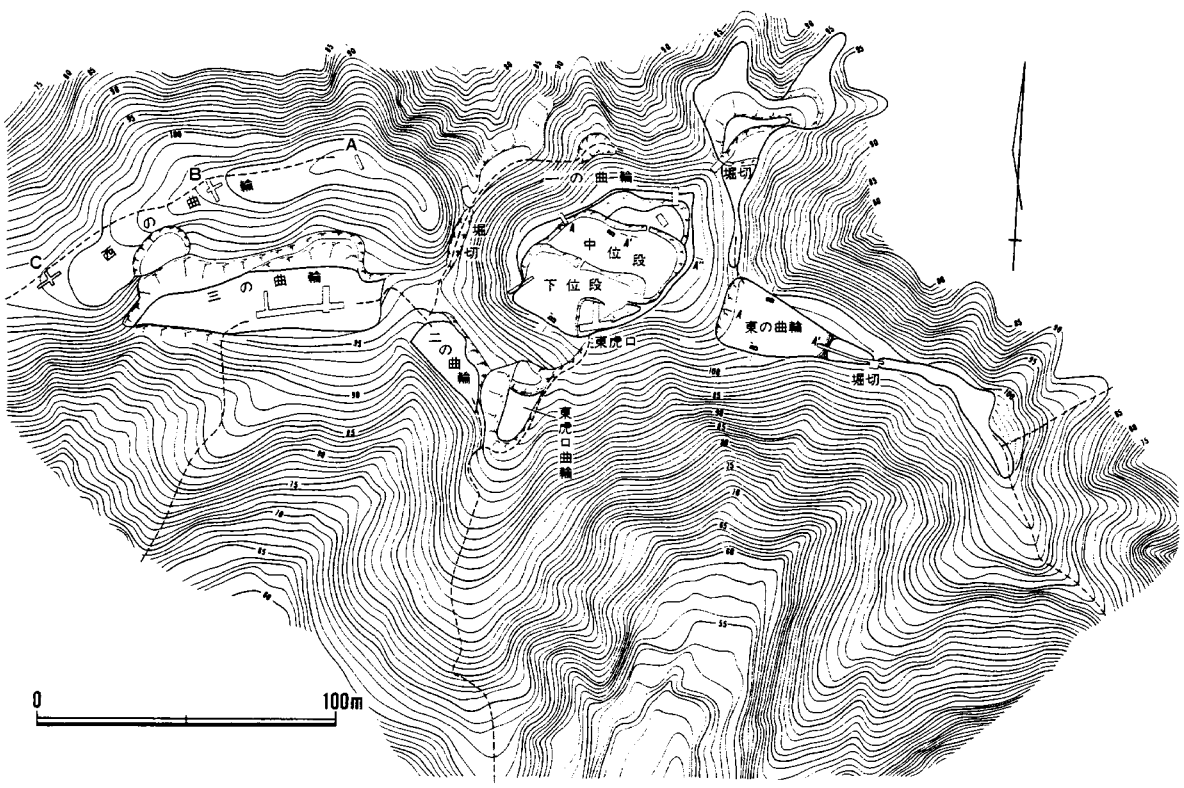
十一、殿谷城（別称高藤城）

所在地　掛川市本郷・殿谷
型　式　山城
規　模　東西約五〇〇m、南北約三五〇m

城跡は、原野谷川の左岸にある丘陵上の一角に位置している。四方より大小の開析谷が入り込み、複雑な地形を形成している。城は、開析谷の集中する標高一一二mの山頂を本曲輪として、四方に広がる尾根上を削平して各曲輪を構えており、中心部に主郭を設けたもので、主軸となる尾根上に基本的な曲輪を配置した連郭式の縄張である。

本曲輪は、東西の両脇に東曲輪と西曲輪を付属させ、西曲輪とは、一条の堀切で尾根を遮断した。東曲輪側は、堀切でなく段差一〇mを測り、急斜面として防御した。

本曲輪の全体形状は、略船形であり同一平面とせず、南西方向にある山頂部を北側より三段に削平して区画を構成した。本曲輪は、三方に高さ一・五m～二mの土塁を巡らし南側のみを開口させた。南側の一角に、内虎口（六m四方）をつけ、他の曲輪との連絡道とした。上段は、中央の幅で七m、長さ東西二三mの略台形をなし、物見台の性格が強い。中段は、上段の下方に位置し、東西四〇m、南北一四mの規模であった。この中段からは、発掘調査によって配石遺構が検出された。下段は、虎口をもち、中段とは三mの段差をつけ、三段の内では面積が最も広い。下段は東西四〇m、南北二五mの規模であり、発掘調査により重複する掘立柱建物跡を検出した。上段の北側は、一つの防御地点となっており、堀切（深さ二m、基底幅一・六m）を一条設けて防御した。下段の南側下方（虎口の前方部）に、突出する小尾根を削平して、長さ約四〇m、幅一五m余の曲輪が構築された。これは後方の虎口防御を目的としたものであろう。またこの曲輪



第24図　殿谷城全体図（作成　掛川市教育委員会）

は、本曲輪下段の裾を回り込んで西側の諸曲輪に向かうことも可能であり、分岐点を押さえる重要な機能を有する。

本曲輪下段より八m下にある「二の曲輪」は、東西二五m、南北一五mの規模であり、裾部に豊富な湧水量を持つ井戸を設けていた。二の曲輪と西側の平場との境界に高さ〇・五m余の土塁を構えたのは、独立性を保つためか、木戸口の機能とも考えられる。

本曲輪の東側一五mの下方に、東西約五〇m、南北一〇m～二〇mの三角形状の東曲輪が構えられていた。その前方部の曲輪とは、堀切を一条設けていたり、帯曲輪等を設けて防御している。この東曲輪は、本曲輪の東側を直接防御することや、北側の部分で犬走りとして、北側の曲輪に移動する通路にも活用できるため、構造的にも巧妙性が目立つ曲輪である。しかし、上方にある本曲輪には、直接連絡する通路はないため、南端の犬走り状遺構から、本曲輪の虎口に迂回するルートが推定できる。本曲輪と東曲輪・西曲輪の段差は、約一五mに達することは、本曲輪自体が、極めて独立性の高い曲輪として構築されたことが判明した。

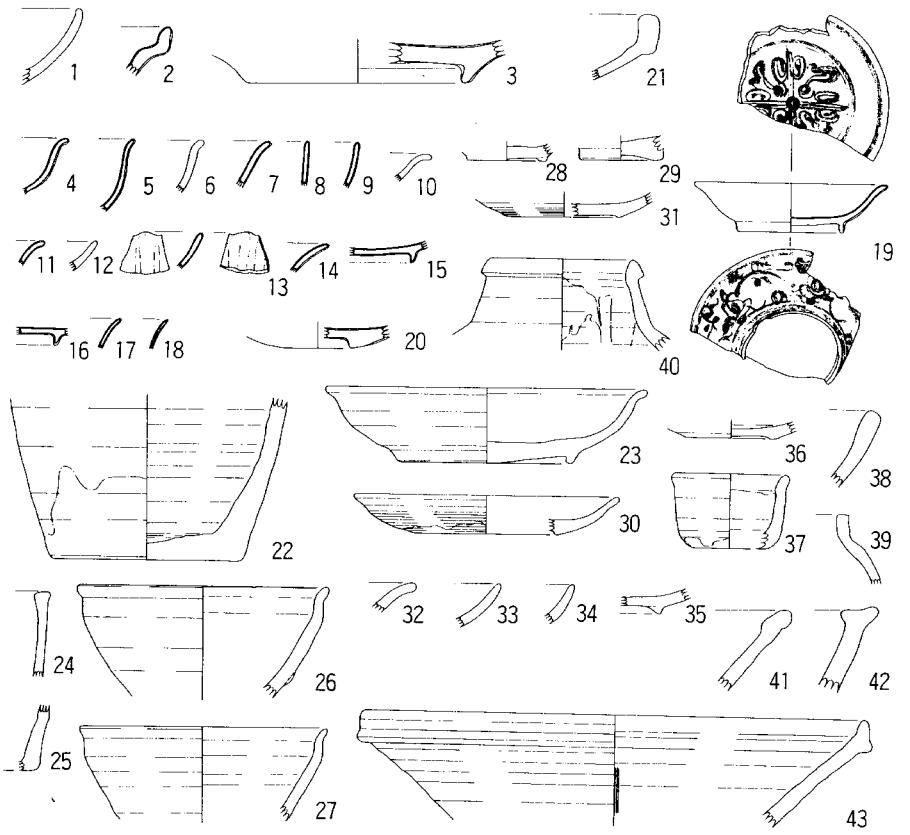
殿谷城の縄張は、室町期の国人領主クラスの原氏の居城として、自然の要害性に加えて、造成度が高く、各曲輪の求心性の高い配置法と構築法、そして堀切・土塁・虎口等を有機的な関連性をもって築城した実戦的な城郭である。

殿谷城は、ゴルフ場建設に伴い、昭和五十七年（一九八二）から翌年にかけて部分発掘が実施され、国人領主としての居城として、貴重な遺構が検出され、遺物が出土した。出土遺物から、殿谷城の築城期と使用時期は、十五世紀後半から十六世紀前半と判明した。

出土品としては、中国製の青磁・白磁・染付で、用途は盤や皿・碗・小杯である。国産品では、瀬戸・美濃産の灰釉陶器類で、皿類が多く出土し、香炉や瓶子も出土した。鉄釉では、鉢・擂鉢・壺類も出土した。また常滑産の陶器と土師質土器・皿も認められた。

本曲輪の中段部からは、配石遺構が確認され、下段からは柱穴群を検出し、掘立柱建物跡と確認された。遺物の出土量を考えると、本曲輪は、居住空間であったと推定される。本遺跡は、ゴルフ場建設により消滅した。

参考文献　殿谷城址他遺跡　一九八五　掛川市教育委員会



第25図　殿谷城出土遺物（縮尺1/4）（1～20舶載陶磁器　21～43国産陶磁器）

十二、久野城（くのじょう）

所在地　袋井市鷲巣字城跡
型　式　丘陵
規　模　東西三〇〇m、南北二五〇m

城跡は、東海道線袋井駅の北東三㎞先の可睡丘陵の先端部に位置している。標高三四mの山頂を主郭として、北西に続く台地に堀切を設けて遮断した。東西と南の三方を湿田が囲み、これを堀としたため、丘陵ながら、要害性に富んだ地形を活用した城郭である。

城地は、約三九〇〇㎡と比較的小規模であり、南から北方へ扇形に開く形状を示している。

遺構は、一部破壊された曲輪もあるが、総体的には保存状態は良い。現在も、城跡・高見・大手・西堀・南堀・北堀などの地名が残ることから、その概要を把握することが可能である。

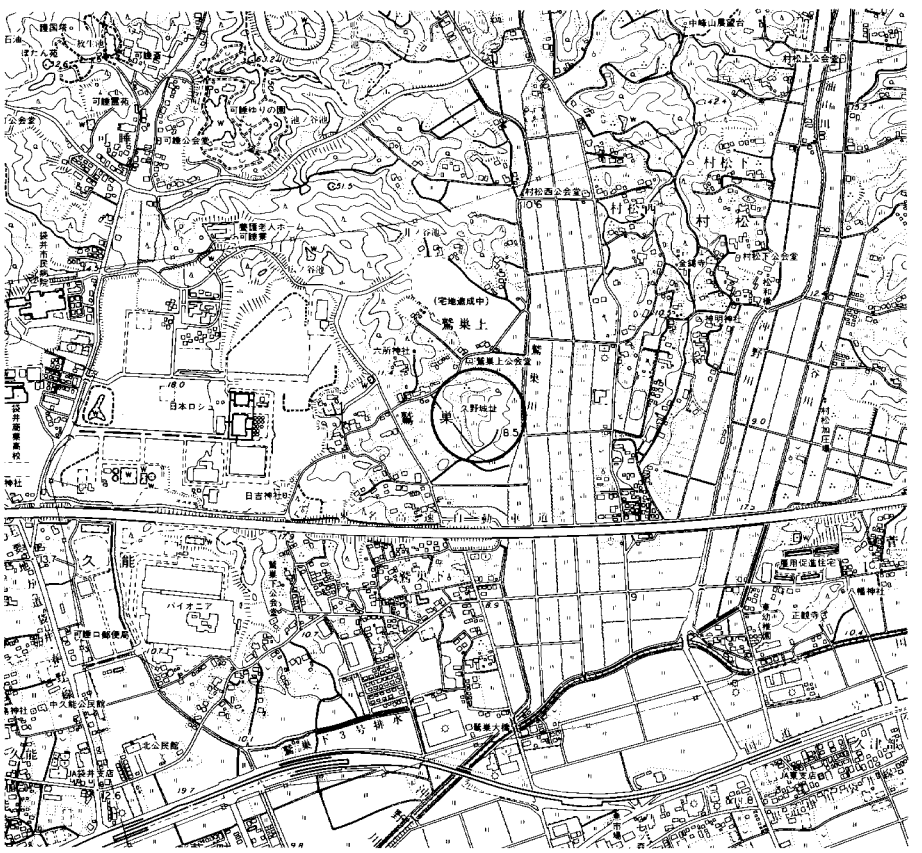
縄張は、本丸を挟んで東南の曲輪群と一段低くなって南方に延長している長大な曲輪群、それに南先端部の広大な曲輪の四区画より構成される。

本丸は、城域の北端に近い場所を占め、ここを中心として、丘陵地を階段式に削平して段差をつけ、東に曲輪を張り出して東の丸を、西方向へは二の丸等を構えた。北方からの侵入に対して、本丸台地の北側直下に、巨大な横堀を構え、その両端部は、竪堀として湿田に降下させた。本丸より東西方向へ延びた支尾根に、それぞれ堀切を設け、防御を強化した。

土塁を使用した囲郭式の曲輪は認められず、要所に設けたようである。二の丸の西側北区や東の丸の北側、特に北側の大横堀の外方にある大土塁は、この城の防御の特質を示す遺構である。

北の丸は、昭和四十年代の削土により一部分が残存するにすぎないが、地籍図や航空写真、地元での聞き取り調査により、三段の曲輪が一直線状に配置された連郭形式であったことが判明し、二条の堀切を構えていた。

永禄年間から元亀年間頃の久野城が、どのような縄張であったのか、文書や絵図・記録等の資料がないため、実体は不明である。しかし、現地調査後に作成した縄張図から推測していくと、まず配置や形状から、本丸と二の丸に続く高見の中核部分が考えられる。そして東の丸と三の丸、これに加えて、北の丸の曲輪群から構成された要害性に富む城が、戦国中期頃



第26図　久野城位置図

の形態であったことと考えられる。後期の久野城では、これらの主要曲輪の前後左右を装甲するかのように、大小の曲輪や平場が構えられ、竪堀を設けて極めて防御の厚い戦国城郭が完成していったものだろう。

久野城は、平成元年度より四ケ年にわたる発掘調査が実施され、検出された多くの遺構や豊富な出土物から、中近世における久野城の縄張や城内の施設、城内道等多大な成果が得られた。創築年代は、久野氏系図に伝えられてきた「明応年間（一四九二～一五〇一）」頃と推定される。城の改修については、複数の時期があるが、大改修は、天正・文禄期の城主松下氏の時に実施された。表面観察で瓦片が多く散布した状態に加え、出土した瓦も大量にあることから、瓦葺き建物や、礎石建物の痕跡が確認された。高見地区に、物見櫓が存在したこと。大手門は、東側の桝形付近に設けられたこと。塀・柵列址が連続的に検出され、大手道は「クランク状」になって城内に入っていたこと。大手口では、着到櫓と推定される柱穴が検出できたこと。大手口の塀の内部に井戸が検出されたことから、山麓部に複数の存在が推定された。発掘による成果を、総合的に考えると、織豊系城郭の特徴が多く認められる。近世城郭に多く確認される桝形空間が発掘に確認されたことや、丘陵の裾部にある略方形の平場は、近世に入り家臣団屋敷としても使用されたことも判明した。

久野城は、戦国期に久野氏の居城として使用され、その後城主は、松下之綱・重綱父子を経て、再度久野宗能の持城となり、孫宗成の代に徳川頼宣に従い伊勢国田丸城主となった。久野城は、正保元年（一六四四）廃城となった。

参考文献　久野城Ⅳ　一九九三　袋井市教育委員会



第27図　久野城縄張図（作成　関口宏行）

十三、笹岡城（ささおかじょう）

所在地　天竜市二俣町笹岡
型　式　山城
規　模　東西一六〇m、南北三〇〇m

城跡は、二俣城のほぼ北方約一・三kmの地点で、現在の天竜市庁舎の位置に所在した。天竜市街を見下ろす山の先端部を利用して築城された中世の山城である。地元では、「本城山」と呼称され、南側の「城山」と区分されており、縄張や位置から、二俣城（戦国期）の前身である城郭が存在したものとの説もあり、確実な資料が認められないだけに、今後の研究課題であろう。

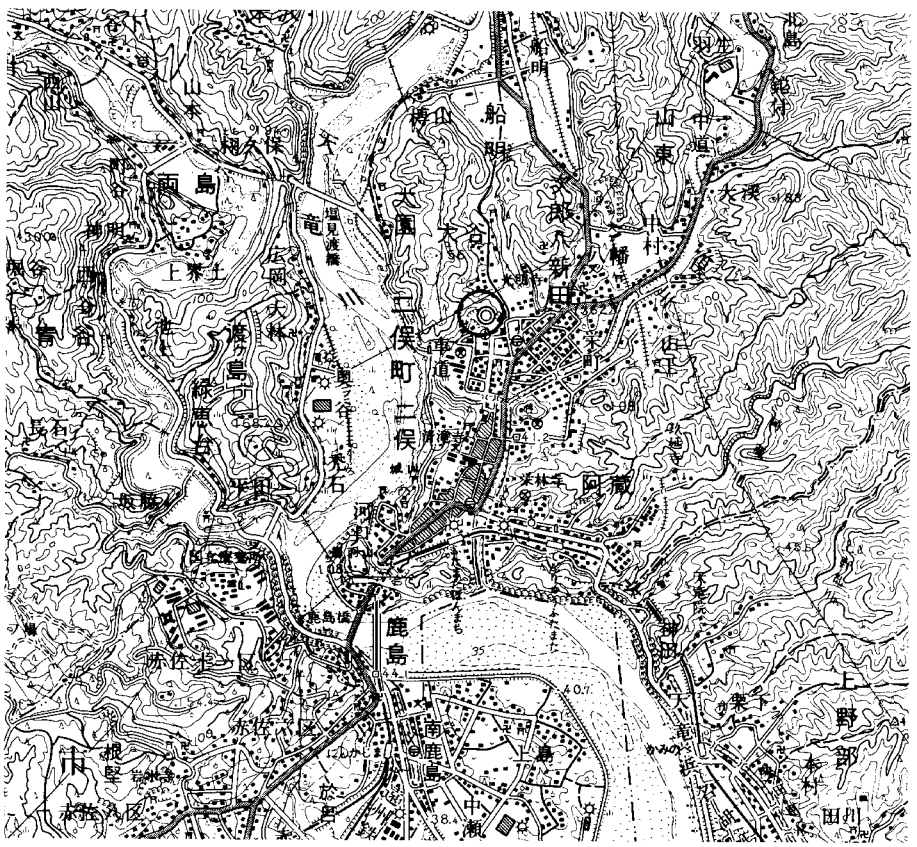
尾根の先端部を階段式に削平して各曲輪を配置し、主曲輪は、土塁を構えて防御を強化している。山麓に接近した二曲輪間に堀切を設け、先端部の曲輪外方には、小規模な腰曲輪を数ヶ所配置し、斜面の防御と厳重にした。城の構造は上段である山頂部の曲輪群と下段である山麓部の居住空間の二区画に大別され中世城郭形態を研究するには、典型的な城跡であった。したがって山上の曲輪群は、山麓の居住空間に対して、詰の曲輪としての性格を有していたと考えられる。

市庁舎建設に伴って昭和四十二年に下段の居住空間部の発掘調査が実施された。外周の土塁は、表面調査で高さ二・五m余、基底幅一二～一四m、上面幅は広い部分で八m余あった。複数の土層が確認され、当初の小規模な土塁からその後、数期にわたる改修があり規模を拡大したが、後世の削土により、高さを減じていた。

発掘によって出土した遺構は、柱穴群が二ヶ所で検出され、中には、根石をもつ柱穴も発見されている。又、用材として角柱の基部が出土し長さは一・一m余を測定している。

多くの溝状遺構が検出され、西側土塁と東側土塁の接する内側から、方形プランの井戸が検出され、横板を積み重ねた構造で、内部より豊富な木製品が出土した。井戸は、更に一基が東側からも発見されたが、工事により破壊され詳細は不明である。

出土品として、国産品では山茶碗、耳皿、多数のかわらけ、土鍋、土錘、天目茶碗、常滑系の壺や甕類、擂鉢、鉄釉油差、緑釉小皿、瀬戸系の破片、



第28図　笹岡城位置図

舶載陶磁では青白磁、青磁、白磁、染付等が検出した。更に木製品としては、漆器として高台を付した物や外側に模様を描いた木碗片、箸形のもの、篦形のものなどが出土した。又、曲物の底部に使用されと考えられる半円形の板状木片も確認されている。金属製品として、銅製の笄と円環のものや目貫などがある。

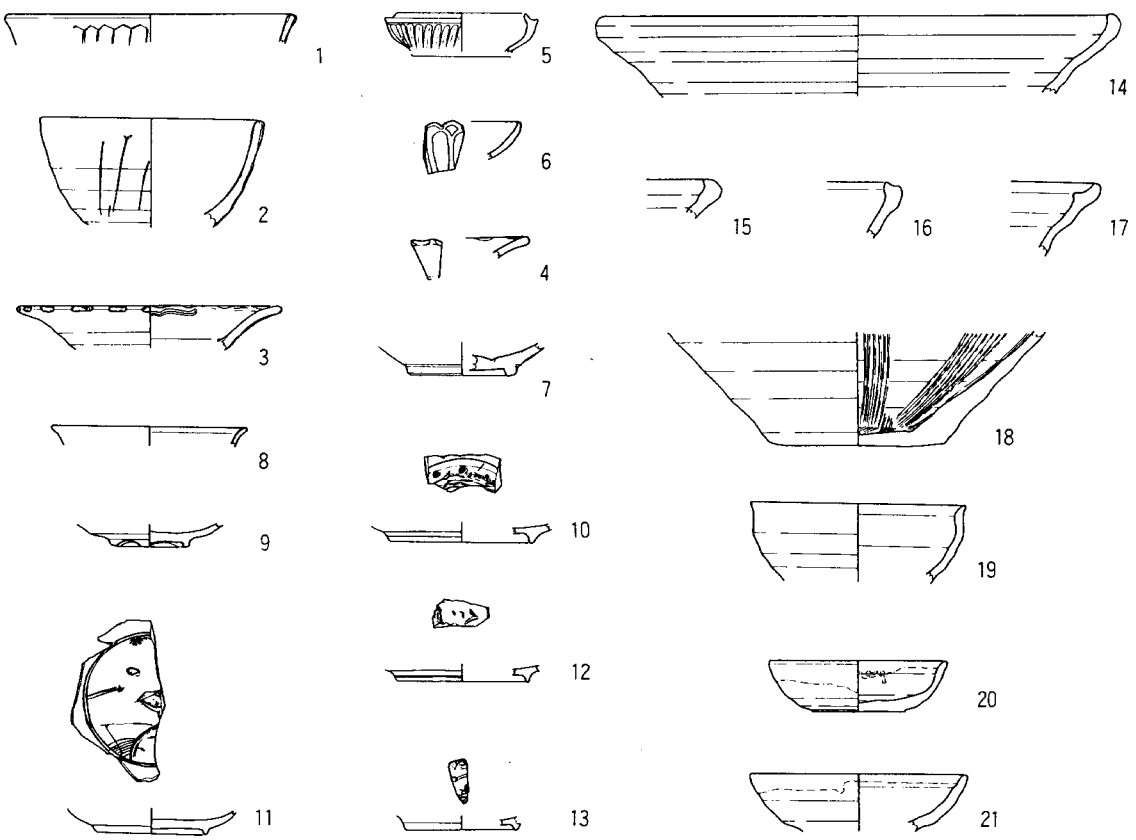
出土品の中で、特質すべきは、灰褐色や褐色の布目瓦の発見である。城の存立期の頃ならば、中世城館内に瓦葺建物の存在が考えられるが、全国的な研究からすれば、県内で城郭内より瓦が出土するのは、天正十八年（一五九〇）に豊臣家の大名が県内に配置された頃と推定されているので、城館に伴うものではないだろう。むしろ、築城前に、宗教的な性格をもつ建物の存在が考えられる。

鉄製品としては、角釘、渡来銭として「天聖元宝（宋銭）」が出土している。

笹岡城の発掘調査による遺構や遺物から総合的に考えると、純軍事的な城というより、城館的な性格の極めて濃い中世遺跡であることが判明した。しかし、城史や城主に関する直接的な資料もなく、ましてや木簡等の出土もないことから、人物や時期等の特定はできないものの、出土品からは平安末期から戦国期（十六世紀前葉）までの使用時期が推定できる遺跡である。

『遠江国風土紀伝』の「二俣古城図」によると、山上の曲輪と、下方の尾根に堀切を入れ、その先端に小削平地を描いている。又前面には、二段の方形曲輪を描き、二ヶ所の虎口と推定される箇所も図中より判明する。この城跡を、当時「本城山」と称していたことは、書き込みからも認められる。

参考文献　遠州笹岡城　一九七二　天竜市教育委員会



第29図　笹岡城出土遺物（縮尺1/4）
（1～4青磁　5～7青白磁　8・9白磁　10～13染付　14～21国産陶磁器）

十四、高根城（たかねじょう）

所在地　磐田郡水窪町地頭方久頭合
型　式　山城
規　模　東西五〇m、南北一六〇m

城跡は、山住地区に源流のある河内川が、西流して水窪川に合流する地点の南側に岐立する、通称三角山（標高四二〇m、比高一五〇m）の山頂部にある。山裾を二つの川が流れ、急斜面を持つ細尾根の三角山は、南の尾根に連続する挟長な山陵の北端部にあり、自然の谷地形によって防御されている室町・戦国期の山城である。

高根城の縄張は、北端から、本曲輪・二の曲輪・三の曲輪の三つの曲輪が一直線状に配置された戦国期の山城に特有な連郭式の縄張である。曲輪間にそれぞれ堀切を入れ、独立性の高い曲輪としているが、三つの曲輪とも細尾根を削平したため、面積は狭く、小規模となったため、居住性は薄く、純軍事性であるが籠城を目的とするものでなく、青崩峠を往来する街道の監視、兵站線の確保と物見台等を兼ねての築城であったと考えられる。

従来の表面観察によると、本曲輪は南北約三〇m、東西二〇mの規模を持ち、西側から南端にかけて土塁の高まりが認められるものの、後世の削土によって盛土が消滅し、かろうじて痕跡を留めている。大手道そのものの存在と解明がされていないため、本丸への虎口は明確でなく、稲荷神社裏手にある外縁部の窪地と想定してきた。本曲輪北側下方に、帯曲輪があり、回り込むようにして東へ延びているため、このルートと本丸への虎口と推定してきた。本曲輪の北側の更に下方に長大な帯曲輪状の平場が存在するが、城の遺構に伴うものかは未調査のため不明である。

本曲輪と二の曲輪間は、段差があり、堀切が設けられた。堀底の形状や本曲輪と二の曲輪の斜面に削土の跡があり、後世の改変が予想された。但し、本曲輪の東外方斜面に直線上の高まりが認められ、土塁と判断した。

二の曲輪は、南北約二〇m、東西約五mの規模で、本曲輪と類似の南端部に土塁状の高まり（三角状）がある。本曲輪と二の曲輪間は、幅一〇mあるが、発掘によって土橋により連絡していたことが判明し、左右は竪堀としていたことも確認された。

三の曲輪は、南北約二〇m、東西約五mの規模で、北端に櫓台状の方形の高まりが構えられている。二の曲輪と三の曲輪の連絡路は、堀切（幅約一〇m、深さ約五m左右は竪堀である。）の東端に土橋を設け、これにより、城内を移動していたものである。

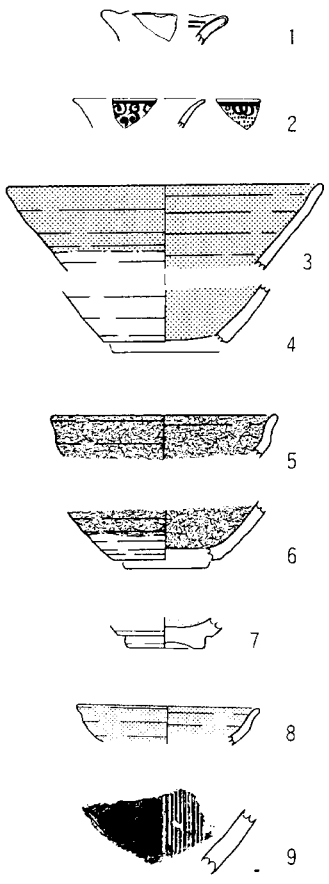
三の曲輪の南側には、特異な構造の堀切を二重に設けていた。中に土塁を設け、前後に堀切を配置した。二重堀切の幅約二五m、深さ八m余であり、三の曲輪の西方下より、カーブを描きながら、東方へ延びている。しかも、三の曲輪側の空堀は、同一水平面でなく、東のコーナーから、土塁に沿い登り坂とし、虎口に達する構造としていた。二重構造の堀切は、小長井城（本川根町）や小山城（吉田町）の多重堀切に酷似しており、武田氏の築城法に多く認められる工法であることを考慮すれば、元亀年間頃（一五七〇～一五七三）の武田氏による改修結果と考えてよいであろう。

高根城より南西に約一〇〇m余離れた南側斜面に、幅約一〇m、長さ約六〇mの平場があり、地元で『馬洗場』と称しているため、城の水の手と推定される。

平成五年度より平成十一年度まで町教育委員会によって発掘調査が実施され、主要曲輪の全面発掘がなされ、遺構の検出や遺物の出土により、新事実が判明し、大きな成果を得た。本曲輪と二の曲輪間の堀切部分では、石積み部分を迂回して、本丸東側に開口した虎口に達するルートが判明したこと。本曲輪に虎口が二ヶ所確認されたこと。本丸内に井楼櫓と推定される掘立柱建物、礎石建物、礎石の門、掘立柱の門三つ、合計で六棟の建

物跡が検出された。柵列も検出された。出土遺物は、主なものは、十五から十六世紀前半までの奥山氏在城期のものが多く、舶載陶磁器から国内産のもの、生活雑器まで多種多様にわたる。十六世紀後半のものは水甕（常滑産）、かわらけ、天目茶碗等が出土した。現在、城跡の整備事業が進行し、井楼櫓が復元されている。今後、門や土塁、柵等の復元も予定されている。





第30図　高根城縄張図（作成　関口宏行）と出土遺物（縮尺1/4）

十五、蒲原城（かんばらじょう）

所在地　庵原郡蒲原町蒲原
形　式　山城
規　模　東西約五〇〇m、南北七〇〇m

城跡は、蒲原町の背後に聳える標高一四九mの城山に位置する。城の背後の北方から西南にかけて流れる善福寺川が西側で向田川と合流しながら深い浸食谷を形成し駿河湾に注いでいる。一方東方は、山裾沢川が南流し急峻な浸食谷を西側同様形成している。北方のみが細尾根で連続しており地形は、南側に開く形態をとることから「後堅固の構え」と考えられる。

戦国期の堅城として、今日なお築城遺構を残す中世城郭である。縄張は本曲輪を最高地所に構えて、北方の尾根上に狭長の小曲輪を配置して、背後の防御とし、南西に降下する主尾根に二の曲輪を南面に向けて設け、西方の向田川に向けて扇形状に展開する箇所に三の曲輪を中心とした曲輪群を段階式に配置した。この曲輪から南に沢を隔てて小峯曲輪を配置した。又東端では、小峯曲輪と面積の規模は異なるものの防御箇所として対称的に東曲輪を構えていた。

本曲輪は、標高一四九mの山頂を削平した不整形な曲輪で、南北方向に長い略楕円状を成す。曲輪はほぼ平坦で、中央に基壇状のものとその外周に一段下って帯曲輪状の施設を巡す二段より構成されている。但し、東西の狭長の段は、後世の拡張による結果と考えられる。本曲輪は、土塁によって防御された囲郭式でなく、虎口は南側と推定されるが明瞭ではない。

本曲輪と北曲輪（善福寺曲輪）は、蒲原城の中心的な曲輪として構築され、その中間に設けられた大堀切は、北方からの攻撃に備えている。北曲輪を占拠されても、本曲輪は段差約六m（北曲輪上より）上の有利な地形にあるので、北曲輪の全域を見下すことができるため、一八〇度の俯射が可能であり、防御を続行できる機能を有していた。

二の曲輪は、本曲輪の主尾根が、西方へ延びるその尾根上を削平して構えられたもので、本曲輪と三の曲輪を結ぶ線上の本曲輪寄りにあることから、その構築目的は本曲輪の防御にある。二の曲輪は、階段式のほぼ三段より成り、全体が「くの字」形の不整形な曲輪であり、内部には現在土塁や堀切、虎口遺構は認められない。

三の曲輪は、単独では、城内にある曲輪のうち第二の面積をもち、本曲輪から主尾根が西方の向田川に向けて延びたその両端部にある。三段から成る曲輪と考えられ、小峯曲輪の後方に位置し、城の存立期には居住空間と推定される曲輪である。

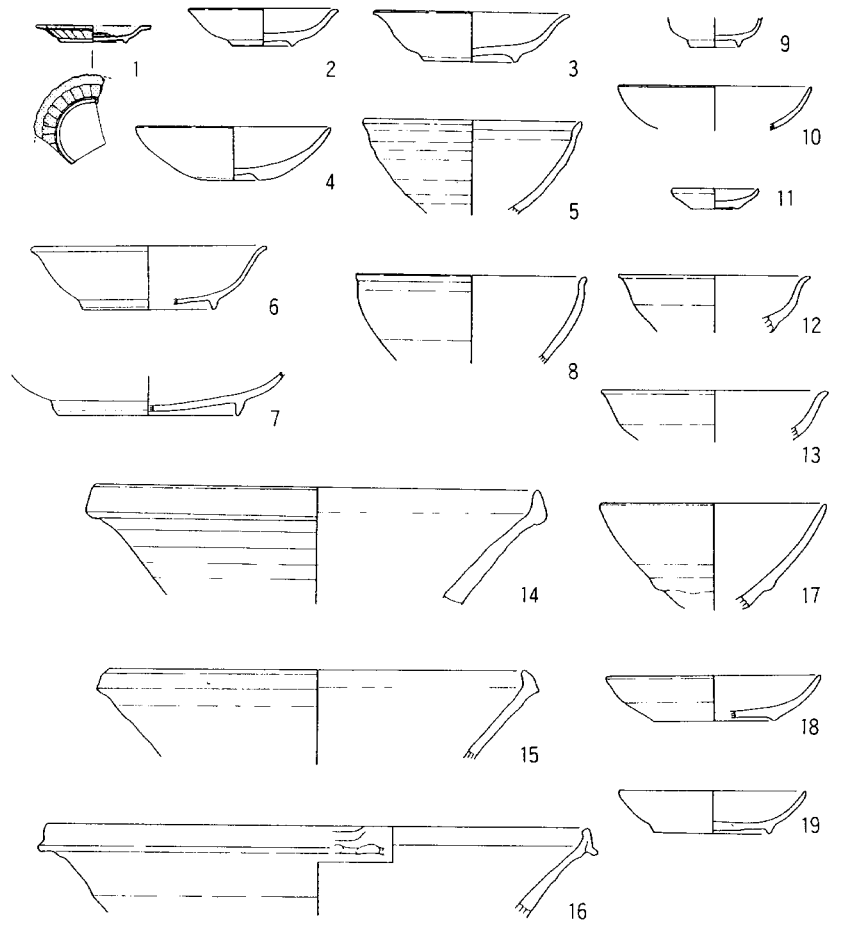
蒲原城が、資料上で確実に検出されるのは、永享六年（一四三四）の今川範忠文書である。文書では、「去ル九日某城蒲原」とあり存在が明らかであり、今川氏の支城として機能していた。天文十四年（一五四五）には北条氏との抗争があり「国境の城」として遠江の飯尾氏が在番していた。

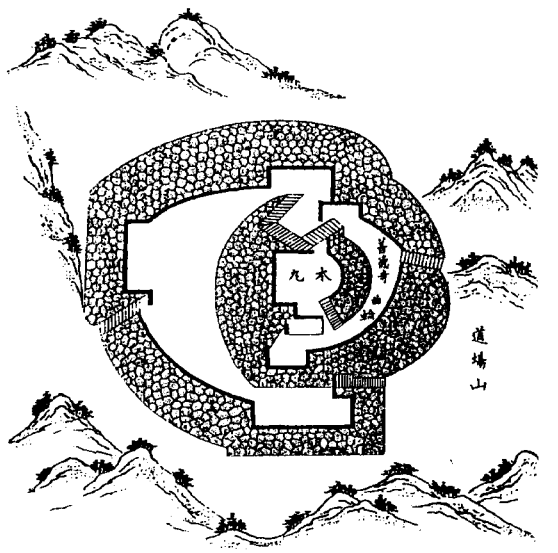
永禄十二年（一五六九）十二月駿河に侵攻した武田信玄は、北条勢の守る蒲原城を猛攻し、城主北条氏信以下の守備軍を全滅させた。攻略後、武田軍は、西進して駿河を攻略した。武田軍は、蒲原城を駿河経略の拠点とせずに、平城の江尻城を築城して、巴川口に水軍基地を構えると共に地域的な本城とした。江尻城には、穴山梅雪が城主となり、駿河郡代として駿河と甲斐の流通路等を押さえるとともに、武田軍の外交面を担当した。

蒲原城の発掘調査は、昭和六十二年より、数次にわたり実施され、遺構の検出や遺物の出土により、新知見が得られている。本曲輪と北曲輪間の大堀切は、底幅三mの箱堀であるが、橋の痕跡、堀底施設（堀障子、乱杭等）は認められない。堀底付近からは、舶載陶磁器（青磁、白磁、染付）、国内産陶磁器（瀬戸・美濃、常滑、渥美、土師質土器）が出土した。その他、刀子、鉄砲玉、銭貨、炭火材、釘、硯、石臼等、生活雑器も含め、城

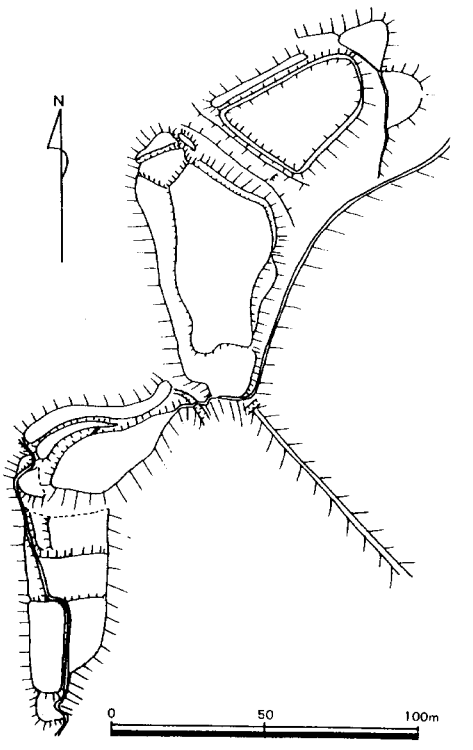
内生活を物語る多量の出土品がこれまで発見されている。城の創築は、出土土器の精査により、十五世紀の前半期と推定される。

参考文献　蒲原城　平成八年度範囲確認調査報告書　一九九七　蒲原町教育委員会
蒲原城　平成九年度範囲確認調査報告書　一九九八　蒲原町教育委員会
静岡県中世城館跡　一九八一　静岡県教育委員会





蒲原城絵図（駿国雑志所載）



蒲原城見取図（見崎闇雄原図による）

第31図　蒲原城縄張図（作成　見崎闇雄）と出土遺物（縮尺1/4）

十六、湯島城（ゆしまじょう）

所在地　静岡市湯島城山
形　式　山城
規　模　東西三〇〇ｍ、南北五〇ｍ

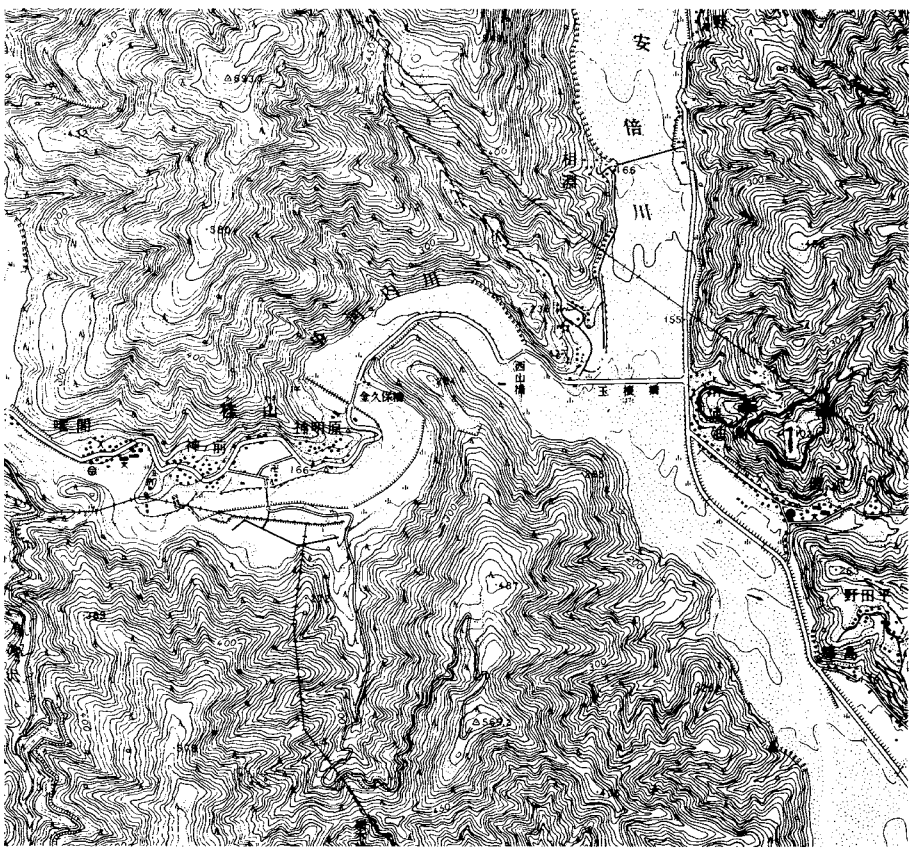
城跡は、安倍川の支流である中河内川が、安倍川に合流する玉機橋の東岸にある湯島集落背後の城山に位置する。

山頂部は、Ｓ字状にカーブしており、標高三〇三ｍを最高地点とし、順次東側へ降下している地形を示す。周辺は谷地形であり、西側が開口して展望は可能だが、閉塞的な位置にあるため、長期の籠城は使用できない構造でもある。

城跡の現況だが、茶畑を造成した際に、破壊を受けたのか、削平面や段差、切岸、土塁等が認められない。南側の斜面も切岸でなく、自然地形であり防御性が薄い。曲輪群等の明確な区分がなく、尾根上は、軸方向に沿って降下しており、築城工程による加工度が極端に少ない。唯一遺構と認められるのは、両端部の堀切と土橋・竪堀である。

西端にある堀切は、幅一二ｍで、土橋（幅一・二ｍ）を設け、両側は整形した竪堀を構え、完成度の高い防御施設である。土橋は水平面であり尾根は、渡り切った所から、広がりを見せるが、城内側の地点では、特別な施設（平場の造成、虎口形式、土塁等）はない。過去の表面調査では、土橋近くまで、横堀状のものが存在したというが、連続した帯状の窪地もなく現在は認められず不明である。土橋の前面に、挟長な平場（長さ一七ｍ、幅四～六ｍ余）があり、水平面に近いレベルを保っているが、馬出し的な機能を有したものだろう。下方からの明確なルートはなく、従って土塁や虎口も不明確である。土橋からは、狭長の窪地を登って、最高地点の本曲輪に達するが、方形の区画もなく茶畑であり、西側に張り出し部分があるものの、緩斜面となり腰曲輪ではない。本曲輪の推定規模は、約二五ｍ×約四〇ｍ余である。この本曲輪より尾根は東側へ約一二〇ｍ余降下するが、この間、平場は存在しない。東曲輪と仮称した突端部は、不整形だが水平面を持ち、二二ｍ四方の規模だが、低土塁や虎口はない。東曲輪の外方にある数段の削平地は、城に伴うものでなく、後世の畑地であろう。

東曲輪を尾根伝いに約一〇〇ｍ余降下すると、尾根幅が次第に減少し、



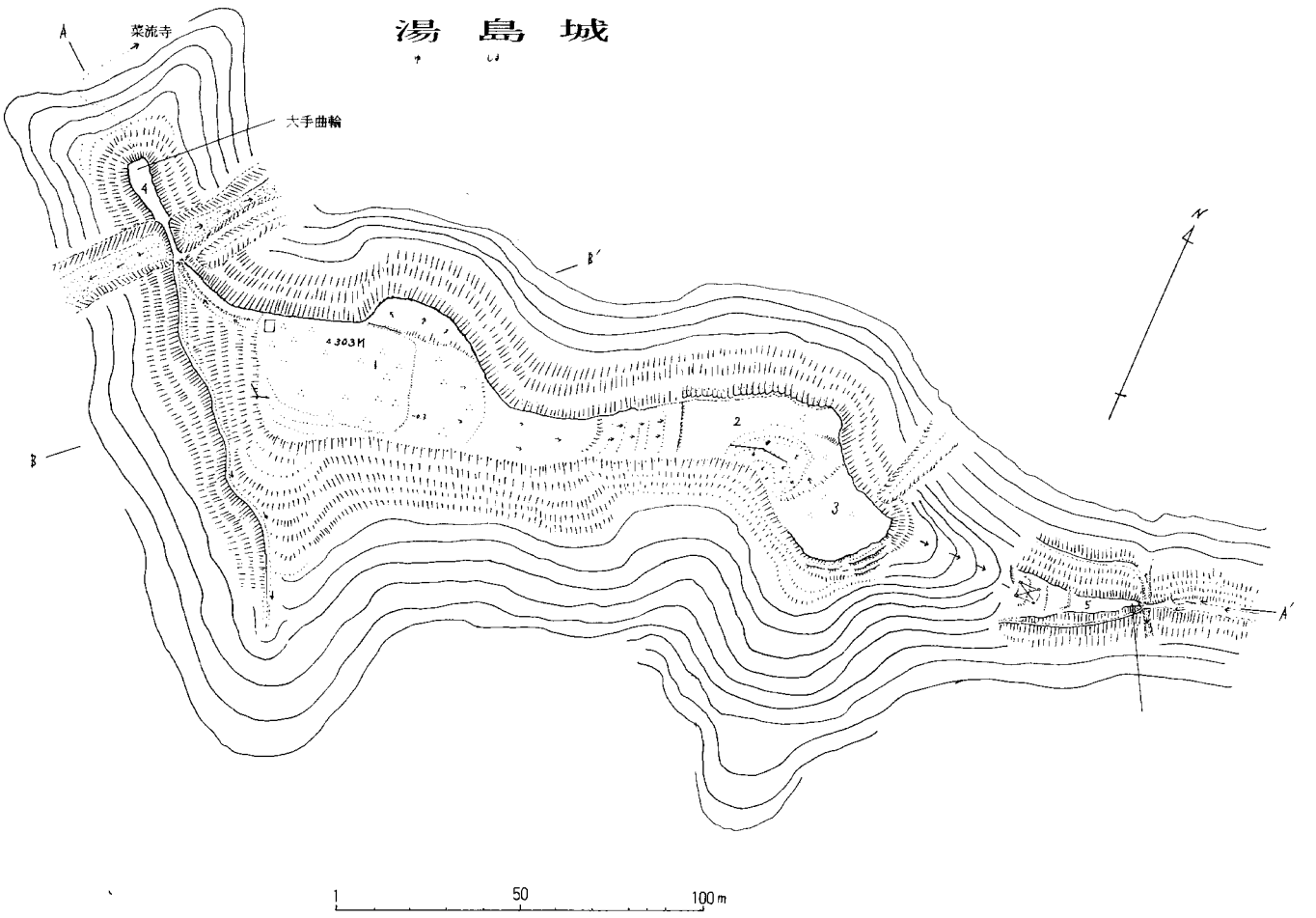
第32図　湯島城位置図

突端部は、幅三m余になる。この地点に堀切が一条構えられている。幅三m余、深さ二m余りの規模である。この堀切は、土橋形式であるが、小規模なことや、対岸の尾根が除々に登り勾配になっていることから考えると、背後の防御性が極めて低い。これに加えて、南側の長大な斜面には、横堀、竪堀・切岸もなく、敵の侵入に対して防御構想が曖昧である。

湯島城の縄張は、現況の遺構でみる限り、開墾による破壊を除外するならば、築城工事が未完成のまま戦闘に入り、落城後は放棄されたものではあるまいか。

湯島城が資料に登場するのは『満済准后日記』の中で、永享五年（一四三三）九月九日の条に「狩野介城、湯島城云々。今月三日責落了。奥城計二罷成定退治。不可有程與云々」との記述がある。当時駿河の今川氏は、範政の死後、後継者争いを範忠派と千代秋丸派の二派に分かれ、領国内の有力国人衆や一族、それに足利将軍家とが複雑に絡み合い、内紛状態にあった。範忠派の今川右衛門佐貞秋は、軍勢を率い反範忠派の狩野氏の湯島城を攻め陥落させたのである。この討伐により国人一揆は、次第に壊滅状態になったものである。

狩野氏は、館を城の前面となる河岸段丘上（菜流寺の下段）に構え、詰の城として背後に湯島城を築城したものと考えられる。館址の存在は、未だ確定されていない。



第33図　湯島城縄張図（作成　関口宏行）

第三章　考古資料

第一節　各遺跡の概要目次

一、殿ケ谷遺跡……一一一
二、伊平遺跡……一一六
三、土橋遺跡……一二〇
四、林光寺遺跡……一二二
五、宇藤遺跡……一二四
六、潮海寺門前町遺跡……一二六
七、善福寺遺跡……一二八
八、元島遺跡……一三〇
九、大見寺遺跡……一三一
十、見付端城遺跡……一三二
十一、野際遺跡……一三三
十二、中島遺跡……一三四
十三、原川遺跡……一三五
十四、糸繰遺跡……一三六
十五、宮ノ前遺跡……一三七
十六、慈眼寺遺跡……一三八
十七、蔵ノ腰遺跡……一三九
十八、五郎兵衛遺跡……一四〇
十九、小田屋敷遺跡……一四二
二〇、瀬名川遺跡……一四四
二一、元富士大宮司館跡……一四五
二二、祢宜弥遺跡……一四六
二三、城ノ前遺跡……一四七
二四、石成遺跡……一四八
二五、藤丸館遺跡……一四九
二六、長溝遺跡……一五〇
二七、三沢西原遺跡……一五一
二八、寺屋敷遺跡……一五二
二九、西軒遺跡……一五二
三〇、御領所遺跡……一五三
三一、東側遺跡……一五四
三二、田中遺跡……一五四
三三、杉の谷遺跡……一五五
三四、潮海寺薬師堂跡……一五六
三五、皿山古窯跡……一六〇
三六、島経塚……一六二
三七、金子正敏宅所蔵品……一六三
三八、慈眼寺中近世墓……一六四
三九、胡麻段遺跡……一六七
遺跡分布図……一六八
鍋類一覧表……一六九
各遺跡器種組成表……一七〇
舶載陶磁器器種分類図……一七四
各遺跡舶載陶磁器一覧表……一七六
瀬戸・美濃産器種分類図……一七八
各遺跡国内陶磁器一覧表……一八二

※出土遺物の実測図は、縮尺1／4を基本とした。また、報告書が刊行されている遺跡については、本文より転写し、作成を行っている。

一、殿ヶ谷遺跡

菊川町東横地字殿ヶ谷

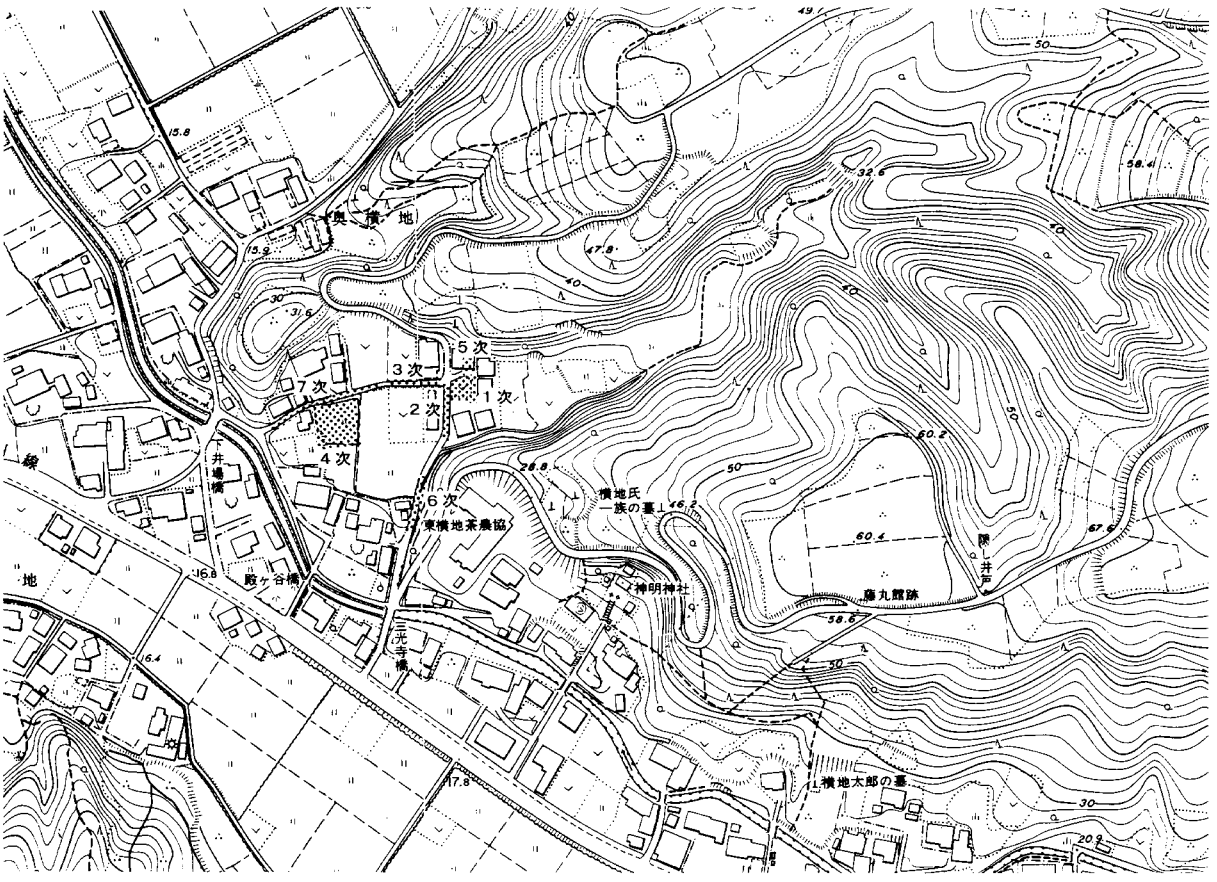
位置と地形　奥横地の西側にあたり、南と北には東西方向に丘陵が延び、丘陵に挟まった形で谷戸型の地形が展開している。遺跡は、谷の入口部の比較的広がった沖積地に立地し、近くに民家が建ち並ぶ。この地点は、昔から金谷往還を結ぶムラの玄関となっており、交通の要所となっている。

遺跡の概要　横地氏の居館跡と推測される遺跡で、遺跡範囲は一万㎡におよぶ。当遺跡では、昭和六十二年の第一次調査から平成十年の第七次調査にかけて過去七回の発掘調査が実施され、中世前半期を中心とした横地氏の居館を思わせる遺構・遺物が発見された。遺構としては数時期の生活面（整地層）とこれに伴う礎石建物跡や掘立柱建物跡それに多数の柱穴、土坑、溝、かわらけ溜りなどを検出した。礎石建物跡は東西六五六㎝、南北四九六㎝の規模で石列を伴い、県内では注目される遺構として挙げられる。

各年度の調査に伴って、国産陶器・舶載陶磁器・木製品・石製品などとともに、在地系の多量のかわらけ（土師質土器）や白かわらけも出土している。かわらけにはロクロ成形の底部が糸切り底のものと、京都系の技法を用いたといわれる手づくね成形のものが含まれていた。

出土遺物の中で注目されるのは、東国武士の中世居館跡では殆ど出土しない青磁酒会壺、泉州窯系の陶器盤、青白磁の梅瓶、小物類（合子、袋物、小皿類等）、黒漆地に朱漆で鶴丸を手描きした漆器皿、滑石製石鍋などが少量ながらみられたことである。また、出土遺物の大半を占める多量のかわらけの出土も大きな特徴として挙げられる。こうした出土状況は、京都をはじめ鎌倉や平泉などの都市的な場に調度品的な良質の舶載陶磁器が含まれていることと共通していて、これこそ殿ヶ谷遺跡の住人やこの場の使われ方の性格をよく表したものと言えよう。

この遺跡は、十二世紀終わり頃から形成され出した、在地の領主層クラ



第1図　殿ヶ谷遺跡位置図と調査地点

スの屋敷跡であり、この谷戸を殿ケ谷と呼称することからみても、横地氏の居館跡であったことは間違いないであろう。当地を本貫地として、台地の山野や山裾、谷戸田などの開発に努め、中央との関係を保ちながら領地経営を行っていた、地方武士の典型的な居館の姿を髣髴とさせるであろう。

調査の結果では、良好な保存状態の遺構や遺物が多数発見されており、平安時代末期から室町時代にかけての地方武士の谷戸型居館跡として重要な情報を提供している。

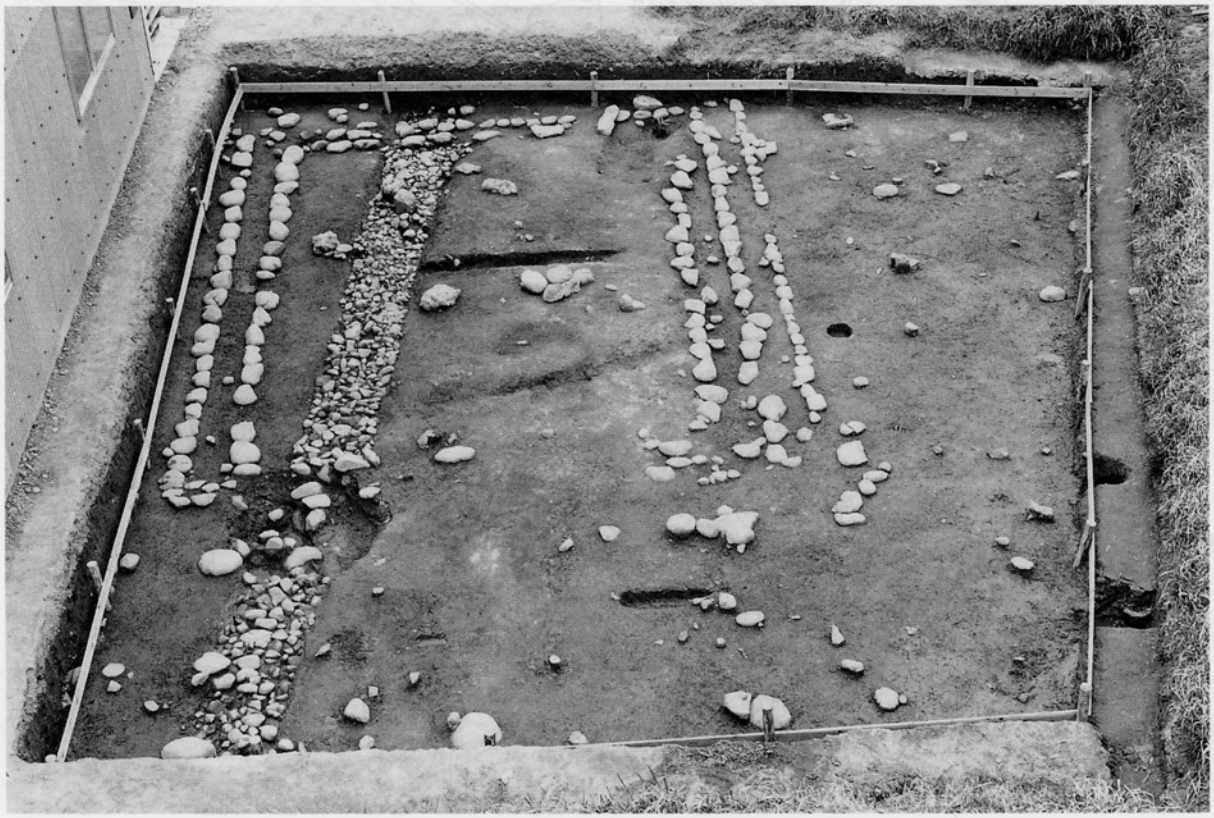
参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第一二集「殿ケ谷遺跡」　菊川町教育委員会　一九八八

菊川町埋蔵文化財報告書第三六集「殿ケ谷遺跡第四次」　菊川町教育委員会　一九九六

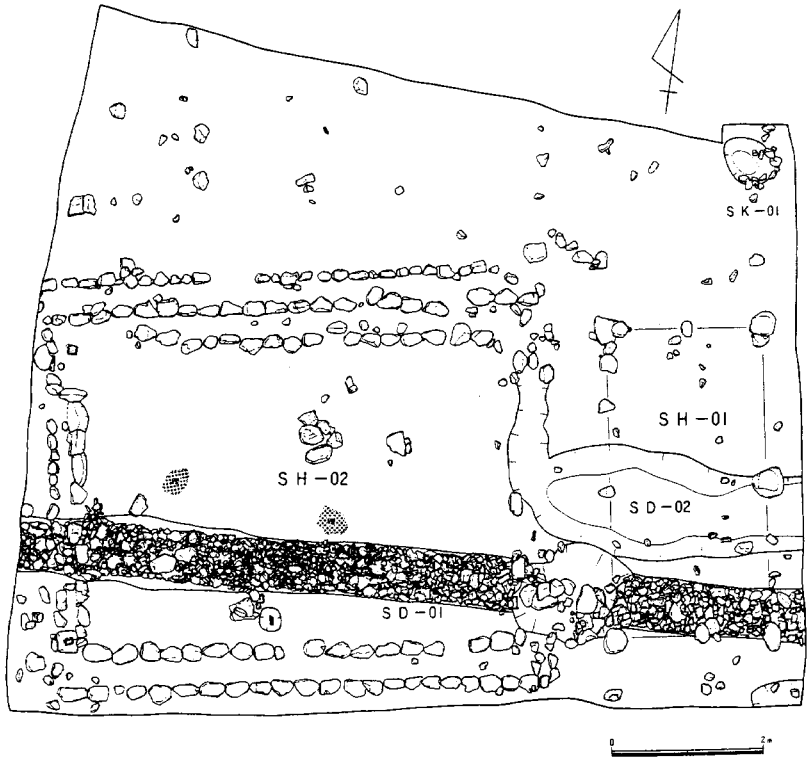
菊川町埋蔵文化財報告書第五一集「殿ケ谷遺跡第五次」　菊川町教育委員会　一九九八

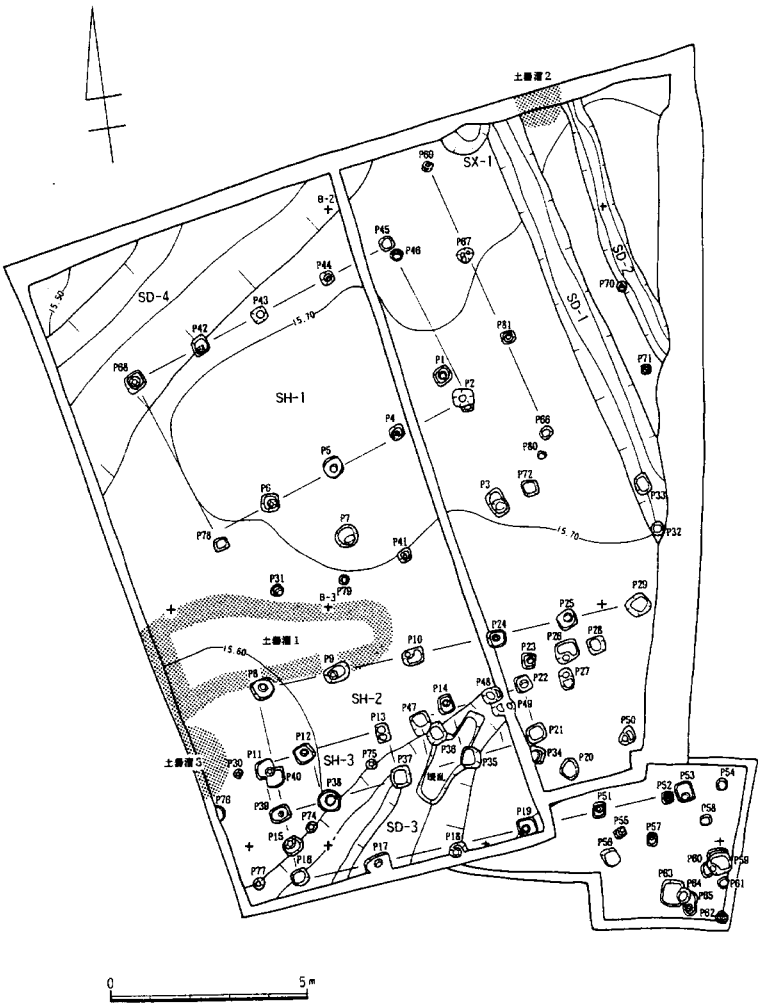
調査	面積㎡	遺構・遺物
第１次	100㎡	礎石建物跡２棟、溝１箇所、土坑１箇所 かわらけ、山茶碗、小皿、 青磁・白磁の碗皿類、瀬戸産入子、 折縁鉢、硯、漆皿、横櫛
第２次	25㎡	配石遺構　かわらけ、山茶碗
第３次	17㎡	土塁跡、かわらけ溜１箇所 舶載陶磁器
第４次	250㎡	掘立柱建物跡３棟、溝４箇所、 かわらけ溜３箇所 かわらけ、山茶碗、小皿、 瀬戸産天目茶碗・平碗・丸皿・擂鉢、 青磁・白磁の碗皿類、縁釉盤、砥石、 硯、銭貨
第５次	8㎡	柱穴跡 山茶碗、小皿、瀬戸産卸皿、青磁碗、 白磁皿、青白磁梅瓶・水注、箸状木製品 漆器皿
第６次	60㎡	かわらけ、青磁碗
第７次	21㎡	溝１箇所　かわらけ溜

第1表　各調査時の概要

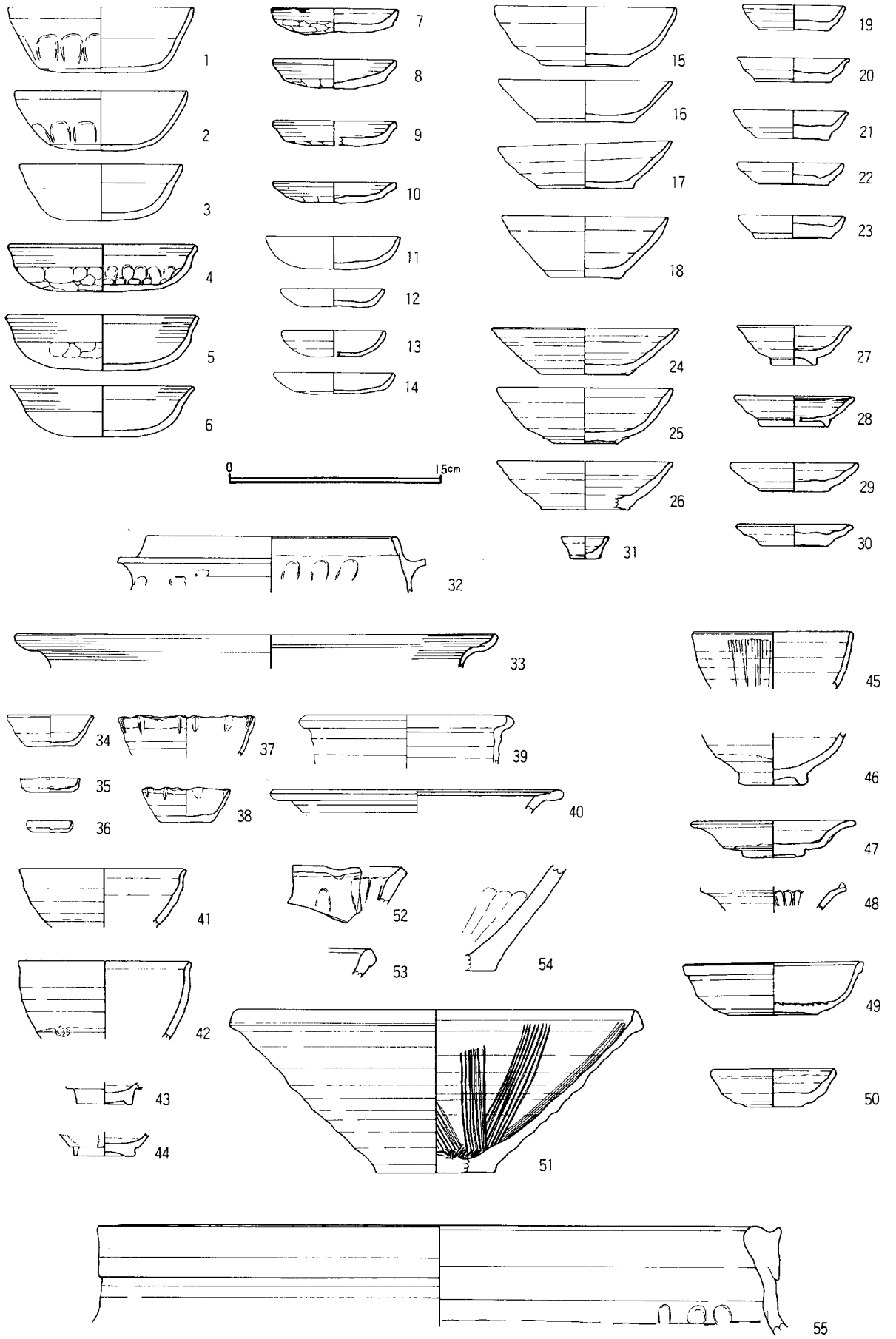


第1図　殿ヶ谷遺跡第1次調査検出礎石建物跡

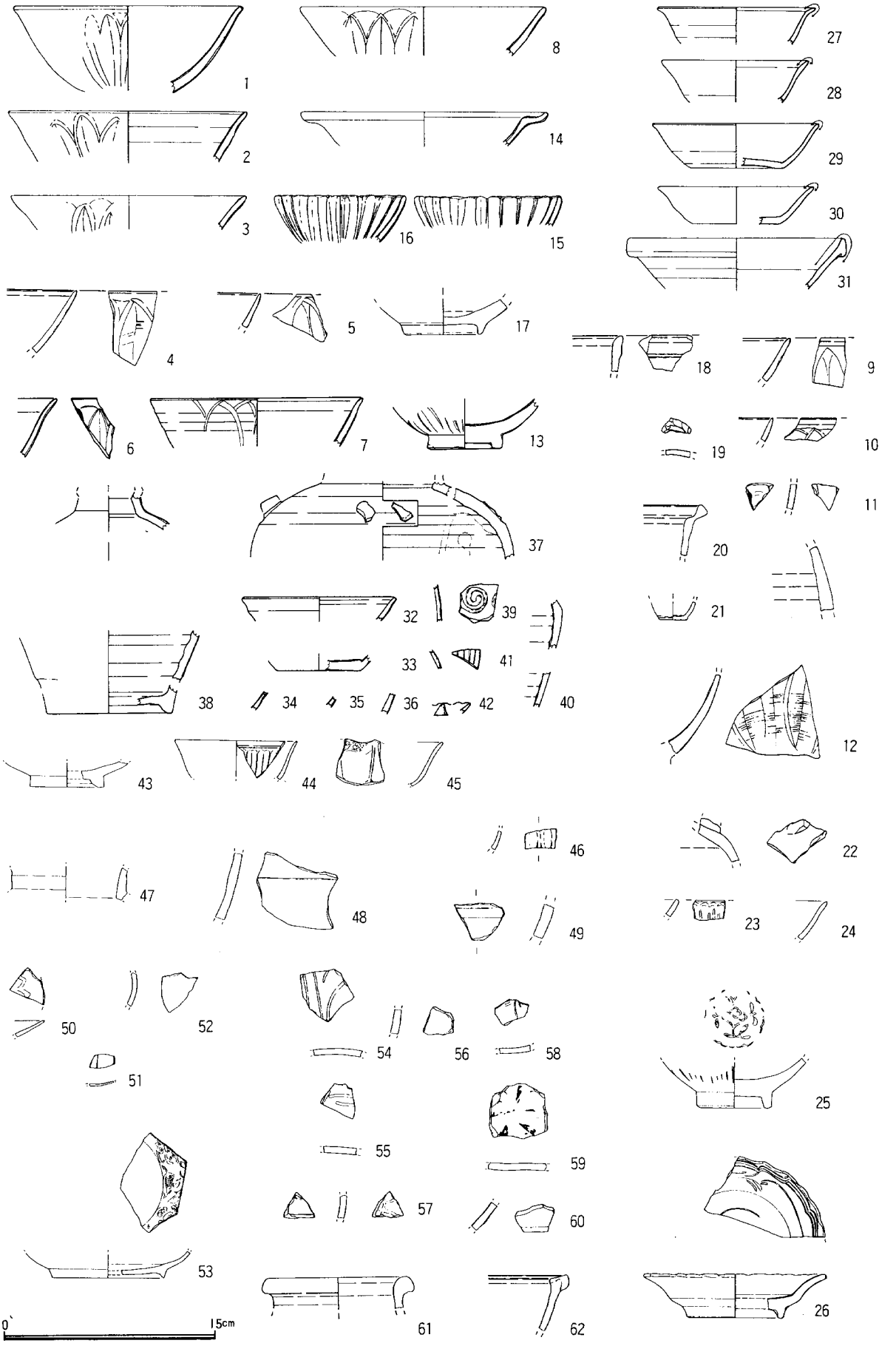




第2図　第1次・第5次調査区平面図



第3図　殿ヶ谷遺跡出土遺物実測図（1～23かわらけ　24～31山茶碗類　32・33鍋類　34～55国産陶磁器）



第4図　殿ヶ谷遺跡出土遺物実測図2（舶載陶磁器）

二、伊平（いへい）遺跡

菊川町東横地字伊平

位置と地形　奥横地の南西、延命段より谷を隔てた東方に位置する。遺跡周辺は、興嶽寺原丘陵から延びる小尾根が卓越した地域で、当遺跡の立地する地点は、尾根の先端部が谷戸地形となった入口部にあたり、沖積地が広がっている。

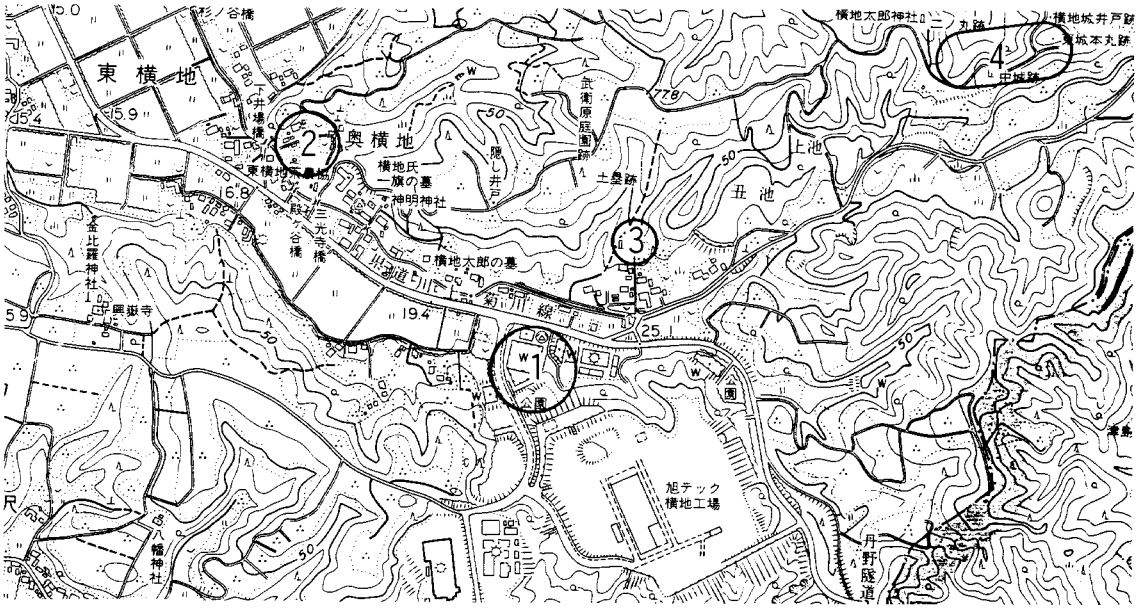
遺跡の概要　横地地区工業団地造成に伴い、平成三年から平成六年にかけて約七千㎡を対象に発掘調査が実施された。遺跡からは、鎌倉時代から室町時代にかけて、横地氏が活躍する時期に営まれた屋敷跡と推定される遺構・遺物が発見されている。屋敷の範囲は東西五〇m、南北七〇mを測る。北地点では、人工的に掘削された流路ＳＤ九〇が、東から西に向かって蛇行しながら流れ、舟入り施設や護岸の土塁が良好な状態で検出されている。また、谷戸が広く開けたやや西側に虎口遺構が認められた。虎口の構造より少なくとも三回の造営あるいは改築が行われたことが裏付けられる。屋敷内では、掘立柱建物跡一六棟、井戸状遺構七箇所、土坑一五箇所、多数の柱穴などを検出した。掘立柱建物跡は小規模な溝によって区画されている。特に東南隅では大型建物跡ＳＨ三がみられ、厩等の施設と推定される。また、丘陵を背にする形で、西側に建物が集中して配置されており、この遺跡の中心的な場所であったと考えられる。井戸は全て素掘りとなっていた。今回、屋敷地の南側の一段高くなった地点から、土壙墓がまとまって検出されており、屋敷地の空間構造を考える資料を提示している。出土遺物は殿ケ谷遺跡に比べ、かわらけの出土量は少なく、ロクロ成形のものが主体となり、室町時代の製品が多い。また、伊勢鍋、内耳鍋といった煮炊具の出土量の多いのも特徴といえる。舶載・国産品の陶磁器類は、主に十二世紀後葉から十五世紀代頃にかけてのものが、ある程度まとまって出土しており、その中に瀬戸・美濃産を中心として少量の舶載品を含んだ天目茶碗が多量にみられる。

当遺跡から検出した遺構群は、出土遺物などからみて、中世成立期の十二世紀後葉頃から営まれ始めた武士の屋敷であったと考えて間違いなさそうである。しかも、舶載陶磁器類をかなりの量入手していることや喫茶の習慣を身につけたことなどを考え合わせると、在地の領主層に近い立場にあった武士階層の屋敷であったと推測することができる。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第三五集「横地城南遺跡群　伊平遺跡・小太郎砦」　菊川町教育委員会　一九九五

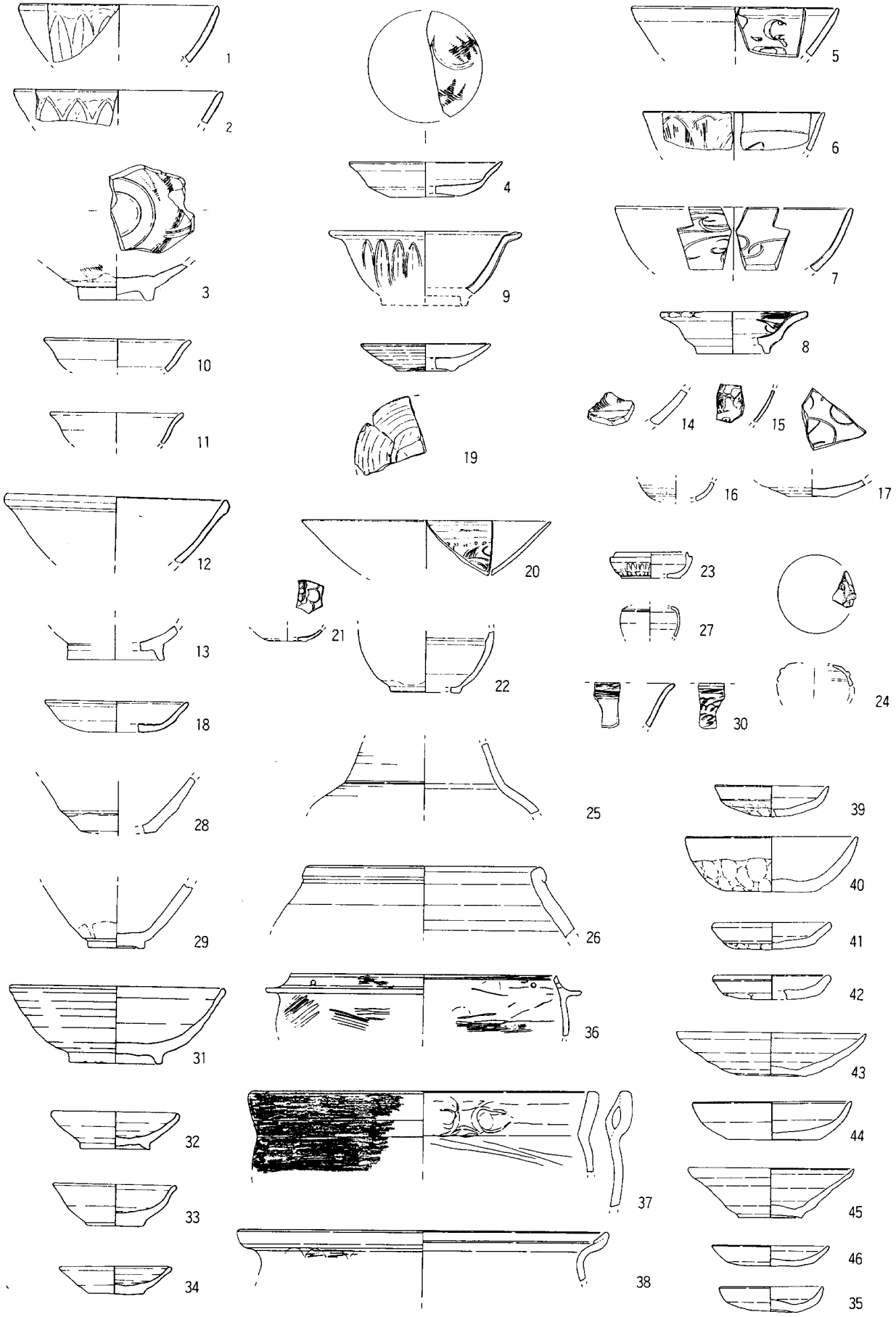


2　伊平遺跡完掘状況（空中写真）

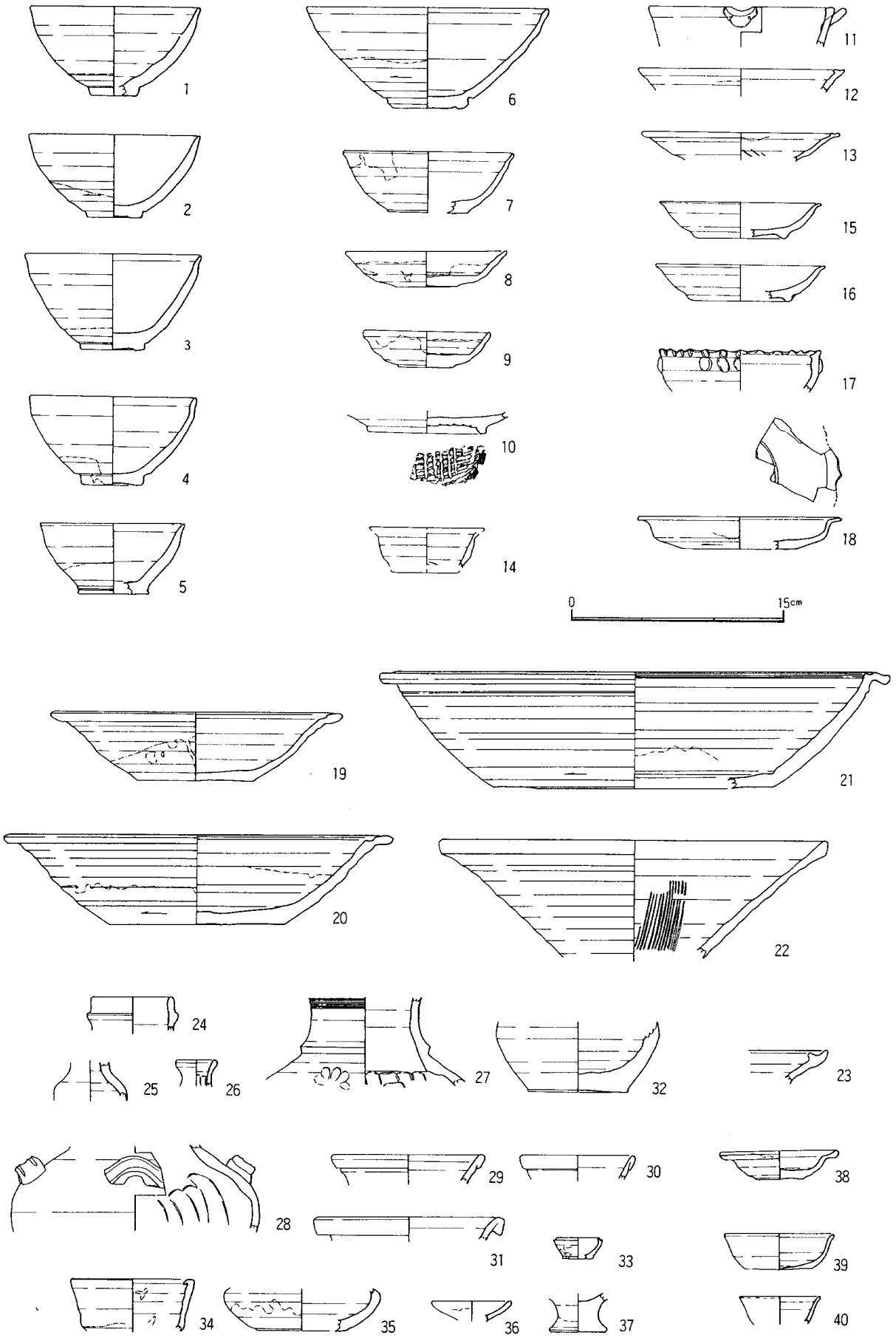




第5図　伊平遺跡平面図と位置図（1伊平遺跡　2殿ヶ谷遺跡　3慈眼寺遺跡　4横地城）



第6図　伊平遺跡出土遺物実測図1



第7図　伊平遺跡出土遺物実測図2（国産陶磁器）

三、土橋（つちはし）遺跡

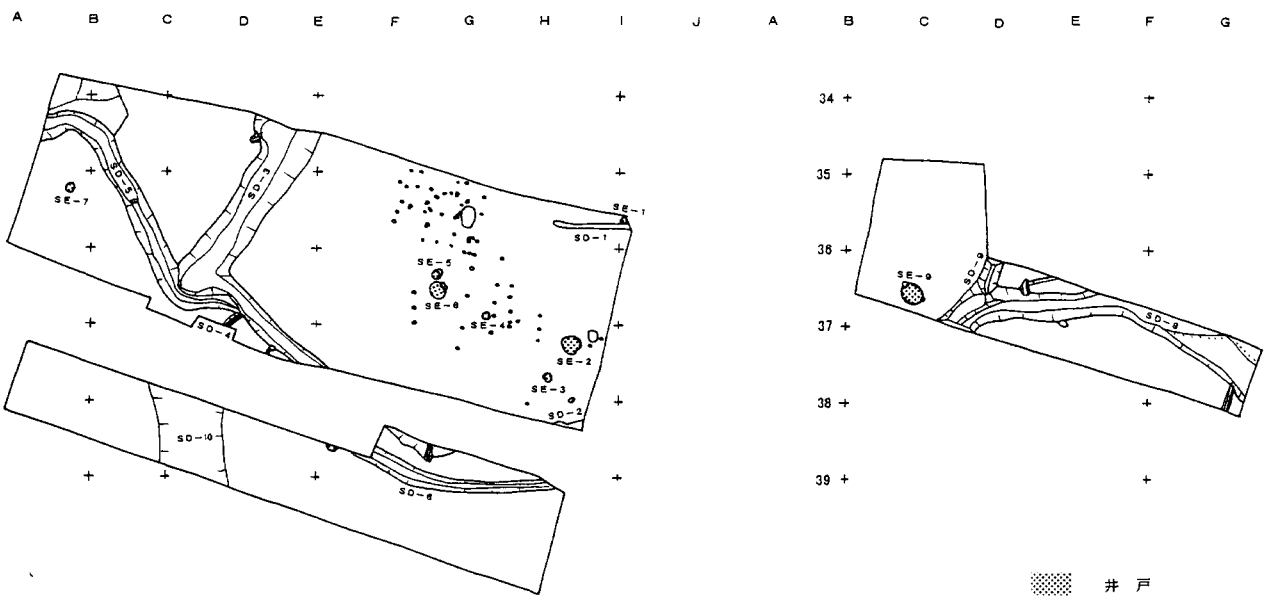
菊川町土橋字西軒

位置と地形　横地地区の中央側、牛渕川と菊川の間にあたる土橋に位置する。土橋周辺には、両河川によって形成された沖積平野が広がり、中央付近の微高地上を、県道浜岡線が南北に走り、古代より菊川と海岸を結ぶ主要な道路であったと推定される。遺跡は県道沿いの天神社周辺の沖積地に立地する。

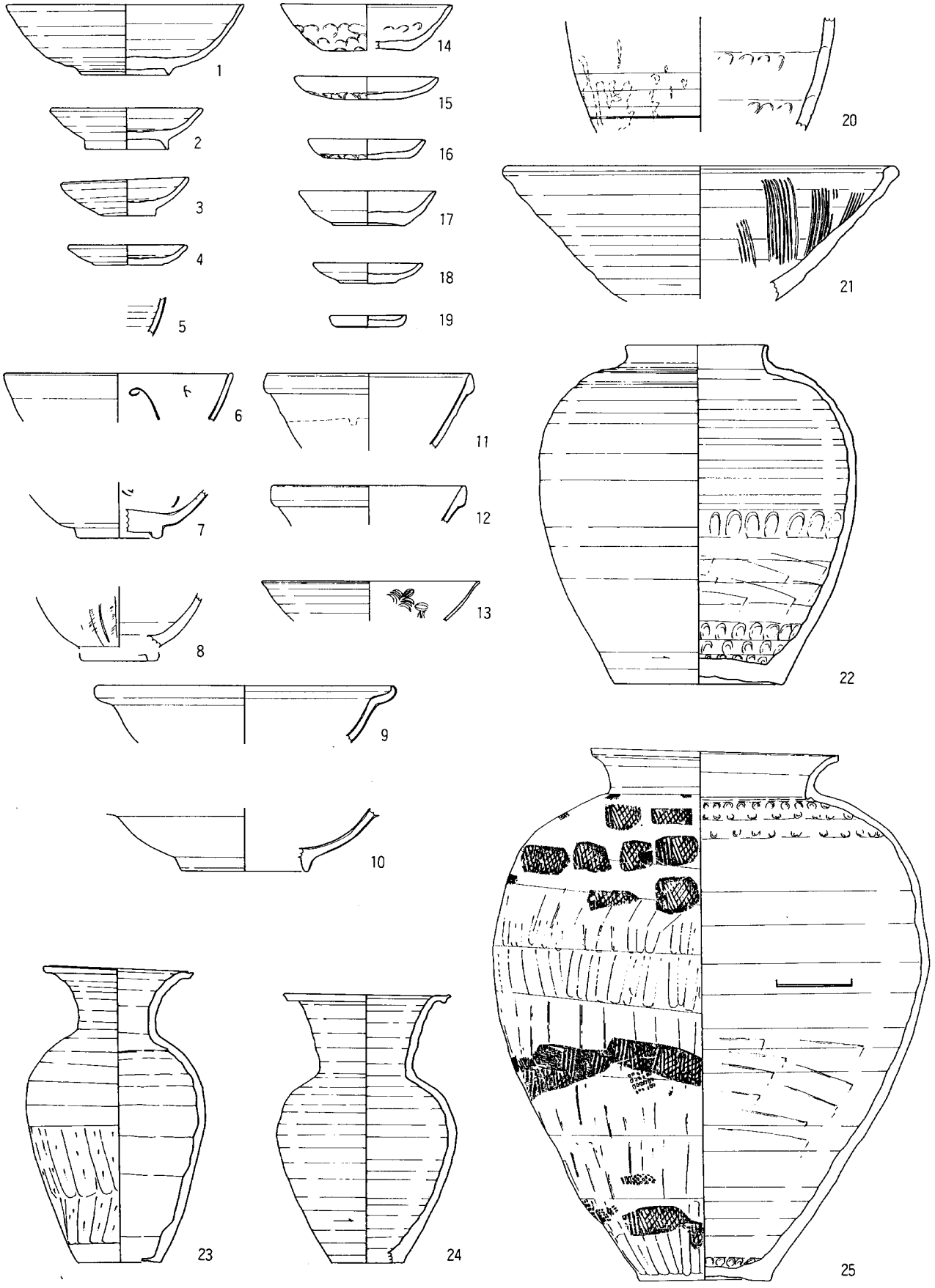
調査の概要　平成八年十月から平成九年五月にかけて、四千㎡を対象に発掘調査が行われ、当遺跡の所在が明らかとなった。発掘調査によって弥生時代から中世に至る複合遺跡であったことが判明した。特に中世以前の集落としては、遺跡周辺の沖積地では最も古い時期に位置付けられることや古墳時代の豪族居館を思わせる建物跡が検出され、常に文化の中心的な地点であったと推測される場所でもある。古代から中世にかけての生活面は後世の削平により、建物跡などは確認できなかったが、外郭に濠（ＳＤ三）を巡らした方形の区画内からは井戸跡・土坑跡などが発見された。これに伴って古代末期から中世初期を主体にした、夥しい量の東遠系の山茶碗類や木製品に混じって、東海地方産（常滑産等）や中国から輸入した陶磁器類が少量ながらみられた。木製品には生活用具（曲物・箸・下駄等）の他、この時期には珍しい形代類・呪符、笹塔婆などの呪術資料や信仰に関係する遺物が、濠跡から多数出土している。土器は十二世紀後葉から十三世紀前半頃の舶載陶磁器が目に付くものの、瀬戸・美濃産の製品も含め陶器は極めて出土量が少ない。さらに、山茶碗類の出土量の多さと比較して、かわらけの占める割合が極端に少ない点もこの遺跡がもつ特徴としてあげられる。

この遺跡は、遅くとも平安時代後期には屋敷が営まれ始めたと考えることができ、出土遺物からみると鎌倉時代後期頃までには屋敷の機能が失われていたことが窺える。当地域が加茂社領であったことや、屋敷の外郭を廻る濠跡から豊富な呪術資料が出土したことは、この屋敷の動向と消長を考える上で興味深い資料を提供している。

参考文献　菊川町文化財年報－第４号－「土橋遺跡」　菊川町教育委員会　一九九七
第４回郷土文化財展「土橋遺跡の出土品が語る古代中世の世界」　菊川町教育委員会　一九九八



第8図　土橋遺跡平面図（縮尺1/100）



第9図　土橋遺跡出土遺物実測図（1～4山茶碗類　5～13舶載陶磁器　14～19土師質土器　20～24国産陶器）

四、林光寺遺跡

菊川町土橋字東軒

位置と地形　土橋遺跡が立地する一連の低地部に形成された微高地上に立地し、その中央東側にあたる。東側には深田と呼ばれる沼地が広がり、その東から南にかけて牛渕川が南流する。西側は菊川によって形成された肥沃な沖積平野で水田地帯となっている。遺跡周辺は興嶽寺の末寺、林光寺の境内にあたり、昭和二十三年廃寺となっていた。

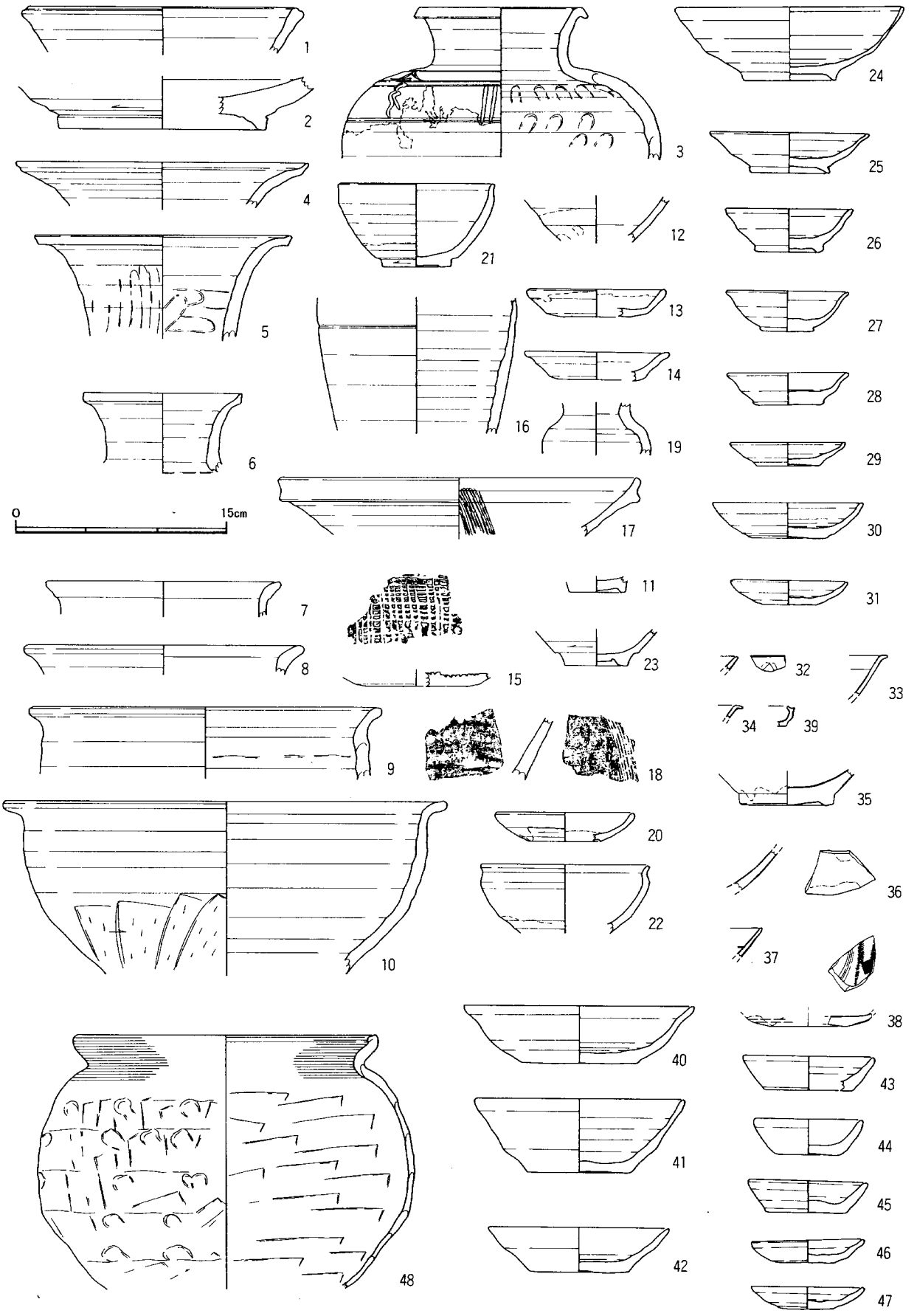
遺跡の概要　店舗兼倉庫の建設に伴う開発用地となり、平成六年十月に約三四〇〇㎡を対象に発掘調査が行われた。遺跡は調査の結果、古墳時代前期から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。中世の遺構としては、掘立柱建物跡三棟分、土坑一〇箇所、流路一箇所が検出された。遺構密度は低く、小規模な掘立柱建物跡が中心であり、集落の中心的な空間ではなかったと推測される。遺物は山茶碗類が多量に出土しており量も多く、次いでかわらけなどの土師器類で占められていたが、常滑産や瀬戸・美濃産、舶載品の陶磁器類は極めて少ないのが特徴である。その殆どは大溝跡（ＳＤ三八）から出土したものである。大溝からは下駄、櫛といった木製品も出土している。

遺跡の北側に検出された流路によって、居住地の北端が明らかになっており、隣接する土橋遺跡の方形の区画を伴う屋敷地との関連性や集落範囲を考える上で、多くの問題を投げかける遺跡といえる。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第五五集「林光寺遺跡」　菊川町教育委員会　一九九九



3　林光寺遺跡周辺遠景（空中写真）



第10図　林光寺遺跡出土遺物実測図
（1～22国産陶磁器　23～30山茶碗類　31～38舶載陶磁器　39～47土師質土器）

五、宇藤遺跡

菊川町神尾字大平

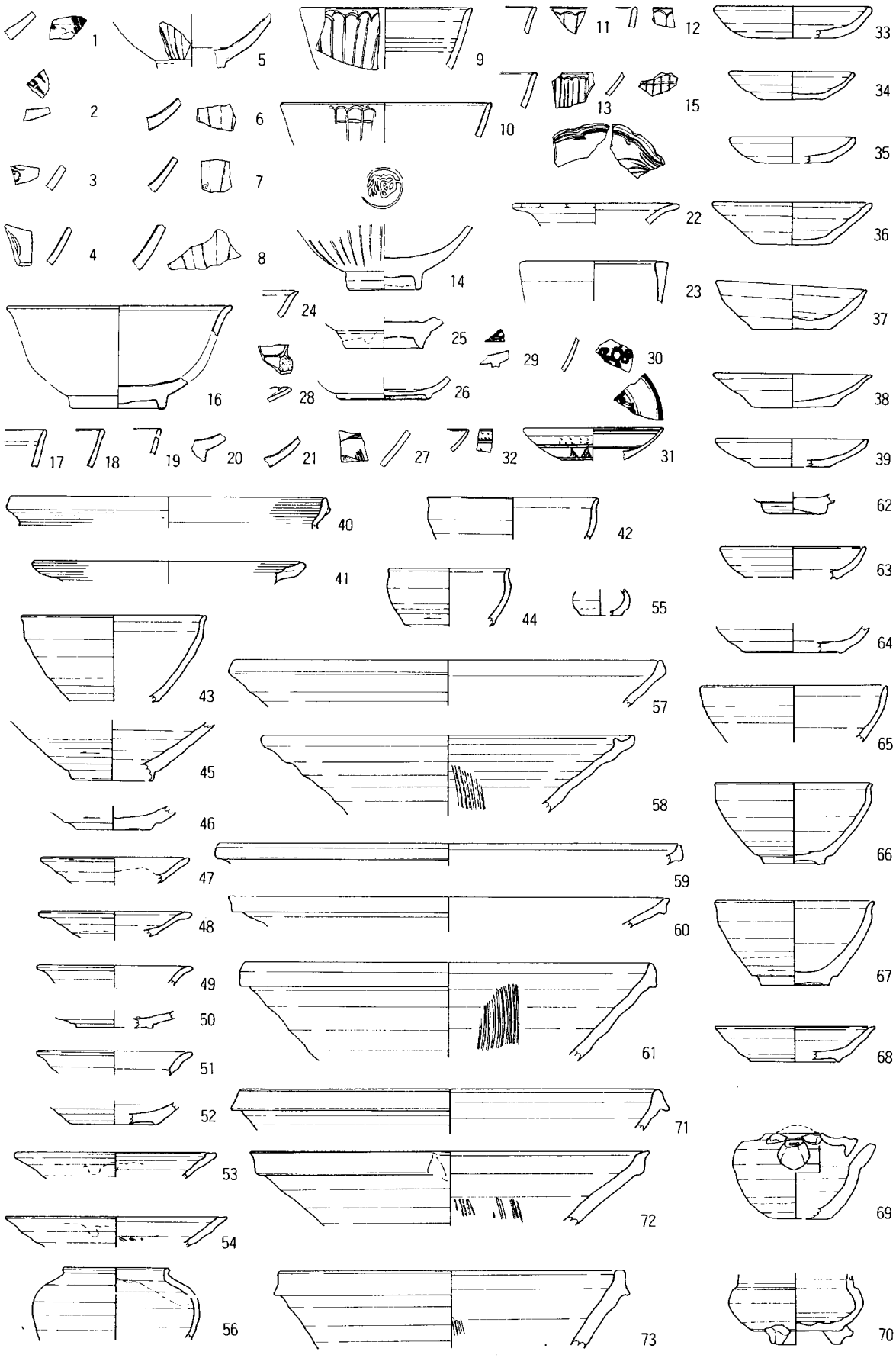
位置と地形　沖積地に突き出した舌状の丘陵の東斜面に立地している。その小丘陵は、牧ノ原台地より南北に延びる尾根から派出したもので、尾根筋が神尾と東横地と本所の村境となっている。東側には牛渕川が流れ、沖積平野が広がる。丘陵裾に沿う形で金谷町と大須賀町を結ぶ道路が通り、古くから「横往還」と呼ばれる主要道であった他、菊川町とを結ぶ小道の合流地点でもあり、遺跡周辺は交通の要所でもあった。

遺跡の概要　総合共立菊川病院の建設に伴い、平成六年十月から七年二月（第一次）と平成七年五月から六月（第二次）さらに平成九年六月から九月（第三次）の三回の発掘調査が実施された。第二・三次調査地点は茶畑となっていたため、茶園の耕作によって遺跡の保存状態が心配されたが比較的良好であった。しかし、第三次の調査区は寶珠寺境内であったため、中世面の一部が攪乱を受けていた。調査の結果、掘立柱建物跡六棟分や柱穴群、井戸一箇所などが検出された。第二次地点では雛檀状の狭い平坦地に屋敷を構えたような建物跡が発掘された。第三次地点では、寶珠寺境内周辺に遺構が集中して検出されたが、建物跡はいずれも西に延びており、調査区が屋敷地の東側の隅にあたり、主体は西に広がっているものと思われる。遺物は土器が主体で、柱穴や井戸跡などの遺構に伴って出土したものもあるが、大半は包含層となっている。土器の八割は、十二世紀後半から十三世紀前半の山茶碗類が占めていた。陶磁器では十五世紀前半から十六世紀前葉の舶載陶磁器、瀬戸・美濃産の製品が一定量みられた。当遺跡は、殿ケ谷遺跡や伊平遺跡などで確認された、この地域の中世成立期の資料を出土していることから、周辺遺跡との関連性を裏付けるもので、屋敷跡の性格を知る手掛かりとなるものであろう。また、横地氏の滅亡を前後する時期のものが比較的まとまって出土していることは、今後遺跡の性格を位置付ける重要な要因の一つとなろう。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第五九集「宇藤遺跡第2次・第3次」菊川町教育委員会　一九九九



第11図　宇藤遺跡調査区平面図



第12図　宇藤遺跡出土遺物実測図（1～32舶載陶磁器　33～41土師質土器　42～73国産陶磁器）

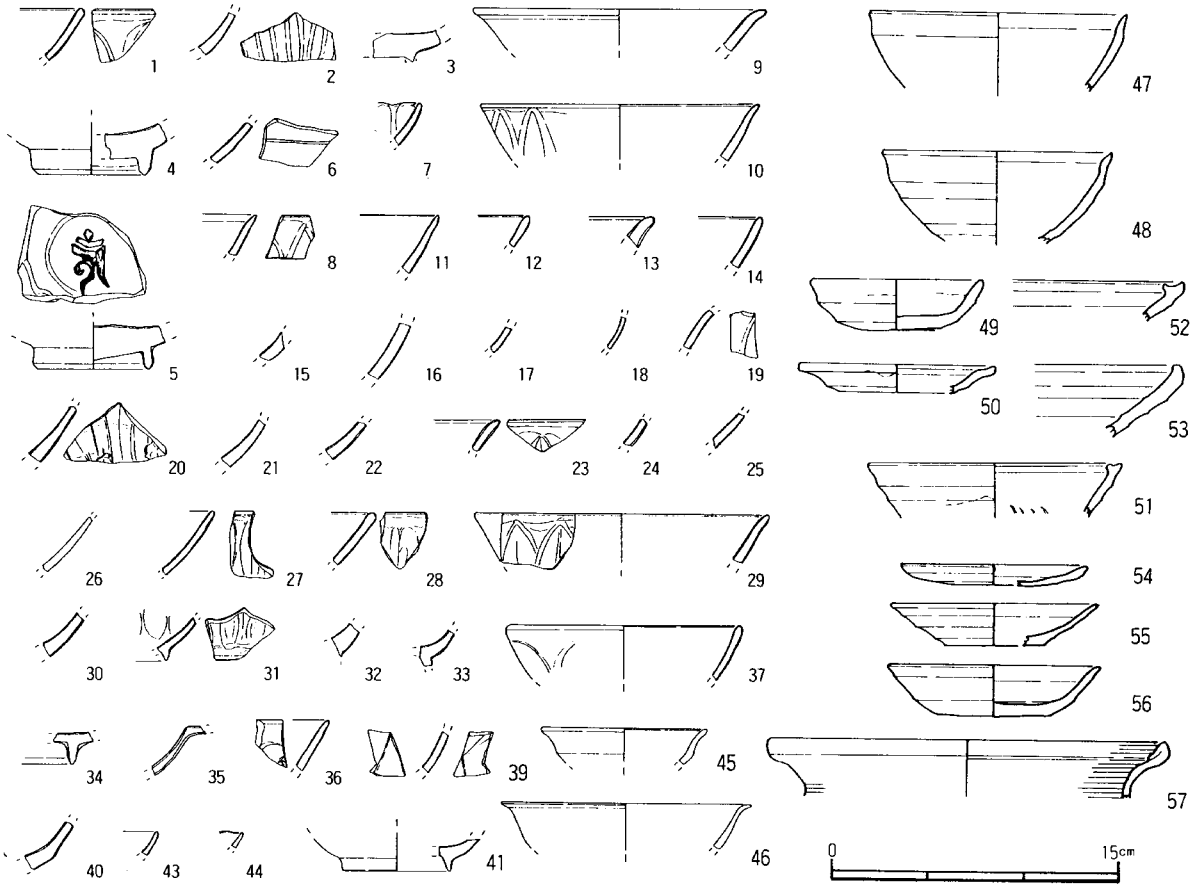
六、潮海寺門前町遺跡

菊川町潮海寺字下ノ段

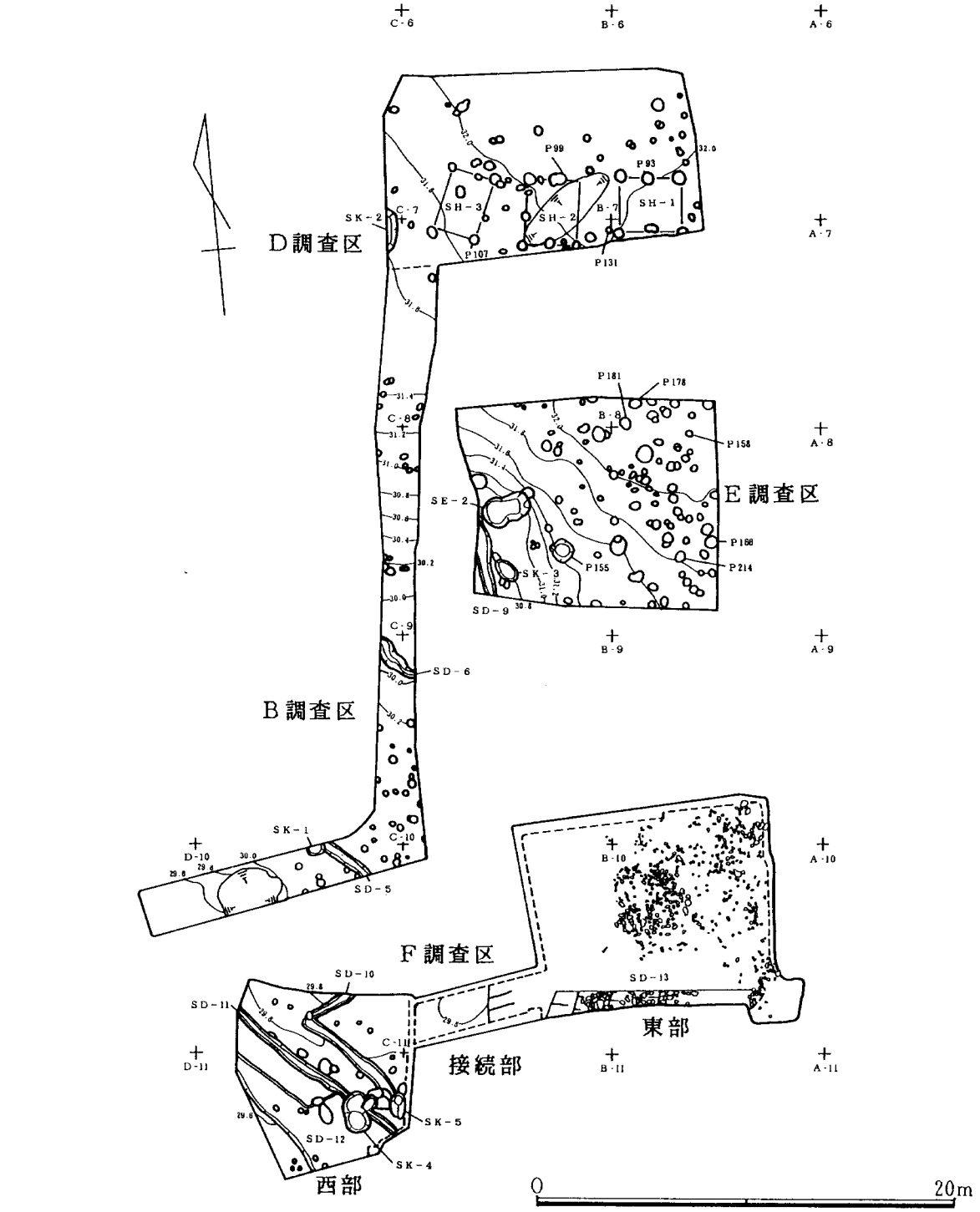
位置と地形　菊川町の北部にある潮海寺丘陵の南端付近の段丘上に立地し、眼下に菊川を望む。遺跡周辺は、標高三〇m前後と低位の丘陵部をなし、表土には黒ボク土壌が卓越している。潮海寺地区では比較的まとまった平坦地形を有する地点となっているため、近年宅地化が進み農業地帯から大きく変化しつつある。

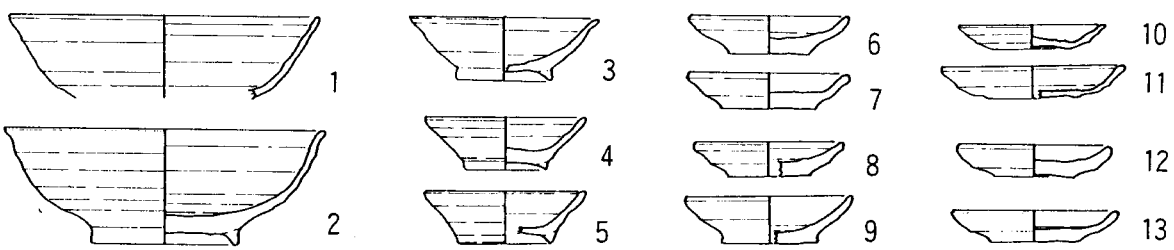
遺跡の概要　潮海寺地区には、小笠郡下の名刹真言宗潮海寺があり、地区の中央を参道が北に向かってまっすぐ延び、その両側に家が建ち並ぶ昔の景観を残す地域である。潮海寺は平安時代の開山と云われ、地区には現在でも潮海寺に関連する地名や僧坊名が多く残されており、門前町として古代から中世にかけて栄えた名残を伝える。当遺跡も、その影響下で成立したと考えられる中世遺跡である。平成七年三月から五月にかけて、七〇二㎡を対象に発掘調査が実施された。調査では、掘立柱建物跡三棟分、土坑五、井戸二、不明遺構一が検出されている。不明遺構は、SD一三又は濠とされるが、岩盤を掘削し、人工的に一段低い地形を創り出して平坦としたものである。さらに石敷となっていて特殊な遺構と考えられ、この遺跡の性格を考える上で最も重要なものであろう。遺物としては十二世紀から十七世紀の土器が出土している。常滑産の壺・甕、片口鉢などの製品が目に付く一方、十五世紀から十六世紀にかけての舶載陶磁器、瀬戸・美濃産の陶器が、一定量まとまってSD一三より出土している。さらに、志戸呂製品の占める比率も高く、横地城の遺跡の様相とは少し違いがみられ、当時の流通を知る良好な資料を提供していると考えられる。また、調査地点は寺院址としての伝承を残しているが、調査の結果からは、その痕跡を見出すことができなかった。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第三九集「潮海寺門前町遺跡」　菊川町教育委員会　一九九五



第13図　潮海寺門前町遺跡出土遺物実測図
（1～44舶載陶磁器　45～51瀬戸・美濃系陶磁器　52～55土師質土器）





第14図　潮海寺門前町遺跡平面図と出土遺物実測図（山茶碗類）

七、善福寺遺跡

菊川町富田字大門

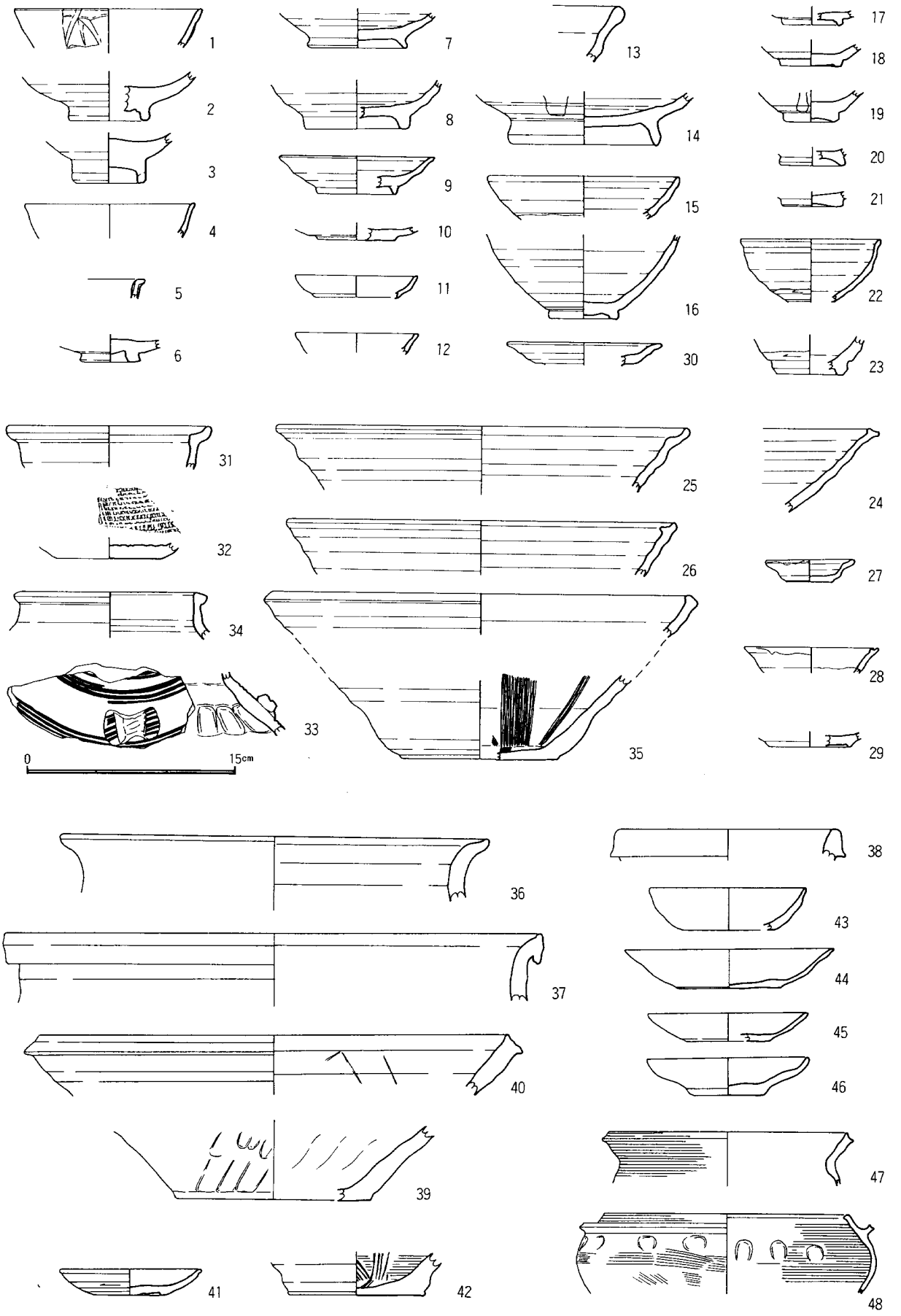
位置と地形　菊川町の北東部、富田川が菊川と合流する上流部の大きく蛇行した西側低位の丘陵部に立地する。遺跡周辺の丘陵は、標高三五m前後の平坦地となり茶園となっている。遺跡の西側に富田川が流れ、沖積地が広がり、さらに西の丘陵には富田城を仰ぐ。東側には沖積地が善福寺周辺まで延びていたが、県道東富田線の改良により埋め立てられ、その面影は道路の西側に残る。地形的には北を除く三方向を沖積地によって囲まれており、自然の堀の状況を思わせる地点である。

遺跡の概要　遺跡は富田川の改修工事に伴って、平成五年七月より一五〇〇㎡を対象に十一月まで発掘調査が実施された。遺跡名は、近くに善福寺が建立されているため、この寺院に関連する遺跡として名付けた。善福寺は、同寺縁起によると潮海寺末寺として創建されたと伝えられるが、今は曹洞宗寺院となっている。善福寺の周辺には、現在でも東西一〇〇m、南北一三〇mにも及ぶ大規模な範囲に土塁が残されており、西側の丘陵に立地する富田城跡や殿前などの地名を残すことから、中世居館の可能性が指摘されている。発掘調査では、整然と配置された掘立柱建物跡や堀などの遺構が検出されている。掘立柱建物跡は五棟分で、SH一・四は数回の建替えが行われ、溝によって区画されている。北に堀（SD二）と南面にSD一一・一二による溝によって、建物空間が区画されている状況をみることができる。遺物は全体に少ないが、在地産の山茶碗類や土師器類とともに、東海地方産、舶載品の陶磁器が少量みられたに過ぎない。年代的には十二世紀後半から十三世紀と十四世紀後葉から十五世紀にまとまりが認められるが、遺跡は十六世紀まで存続したと推測される。周辺の城郭や寺院との関係など、この地域の歴史研究の上で学史的価値を持つ遺跡である。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第二九集「善福寺遺跡」　菊川町教育委員会　一九九四



第15図　善福寺遺跡位置図



第16図　善福寺遺跡出土遺物実測図
（1～6舶載陶磁器　7～14山茶碗　15～41国産陶磁器　42～47土師質土器）

八、元島遺跡

磐田郡福田町豊浜字一本松

位置と地形　遠州灘に注ぐ太田川流域の河口付近、太田川流域の海抜二m程の平野に立地している。太田川は、遺跡の上流約二mの地点で原野谷川と、さらに下流一m程で古代に国府があった磐田市見付を流れる今之浦川とも合流しながら遠州灘へと注ぎ込んでいる。河口周辺には古くから知られた福田湊があり、近年まで船着場や護岸などが設けられ、物資を運ぶ船が往来していたようである。

遺跡の概要　文献によると慶長九年（一六〇四）の地震による大津波が、この周辺の集落を襲って壊滅的な被害を与えたという。元島の由来については、その後行われた太田川の河道改修に伴い、大島村と小島村を移転したことから、この地を元島と呼んでその名を残したという。

発掘調査は、平成六年七月から平成九年六月にかけて、財団法人静岡県埋蔵文化財研究所によって実施され、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが判明した。生活面としては八時期の遺構面が認められ、古くから繁栄を極めた地点であったと推測される。特に中世集落跡は、溝や濠で区画された中に掘立柱建物跡、井戸、土坑などの屋敷を想像させる遺構群が検出され、さらに屋敷の一部に付随して舟入り施設と思われる遺構も発見されている。それに伴って、夥しい量のかわらけ・鍋類などの土師質土器類や瀬戸・美濃産の製品、常滑産、舶載品などの陶磁器類の良質なものが豊富にみられ、さらに舟の碇なども発見されている。このように本遺跡は、溝や濠を運河のように巡らした町割に、船着場をもつ屋敷や倉庫が点在するような、福田湊に関連した中世集落の一部ではなかったかと想像される。おそらく、太田川やそれに合流する河川を利用した水運と沿岸の海上交通、さらに見付から東海道へと抜ける陸上交通の手段も含めて、周辺地域への物資集散地として重要な役割を果たしていたことが推測されよう。当遺跡の発見は、県内はもとより中世を代表する遺跡の一事例として、研究史上重要な情報を提供するものであろう。

参考文献　年報XV「4室町から戦国時代の物資集散地―元島遺跡―」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所



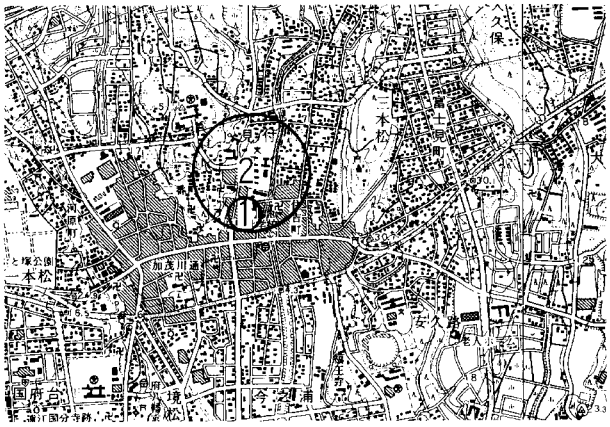
第17図　元島遺跡8区第1遺構全体図

九、大見寺遺跡

磐田市見付字寺小路

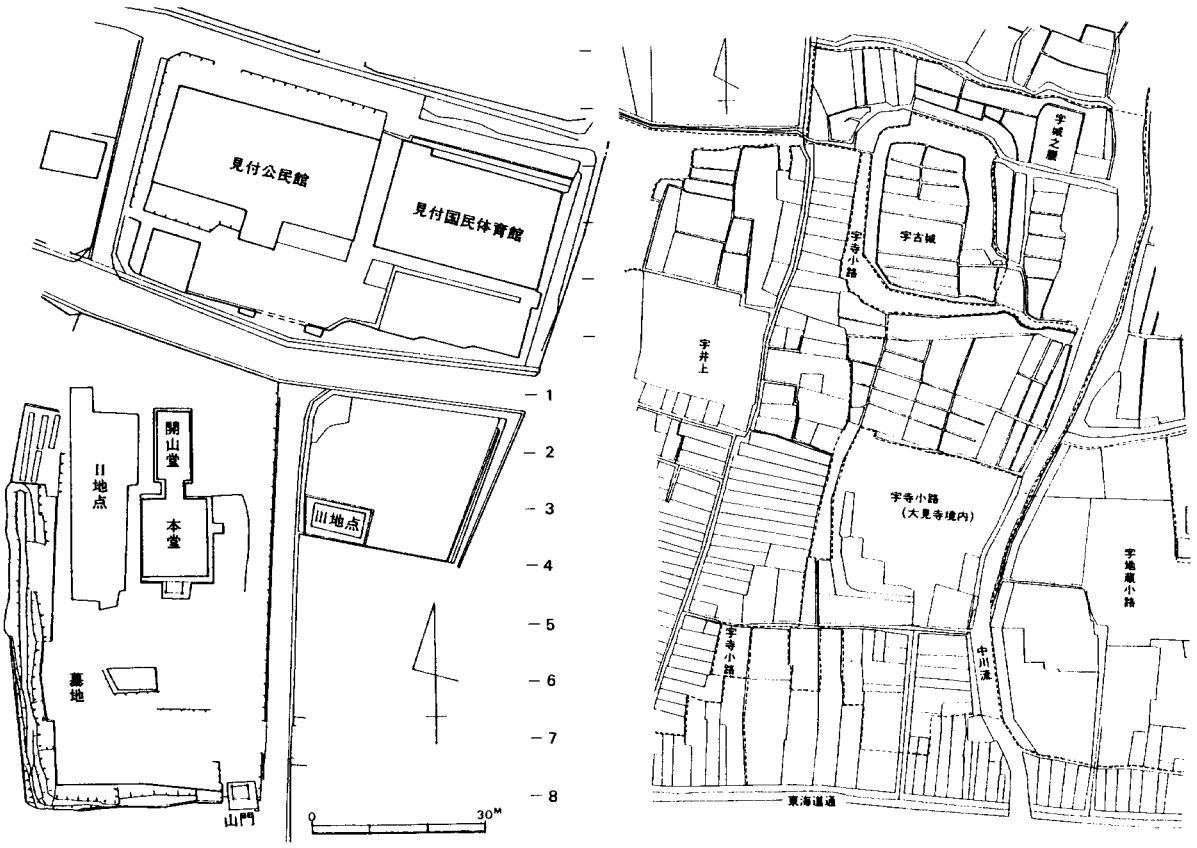
位置と地形　磐田原台地の南にあたる見付地区に位置する。見付地区は今之浦低湿地帯に望む見付丘陵先端の段丘上と、沖積地今之浦からなる。遺跡は見付丘陵の先端部で大見寺境内の低湿地帯にあたる。

調査の概要　昭和六十年度に発掘調査を実施した、見付端城遺跡第五次調査の地点にあたり、そこから出土した資料を一括してまとめたものである。大見寺は浄土宗智恩院派に属し、正和四年（一三一五）開基とされる。調査では奈良時代から近世にかけての時期に位置付けられている。奈良・平安時代では緑釉陶器など特筆すべき遺物が出土しているが、明確な遺構を伴わない。中世の遺構が主体で、溝や柱穴が検出されているが、調査区の制約のため建物跡の確認には至っていない。しかし、遺物では舶載陶磁器、瀬戸・美濃製品が高い比率で出土している。舶載陶磁器では青磁の碗・皿を中心に盤などの器種がみられ、十四世紀と十五世紀にまとまりがみられる。瀬戸・美濃製品では十五世紀に一定量の出土品がみられ、特に天目茶碗の数量が目に付く。また、志戸呂産の擂鉢が突出した出土量となっていることも注目される。当遺跡は、一応、大見寺境内にあるので見付端城と区分して考えたが、中世遺構見付端城の一端を反映している遺跡と考えられる。



第18図　1大見寺遺跡　2見付端城遺跡位置図

参考文献　昭和六十年度「見付端城」　磐田市教育委員会　一九八六



第19図　大見寺遺跡調査区と周辺地籍図（報告書より転用）

十、見付端城遺跡

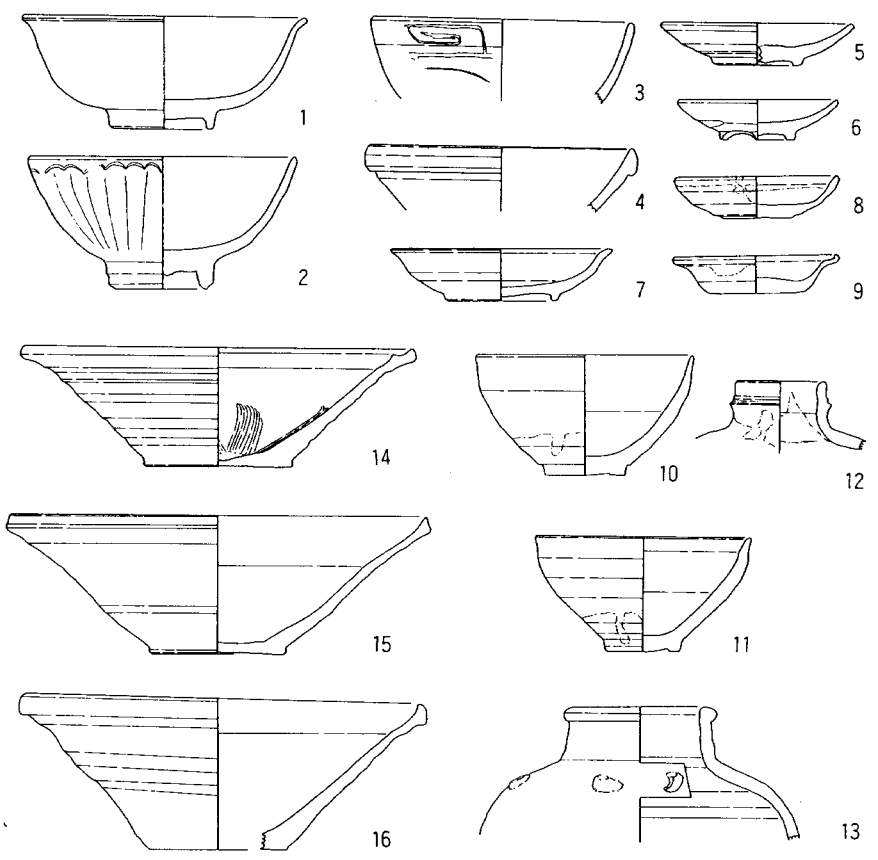
磐田市見付

位置と地形　旧東海道の宿場町として発達した見付地区の中央部に位置する。見付地区の中央部を中川が横断して流れる。中川の開折谷は磐田原台地中最も大きく、今之浦に注いでから、それ以南は低湿地帯を流れる。遺跡は中川の右岸、丘陵の先端にあたる。

遺跡の概要　見付は、遠江国分寺をはじめ古代から遠江の政治・文化の中心地であったことは確かで、時期は下るが、鎌倉時代に書かれた『東関紀行』には「見付の国府」との記事も見受けられる。見付端城は室町時代初期に築城されたという。文献上では天文六年（一五三七）の『天野文書』が初見で、これによると、見付端城は堀越氏と天野氏との戦いで落城したという。その後、城館として再興されているが、永禄十二年（一五六九）徳川家康による城ケ崎城への移転に伴って廃城したことが『三河記』に記されている。大見寺に伝わる元禄十一年（一六九八）の『大見寺絵図』から、見付端城の様子を窺い知ることができる。発掘調査は昭和五十六年一月より昭和六十年七月までの期間に計六回実施され、平安時代から江戸時代に至る遺構・遺物が発見されている。遺構では掘立柱建物跡二棟分、竪穴状遺構七、土坑二三〇、井戸五基、溝、多数の柱穴が検出されているが、中世は土坑と井戸・溝が主体で建物跡は確認されていない。遺物は灰釉陶器、山茶碗、舶載陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、かわらけなど出土量は豊富である。十二世紀以前の緑釉陶器、越州窯系青磁、瓦塔、円面硯などの遺物は、官衙との関連性が指摘できる。

舶載陶磁器類には、青磁の碗・皿・酒会壺・香炉・花生類と白磁の碗・皿・盃・四耳壺・水注類、染付の碗・皿や褐釉系陶磁器などが含まれている。中世前半に継続した遺跡であるために、青磁が七割近くと圧倒的に多く、器種構成も豊富であった。年代的には主に十二世紀後半から十五世紀代にかけての資料が中心となっている。瀬戸・美濃産陶磁器には、豊富な器種がみられ後期に出土量が多い。器種としては天目茶碗、平碗などが多く出土している点は注目される。十四世紀後半から十五世紀にかけて土器類の出土量が多く、器種構成も豊富であることからみて、見付端城の繁栄ぶりが想像される。一方、永禄十二年（一五六九）の見付端城の廃城時期を反映する遺物は極めて少なく、今後の課題を投げ掛けている資料と言えよう。

参考文献　「見付端城」　磐田市教育委員会　一九九三



第20図　見付端城遺跡出土遺物
（1～3青磁　4～6白磁　7～16瀬戸・美濃産陶磁器）

十一、野際（のざわ）遺跡

磐田市東貝塚

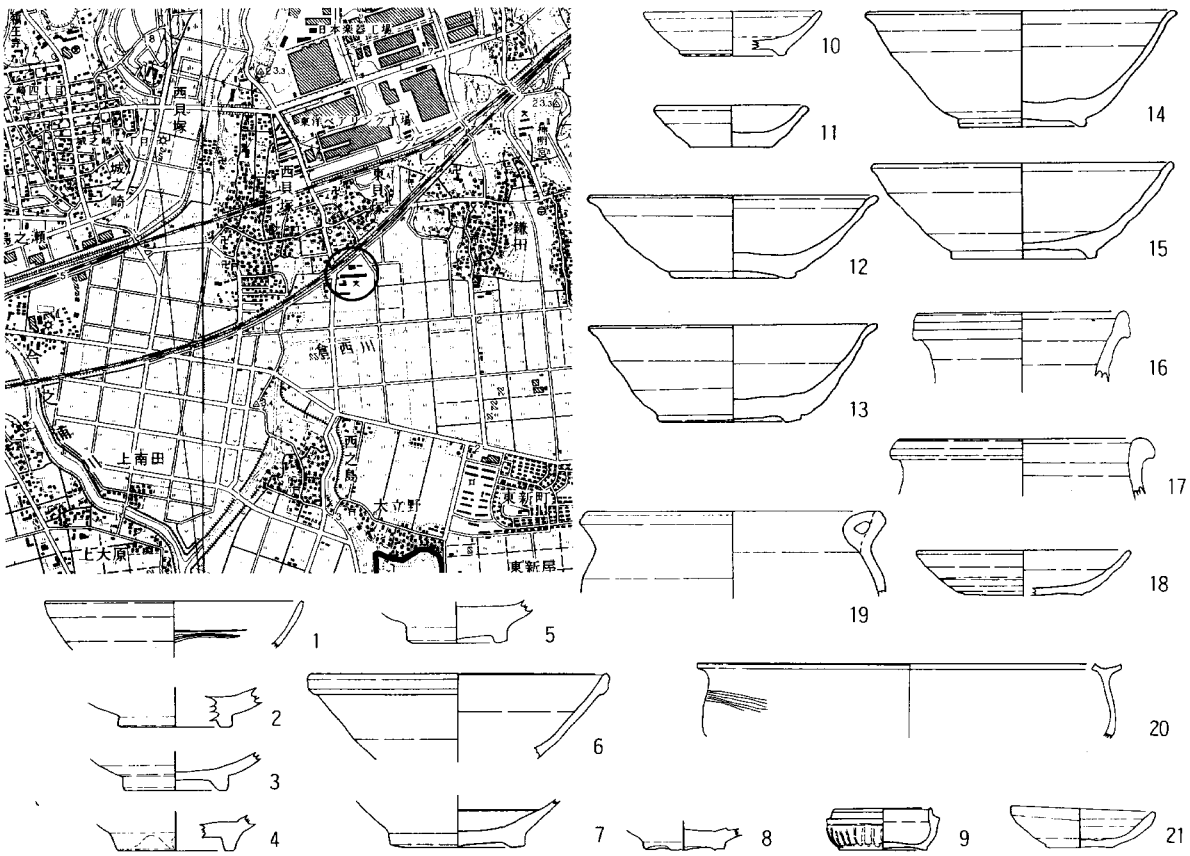
位置と地形　磐田市の南東部磐田市立東部小学校付近の舌状台地の先端に位置する。周辺は磐田原台地の南端部で、中小の浅谷よって低平な舌状台地が展開する。当遺跡は、最も東の丘に立地する。

調査の概要　東部小学校に関連する開発事業に伴い、昭和五十六年九月に行われた試掘調査から、昭和五十九年二月まで発掘調査が行われた。その結果、弥生時代中期、古墳時代前期、奈良・平安時代から近世の遺構・遺物を検出している。奈良時代の掘立柱建物跡十四棟分、竪穴住居跡四一軒分がまとまって認められ、これ以降中世にかけて当遺跡に集落が営まれたことが確認されている。中世には土坑、溝、井戸、多数の柱穴などの遺構が検出されているが、小規模であり建物跡として並ぶものが検証されていない。遺物は、各時期に比べ最も出土量が多い。土器には灰釉陶器、山茶碗、舶載陶磁器、瀬戸・美濃、志戸呂産陶磁器などがみられる。十二世紀から十四世紀前半にかけては山茶碗と舶載陶磁器が量的にまとまっており、十二・十三世紀前半にピークが認められる。瀬戸・美濃産、志戸呂産陶磁器は十五世紀後半のものが多く出土している。

当遺跡の東側には、鎌田という小字がみられ、平安時代に成立した鎌田御厨の中心地であったと考えられる。その影響を受けて古代から中世にかけて、この地区が発達したと推測される。しかし、武士の台頭する中で御厨は衰退していき、室町時代後期には国人領主松井氏の一部所領へと変貌を遂げていく地域であり、発掘調査の成果はまさしくこうした歴史的動向を反映する結果と言えよう。

参考文献

「野際遺跡概報」　磐田市教育委員会　一九八二
「野際遺跡Ⅱ・Ⅲ地点概報」　磐田市教育委員会　一九八四
「野際遺跡」　磐田市教育委員会　一九九四



第21図　野際遺跡位置図と出土遺物実測図
（1～5青磁　6～8白磁　9青白磁　10～15山茶碗類　16～18瀬戸・美濃産陶磁器　19～21土師質土器）

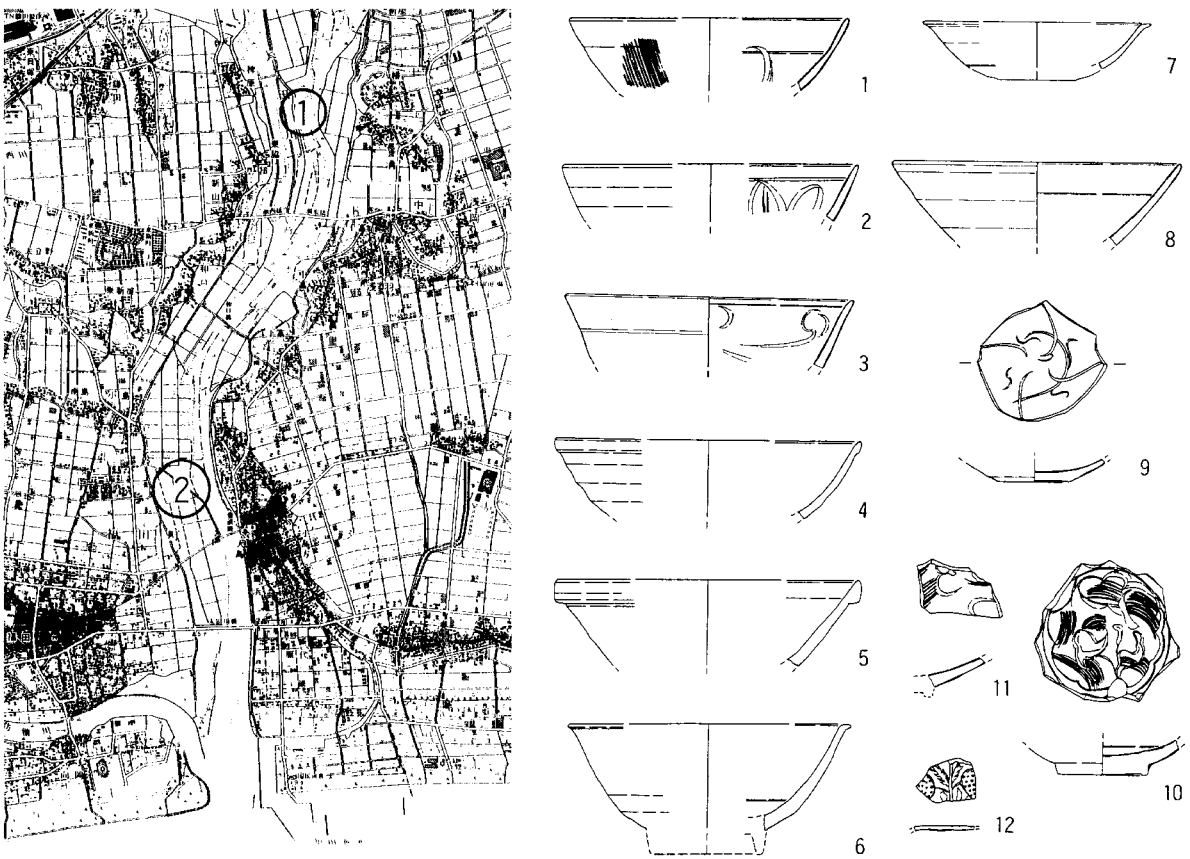
十二、中島（なかじま）遺跡

浅羽町長溝字中島

位置と地形　浅羽町の北西部、磐田市と浅羽町の境、原野谷川の右岸に位置する。原野谷川は掛川・袋井市を流れ、諸井地区で緩やかに西に流れを変え、長溝地区の西を南下する。さらに二瀬東橋の少し下流で太田川と合流し遠州灘へと注ぐ。遺跡付近は太田川と原野谷川が合流する地点で、沖積地が細長く広がっており水田地帯となっている。

遺跡の概要　河川改修工事に伴い、平成十年九月から平成十一年三月にかけて発掘調査が実施され、中世前期の集落が発見されている。遺構は、濠を巡らした屋敷地とみられる区画に、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、多数の柱穴が検出されている。出土した舶載陶磁器は、十二世紀後半から十三世紀前葉に位置付けられる白磁のⅣ・Ⅴ類碗、青磁の同安窯系櫛描文碗・皿や龍泉窯系劃花文碗の占める割合が圧倒的に高いのが特徴である。これに比べて鎌倉時代中期以降、全国的に爆発的な資料増加を示す青磁碗Ａ－１類（鎬蓮弁文碗）が僅かに出土しただけであった。出土比率をみると碗類の占める割合が皿類に比べて極めて高く、さらに青磁類よりも白磁類の方が高い割合を示すのが特徴である。土器では山茶碗、舶載陶磁器の白磁がまとまって出土しており、西に広がる鎌田御厨との関連性が想定される。町内の遺跡分布をみると、諸井地区周辺では自然堤防上に立地しているが、各時代によって立地状況に違いが認められる。このことは、集落が両河川の氾濫や流路の変化によって移動したものと推測され、当遺跡の状況はその一端を反映している。

参考文献　「中島遺跡」　浅羽町教育委員会　二〇〇〇



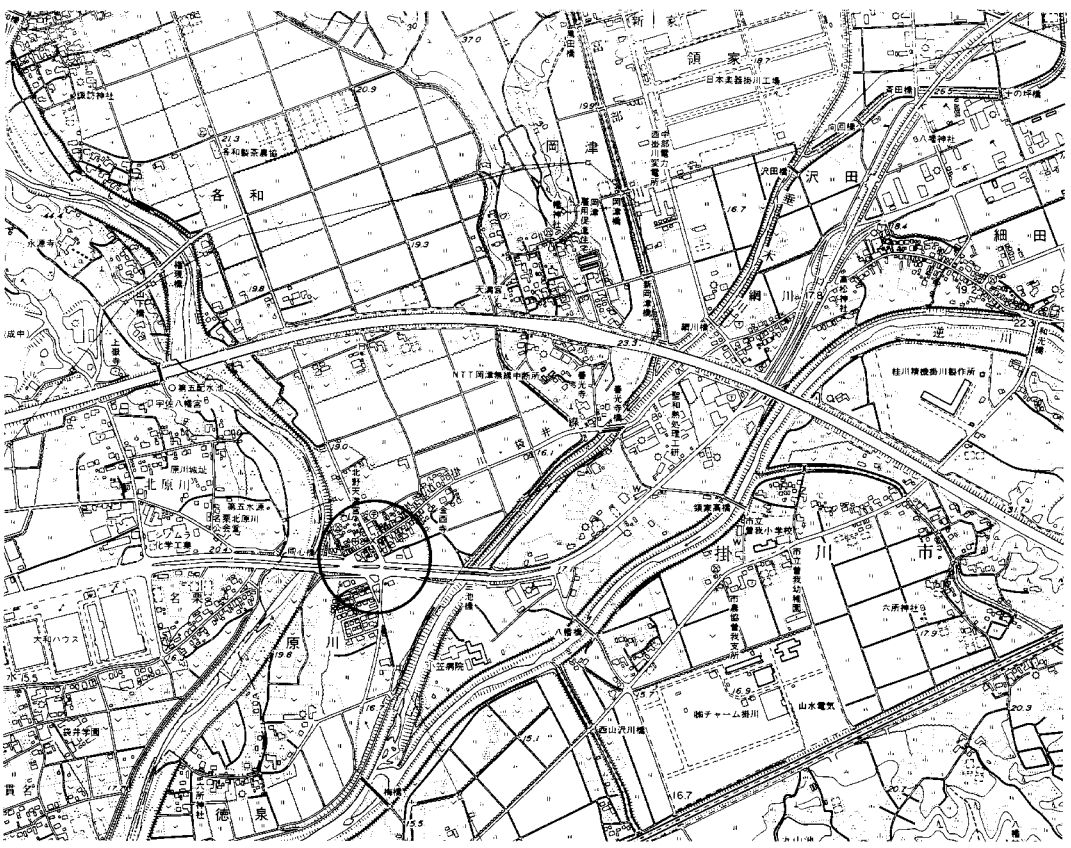
第22図　位置図（1中島遺跡　2元島遺跡）と出土遺物実測図（1～3青磁　4～9白磁　10～12青白磁）

十三、原川（はらかわ）遺跡

掛川市領家字原川

位置と地形　当遺跡は掛川市の中心部から西へ四・五km程行った、袋井市との境を流れる原野谷川の左岸に位置する。原野谷川は北方の八高山より流れ出て、和田岡原丘陵の東縁を南流し、原川付近で西へ流れを変え、下流で逆川が合流する。遺跡周辺には、原野谷川によって形成された沖積平野が広がり、肥沃な土地となっている。周辺遺跡には、西に奈良時代の官衙跡として注目される坂尻遺跡をはじめ、領家遺跡、梅端北遺跡など多くの遺跡が分布し、いずれも自然堤防上に立地している。

遺跡の概要　国道一号線袋井バイパスの工事に伴い、昭和五十九年十月から昭和六十二年十二月にかけて、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所によって発掘調査が行われ、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認された。特に注目されるのは近世期で、遺物は肥前、瀬戸・美濃、志戸呂などの産地の製品が多く出土しており、当時の流通を知る良好な資料となっている。また、在郷町「原川」の一端が明らかとなり、近世研究上重要な遺跡といえる。中世遺構は、調査区の西側にまとまって掘立柱建物跡、井戸、柱穴が検出されているが、後世の掘削や河川の氾濫によって、集落構造は不明瞭となっている。遺物は十二世紀後半から十三世紀前葉、十三世紀後半から十四世紀前半、十五世紀中葉から十六世紀の三時期にまとまりが認められる。十二世紀から十四世紀には山茶碗、青磁蓮弁文碗・皿の舶載陶磁器が一定量出土しているが、袋物や天目茶碗といった器種は極少量である。十五世紀以降では、十五世紀後半と十六世紀後葉に画期がみられる。この時期には瀬戸・美濃、志戸呂、初山、染付などの陶磁器が多種多量となる。当遺跡は陸路と水路との接点にあたる場所に位置しており、流通情報を提供できる資料となっている。また、近世、東海道を中心に発展した村の変遷を知る遺跡でもある。



第23図　原川遺跡位置図

参考文献　年報Ⅰ「4原川遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第二六集「原川遺跡Ⅳ本文編」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　一九九一

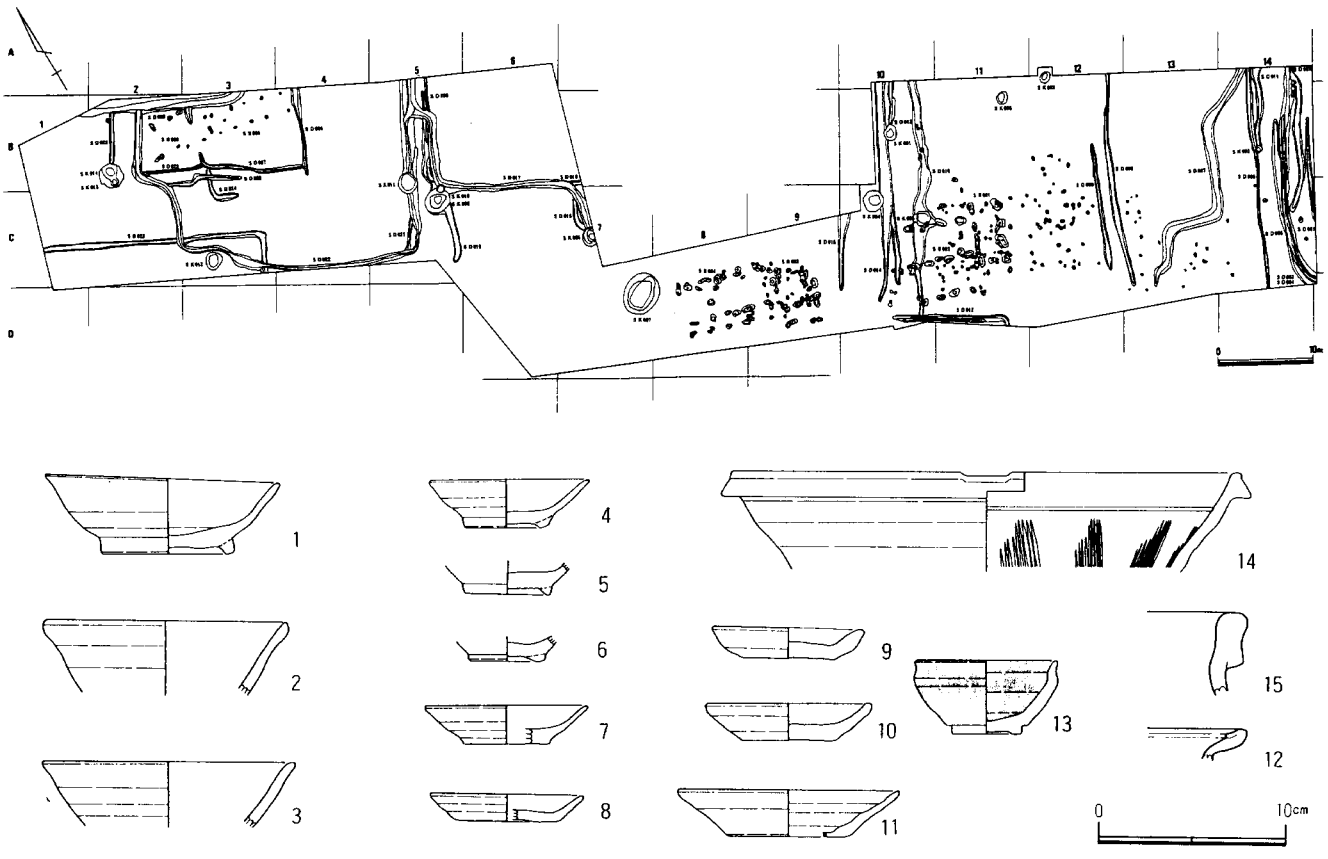
十四、糸繰（いとぐり）遺跡

大東町千浜字糸繰

位置と地形　大東町の東部、千浜地区の沿海平地、菊川の左岸側に位置する。大東町の地形は丘陵・段丘・平地に分けられ、南地域には沿海平地が発達し、砂堤列がみられる。砂丘は砂堤列上に砂が溜まったもので大須賀から浜岡町に卓越しており、浜岡砂丘や千浜砂丘などがある。遺跡周辺では千浜より南地域が砂堤列で、千浜より北地域の国包には後背湿地が広がり、糸繰はその境にあたる。

遺跡の概要　砂丘上の遺跡の存在は少なく、調査例は極めて少ない事例といえる。発掘調査は、昭和六十三年二月から六月にかけて実施され、中世から近世の集落跡が検出されている。なお、出土遺物の中には縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が認められたが、遺構に伴うものではない。集落跡は、十二世紀後半から十三世紀前半、十五世紀後半、十六世紀後葉から十七世紀前半の三時期に営まれたことが考えられる。十二・十三世紀では、十三世紀前半が主体で山茶碗類が大部分を占めるが、伊勢鍋が多く出土している。この遺跡の中心は十六世紀後葉から十七世紀前半で、出土土器の殆どはこの時期と推定される。土器では、かわらけ、内耳鍋、志戸呂産擂鉢などの器種を消費しており、日常雑器が目に付く。集落跡は十三世紀後半から十五世紀前半と十五世紀末から十六世紀前半に断絶期が認められ、十七世紀前半で集落が廃絶していることが、出土遺物より想定される。後者の断絶時期については、明応の大地震による津波被害で村が壊滅したのではないかとする説がある。調査で検出された遺物や遺構から、糸繰遺跡は一般的な集落の景観を呈していたことを物語っている資料と言えよう。

参考文献　「糸繰遺跡」　大東町教育委員会　一九八八



第24図　糸繰遺跡平面図と出土遺物実測図
（1～3山茶碗　4～6小碗　7・8小皿　9～11かわらけ　12伊勢鍋　13小天目　14擂鉢　15甕）

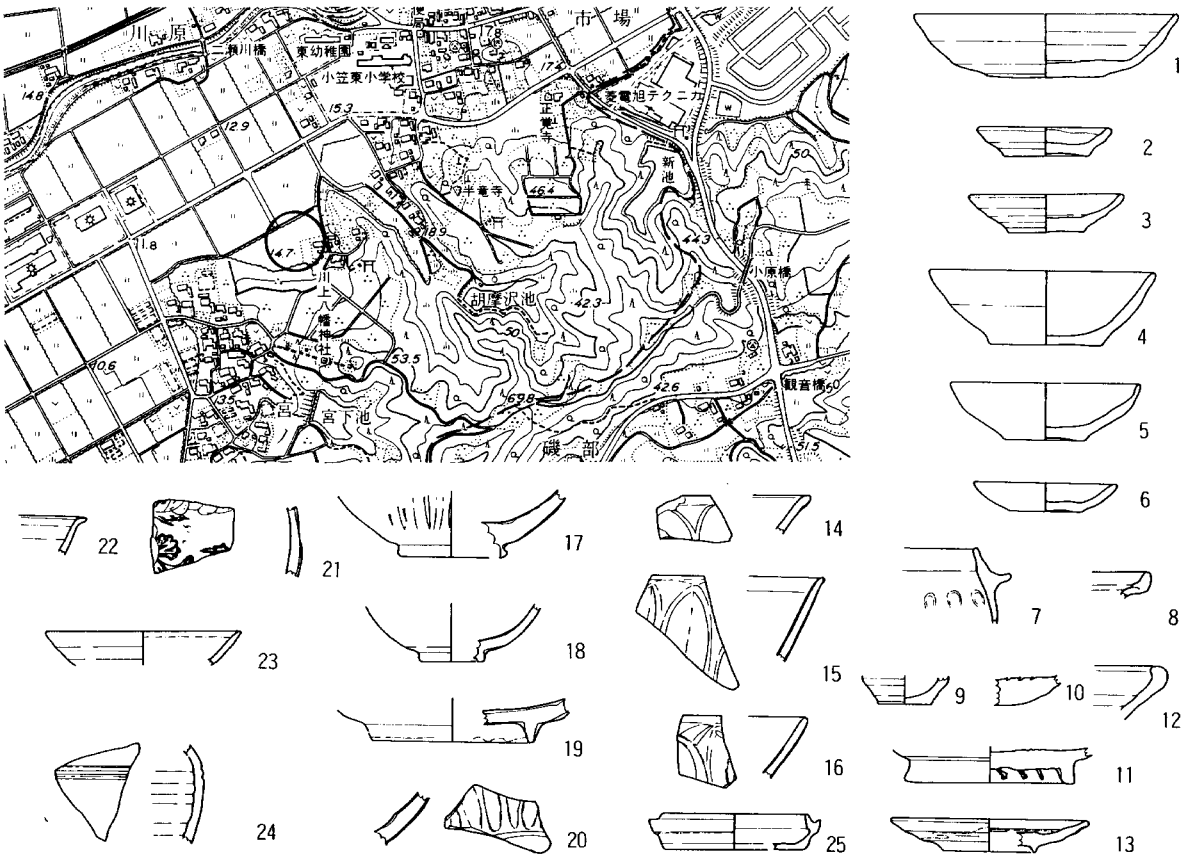
十五、宮ノ前遺跡

小笠町川上字宮ノ前

位置と地形　小笠町の東部、川上集落の低丘陵部に位置する。川上集落は牧ノ原台地西半に延びる丘陵部と牛渕川の支流である丹野川によって形成された沖積地からなる。遺跡は、八幡神社から延びる丘陵が、小河川に浸食されて谷地形が発達した谷の中位にあたり、背後に丘陵、前面に沖積地が広がる景観となっている。遺跡の数百m東側には市場があり、相良と信州を結ぶ塩街道又は相良往還と呼ばれ、中世期の主要な街道が走り、丹野川と交わる地点ともなっており、この地域の交通の要所である。

遺跡の概要　平成元年十二月から二年六月にかけて、発掘調査が実施され、弥生時代から中世の遺跡であることが確認された。しかし、トレンチ調査で面的な調査が行われていないため、遺構の状態を知ることは出来ない。遺物は調査区の中央から西側のA・B地点から、弥生時代から古墳時代前期の土器が多く出土している。中世の遺物は、全域から出土しているが、調査区の東側のC地点に比較的まとまった量が認められる。C地点は通称しろやま（城山）と呼ばれる低丘陵の裾部にあたり、字しゃごじ（三口神）と言われている場所にある。C地点からは、かわらけ、山茶碗、舶載、瀬戸・美濃産陶磁器、常滑産陶器などが出土している。舶載陶磁器は青磁鎬蓮弁文碗と白磁口兀皿があり、十三世紀後半から十四世紀前半にまとまっている。また、青磁の盤、花生といった良品の器種もあり注目される。瀬戸・美濃産は古瀬戸前期の卸皿、瓶子の器種が出土し、瀬戸製品の古い段階に比定され、舶載陶磁器と同時期となっている。その他に十五世紀の天目茶碗、擂鉢が認められるが、前段階に比べ量的に少ない。以上のことから宮ノ前遺跡の中世は、十三・十四世紀と十五世紀の二時期が考えられる。特に十三・十四世紀では、かわらけ、舶載陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器と豊富な遺物がみられ、中世居館に匹敵できる内容といえよう。

参考文献　「宮ノ前遺跡」　小笠町教育委員会　一九九〇



第25図　宮ノ前遺跡位置図と出土遺物実測図
（1～3山茶碗類　4～8土師質土器　9～13国産施釉陶器　14～25舶載陶磁器）

十六、慈眼寺遺跡（古窯？）

菊川町東横地字東御堂谷

位置と地形　横地城に続く丘陵には、数段の段丘面が形成されている。その内、最も東側にあたる武衛原段丘の南縁から延びる低丘陵に慈眼寺遺跡が位置する。当遺跡は、慈眼寺境内の東に入り込んだ谷入口にあり、字東御堂谷の東側面に広がる。慈眼寺には、横地氏の祖太郎家長の出生ゆかりの鏑矢が納められていた伝承が残り、横地氏と関連の深い寺である。

遺跡の概要　横地城跡総合調査による横地地区の遺跡分布調査を実施したおり、発見された遺跡である。遺跡は山の中腹を通る山道から谷底にかけて、山茶碗、小碗、小皿、こね鉢、壺、瓦等の土器片が散乱した状態で出土している。斜面にはドーム状の赤く変色し焼けた痕跡と窯壁が数点出土していることを確認した。出土した土器の中には、窯壁が密着したものもある。以上の要因から発見された遺構は窯跡と考えられる。時期は小碗・小皿により、十二世紀後半と十三世紀前葉の二時期が認められる。当遺跡出土の瓦類には、男瓦（丸瓦）と女瓦（平瓦）が含まれている。女瓦は凸面に斜格子目の叩きが施され、男瓦の特徴からみて鎌倉時代中期から後期の年代があたえられる。この瓦類と極似したものが、潮海寺出土資料中にもあり、両寺の発掘調査の実施が望まれる。



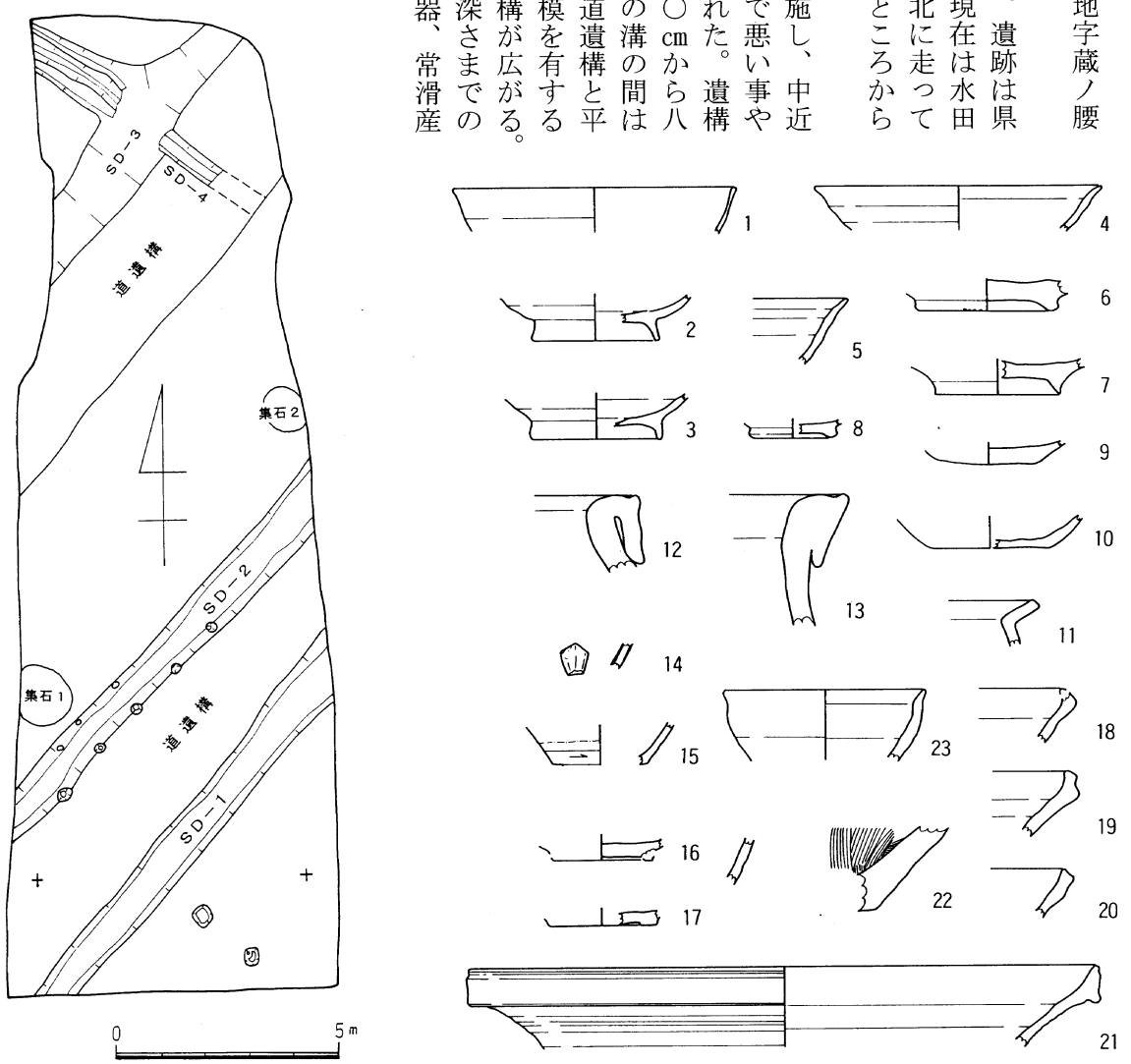
第26図　慈眼寺遺跡出土遺物

十七、蔵ノ腰遺跡

菊川町東横地字蔵ノ腰

位置と地形　奥横地川によって形成された沖積地に立地する。遺跡は県道川上菊川線に沿った南側、奥横地消防小屋の西に位置する。現在は水田となっているが、耕地整理以前は殿ケ谷橋に向かって県道が南北に走っていた地点である。伝承としてこの道沿いに蔵が建てられていたところからこの地名が付いたとされる。

遺跡の概要　住宅造成に伴い、平成十年三月に確認調査を実施し、中近世の遺構・遺物が検出された。調査は、調査地点の地盤が軟弱で悪い事や盛土による保存が可能な事もあり、最小限の掘削に留めて行われた。遺構としては溝、集石、柱穴が検出されている。ＳＤ一・二は幅七〇cmから八〇cmで深さ二〇cmの規模で、共に平行してまっすぐ延びる。この溝の間は幅二・二ｍを測り、一段高い地盤となり旧道遺構と思われる。道遺構と平行する形でＳＤ三が北側に掘削され、大溝を境に両岸に同じ規模を有する道遺構が確認された。道遺構の外側には、粘質土の強い水田遺構が広がる。大溝は水位が高く地盤が悪いことから、地表面より一・二ｍの深さまでの確認に留めた。遺物には灰釉陶器、山茶碗、瀬戸・美濃産陶磁器、常滑産陶器、志戸呂産陶器、かわらけがあり、十一世紀から十六世紀に位置づけられる。山茶碗は十二世紀後半から十三世紀前半で、最も出土量の多い器種となっている。出土状態は、調査区の南側に集中していた。瀬戸・美濃産、常滑産は十五世紀後半から十六世紀の所産で、主体は横地城の落城後の時期となっている。調査では、屋敷跡等直接生活に関連する遺構は検出されなかったが、皿類や擂鉢など日常生活具が出土しており、周辺に集落を想定できる。また、今回検出された大溝については、中世における沖積地の開発との関連性を今後検討する必要があろう。



第27図　蔵ノ腰遺跡完掘状況と出土遺物実測図　1～3灰釉碗　4～7山茶碗　8小碗　9小皿　10かわらけ　11土鍋　12・13甕（常滑産）14青磁　15天目茶碗（瀬戸・美濃産）16・17皿類（瀬戸・美濃産）18～22擂鉢（瀬戸・美濃産）23天目茶碗（志戸呂産）24天目茶碗（初山産か）

十八、五郎兵衛遺跡

菊川町東横地字五郎兵衛

位置と地形　奥横地の中央に広がる沖積地の西側に位置する。遺跡は蔵ノ腰遺跡の西に隣接している。沖積地は第三紀層崩壊土の堆積で、粘土層は薄く軟弱な地盤となっている。また、奥横地川流域では丘陵裾部に谷底平野が発達した地形となっている。

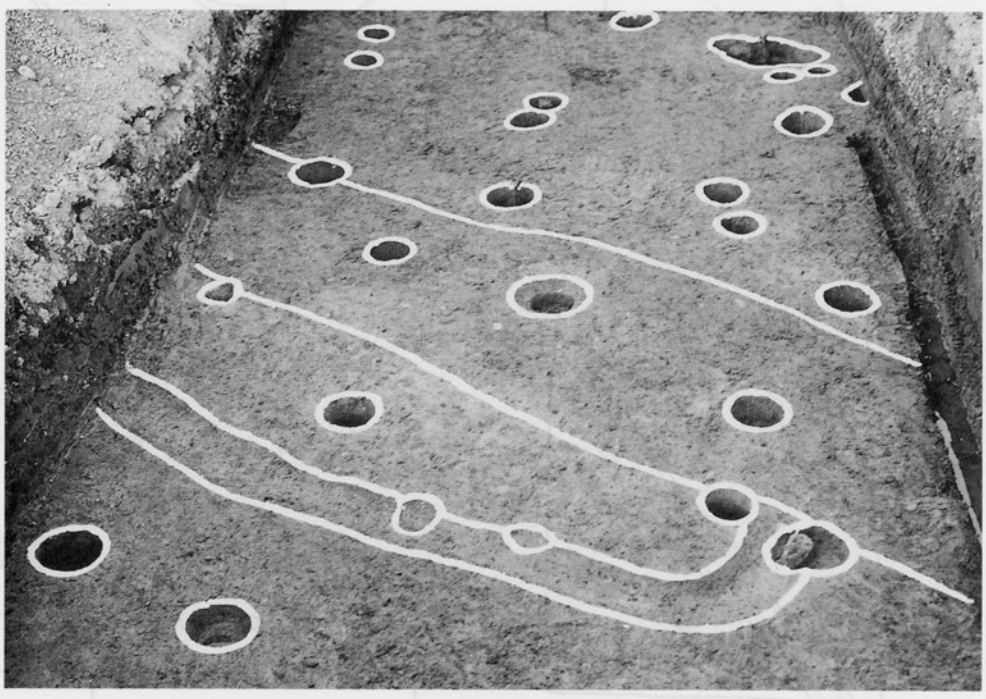
遺跡の概要　住宅造成に伴い、発掘調査を平成九年十二月に実施し、中近世の遺跡であることが確認された。調査区の中央を東西方向に斜めに、幅二mの規模で道遺構が検出されている。この遺構は、蔵ノ腰遺跡で調査された道遺構の規模とほぼ同じで、蔵ノ腰地点の道遺構の延長線と直角に交わる位置にあたる。また道遺構の両側、北と南は水田となっていたと考えられ、近世のものと推定される。中世遺構は、柱穴一四本と判断される。柱穴は直径二五cmから四〇cm、深さ二〇cmを測り、平面形が円形又は楕円形を呈する。柱穴の中には柱根が残存するものも見られた。検出された柱穴は調査区が狭いこともあり、建物として並ぶものは確認できなかった。

遺物はかわらけ、伊勢鍋、山茶碗、小皿、小碗、常滑・渥美産甕、瀬戸・美濃産碗・皿類、舶載陶磁器の白磁・染付がある。山茶碗の碗・皿が主体で、常滑・渥美産甕、かわらけ、伊勢鍋、白磁碗などからみて、十二世紀から十三世紀の一般的な器種構成といえる。瀬戸・美濃産碗・皿類と染付からなる十五世紀後半から十六世紀前半の時期のものも少量であるが出土している。

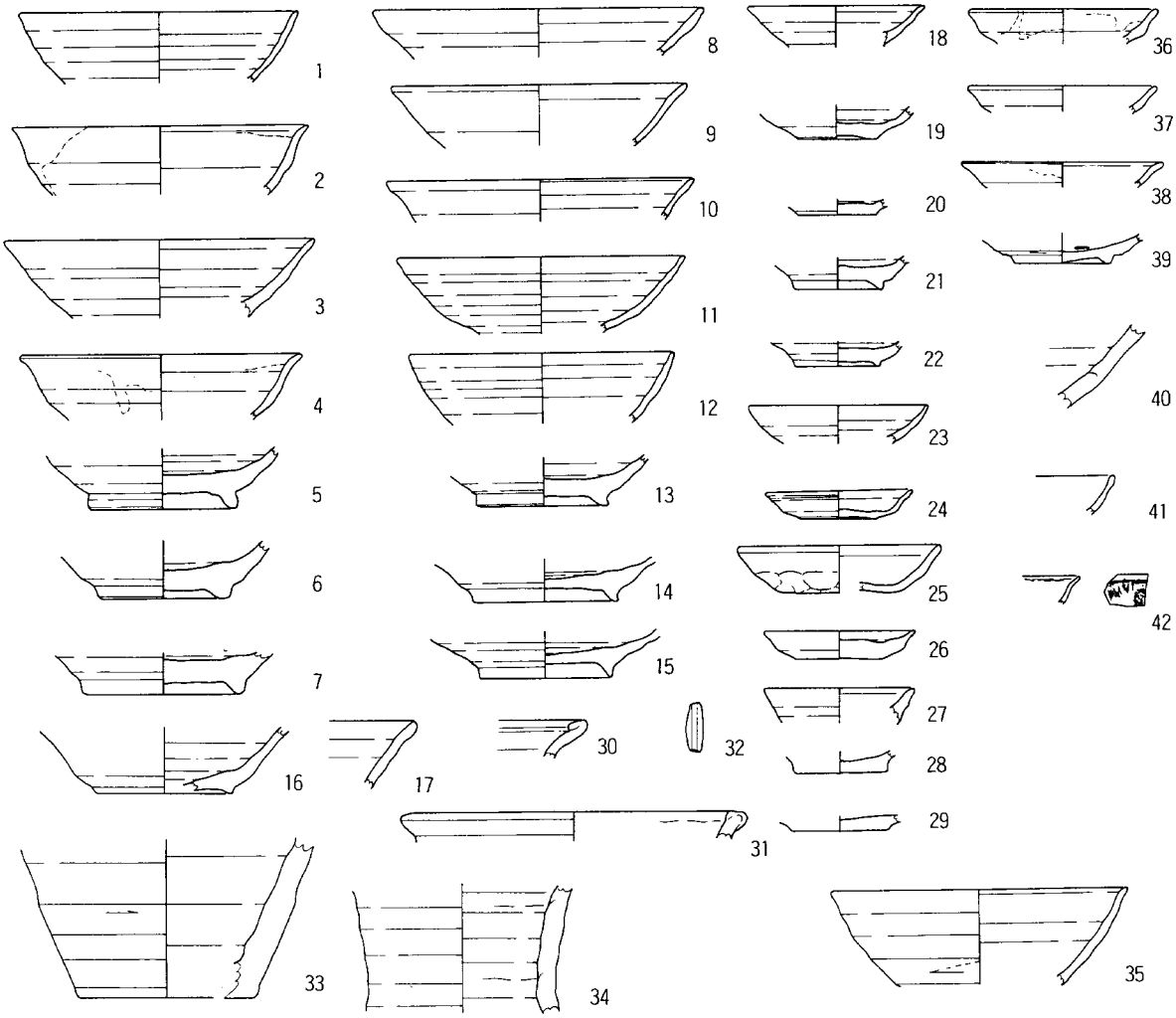


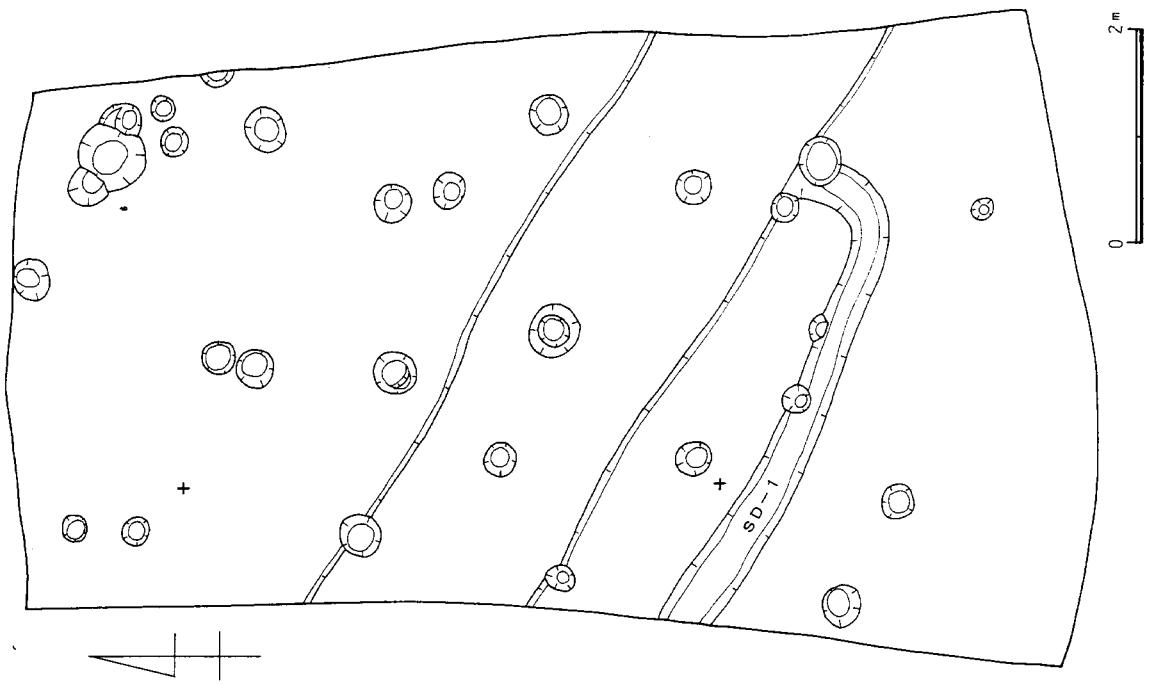
第28図　1五郎兵衛遺跡　2蔵ノ腰遺跡位置図

土器は碗・皿類となり、他の器種がみられないことは、殿ケ谷遺跡や伊平遺跡といった居館跡とは、質量的な違いが歴然としており、一般的集落と捉えることが可能であろう。



4　五郎兵衛遺跡完掘状況





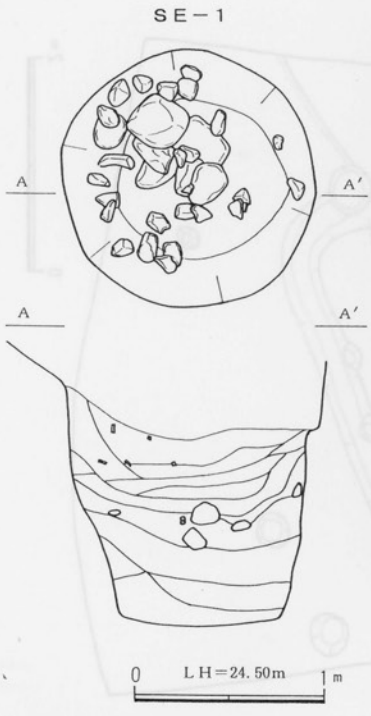
第29図　五郎兵衛遺跡平面図と出土遺物実測図
（1～4灰釉陶器　5～24山茶碗類　25～31土師質土器　32土錘　33～40国産陶磁器　41白磁　42染付皿）

十九、小田屋敷遺跡

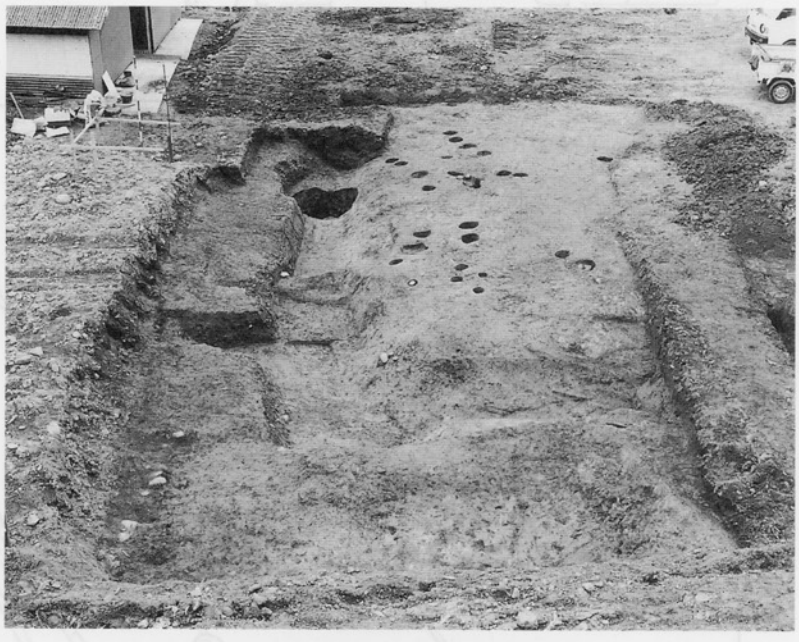
菊川町東横地字慈眼寺前

位置と地形　奥横地の東部、慈眼寺の南に位置する。遺跡は、牧ノ原台地から西へ延びる丘陵の南縁に発達した低位丘陵部にあたり、南へ向かって緩やかな斜面をなしている。表面には黒色土、通称黒ボク土が卓越し、その下層に赤褐色の粘質砂層があって遺跡の基盤層となる。低位丘陵の南側には、丘陵に沿う形で東西に奥横地川が流れる。

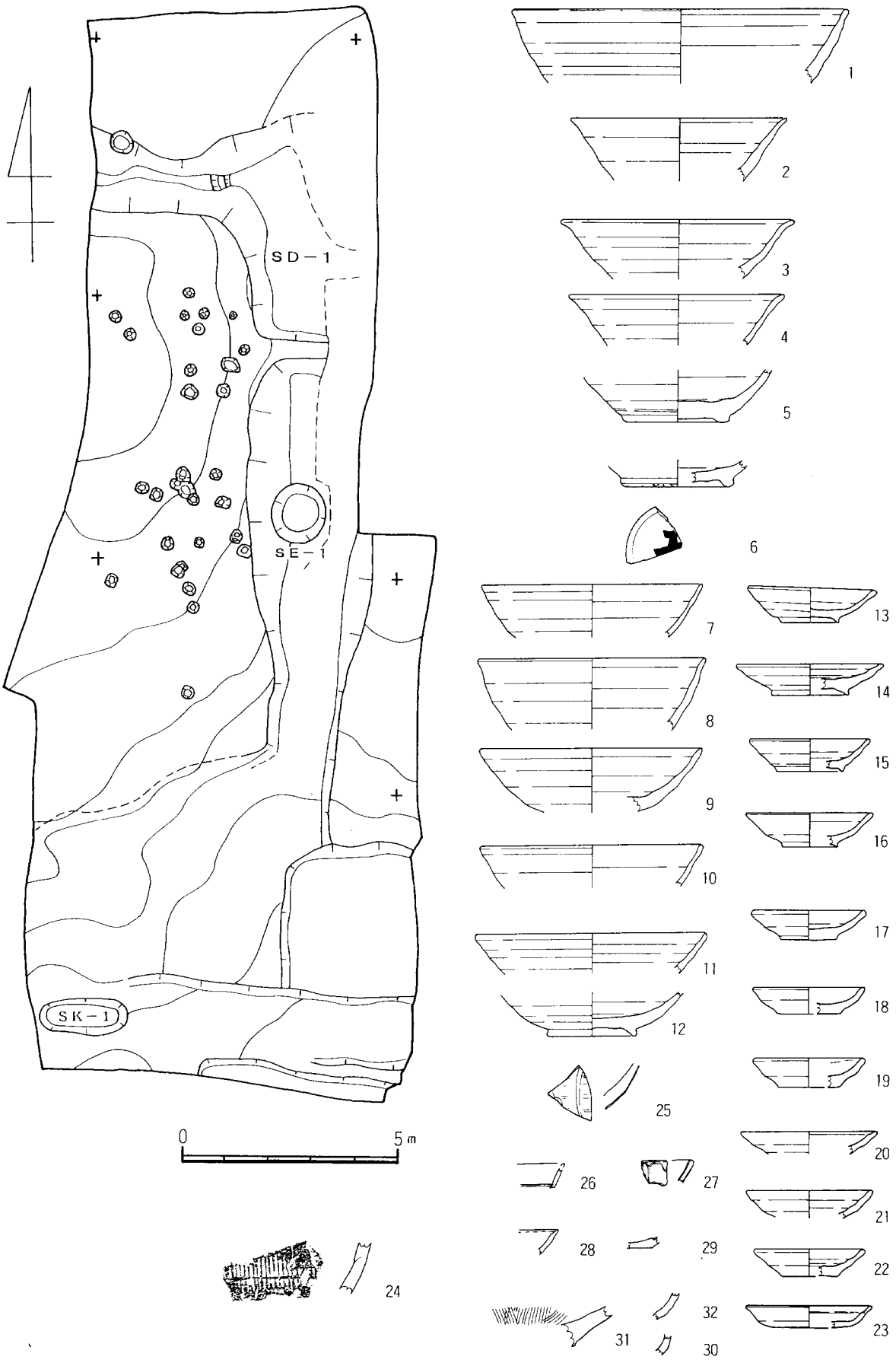
遺跡の概要　低位丘陵部は地盤が良いことから、奥横地の民家はこの地形上に建てられている。当遺跡も住宅建築に伴い、平成八年一月に発掘調査が実施された。調査区は幅六ｍ×全長一六ｍと南北に細長い。調査では逆Ｌ型に溝（ＳＤ一）が検出され、屋敷の区画溝と推定された。ＳＤ一は岩盤を掘り込んで掘削されており、北側では幅一・二ｍ、深さ五〇㎝を測る。東側は幅二・五ｍ以上認められ底が平坦となっている。区画された屋敷内には柱穴が三一本検出されている。また、井戸（ＳＥ一）が溝内より検出している。井戸は直径一・四ｍ、検出面からの深さ一・四ｍを測る。覆土内には炭化物や焼土ブロックに混じって、山茶碗や小皿が出土している。遺物としては山茶碗、小皿、小碗、片口鉢、かわらけ、渥美産の壺と甕、青磁、白磁、青白磁が出土している。時期は十二世紀後半から十四世紀前半と十五世紀後半の二時期に限定され、前者の時期の遺物量が多い。調査面積が狭い調査であったが、舶載陶磁器を有する点は、屋敷の性格を考える上で注目される。また、今回調査された小田屋敷遺跡の立地する地形は、奥横地川流域の右岸側にみられ、中世の奥横地の集落景観の復元に一石を投げかける調査であったと考えられる。



第30図　SE-1平面図



5　小田屋敷遺跡完掘状態



第31図　小田屋敷遺跡平面図と出土遺物実測図
（1～12山茶碗　13～16小碗　17～23小皿　24甕　26・27青磁
28・29白磁　30天目茶碗　31擂鉢　32碗（初山窯））

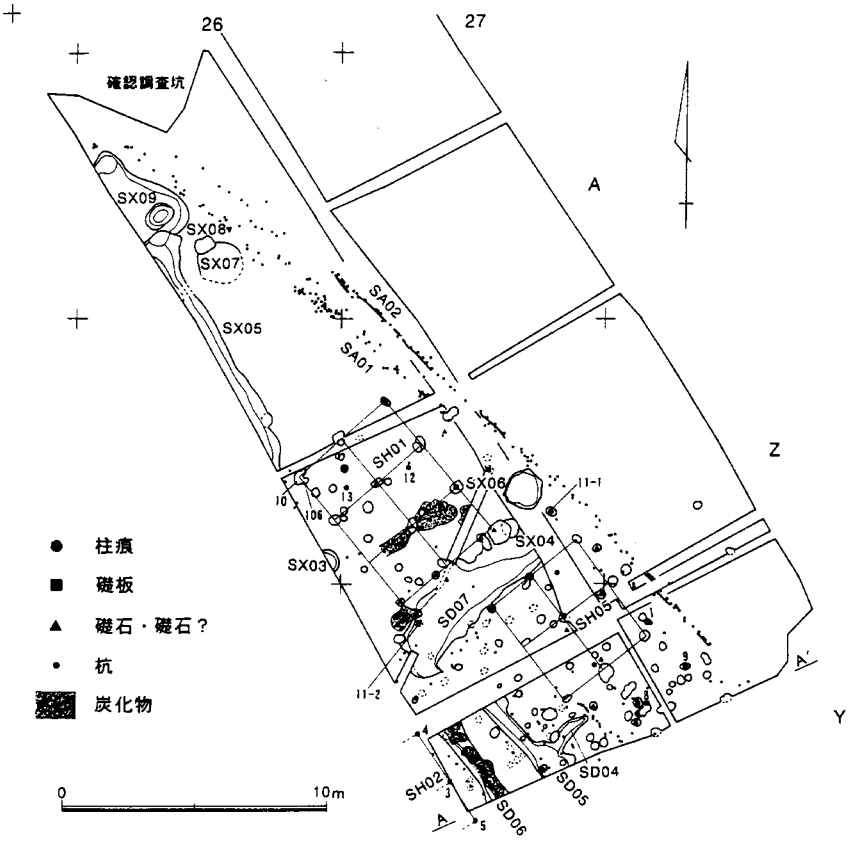
二〇、瀬名川遺跡

静岡市瀬名川

位置と地形　静岡市の東部、庵原山系から張り出した瀬名丘陵の麓一帯に広がる沖積微高地上、瀬名川地区に位置する。瀬名川地区は北側に竜爪山をはじめとする丘陵が広がり、南側は沖積平野となっている。長尾川は、竜爪山系を水源として麻機丘陵の間を流れ、遺跡の北から西を回って巴川と合流する二級河川である。この河川によって遺跡周辺は沖積化が進み、自然堤防帯が各地に発達し、複合的な扇状地形となっている。

遺跡の概要　中吉田瀬名線重点街路整備事業に伴い、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所によって、平成九年四月から六月と平成十年四月と五月に発掘調査が実施された。調査によって、弥生時代から中世にかけての集落と水田跡が確認されている。弥生時代から古墳時代の遺構については、近接する瀬名遺跡や川合遺跡の調査で、規模の違いはあるにせよ、時期的には同じ様相を確認している。中世では調査区の南、一区南側より掘立柱建物跡三棟分、土坑、溝などを検出した。掘立柱建物跡は総柱構造となっている。遺物は土器が四〇〇点以下と少ない一方、木製品は、保存に適した沖積地であったことが幸いして豊富である。木製品では、SX九から三千点を越える箸状木製品が検出されたのをはじめ、漆碗・皿、紡績具、農具、装身具などが包含層や土坑より検出されている。土器は土師質土器類のかわらけ、羽釜、伊勢鍋などが器種比率の六割近くを占めている。また、山茶碗と舶載陶磁器の出土量がほぼ同じとなっており、舶載陶磁器の比率が高く、遺跡の性格を考える上で注目される。時期では、山茶碗と青磁同安窯系碗・皿類からなる十二世紀後半から十三世紀前半と青磁龍泉窯系碗・皿と白磁口兀皿、瀬戸・美濃産製品、常滑産甕、伊勢鍋などから構成される十三世紀後半から十四世紀前半の二時期にまとまっており、後者の時期が主体となっている。中世の生活面は、調査区では狭い範囲に留まり、集落の一画にすぎなかったが、建物跡をはじめ木製品、舶載陶磁器などの土器がみられ、鎌倉期に成立したとされる瀬名川宿との関連性など、この地域の中世史に情報を多く提示した遺跡といえる。

参考文献　静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第一一五集「瀬名川遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　一九九九



第32図　瀬名川遺跡全体平面図（報告書より転用）

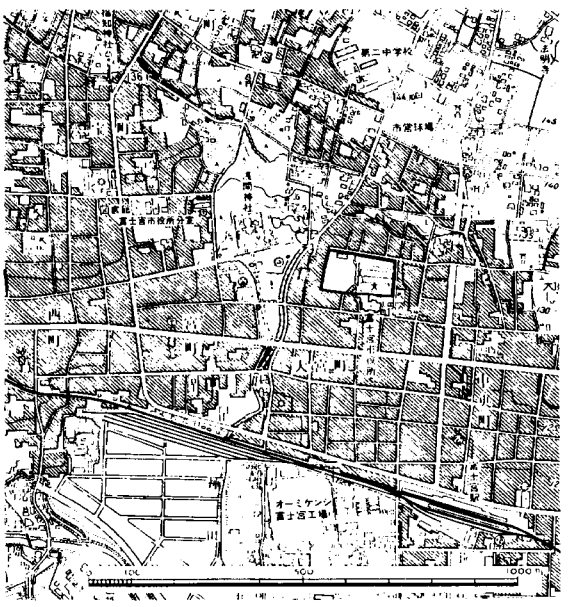
二一、元富士大宮司館跡

富士宮市元城町

位置と地形　富士宮駅より一km程北の旧庁舎跡地、現在の大宮小学校の敷地に位置する。周辺は富士山の裾野地形を構成する丘陵で、前面には神田川や湿地帯が展開している。遺跡の西側には神田川が流れ、その右岸に浅間神社が鎮座する。神田川は小規模な河川で、富士山麓の湧水をたたえ大宮町を南北に横断して潤井川に注ぐ。浅間神社は古くから当地域の人々の信仰のよりどころとなってきた。戦国期には浅間神社周辺は鳥居前町として発展し、早くから市が立ち町場が形成された。

遺物の概要　遺跡が立地する周辺は城山と呼ばれ、伝大宮城跡と考えられている。大宮城は今川氏領有の築城とされ、平安時代末より浅間神社の大宮司を務める富士氏が城代に任じられた。その後武田氏支配下の天正十年に焼失し廃城となる。発掘調査は昭和五十九年から始まり、平成十年までに四回の調査が行われている。第一次調査は昭和五十九年五月から七月で、掘立柱建物跡、井戸、石組水路などの遺構が検出されている。第二次調査は平成七年十二月で、堀や柱穴を確認する。第三次調査は平成九年五月から十月に実施され、堀、土塁、井戸を検出した。第四次調査は平成十年六月から十一月に行われ、第二次から第三次調査で検出された堀が、西に延びていることが確認された。第一次調査地点の遺構は残存状態が良好であり、県内ではあまり例のない礎石や石列を伴う遺構は注目される。遺物はかわらけが全体の九四%を占めている。また、舶載陶磁器には青磁、白磁、青白磁、黄・緑釉陶などがあり、十二世紀後半から十五世紀後半のものが出土している。青磁では龍泉窯系の鎬蓮弁文碗・盤や白磁口兀碗類の出土量が目につき十三世紀中頃から十四世紀前半にピークが認められる。上限年代を示す資料として同安窯系櫛描文、龍泉窯系劃花文碗皿、白磁の玉縁碗・四耳壺などの十二世紀後半から十三世紀前葉までの所産があり、青磁稜花皿や白磁坏などが下限年代を示している。県内中世遺跡の中では、白磁四耳壺、青白磁梅瓶、泉州窯系盤など良品が占める割合が、当遺跡では極めて高く注目される。一方、十六世紀の染付が出土していないことや瀬戸・美濃、志戸呂産の大窯期の製品が極端に少ないなど、大宮城の時期に対応する遺物は少ない。しかし、鎌倉期から室町期の遺物は、質量共に県内でも有数な内容と言える。

参考文献　「大宮神田曲輪跡」　富士宮市教育委員会　一九八七
富士宮市文化財調査報告書第二四集「元富士大宮司館跡」
富士宮市教育委員会　二〇〇〇



第33図　元富士大宮司館跡位置図

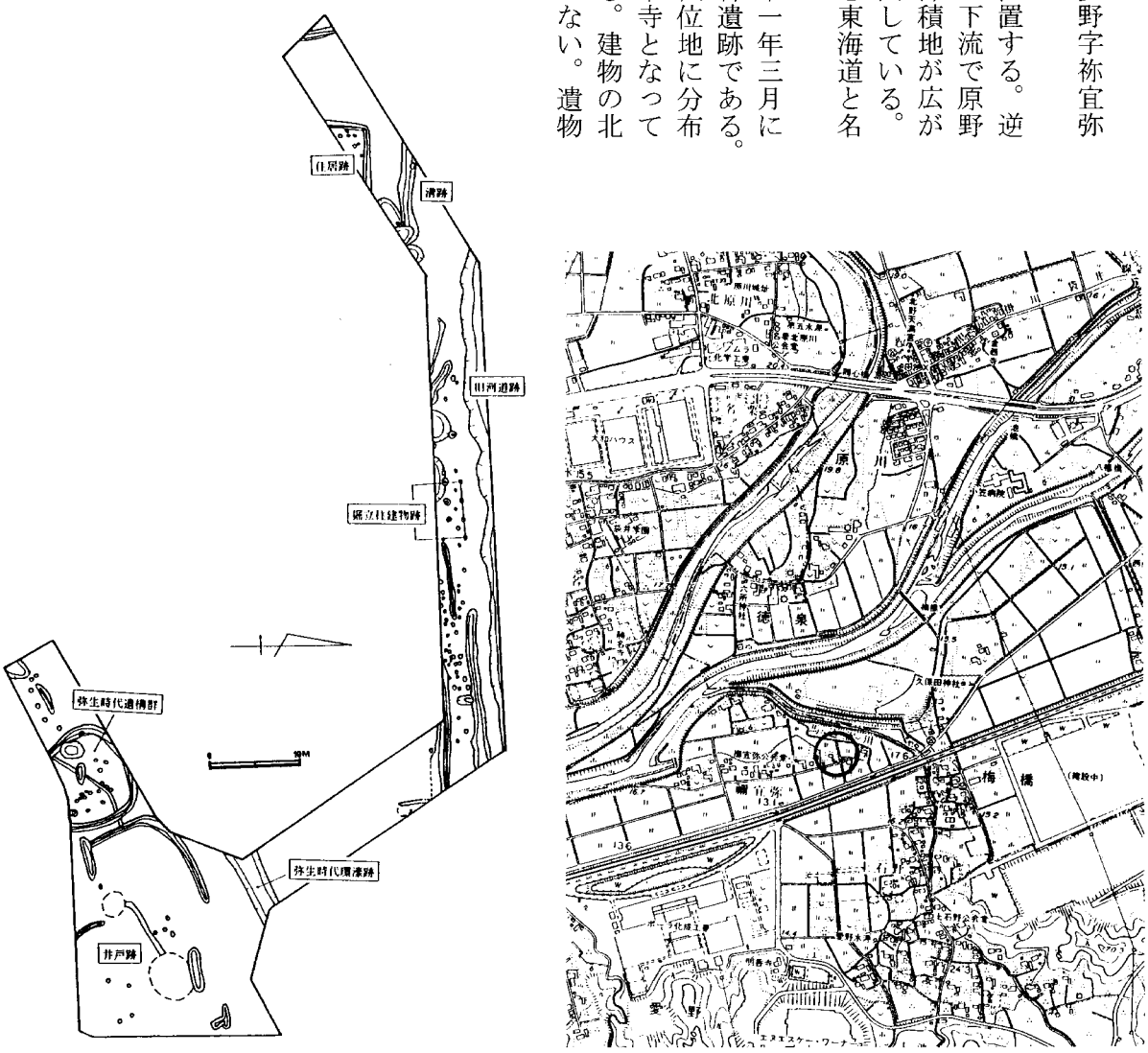
二二、祢宜弥（ねぎや）遺跡

袋井市愛野字祢宜弥

位置と地形　袋井市の東部、掛川市との境で逆川の左岸に位置する。逆川は粟ケ岳に源を発し、掛川市の中心部を西に流れ、祢宜弥の下流で原野谷川と合流する。遺跡周辺には、原野谷川と逆川が形成した沖積地が広がり、祢宜弥集落は、旧逆川の氾濫で形成された微高地上に展開している。集落の南には後背湿地が発達し湿田となっている。遺跡の横を東海道と名刹真言宗法多山尊永寺を結ぶ道が通っている。

遺跡の概要　土地区画整理事業に伴い、平成十年八月から十一年三月にかけて発掘調査が実施され、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。弥生時代から古墳時代は、周辺の原川遺跡や梅橋北遺跡など低位地に分布する遺跡と同様な様相をしている。近世は寺院跡で尊永寺の末寺となっていた。中世は調査区の北側で掘立柱建物と溝が検出されている。建物の北側は、逆川の旧河道により削り取られ、屋敷の規模は明らかでない。遺物は山茶碗、小皿、小碗、片口鉢と無釉陶器が九割近くを占め、かわらけが異常に少ないことが特徴である。年代は、十二世紀から十三世紀前半、十三世紀後半から十四世紀前半の二時期が考えられるが、十四世紀後半以降十六世紀まで、断片的に遺物は出土している。原野谷川流域の発掘調査によって、中世期に流通する舶載陶磁器、瀬戸・美濃産製品の様相と当遺跡を比較すると、特に大きな変化はみられないが、泉州窯系の黄釉盤が出土している点は興味深い。この地域における集落構造や流通を解明する上で、貴重な資料を提示する一遺跡といえる。

参考文献　「祢宜弥遺跡発掘見学会しおり」　袋井市教育委員会　一九九八



第34図　祢宜弥遺跡遺構配置図と位置図

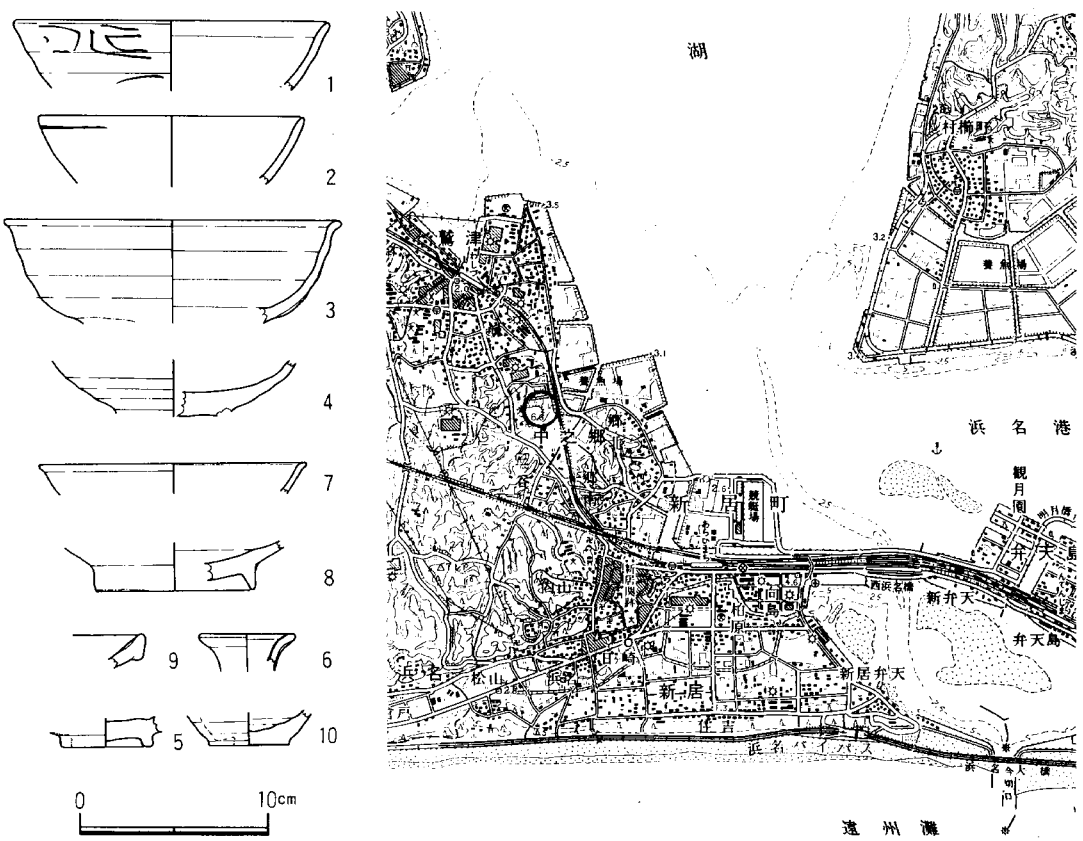
二三、城ノ前遺跡

新居町中之郷

位置と地形　新居町の北部、中之郷の台地東縁辺に位置する。中之郷は南から西にかけて台地が広がり、東側は沖積地で浜名湖の西岸となる。台地は鉄分を多く含んだ赤色の土壌で豊橋の高師原へと続く。この台地の緩やかな起伏地形を利用し、古代から窯業生産が盛んに行われ、渥美・湖西窯として歴史上重要な遺跡群となっている。遺跡周辺には、奈良時代から室町時代にかけて、アサリ、カキ、ヤマトシジミ等の貝塚が点在している。特に中世期には丘陵の縁辺部に分布が集中する。

遺跡の概要　三ツ谷圃場整備事業に伴い、昭和六十年四月から八月にかけて発掘調査が行われ、弥生時代から中世の土器、中世の堀と貝塚を検出している。調査した地点は城ノ前と呼ばれ、松田城の伝承地となっている。松田城は、現在コサイ自動車学校のある丘陵山頂部とされ、この地域では景観の良好な場所である。この城は、永正三年（一五〇六）四月に、今川方の宇津山城主中山生心に攻撃され、松田修理守側は多数の戦死者を出し落城したとする伝えがある。今回検出された幅四・五m、深さ一・四m、全長七〇mの堀跡は、十五世紀後半から十六世紀前半に機能していたと考えられており、城との関連が高い遺構である。遺物は堀や貝塚の包含層より出土している。十二世紀から十三世紀前半の山茶碗、小皿、小碗など湖西・渥美産の製品が多数出土している。山茶碗の次にかわらけ、土鍋類が千点程出土しており、土鍋の比率の高さがこの遺跡の特色となっている。舶載陶磁器は、青磁・白磁の碗・皿類で十二世紀から十五世紀に比定される。瀬戸・美濃産製品は前期の四耳壺以外は後期となり、天目、碗類、皿類、擂鉢、壺・瓶類などがある。前期の四耳壺は蔵骨器の可能性が高い。また、十五世紀後半に志戸呂産の製品が含まれており、浜名湖以西での出土遺跡として流通を知る重要な遺跡である。今回の調査では、十五・十六世紀については城郭との関係が指摘できるが、十二から十四世紀の遺物に対する評価は今後の課題として残る。

参考文献　「城ノ前遺跡」　新居町教育委員会　一九八九



第35図　城ノ前遺跡位置図と出土遺物実測図（1～6青磁　7～9白磁　10志戸呂産）

二四、石成（いしなり）遺跡

島田市落合字石成

位置と地形　島田市の中心部は大井川による扇状地形で、北は丘陵地形が広がる山間地域となっている。遺跡は市街地の北、大津谷川沿いに発達した自然堤防上に立地する。大津谷川は千葉山麓に源を発し、低丘陵を開折しつつ南流して大井川に合流する。遺跡周辺の谷底平野は、粘土とシルト層を基盤としており、軟弱地盤となっている。

遺跡の概要　大津谷川河川改修工事に伴い、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成五年六月から六年三月に実施された調査で、平安時代から江戸時代の複合遺跡を確認している。調査では溝で区画された屋敷跡、井戸、土坑などが検出されて、平安末から鎌倉時代の集落跡の一端が明らかとなった。遺物では灰釉陶器と山茶碗、かわらけの出土量が多い。時期としては灰釉陶器を主体とする十二世紀前半、十二世紀後半から十三世紀前半、十三世紀後半から十四世紀前半にかけての山茶碗、十五世紀、十七世紀の遺物群等に区分される。国産陶器に対して、舶載陶磁器は十二世紀の白磁碗、十二世紀後半から十三世紀の同安窯碗・青磁劃花文碗、十三世紀後半から十四世紀前半の青磁蓮弁文・白磁口兀皿などが出土している。碗・皿以外に天目茶碗や泉州窯系洗が出土しており注目される。瀬戸・美濃産陶磁器は前期の段階からみられ、瓶子、壺類の器種がある。中期には卸皿以外はなく極少量である。主体は後期で碗・皿類、盤類、壺類と多種にわたり出土している。十五世紀後半になると地元の志戸呂製品が比率的に高くなるが、大窯期の土器は確認されない。また、十七世紀前半に志戸呂製品へと変わるが、十八世紀以降は見当たらない。遺物では、十五世紀末に大きな画期が認められる。遺構との関連では、十四世紀後半から十七世紀の遺構は検出されていないため、集落の存在を検証することは難しいが、少なくとも周辺に集落が所在していた可能性は高い。今回、調査が行われた周辺でも、居倉遺跡より同時期の集落が検出されており、広範囲に広がっていたことを裏付けている。また、平安末から鎌倉期前半については、この地域が伊勢神宮領の大津御厨に推定される場所であることや、大津谷川上流の千葉山に、天台宗系の山岳寺院である智満寺が建立されているなど、古代から中世前期にかけて特殊な空間をもった地域として栄えたと考えられる。

参考文献　静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第六六集「石成遺跡」
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　一九九五



第36図　石成遺跡位置図

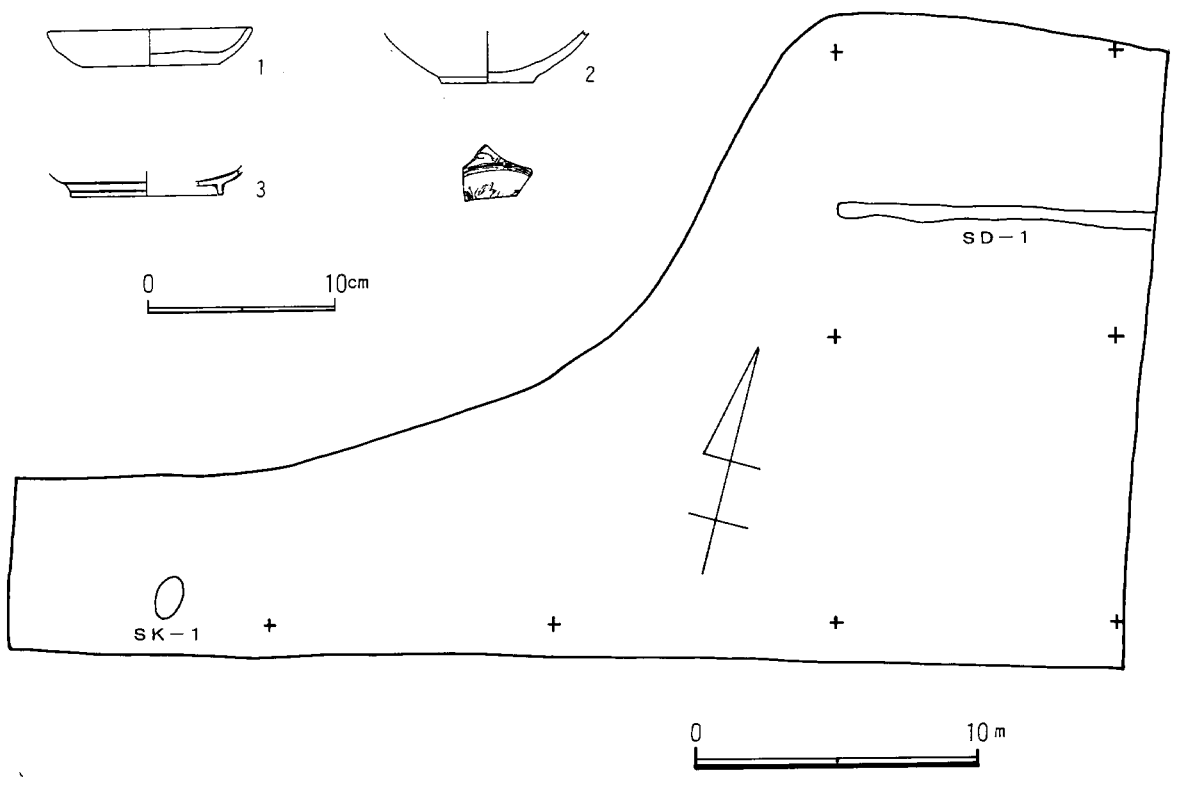
二五、藤丸館遺跡

菊川町東横地字中上

位置と地形　奥横地中央部を東西に延びる丘陵上の三光寺原に位置する。丘陵には三光寺原、武衛原、杉の谷原など段丘面が発達し、平坦地形となっている。三光寺原は最も西にある段丘面で標高六〇mを測る。地質は土層が黒ボク土壌と黄褐色粘土質層からなり、下部は砂岩層を主体とした礫層となる。遺跡の基盤層は黄褐色粘土質層となるが、地点によっては薄く礫層が露頭している。

遺跡の概要　菊川町は茶栽培の盛んな地域で、低く緩やかな地形が発達した丘陵部や段丘面は茶園となっている。藤丸館遺跡は、茶園改植に伴い、昭和六十二年七月から八月にかけて発掘調査が行われた。調査地点は、平坦面の北側縁辺部で、緩やかに北に向かって傾斜していた。遺構は希薄で土坑と溝の一箇所が検出されている。土坑は平面が楕円形で、全長一五〇cm×一〇四cm、深さ十六cmの大きさである。溝は近世以降である。遺物としてはかわらけ、山茶碗、舶載陶磁器が出土している。かわらけと山茶碗は土坑より出土しており十三世紀と推定される。舶載陶磁器には十六世紀後半の染付皿が一点ある。染付皿は横地城の落城後を知る貴重な資料といえる。なお、調査地域は通称藤丸と呼ばれ、横地氏の館があったと伝えられる。藤丸については、横地氏系図の十七代横地元国の幼名と同じであり、文献資料と考古資料共に横地城落城後の十六世紀に位置付けられる。当遺跡の位置付けは中世後期の横地村の景観を考える上で重要となろう。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第十八集「藤丸館遺跡」　菊川町教育委員会　一九八九



第37図　藤丸館遺跡平面図と出土遺物実測図（1・2かわらけ　3染付）

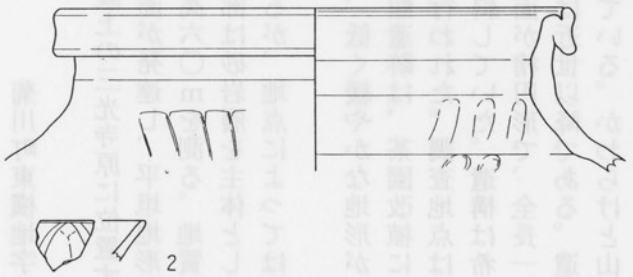
二六、長溝（ながみぞ）遺跡

菊川町東横地字長溝

位置と地形　奥横地の北西にあたり、奥横地川の右岸、福島宅近辺に位置する。遺跡周辺には沖積平野が広がり、牛渕川と奥横地川が少し北で合流する。長溝は奥横地川に沿う形で、南北に細長く周囲より高い地形となっている。

遺跡の概要　遺跡は、平成八年二月から三月にかけて実施された杉の谷遺跡範囲確認調査の中で、その存在が明らかとなった。発掘調査では、杉の谷橋付近のグリットより、奈良時代から平安時代の土器が出土し、包含層が確認され、踏査で山茶碗が表採されたことから、中世の時期に及ぶ遺跡と認識された。その後、横地城跡総合調査に伴い、福島宅の石造物の調査を実施したおり、屋敷内より常滑甕と青磁鎬蓮弁文碗を採集した。土器は十三世紀から十四世紀の製品で、横地氏がこの地域で活躍する時期に対応する。この地域では、中世石塔が屋敷内の西や北西に「地の神」と称して屋敷神が祀られている。この祀りごとは中世後期以降旧家に見られ、近世屋敷墓と共に祖先祭祀へと発展していく民俗信仰である。当遺跡の分布する福島宅に確認されており、古くからこの地に屋敷を構えたことが想定される。このような点に、神の祭りなど中世集落の一端をみることができよう。なお、遺跡付近には奥横地に通じる古道が残存している。

参考文献　菊川町埋蔵文化財調査報告書第三八集「杉の谷遺跡範囲確認調査」
菊川町教育委員会　一九九六



第38図　長溝遺跡出土遺物実測図　1甕（常滑）2青磁



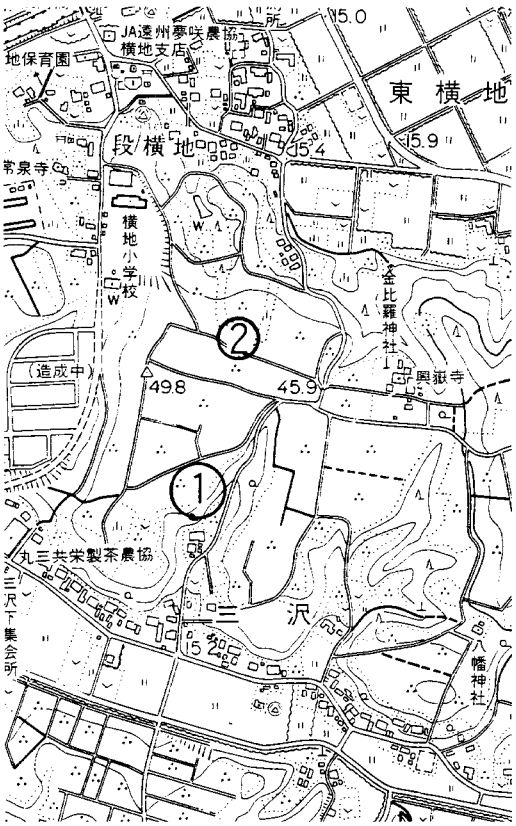
6　長溝遺跡出土石塔

二七、三沢西原遺跡

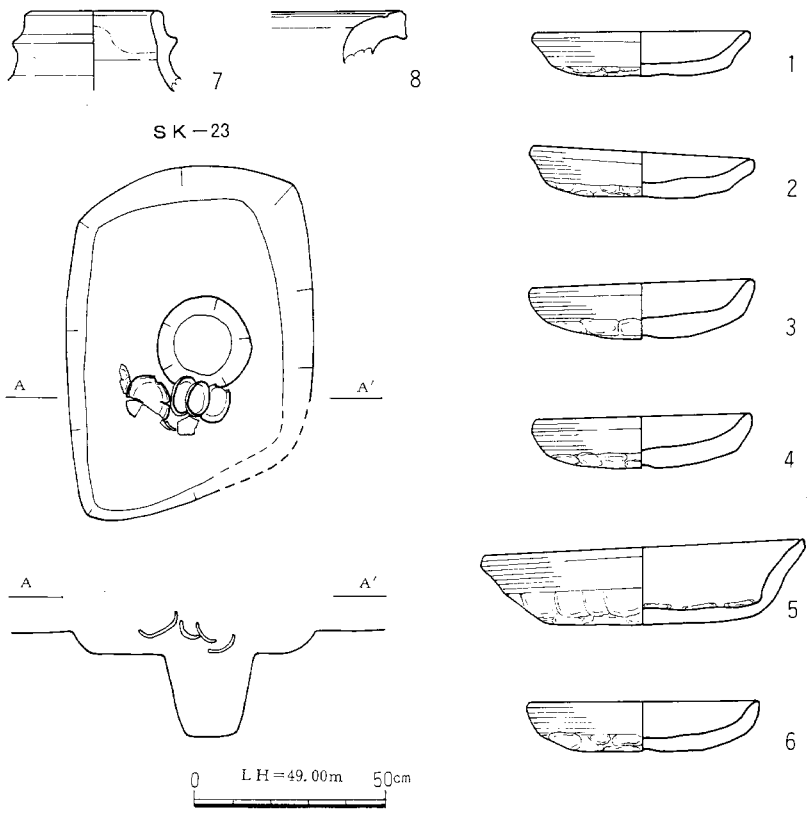
菊川町三沢字西原

位置と地形　三沢と東横地地区の境に東西に延びる丘陵の興嶽寺原に立地する。丘陵は、谷を境に西を西原、東を興嶽寺原と呼ばれ、当地域の段丘面では、最も平坦面の広い地形となっている。丘陵の縁辺付近には谷地形が発達し、南側の三沢側では、殿ケ谷と寺ノ谷が大きく入り込んで、急傾斜地形となっている。遺跡は西に広がる西原の東、殿ケ谷の西斜面に接している。

遺跡の概要　三沢西原遺跡は、昭和五十八年十二月から五十九年四月と同年八月から十二月にかけて発掘調査された。その結果、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡で、縄文時代から古墳時代前期の集落跡であることが確認され町内でも早くから、人が住んだ遺跡として注目されていた。中世では土坑（ＳＫ二三）が一箇所検出されている。土坑は調査区中央南側に単独で検出されている。大きさは一七〇cm×一三〇cm、深さ一〇cmで楕円形となっている。覆土よりかわらけが出土している。かわらけはいずれも手づくね成形で皿状のものである。手づくね成形のかわらけは、当地域では十二・十三世紀に多くみられ、十四世紀にはみられないものであり、十三世紀頃のものと推測される。近年、天神森にかけての周辺で、古瀬戸後期前半の梅瓶、常滑壺が発見されており、中世期この西原に、宗教的空間が存在した可能性が高いと考えられる。



第39図　1三沢西原遺跡　2天神森位置図



第40図　　SK-23平面図と出土遺物実測図
1〜6かわらけ（1/3）7壷（瀬戸・美濃産）8甕（常滑産）

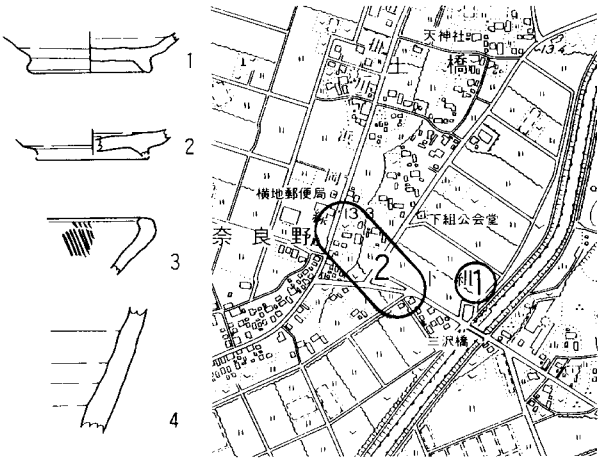
参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第四集「三沢西原遺跡」　菊川町教育委員会　一九八五

二八、寺屋敷遺跡

菊川町東横地字寺屋敷

位置と地形　三沢と東横地下組との境、三沢橋付近に位置する。牛渕川の改修と圃場整備によって、寺屋敷の地番面積範囲は狭くなっている。遺跡は牛渕川沿いの右岸にあり沖積地となっている。

遺跡の概要　福井貴義氏の所有する水田で、暗渠排水を設けるため掘削したおり、宝篋印塔の部材（基礎か）と土器が検出され、遺跡の存在が明らかとなった。石塔はその後、興嶽寺に納められたが所在不明となっている。土器は全部で六点出土しており、近世のもの一点を除くと、灰釉陶器、山茶碗、瀬戸・美濃産の瓶子か壺と擂鉢、常滑産甕各一点づつで、平安時代から室町時代となる。山茶碗は周辺の水田でも表採されることが多く、この地域で出土する十二・十三世紀の器種である。瀬戸・美濃産は十五世紀中葉から後半で、石造物もこの時期に比定されるものであろう。遺跡は、地名が寺屋敷と呼ばれる場所であることや、石造物の発見などを総合すると、この地に寺院が建立されていた可能性が強い。また、名古屋の植田にある全久寺は、名古屋横地氏の菩提寺で、元は菊川町横地地内に所在した寺であったとする縁起が残っている。さらに、この地点は塩街道が走る奈良野の方面と三沢、奥横地を結ぶ街道の要所でもあることなど、遺跡を取り巻く環境は興味深く、課題を投げかける遺跡といえる。



第41図　1寺屋敷遺跡　2西軒遺跡位置図

二九、西軒遺跡

菊川町土橋字西軒

位置と地形　菊川町南部、土橋と奈良野の境付近に位置し、古菊川と牛渕川によって形成された自然堤防上に立地する。土橋集落は県道掛川浜岡線に沿って、南北に細長い集落となっており、集落の西に沖積平野が広がり、東横地下組集落となる。遺跡周辺は、牛渕川と菊川の氾濫による堆積で、砂利が交互に堆積し軟弱地盤となっている。

遺跡の概要　遺跡は、平成八年九月から十二月と平成九年三月、二地点で調査が実施されている。平成八年の調査では、古墳時代から近世までの遺物が検出されているが、遺構は中世に留まっており、土坑（ＳＫ一）と水田が検出されている。土坑は井戸で十三世紀前半に廃絶している。遺物は山茶碗、小碗、小皿からなり、十二世紀後半から十三世紀前半のものである。調査地点は牛渕川の流路によって一部削平されているが、集落と水田区域の境である可能性が高く、中心は少し西の現在の県道側と推定される。平成九年の調査では流路と水田跡が検出されている。遺物は山茶碗、小碗、小皿が主体で、時期は十二世紀後半から十三世紀前半となろう。土橋周辺の調査では流路が幾箇所で確認され、川が蛇行していたことが窺える。一方、この地域が川島と呼ばれ、河川の流れによって島のように分断されたことからきているのではないだろうかと想像される。遺跡は、古代から続くが、中世前期で一旦画期をもつ状況は、土橋遺跡や林光寺遺跡といった、自然堤防上の一連の遺跡と共通する特徴といえよう。

参考文献　菊川町埋蔵文化財調査報告書第四八集「西軒遺跡」　菊川町教育委員会　一九九七

菊川町埋蔵文化財調査報告書第五七集「西軒遺跡Ⅱ」　菊川町教育委員会

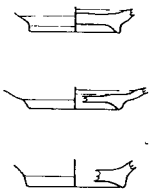
三〇、御領所（ごりょうしょ）遺跡

菊川町西横地字御領所

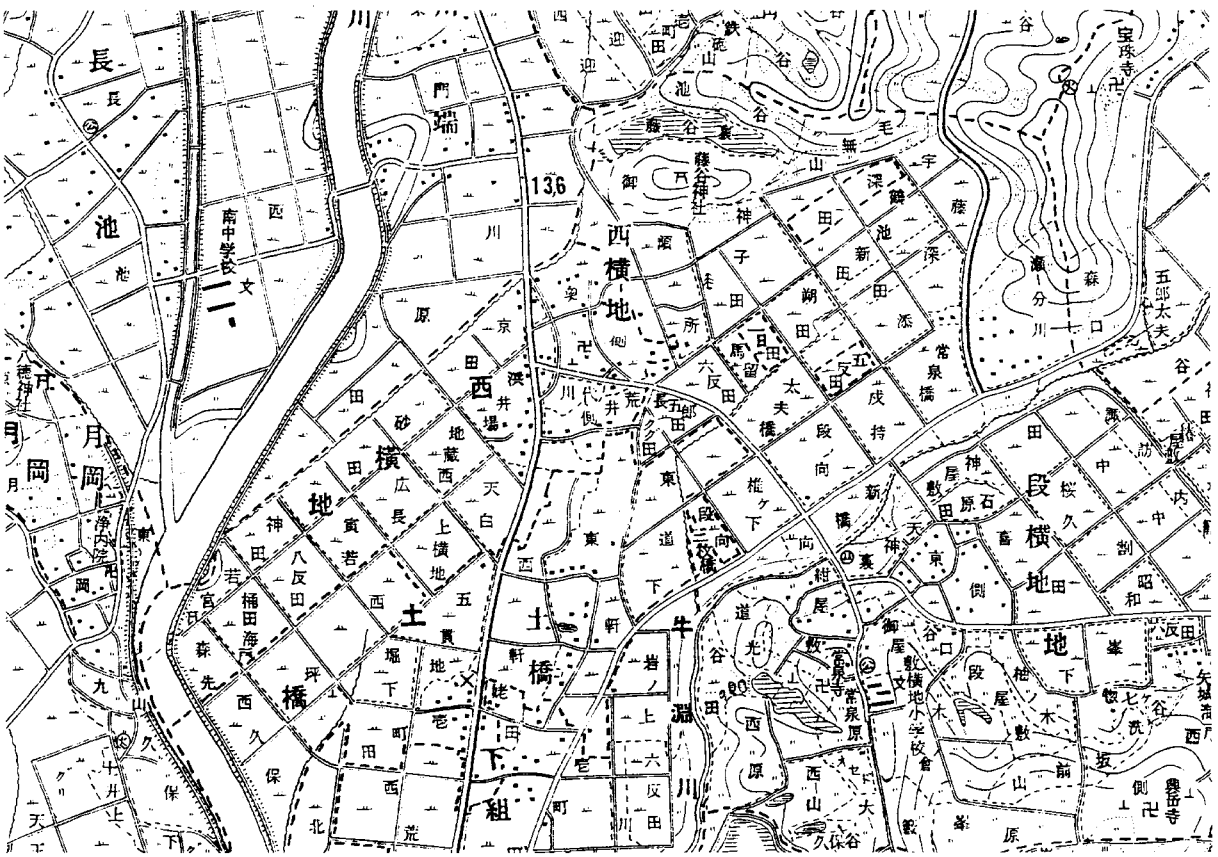
位置と地形　横地地区の北西、加茂地区との境にある自然堤防上に立地する。県道掛川浜岡線の西に広がる住宅地から、藤谷神社前の沖積地帯が遺跡範囲となっている。遺跡の西に小出川、南に牛渕川、北に牧ノ原台地から連なる丘陵が展開し、両河川に挟まって南へ集落は開けている。西横地集落東の県立小笠高校前の沖積地は、沼地形が発達して深田と呼ばれ水捌けの悪い土壌となっている。

遺跡の概要　遺跡では、道路拡張工事や住宅造成などの開発によって小規模な発掘調査が行われている。中でも平成八年四月、九年二月、十年八月の三回の調査は、比較的まとまった面積で遺構・遺物が検出されている。遺跡は、古墳時代後期から近世までの複合遺跡となっている。平成九年二月の調査では、古墳時代後期から奈良時代の住居跡が検出されている。また、平成十年八月の調査では、奈良時代から平安時代の集落が確認されている。中世の遺物は、今までの調査では数十点と少なく山茶碗、小碗、小皿、青磁が出土しており、十二・十三世紀と時期が限定される。当遺跡は古墳時代後期から集落が始まり鎌倉時代まで続くが、中世は出土遺物量は少なく古代に比べ小規模であり、十四世紀以降は集落が断絶する傾向がみられる。なお、平安時代には、緑釉陶器や灰釉陶器などが出土しており、一般集落とは違った政治色の強い場所であった可能性を秘めており、この遺跡にとって最も繁栄した時期であったであろう。そのために政治経済と中央が大きく変化した中世前期に、この地域も連動し変貌する要因となったと推測される。

参考文献　文化財年報第4号「八御領所遺跡」
菊川町教育委員会　一九九七



第42図　御領所遺跡
出土遺構　1～3小碗



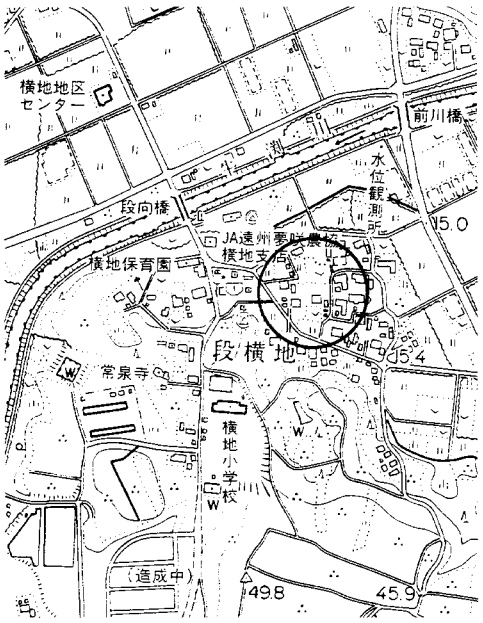
第43図　御領所遺跡位置図（昭和30年頃）

三一、東側遺跡

菊川町東横地字東側

位置と地形　横地地区の中央に東西に延びる丘陵の西裾部に位置する。丘陵には段丘面が発達し、最も低位段丘が段横地にあたる。段横地は興嶽寺原より北に広がっており、低位丘陵地に集落がみられ、その丘陵裾を牛渕川が東西に流れる。遺跡は標高一五m前後の平坦地形となっており、黒ボク土壌が卓越している。

遺跡の概要　過去に発掘調査は行われていないが、土器などが表採されている。丹羽正弘宅の敷地内より山茶碗、小皿が出土している。この土器は東遠系の山茶碗で色調は灰青色をなし、高台は三角形となっていた。おそらく皿山古窯の製品であろう。また、山茶碗は二、三個重なった状態となっており、窯生産で不良品として廃棄される製品によくみられる特徴をもっており、窯跡の遺構も想定される。時期は十三世紀前半である。現在、遺物の所在は明らかでない。横山裕一宅内南側の水田より石敷が検出されている。横山宅は、江戸時代庄屋を務めた家で、古くから当地に屋敷を構えたとされ古い石塔が残る。旧段横地公会堂の東にゲンシボと呼ばれる石塔群がある。石塔は五輪塔、宝篋印塔、一石五輪塔の部材がみられる。過去の表採資料も含め、この遺跡が当地域における中世歴史の解明の糸口となるものであろう。



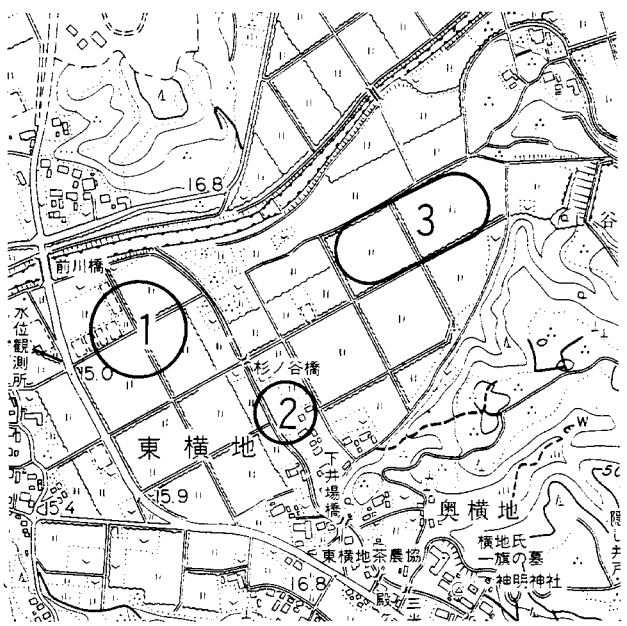
第44図　東側遺跡位置図

三二、田中遺跡

菊川町東横地字田中

位置と地形　段横地と奥横地の境付近、牛渕川に形成された自然堤防上に立地する。牛渕川は、神尾地区の大平から蛇行して東横地へ流れ、その後、段横地の低丘陵部の裾に沿う形で南下する。遺跡周辺は、牛渕川に奥横地川が合流して水量が増し、さらに流れが大きく蛇行する地点であったため、大量の土砂の堆積によって沖積地が形成された。そのため、古代・中世の生活面は地表下深く埋積していた。

遺跡の概要　牛渕川改修工事や耕地整理事業によって耕地の掘削が行われ、地表下深くに埋もれていた遺跡が発見され、その存在が明らかとなった。現在でも田中、諏訪周辺の水田より土器が採集されている。土器は須恵器と山茶碗で、奈良時代から中世のものである。当遺跡の北、牛渕川を挟んだ北に瀬分川集落があり、奈良野から金谷に抜ける街道が走る。この街道と奥横地を結ぶ道が、この田中と諏訪の間、馬腰場と呼ばれる地点を通ったとされる。遺跡の立地する地点が交通の要所であるとすれば、ここに埋もれている遺跡は重要な意味があるといえよう。



第45図　1田中遺跡　2長溝遺跡　3杉の谷遺跡位置図

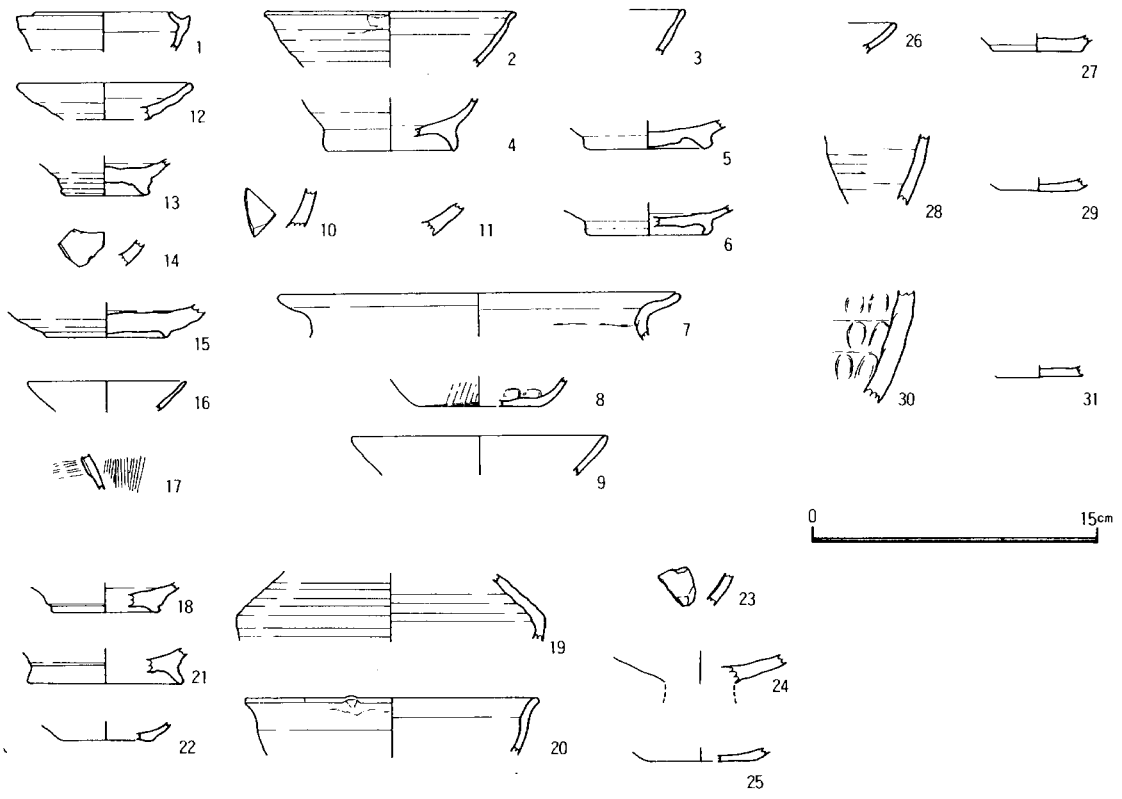
三三、杉の谷遺跡

菊川町東横地字松ノ木田

位置と地形　牛渕川の左岸、身打原の西の沖積地に位置する。横地城が立地する丘陵には谷地形が発達し、尾根は急斜地形となる。遺跡周辺では杉の谷と呼ばれる深く入り込んだ谷がみられ、谷の中央に人工の谷田大池が作られている。谷の北には、痩せて細長く延びる尾根が、北に張り出し段丘を形成する。段丘には小規模な平坦地の身打原があり、横地氏落城時の伝承を伝える千人塚が立地する。段丘の眼下に牛渕川が流れ、沖積平野が広がっている。

遺跡の概要　平成八年二月から三月にかけて、杉の谷遺跡範囲確認調査が実施されている。調査はランダムに調査区を設定し、土層観察を行ったものである。この調査によって、杉の谷遺跡が牛渕川沿いに広範囲に広がっていることが明らかとなった。遺物としては須恵器、山茶碗、土師器、舶載陶磁器、瀬戸・美濃産陶磁器などが出土している。時期は奈良時代から室町時代に及び、平安時代末から鎌倉時代の遺物量が最も多く、この時期に集落も広域であったと推測される。当遺跡の立地する地点は、神尾村の入口部にあたり、横地城へ通じる西側神尾の登り口にあたることから、横地城をめぐる防御を考える場合、注目される位置にあるが、横地城の築城時期と集落形成期とに年代差がある。この地域での中世前期における集落の位置付けは、神尾村の成立とも係わり、注目される遺跡といえよう。

参考文献　菊川町埋蔵文化財報告書第三八集「杉の谷遺跡範囲確認調査」
菊川町教育委員会　一九九六



第46図　出土遺物実測図（1～17杉の谷地区　18～25大平地区　26～31山脇地区）

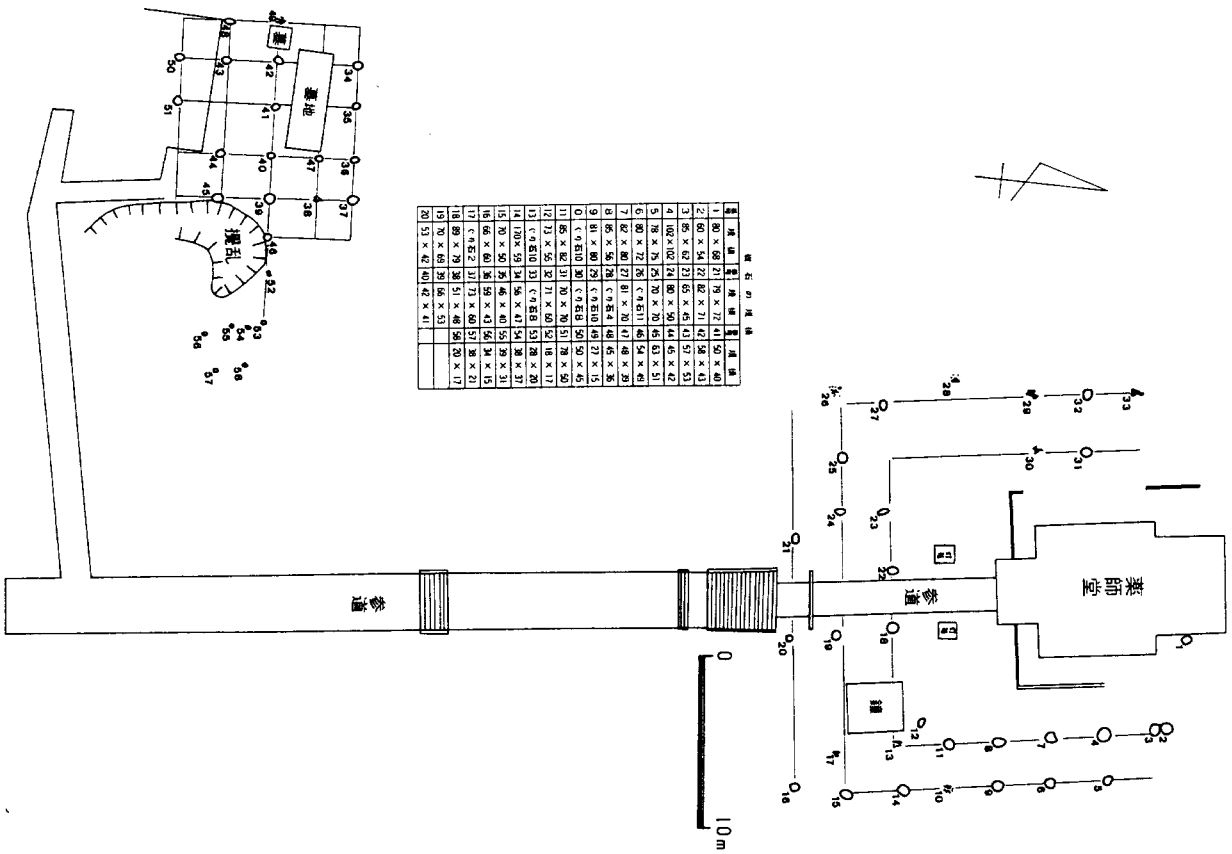
三四、潮海寺薬師堂跡

菊川町潮海寺字堂橋

位置と地形　潮海寺地区の北側に展開する丘陵部に位置する。丘陵は遺跡の手前で東海道新幹線によって切断されるが、標高四〇m前後で、南に向かって平坦な丘陵が広がり、本所付近で菊川と接する。現在、遺跡周辺は真言宗潮海寺薬師堂と八坂神社の境内となり一部墓地ともなっている。

遺跡の概要　真言宗潮海寺は山号を廣厳城山と称し、寺号は、艮の谷に潮井（ウシホイ）があるのを以て潮海寺と云うと伝えられる。草創は天平年間、行基菩薩遊歴のおり、この地において薬師如来像を刻み、安置したのが始まりとされ、宝亀十一年（七八〇）寺坊開基とある。文献上では平安時代末期、寛治年中（一〇八七～一〇九三）にできた『後拾遺往生伝』の巻中に記載があるのが、現在確認できる最も古い資料となっている。薬師堂跡については、現薬師堂の周辺と墓地に残る礫群石から、かなり規模の大きな建物が配置されていたことが窺える。境内から出土した瓦類は、現在同寺と教育委員会にそれぞれ収蔵されており、平安時代後期から鎌倉時代にかけての資料である。この中でも半截花文宇瓦は、鎌倉の千葉地遺跡や鶴岡八幡宮境内の調査で出土した資料と同文・同笵例であったことは注目される。これらは後述する皿山古窯跡群の焼造品であり、鎌倉御家人横地氏の関係を指摘したいところである。

参考文献　菊川町埋蔵文化財調査報告書第二三集「堂橋遺跡」　菊川町教育委員会　一九九二
原　廣志　「鎌倉出土瓦と同文・同笵瓦について」　『鎌倉考古４２』　一九九九



第47図　潮海寺薬師堂礎石平面図



巴文鐙瓦





八葉蓮華文鐙瓦



均正唐草文字瓦



宝相華唐草文字瓦







半截花文字瓦



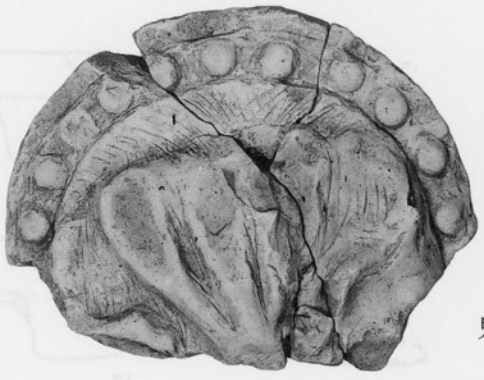
半截花文字瓦







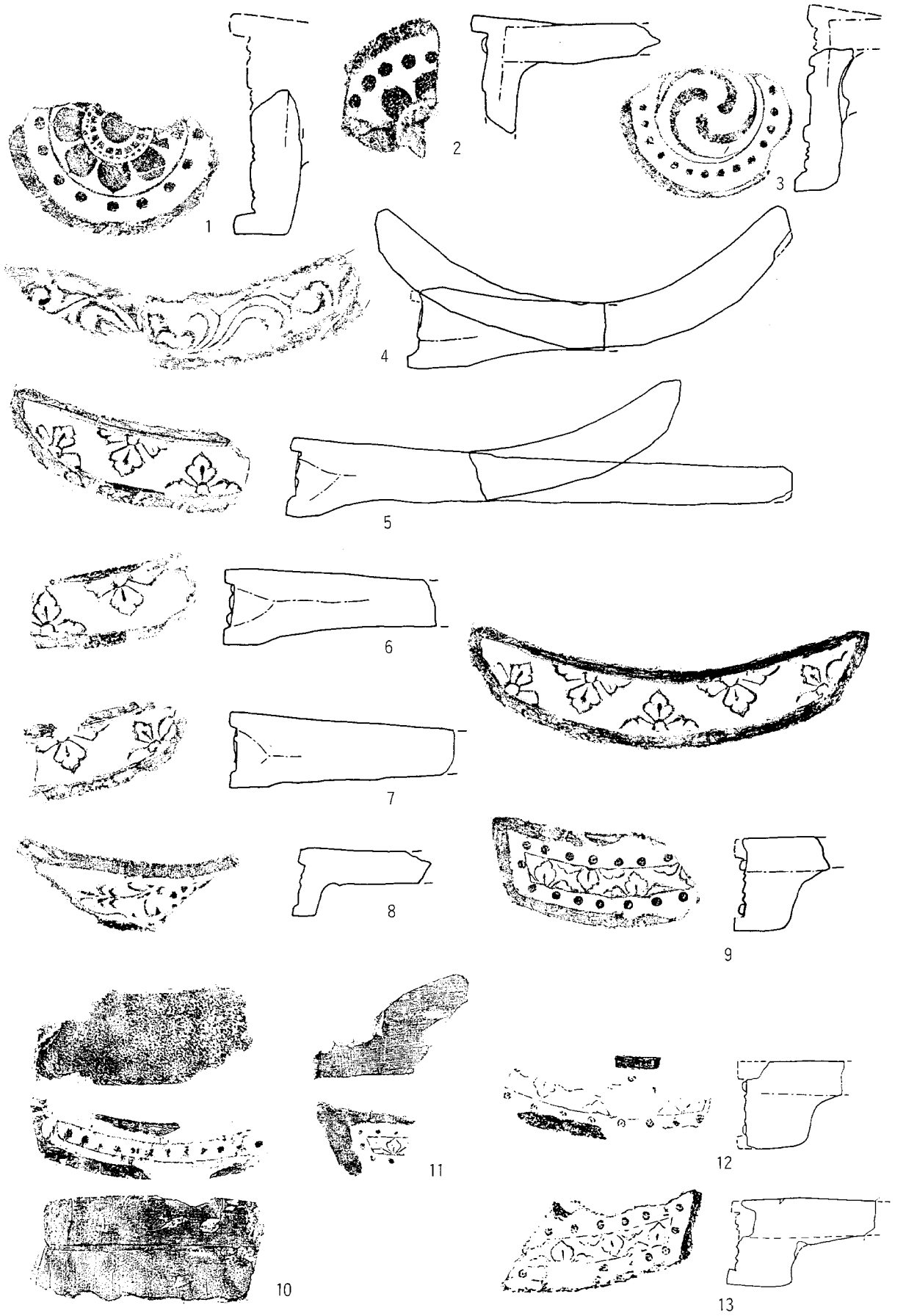
男　瓦



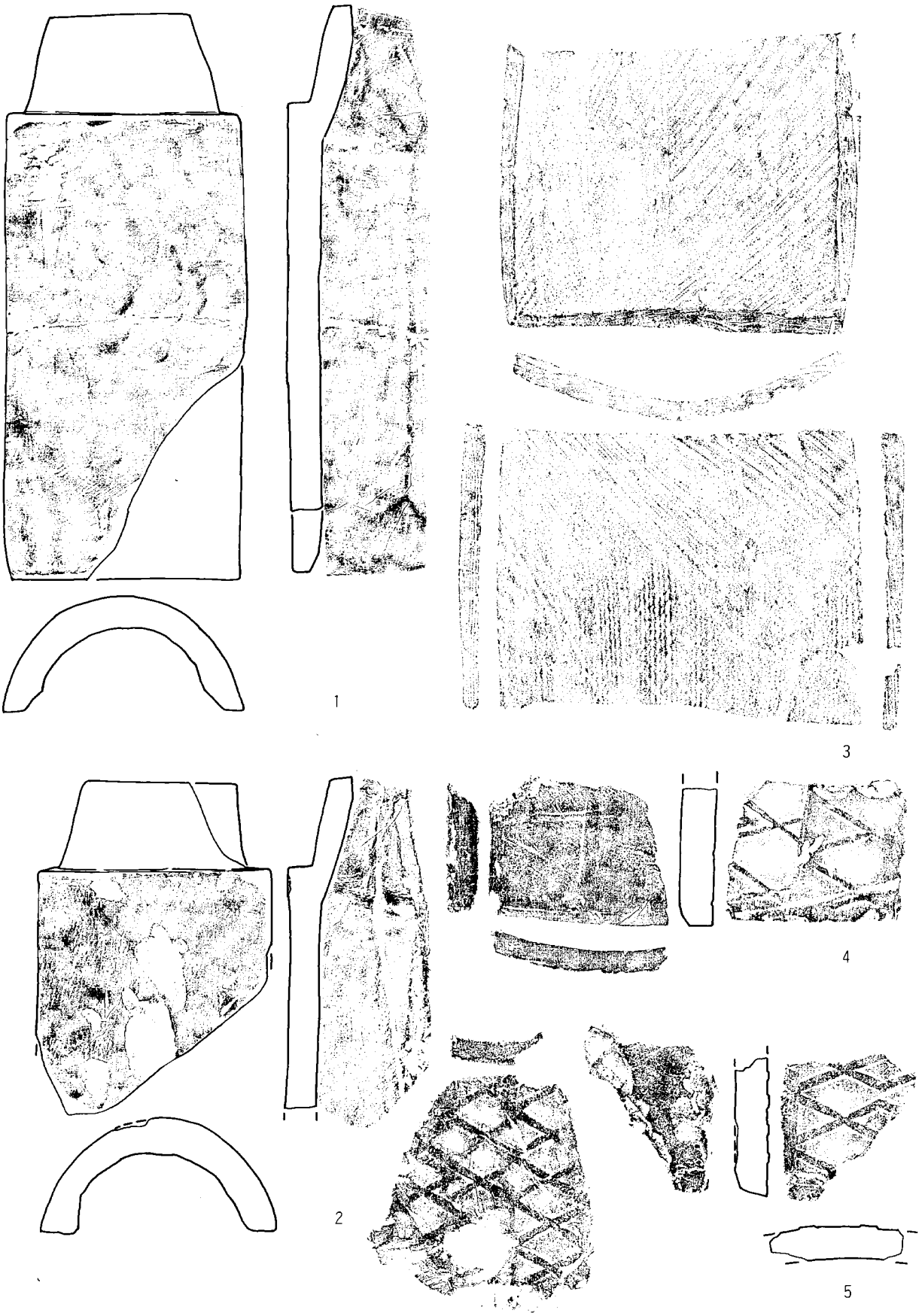


鬼　瓦

7　潮海寺出土瓦



第48図　潮海寺出土瓦（1）

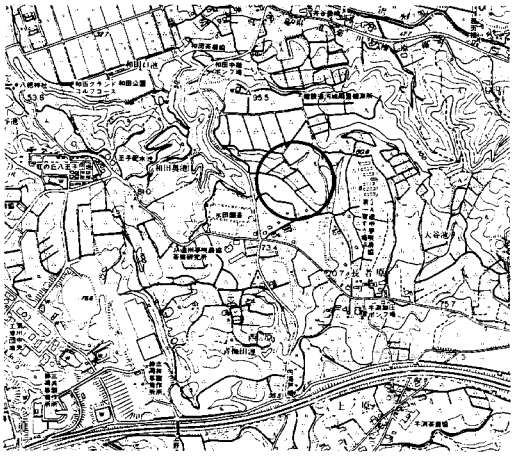


第49図　潮海寺出土瓦（2）

三五、皿山古窯跡

菊川町牛渕字東ノ原

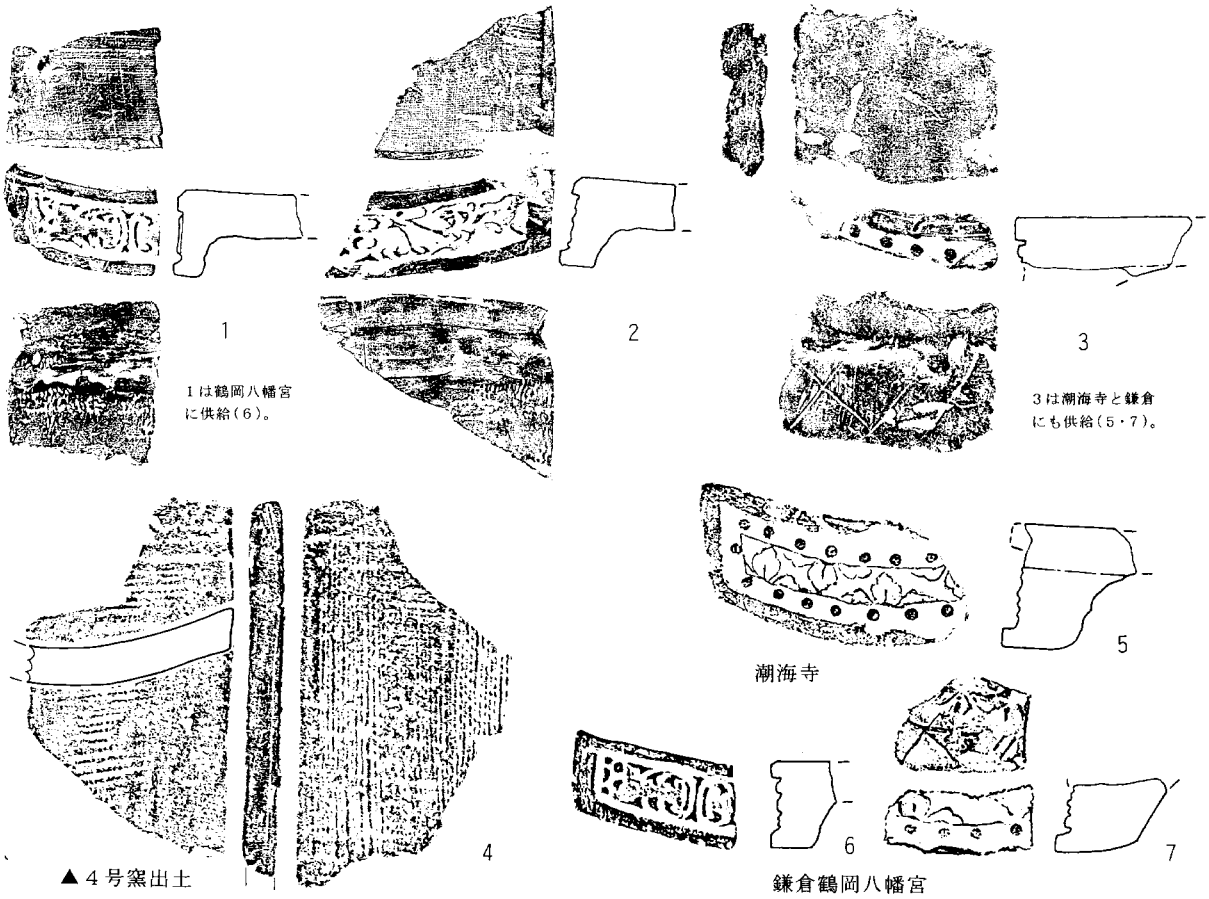
位置と地形　菊川町の東、牧ノ原台地から延びる丘陵の一つ、牛渕長者原に位置する。牧ノ原台地の小沢原付近より西に延びる丘陵には段丘が発達し、菊川に至るまでに数段が確認される。その内、最も高位置にあるのが長者原である。長者原は標高七〇ｍから八〇ｍで、遺跡はこの原の北側の尾根に立地する。遺跡の東と西側には、南北に谷が入り込んで、舌状の丘陵地形を成し、緩やかな斜面となっている。古窯跡は、この丘陵の南と東の斜面に築造されている。表土に黒ボク土が厚く堆積し、焼物の材料となる粘土はその下層に堆積している。



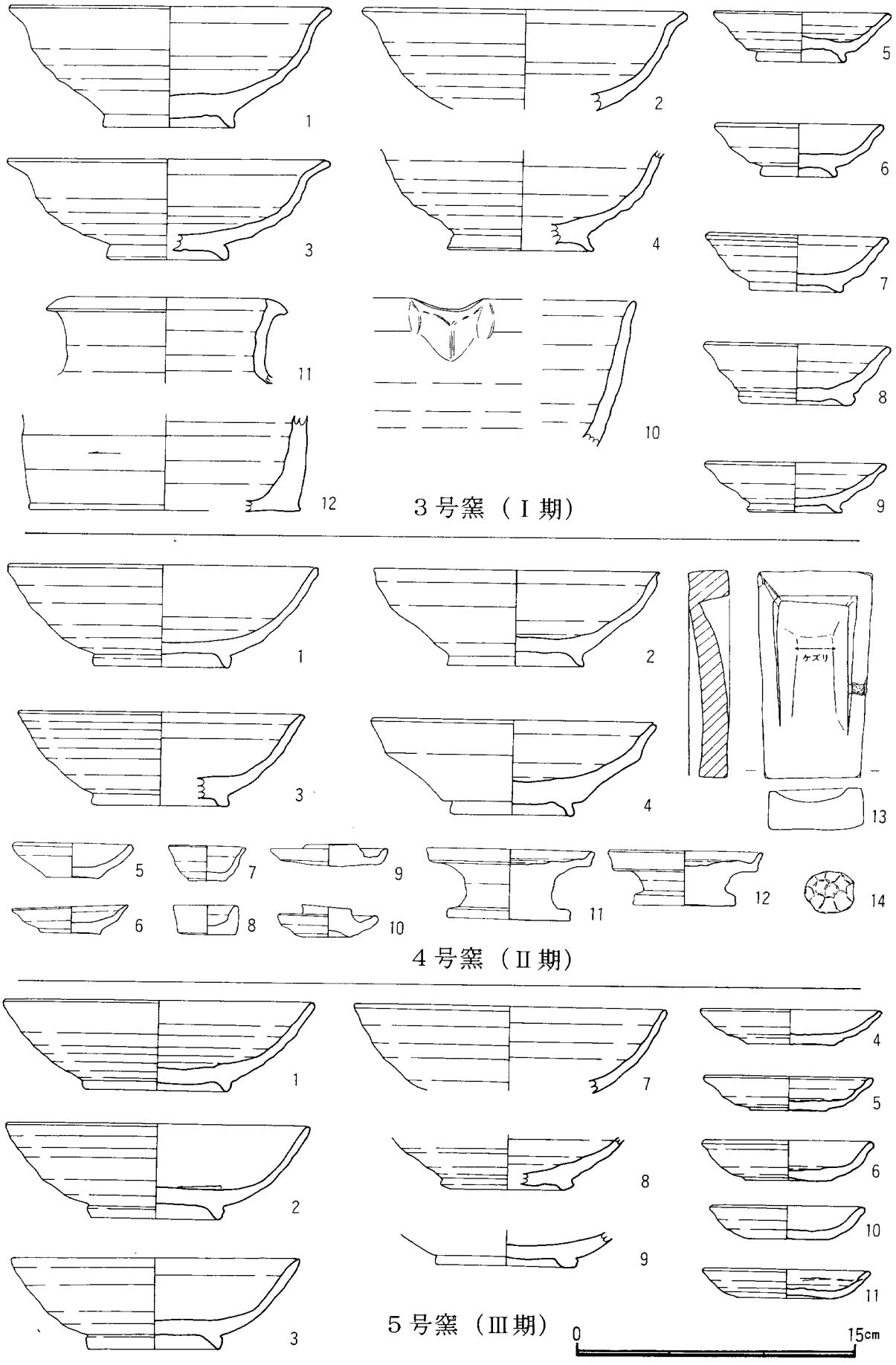
第50図　皿山古窯跡位置図

遺跡の概要　本古窯跡の山茶碗類については、遅くとも十二世紀前半代に灰釉陶器から連続して生産され、少なくとも十三世紀中頃まで操業が継続していたと考えられる。山茶碗期の資料は、三期に編年区分されており、遠江山茶碗編年のⅡ期（十二世紀後半から十三世紀初頭）の段階で、仏具らしき器種や瓦類を焼造し、地元の潮海寺やさらに鎌倉にまで瓦類を供給していた。従って、潮海寺などの宗教的な権力やそれに連なる在地領主としての横地氏の関与があった点も想像されよう。

参考文献　塚本和弘「皿山古窯跡群の成立と終末について」向坂鋼二還暦記念論文集　一九九三
原　廣志「鎌倉出土瓦と同文・同笵瓦について」『鎌倉考古42』　一九九九



第51図　皿山古窯跡出土遺物（1）



第52図　皿山古窯跡出土遺物（2）3号窯～5号窯

三六、島経塚

菊川町半済字堂ノ谷

位置と地形　半済島村の東に広がる丘陵縁辺部に位置する。菊川流域には河岸段丘が広汎に発達しており、遺跡周辺の丘陵にもみられる。また、長者原から延びる丘陵が小さな谷を形成している。この谷はいずれも幅が狭くて浅く、小規模な耕地となっている。

遺跡の概要　島経塚は、現在天神社の境内に位置する。経塚は、昭和二十四年頃天神社本殿後方の椎の古木の根本から、陶器質の筒型外容器に和鏡（1）が納められて出土したことから、その存在が明らかとなった。経塚の構造や埋納状況は不明である。陶器質の筒型外容器（2）は、器高二一・四cm、口径一七・六cm、底部径一九cmの大きさで東遠系の製品である。蓋（3）は、口径一九cm、器高二・九cmで天上部が窪み扁平となっている。口縁端部には数ケ所欠損が認められる。和鏡（1）は双雀鏡で保存状態は良好である。大きさは直径八三㎜、縁の高さ五・八㎜、となっている。埋納遺物の年代は、筒型外容器が東遠系、おそらく地元皿山窯産製品と考えられることから、十二世紀の年代があたえられよう。

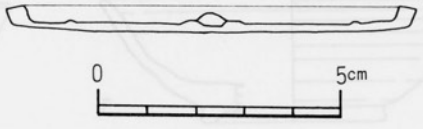
町内の経塚は、下内田の矢掛経塚と当島経塚の二箇所となっており、矢掛経塚の調査は行われておらず明らかでないが、島経塚の遺物は貴重な文化財と言える。なお、経塚埋納遺物は、現在、村松喜代志氏によって管理、保管されている。

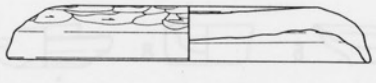


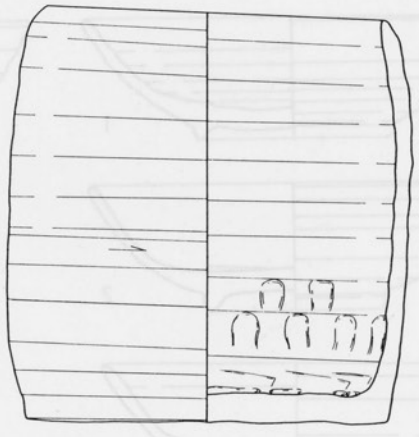
第53図　島経塚位置図（1：10000）











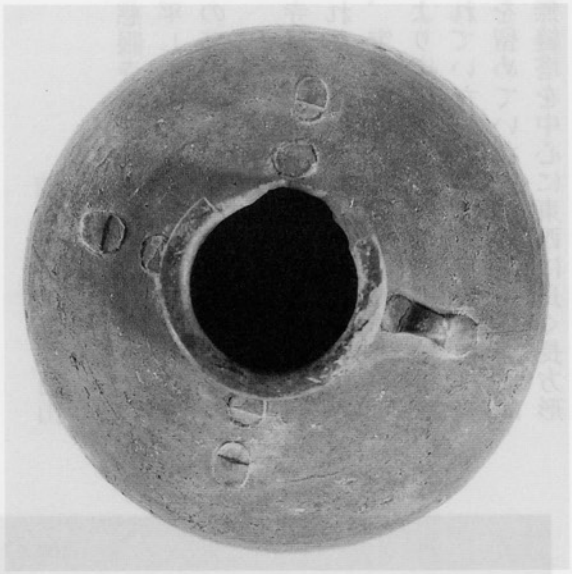
第54図　島経塚出土遺物実測図

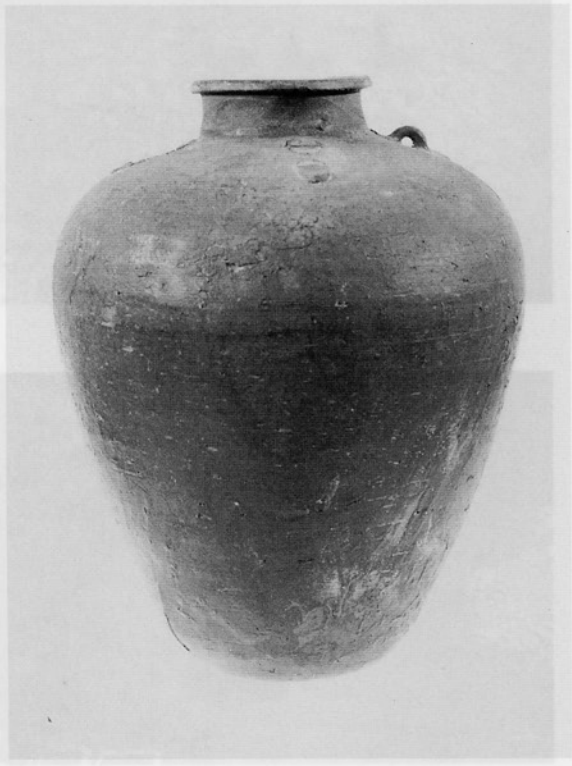
三七、金子正敏宅所蔵品

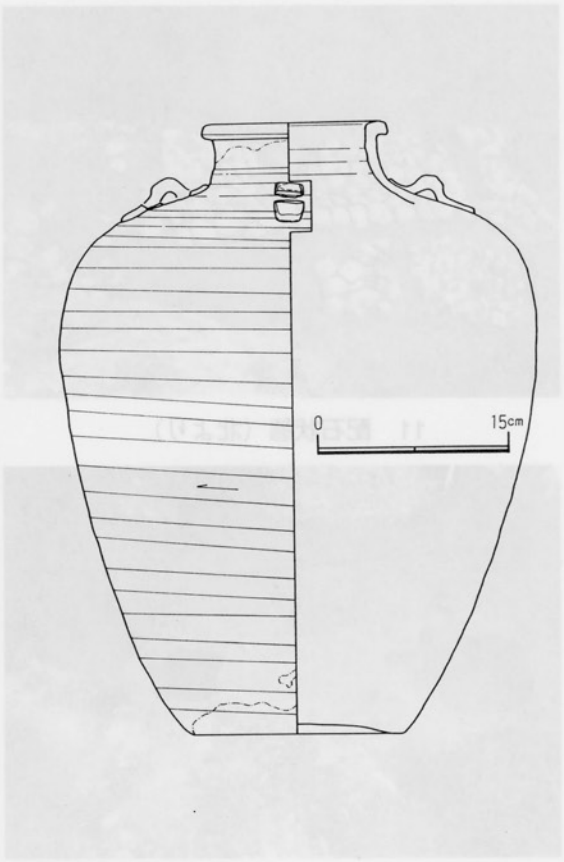
菊川町東横地字大久保

位置と地形　金子正敏宅は、奥横地村の慈眼寺山道入口付近に位置する。金子家は、横地城東城の下（大久保）に屋敷を構えていたが、近年現在の場所に移転した。また、屋号を金寿と呼ばれている。この金寿は、横地城が築城された東城の山を金寿山と呼んでいる。

遺跡の概要　金子宅の伝製品で、志戸呂産の祖母壊茶壺が一個ある。この壺は畑で出土したと伝えられるが正確な出土地点は明らかでない。大きさは、高さ四二・五cm、口径十二・四cm、体部最大幅三三・三cm、底部十四cmを測るが、口縁部が四分の位置欠損しているがほぼ完形なものである。把手は四方向に配置されているが、その内二箇所は欠損している。また把手は、口縁部に平行し横位に付けられるのが多いが縦位に配置されている。釉薬は、鉄釉を漬け掛けしている。調整は、体部外面にはヘラケズリ、内面はヨコナデが施される。体部下位外面には、カマキズがみられる。底部は、上げ底状となり焼成時の土が付着している。壺の年代は、十五世紀後半と考えられる。また、大久保の旧金子宅跡の土地を茶園改植したおり、かわらけが出土したとの伝えがあるが、その遺物はなく時期は不明となっているが注目される。旧金子宅跡の場所は、横地城を解明する一つの資料を提供するものであり、伝製品がその地にあったとするならば、より興味深い。







第55図　金子正敏宅所蔵品実測図及び写真

三八、慈眼寺中近世墓

菊川町東横地字白山

位置と地形　横地地区の東、奥横地の慈眼寺境内に位置する。境内は、武衛原段丘の南縁から延びる低丘陵を削平し平場となっている。境内の西側に墓代住職の墓所が築かれている。この墓所には、慈眼寺開基の信寂の墓と伝承する、五輪塔が伝わる。

遺跡の概要　横地城保存会による慈眼寺墓所の整備に伴い、平成九年十月十日から十二月十一日発掘調査が行われた。調査では、現地調査も含め各石造物観察、計測も行った。石造物は、宝篋印塔、五輪塔、無縫塔の三種類が認められた。各石塔は、墓所の東より宝篋印塔→五輪塔→無縫塔二基→宝篋印塔→無縫塔二基の順に並べられていた。しかし、宝篋印塔は笠の部材のみが安置されており、造立状態を留めていない。石塔の下面には、石敷が認められた。石敷は、歴代住職の無縫塔を中心に東西に長く長方形に敷き詰められていた。この石敷内の中央南側と、西側中央より蔵骨器（10・11）を確認した。また、調査区の西側と石敷の下層から五基の土壙が発見された。土壙は、最も西に位置する無縫塔の下層で、大きさ八〇cm×七〇cm、深さ七五cmのSK一が検出され、内部より壺（2）が出土している。SK二は、壁面が赤く焼け茶毘跡と考えられる。SK三は調査区の最東側で検出されている。大きさは、直径一三〇cm、深さ一mを測り、出土遺物は無い。土壙の年代は、SK一・三が中世で、他は近世の時期と判断される。今回の調査では、近世の無縫塔が四基に対して、蔵骨器が二個出土しているが、二基分の蔵骨器が確認できなかった。また、石敷内より、宝篋印塔の部材の破片や渥美産壺（1）が散乱した状態で検出されている。このことから中世遺構や石造物については、後世の攪乱により造立時の状態を発掘調査の成果で、復元することは難しいと判断される。しかし、少なくとも中世墓が造営された事は、この地域の歴史を考える上で重要な資料を提供する調査であったといえよう。



11　配石状態（北より）



12　上面配石検出状態（北より）



13　下面完掘（北より）



14　下面完掘（東より）



15　SK1 内蔵骨器（西より）



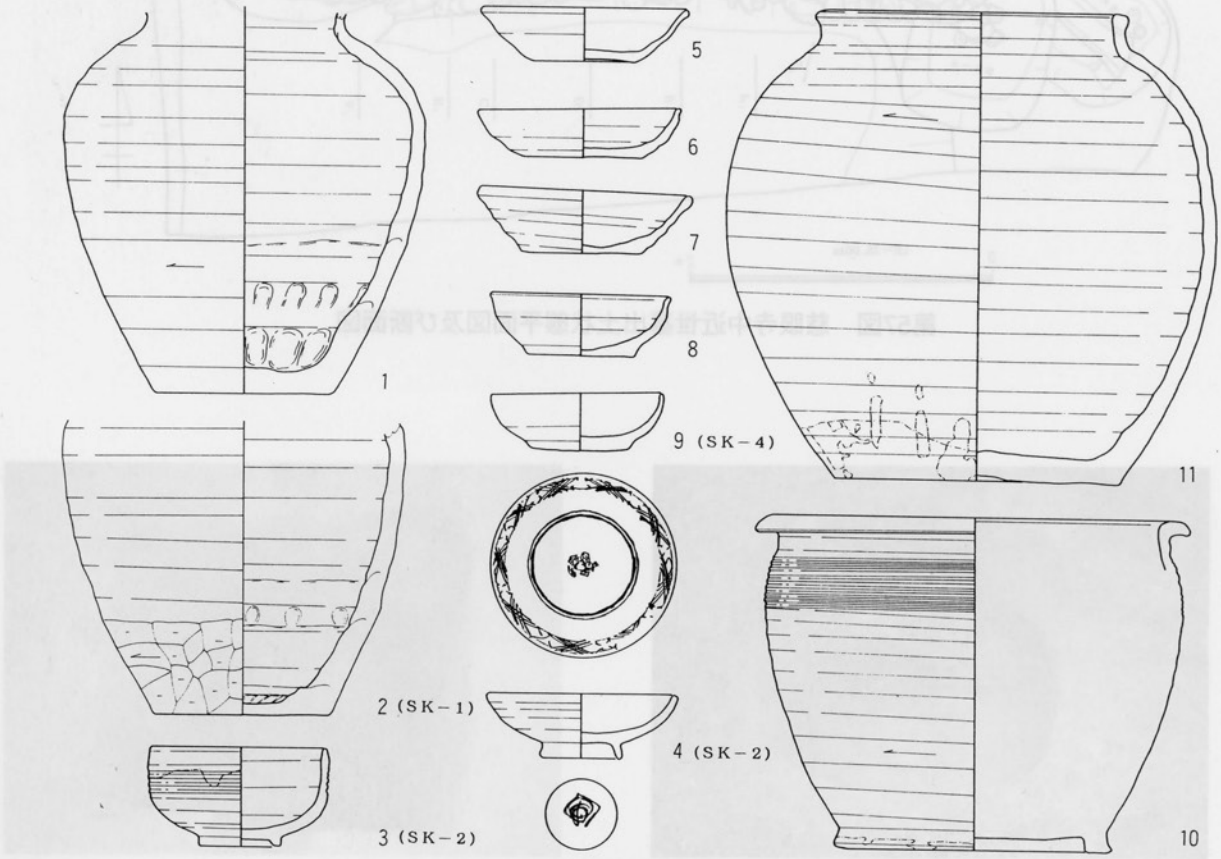
16　近世墓内蔵骨器（西より）



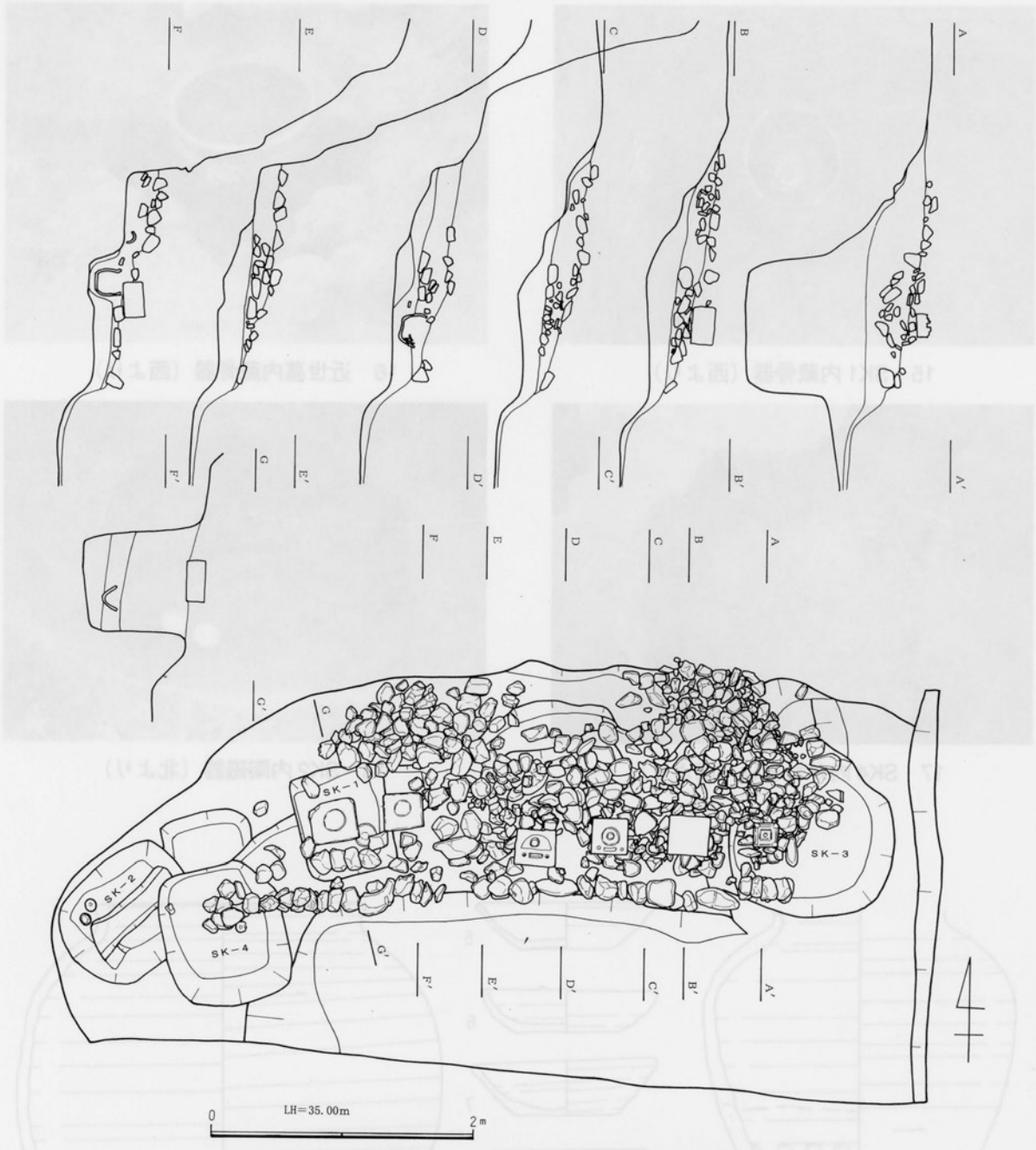
17　SK4 内かわらけ（南より）



18　SK2 内陶磁器（北より）



第56図　慈眼寺出土土器実測図
（1壺　2～6かわらけ　7肥前系青磁皿　8瀬戸産湯呑　9志戸呂産短頸壺　10瀬戸産半胴）



第57図　慈眼寺中近世墓出土状態平面図及び断面図



19　SK3 完掘（東より）



20　SK1 完掘（西より）

三九、胡麻段遺跡

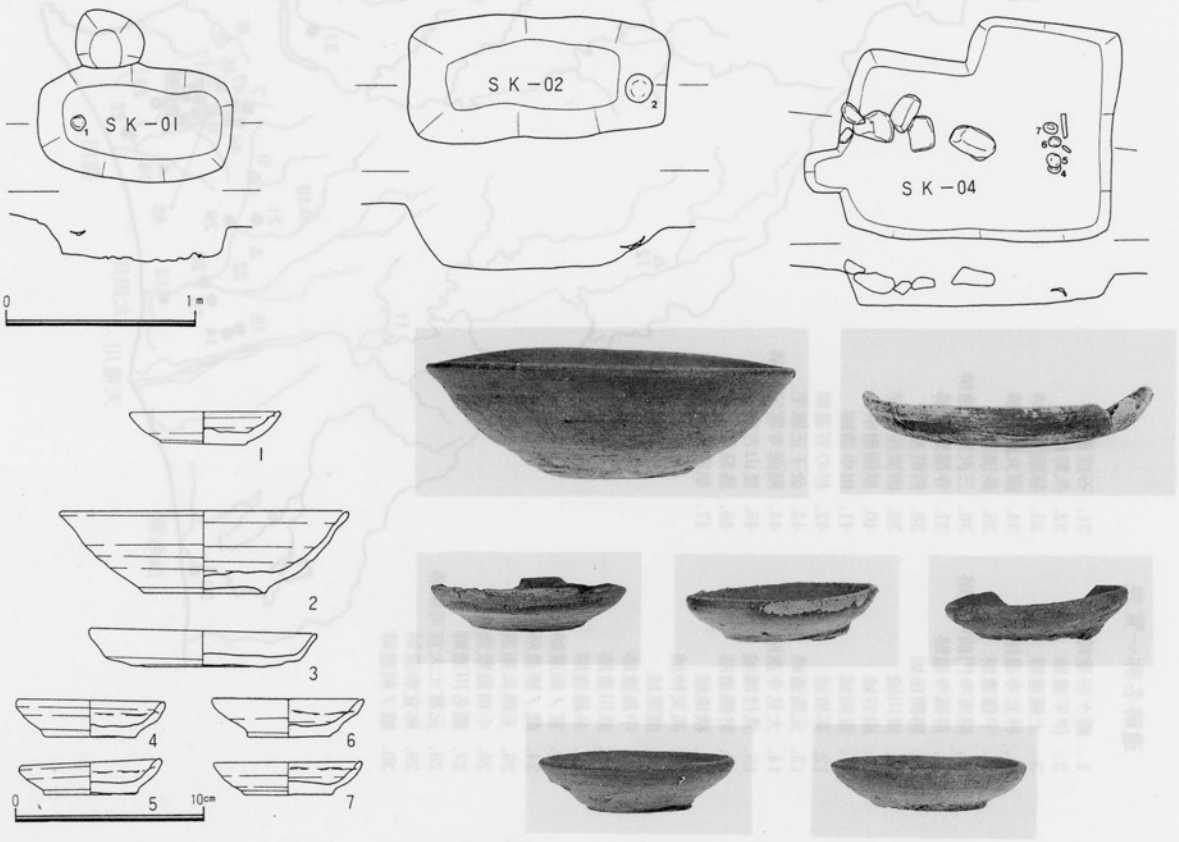
菊川町和田字胡麻段

位置と地形　菊川町の東、牛渕長者原から派生し和田地区に延びる低位丘陵上に位置する。丘陵は、標高三七ｍ前後で、北に向かって緩やかに傾斜し、先端部付近では沖積地と接する。遺跡は、丘陵の西側の斜面に立地する。表土には、黒ボク土が卓越し、その下層は黄褐色粘質土で基盤層となるが、調査区の北側では、薄く砂利層が露頭する。

調査の概要　個人住宅造成に伴い、平成五年四月二十一日から一五八㎡を対象に二十六日まで発掘調査が実施された。調査では、土壙四基が検出されている。土壙の位置は、調査区の中央から少し北に下った地点の範囲に分布し、ＳＫ一～三は隣接しまとまっている。平面形は、ＳＫ四が切り合いによりＬ字型となっているが、基本的に長方形を呈している。大きさは、長軸一〇四cm～一四五cmで短軸六五cm～九五cm、深さ二〇cm前後であった。出土遺物は、ＳＫ一で小皿（1）とＳＫ二で山茶碗（2）とかわらけ（3）が発見されたが、ＳＫ三では無かった。また、ＳＫ四は小皿（4～7）四点と刀子一振が出土している。出土した山茶碗と小皿は、東遠系の十三世紀前半の製品と考えられる。かわらけはロクロ成形のものである。器形は、口径に対して器高が低く扁平で、体部上半部から口縁部にかけて丁寧なヨコナデ調整が施されている。各土壙は、出土した遺物や遺構の特徴より中世前期の中世墓と推測される。この地域の中世遺跡としては、当遺跡の北の丘陵部に分布する、原段遺跡があり山茶碗、小皿、小碗等が出土している。しかし、建物等の遺構は確認されていない。また、出土地点は明らかでないが、法明寺の墓地に多数の中世石塔部材が集められている。

以上のように、この地域には断片的な考古資料はみられるものの、発掘の調査によって遺跡の年代や性格が明らかにされた点は、この地域の中世の歴史を解明する糸口となる調査であったと言えよう。

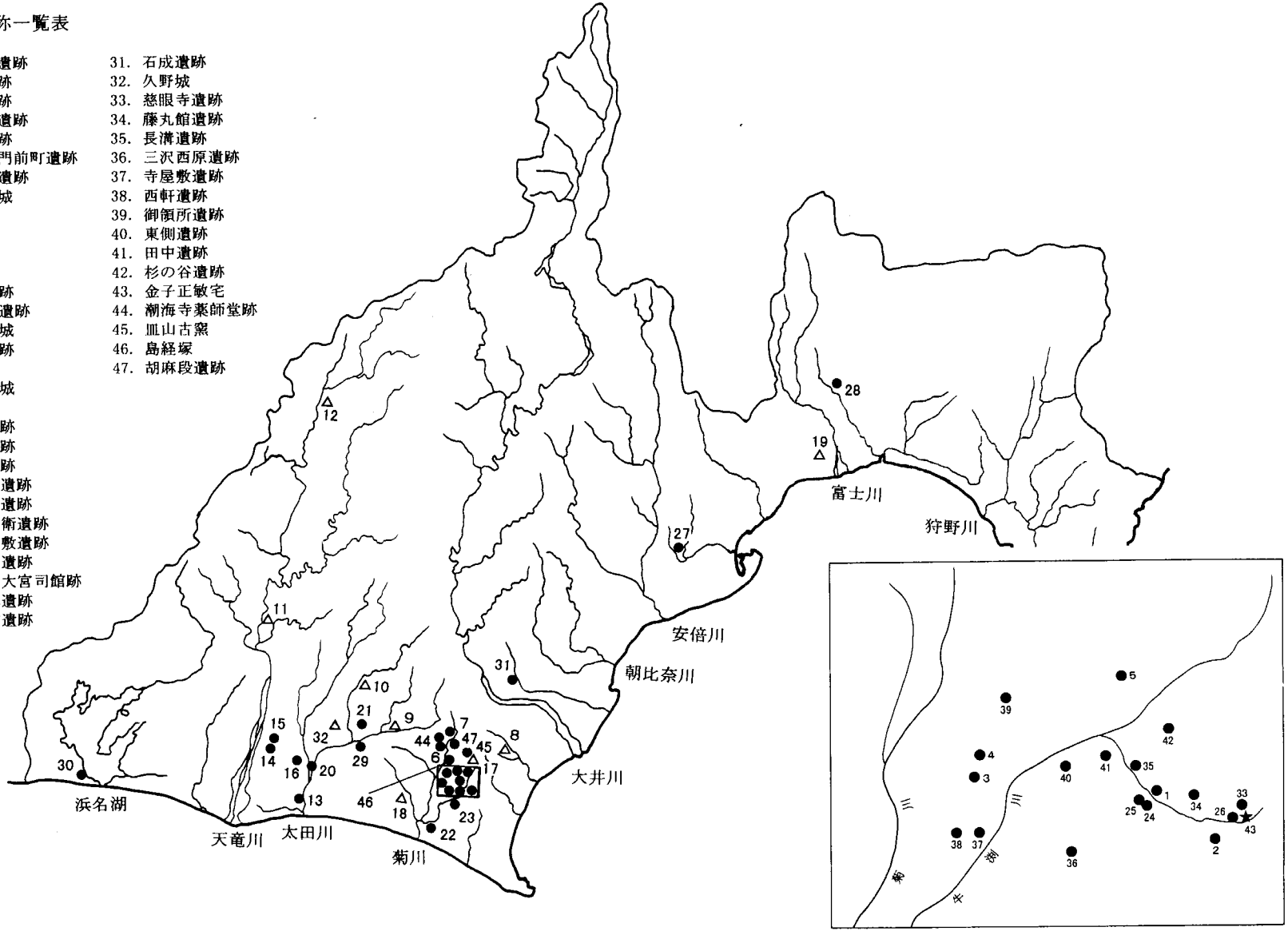
参考文献　年報第1号「3胡麻段遺跡」　菊川町教育委員会　一九九四



第58図　胡麻段遺跡出土遺物実測図と遺物写真（1・4～7小皿　2山茶碗　3かわらけ）

遺跡名称一覧表

1．殿ケ谷遺跡
2．伊平遺跡
3．土橋遺跡
4．林光寺遺跡
5．宇藤遺跡
6．潮海寺門前町遺跡
7．善福寺遺跡
8．勝間田城
9．掛川城
10．殿谷城
11．笹岡城
12．高根城
13．元島遺跡
14．大見寺遺跡
15．見付端城
16．野際遺跡
17．横地城
18．高天神城
19．蒲原城
20．中島遺跡
21．原川遺跡
22．糸繰遺跡
23．宮ノ前遺跡
24．蔵ノ腰遺跡
25．五郎兵衛遺跡
26．小田屋敷遺跡
27．瀬名川遺跡
28．元富士大宮司館跡
29．祢宜弥遺跡
30．城ノ前遺跡
31．石成遺跡
32．久野城
33．慈眼寺遺跡
34．藤丸館遺跡
35．長溝遺跡
36．三沢西原遺跡
37．寺屋敷遺跡
38．西軒遺跡
39．御領所遺跡
40．東側遺跡
41．田中遺跡
42．杉の谷遺跡
43．金子正敏宅
44．潮海寺薬師堂跡
45．皿山古窯
46．島経塚
47．胡麻段遺跡



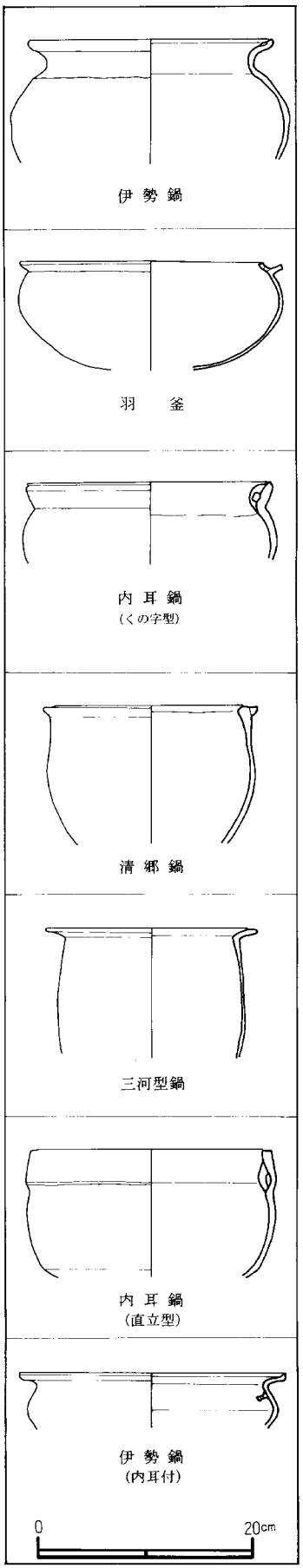
第59図　遺跡分布図

鍋類一覧表

第2表　鍋分類一覧表

	伊勢鍋	羽　釜	内耳鍋（くの字型）	小　計	清郷鍋	三河型鍋	内耳鍋（直立型）	伊勢鍋（内耳付）	その他	小　計	合　計
1殿ケ谷遺跡	4(1)	4(2)	0	8(3)	0	1(1)	0	0	0	1(1)	9(4)
2伊平遺跡	180(9)	19(2)	2(1)	201(12)	0	0	59(10)	0	0	59(10)	260(22)
3土橋遺跡	19(3)	1(1)	0	20(4)	0	1(1)	0	0	0	1(1)	21(5)
4林光寺遺跡	101(15)	0	0	101(15)	7(3)	6(4)	4(1)	0	0	17(8)	118(13)
5宇藤遺跡	2(1)	4(1)	1(1)	7(3)	2(2)	0	30(1)	0	0	32(3)	39(6)
6潮海寺門前町遺跡	3(2)	0	9(3)	12(5)	0	1(1)	109(4)	0	0	110(5)	122(10)
7善福寺遺跡	0	9(1)	11(2)	20(3)	0	0	15(2)	0	0	15(2)	35(5)
8勝間田城	0	64(6)	0	64(6)	0	0	0	0	0	0	64(6)
9掛川城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10殿谷城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11笹岡城	0	0	0	0	0	0	2(1)	0	0	2(1)	2(1)
12高根城	0	0	0	0	0	0	29(1)	0	0	29(1)	29(1)
13元島遺跡	119	805	1032	1956	0	0	1178	57	0	1235	3191
14大見寺遺跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15見付端城	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16野際遺跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17横地城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18高天神城	0	0	0	0	0	0	105(2)	0	0	105(2)	105(2)
19蒲原城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20中島遺跡	430(16)	2(2)	0	432(18)	0	0	0	0	0	0	432(18)
21原川遺跡	2(2)	101(5)	130(4)	233(11)	1(1)	0	2992(77)	47(2)	0	3040(80)	3273(91)
22糸繰遺跡	95(5)	1(1)	0	96(6)	38(4)	0	0	0	0	237(10)	333(16)
23宮ノ前遺跡	14(3)	3(1)	0	17(4)	0	0	0	0	0	0	17(4)
24蔵ノ腰遺跡	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)	1(1)
25五郎兵衛遺跡	13(2)	0	0	13(2)	1(1)	0	0	0	0	1(1)	14(3)
26小田屋敷遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
27瀬名川遺跡	44(3)	33(1)	0	77(4)	0	0	0	0	0	0	77(4)
28元富士大宮司館跡	6(2)	6(2)	0	12(4)	0	2(1)	—	0	0	2(1)	14(5)
29祢宜弥遺跡	0	0	0	0	1(1)	0	112(5)	0	2(1)	115(7)	115(7)
30城ノ前遺跡	50(6)	18(3)	863(20)	931(29)	97(25)	0	0	0	0	97(25)	1028(54)
31石成遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
32久野城	21(2)	9(2)	1(1)	31(5)	0	0	759(5)	0	0	759(5)	790(10)

（ ）は個体数



第60図　鍋型式分類図

各遺跡器種組成表（2）

項　目	⑨ 掛川城	⑩ 殿谷城	⑪ 笹岡城	⑫ 高根城	⑬ 元島遺跡	⑭ 大見寺遺跡	⑮ 見付端城遺跡	⑯ 野際遺跡
山茶碗類	未調査	0	60（ 8%）	0	658（ 8%）	未調査	未調査	未調査
山茶碗			56(21)		531			
小　皿			0		61			
小　碗			0		21			
片口鉢			4（ 3） ｿﾉ他		40			
土師質土器類	未調査	60（ 7%）	649(84%)	130(11%)	4571(54%)	未調査	未調査	未調査
かわらけ		59	626(29)	97	1427			
鍋　類		0	2（ 1）	29	3143			
その他		1（ 1）	21(21) 土錘	4（ 1）	1			
常滑産	4	8（ 1%）	7（ 1%）	809(68%)	705（ 8%）	394	2140	14
壷	0	0	0	70（ 1）	130	6	36	0
甕	4（ 4）	8(2)壷か甕	7（ 1）	738（ 6）	164	383	1994	13
片口鉢	0	0	0	1（ 1）	404	5	109	1
その他	0	0	0	0	7	5	1	0
渥美・湖西産	未調査	0	1(0.2%)	0	8(0.2%)	117	224	42
壷			0		3	0	5	1
甕			1（ 1）		5	117	219	41
鉢			0		0	0	0	0
その他			0		0	0	0	0
瀬戸・美濃産	70	336(42%)	36（ 4%）	200(17%)	1951(23%)	123	1099	46
天目茶碗	9（ 8）	57（ 30）	5（ 2）	20（ 2）	194（ 52）	24	178(10)	3
碗　類	0	1（ 1）	1	1	128（ 5）	20	152	4
皿　類	33(33)	148(148)	6（ 2）	4（ 1）	709(218)	10	124(13)	6（ 2）
卸皿類	1	0	1	3	49	6	32	0
盤　類	1	3（ 3）	1	25	217	17	209	3
擂　鉢	13(12)	22（ 22）	16	25(13)	329(174)	19	140(24)	11（ 3）
壷・瓶類	8	82（ 38）	5	119	165（ 2）	24	212	14
仏具類	1（ 1）	5（ 3）	1	0	16（ 1）	3	31	1
その他	4（ 4）	18（ 10）	0	3	144（ 17）	0	21	4（ 1）
舶載陶磁器	183	191(23.5%)	17（ 2%）	39（ 3%）	181（ 2%）	55	431	65
青　磁	48(26%)	8（ 4%）	7(41%)	31(79%)	97(54%)	39(71%)	278(65%)	32(49%)
碗　類	33	0	5	28	84	17	206	27
皿　類	3	7	2	0	11	8	16	5
盤　類	3	1	0	0	1	8	21	0
壷　類	0	0	0	0	0	0	1	0
その他	9	0	0	3	1	6	34	0
白　磁	45(25%)	60(32%)	4(23.5%)	7(18%)	58(32%)	6(11%)	121(28%)	30(46%)
碗　類	3	0	0	0	8	3	42	25
皿　類	41	57	3	0	43	3	65	1
盃　類	0	3	0	7	6	0	3	0
壷　類	0	0	0	0	1	0	4	4
その他	1	0	1	0	0	0	7	0
青白磁	0	0	2(12%)	0	6（ 3%）	0	0	2（ 3%）
碗　類			0		0			0
皿　類			0		4			0
壷　類			0		1			0
その他			2 合子		1 袋物			2 合子
染　付	85(46%)	71(37%)	4(23.5%)	1（ 3%）	13（ 7%）	0	22（ 5%）	1（ 2%）
碗　類	27	18	0	1	12		10	0
皿　類	55	44	4	0	1		12	1
その他	3	9	0	0	0		0	0
その他	5（ 3%）	52(27%)	0	0	7（ 4%）	10(18%)	10（ 2%）	0
褐　釉	0	0			1	10 天目	6 天目	
越州系	0	0			0	0	3	
高麗系	0	0			0	0	0	
泉州系	0	0			0	0	1 盤	
黒　釉	5 漳州窯系	52(3)南ﾊﾞﾝ			6	0	0	
志戸呂窯	14	4(0.5%)	2(0.4%)	8（ 1%）	386（ 4%）	94	269	43
天目茶碗	1（ 1）	0	0	0	17(11)	1	13	1（ 1）
碗　類	0	0	1（ 1）	0	11	0	7（ 1）	0
皿　類	5（ 5）	0	0	0	65(20)	14	7	1
盤　類	0	3	0	0	23	0	10	0
擂　鉢	1（ 1）	1	1	8	223(23)	72	76（ 1）	34（ 9）
鉢　類	0	0	0	0	1	1	0	0
壷・瓶類	7	0	0	0	30（ 1）	3	145	5
仏具類	0	0	0	0	5	1	3	0
その他	0	0	0	0	11(6) 1 卸皿	2 卸皿	8 卸皿	2
初山窯	17	0	2(0.4%)	0	63(0.8%)	0	0	2
天目茶碗	6（ 6）		0		12			1（ 1）
碗　類	0		0		0			0
皿　類	7（ 6）		2（ 2）		49			0
盤　類	2（ 2）		0		0			0
擂　鉢	1（ 1）		0		0			1（ 1）
壷・瓶類	1（ 1）		0		1 水注			0
その他	0		0		1 徳利			0
その他		信楽 208(26%)						
		208（ 3）						
合　計	(288)	807	774	1,186	8,523	(783)	(4,163)	(212)
調査面積	不明	4,000 ㎡	900 ㎡	2,600 ㎡	20,000 ㎡	340 ㎡	2,400 ㎡	4,700 ㎡

第３表　各遺跡器種組成表（1）

項　目	① 殿ケ谷遺跡	② 伊平遺跡	③ 土橋遺跡	④ 林光寺遺跡	⑤ 宇藤遺跡	⑥ 潮海寺門前町	⑦ 善福寺遺跡	⑧ 勝間田城
山茶碗類	1207(2.5%)	1829(38%)	2773(82.5%)	2183(83%)	2412(79%)	1662(65.5%)	73(20%)	14(0.8%)
山茶碗	929(83)	1213(326)	2485(308)	1984(409)	1878(134)	1380(107)	49(18)	14
小　皿	240(35)	581(226)	65(36)	62(39)	459(94)	171(51)	3(3)	0
小　碗	9(4)	25(20)	213(84)	135(80)	58(29)	94(24)	9(9)	0
片口鉢	29(12) 壷 1	10(4)	10(4) 鉢	2(2)	17(3)	14(3)	12(8) ソノ他	0
土師質土器類	46353(96.7%)	948(20%)	170(5%)	354(14%)	292(10%)	276(11%)	87(23.5%)	4184(81%)
かわらけ	46303(1187)	688(257)	149(54)	234(26)	252(29)	154(19)	50(21)	4118(231)
鍋　類	9	260(22)	21(5)	118(13)	39(4)	122(10)	35(5)	64(6)
その他	41 火鉢	0	0	2(2)	1(1)	0	2(1)	2(2)
常滑産	47(0.1%)	758(16%)	374(11%)	57(2%)	100(3%)	363(14%)	69(19%)	120(2%)
壷	0	58(8)	107(5)	42(3)	50(5)	17(9)	0	0
甕	45	491(15)	264(5)	0	47(9)	320(9)	58(6)	120(6)
片口鉢	2	209(17)	3(1)	15(1)	1(1)	15(6)	0	0
その他	0	0	0	0	2(2)	11(1)	11(6)	0
渥美・湖西産	4(0.08%)	44(1%)	12(0.3%)	1(0.05%)	7(0.5%)	29(1%)	0	2(0.2%)
壷	0	28(7)	12(3)	1(1)	0	8(2)		2
甕	4	1(2)	0	0	7(3)	9(2)		0
鉢	0	15(1)	0	0	0	12(8)		0
その他	0	0	0	0	0	0		0
瀬戸・美濃産	160(0.3%)	833(17.5%)	4(0.1%)	10(0.4%)	156(5%)	107(4%)	98(26.5%)	471(9%)
天目茶碗	14(5)	252(11)	0	0	29(10)	18(3)	22(2)	47
碗　類	8(3)	90(1)	1	1	11	19(1)	22	18
皿　類	29(9)	100(19)	0	3(1)	38(23)	14(4)	13(1)	61
卸皿類	3	40	0	1	3	3	2	4
盤　類	15	158	0	1	12	10	7	10
擂　鉢	60(17)	105(19)	0	2(2)	36(28)	29(6)	8	311
壷・瓶類	6	16	3	1	8	8(1)	13	19
仏具類	1	9	0	1	0	4	6	0
その他	24	63(1)	0	0	19(2)	2	5	1
舶載陶磁器	163(0.3%)	342(7%)	24(1%)	10(0.4%)	36(1%)	51(2%)	18(5%)	119(2%)
青　磁	77(47%)	222(65%)	7(29%)	2(20%)	26(72%)	44(86%)	15(83%)	50(42%)
碗　類	66	199	4	1	22	37	11	35
皿　類	7	23	1	1	3	6	2	15
盤　類	2	0	2	0	0	1	0	0
壷　類	2	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	1	0	2	0
白　磁	45(28%)	83(24%)	16(67%)	7(70%)	4(11%)	7(14%)	3(17%)	46(38.5%)
碗　類	3	21	9	5	2	2	1	1
皿　類	24	60	4	1	2	4	2	17
盃　類	0	0	0	0	0	1	0	2
壷　類	18	2	1	0	0	0	0	0
その他	0	0	2	1	0	0	0	26
青白磁	34(21%)	28(8%)	0	1(10%)	1(3%)	0	0	0
碗　類	0	3		0	0			
皿　類	4	2		0	1			
壷　類	29	19		0	0			
その他	1	4		1 合子	0			
染　付	0	2(1%)	0	0	5(14%)	0	0	15(12.5%)
碗　類		1			3			7
皿　類		1			2			8
その他		0			0			0
その他	7(4%)	7(2%)	1(4%)	0	0	0	0	8(7%)
褐　釉	1	6	0					8
越州系	0	0	0					0
高麗系	0	1	0					0
泉州系	6	0	0					0
黒　釉	0	0	1 天目					0
志戸呂窯	0	17(0.5%)	3(0.1%)	2(0.1%)	37(1%)	53(2%)	22(6%)	251(5%)
天目茶碗		5(2)	0	0	18(18)	2	0	0
碗　類		0	0	0	1	4	1	2
皿　類		2	0	1(1)	1(1)	15(3)	3(1)	1
盤　類		0	0	0	0	3	1	0
擂　鉢		8	3	1	14(9)	24(9)	3(1)	155
鉢　類		0	0	0	0	0	0	0
壷・瓶類		1	0	0	2	5	3	88
仏具類		0	0	0	1	0	0	5
その他		1 卸皿	0	0	0	0	11	0
初山窯	1(0.01%)	0	0	1(0.05%)	4(0.5%)	5(0.5%)	0	0
天目茶碗	1			0	1(1)	3(2)		
碗　類	0			0	0	0		
皿　類	0			1	3(2)	2(2)		
盤　類	0			0	0	0		
擂　鉢	0			0	0	0		
壷・瓶類	0			0	0	0		
その他	0			0	0	0		
その他	1(0.01%)							
	1(1) 瓦器							
合　計	47,936	4,771	3,360	2,618	3,044	2,546	367	5,161
調査面積	481 ㎡	5,887 ㎡	4,000 ㎡	3,400 ㎡	5,020 ㎡	702 ㎡	1,500 ㎡	2,300 ㎡

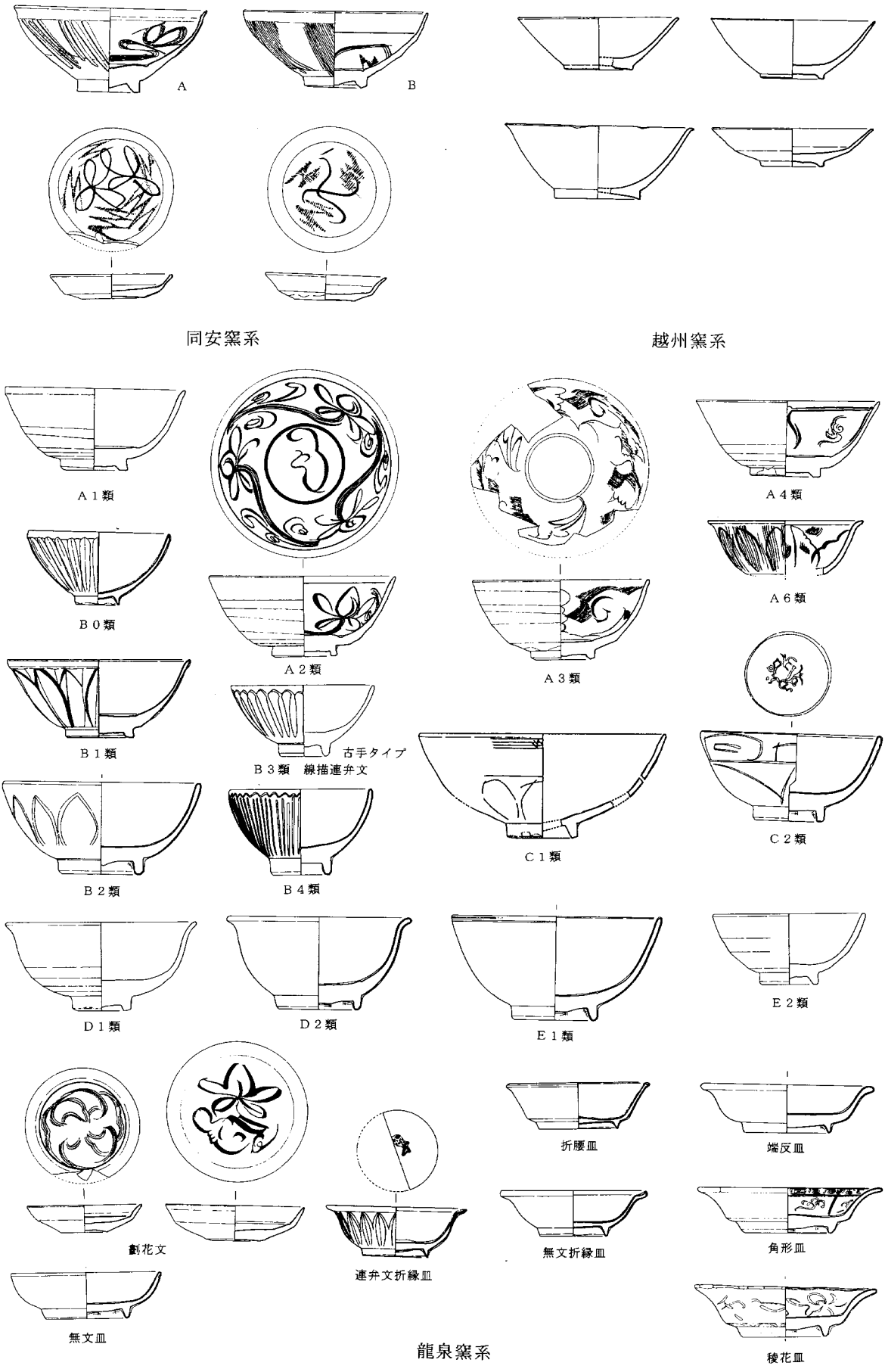
各遺跡器種組成表（4）

項　目	㉕ 五郎兵衛遺跡	㉖ 小田屋敷遺跡	㉗ 瀬名川遺跡	㉘ 元富士大宮	㉙ 祢宜弥遺跡	㉚ 城ノ前遺跡	㉛ 石成遺跡	㉜ 久野城
山茶碗類	170(60.5%)	193(81%)	43(12%)	131(0.5%)	681(88%)	2122(44%)	5841(63%)	16(0.2%)
山茶碗	138(37)	141(23)	28(7)	29(18)	565(43)	1918(234)	4072(228)	12(3)
小　皿	11(5)	41(12)	2(2)	7(7)	59(19)	115(46)	1071(144)	2(2)
小　碗	18(8)	9(8)	0	2(2)	39(7)	52(23)	653(123)	1(1)
片口鉢	3(3)壷瓶類	2(2)	13(3)	93(13)	18(5)	37(　5)	45(11)	1(1)
土師質土器類	97(34.5%)	33(14%)	225(60%)	31410(94%)	3(0.3%)	2180(45%)	2739(29%)	9159(87.7%)
かわらけ	80(11)	33(10)	148(12)	31377(387)	0	1140(113)	2473(123)	8338(429)
鍋　類	14(3)	0	77(4)	12(　4)	3(2)	1028(54)	265(11)	790(10)
その他	3(3) 土錘	0	0	21(21)	0	12(　2)	1(　1)	4(　4)
常滑産	3(1%)	0	50(14%)	1015(3%)	34(4%)	153(3%)	475(5%)	193(1.8%)
壷	0		0	43(5)	1(1)	4(2)	23(2)	8(2)
甕	3(1)		50	919(22)	33(3)	119(4)	398(8)	182(7)
片口鉢	0		0	51(17)	0	30(3)	54(5)	3(1)
その他	0		0	2(2)	0	0	0	0
渥美・湖西産	4(1.4%)	2(1%)	0	62(0.3%)	13(1.5%)	158(3%)	21(0.2%)	7(0.1%)
壷	1(1)	1(1)		3(2)	0	12	4(1)	0
甕	3(3)	1(1)		59(5)	13(2)	146	17(2)	7
鉢	0	0		0	0	0	0	0
その他	0	0		0	0	0	0	0
瀬戸・美濃産	6(2%)	1(0.5%)	5(1%)	293(1%)	21(3%)	178(4%)	122(1.3%)	782(7.5%)
天目茶碗	0	1	0	32	1	17	17	126(100)
碗　類	2	0	0	39	3	14	12	23(18)
皿　類	4(1)	0	0	26(3)	9(6)	34	6	232(206)
卸皿類	0	0	1	9	1	1	15	2(　1)
盤　類	0	0	2	64	0	12	14	4(　3)
擂　鉢	0	0	0	79(7)	2(1)	56(1)	7	303(207)
壷・瓶類	0	0	2	34	2	41	44	26(　7)
仏具類	0	0	0	4	0	0	2	7(　2)
その他	0	0	0	6(1)	3(2)	3	5	59(53)
舶載陶磁器	2(0.6%)	6(2.5%)	46(13%)	355(1%)	23(3%)	28(0.4%)	111(1.2%)	177(1.7%)
青　磁	0	3(50%)	44(96%)	196(55%)	16(70%)	21(75%)	54(49%)	26(15%)
碗　類		2	39	101	16	19	50	13
皿　類		1	5	8	0	1	4	10
盤　類		0	0	32	0	0	0	0
壷　類		0	0	2	0	1	0	0
その他		0	0	53	0	0	0	3
白　磁	1(50%)	2(33%)	2(4%)	58(16%)	4(17%)	7(25%)	47(42%)	59(33%)
碗　類	1	0	0	11	2	5	32	0
皿　類	0	2	2	9	0	0	9	57
盃　類	0	0	0	3	0	1	0	2
壷　類	0	0	0	35	2	0	1	0
その他	0	0	0	0	0	0	5	0
青白磁	0	1(17%)	0	19(6%)	0	0	4(4%)	0
碗　類		0		0			1	
皿　類		0		0			2	
壷　類		0		15			0	
その他		1 合子		4 合子			1 合子	
染　付	1(50%)	0	0	0	0	0	0	90(51%)
碗　類	0							24
皿　類	1							61
その他	0							5 杯 4
その他	0	0	0	82(23%)	3(13%)	0	6(5%)	2(1%)
褐　釉				3 天目	0		3 天目	1 茶入
越州系				0	0		0	0
高麗系				0	0		0	0
泉州系				79	3		3 洗	0
黒　釉				0	0		0	1 漳州染付
志戸呂窯	0	1(0.5%)	0	20(0.1%)	2(0.2%)	36(0.6%)	18(0.2%)	56(0.5%)
天目茶碗		0		0	0	0	1(1)	2(2)
碗　類		0		0	0	0	0	1(1)
皿　類		0		3(1)	0	3	0	8(8)
盤　類		0		2(1)	0	3	2	0
擂　鉢		1		10(6)	1	23	10(1)	25(20)
鉢　類		0		0	0	0	3	6(6)
壷・瓶類		0		4	1	7	2	8(4)
仏具類		0		0	0	0	0	2(2)
その他		0		1 卸皿	0	0	0	4(2)
初山窯	0	1(0.5%)	0	1(0.1%)	0	0	0	45(0.4%)
天目茶碗		0		0				11(7)
碗　類		0		0				1(1)
皿　類		1(1)		0				16(12)
盤　類		0		1(1)				5(4)
擂　鉢		0		0				7(7)
壷・瓶類		0		0				2(2)
その他		0		0				3(3)
その他							6(0.1%)	2(0.1%)
							瓦器 6(1)	徳利 1 備前 向付 1 唐津
合　計	282	237	369	33,287	777	4,855	9,333	10,437
調査面積	51 ㎡	205 ㎡	1,300 ㎡	3,700 ㎡	1,200 ㎡	900 ㎡	835 ㎡	4,190 ㎡

各遺跡器種組成表（3）

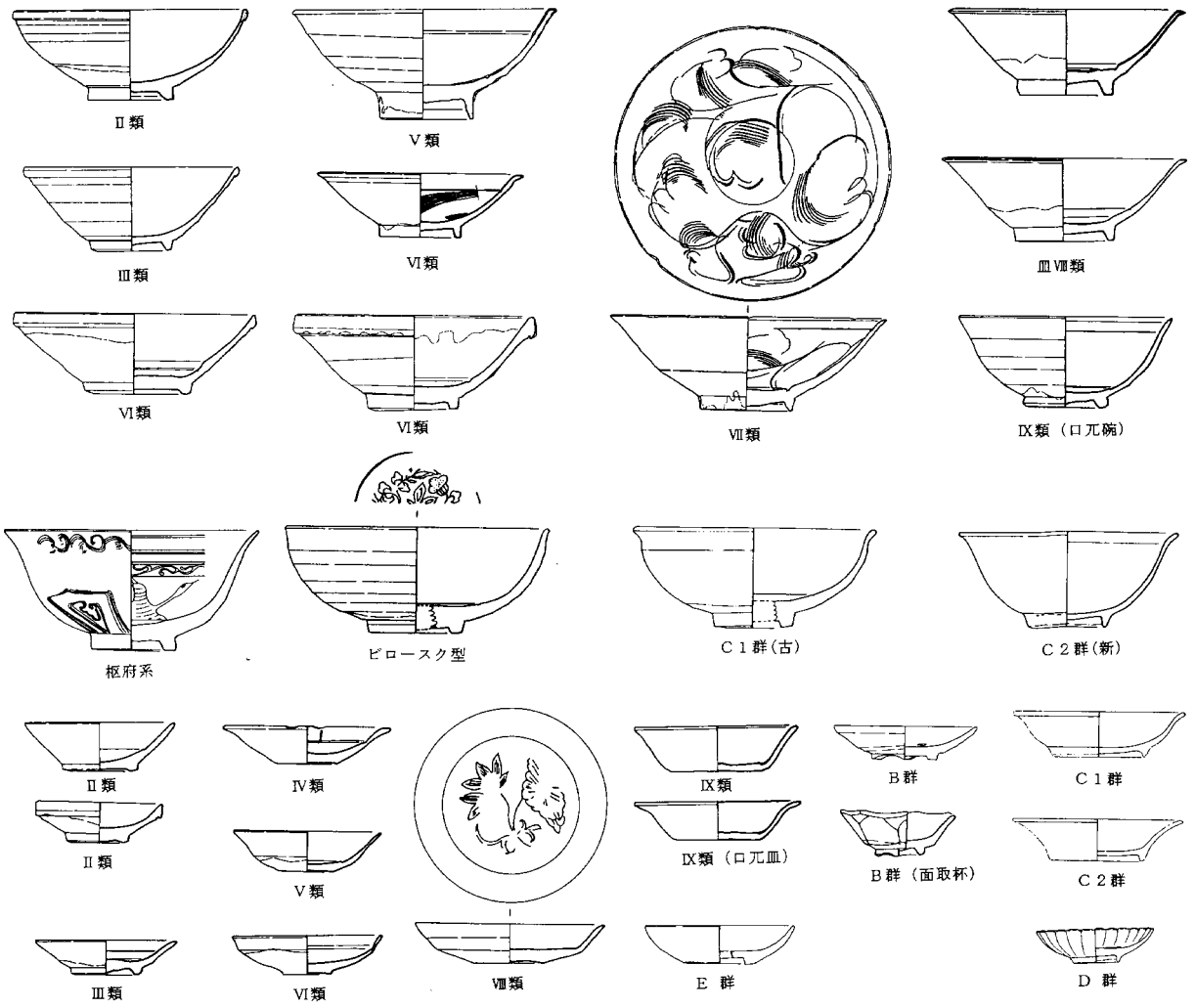
項　目	⑰ 横地城	⑱ 高天神城	⑲ 蒲原城	⑳ 中島遺跡	㉑ 原川遺跡	㉒ 糸操遺跡	㉓ 宮ノ前遺跡	㉔ 蔵ノ腰遺跡
山茶碗類	2(1%)	0	0	7419(89%)	(32)	927(49%)	2049(77%)	49(39%)
山茶碗	2(2)			6894(409)		836(46)	1896(72)	43(10)
小　皿	0			467(161)		30(13)	125(35)	4(3)
小　碗	0			58(34)		7(4)	22(7)	2(2)
片口鉢	0			0	32(6)	54(5)	54(2) 瓶 2	0
土師質土器類	104(61%)	171(55%)	1791(85.5%)	547(6%)	(3273)	838(44.5%)	496(19%)	32(26%)
かわらけ	101(11)	66(8)	1786(73)	110(39)		504(42)	479(31)	30(6)
鍋　類	0	105(2)	0	432(18)	3273(91)	333(16)	17(4)	1(1)
その他	3(2)	0	5(1) 火鉢	5(5) 土錘 3	0	1(1)	0	1(1) 土錘
常滑産	11(6%)	47(15%)	48(2%)	172(2%)	1103	37(2%)	63(2%)	24(19%)
壷	6(5)	27(3)	0	3(1)	54(10)	1(1)	11	0
甕	5(4)	20(2)	48	111(7)	947(17)	29(3)	33	23(5)
片口鉢	0	0	0	56(8)	102(8)	7(3)	19	1(1)
その他	0	0	0	2(1)片口碗	0	0	0	0
渥美・湖西産	0	0	2(0.5%)	138(1.7%)	63	28(1.5%)	11(0.4%)	1(1%)
壷			0	23(7)	5(1)	2	6	0
甕			2	88(8)	58(3)	26	5	1(1)
鉢			0	26(9)	0	0	0	0
その他			0	1(1)	0	0	0	0
瀬戸・美濃産	26(15%)	67(22%)	107(5%)	0	1766	19(1%)	11(0.5%)	15(12%)
天目茶碗	7	9(8)	15(5)		136(80)	6(5)	3	2(2)
碗　類	3	1	5(5)		49(2)	1	0	0
皿　類	7	18(17)	25(24)		380(322)	5(5)	1	4(3)
卸皿類	0	0	0		7	0	3	0
盤　類	0	0	2(2)		32	0	0	0
擂　鉢	1	15(15)	33(28)		1057(268)	2(2)	2	9(8)
壷・瓶類	0	20(15)	17(5)		86(3)	4(3)	2	0
仏具類	8	2(1)	0		14(2)	0	0	0
その他	0	2(2)	10(3)		5(2)	1(1)	0	0
舶載陶磁器	25(15%)	21(7%)	147(7%)	88(1.1%)	119	4(0.5%)	23(1%)	1(1%)
青　磁	22(88%)	4(19%)	4(3%)	37(42%)	92(77%)	2(50%)	16(70%)	1(100%)
碗　類	7	0	4	34	75	0	13	1
皿　類	15	1	0	3	8	1 稜花皿	0	0
盤　類	0	0	0	0	4	0	2	0
壷　類	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	3 香炉	0	0	5	1	1	0
白　磁	3(12%)	10(48%)	46(31%)	48(55%)	13(11%)	2(50%)	6(26%)	0
碗　類	0	0	0	37	8	2	2	
皿　類	3	10(2)	38	11	3	0	3	
盃　類	0	0	4	0	0	0	0	
壷　類	0	0	0	0	1	0	1	
その他	0	0	4	0	1	0	0	
青白磁	0	0	0	3(3%)	2(2%)	0	1(4%)	0
碗　類				2	0		0	
皿　類				0	0		0	
壷　類				0	0		0	
その他				1 合子	2 合子		1 合子	
染　付	0	4(19%)	94(64%)	0	12(10%)	0	0	0
碗　類		1	19		0			
皿　類		1	72		12			
その他		2 小杯	3		0			
その他	0	3(14%)	3(2%)	0	0	0	0	0
褐　釉		2 茶入・天目	0					
越州系		0	0					
高麗系		0	0					
泉州系		0	0 華南三彩					
黒　釉		1 華南香炉	3　小皿					
志戸呂窯	3(2%)	0	0	0	434	24(1%)	1(0.1%)	1(1%)
天目茶碗	0				40(38)	2(2)	0	1(1)
碗　類	2				21(13)	0	0	0
皿　類	0				21(19)	2(2)	1(1)	0
盤　類	0				8(4)	0	0	0
擂　鉢	1				269(164)	13(12)	0	0
鉢　類	0				1	0	0	0
壷・瓶類	0				63(38)	6(5)	0	0
仏具類	0				5	0	0	0
その他	0				6(5)	1(1)	0	0
初山窯	0	1(1%)	0	0	105	8(0.5%)	0	1(1%)
天目茶碗		0			28(21)	0		1(1)
碗　類		0			3(3)	0		0
皿　類		0			45(41)	4(3)		0
盤　類		0			0	0		0
擂　鉢		1(1)			20(17)	1(1)		0
壷・瓶類		0			9(9)	2(2)		0
その他		0			0	1(1)		0
その他				7(0.2%)	11			
				7(3) 瓦器	信楽　4(1) 初山か志戸呂 7(5) 内禿皿			
合　計	171	307	2,095	8,371	(6,906)	1,885	2,654	124
調査面積	126 ㎡	1,200 ㎡	3,277 ㎡	950 ㎡	8,900 ㎡	1,500 ㎡	900 ㎡	54 ㎡

青磁 碗・皿

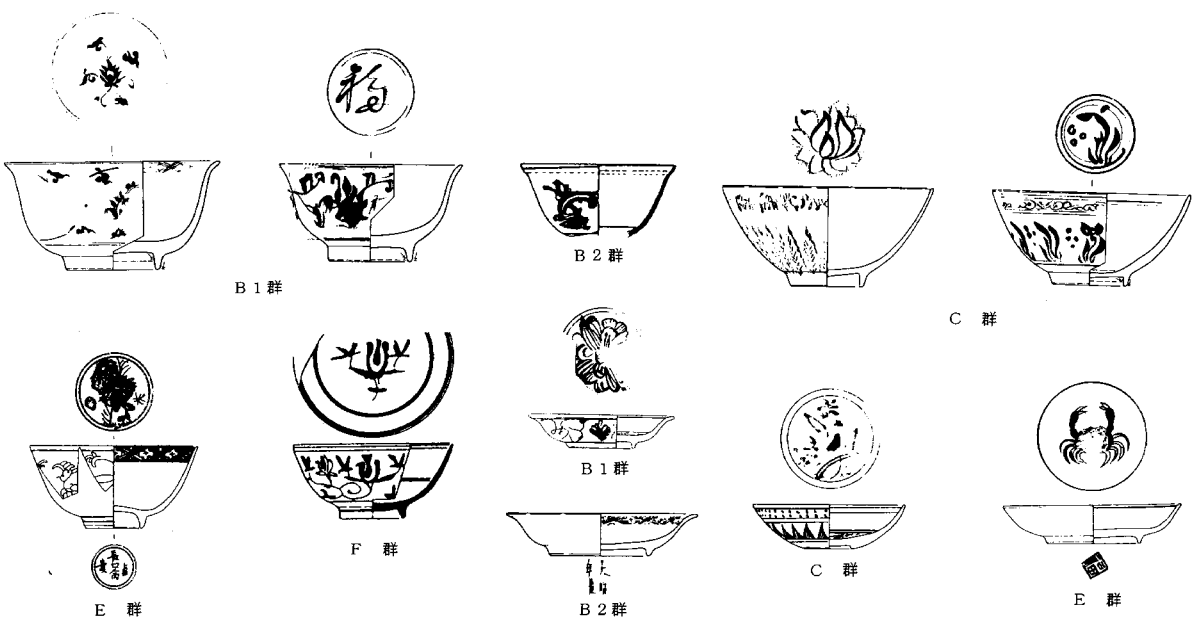


第61図　船載陶磁器器種分類図（1）縮尺1/5

白磁 碗・皿



染付 碗・皿



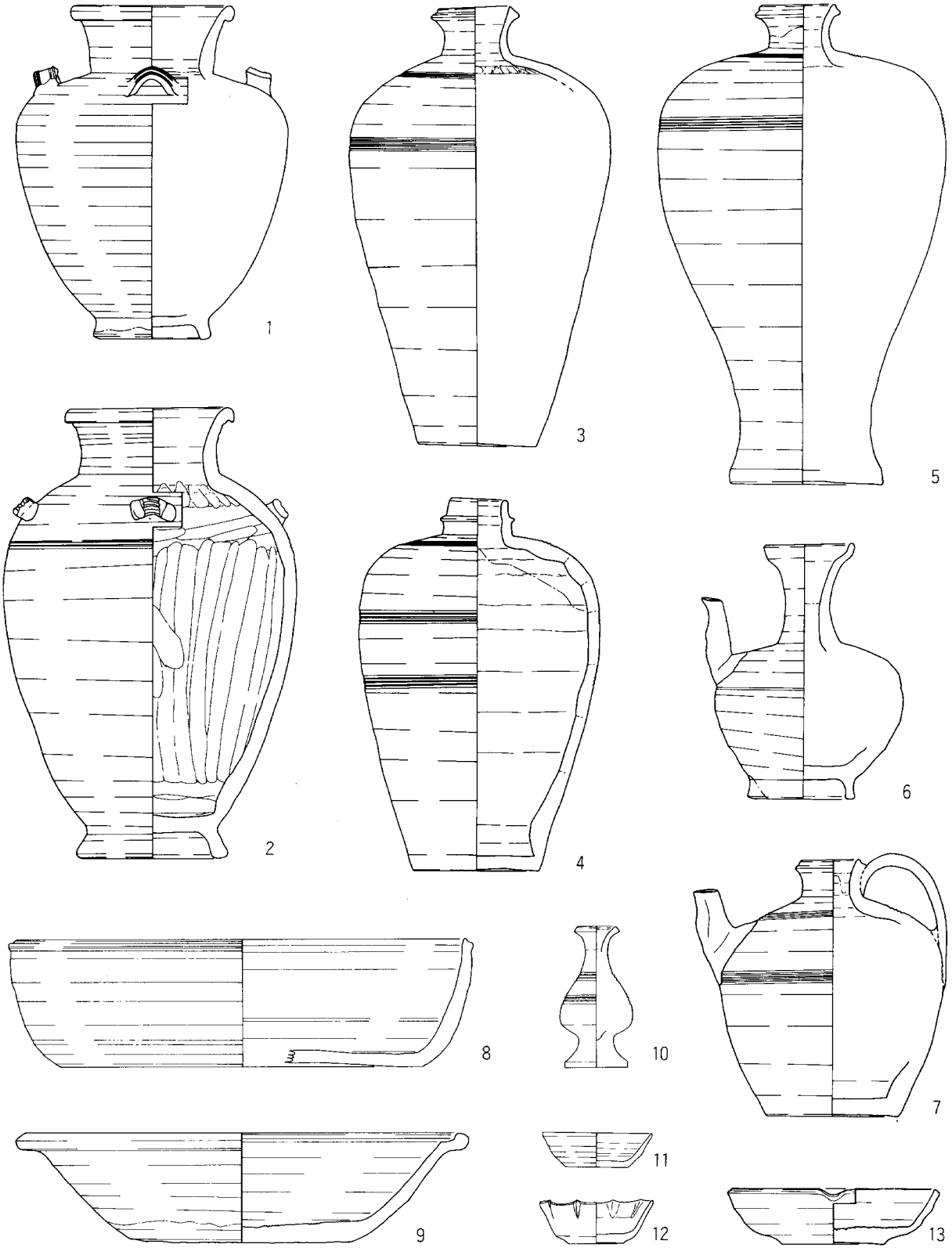
第62図　舶載陶磁器器種分類図（2）縮尺1/5

14 大見寺	15見付端城	16 野　際	17 横地城	18高天神城	19 蒲原城	20 中　島	21 原　川	22 糸　繰	23 宮ノ前	24 蔵ノ腰	25五郎兵衛	26小田屋敷	27 瀬名川	28 元富士	29 祢宜弥	30 城ノ前	31 石　成	32 久野城
	6	4				12	1											
												1	1	3		3	1	
	1					1	6		1							2	2	
	18					16							4		2	5 I－1か	7	
						2							1				1	
	11	3												19				
9																		
															5			
1	4	2					3						4	10	9		13	
1	32	16				3	41		12	1		1	28	49		3	23	3
																		1
4	7	1	1				2							2				
1	22	1	2				3					1				1		4
																		1 Eか
	32		1		4		6							6		2		1
																		1 Dか
	16						8							9		3		1
	10		1											3			1	
1	25						5										1	1
	22		2										1				1	
1		2					2						2	2		1		
		3				3							3					
	2													1				
														2				
			13															
1	1																	
	5																	1
6	7		2				6	1						3				
				1														8
	1 角形皿																3 腰折皿	1 (内弯)
	1								2					13				
8	12						3							19				
	8						1											
	1													1				
														1 大蓉		1 瓶		
	1								1					5				
	3			2										2				
				1										1 鍋鉢				
	3(A)																	
6	30						5	1						45				3
	2																	
	1	3				4					1							
2	10	10				10	5							2		3	21	
1	21	10				20	2		2							3	10	
	4																	
	2	2				3												
														9	2		1	
	2						1											
								2										
	1																	
	1					1												
1	5					10	2											
	2																	
	2																3	
2	5						1		3			2	2	1			6	
														6 X類				
	47	1												2				4
	2		3		1													40
				9	32													3
				1														6
					5													2
																	1	2
					3 E群									2 丸坪				2
	3				1									1		1		
	3？	4					1		1					35	2		1 壺か	
	1																	
	7				4		1										5	
						2											1	
																	1	
																	1 東花文	
														15				
		2				1	2		1			1		4			1	
	8																	2
				1	16													12
					1													
					2													7
	2																	3
	12	1		1	29		6				1							27
					21													5
					2		1											6
					2		5											16
					15													
					3													
																		8
				2	3													4
																		1
10	6			1										3			3	
				1														1
	1 盤													79	3 黄釉盤		3 洗	
																		1
					3 小皿													
				1 三彩香炉														
55	431	65	25	21	147	88	119	4	23	1	2	6	46	355	23	28	111	177

各遺跡船載陶磁器一覧表

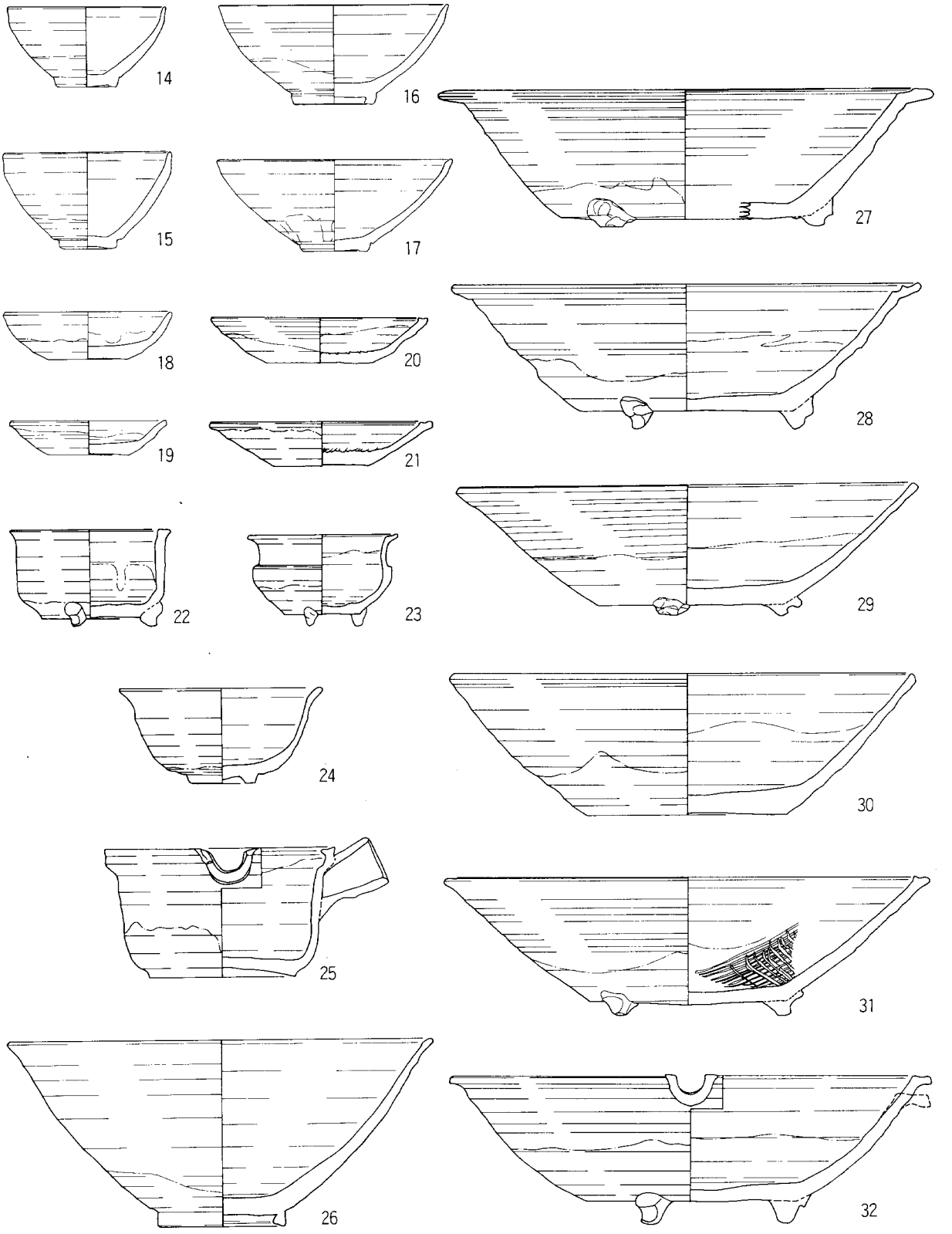
第４表　船載陶磁器分類表

	分類			年代	1 殿ケ谷	2 伊平	3 土橋	4 林光寺	5 宇藤	6 潮海寺	7 善福寺	8 勝間田城	9 掛川城	10 殿谷城	11 笹岡城	12 高根城	13 元島
青磁	◎碗類	同安窯系	A類	12C後半～13C前半													
			B類(森田[－1])	12C後半～13C前半	1	9			1								
		龍泉窯系	A類	I－1(無文) 13C		18							1				1
				I－2 12C後半～13C前葉		5							1				
				I－3 12C後半～13C前葉													
				I－4 12C後半～13C前葉		5				1							2
				I－2～4 12C後半～13C前葉	2	6	2		1	3							1
				I－6		1											
				新安 14C前半													
				不明													
			B類(蓮弁文碗)	B－0(III) 14C前半	13	45				2		1					2
				B－1(I－5) 13C後半～14C前半	37	93	1	1	5	10		1	3				13
				B－2 ヘラ彫 14C末～15C		3				3			4				3
				B－3(B') 15C前半						1			3			2	
				B－4(C) 15C前半	3	1			7	2		13	10		3	16	21
				輪花碗	2												
				不明	2						1						1
			C類(雷文帯碗)	C－1 14C													
				C－2(B) 15C前半						2		13	1				6
				C－3 15C末～16C													
				不明													
			D類(端反碗)	D－1(古) 14C前		1						1					12
				D－2(新) 15C前半					4	1			9			1	9
				D－3(新々) 16C								1			2		
			E類(直口碗)	15C後半～16C前半					4	4		5	1			4	13
		菊花碗		16C中葉						1							
		青磁碗不明			6	12	1			7	10					5	
	◎皿類	同安窯系	櫛描文(I類)	12C後半～13C前	1	9	1	1	1								2
		龍泉窯系	劃花文(I類)	12C後半～13C前	1	1											
			蓮弁文折縁III類	14C		3				2							1
			無文折縁III類	13C～14C		9				1							
			無文皿														
			腰折丸皿	13C～14C	2												2
			端反皿	15C													
			稜花皿	15C中葉～15C後半	1	1			2			15	2		2		6
			菊皿							3				7			
			皿類		2								1 大皿				
			不明								2						
	◎盤類	III類															
		古		14C	2		2			1			2	1			1
		新		15C									1				
	◎壺・瓶類	酒会壺			2												
		壺・瓶															
	◎その他	花生															
		香炉							1				1			2	
		鉢														1	1 形象物
	☆越州系(A) ☆高麗系(B)					1(B)											
	◎不明										2		8				
白磁	◎碗類	I類(玉縁)		12C													
		II類(玉縁)		12C	1		3										
		IV類(玉縁)		12C		4	3						1				1
		V類(端反)		12C		1			1	1							4
		VI類(端反)		12C～13C初頭													
		VII類(端反)		12C～13C初頭		2											
		VIII類(端反)		12C～13C初頭			2										
		V類～VIII類		12C～13C初頭		10		5									
		IX類		?													
		C群(端反)		15C後半～16C前半													3
		不明			2	4	1		1	1	1	1	2				
	◎皿類	III類		12C				1									1
		IV類		12C		6											
		V類		12C		1							2				
		VI類		12C									1				
		IV類～VI類															
		VII類		12C中葉～後葉					1								
		IX類(口丸)		13C後半～14C前半	17	36	2					2	1				4
		印花(型押風)		13C	4	1	1										
		B群(挟高台)		15C前半		8						11	1	5	1		30
		C群(端反)	C－1	15C後半～16C前半								3	35	46	1		5
			C－2	16C前半													
		D群(菊皿)		16C						1				5	1		
		E群(内弯)		16C						1				1			
		大皿		14C後半～15C初													3
		不明			3	8	1		1	2	2	1	1				
	◎盃			15C前半						1				3		7	
	◎面取盃	(B群)		15C前半								2					6
	◎四耳壺	(壺か水注)			18	1	1										1 小壺
	◎水注					1											
	◎不明						2	1				26	1		1		
青白磁	◎碗類					3											
	◎皿類	印花(型押し)			4	2			1								2
		皿															1
		盃か皿															1
		不明															
	◎その他	梅瓶			22												
		壺類			5	19											
		水注			2												1
		水滴				1											
		合子				3		1							2		
	◎不明				1												1 鉛釉
染付	◎碗類	B群(端反)		15C中頃								7	7	1		1	9
		C群(蓮子)		15C後半～16初頭					2				16	16			3
		D群		15C後半					1				2				
		E群		16C中葉～後葉		1							2				
		不明												1			
	◎皿類	B1群(端反)		15C後半		1						6	23	23			1
		C群(ゴク底)		15C後半～16C前					2				13	11			
		B2群(端反)		16C中葉									2	3	3		
		E群		16C中葉～後葉									11		1		
		折縁皿												7			
		赤絵皿										2					
		稜花皿															
		菊皿											5				
		不明											1				
	◎坏類	坏		16C									1	2			
	◎盃																
	◎鉢												1				
	◎その他												1				
	◎不明													7			
その他	☆褐釉	天目茶碗			1	3	1					8					7
		茶入				1											
		壺				2											
		不明															
	☆泉州窯系				6												
	☆漳州窯系	碗											1				
		皿C											3				
		菊皿											1				
	☆華南	皿															
		香炉												52 南バン			
合計					163	342	24	10	36	51	18	119	183	191	17	39	181



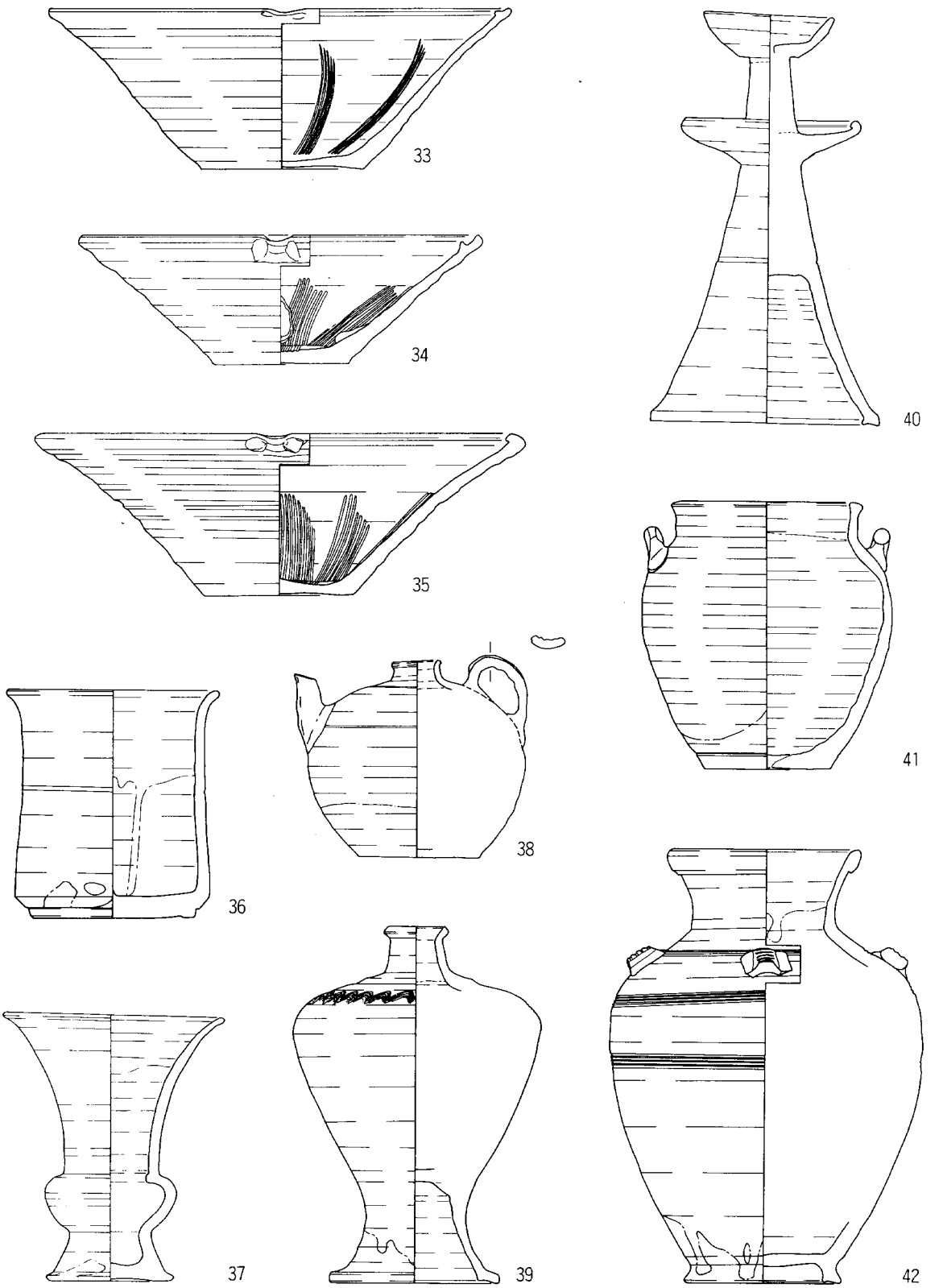
第63図　瀬戸・美濃産器種分類図（1）縮尺1/5　－古瀬戸前期・中期－

1. 灰釉四耳壺（前Ⅰ期），2. 灰釉四耳壺（中Ⅰ期），3. 灰釉梅瓶（前Ⅳ期），
4. 灰釉梅瓶（中Ⅱ期），5. 灰釉瓶子（前Ⅲ期），6. 灰釉水注（前Ⅱ期），
7. 灰釉水注（中Ⅰ期），8. 灰釉洗（前Ⅱ期），9. 灰釉折縁深皿（中Ⅲ期），
10. 灰釉仏花瓶（前Ⅳ期），11・12. 入子（前Ⅲ期），13. 灰釉卸皿（中Ⅰ期），



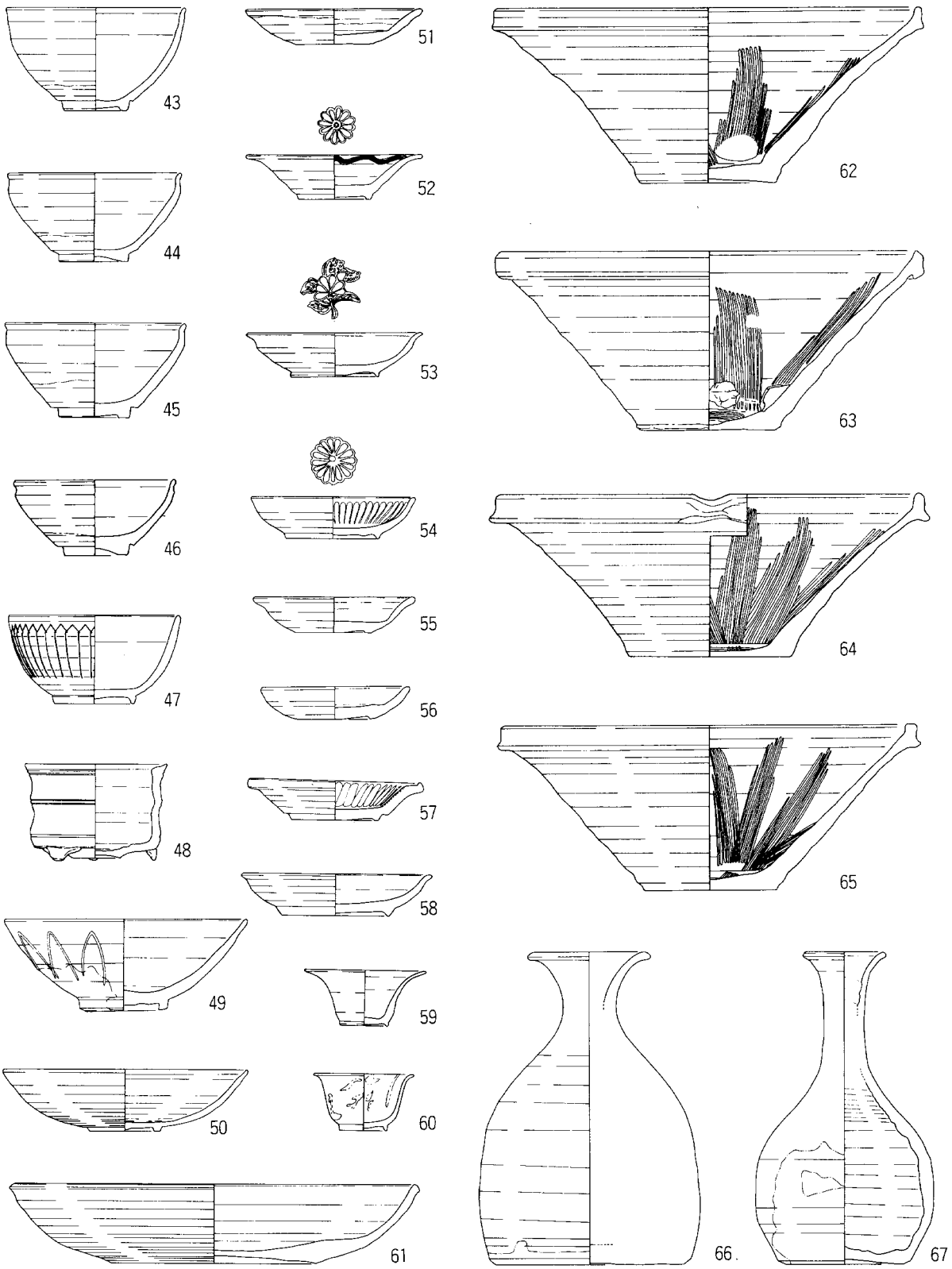
第64図　瀬戸・美濃産器種分類図（2）縮尺1/5　ー古瀬戸後期ー

14. 天目茶碗（後Ⅱ期），15. 天目茶碗（後Ⅲ期），16. 灰釉平碗（後Ⅰ期），17. 灰釉平碗（後Ⅲ期），
18. 灰釉縁釉小皿（後Ⅰ期），19. 鉄釉縁釉小皿（後Ⅲ期），20. 灰釉卸皿（後Ⅰ期），
21. 灰釉卸皿（後Ⅳ期古），22. 鉄釉筒形香炉（後Ⅳ期古），23. 鉄釉袴腰形香炉（後Ⅳ期古），
24. 灰釉端反碗（後Ⅳ期古），25. 灰釉柄付片口（後Ⅲ期），26. 灰釉碗形鉢（後Ⅲ期），
27. 灰釉折縁深皿（後Ⅰ期），28. 灰釉折縁深皿（後Ⅲ期），29. 灰釉直縁大皿（後Ⅱ期），
30. 灰釉直縁大皿（後Ⅲ期），31. 灰釉卸目付大皿（後Ⅱ期），32. 灰釉卸目付大皿（後Ⅳ期古），



第65図　瀬戸・美濃産器種分類図（3）縮尺1/5　—古瀬戸後期—

33. 擂鉢（後Ⅳ期古），34・35. 擂鉢（後Ⅳ期新），36. 灰釉筒形容器（後Ⅲ期），
37. 灰釉尊式花瓶（後Ⅱ期），38. 灰釉水注（後Ⅰ－Ⅱ期），39. 鉄釉根来形瓶子（後Ⅳ期古），
40. 灰釉燭台（後Ⅱ期），41. 鉄釉口広有耳壺（後Ⅳ期），42. 灰釉四耳壺（後Ⅰ－Ⅱ期），



第66図　瀬戸・美濃産器種分類図（4）縮尺1/5　－大窯製品－

43. 天目茶碗（大窯1），44. 天目茶碗（大窯2），45. 天目茶碗（大窯3），46. 天目茶碗（大窯4），
47. 灰釉丸碗（大窯1），48. 灰釉筒形香炉（大窯1），49. 灰釉平碗（大窯1），50. 鉄釉平碗（大窯1），
51. 灰釉はさみ皿（大窯1），52. 灰釉稜花皿（大窯1），53. 灰釉端反皿（大窯1），54. 灰釉丸皿（大窯2），
55. 鉄釉稜皿（大窯2），56. 灰釉内禿皿（大窯3），57. 灰釉折縁皿（大窯4），58. 志野丸皿（大窯4），
59. 灰釉小杯（大窯1），60. 鉄釉小杯（大窯2），61. 焼締大皿（大窯3），62. 擂鉢（大窯1），
63. 擂鉢（大窯2），64. 擂鉢（大窯3），65. 擂鉢（大窯4），66・67. 鉄釉徳利（大窯3）

第5表　瀬戸・美濃器種一覧表

①　殿ケ谷遺跡(第1次～第7次調査)

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									3	1			5	9		4	1			5	14
碗類	灰釉平碗								2	1	1				5							5
	灰釉丸碗																3				3	3
皿類	灰釉縁釉小皿												5		5							5
	灰釉丸皿																	1			1	1
	灰釉端反皿																5				5	5
	灰釉丸皿か端反皿																	1			1	1
	灰釉腰折皿													12	12							12
	灰釉稜皿																	1			1	1
	灰釉折縁中皿												3		3							3
	鉄釉折縁皿																		1		1	1
盤類	灰釉折縁深皿						2	1		1					8							8
	灰釉卸目付大皿											1	1		2							2
	灰釉盤類							1		4					5							5
卸皿	灰釉卸皿		1		2										3							3
擂鉢	擂鉢													33	33	10	13	3	1		17	60
壷・瓶類	灰釉梅瓶							1							1							1
	灰釉梅瓶か水注			1											1							1
	灰釉瓶類			1							1				2							2
	灰釉壷か瓶											2			2							2
鉢類	灰釉碗形鉢									1					1						1	
	灰釉柄付片口									1					1						1	
神仏具	灰釉花瓶							1							1							1
その他	入子				15										15							15 (輪花3)
	鉄釉小杯											1			1							1
不明	灰釉その他									3		3			6							6
合計		1		2		1		3		4	1	1	9	50	116	10	25	6	1		34	160
			2	15		2	4	2	4	8	5	2					1	1				

④　林光寺遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	灰釉平碗										1				1							1
皿類	灰釉縁釉小皿													2	2							2
	灰釉丸皿か端反皿																	1			1	1
盤類	灰釉盤類											1			1							1
卸皿	灰釉卸皿											1			1							1
擂鉢	擂鉢																1		1		2	2
壷・瓶類	灰釉梅瓶											1			1							1
神仏具	灰釉仏花瓶											1			1							1
合計										1	4			2	7		1	1			3	10

瀬戸・美濃器種一覧表

② 伊平遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗								3	36	15	34	11	11	241		6	4		1	11	252
										17	111	3										
碗類	灰釉平碗									13	15	15	5	12	87							87
									1	13	13											
	灰釉丸碗																1				1	1
	灰釉平底末広碗							1							2							2
									1													
皿類	灰釉縁釉小皿									5	12	2	4	14	51							51
										5	5			4								
	鉄釉縁釉小皿												1		1							1
	灰釉小皿														4							4
								4														
	鉄釉小皿																		3		3	3
	灰釉腰折皿													7	7							7
	灰釉豆皿														2							2
									2													
	灰釉擂座中皿									3					3							3
	灰釉八稜皿										4				4							4
	灰釉折縁小皿									5					5							5
	鉄釉折縁小皿											1			1							1
	灰釉底卸目皿					1		2							3							3
	灰釉丸皿																		3		3	3
	灰釉端反皿																12				12	12
	灰釉丸皿か端反皿																1				1	1
盤類	灰釉折縁深皿				2	2	11	2	10	56	15				99							99
									1													
	灰釉直縁大皿									7	4	1			29							29
										17												
	灰釉卸目付大皿										2				2							2
	灰釉盤類									21	4	1			26							26
	灰釉洗		2												2							2
卸皿	灰釉卸皿		2			2	1		2		1		3	4	40							40
				1			2	2	5	7	5	3										
擂鉢	擂鉢													30	30	56	19				19	105
壷・瓶類	灰釉四耳壷	4													12							12
									1		7											
	灰釉梅瓶							1	1						2							2
	灰釉瓶類										2				2							2
神仏具	灰釉仏花瓶														3							3
				1				2														
	灰釉筒形香炉									3					3							3
	灰釉袴腰形香炉										2				2							2
	灰釉仏供														1							1
								1														
鉢類	鉄釉小鉢											1			1							1
	灰釉柄付片口									2					2							2
その他	鉄釉徳利																		1		1	1
	入子														4							4
						4																(輪花4)
	鉄釉小杯												1		1							1
不明	灰釉その他										54				54							54
合計		4	4		2	4	12	3	15	117	66	54	24	78			38	4	3	1		
				2		4	3	8	16	7	91	203	5	4	726	56	1	4			51	833

③ 土橋遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	灰釉平碗										1				1							1
壷・瓶類	灰釉梅瓶			2											2							2
	鉄釉壷か瓶											1			1							1
合計				2							1	1			4							4

⑤　宇藤遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											14		5	19			4		3	10	29
碗類	灰釉平碗							1					6	3	11							11
皿類	灰釉小皿							1							1							1
	灰釉縁釉小皿												1		8							8
												7										
	灰釉腰折皿													6	6							6
	灰釉端反皿																2				2	2
	灰釉丸皿か端反皿																	11			11	11
	灰釉丸皿																	1			1	1
	稜皿																	5	1		6	6
	志野鉄絵皿																			2	2	2
	志野丸皿																			1	1	1
盤類	灰釉直縁大皿												1		8							8
												7										
	灰釉盤類											4			4							4
卸皿	灰釉卸皿											1	1		3							3
														1								
擂鉢	擂鉢													5	8		3	6	1		28	36
														3				18				
壷・瓶類	灰釉壷か瓶類			1				1				6			8							8
その他	灰釉水滴												1		1							1
	茶入																	2			2	2
不明	不明											16			16							16
合計				1				1	2			1	3	17			5	16	2	6		
												40	21	7	93		13	21			63	156

⑥　潮海寺門前町遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗										1		3	4			1					
											4		2		14	1		1		1	3	18
碗類	灰釉平碗										1	5	7	1	18							18
										1		3										
	灰釉丸碗																1				1	1
皿類	灰釉折縁小皿											1			2							2
										1												
	灰釉縁釉小皿										2		2	1	5							5
	灰釉折縁中皿											1			1							1
	灰釉腰折皿													2	2							2
	灰釉縁釉はさみ皿																1				1	1
	灰釉丸皿か端反皿																	2			2	2
	灰釉丸皿																		1		1	1
盤類	灰釉折縁深皿									1					1							1
	灰釉直縁大皿												2		2							2
	灰釉盤類											4			7							7
													3									
卸皿	灰釉卸皿						1					1	1		3							3
擂鉢	擂鉢													17	17	6	1	1	2		6	29
																		1	1			
壷・瓶類	灰釉四耳壷		1												1							1
	鉄釉梅瓶						1								1							1
	灰釉根来形瓶子											1			1							1
	灰釉壷か瓶							2					1		3							3
神仏具	鉄釉袴腰形香炉						1						1		2							2
	灰釉筒形香炉												1		1							1
	灰釉花瓶												1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉小瓶																1				1	1
	鉄釉小壷か小瓶												1		1							1
その他	鉄釉小杯												1		1							1
不明	灰釉不明												1		1							1
合計			1							1	4	12	14	25			5	1	3			
							3	2			2	5	16		85	7		3	1	2	15	107

⑦ 善福寺遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗										4	1	2	1	20		2				2	22
										2	10											
碗類	灰釉平碗									2	1	1	2	2	21							21
										6		7										
	灰釉浅碗									1					1							1
皿類	灰釉折縁小皿									3					3							3
	灰釉縁釉小皿										1			1	2							2
	鉄釉縁釉小皿												1		2							2
												1										
	灰釉腰折皿													5	5							5
	灰釉丸皿																	1			1	1
盤類	灰釉折縁深皿						1								1							1
	灰釉卸目付大皿												6		6							6
卸皿	灰釉卸皿									1					2							2
											1											
擂鉢	擂鉢													7	8							8
														1								
壷・瓶類	灰釉梅瓶												3		3							3
	灰釉四耳壷													1	1							1
	鉄釉口広有耳壷												1		1							1
	灰釉壷か瓶						2		1		1				4							4
	鉄釉壷か瓶												2	1	3							3
神仏具	灰釉花瓶										3				3							3
	灰釉筒形容器										3				3							3
鉢類	灰釉牌付片口										1				1							1
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か水注											1			1							1
不明	灰釉不明						1				2				3							3
	鉄釉不明											1			1							1
合計							1			3	6	2	11	15	95		2	1			3	98
							2	1	1		22	12	15	4								

⑧ 勝間田城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													46								
												1			47							47
碗類	灰釉平碗													14								
													4		18							18
皿類	灰釉縁釉小皿												8	53								
															61							61
盤類	鉄釉卸目付大皿													1								
													8		9							9
	灰釉盤類											1										
															1							1
卸皿	灰釉卸皿													4								
															4							4
擂鉢	擂鉢																					
														159	159							159
	擂鉢Ⅰ類													18								
															18							18
	擂鉢Ⅱ類													134								
															134							134
壷・瓶類	鉄釉祖母懐茶壷																					
												13			13							13
	灰釉瓶子																					
												1			1							1
	鉄釉瓶子																					
													3		3							3
小壷・小瓶類	鉄釉鳥形水滴																					
												2			2							2
その他	鉄釉小杯																					
													1		1							1
合計														8								
														270								
												17	5	171	471							471

⑨　掛川城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗												1		1		3		4		7	8
	黄瀬戸天目茶碗																		1		1	1
碗類	灰釉折縁皿																		1		1	1
	灰釉端反皿																3				3	3
	灰釉丸皿																	3			3	3
	灰釉丸皿か端反皿																	4			4	4
	焼き締め小皿																		1		1	1
	鉄釉稜皿																		2		2	2
	灰釉縁釉はさみ皿																19				19	19
盤類	灰釉卸目付大皿													1	1							1
卸皿	灰釉卸皿												1		1							1
擂鉢	擂鉢													1	1			5	2		12	13
壷・瓶類	灰釉梅瓶							2							2							2
	鉄釉水注											1			1							1
	灰釉四耳壷					1		3							4							4
	鉄釉口広有耳壷											1			1							1
神仏具	灰釉筒形香炉																	1			1	1
その他	鉄釉徳利																		4		4	4
合計						1		2 3				2	2	2	12		25 5	8	11 9		58	70

⑩　殿谷城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													7	7	20	21	8	1		30	57
碗類	鉄釉平碗																1				1	1
皿類	灰釉端反皿																59				59	59
	鉄釉端反皿																3				3	3
	灰釉丸皿か端反皿																55				55	55
	鉄釉丸皿																	13			13	13
	鉄釉丸皿か稜皿																	6			6	6
	鉄釉稜皿																	12			12	12
盤類	鉄釉大皿																		3		3	3
擂鉢	擂鉢																7	2	2		21	21
	擂鉢II類																	1			1	1
壷・瓶類	灰釉梅瓶											21			21							21
	錆釉祖母懐茶壷										23				23							23
	鉄釉茶壷																		38		38	38
神仏具	灰釉筒形香炉																	3			3	3
	鉄釉筒形香炉													2	2							2
その他	鉄釉徳利																	2	5		7	7
	鉄釉茶釜																		3		3	3
不明	鉄釉不明															8						8
合計											23	21		9	53	28	146 5	42	9 53		255	336

瀬戸・美濃器種一覧表

⑪ 笹岡城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													3	3				2		2	5
碗類	灰釉平碗													1	1							1
皿類	灰釉縁釉小皿													3	3							3
	鉄釉縁釉小皿												1		1							1
	灰釉折縁皿																		1		1	1
	鉄釉稜皿																		1		1	1
盤類	灰釉直縁大皿												1		1							1
卸皿	灰釉卸皿											1			1							1
擂鉢	擂鉢												1	13	16							16
壷・瓶類	灰釉梅瓶									3					3							3
	灰釉四耳壷		1												1							1
	灰釉壷か瓶類			1											1							1
神仏具	灰釉仏花瓶									1					1							1
合計			1										1	20					4			
			1							4	1	2	2		32						4	36

⑯ 野際遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									1					1							1
	小天目									2					2							2
碗類	灰釉平碗										1		1	2	4							4
皿類	灰釉縁釉小皿											1	2		3							3
	灰釉腰折皿													1	1							1
	鉄釉稜皿																	2			2	2
盤類	灰釉卸目付大皿													1	1							1
	灰釉盤類												2		2							2
擂鉢	擂鉢												4	3	8		1		2		3	11
壷・瓶類	灰釉四耳壷	1													1							1
	灰釉四・三耳壷									1					1							1
	灰釉瓶子			1											1							1
	灰釉水注		1												1							1
	灰釉瓶類									2					2							2
	鉄釉茶壷										8				8							8
神仏具	鉄釉仏花瓶						1								1							1
鉢類	灰釉碗形鉢									3					3							3
その他	志野小坏																			1	1	1
合計		1	1								1	1	6	5			1	2		1		
			1				1			9	8	3	3		40			2			6	46

⑰ 横地城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													1								
													6		7							7
碗類	灰釉平碗													3	3							3
皿類	灰釉縁釉小皿												7		7							7
擂鉢	擂鉢													1	1							1
神仏具	灰釉仏花瓶													3	3							3
	鉄釉													5								
	袴腰形香炉														5							5
合計													7	9								
														10	26							26

⑫ 高根城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											2		13	16		2				2	18
													1									
	灰釉天目茶碗													2	2							2
碗類	灰釉平碗													1	1							1
皿類	灰釉縁釉小皿												1		1							1
	鉄釉縁釉小皿												2		2							2
	灰釉端反皿																1				1	1
盤類	灰釉折縁深皿											1			1							1
	灰釉直縁大皿											7	3	1	11							11
	灰釉卸目付大皿													3	3							3
	灰釉盤類											2		1	10							10
													7									
卸皿	灰釉卸皿												1	2	3							3
擂鉢	擂鉢													4	6	6	13				13	25
														2								
壷・瓶類	灰釉四耳壷						1					6	15		22							22
	鉄釉四耳壷					15									15							15
	灰釉瓶子											3			3							3
	灰釉水注										1				1							1
	灰釉壷											2			2							2
	灰釉壷か瓶									4		3		1	8							8
	鉄釉茶壷										50				50							50
	鉄釉甕											1	1		2							2
	鉄釉桶													16	16							16
鉢類	灰釉小鉢											2			3							3
												1										
合計						15		1		4	51	14	7	27	178	6	16				16	200
												24		35								

⑬ 元島遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									5	8	24	14	35	119	20	33	7	5		52	191
												13	11	9				7				
	灰釉天目茶碗									2				1	3							3
碗類	灰釉平碗										8	18	4	26	114							114
							1			18	12			27								
	灰釉浅碗										2	1			6							6
											3											
	灰釉端反碗												3		3							3
	灰釉丸碗																5				5	5
皿類	灰釉底卸目皿			3											3							3
	灰釉豆皿						4								4							4
	灰釉折縁中皿					2		2							4							4
	灰釉折縁小皿									3		1			25							25
									2		19											
	灰釉縁釉小皿									3	7	14	82	26	247							247
										8		59		48								
	鉄釉縁釉小皿											23	44	3	134							134
												23		41								
	灰釉腰折皿													72	72							72
	鉄釉腰折皿												2		2							2
	灰釉縁釉はさみ皿																57				57	57
	灰釉端反皿																34				34	34
	灰釉端反皿か丸皿																	28			28	28
	灰釉丸皿																	16	1		17	17
	鉄釉丸皿																	22	2		24	24
	鉄釉稜皿																	45			45	45
	鉄釉稜皿か丸皿																	13			13	13
盤類	灰釉折縁深皿						2	1	4	17	9	5			68							68
						6	23				1											
	灰釉卸目付大皿											2	2	7	11							11
	灰釉直縁大皿									9	10	18			37							37
	灰釉盤類										34	62	5		101							101
卸皿	灰釉卸皿						1	4	1	3	5	6	2		49							49
							5	3				16		3								
擂鉢	擂鉢												6	143	155		96	38	40		174	329
													4	3								

⑬ 元島遺跡

| | | |

⑭　大見寺遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗							1		1		4	2	5	15							15
	灰釉天目茶碗										1	1			2							2
	小天目													5	5							5
碗類	灰釉平碗									4					4							4
	灰釉端反碗										2		1	12	19							19
													1		1							1
皿類	灰釉底卸目皿					2									2							2
	灰釉縁釉小皿									2			2	3	7							7
	灰釉腰折皿													1	1							1
盤類	灰釉折縁深皿							3		2		1			6							6
	灰釉卸目付大皿											1	1		2							2
	灰釉盤類									6		2		1	9							9
卸皿	灰釉卸皿					1						1	3	1	6							6
擂鉢	擂鉢													12	19							19
壷・瓶類	灰釉梅瓶					1								7	1							1
	灰釉壷か瓶		1									1			2							2
	鉄釉口広有耳壷											4			4							4
	鉄釉茶壷										12				12							12
神仏具	鉄釉花瓶											1			1							1
	灰釉仏供					1									1							1
	灰釉筒形香炉												1		1							1
小壷・小瓶類	灰釉耳付合子											1			1							1
	鉄釉耳付合子													3	3							3
	鉄釉小壷か小瓶												1		1							1
合計			1			3	2	4		5	13	13	5	10	123							123
													13	15								

⑮　見付端城遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									19	16	23	22	43	163		7	2			10	173
	灰釉天目茶碗									2	36	2			1			1				1
	小天目					1							1		4							4
碗類	灰釉平底末広碗							1	1	3					3							3
	灰釉平碗								1						144							144
	灰釉浅碗									12	26	25	39	26	1							1
	灰釉端反碗									1	7	7	1		2							2
	鉄釉端反碗										1		2		2							2
皿類	灰釉底卸目皿				1								2		2							2
	灰釉折縁小皿					1									8							8
	灰釉中皿							3		5					1							1
	灰釉折縁中皿							1							8							8
	灰釉縁釉小皿									1		4			83							83
	鉄釉縁釉小皿									4	18	13	28	13	8							8
	灰釉腰折皿										2	5			1							1
	灰釉端反皿											4	3				6				6	6
	灰釉端反皿か丸皿											1		1				2			2	2
	灰釉縁釉はさみ皿																2				2	2
	志野丸皿																		3		3	3

⑮ 見付端城遺跡

| | | |

⑱ 高天神城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗															1		2	1		8	9
碗類	灰釉碗															1						1
皿類	灰釉皿															1		1			1	2
	鉄釉皿																	5	1		7	7
	施釉皿																	1			1	1
	灰釉丸皿																	1	5		6	6
	縁釉小皿																	1			1	1
	縁釉丸皿																	1			1	1
擂鉢	擂鉢																	2	13		15	15
壷・瓶類	鉄釉祖母懐茶壷										4				4					8	8	12
	鉄釉茶壷										1				1			2			2	3
	鉄釉水注																	2			2	2
神仏具	灰釉花瓶															1						1
	灰釉仏花瓶																	1			1	1
小壷・小瓶類	鉄釉小壷																	1			1	1
	鉄釉小瓶																1				1	1
その他	鉄釉 水注か小型瓶類																	1			1	1
	鉄釉徳利																	1			1	1
	灰釉水指																	1			1	1
合計											5				5	4	4	12	20	8	58	67

⑲ 蒲原城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗										2			8	10		3	1	1		5	15
碗類	鉄釉平碗																5				5	5
皿類	灰釉縁釉小皿												1		1		1				1	2
	灰釉豆皿																1				1	1
	灰釉端反皿																8				8	8
	灰釉 端反皿か丸皿																	5			5	5
	鉄釉丸皿																	2	2		4	4
	鉄釉 丸皿か稜皿																		3		3	3
	鉄釉稜皿																	2			2	2
盤類	錆釉大皿																		2		2	2
擂鉢	擂鉢															5	1	1	10		28	33
壷・瓶類	灰釉四耳壷							1							1							1
	鉄釉壷か瓶												4		4							4
	鉄釉甕																		3		3	3
	錆釉甕															1						1
	鉄釉 根来形瓶子												4		4							4
鉢類	錆釉深鉢													7	7							7
小壷・小瓶類	鉄釉小瓶												1		1							1
	鉄釉茶入										1				1			2			2	3
その他	鉄釉徳利																		1		1	1
	焼締徳利																		2		2	2
合計								1			3		9	1	15	29	6	19	6	17	8	22	72	107

㉑ 殿ケ谷遺跡(第１次～第７次調査)

器種名		古瀬戸前期 I	古瀬戸前期 II	古瀬戸前期 III	古瀬戸前期 IV	古瀬戸中期 I	古瀬戸中期 II	古瀬戸中期 III	古瀬戸中期 IV	古瀬戸後期 I	古瀬戸後期 II	古瀬戸後期 III	古瀬戸後期 IV古	古瀬戸後期 IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	大窯製品 2	大窯製品 3	大窯製品 4	大窯計	合計
天目	天目茶碗										6	8	3	17	14	48	8	39	12	14		80	136
碗類	灰釉平碗										17		5	9	4	47			13	2			
	灰釉丸碗												12					2				2	2
皿類	灰釉折縁皿										1										11		
											2				3					11		11	14
	鉄釉折縁皿																			2			
																					2	2	2
	灰釉折縁中皿									1					1								1
	灰釉中皿										6				6								6
	灰釉縁釉小皿										5	5	15	4	33								33
	鉄釉縁釉小皿											3		1	4								4
	灰釉小皿											1			1								1
	鉄釉小皿											1			2								2
	灰釉 縁釉はさみ皿																45				45	45	45
	灰釉腰折皿													8	8								8
	灰釉稜花皿																1				1	1	1
	灰釉端反皿																60				60	60	60
	鉄釉端反皿																4				4	4	4
	灰釉 端反皿か丸皿																	75			75	75	75
	灰釉丸皿																	15		1	16	16	16
	鉄釉丸皿																	13	8		21	21	21
	灰釉稜皿																			1	1	1	1
	鉄釉稜皿																	23	33		63	63	63
	灰釉内禿皿																		7				
	黄瀬戸中皿																		20		20	20	20
																				3	3	3	3
盤類	灰釉折縁深皿									1	2				3								3
	灰釉直縁大皿										1	2	1		4								4
	灰釉 卸目付大皿											2	3	1	7								7
	灰釉盤類										9	5		4	18								18
卸皿	灰釉卸皿						1				5		1		7								7
擂鉢	擂鉢													5	5	711	74	91	91	12	268	984	984
	擂鉢Ⅰ類												3	14	17								17
	擂鉢Ⅱ類													56	56								56
壷・瓶類	灰釉四耳壷			4			1				2				7								7
	灰釉梅瓶						5	3			6	5	23 4		46								46
	灰釉瓶子										1				1								1
	鉄釉 根来形瓶子												1		1								1
	灰釉水注		1												1								1
	鉄釉 祖母懐茶壷												3		3								3
	灰釉壷か瓶			4			1					4	1		10								10
	鉄釉壷か瓶												5		5								5
	鉄釉桶																		1		1	1	1
神仏具	灰釉花瓶										3				3								3
	灰釉華式花瓶										4				4								4
	灰釉燭台										1				1								1
	鉄釉 袴腰形香炉											1			1								1
	灰釉筒形香炉												1		1			2			2	3	3
	鉄釉仏餉具													1	1								1
	灰釉 大型筒形容器													1	1								1
小壷・小瓶類	灰釉小壷											2			2								2
	鉄釉小壷																	2			2	2	2
	鉄釉　小壷か 耳付水注												1		1								1
	灰釉水滴											1			1								1
	灰釉 小壷か小瓶											5			5								5
その他	錆釉土瓶												1		1								1
	鉄釉徳利																		2		2	2	2
不明	灰釉不明											2			2								2
合計		1		4		1				2	9	28	72	107	368	719	225	154	166	30	679	1766	
		4				7		3		57		33	34	6			92		12				

㉒ 糸繰遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													1	1					5	5	6
碗類	灰釉平碗												1		1							1
皿類	灰釉端反皿か丸皿																	2			2	2
	志野丸皿																			3	3	3
擂鉢	擂鉢																		2		2	2
鉢類	志野向付																			1	1	1
小壷・小瓶類	灰釉小壷																		2		2	2
	灰釉茶入																		1		1	1
	灰釉小壷か小瓶													1	1							1
合計													1	2	3		2	2	3	9	16	19

㉓ 宮ノ前遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											3			3							3
皿類	灰釉底卸目皿						1								1							1
卸皿	灰釉卸皿			1	1					1					3							3
擂鉢	擂鉢													2	2							2
壷・瓶類	灰釉瓶子				1										1							1
小壷・小瓶類	灰釉合子							1							1							1
合計				1	2		1	1		1		3		2	11							11

㉔ 蔵ノ腰遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗																2				2	2
皿類	灰釉腰折皿													1	1							1
	灰釉端反皿																1				1	1
	灰釉端反皿か丸皿																2				2	2
擂鉢	擂鉢													1	1		2		2		8	9
合計														2	2		7		2		13	15
																		4				

㉕ 五郎兵衛遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	灰釉平碗											2			2							2
皿類	灰釉丸皿																	1			1	1
	灰釉縁釉小皿													1	1							1
	灰釉腰折皿													2	2							2
合計												2		3	5			1			1	6

㉖ 小田屋敷遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											1			1							1
合計												1			1							1

㉗ 瀬名川遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
盤類	灰釉盤類									1					1							1
	灰釉直縁大皿										1				1							1
卸皿	灰釉卸皿						1								1							1
壷・瓶類	灰釉四耳壷	1													1							1
小壷・小瓶類	灰釉合子						1								1							1
合計		1					1				1				5							5

㉘ 元富士大宮司館跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											4	7	15	31	1						32
												1		4								
碗類	灰釉平碗									3	3	5	7	2	39							39
										7	6	3		3								
皿類	灰釉縁釉小皿										1	2	6	6	17							17
													2									
	鉄釉縁釉小皿											1	5		6							6
	灰釉縁釉はさみ皿																1				1	1
	灰釉端反皿																1				1	1
	鉄釉稜皿																	1			1	1
盤類	灰釉折縁深皿									4	2	2			12							12
							2	1			1											
	灰釉直縁大皿										2	4			6							6
	灰釉卸目付大皿											2	7		9							9
	灰釉盤類											8	5		37							37
										6	2	6	10									
卸皿	灰釉卸皿			3								1			9							9
							2					1		2								
擂鉢	擂鉢												6	34	66	6			3		7	79
														26					2	2		
壷・瓶類	灰釉四耳壷		2												3							3
											1											
	灰釉四・三耳壷											3			3							3
	灰釉梅瓶			1			1								2							2
	灰釉水注		3												4							4
				1																		
	鉄釉口広有耳壷												2	7	9							9
	鉄釉祖母懐茶壷											11			11							11
	錆釉壷													1	1							1
神仏具	灰釉花瓶										1				1							1
	灰釉袴腰形香炉											1			1							1
	鉄釉仏飾具													2	2							2
鉢類	灰釉小鉢										1				1							1
	灰釉碗形鉢										3				3							3
小壷・小瓶類	鉄釉鳥形水滴											1			1							1
その他	鉄釉建水																		1		1	1
不明	灰釉不明											1			1							1
合計			5	3						7	8	29	43	57	275	7	2	1	4		11	293
			2				5	1			20	22	16	57				2	2			

㉙ 祢宜弥遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗										1				1							1
碗類	灰釉平碗							1			2				3							3
皿類	灰釉折縁小皿							1			1				2							2
	灰釉中皿										1				1							1
	灰釉縁釉はさみ皿																6				6	6
卸皿	灰釉卸皿						1								1							1
擂鉢	擂鉢													1	1				1		1	2
壷・瓶類	灰釉四耳壷				1										1							1
	鉄釉壷か甕											1			1							1
鉢類	灰釉碗形鉢									1					1							1
その他	鉄釉徳利																	2			2	2
合計				1			1	1	1	1	2	1		1	12		6		1		9	21
																		2				

㉚ 城ノ前遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									1		1	3	11	17						17	
碗類	灰釉平碗									2	2	1	4	3	14							14
皿類	灰釉小皿						1				1				2							2
	灰釉折縁中皿											1			1							1
	灰釉縁釉小皿										3	8	3	10	31							31
盤類	灰釉折縁深皿									2	2		3	2	3							3
	灰釉 御目付大皿									1				1	1							1
	灰釉盤類											3			8							8
卸皿	灰釉卸皿						1			3	1			1	1							1
擂鉢	擂鉢													8	29				1		1	30
	擂鉢Ⅰ類												5	3	8							8
	擂鉢Ⅱ類													18	18							18
壷・瓶類	灰釉四耳壷	17													17							17
	灰釉水注	1													1							1
	灰釉壷												4		4							4
	灰釉壷か瓶			5		4									9							9
	灰釉 根来形瓶子									2					2							2
	鉄釉 祖母懐茶壷										4				4							4
	鉄釉桶													4	4							4
鉢類	灰釉小鉢												1		1							1
不明	灰釉不明									1					1							1
	鉄釉不明										1				1							1
合計		18		5		6			1	2	12	7	8	29	177				1		1	178

㉛ 石成遺跡

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗									1	2	9	1		17							17
碗類	灰釉平碗										2	1	3	1	12							12
皿類	灰釉中皿(洗)						1								1							1
	灰釉縁釉小皿												2		3							3
	鉄釉縁釉小皿											1			2							2
盤類	灰釉洗	1													1							1
	灰釉折縁深皿									1					1							1
	灰釉直縁大皿											2			2							2
	灰釉 御目付大皿													3	3							3
	灰釉盤類											2	5		7							7
卸皿	灰釉卸皿		2		6	2	4					1			15							15
擂鉢	擂鉢													3	7							7
壷・瓶類	灰釉四耳壷		2											4	2							2
	灰釉瓶子		1	14							2				17							17
	灰釉梅瓶		12												12							12
	灰釉 根来形瓶子										4				4							4
	灰釉 瓶子か梅瓶											1			1							1
	灰釉瓶類			1											1							1
	鉄釉 口広有耳壷												1		1							1
	鉄釉壷												2		2							2
	鉄釉 祖母懐茶壷											1			1							1
	灰釉壷か瓶			1			1					1			3							3
神仏具	灰釉花瓶										1				1							1
	灰釉筒形容器										1				1							1
鉢類	灰釉小鉢												2		2							2
その他	錆釉鍋													2	2							2
不明	灰釉不明											1			1							1
合計		1	17	14	6	2	5			2	4	16	6	9	122							122
			1	1			1				12	7	13	5								

瀬戸・美濃器種一覧表

㉜ 久野城

器種名		古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗													16	16	10	31	40	11		91	117
																	6	3				
	小天目																8	1			9	9
碗類	灰釉平碗												2	1	4		3				3	7
													1									
	鉄釉平碗																1	4			5	5
	灰釉丸碗																6		1		9	9
																	2					
	鉄釉丸碗																			1	1	1
	灰釉端反碗													1	1							1
皿類	灰釉縁釉小皿												1	2	7							7
												3	1									
	灰釉腰折皿													15	15							15
	鉄釉腰折皿													3	3							3
	灰釉小皿											1			1							1
	灰釉縁釉はさみ皿																5				5	5
	灰釉豆皿																1				1	1
	灰釉端反皿																23				23	23
	灰釉端反皿か丸皿																23				23	23
	灰釉丸皿																	41	25		71	71
																		5				
	鉄釉丸皿																3	17	8		30	30
																	1	1				
	鉄釉稜皿か丸皿																	1			4	4
																	1	2				
	灰釉稜皿																	1			1	1
	縁釉稜皿																	1			1	1
	鉄釉稜皿																	15	17		32	32
	灰釉内禿皿																		2		2	2
	灰釉折縁皿																		6		6	6
	志野丸皿																			2	2	2
	志野菊皿																			1	1	1
	志野端反皿																			3	3	3
	志野鉄絵皿																			1	1	1
盤類	灰釉盤類													1	1							1
	錆釉大皿																		1		1	1
	志野大鉢																			2	2	2
卸皿	灰釉卸皿			1										1	1		1				1	2
擂鉢	擂鉢													43	45	51	28	55	42	3	207	303
														2			7	65	7			
壷・瓶類	灰釉四・三耳壷									1					1							1
	鉄釉四・三耳壷												1	1	2							2
	祖母懐茶壷																	1			1	1
	鉄釉祖母懐茶壷										4	2			6							6
	鉄釉口広有耳壷													1	1							1
	鉄釉茶壷																	1			1	1
	鉄釉壷												1		1							1
	鉄釉壷か甕												2		2							2
	鉄釉壷か瓶													1	1							1
	灰釉瓶類						1								1							1
	鉄釉瓶類													1	1							1
神仏具	灰釉袴腰形香炉											1			1							1
	灰釉筒形香炉													1	1		1				2	3
																		1				
	鉄釉筒形香炉													1	1							1
	灰釉花瓶												1		1							1
	鉄釉花瓶													1	1							1
鉢類	黄瀬戸向付																			4	4	4
	志野向付																			1	1	1
小壷・小瓶	灰釉小壷か小瓶											1			1							1
	鉄釉小壷か小瓶															1	1	2			3	4
	鉄釉茶入															1			1		1	2
	芋子茶入																		1		1	1
その他	鉄釉灰流し徳利																	35			35	35
	鉄釉徳利																	1			9	9
																		5	3			
	鉄釉水指																	1			1	1
	鉄釉小碗																1				1	1
不明	灰釉不明																1				1	1
	鉄釉不明															5		1			1	6
	錆釉不明															1						1
合計					1		1			1	6	1	3	81	116	69	112	176	117	18	597	782
												10	12				43	121	10			

志戸呂器種一覧表

⑥　潮海寺門前町遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				2		2							2
碗類	鉄釉平碗				1		3	4						4
Ⅲ類	灰釉縁釉小皿				4		4							4
	鉄釉縁釉小皿				6		2	8						8
	鉄釉丸皿											3	3	3
盤類	鉄釉卸目付大皿				3		3							3
擂鉢	擂鉢				2	3	10	15				6	9	24
壷・瓶類	鉄釉瓶子Ⅲ類					1	1							1
	鉄釉祖母懐茶壷					1	1							1
	鉄釉壷					2	2							2
小壷・小瓶類	鉄釉小瓶					1	1							1
合計					18	3	20	41				3	12	53

⑦　善福寺遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	鉄釉碗					1	1							1
皿類	鉄釉縁釉小皿				1		1	2						2
	灰釉内禿皿											1	1	1
盤類	鉄釉卸目付大皿				1		1							1
擂鉢	擂鉢				2		2					1	1	3
壷・瓶類	灰釉梅瓶				2		2							2
神仏具	鉄釉大型筒形容器				11		11							11
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か水注				1		1							1
合計					2		18	20				2	2	22

⑧　勝間田城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	灰釉平碗					2	2							2
Ⅲ類	灰釉縁釉小皿					1	1							1
擂鉢	擂鉢				1	60	94	155						155
壷・瓶類	灰釉祖母懐茶壷					84	84							84
神仏具	鉄釉椅腰形香炉					5	5							5
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か水注					2	2							1
	鉄釉小壷					1	1							1
	鉄釉耳付水注					1	1							1
合計					1	67	183	251						251

⑨　掛川城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											1	1	1
皿類	灰釉丸皿											2	2	2
	灰釉内禿皿											3	3	3
擂鉢	擂鉢											1	1	1
壷・瓶類	灰釉口広有耳壷				7		7							7
合計					7		7					7	7	14

⑩　殿谷城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
盤類	鉄釉大皿					3	3							3
擂鉢	擂鉢					1	1							1
合計						1	3	4						4

②　伊平遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				3		3					2	2	5
Ⅲ類	灰釉縁釉小皿				1		1							1
	鉄釉縁釉小皿				1		1							1
卸皿	鉄釉卸皿				1		1							1
擂鉢	擂鉢					8	8							8
壷・瓶類	鉄釉壷				1		1							1
合計					7	8	15					2	2	17

③　土橋遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
擂鉢	擂鉢				3		3							3
合計					3		3							3

④　林光寺遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
Ⅲ類	鉄釉皿											1	1	1
擂鉢	擂鉢				1		1							1
合計					1		1					1	1	2

⑤　宇藤遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											7	18	18
碗類	鉄釉小碗				1		1							1
Ⅲ類	鉄釉稜皿											1	1	1
擂鉢	擂鉢				5		5					7	9	14
壷・瓶類	鉄釉祖母懐茶壷				1		1							1
神仏具	鉄釉椅腰形香炉				1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉耳付水注				1		1							1
合計					9		9					15	28	37

⑪　笹岡城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
碗類	鉄釉筒形碗											1	1	1
擂鉢	擂鉢				1		1							1
合計					1		1					1	1	2

⑫　高根城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
擂鉢	擂鉢				8		8							8
合計					8		8							8

⑭　大見寺遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				1		1							1
Ⅲ類	灰釉縁釉小皿				6		1	7						7
	鉄釉縁釉小皿				4	3	7							7
卸皿	鉄釉卸皿				2		2							2
擂鉢	擂鉢				22	3	47	72						72
壷・瓶類	鉄釉壷					1	1							1
	鉄釉壷か瓶					1	1							1
神仏具	鉄釉椅腰形香炉					1	1							1
鉢類	鉄釉擂鉢形小鉢				1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か小瓶					1	1							1
合計					36	6	52	94						94

志戸呂器種一覧表

⑮ 見付端城遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				2	2	6							6
	灰釉天目茶碗				1	6	7							7
碗類	鉄釉平碗				5	1	6							6
	鉄釉筒形碗											1	1	1
皿類	灰釉縁釉小皿				1	1	2							2
	鉄釉縁釉小皿					2	3							3
	鉄釉小皿					1	1							1
	鉄釉中皿				1		1							1
盤類	鉄釉直縁大皿				1		1							1
	鉄釉卸目付大皿				4		4							4
	鉄釉盤類				1	2	3							3
	鉄釉大皿					2	2							2
卸皿	鉄釉卸皿				7	1	8							8
擂鉢	擂鉢				24	27	75					1	1	76
壷・瓶類	灰釉梅瓶					8	8							8
	鉄釉根来形瓶子					2	2							2
	鉄釉口広有耳壷				2	13	15							15
	鉄釉茶壷					101	101							101
	鉄釉壷					5	5							5
	鉄釉甕					11	11							11
	鉄釉壷か甕					1	1							1
	鉄釉桶					1	1							1
神仏具	鉄釉仏鉢具					1	1		1					1
	鉄釉将棋形香炉					1	1							1
	鉄釉花瓶か燭台					1	1							1
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か小瓶					1	1							1
合計					49	28						2		
						190	267						2	269

㉒ 糸繰遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	灰釉天目茶碗											1	1	1
	小天目茶碗											1	1	1
皿類	灰釉内禿皿											1	1	1
	鉄釉稜皿											1	1	1
擂鉢	擂鉢					1	1					11	12	13
壷・瓶類	鉄釉壷											2	2	2
小壷・小瓶類	灰釉小壷											2	2	2
	鉄釉小壷											1	1	1
	灰釉小壷か小瓶					1	1							1
その他	灰釉徳利											1	1	1
合計						2	2					20	22	24

㉓ 宮ノ前遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
皿類	灰釉皿											1	1	1
合計												1	1	1

㉔ 蔵ノ腰遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											1	1	1
合計												1	1	1

⑬ 元島遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				1	5	6					11	11	17
碗類	灰釉平碗					1	1							1
	鉄釉平碗				2	3	5							5
	灰釉端反碗					4	4							4
	鉄釉端反碗					1	1							1
皿類	灰釉縁釉小皿					5	5							5
	鉄釉縁釉小皿					36	36							36
	灰釉丸皿											1	1	1
	鉄釉丸皿											1	1	1
	灰釉内禿皿											15	15	15
	鉄釉内禿皿											3	3	3
	鉄釉折縁中皿				4		4							4
盤類	鉄釉卸目付大皿				4		4							4
	灰釉直縁大皿				4		4							4
	灰釉盤類					2	2							2
	鉄釉盤類					13	13							13
卸皿	鉄釉卸皿				1		1							1
擂鉢	擂鉢				61	127	12	200				23	23	223
壷・瓶類	鉄釉梅瓶					4	4							4
	灰釉根来形瓶子					2	2							2
	灰釉壷類					1	1							1
	鉄釉壷類					18	18					1	1	19
	鉄釉壷か甕					3	3							3
神仏具	鉄釉香炉				1	4	5							5
鉢類	鉄釉鉢					1	1							1
小壷・小瓶類	鉄釉合子蓋					1	1							1
不明	灰釉不明					1	1							1
	鉄釉不明					3	3					6	6	9
合計					78	128						61		
						119	325						61	386

⑯ 野際遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											1	1	1
皿類	灰釉縁釉小皿				1		1							1
擂鉢	擂鉢					8	17	25					9	34
壷・瓶類	灰釉梅瓶						1	1						1
	鉄釉口広有耳壷						1	1						1
	遚釉壷						3	3						3
その他	遚釉土瓶						2	2						2
合計						1	8					5		
							24	33					10	43

⑰ 横地城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
盤類	灰釉端反碗					2	2							2
擂鉢	擂鉢					1	1							1
合計						3	3							3

㉙　祢宜弥遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
擂鉢	擂鉢					1	1							1
小壷・小瓶類	灰釉小形壷					1	1							1
合計						2	2							2

㉚　城ノ前遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
皿類	灰釉縁釉小皿				2		2							2
	鉄釉縁釉小皿				1		1							1
盤類	灰釉盤類					1	1							1
	鉄釉盤類					2	2							2
擂鉢	擂鉢Ⅰ類				23		23							23
壷・瓶類	鉄釉 祖母懐茶壷					6	6							6
小壷・小瓶類	鉄釉 小壷か水注					1	1							1
合計					26		36							36
						10								

㉛　石成遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											1	1	1
盤類	鉄釉 卸目付大皿				1		1							1
	鉄釉盤類					1	1							1
擂鉢	擂鉢					6	9					1	1	10
					3									
壷・瓶類	鎖釉壷					1	1							1
鉢類	鎖釉鉢					2	2							2
	鉄釉小鉢				1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉 小壷か小瓶					1	1							1
合計					2	6	16					2	2	18
						8								

㉜　久野城

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗											2	2	2
碗類	鉄釉丸碗											1	1	1
皿類	灰釉丸皿											4	4	4
	鉄釉丸皿											2	2	2
	鉄釉内禿皿											1	1	1
	灰釉稜皿											1	1	1
擂鉢	擂鉢				1	1	5					15	20	25
					3							5		
壷・瓶類	鉄釉壷											2	2	2
	鉄釉壷か甕											1	2	3
					1		1							
	鉄釉 祖母懐茶壷					2	2							2
	鉄釉桶					1	1							1
神仏具	鉄釉筒形香炉											2		2
鉢類	灰釉小鉢(向付											6		6
その他	鉄釉徳利												1	1
	鉄釉耳付徳利											1	1	1
	鎖釉茶釜					2	2							2
合計					1	1	11					38	45	56
						9						7		

㉑　原川遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
天目	天目茶碗				1		2					34	34	36
					1									
	小天目											4	4	4
碗類	灰釉平碗					1	1							1
	鉄釉平碗				7		7							7
	鉄釉筒形碗											13	13	13
皿類	鉄釉縁釉小皿				1		1							1
	鉄釉折縁中皿				1		1							1
	灰釉中皿											1	1	1
	灰釉丸皿											4	4	4
	鉄釉丸皿											14	14	14
盤類	鉄釉 卸目付大皿				3	1	4							4
	鉄釉大皿											3	3	3
	鎖釉大皿											1	1	1
擂鉢	擂鉢				28	19 28	105					164	164	269
壷・瓶類	鉄釉 提来形瓶子				5		5							5
	鉄釉壷				10		10							10
	鉄釉壷か甕				5		5					8	8	13
	鉄釉甕				1		1					5	5	6
	鉄釉瓶類				1		1							1
	鉄釉桶											1	1	1
神仏具	鉄釉 大型筒形香炉				5		5							5
鉢類	鉄釉小鉢				1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉耳付水注				1		1				1	1	2	3
	灰釉小壷											1	1	1
	鉄釉小壷				1		1					2	2	3
	鎖釉小壷											9	9	9
	鉄釉 小壷か耳付水注											2	2	2
	灰釉水滴											1	1	1
	鉄釉 水鳥型水滴											1	1	1
	鉄釉小瓶											2	2	2
	鉄釉茶入											4	4	4
	鉄釉合子蓋				1		1							1
その他	鎖釉土瓶				1		1							1
	鉄釉徳利											5	5	5
合計					20	30	153					278	281	434
					103							3		

㉖　小田屋敷遺跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
擂鉢	擂鉢				1		1							1
合計					1		1							1

㉘　元富士大宮司館跡

器種名		古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	古瀬戸計	古瀬戸か大窯	大窯製品 1	2	3	4	大窯計	合計
皿類	灰釉縁釉小皿				1		1							1
	鉄釉縁釉小皿				1		1							1
	灰釉内禿皿											1	1	1
盤類	灰釉 卸目付大皿				1		1							1
	鎖釉大皿											1	1	1
卸皿	灰釉卸皿				1		1							1
擂鉢	擂鉢				4		4					3	6	10
												3		
壷・瓶類	鉄釉壷				1		1							1
	鉄釉壷か甕				1		1							1
小壷・小瓶類	鉄釉 小壷か小瓶				1		1							1
	鉄釉耳付水注				1		1							1
合計					3		12					4	8	20
						9						4		

第7表　初山器種一覧表

①　殿ケ谷遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			1		1
合計				1		1

④　林光寺遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
皿類	鉄釉内禿皿			1		1
合計				1		1

⑤　宇藤遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			1		1
皿類	鉄釉内禿皿			3		3
合計				4		4

⑥　潮海寺門前町遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			3		3
皿類	鉄釉内禿皿			2		2
合計				5		5

⑪　笹岡城

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
皿類	鉄釉丸皿			1		1
	鉄釉稜皿			1		1
合計				2		2

⑨　掛川城

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			6		6
皿類	鉄釉丸皿			5		5
	鉄釉稜皿			1		1
	鉄釉内禿皿			1		1
盤類	鉄釉大皿			2		2
擂鉢	擂鉢			1		1
小壷・小瓶類	鉄釉向付碗			1		1
合計				17		17

⑬　元島遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			12		12
皿類	鉄釉内禿皿			49		49
小壷・小瓶類	鉄釉水注			1		1
その他	鉄釉徳利			1		1
合計				63		63

⑯　野際遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			1		1
擂鉢	擂鉢			1		1
合計				2		2

⑱　高天神城

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
擂鉢	擂鉢			1		1
合計				1		1

㉑　原川遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			28		28
碗類	鉄釉丸皿			3		3
皿類	鉄釉丸皿			1		1
	鉄釉稜皿			2		2
	鉄釉内禿皿			41		41
	鉄釉小皿			1		1
擂鉢	擂鉢			20		20
壷・瓶類	鉄釉壷			3		3
小壷・小瓶類	鉄釉耳付水注			2		2
	鉄釉小壷か耳付水注			1		1
	鉄釉小瓶			2		2
	鉄釉茶入			1		1
合計				105		105

㉒　糸繰遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
皿類	鉄釉丸皿			2		2
	鉄釉内禿皿			2		2
擂鉢	擂鉢			1		1
小壷・小瓶類	鉄釉小壷か小瓶			1		1
	鉄釉耳付水注			1		1
その他	鉄釉徳利			1		1
合計				8		8

㉔　蔵ノ腰遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			1		1
合計				1		1

㉖　小田屋敷遺跡

器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
皿類	鉄釉丸皿			1		1
合計				1		1

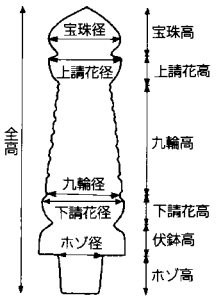
㉘　元富士大宮司館跡

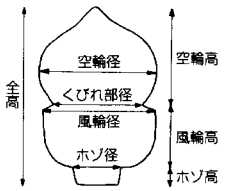
器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
盤類	鉄釉大皿			1		1
合計				1		1

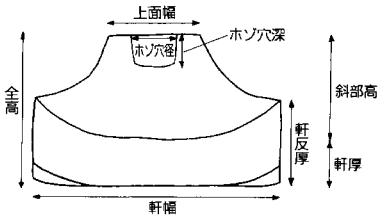
㉜　久野城

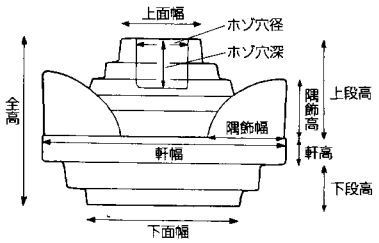
器種名		大窯製品 1	2	3	4	合計
天目	天目茶碗			11		11
碗類	鉄釉丸碗			1		1
皿類	鉄釉内禿皿			14		14
	鉄釉丸皿			1		1
	鉄釉稜皿			1		1
盤類	鉄釉大皿			1		1
	錆釉大皿			4		4
擂鉢	擂鉢			7		7
壷・瓶類	鉄釉壷か甕			1		1
小壷・小瓶類	鉄釉耳付水注			1		1
その他	鉄釉小杯			1		1
	鉄釉徳利			1		1
	鉄釉水指			1		1
合計				45		45

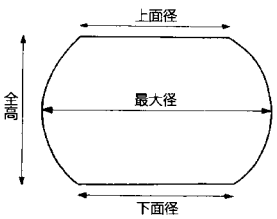
第四章　石造物

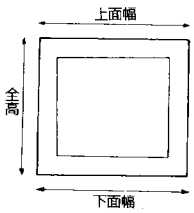

宝珠径
宝珠高
上請花径
上請花高
全高
九輪高
九輪径
下請花径
下請花高
伏鉢高
ホゾ径
ホゾ高

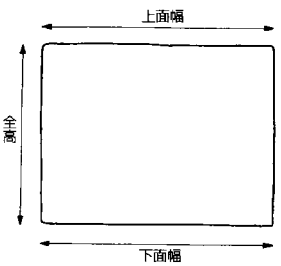

空輪径
空輪高
全高
くびれ部径
風輪径
風輪高
ホゾ径
ホゾ高

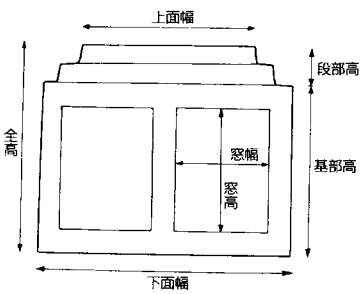

上面幅
ホゾ穴径
ホゾ穴深
全高
斜部高
軒反厚
軒厚
軒幅

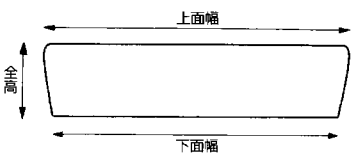

上面幅
ホゾ穴径
ホゾ穴深
全高
隅飾高
上段高
隅飾幅
軒幅
軒高
下段高
下面幅

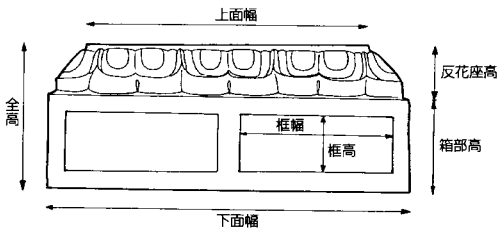

上面径
全高
最大径
下面径

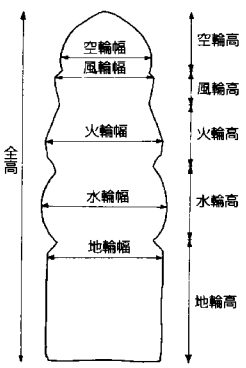

上面幅
全高
下面幅

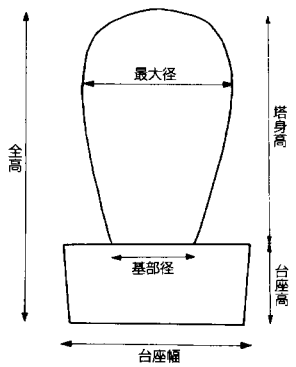

上面幅
全高
下面幅


上面幅
全高
段部高
窓幅
窓高
基部高
下面幅


上面幅
全高
下面幅


上面幅
全高
反花座高
框幅
框高
箱部高
下面幅


空輪幅
空輪高
全高
風輪幅
風輪高
火輪幅
火輪高
水輪幅
水輪高
地輪幅
地輪高


最大径
全高
塔身高
基部径
台座高
台座幅

目　次

はじめに……二〇六
Ⅰ　石塔の種類……二〇六
Ⅱ　石塔群の分布と現況……二〇八
(1)　菊川町内の石塔群……二〇八
(2)　小笠郡小笠町の中世石造物……二一六
(3)　小笠郡域外の石塔群……二二一
Ⅲ　各地の石塔の計測と観察……二二七
1　奥横地慈眼寺……二二七
2　奥横地延命段……二三五
3　奥横地伝横地太郎……二三七
4　奥横地三光寺跡裏……二四七
5　奥横地坪井政則氏……二六四
6　奥横地福島唯雄氏宅……二六四
7　神尾宝珠院……二六五
8　藤谷神社下二俣家墓……二六六
9　土橋山崎氏宅……二六八
10　段横地旧公会堂……二六九
11　段横地天神森……二七〇
12　段横地興嶽寺……二七二
13　段横地常泉寺……二七九
14　三沢龍谷寺……二八〇
15　三沢篠ヶ谷……二八五
16　三沢太子堂……二八五
17　三沢殿ヶ谷坂……二八六
21　小川端渋谷宅裏……二八七
32　坪井家墓……二九四

はじめに

横地城周辺には随所に中世の石造物がみられ、慈眼寺・三光寺・横地太郎塔周辺など幾つかの群をなしている。これらは横地氏ゆかりの人々によって遺されたものと考えられ、またその石材は各地から搬入されたものであり、当時の人々の死生観や宗教観、流通などの実態を知る重要な手掛かりである。本調査では、菊川町内という限られた範囲であるが、石塔部材の悉皆調査を実施し、全点実測を行なっている。そこで本論では、調査成果の所見に基づき横地城周辺の石造物を概観したい。

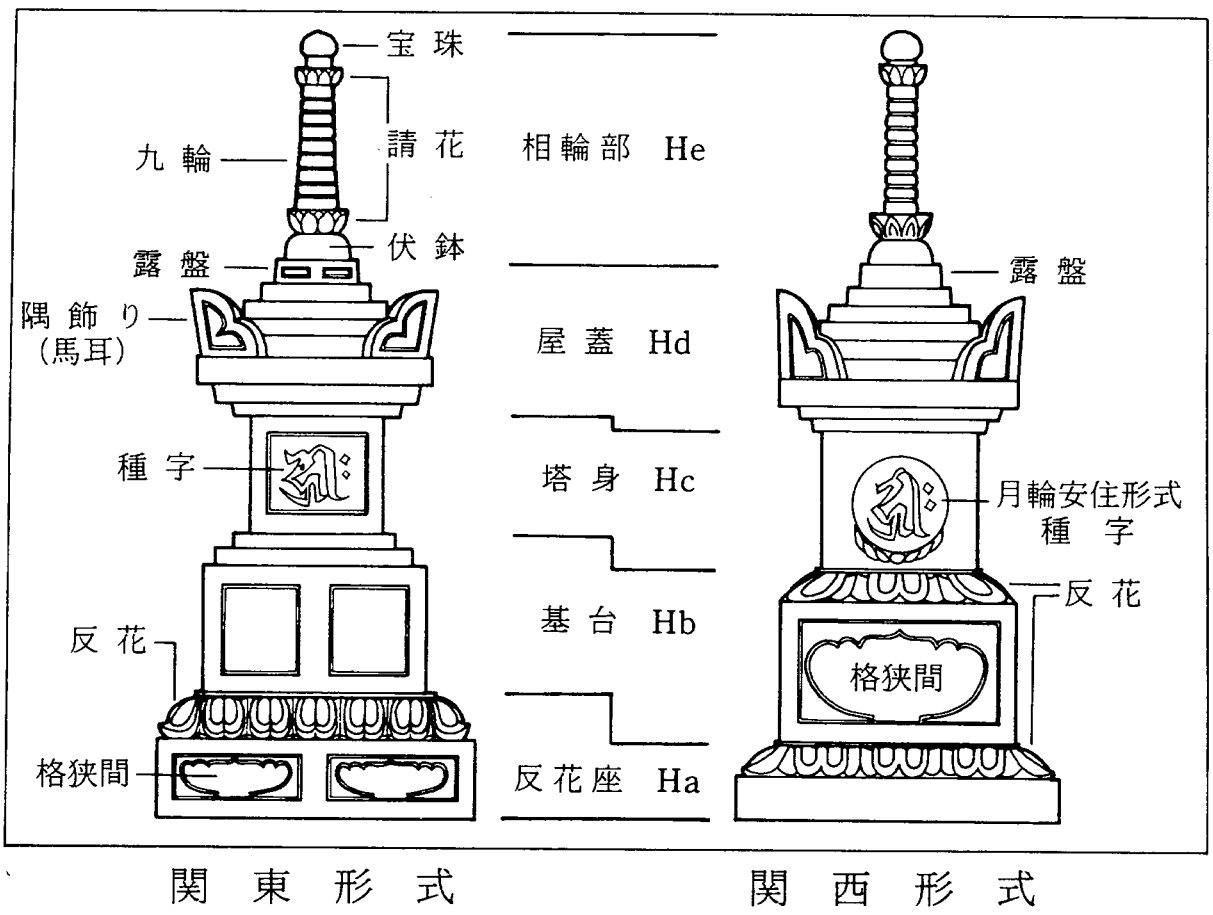
Ⅰ石塔の種類

横地周辺には宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔などの中世石造物が見られ、これらが密集する幾つかの石塔群が形成されている。数量では宝篋印塔が最も多い。

(1)宝篋印塔（ほうきょういんとう）

宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼経納入した塔で、中国五代、呉越の国王銭弘俶が発願して日本を含む諸国に配布した八万四千塔（銅製で中に経典を納める）を原形とし、この形態が経典や舎利容器に採用され、更にその形態を石塔に写したもので、当初は経典を納めた記念碑であったが、次第に墓塔・供養塔に変化し、墓上に建てられるようになった。宝篋印塔はその形式より「関東形式」と「関西形式」に大別される。遠江地方の宝篋印塔は、古式で大型のものは相輪・笠・軸・基礎の四部材を基本に、台座を加え五部材よりなるものが一般的であり、更に基礎に二区の窓を設け、台座に反花座・框座を伴う所謂「関東形式」が主流であるが、小型で新式のものは、基礎に框座がなく台座が反花座のみからなり反花座を伴わない「関西形式」系統の退化型式のものが多い。

(2)五輪塔（ごりんとう）



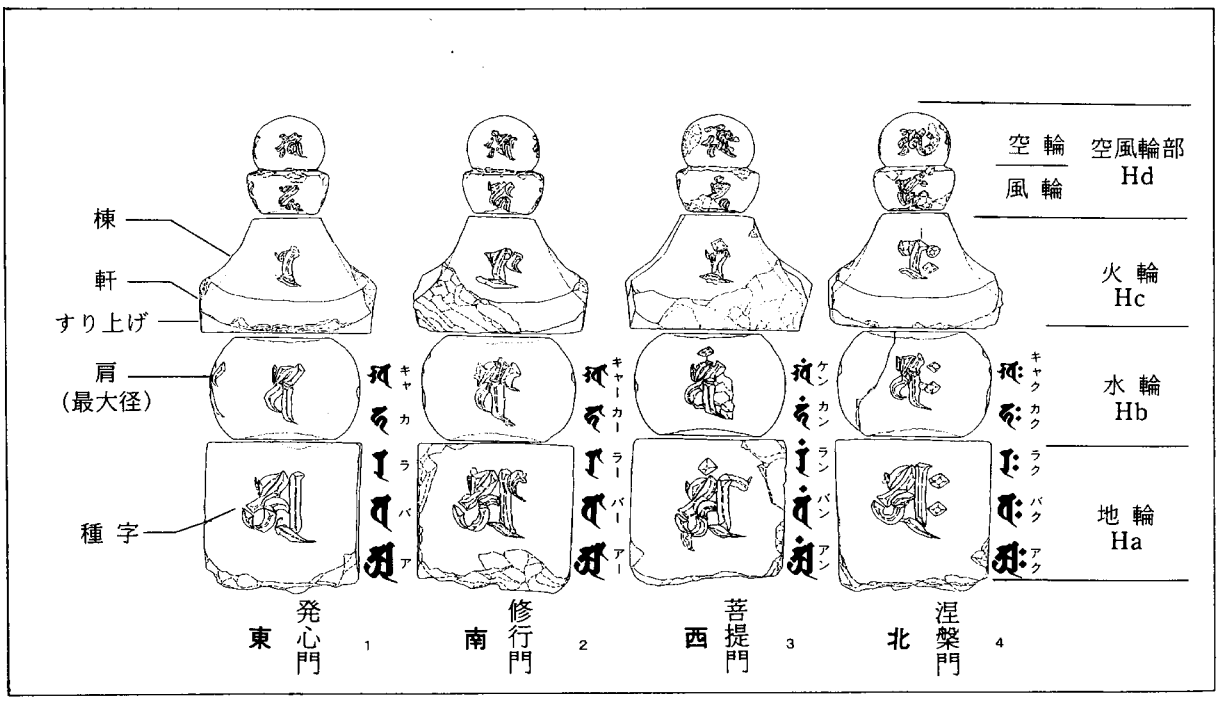
第1図　宝篋印塔の各部名称と東西形式の比較

五輪塔は地・水・火・風・空という世界を構成する五元素を四角・丸・三角・半球・宝珠という五つの形の組み合わせで表現したもので、この図形は十二世紀に真言僧覚鑁が著わした『五輪九字明秘密釈』の中で胎蔵界大日如来の象徴（三昧耶）形であると説明されているように、本来真言密教の中で誕生したが、他宗派にも受容された。すなわち台座上の五輪塔は蓮華座の上に安置された仏像と同義である。なお『五輪九字明秘密釈』によれば、更に五輪塔の儀軌は四種の曼陀羅（四曼相）に分類されるという。すなわち①大曼陀羅②三昧耶曼陀羅③法曼陀羅④羯磨曼陀羅の四種で、このうち①大曼陀羅は五色の彩色を施したもの、②三昧耶曼陀羅は着色を施さず種子真言を鏤刻しないもの③法曼陀羅は四門の梵字を刻むもの④羯磨曼陀羅は塔身に仏像を刻んだものという。

このうち具体的な遺品として①は舎利容器や彩色木製品などに限定されるが、石塔の儀軌として見られるのは主に②および③で②の梵字を刻まない素文の五輪塔は西大寺流の真言律僧で正式な比丘となった開山・長老クラスの墓塔に多いのに対し、③は真言僧・浄土僧、俗人出家者などの墓塔に一般的に見ることができる。④は伊豆韮山真珠院の定仙大和尚塔などに見られるが、例は少ない。

(3)一石五輪塔（いっせきごりんとう）

一石五輪塔は五輪塔の一種であるが、五輪塔が普通四つの石材を積み上げるのに対して、ひとつの石材（一石）を削り出して作っており、古いものは立体的で大型であるが、新しいものには木製卒塔婆のように偏平なものもある。一石五輪塔は五輪塔本来の意味がうすれてきた頃、価格の安い略式の小型石塔として現れ、十四世紀末頃関西地方にまず現れ、十五世紀後半頃に東海・北陸地方にも拡散する。遠江では十五世紀末頃に現れるようで、菊川周辺では横地城の落城以降、戦国時代～江戸時代にかけて在地石材のものが数多く造立された。また十七世紀以降は石龕を伴う場合がしばしば見受けられる。



第2図　五輪塔の各部名称

Ⅱ石塔群の分布と現況（地図参照）

(1)菊川町内の石塔群

①慈眼寺石塔群（奥横地通称大上（おおがみ））

奥横地川北岸、南向きの段丘平坦面上に位置し北から南にのびる長い参道が特徴である。現在、本堂の東の谷側には山茶碗・中世瓦窯跡も発見されている。現在真言宗で地元では眼病治癒の「お薬師様」として信仰されている。横地氏の祖、太郎家長の開基になり、家永出生ゆかりの鏑矢も納められていたと伝える。鎌倉時代に法然の弟子信寂房西蓮がこの地で死去したと伝え、当初は阿弥陀如来を本尊とする浄土宗系寺院であったと考えられる。「横地金寿城合戦記」（金子正敏氏所蔵）によれば貞治二年（一三六三）に焼失したと伝えるが、平田寺文書の延文六年（一三六一）八月十六日沙弥成西寄進状には「横地往生院」の住持職を平田寺長老に寄進する記事があり、成西が横地一族の入道であるとすれば、「往生院」は慈眼寺の前身である可能性も残る。中世石塔部材は一四点。内訳は宝篋印塔部材四点（相輪一、笠三）、五輪塔部材九点（空風輪一、火輪三、水輪三、地輪二）、石塔礎盤一よりなる。一具完存の緑色変岩五輪塔は各輪四面に薬研彫りで梵字が刻まれており、十三世紀後半～十四世紀初頭前後のものと考えられる。水輪のみだが梵字をとりまき円形の輪郭を刻む月輪の表現を伴うものもある。塔周辺より十二世紀末の渥美、十三世紀の常滑蔵骨器出土。他の宝篋印塔部材は十六世紀代で砂岩製、無縫塔類は近世のもので砂岩製（日坂石・天宮石？含む）と安山岩製よりなり、塔下より志戸呂産の蔵骨器が出土している。

なお慈眼寺参道より南の奥横地道久（ドウキュウ）の江南工業敷地駐車場付近に一石五輪塔群があったというが、現在造成で埋没しており確認できない。

②延命段石塔群（奥横地延命段）

伊平遺跡より谷を隔てた西方、「延命寺」地籍の裏山にある茶畑の南へ

第1表　横地及び周辺の石塔群と部村の内訳

番号	地区	名称	空篋印塔						五輪塔					一石五輪塔				礎盤他	備考	計
			相輪	笠	軸	基礎	台座	計	空風輪	火輪	水輪	地輪	計	大	中	小	計			
1	奥横地	慈眼寺	1	3				4	1	3	3	2	9					1		15
2	〃	延命段	3	4	1	1		9			2	1	3		1		1	2		15
3	〃	伝横地太郎塔	20	14	12	11		57	8	9	5	7	29					5		91
4	〃	三光寺裏	16+	18+	13+	29+	3+	79+	15+	13+	7+	12+	47+		1+		1+	○		127+
5	〃	坪井政則宅	2					2												2
6	〃	福島唯雄宅		1				1			1		1							2
7	神尾	宝珠寺		3			1	4		1		1	2							6
8	西横地	二俣家墓	1	1	1	3		6								1	1			7
9	土橋	山崎宅		1	1			2	1				1			1	1			4
10	段横地	旧公会堂				1		1	1				1			8	8			10
11	〃	天神森	4	2	2		1	9	1	1	1	1	4							13
12	〃	興嶽寺	1	6			2	9	1	1			2	2	1	1	4			15
13	〃	常泉寺				1		1	1		1		2			1	1			4
14	三沢	龍谷寺	1	3				4	1				1	2	3	2	7			12
15	〃	篠ケ谷原	2	2		2		6												6
16	〃	太子堂		1				1												1
17	〃	殿ケ谷坂	1					1		1			1			1	1	2		5
18	〃	中村家				1		1						1			1			2
19	西横地	幢照寺	2	2	1	1		6	4			2	6		1	4	5			17
20	小川端	円通寺	2	2				4			1		1			2	2			7
21	〃	渋谷宅裏	4	1	1		3	9	2	2	2	1	7	3	18	2	23			39
22	小出	小出墓						1												1
23	下本所	西浄院	1					1	1	1			2		1	1	2		落合家	5
24	堀之内	報恩寺	3	4	4	3	3	17		1	1	1	3		6	9	15	○		35
25	上本所	陽法寺		1				1						4		2	6			7
26	和田	法明寺	3	3		1		7	2	1			3		2	2	4			14
27	潮海寺	上ノ段												1		4	5			5
28	〃	与六		1	1	1		3			1		1			1	1			5
29	〃	潮海寺墓	1	2		1		4	2				2		2	11	13			19
30	神尾	正光寺		1				1												1
31	中内田	応声教院							1	1	1	1	4							4



第3図　石塔分布図

りの礫敷きの上に宝篋印塔四基が並んでおり、昭和二十年頃、朝鮮半島からの引揚者が入植して山林を開墾した際に掘り出し祀ったと伝える。中世石塔部材は十五点。内訳は宝篋印塔部材九点（相輪三、笠四、軸一、基礎一）、五輪塔部材三点（水輪二、地輪一）、石塔礎盤二、一石五輪塔一。宝篋印塔を主体とし五輪塔・一石五輪塔部材を交える。宝篋印塔相輪・笠はすべて退化が進んでおり十六世紀前半～中葉の形成とみられる。

③横地太郎塔石塔群（奥横地中上）

奥横地川沖積地の北岸、中上（ちゅうかみ）の山腹に位置する。坂部義則氏の茶畑となっている斜面西側に椎の老木があり、その根元に付近から出土した石塔と隣接する集落より部材が集められている。中央にある最大の「横地太郎塔」は大型宝篋印塔の相輪と笠で、十四世紀中葉前後の造立と推定され、周囲を中小の宝篋印塔や小型の五輪塔が取り巻いている。関東型式の二窓式基礎が一点しか見られず、また台座類も見られない点が特徴である。中世石塔部材は九一点。内訳は宝篋印塔部材五七点（相輪二〇、笠一四、軸一二、基礎一一）、五輪塔部材二九点（空風輪八、火輪九、水輪五、地輪七）、石塔礎盤五よりなり、一石五輪塔を含まないのが特徴だが、最も新しい宝篋印塔・五輪塔は十六世紀まで下降すると考えられる。

④三光寺跡裏墓地石塔群（東横地殿ケ谷）

奥横地川沖積地の北岸、殿ケ谷後背の東横地の茶農協の北側（三光寺跡の裏）にあたり、現在、三光寺歴代住職の墓塔群（無縫塔）の脇に中世の石塔がまとめて安置されている。石塔は五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔からなる。曹洞宗で本尊は願地蔵菩薩。興嶽寺三世華嶽得春和尚（位一五〇一～一五三三）が天文四年（一五三五）五月五日に創建したと伝え、横地太郎開基と伝える延命寺、東泉寺、授福寺の三ケ寺を合併したので三光寺を称したというが、曹洞宗となる以前は時宗末寺帳に記載のある時宗寺院であった。なお華嶽得春は天文二年（一五三三）に没したとされるので、事実上の開山は二世で、師の華嶽得春を開山とする礼をとったと考えられる。三世路州和尚の代に徳川家康から朱印五石を賜ったが、明治七年、これを返納したという。昭和二十四年廃寺となり、更に昭和四十一年（一九六六）境内に東横地茶農業協同組合の建物が建築され茅葺きの本堂庫裡も解体撤去された。

付近より散在した状態で出土した石塔部材が寄せ集められて覆屋の内部に並べられている。横地城跡周辺に分布する石塔群の中では最も部材の個体数が多く、バラエティに富んでいる。大型宝篋印塔を中核とし、中型宝篋印塔や小型の五輪塔・宝篋印塔部材も加わる。古式の一石五輪塔を二点交える。宝篋印塔には関東形式の二窓式基礎を七基含み、確実な年号を持つ文和五年（一三五五）銘塔を前後する時期のものと考えられる。主体となる時期は十四世紀中葉～十五世紀と見られるが、小型宝篋印塔には掛川市峯遺跡と同形のものを含み十六世紀後半まで下降するものを含むと考えられる。

三光寺跡裏よりさらに一〇〇m程北側へ登った地点、奥横地の武衛原頂上へ登る途中の道端に別個に祀られているものも、部材の出土場所は同じで基本的に同じ群に由来している。

石塔部材は野澤氏の調査（野澤一九九五）とその後の追加で一五九点を数え、宝篋印塔部材七六点（相輪三三、笠三〇、軸一二、基礎二八）、五輪塔部材四七点（空風輪一五、火輪一二、水輪九、地輪一三）、一石五輪塔二からなるが、墓地内には未調査の部材が残り、今後追加調査を実施し、数値を補訂する予定である。

⑤東横地坪井政則氏宅宝篋印塔（東横地（通称渥美谷）四〇一九）

坪井政則氏宅敷地内裏手の生垣に接して屋敷神として中世石塔部材が祀られており、屋敷内の椎の老木の根元より出土したと伝える。十五世紀代の宝篋印塔笠二点よりなる。

⑥長溝杉ノ谷遺跡福島唯雄氏宅石塔（東横地字長溝三八九九-二）

福島唯雄氏宅西側の椎の樹の下に十六世紀頃の宝篋印塔笠一・五輪塔水輪一点が重ねられて屋敷神として祀られている。敷地内からは十三～十四世紀頃の常滑甕・青磁片が採集されている。

⑦宝珠院・宇藤遺跡（神尾）

共立菊川病院の所在する丘陵の東斜面裾に位置する寺院の境内墓地周辺に若干の石塔部材が見られ、宇藤遺跡の発掘でも石塔部材が出土している。中世石塔部材は六点。内訳は宝篋印塔部材四点（笠三、台座一）、五輪塔部材二点（火輪一、地輪一）よりなり、隣接する墓地に一石五輪塔一点がある。十四世紀後半～十五世紀の五輪塔（火輪）・宝篋印塔部材（笠・台座）がみられる。このうち宝篋印塔笠は褐色だが安山岩製の可能性がある。また五輪塔笠は淡緑色硬質で重く、緑色変岩の可能性がある（桃崎一九九九）。

⑧藤谷神社下二俣家墓地宝篋印塔（西横地藤谷）

藤谷神社南東裾の斜面の大日・毘沙門天堂の脇に二窓式の宝篋印塔基礎二基があり、いずれも砂岩製で十四世紀末～十五世紀前半の年代が推定される。ここより若干低い位置の二俣家墓地に一具完形の宝篋印塔があり、他に一石五輪塔の残欠、十七世紀代の碑石墓などがある。宝篋印塔はもともと当地にあったようだが、他の墓碑や石塔部材は他所より移築したという。中世石塔部材は七点。内訳は宝篋印塔部材六点（相輪一、笠一、軸一、基礎三）、一石五輪塔一点よりなる。二俣家墓地の宝篋印塔は、相輪の断面が隅丸方形の角柱状で、頂部は一石五輪塔の構造と共通し、十六世紀後半前後の年代が推定される。

二俣家は横地氏の有力家臣の末裔で、榛原町清浄寺の過去帳の冒頭部には、

「宣阿弥陀佛　丁卯　八月二十五日　ヨコヂ　二俣□□□　永禄十年（一五六七）」

「　妙一房　□酉　六月十七日　同　内儀　天正元年（一五七三）」

とあり、このいずれかと宝篋印塔が対応する可能性がある。

⑨土橋山崎宅石塔（土橋長藤旧在）

屋敷地の北西に中世石塔部材四点が祀られている。内訳は宝篋印塔部材二点（笠一、軸一）、五輪塔空風輪一、一石五輪塔残欠一よりなる。宝篋印塔は十五世紀代に遡るもので三沢橋長藤付近の旧在。

⑩段横地旧公会堂石塔群（段横地）

現在段横地公会堂旧敷地内の残丘上に中近世の石塔部材が並べられているが、もとは隣接する横山裕一氏宅に祀られていたという。中世石塔部材は一〇点で、内訳は宝篋印塔部材一点（基礎一）、五輪塔部材一点（空風輪一）よりなり、一石五輪塔八点（うち完形五点）。大型の安山岩製五輪塔空風輪を一点含み、これは十四世紀まで遡ると見られるが、他の砂岩製一石五輪塔・宝篋印塔は十六世紀末～十七世紀か。一石五輪塔は小型で法量に斉一性が強く、やや緑がかった砂岩製である。

なお横山家には江戸時代の位牌が残り「久天菴主　横地久左衛門　寛文九年（一六六九）」の銘がある。また横山氏宅付近からは山茶碗や礎石が出土しており中世居館の存在が推定される。

⑪段横地天神森石塔群（段横地）

横地谷の西側出口、台地上辺縁部に大きな椎樹があり、その根元に礫や石塔部材が塚状になっている。地表に中世石塔部材十三点が散乱している。内訳は宝篋印塔部材九点（相輪四、笠二、軸二、台座一）、五輪塔部材四点（空風輪一、火輪一、水輪一、地輪一）よりなり、十五世紀前後の中型宝篋印塔・五輪塔を主体とし、一石五輪塔を含まないのが特徴である。周辺には多数の石塔部材が埋没していると推定される。石塔群東方の畠地では常滑・瀬戸陶器の散布が見られる。当地には興嶽寺の前身となる真言寺院が存在した可能性がある。

⑫興嶽寺石塔群（東横地峯原）

段横地の南方、横地谷を北に望む高台に位置し、大龍山興嶽寺を号す。曹洞宗で相良町龍門山大興寺の四世大梁慶弘の弟子月山守満が文明七年（一四七五）に開基したと伝えるが、大東町今滝の真言宗今滝寺には当地にあった真言寺院の末寺であったとする記録があり、曹洞宗化する以前に前身

となる真言寺院が存在した可能性が高い。江戸前期に至る世代は、

開祖　月山守満　延徳元年（一四八九）正月十五日寂
二世　雲巌叟石　文亀元年（一五〇一）九月十一日寂
三世　華嶽得春　天文二年（一五三三）七月四日寂
四世　寛州玄泰　永禄十二年（一五六九）九月二十三日寂
五世　清岩泰純　慶長十五年（一六一〇）五月二十三日寂
六世　玉山秀光　寛永九年（一六三二）九月二十九日寂
七世　九山梵昌　寛永十四年（一六三七）六月二日寂

宝暦三年（一七五三）の火災で焼失し古記録は失われているが、過去六ケ寺の末寺があり、それらはいずれ興嶽寺世代によって開基されたり、禅寺として中興されたもので以下の通り（興嶽寺一九八〇）。

奥横地三光寺　三世　華嶽得春（位一五〇一～一五三三）
三沢龍谷寺・段横地常泉寺　四世　寛州玄泰（位一五三三～一五六九）
笹間渡宝珠寺　六世　玉山秀光（位一六〇一～一六三二）
神尾正光寺　九世　勝山全尊（位　？～一六六七）
土橋林光寺　十六世　泰山耕道（位一七八八～一八二三）

現在中世石塔部材は歴代住職墓地や地蔵堂周辺を中心に一四点が確認されるが、かつて墓地内に散在していた多数の部材は現在埋め立てられており、本来の総数は不明である。内訳は宝篋印塔部材九点（相輪一、笠六、台座二）、五輪塔部材二点（空風輪一、火輪一）よりなり、一石五輪塔三点（完形一点）よりなる。十五世紀の宝篋印塔台座二点は旧山門の礎石に使用され上面に方形のホゾ穴があけられている。このほか歴代住職墓所には十五～十六世紀代の五輪塔・宝篋印塔部材が散在する。四面に梵字を刻む大型一石五輪塔は全高約五一cmを測り地輪の梵字左に「天□（文か正？）」銘があり、天文なら一五三二～一五五五年、天正なら一五七三～一五九二年の造立と考えられ、凝灰岩質の脆弱な石質は森町雨宮の砂岩の特徴に似ている。前者であれば三世華嶽得春、後者であれば四世寛州玄泰の供養塔の可能性がある。

⑬段横地常泉寺（段横地常泉寺）

天神森より西方の菊川を望む台地縁に立地する。興嶽寺四世の寛洲玄泰（位一五三三～一五六九）によって開基されたと伝える曹洞宗寺院だが、実際はこれに先行する真言寺院が存在した可能性が高い。

永禄十二年（一五六九）九月、興嶽寺四世寛洲玄泰和尚が自ら開基となって当山を開いたが、七世中興国明玄光和尚に至って、本堂破損のため、文政二年（一八一九）庫裏を建立、同八年本堂を再建し今日に至っている。古来同寺は、本寺興嶽寺への登竜門であり、多く興嶽寺歴代の住職がここに十数年間住職としてすごし、やがて師命により本寺へ入寺することが慣例となっていた。なお当寺は明治維新までこの台地御屋敷段にあった御陣屋の主本多家の位牌を祀り、扶持米を受けていた。明治初め、義務教育の開始の時、当寺が仮校舎として使用された。昭和五十年二月、時の住職大嶽証順師が老齢につき、清水市へ移住、そのため専任住職不在となり、現在本寺住職の兼務となっている。信徒四十四戸。

宝篋印塔基礎一、五輪塔部材（空風輪一、水輪一）、一石五輪塔一点。このうち五輪塔部材はいずれも十四世紀に遡る。一石五輪塔は十六世紀のもので寛州玄泰の墓塔である可能性がある。

⑭三沢龍谷寺址石塔群（三沢寺ノ谷）

興嶽寺より南西の谷に位置する。曹洞宗で興嶽寺四世寛洲玄泰和尚（位一五三三～一五九六）によって天文年間（一五三二～一五五五）に開基されたと伝えるが、明治十四年廃仏毀釈のあおりで廃寺とされた。跡地は赤堀庄太郎氏宅の北東にあり、現在茶畑や山林となっている。石垣で区画された近世碑石墓群の一角に大型の一石五輪塔に伴う屋形形の覆屋二基があり、付近に宝篋印塔部材や一石五輪塔がみられる。中近世石塔部材は一三点。内訳は宝篋印塔部材四点（相輪一、笠三）、五輪塔部材一点（空風輪一）よりなり、一石五輪塔は略完形七点。このうち中型の宝篋印塔残欠は砥石に

転用されているが軒上四段で頂部に露盤の表現があり十四世紀末～十五世紀前半に遡る。一石五輪塔類は天保八年（一八三七）に四代目伊籐徳兵衛によって記された「本家過去覚」と対比が可能で大部分の被葬者ならびに没年が判明する。

(1) 瑚相照珊大姉　宝永四（一七〇七）丁亥歳九月七日
(2)同貳番五リン石碑　華岩永春庵主　慶安五（一六五二）壬辰歳二月廿六日
俗名長太夫事　（谷ノ屋舗先祖ヽ不相分）
(3)同三番五リン石碑　全室常安上座　元禄七（一六九四）甲戌歳六月十一日
俗名甚ヱ門事　（助右ヱ門とも者之）
(4)同四番石カラウト石碑　源松宗本居士　寛文四（一六六四）甲辰歳四月十八日
是ヨリ本家先祖登致所　中村市郎左ヱ門養父
(5)同　柏窓妙松大姉　天和二（一六八二）壬戌歳二月廿六日
市郎左ヱ門養母
(6)同五番石カラウト碑　即巖宗心居士　貞享三（一六八六）丙寅歳二月十一日
俗名中村市良左ヱ門　代官ヲ以養子来ル
是ヨリ二代中村之姓ヲ名ノル
(7)同　柏巖庭樹大姉　正徳元（一七一一）辛卯歳六月廿日
市郎左ヱ門妻　宗本之娘

以上より七基の一石五輪塔は、単立の(2)慶安五年（一六五二）、(3)元禄七年（一六九四　出ホゾ有）、(1)宝永四年（一七〇七）造立銘のものと、四番石龕（屋形形）に収められていた(4)寛文四年（一六四四）・(5)天和二年（一六八二）、五番石龕（宝珠屋根）に収められていた(6)貞享三年（一六八六）・(7)正徳元年（一七一一）の二組の夫婦の一石五輪塔からなっていたと考えられる。最大のものは石龕に納められた「空・風・火・水・地・」を刻字する寛文四年（一六六四）造立のもので埋没部を含めた総高は八〇㎝程と推定される。

⑮三沢篠ヶ谷原宝篋印塔（三沢地内）
中近世石塔部材は六点。内訳は宝篋印塔部材六点（相輪二、笠二、基礎二）よりなる。三沢地区南方の丘陵山林を茶畑に開墾した際に出土した小型の宝篋印塔二基が不完全ながら並ぶ。退化した型式で十六世紀代のものと思われる。

⑯三沢太子堂宝篋印塔部材（三沢地内）
三沢地区の太子堂境内に宝篋印塔笠一点が持ち込まれているが、本来の所在地は不明。宝篋印塔笠は軒反りが顕著でやや大型で十五世紀のものと考えられる。

⑰三沢殿ケ谷坂斜面坂道脇の石塔群（三沢地内）
興嶽寺原より三沢に下る道路の東脇の斜面下の礫積み上に宝篋印塔相輪一・五輪塔火輪一・一石五輪塔一等が祀られている。宝篋印塔相輪は十五世紀に遡る。付近には多数の石塔が埋没しているという。

⑱三沢中村家（三沢地内）

⑲幢照寺（西横地）
曹洞宗。水田中の備高地にあたるが、現在は民家に囲まれたような状態である。従来、大興寺の末寺とされているが、興嶽寺の末寺であったとの説もある。ただし興嶽寺の末寺台帳にはその名が見えず、大興寺末寺が実態であろう。なお興嶽寺十八世梵楞和尚が、晩年ここに隠居し、安政二年（一八五五）八十三歳で入寂したという記録がある。明治初年に廃寺となり、

その後堂宇が残されて、本尊及び諸仏を祀りつつ、西横地区民が公会堂として使用している。昭和五十八年、旧堂宇を取り壊し、新公会堂および児童遊園地として活用されており、隣接する墓地が残されている。

現在墓地内には地区民の墓があり、それらに寄せられた形で中世石塔部材が一六点みられ、五輪塔部材六（空風輪四（輝石安山岩一、砂岩三）、地輪二（輝石安山岩一、砂岩一））、宝篋印塔部材五（相輪二、笠二、軸一（すべて砂岩））、一石五輪塔五（すべて砂岩）で、これらは十四世紀の五輪塔、十五～十六世紀の宝篋印塔、十六～十七世紀の一石五輪塔よりなる。特に梵字を刻む伊豆安山岩製の五輪塔部材が特筆されるほか、一石五輪塔も十六世紀のものがまとまって見られる。

①平川家墓地：安山岩空風輪一、梵字有り、砂岩製宝篋印塔笠一、砂岩製宝篋印塔軸一

②別の平川家：小型三河砂岩一石五輪塔一

③米倉家　：やや大型のメリハリ付一石五輪塔一

④渋谷丑太郎：中型一石五輪塔残骸一

⑤別の平川家：砂岩五輪塔空風輪一（ホゾ穴有）、中小型一石五輪塔一

⑥奥の歴代住職墓：壇上に石塔部材が並ぶ。宝篋印塔相輪二（砂岩、15世紀以降）欠損、笠一（砂岩、十六世紀。軒斜面）基礎一（十六世紀、退化）　五輪塔空風輪二（出ホゾタイプ、ホゾ無退化タイプ）、地輪？二（うち一点は安山岩。梵字有り）、一石五輪塔一（下部欠損）

⑳圓通寺（小川端）

工場敷地に隣接する本堂裏手の墓地内に少数の石塔部材が見られる。宝篋印塔相輪二（十五世紀後半かそれ以降。頂部丸く九輪の刻み退化している。日坂石。）・笠二、五輪塔水輪一（日坂石）、石龕一（中に一石五輪塔なし）。砂岩製。一石五輪塔一（小型品で十七世紀以降。花崗岩質砂岩）。

㉑小川端渋谷氏宅裏山石塔群（小川端）

菊川東岸、現在渋谷明穂氏宅の裏山、菊川を見下ろす崖縁に小規模な段切り平坦面があり、そこに近世墓碑がコの字形に配置され、周辺に中世石塔部材三九点が散乱している。内訳は宝篋印塔部材九点（相輪四、笠一、軸一、基礎三）、五輪塔部材七点（空風輪二、火輪二、水輪二、地輪一）、一石五輪塔二三点（うち完形十六）よりなり、すべて砂岩製で、礫岩質、花崗岩質のものを含む。宝篋印塔は十五～十六世紀代。五輪塔部材にはホゾ無し空風輪・出ホゾ付空風輪、木ホゾ火輪を含んでいる。大型古式の一石五輪塔が多いのが特徴で、最大のものは全高四六㎝を測る。石塔の大部分は十五世紀後半以降のものと考えられ、横地落城から近世に移行する時期の石塔群として注目される。またここより北方の墓地にも中世石塔部材数点が見られ、安山岩製五輪塔の空風輪などを含んでいる。

㉒小出墓（小出）

㉓西浄院（下本所）

㉔堀之内報恩寺石塔群（堀之内日の出町）

堀之内村堀之内、東海道線の線路北側（山本豆腐店付近）に旧在していた石塔群が鉄道敷設に際し菊川駅前の報恩寺墓地内に集められたもので、現在は更に堀之内地区の新共同墓地に移築されている。

比較的大型の宝篋印塔三基分程度の部材がみられ、関東形式の二窓式基礎や反花座を伴う十五世紀のものを含んでいるが、相輪には角柱化したものがみられ、小型五輪塔や古式の一石五輪塔とともに十六世紀に下降する。なお当地は中世の河村荘堀之内で、永享十一年（一四三九）に小笠原正行が配され、のちにその子行重が堀之内城主となった。石塔群は堀之内城主ゆかりの遺品と考えられる。

㉕陽法寺（上本所）

㉖法名寺（和田）

㉗上ノ段（潮海寺）

㉘与六（潮海寺）

菊川町潮海寺東方の丘陵茶畑上で、宝篋印塔部材等四点をつみ上げてい

る。笠一（隅・軒無段、隅飾線刻。十五世紀前半タイプ）・基礎一（風化進行し詳細不明）五輪塔水輪一（割れて三分の一残る）・地輪一（裏面にノミ痕）。

なお隣接する丘陵部からは内部が焼けた方形土壙が検出され、炭化物や山茶碗の破片が出土しており、十三世紀以降の火葬跡と見られ堂橋遺跡として報告されている（菊川町教育委員会一九九二）。

㉙潮海寺墓地（潮海寺）

潮海寺周辺からは平安時代以降の遺物が豊富に出土しており、十二～十三世紀代には瓦葺の薬師堂建築があったとみられるが、石塔類には古く遡るものがなく、長い参道の途中に出ホゾのある小型の五輪塔空風輪がみられる。このほか、墓地に宝篋印塔笠、台座、小型一石五輪塔を積み重ねたものがみられ、台座に弘化三年（一八四六）銘があり、これは近世の追刻とみられるが、石塔自体も十六～十七世紀の新しいものである。また付近には石龕がみられ、一石五輪塔は本来その中に納められていたようである。

㉚菊川町神尾住川正光寺院（神尾）

無住となっている本堂の柱礎に宝篋印塔笠を逆さまにして使用している。

㉛應聲教院裏山法然塚（中内田杉森）

應聲教院は法然の高弟で師に先立ち正治二年（一二〇〇）に没した眞観房感西の開基になる浄土宗寺院で、裏山山林中の古墳の上に「法然塚」と通称される高さ一m弱の五輪塔がある。近年花崗岩製の塀と扉を付設しているが、訪れる人もなく、倒れて荒れている。空風輪は砂岩製で後補と思われるが、火・水・地輪は緑色変岩で、水輪のみ四方に梵字を刻む。水輪は球状に近く、梵字は慈眼寺の伝信寂塔に比べ薬研彫が崩れているので、若干時期が下降するとみられるが、法然系念仏寺院に共通して類似した緑色変岩五輪塔が存在する点は注目されよう。

(2) 小笠郡小笠町の中世石造物

A野中利一氏宅石塔群（小笠町丹野）

丹野川上流の谷間にある野中利一氏宅の自宅の裏の杉林下の一段高くなった所にコンクリートで段が作られており、そこに宝篋印塔部材一六点（相輪三、笠五、軸三、台座四、礎盤一）が祀られている。相輪は宝珠が高く卵形で、請花の蓮弁が退化消失し、九輪の間が間延びした延命段・横地太郎塔群に近いタイプのもので、十六世紀タイプである。笠もすべて上下に偏平で軒と隅飾の段差が消失したもので、軒が反っている。隅飾の線刻も消失している。台座は無窓の退化型式である。これらの部材のうち二点程は、最近新宅の建設に際して、斜面下の湧水穴（井戸か？）から掘り出されたもの。十五世紀後半から十六世紀前半のものか。付近には「武者屋敷」の通称があったという。

B谷田寺（小笠町川上）

真言宗で廃寺。跡地は現在川東公民館となっている。ここの裏手の山は山林で、斜面に集石がみられ、中世墳墓群があるらしい。登りきった平坦地（裏手の山頂は造成が進行している）に墓地があり、高さ三〇㎝程の中型の十六世紀代のメリハリの少ない一石五輪塔がみられ、周囲に数基の無縫塔と礫堆がある。また登る途中の防空壕の脇に五輪塔（火輪一、地輪一）があり、また蕨手の退化した六地蔵宝幢の笠、風化した六地蔵宝幢の軸らしいものがある。また公民館の入り口付近の覆屋のある三宝荒神？の脇に砂岩製宝篋印塔軸部と緑色変岩五輪塔空風輪がある。十六世紀前半～中葉タイプの大型一石五輪塔、五輪塔火輪などが見られる。五輪塔は十四世紀、宝篋印塔は十六世紀か。

C半龍寺（小笠町城下）

半隆寺は小笠東小学校から南へ急な坂道を登り詰めた台地縁に立地する。現在大師堂が川西地区の公会堂となり、裏手に新しい墓地がある。弘法大師像の傍らに砂岩製宝篋印塔の相輪残欠が置かれている。十五～十六世紀。

D赤堀晏平・春一宅裏墓地（森下家墓？）（小笠町川西）

丘陵斜面に位置する赤堀晏平氏宅の裏手の茶畑の脇に削平され幅が細くなった高まりがあり、その上の一角にケルン状に礫が集められ、周辺に五輪塔空風輪三（砂岩のみ？）・火輪二（砂岩一、変岩一）・水輪片四（緑色変岩三、砂岩一）・地輪四（変岩二、砂岩二）、一石五輪塔一（砂岩製空風輪破片）が一部礫に埋没した状態で祀られている。うち緑色変岩五輪塔はややしっかりした梵字刻み十四世紀前半かそれ以前に遡ると考えられる。また砂岩製五輪塔火輪一（木ホゾタイプ）は十六世紀、一石五輪塔は十六～十七世紀か。

E地蔵堂（小笠町川西城山）

川西部落の地蔵堂が祀られている高台の墓地で、堂内に緑色変岩水輪一点が納められている。やや腰高で凝灰岩質に近い風化石材で、彫りの弱い梵字を刻んでおり十四世紀後半頃か。

F小沢美喜夫氏宅祠脇（小笠町川西城山御堂ケ谷）

丹野川南岸。小沢美喜夫氏宅敷地から狭い道を挟んだ反対に小さな残丘状の高まりがあり、その上に小さな祠が祀られており、センリョウが群生した一角に緑色変岩の五輪塔空風輪一・水輪一、砂岩製宝篋印塔笠・五輪塔水輪一の計四点の部材を重ねた石塔が祀られている。五輪塔部材は十四世紀代と思われ、宝篋印塔笠は花崗岩質砂岩で十六世紀後半の丸隅飾軒上四段軒下退化斜段の小型タイプである。

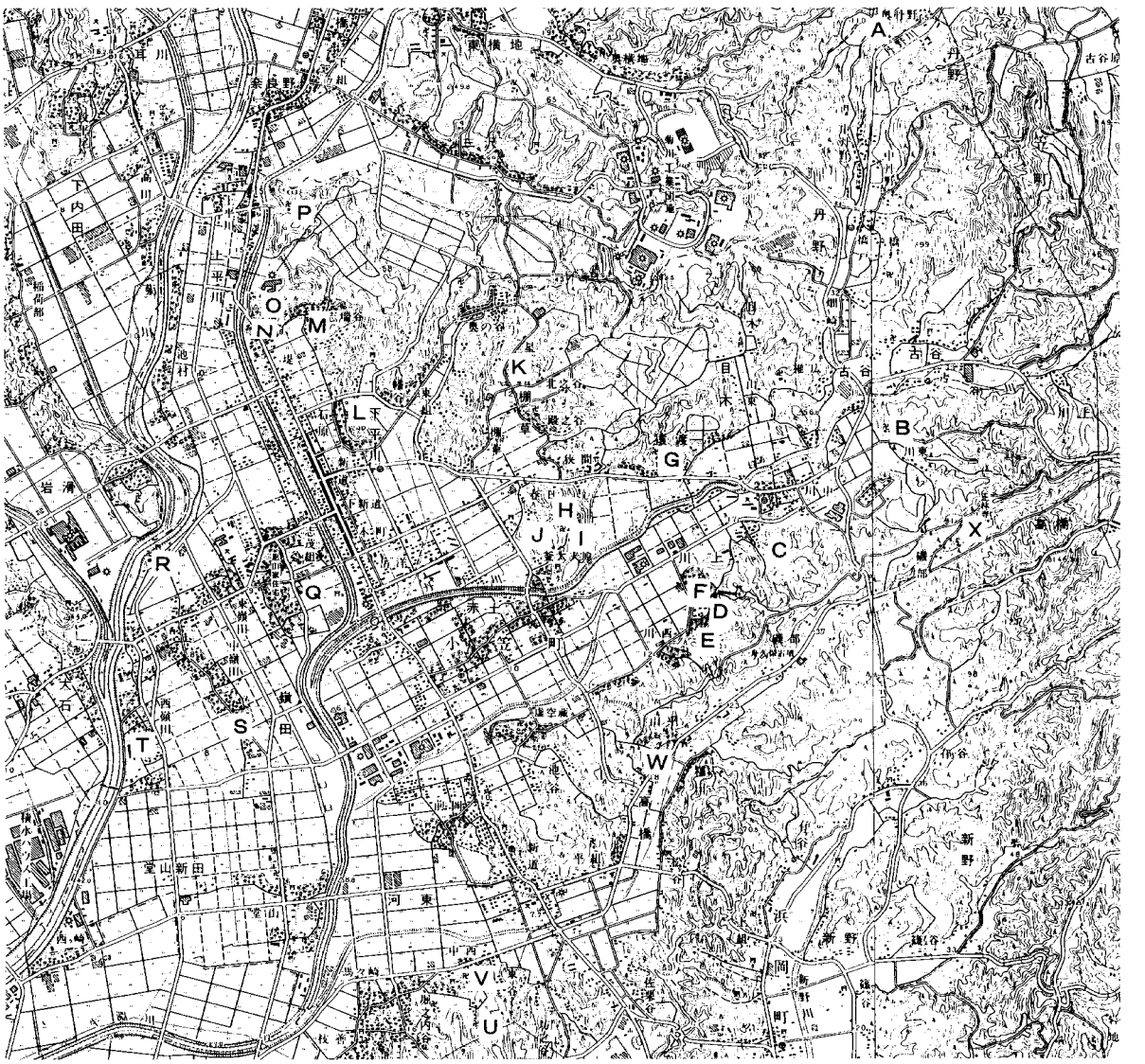
G竜泉庵（小笠町猿渡）

馬頭観音を祀るが現在廃寺となり三協公会堂となっている。またかつて裏山には二基の横穴があったというが現在破壊されている。参道の脇に二つの覆屋がある。奥の一方には、笠・軸・台座からなる六地蔵宝幢があり、蕨手を伴う六角半球笠と、六面に丸彫りの地蔵を刻む軸部、素文六角形板状の台座よりなる。この脇に伏鉢の高い十六世紀タイプの砂岩製宝篋印塔

（2）小笠郡小笠町の中世石造物

小笠町の石塔郡と部材の内訳

番号	地区	名称	宝篋印塔						五輪塔					一石五輪塔				礎盤他	備考	計
			相輪	笠	軸	基礎	台座	計	空風輪	火輪	水輪	地輪	計	大	中	小	計			
A	丹野	野中家裏	3	5	3		4	15										1		16
B	川上	谷田寺			1			1	1	1		1	3	1			1			5
C	城下	半隆寺	1					1												1
D	川西	森下家墓							3	2	4	4	13			1	1			14
E	〃	地蔵堂									1		1							1
F	〃	小沢家		1				1	1		2		3							4
G	猿渡	竜泉庵	1					1											馬頭観音	1
H	赤土	安興寺								1	2		3		2		2		赤堀家	5
I	〃	上ノ段	1	2	2	2		7	1	1	2	1	5							12
J	〃	釜太夫原		1				1											中世墓	1
K	棚草	星ケ谷墓	7	2	2+	1	2	14+	6	2	5	5+	18+					2	和田家	34+
L	平川	好運寺												3		3	6	子安堂より移転		6
M	志味	志味堂	1	1				2												2
N	上平川	林正院		2				2								4	4			6
O	〃	堤城							3	3	3	4	13						松井氏墓	13
P	下平川	法華寺					1	1	1		1	2	4							5
Q	〃	子安堂														1	1		黒田家	1
R	嶺田	長安寺													3		3		村松家	3
S	中嶺田	寺本家													1		1		薬師堂	1
T	西嶺田	地蔵堂	1	1		1		3	1				1			7	7			11
U	河東	法谷寺		1				1		1			1		2		2			4
V	〃	養徳院前	13+	4	3+	1+		21+	5+	1	3+	3	12+			1	1			34+
W	高橋	赤堀家	2				1	3	2	3	4		9					2	一石宝篋印塔	14
X	磯部	正林寺												1					伝今川義忠	1



第4図　小笠町内石塔分布図

相輪一点がある。この隣の覆屋の中には馬の頭蓋骨を納めた箱を祀る。ここからすぐ近くにある川上は、塩街道上の渡河地点で宿場町の跡がある。

H龍昌山安興寺元墓地（小笠町赤土道金ヶ谷）

丹野川北岸、赤土新池北方の南向きの小谷内標高二〇m程に位置する。安興寺境内の無縁墓地に積み上げられた近世墓碑の中に五輪塔部材三（小型火輪一・水輪二）が含まれており、火輪に木ホゾ穴を伴うタイプを含み十六世紀を前後するものと思われる。また古墳群がある安興寺裏山の赤堀家墓地には石龕に一対をなす一石五輪塔二基を納める夫婦墓があり、十七世紀代のものと考えられる。

I赤土上ノ段（小笠町赤土上ノ段）

安興寺境内より六角堂の脇を抜けた東方に火葬場址の高まりがあり、付近の雑木の根本には古い墓地が残されている。墓地の脇に池を掘削する際に多数の掘立柱建物（中世？）が検出されたという。

墓地の一角に三基の中世石塔が祀られており、五輪塔一・宝篋印塔二よりなる。部材の内訳は小型五輪塔部材五（空風輪一（ホゾなし）・火輪一（木ホゾ穴）・水輪二・地輪一、宝篋印塔部材五（相輪一・笠一（①軒上三段軒下二段。線刻直立隅飾　軒上三段軒下二段。横長線刻あり）・軸二）である。このうち逆様に埋没していた宝篋印塔笠一は軒上四段軒下二段、隅飾外反、内抉あり。最上段は露盤表現がある。十四世紀後半～十五世紀初め頃のものと思われる。相輪は宝珠・請花が低く蓮弁表現のあるもので、笠は上下にやや高く隅飾りは薄い軒と境界がなく、外反して大きなもので、十五世紀後半～十六世紀前半のものか。

J赤土釜太夫原（小笠町赤土釜太夫）

赤土安興寺の近くで付近には中世墳墓群があるらしく礫群の点在が見られる。十七世紀代の箱形墓標のかたわらに十六世紀頃の宝篋印塔笠が逆さまに置かれている。

K星ケ谷和田家墓地（小笠町棚草星ケ谷）

星ケ谷棚草城跡より谷を挟んだ北方見晴らしの良い丘陵上の墓地に石塔部材がまとめられている。かつて台地下の水田付近より出土したものを移動したもので、和田家墓地の隅に五輪塔・宝篋印塔・近世碑石墓などが寄せ集められている。五輪塔部材一八以上、空風輪六（いずれも砂岩、硬質のもの一つ。）・火輪二・水輪五（うち一点は緑色変岩で梵字刻む）・地輪五＋（他に破片あり？）計六個体分。宝篋印塔部材一四＋。相輪七片（おそらく四個体分）・笠二片（一～二個体）・軸二？（不明・地輪とまざる）。基礎一（二窓式。十四末～十五世紀）、台座素文のもの二個体分。他に碑石墓、石臼片など。　宝篋印塔相輪は宝珠・請花が低く線刻蓮弁表現のあるもので、基礎や台座からも十四世紀末～十五世紀前半までのもの。五輪塔空風輪は出ホゾを持たないタイプで木ホゾ穴のもの含む。頂部が丸いものとタマネギ形のものからなり、風輪は柱状に近づきつつある。十四世紀末～十六世紀を前後するものと考えられる。

この他に別地点に十六世紀タイプの完形笠一。隅飾突起に段差のない十五～十六世紀タイプがある。

L好運禅寺（小笠町下平川石原好運寺）

牛渕川の東に併走する用水路の東方、南北に長く延びる舌状丘陵の東懐に位置する。臨済宗寺院で、山門の左脇に、黒田代官屋敷墓地嗅剤の近世石塔群が移築されている。中央にやや大型の近世宝篋印塔があり、周囲を箱状近世墓碑が取り巻く。この中に六点の一石五輪塔があり、うち三点は小型だが、三点はやや大型で、「地・水・火・風・空」を刻む十七世紀タイプ。これらのうちには慶長の年号を持つものがあるというが、主体は一六五〇年代からそれ以降のものからなる。なお、代官屋敷の旧墓地には石塔の残余があるという。

M志味堂延命地蔵尊（小笠町上平川志味堂）

小堤城より東方、牛渕川の東に併走する用水路の東方、志味堂集落のある西向きの谷内に位置する。地蔵堂の周囲に墓地が展開している。相羽家

墓地には一石五輪塔を内蔵すると思われる十八世紀前後の近世石龕墓がある。鈴木晃司家墓地には小型宝篋印塔の相輪・笠がある。これは鈴木園芸脇の公民館付近より出土したものという。相輪は頂部を欠損し笠は薄手のもので十五世紀頃のものと考えられる。

N阿弥陀院林正院（小笠町上平川）

小堤城裏手の阿弥陀堂周辺に墓地があり、赤堀家の墓地の傍らに宝篋印塔笠一点が置かれている。軒上四段、軒下二段、薄い軒と隅飾りに段差があり。隅飾りは外反し内抉りを施す。相良町笠名の応永年銘塔（一三九八）の笠に似ており十四世紀末～十五世紀初頭のものか。他に近世十七世紀頃の小型一石五輪塔四片（おそらく三個体分）があるほか、近世タイプの六地蔵宝幢があり、笠のある四角柱状に各面二体の地蔵を肉彫にする。

O小堤城五輪塔（小笠町上平川堤城）

牛渕川の東方、城下橋を渡った地点に標高三六m程の半独立丘と春日神社の中間に位置し、登坂の途中にコンクリートブロックで固められた区画があり、そこに緑色変岩五輪塔二基（完存）・砂岩製寄せ集め五輪塔一基（空風輪が二折し請花消失。あと一個は大型直方体。地輪もしくは軸一）の三基よりなる五輪塔群があり、合計一三部材（うち変岩八）を数える。左塔は一具で丸い頂部＋椀形の空風輪、軒が薄く反った火輪、梵字を刻む水輪、地輪よりなる。中央塔は空風輪が後補とみられ、宝珠に杯形の請がある砂岩製？の空風輪、軒が薄く反った火輪、梵字を刻む水輪、地輪よりなる。五輪塔の傍らに近年建立の碑があり銘を刻む。

「堤城主　天龍二俣城主　松井左衛門慰信薫公
　天龍院殿心應前正大居士　瑞泉院殿
　圓室純妙大姉
天　享禄二年（一五二九）二月三日
瑞　永正三年（一五〇六）十二月四日
昭和六十三年戊辰年三月吉祥日　松井豪隆」

P下平川法華堂墓地（小笠町下平川）

牛渕川の東方、法華寺橋を渡った西向きの谷奥、標高二〇m程の丘陵斜面に位置する。南方の斜面より下には大鹿池をのぞむ。五輪塔空風輪（出ホゾ）一、水輪一、地輪二、宝篋印塔台座（破損）一（二段）。出ホゾのある五輪塔空風輪は十五世紀のものか。

Q子安堂墓地（小笠町下平川下堀）

牛渕川の西方、志茂組の南端の沖積地に位置する。墓地は、近年好運寺に移築され一部が残る。この地には、黒田家（代官）の菩提寺があったとされる。近世位牌墓と石龕（一石五輪塔を収めるものか）が並ぶ。他に船形石碑に三体二段の六地蔵を肉彫した石仏がある。

R長安寺（小笠町嶺田）

曹洞宗井宮山長安寺は菊川合流点の東岸川べり付近に位置する。小笠北小学校の北方にあたる。一石五輪塔が三基あり、本堂裏手の歴代墓地に中型一石五輪塔一。やや離れた民墓に中型の丸み一石五輪塔二個セットがある。いずれも十六～十七世紀前半頃のメリハリのきいた作である。

S寺本家薬師堂墓地（小笠町嶺田）

寺本家は小笠町の議長もつとめた旧家。薬師堂の傍らの木の下に寛文十年（一六七〇）銘の中型一石五輪塔あり。頂部が丸く火輪が台形を呈するタイプである。この種の近世小型一石五輪塔の基準資料として重要。

T西嶺田地蔵堂（小笠町西嶺田地蔵堂）

菊川東岸、西嶺田地区の「お地蔵様」堂の傍らに菊川改修で移築した石塔群を祀る。裏に稲荷社を祀る塚があり、古墳の痕跡か。宝篋印塔笠・基礎・五輪塔空風輪・一石五輪塔などが礎盤や地輪の上に置かれている。内訳は宝篋印塔相輪一・笠一（軒上三段軒下二段。十五世紀末～十六世紀か）・基礎一（十五世紀後半）、五輪塔空風輪一（出ホゾの退化タイプ）・一石五輪塔七（多くは欠損）。相輪は宝珠・請花が低く上下請花に線刻蓮弁表現のあるもので、十五世紀後半のものか。なお西嶺田地区の徳蔵寺は

現在地区の公民館となっている。

U法谷寺（小笠町河東）

曹洞宗。歴代住職墓地の無縫塔群の中に近世碑石墓とともに十六世紀前半タイプとおぼしき中型一石五輪塔二基あり。うち一点は頂部のみ残存。もう一方はほぼ完存。このほか境内庭石中に木ホゾタイプの砂岩製五輪塔火輪一、宝篋印塔笠残欠一、砂岩製宝塔の軸と思われる細長い水輪状の部材一がつみ重ねられている。

V養徳院（小笠町河東中西谷）

浄土宗で高橋川南岸、源助橋の南方、八幡神社の北方に位置する。現在海野昭一氏所有の茶畑の一角の石囲いに小型宝篋印塔・五輪塔の部材多数、三〇個体前後が乱雑に寄せ集められ、いずれも砂岩製で大部分が日坂石だが、花崗岩質砂岩も含まれる。高天神城の落人の墓とする伝承がある。脇に小型の近世墓碑群がある。

部材の内訳は宝篋印塔相輪片一三（七個体以上）・笠四（他に細片、一個の三河砂岩）・軸三〜四（他に細片。うち一個に梵字）・台座一（他に細片）、五輪塔空風輪五（出ホゾ・ホゾ穴・ホゾ穴なし。底部に四角いホゾ穴のある砂岩空風輪あり硬質完形一）・火輪一（他に細片）・水輪三（他に細片。うち一個に梵字）・地輪三（他に細片）、一石五輪塔一（火輪部より上のみ残る。十七〜十八世紀の小型品）

大半は十六世紀タイプだが、五輪塔の一部、宝篋印塔相輪に十五世紀タイプ含む。

W赤堀虎吉氏宅墓（小笠町高橋）

道・水田を挟んだ対岸の丘陵裾部に旧在したものを現在の墓地に移築したもので礫で固めた五輪塔がたっており、砂岩製？の古式のもので、やや つぶれた頂部の丸い空風輪、軒が薄く反りが顕著な火輪、小さい梵字を四面に刻んだ張りのある水輪、破片となっている単弁蓮華の薄い台座片、この礫固めのたもとに全長六〇㎝を超える大型の宝篋印塔相輪がある。このほか緑色変岩五輪塔（空風輪一、水輪二）、砂岩製五輪塔（火輪一、水輪一）がみられ、十四世紀〜十五世紀前半のものとみられる。内訳は硬質砂岩製の大型五輪塔反花座・大型相輪。梵字あり。しかし地輪欠く。砂岩製五輪塔空風輪二（大・小）・火輪三（本体三、別地点一、うちホゾ穴二）・水輪四（うち梵字のあるもの三基）、地輪なし。台座一（二つに折損するが側面完存。見事な反花座を伴う。）宝篋印塔相輪二（うち一点は全長六〇〜八〇㎝の長大なもので二つに折損している）。

また同じ墓地内には珍しい一石宝篋印塔二基が祀られている。軟質砂岩で相輪はない。円窓のあく十六世紀タイプの宝篋印塔で、基礎にあけられた二窓には文字銘が認められる。

X正林寺伝今川義忠塔（小笠町奥磯部）

禅刹小笠町正林寺の裏手の高台の道路脇の覆屋の中に台石を伴う日坂石製の大型一石五輪塔が安置されており、本体四九．七㎝を計る。薄手で反りのある軒と長大化の途上にある地輪が特徴で、文明八年（一四七六）春に横地・勝間田氏との戦闘で傷死した今川義忠墓塔と伝承し、正林寺の前身である昌桂寺が創建された永正十四年（一五一七）頃の造立が推定される（河合一九九八）。

いる。五輪塔と宝篋印塔の部品からなるが、当初のセットと考えられるのは中央塔だけで、両脇のものとあわせ少なくとも五～六基分の石塔部材を寄せ集めてつくられている。左から順にA・B・C塔とすると、

A塔上部はセットとみられる輝石安山岩製の小型宝篋印塔相輪・笠からなる。笠は隅飾突起が直立し、笠上三段＋露盤の表現があり、笠下二段。十四世紀末葉前後のものと思われる。

A塔下部の大型五輪塔火輪・水輪・水輪は砂岩製で、水輪がタマネギ形で十四世紀前半～後半。

B塔の大型五輪塔空風輪・火輪・水輪・水輪・地輪も砂岩製で、空風輪が大型化しており無臍で、火輪の丈が高くなり、水輪が臼形に近く、十四世紀後半から十五世紀前半頃と思われる。

C塔の小型五輪塔空風輪・火輪・水輪・水輪は凝灰岩と砂岩からなり、空風輪は十四世紀前半頃の特徴を示し、水輪には梵字の表現がある。鎌倉時代後期のものであろう。

大型五輪塔地輪は砂岩製で、上面に火葬骨の納入孔と思われる円柱形の孔がある。鎌倉後期頃か。

f 清浄寺（榛原町道場）

勝間田川河口西岸、海岸近くの丘陵斜面に位置する。当寺は弘安六年（一二八三）頃時宗の道場として開基されたと伝え、横地一族と同族の勝間田氏の菩提寺。寺には過去帳があり、冒頭に横地氏の連名があるが、いずれも「横地…阿弥陀仏」と阿弥陀名号がある。清浄寺境内にも付近より持ち込まれた宝篋印塔の傘部が三点程あるが、ここから裏山に登ったところに勝間田氏一族の墓所とされる石塔群がある。伊豆安山岩製の宝篋印塔部材（所謂「混合式塔」含む）が八基並び、基礎に「観応貳年（一三五一）願主　智阿弥陀佛四月四日」「住一房　建武四年（一三三七）　正月八日　奉造塔　文和二年（一三五三）　四月八日」と刻むものがある。これらの台座は立ち上がりが急でやや退化の進んだ複弁反花座、格狭間表現のない框座の様相など十四世紀中葉～後半の基準資料である（川勝一九七〇・一九七三，尾形一九八八）。

g 平田寺（相良町大江四六〇平田）

萩間川河口より北岸、水田低地に張り出す丘陵裾部に位置する。付近には大雨神社・波切不動等あり。当地は相良氏本願の地。平田寺は臨済宗妙心寺派で、足利尊氏の叔父にあたる龍峯宏雲の開山、上杉憲藤の開基と伝える。裏山墓地にあった石造宝塔は現在収蔵庫内に移転。緑色凝灰岩（相輪は砂岩で補修）製で全高一九五㎝，相輪・笠・塔身・基礎の四部材からなる。相輪はタガ状の五段の九輪が特徴だが、上部は砂岩製の部材で補われている。笠の上部は請花露盤に線刻で框座・格狭間の表現がある。方形を基調とする特異な塔身には、各面二窓ずつ舟形龕を備え類例がない。また基礎に格狭間の表現あり線刻で全面を彫り窪めていないのが特徴。格狭間の内部に「延慶三年（一三一〇）庚戌正月　日　願主沙弥如蓮と二行の銘文が刻まれている（川勝一九七三，本間一九九八）。紀年銘塔の確かな例としては遠江最古で、銘文中の「願主沙弥如連」に関しては諸説あるが、『相良町史』では相良庄を本願とする御家人相良氏一族のうち、肥後人吉庄西遷の後も相良庄に残留した相良頼綱の供養塔であろうと推定している。

裏山墓地にはこのほか折衷様式塔のごときものもある。また裏山墓地には一石五輪塔や近世の位牌形板碑などがある。かつて寺の北方の畑地に龍峯宏雲の墓を祀る塔頭があったという。しかし明治に廃寺となり、その後周囲の畑地の蚕食が激しくなったため、大正十三年頃境内への移転に際し地下から古瀬戸灰釉唐草文梅瓶の口縁を打ち欠いた蔵骨器が出土し、同時に銅筒花活・銅双耳瓶・銅尊形仏花瓶、鉄釉文琳茶入、竜泉青磁三足香炉、竜泉青磁雷文縁碗、銅六器などが伴出している。

h 笠名宝篋印塔（相良町笠名西ノ谷口庚申堂脇。椀貸せ松（笠名西ノ谷八三一番地）旧在）

笠名西ノ谷口の庚申堂脇にある。もと椀貸せ松の所にあったと伝える。

一具と思われる砂岩製の宝篋印塔笠・基礎の間に別個体の小型砂岩製基礎が挟まれて積み重ねられている。単窓の基礎の銘文に「□（忻・性・恠？）翁栄公　禅定門　應永五年（一三九八）三月廿二日」とあり。これと組み合う笠は軒上六段で露盤は二窓の框座を伴う。軒下二段。軒は薄く隅飾突起は若干外反しする。付近からは唐の開元通宝から明の洪武通宝（一三六八－一三九八）まで九種の渡来銭が出土している。一説に笠名郷は明徳年間（一三九〇～一三九四）に畠山右衛門佐の所領だったといい、この宝篋印塔は畠山氏関係のものかと思われる。同様な形態の基礎は本川根町谷畑宝篋印塔にも見られる（『相良町の文化財』）

i比木正福寺宝篋印塔（浜岡町比木正福寺）

小型の小豆色をした輝石安山岩製の宝篋印塔基礎のみが保管されており、「弥天高公　禅定尼　至徳元年（一三八四）甲子　六月十六日　死去」の銘がある（『浜岡町の文化財』）

j医王寺石塔（島田市船木（岡田））

山門前に輝石安山岩製の五輪塔地輪とおもわれる部材があり、「奉為当寺□　十二住持□□　大徳造立所也　応永廿四年（一四一七）丁酉　十□□」銘がある。墓地には緑色変岩製の五輪塔部材が見られるほか石龕の内部に一対をなす一石五輪塔や石製位牌を納めたものが数多くある。

k谷畑宝篋印頭（本川根町谷畑）

丘上に一基分の宝篋印塔部材が散乱し、相輪宝珠部・軒部・基礎よりなる。基礎は単窓のもので、三光寺址や相良町笠名の応永五年（一三九八）銘の宝篋印塔基礎に類似する。

l小長井宝篋印塔（榛原郡本川根町森平小長井）

大井川の上流、本川根町（旧東川根村）の小長井城跡に近い茶畑の一隅に所在する。安土・桃山時代の武将である小長井長門守の墓と伝承する。宝篋印塔は総高一九四cmを測り、相輪・笠・軸・基礎・反花座・框座の六部材よりなり、基礎に二区の窓を設け、台座（反花座・框座）を伴う関東型式を示す。基礎正面の右輪郭内に「永徳三季」（一三八三）年銘が確認され、左輪郭内にも月日を刻したと思われる痕跡があるが判読されていない（本間一九九八）。この宝篋印塔に接近する規格の砂岩製部材が菊川町三光寺跡裏に見られ、基礎に「金阿弥陀仏　應安六（一三七三）年一月四日」銘がある。　周辺に十数基みえる五輪塔についても、十四世紀末から十五世紀代を中心とする時期の所産と思われる。

m観音寺跡（掛川市上西郷溝江）

永正十五年（一五一八）徳扶宗建の開基になる曹洞禅寺と伝える。墓地に一山一寧の墓塔と伝える五輪塔地輪・水輪・宝篋印塔笠を重ねた寄せ集め塔がある。このうち五輪塔地輪は緑色片岩製？で「仰謄祀斯者　永清滅於罪垢　乃至法界全生　同徳智者也　冥莱在丙戌　貞和二稔（一三四六）朱夏　王戌菩薩戒　光明心」銘がある。また小豆色の輝石安山岩製宝篋印塔笠は軒上六段、軒下三段で、非常に低い隅飾が特徴である。永仁四年（一二九六）銘の箱根山宝篋印塔は軒上七段軒下三段で最上段は露盤となっており、観音寺塔はこれに若干後続すると考えられる。軒が厚いなどやや新しい要素も見られるが、それでも一三〇〇年代のごく早い段階を降らないと思われる。

n安里山長福寺（掛川市本郷字古城）

神亀二年（七二六）行基の開創を伝え、元慶八年（八八四）円珍が中興し郷中に多くの別院を建てたという。寺の裏山には古瓦の散布が見られ、また奈良県大峯山金峯山寺蔵王堂に現存する鐘に「天慶七年（九四四）六月二日　遠江国佐野郡原田郷長福寺鐘」銘がありおそらく天台寺院として創建され、中世に南都系宗派によって中興され行基伝承が付与されたようだが石塔造営時の宗派は不明である。

十五世紀に曹洞宗の義演、臨済宗の恵明を経て円通院の松堂高盛に譲られ、開山に師の大輝霊曜（一四六六没）、二世に古山崇永を請じ、自身が三世として事実上の開山となり十五世紀後半～末以降曹洞禅寺となり、明応

年間（一四九八）の今川氏の侵攻や大津波の混乱の中で地域の帰依を集めた。松堂は『円通松堂禅師語録』『碧巌録』を残したことで知られる（掛川市史編纂委員会一九九七）。

山門脇地蔵堂前に曽我五郎時致の供養塔と伝え、淡色の輝石安山岩製？で異常に高い台座を伴う推定全高三m近い大型宝篋印塔がある。笠は軒上六壇＋高い露盤、軒下三段で、細長い円筒形の相輪が径の大きな請花に乗るのが特徴で、十四世紀末葉前後の造立と思われる（日野一九六八 本間一九九八）。他に小型の六地蔵宝幢、一石五輪塔等もある。大部分は砂岩で、本堂裏の墓地内にも残欠が認められ、歴代住職墓地には輝石安山岩製の宝篋印塔笠、五輪塔空風輪がみられる。また池横に梵字を刻む花崗岩製大型五輪塔がありもと長福寺古墳の上に完形で立っていたが、崩落で空風輪・火輪を失っている。

o照月寺（掛川市本郷（原谷））

原野谷川東岸の丘上に位置し、原野谷川流域の原荘を所領とした地頭原氏の菩提所と伝える石塔群が現存する。照月寺は長福寺の旧末寺で、もともと墓寺のような役割であったらしい。墓地中央に花崗岩製大型五輪塔（ダルマ状の空風輪、球状の水輪、火輪に梵字あり。現在水輪は逆位となっている）があり、砂岩製大型宝篋印塔笠、大型宝篋印塔台座反花座が遺るほか、蓮弁線刻反花座、軒上四段軒下二段笠、中小の五輪塔・宝篋印塔の部材が置かれている。笠は軒上四段、軒下無し？、台座は反花座の部分のみが残り、隅弁側面三弁をなし曽我十郎塔の反花座と類似する（日野一九六八，本間一九九八）。

p宗塔庵曽我十郎宝篋印塔（掛川市下本郷）

宗塔庵は本郷の丘上に所在し、現在廃寺となっているが、長福寺の末寺であったという。茶畑の一隅に曽我十朗祐成の供養塔と伝わる宝篋印塔が一基立つ。長大化しつつある偏平な反花座を伴う宝篋印塔。隅飾をすべて欠損しているが、相輪は宝珠請花が無い点を除けばタガ状で細い。推定総高一六一cmで、凝灰岩質？の石材が使用されており、細部形態の特徴からみて伊豆半島で製作された部材が搬入されたと見られ、特に反花座の蓮弁が長く立ち上がる点は伊豆半島南部の下田周辺の例に類似している。これとほぼ同形態で僅かに小規模な宝篋印塔部材二個体分前後が隣接する本郷照月寺の原氏墓地に見られる（日野一九六八，本間一九九八）。他にも周辺から集められた小塔の残欠部分が乱積している。

q掛川城下層墳墓群（掛川市掛川）

掛川城本丸下層より発見された、十六世紀初頭の本丸普請以前の集石墓群で、当地付近には懸川山神宮寺なる寺院があったようである。現天守曲輪の山稜部を背後に控えた谷奥に南北約二〇m，東西約三〇mの範囲に及ぶと考えられる。五輪塔・宝篋印塔などの石塔類も攪乱された状態で多数発見され、一部は掛川城普請の際の暗渠に転用されていた。集石中出土の蔵骨器などから十三世紀初頭には造墓が開始されたと考えられる。石塔類は著しい攪乱が見られないことから、朝比奈氏が掛川城を築いた永正・大永年間（一五〇四－一五二八）の直前まで墓地として機能していたと思われる。集石墓上からは切り石を用いた墓石の基壇部が数基並列した状態で発見された。上部の石塔は失われていたが、規模・形態とも周辺の集石墓を凌駕しており、朝比奈氏以前の当地の領主・僧侶層の墓地と考えられる。

石塔部材には宝篋印塔笠・五輪塔空風輪・一石五輪塔などがみられる。このうち一部が報告されており、宝篋印塔笠は花崗岩質・凝灰岩質砂岩の両種が見られ、花崗岩質のものには隅飾突起にΣ状の線刻を施している。一石五輪塔は花崗岩質砂岩のみからなる。五輪塔空風輪は頂部が円錐形に退化し出ホゾを伴うもので凝灰岩質砂岩。築城（一五一三頃）直前の十六世紀初頭の石塔群を含むと考えられ年代決定の資料として重要である（掛川市教育委員会一九九八）。

r角皆英明氏宅墓地（掛川市子隣一一二番地）

角皆英明氏宅南側にある同家墓地には、石龕三基、一石五輪塔一〇基前

後がみられる。「寂〇〇〇〇〇」等の銘のあるものがある。すべて砂岩製とみられ、石龕に五輪塔を納めるものが多い。また単独でホゾ孔のない五輪塔の空風輪がみられるほか、一石五輪塔風の五輪塔も見られる。

s 用福寺橘逸勢供養塔（袋井市上山梨八一五 用福寺）

山梨地区で「山梨様 橘様」として祀られてきた五輪塔群である。嵯峨天皇・弘法大師とともに日本三筆の一人に数えられた橘逸勢（？～八四二）は承和の変（八四二）の主謀者として伊豆に流される途中に遠江で病死したが、五輪塔群はその供養塔と伝えている。薬研彫りの梵字を刻む緑色変岩の五輪塔部材に全く同型・同法量の砂岩製部材が混在して見られる（『袋井市の文化財』）。

t 積雲院源朝長墓（袋井市友永六四八 積雲院）

積雲院の入口に源義朝・兄の義平・朝長の三人を祀ったと伝える三基の五輪塔があり、いずれも鎌倉後期の緑色変岩製で中央のものが最大である。付近には他の石塔部材も少数ある。

平治の乱（一一五九）で平清盛に破れた源義朝らは東国に落ち延びて再起を計ろうとしたが、途中、次男朝長（源頼朝の兄）は右足に矢傷を受けて美濃国青墓（岐阜県大垣市）で自害、従者の大谷忠太は朝長の首を自身の郷里三川に密かに持ち帰り埋葬したと伝える。建久元年（一一九〇）、頼朝が上京に際しこの地に立ち寄り兄朝長の墓へ参ったという。毎年八月十五日夜、慰霊のため、友永の御沙汰神社から積雲院まで練り歩く祭礼が行なわれている（『袋井市の文化財』）。

u 一ノ谷中世墳墓群とその周辺（磐田市見附）

磐田原台地から伸びる丘陵末端のほぼ全域を墓地とした遺跡である。丘陵の南端部は過去の土砂採集によって不明であるが、一五五〇〇㎡の調査を行なった結果、ほぼその全容が明らかになった。ここからは、八八八基の墓が発見され、塚墓、集石墓、土坑墓、「コ」の字形区画墓などからなる。造墓は十二世紀末から開始され、十七世紀初頭まで連綿と墓地が営まれている。

石塔は十四～十六世紀にかけて営まれたもので、五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔の部材が二四二点出土している。これらは西斜面を中心に一部東斜面の南端部、北部に限って出土しているが、ほとんどが元位置を失っている。石塔材は緑色変岩、輝石安山岩、花崗岩質砂岩、凝灰質砂岩のものがみられる（伊藤一九九三）。八三二号墓出土五輪塔では木ホゾ連結型の組み合わせが確認できる（加藤一九九三）ほか、五輪塔の地輪下に埋納壙を設け、墓としているものや、破砕された石塔部材を集石墓としているものなど、造立当初のものと再利用のものがある（磐田市教育委員会一九九三）。

西光寺は中世見付宿にあたる磐田市加茂川通に所在し、一の谷中世墳墓群との関連が指摘される四光寺（蓮光寺、宣光寺、省光寺、西光寺）の一寺である。境内に輝石安山岩製宝塔があり現在相輪・基礎が失われ、砂岩製宝篋印塔の相輪を乗せている。笠までの現存高九七㎝、本来一七〇㎝前後の塔と推定される。笠は上部に露盤を設け輪郭を二区に分け輪郭内に格狭間を施し、下部には三重の斗栱型を設ける。塔身にはの金剛界四仏種子を梵字で刻する。軸部には高欄、首部に柱形を四本設ける。反花座は框部には輪郭を二区に分け輪郭内に格狭間を配し、反花は複弁二葉で線刻にて重弁とし、関東型式特徴を備える。同所の解説板によるとかつて石田茂作氏が訪れ、同寺開基の文永二年（一二七三）頃の造立と推定したというが、鎌倉市東佐介・嘉暦二年銘（一三二七）宝塔よりも塔身の扉形が省略され、格狭間の形骸化が進行している点より南北朝初め頃の造立と推定される（本間一九九八）。見性寺の無縁墓地には十四世紀代の輝石安山岩製五輪塔部材が一具完存で積み上げられている。

v 鎌田兵衛石塔群（磐田市鎌田）

太田川西岸の台地縁に位置する鎌田兵衛の居館の伝承地で付近の堂内に緑色変岩製五輪塔が三基分以上集積されている。火輪が高く十四世紀初頭前後のものと思われる。これらのうちにかつて永仁七年（一二九九）銘が判

読されたというが確認できない（日野一九六八）。このほか砂岩製や花崗岩製の五輪塔部材が見られるほか、凝灰岩質砂岩の大型宝篋印塔の部材が見られ、十五世紀代のものと考えられる。

w元島遺跡（福田町豊浜）

太田川下流域で発見された中世港湾跡で、標高二m前後の海岸に近い水田下より発見された。貝塚や網錘などが多数出土していることから、漁業関連あるいは沿岸海上交通に関わる中世遺跡になる可能性が考えられる。集落に伴って木棺、曲げ物などを転用した埋葬棺などの中世墳墓群が確認されている。木棺の側板や底板が確認された土葬墓や火葬墓がみられる。集落部と重なって検出され、散在して集中が見られないことから、屋敷地に伴う屋敷墓と思われる。副葬品としては渡来銭、かわらけが見られ、渡来銭の時期から十五世紀末～十六世紀前半の墳墓と考えられる（静岡県埋蔵文化財調査研究所一九九五）。石塔部材は宝篋印塔笠二、基礎一、一石五輪塔一の四個体が出土し、いずれも花崗岩質砂岩である。このうち笠の一点には隅飾突起にΣ状の線刻を施し掛川城本丸下層出土品に類似することから一五〇〇年を前後する年代が推定される。なお本遺跡は明応四年（一四九八）もしくは永正（一五一〇）の大津波で壊滅した可能性が高く、出土した宝篋印塔笠はこのとき倒壊した可能性がある（桃崎一九九九）。

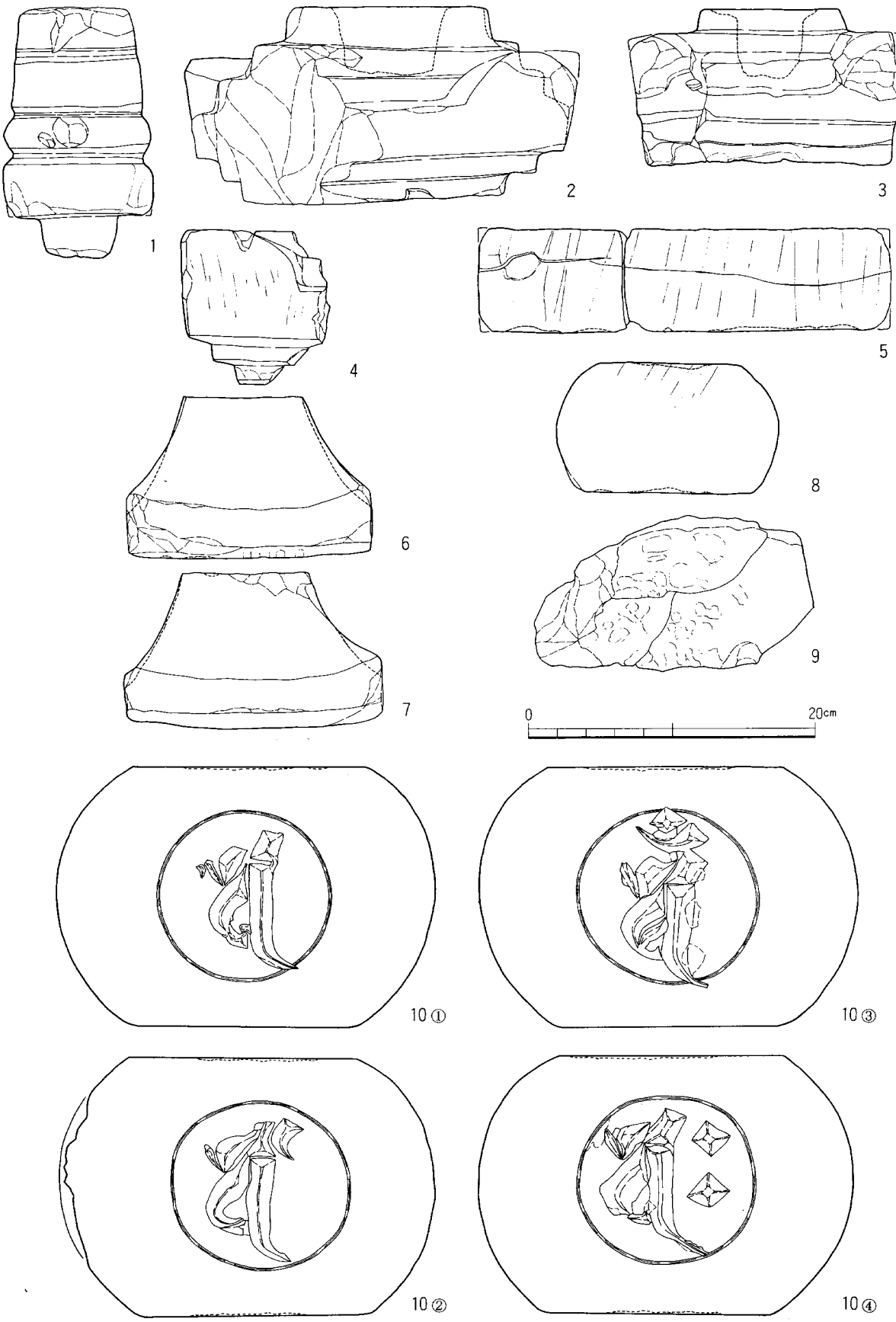
x下石切宝篋印塔（春野町豊岡字下石切）

町道の傍らにあり、「五輪さま」と呼ばれ、植田の酒井利明家により祀られている。ほぼ型式を同じくする二基の宝篋印塔で、角柱状の相輪、隅飾突起のΣ状の線刻、軸部の円窓など掛川城下層や元島出土のものに類似し一五〇〇年前後から以降の造立と推定される。『掛川誌稿』の「植田村」の項によると、「那須与市屋敷跡」が石切境の田京にあり、『太平記』にみえる足利方の那須遠江守の屋敷と推定されている。勝坂守山の鈴木房治家に伝わる江戸時代の「森山鎮守熊野権現灌頂濫觴記」によれば、大功（＝豊岡の大向田京の那須与市屋敷跡と接する）に鎌倉隼人なる落人が住み、その娘を永正三年（一五〇六）森山に土着した鈴木源右衛門の息子誠助が嫁として迎え、村発展の礎を築いたという。かつて、下石切には七軒の家があり、今も「長者屋敷」の通称を残す（春野町史編さん委員会一九九四）。

y行興寺熊野墓（豊田町池田）

天竜川東岸の豊田町池田に所在する時宗寺院で、謡曲「熊野」で著名な熊野御前及びその母の墓と伝わる完存の宝篋印塔が小堂内に安置され現在も信仰の対象となっている。この二塔以外にも周辺から集められた宝篋印塔残欠や一石五輪塔がともに所在する。「熊野の墓」は総高一五三㎝、「熊野の母の墓」は総高一六五㎝を測る。後者の基礎が縦長で、相輪がエンタシス状に膨らむ点以外両塔は同様の特徴を備えいずれも輝石安山岩製である。反花座は框部に輪郭二区を施し、反花は平面的で線刻に近いものとなる。塔身は、各面に輪郭を施し輪郭内に光背付きの仏像を彫出する。笠は段形上五段下二段で最上段を露盤とし、輪郭二区を施す。隅飾は二弧を巻き、輪郭を施す。典型的な関東型式塔である。「熊野の墓」塔は小山町甘露寺の応永七年（一四〇〇）と法量・形態が近く、これに後続するとみられ、両塔は一四〇〇年代の前～中葉に造立されたものと考えられる（黒田一九三〇，本間一九九八）。

※引用参考文献については、第五章論考「横地城周辺における中世石造物の展開とその意義」の文末引用参考文献・注釈を参照願いたい。



第6図　1. 奥横地　慈眼寺 ①

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
1慈眼寺	1—1	[17.4]	—	—	[7.6]	3.3	3.7	2.8	—	—	9.1	10.3	10	6.7	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
1慈眼寺	1—2	13.5	6.6	6.7	3.4	3	13.3	9	26.5	17.9	4.7	8.3	凝灰岩質砂岩
1慈眼寺	1—3	10.7	6.1	6.9	1.8	2.7	9.4	4.9	18.3	16.8	4.8	7.3	凝灰岩質砂岩
1慈眼寺	1—4	[10.6]	—	4.2	3.3	3.3	—	8.3	[10.2]	[2.8]	—	—	凝灰岩質砂岩

石塔・礎盤　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
1慈眼寺	1—5	7.2	[26.8]	[26.5]	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
1慈眼寺	1—6	11.1	7.8	3.3	4.3	8.7	17	—	—	凝灰岩質砂岩
1慈眼寺	1—7	10.7	7.3	3.4	4.1	8.8	17.8	—	—	凝灰岩質砂岩

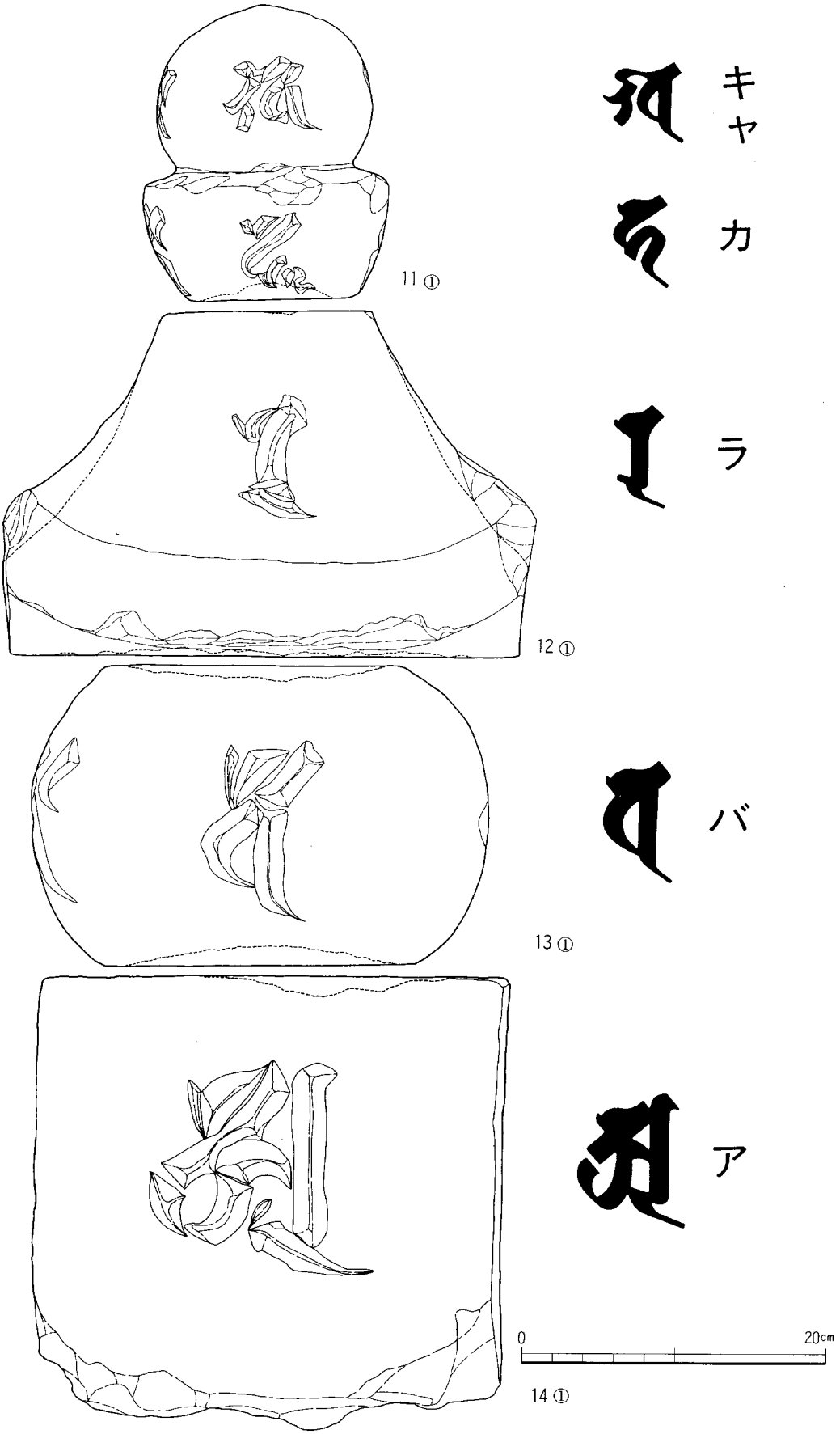
五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
1慈眼寺	1—8	9.1	9.8	15.4	11.6	凝灰岩質砂岩
1慈眼寺	1—10	18.1	15.6	26.3	14.9	凝灰岩質砂岩

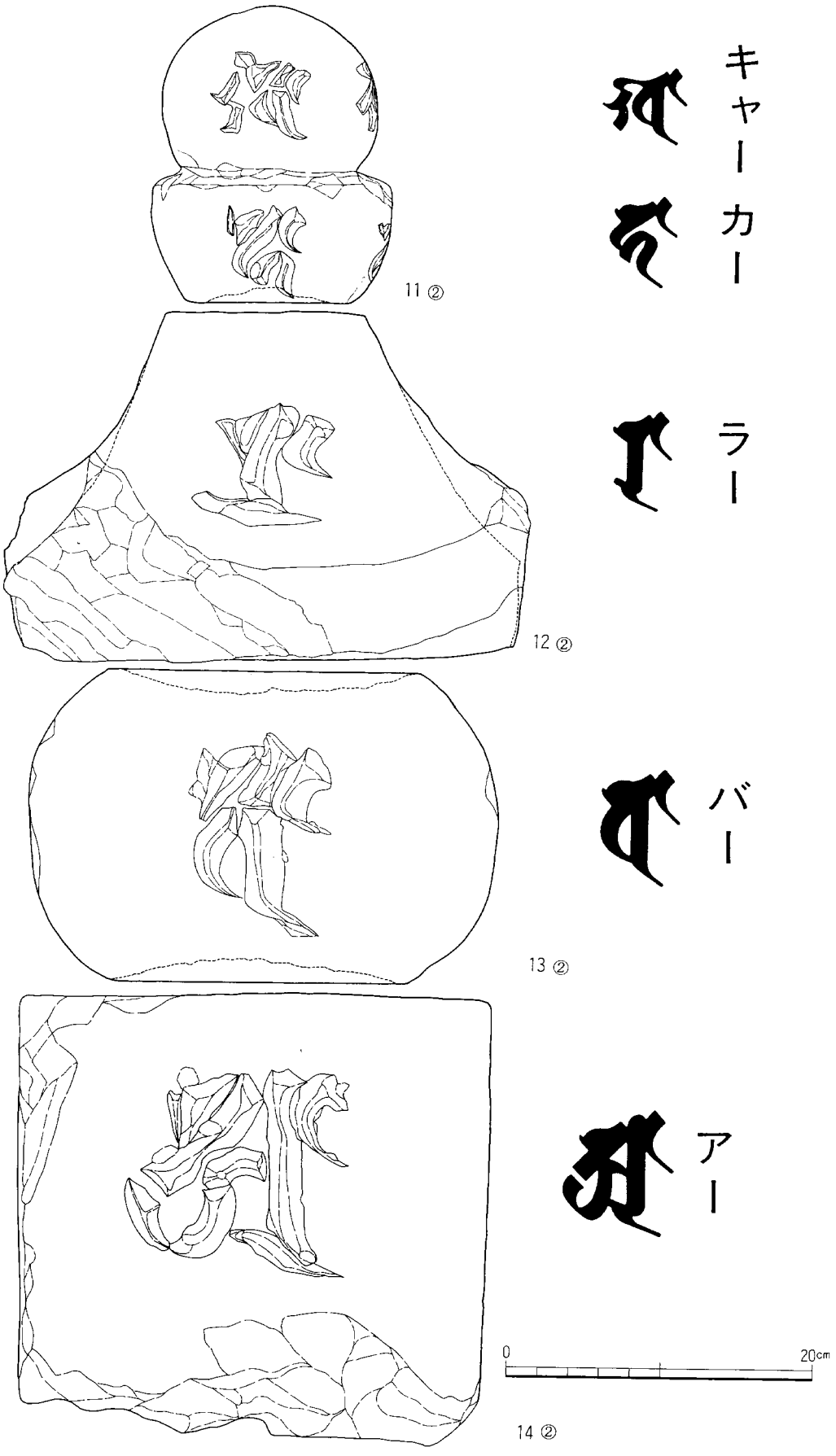
五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
1慈眼寺	1—9	[10.5]	[19.1*]	—	凝灰岩質砂岩

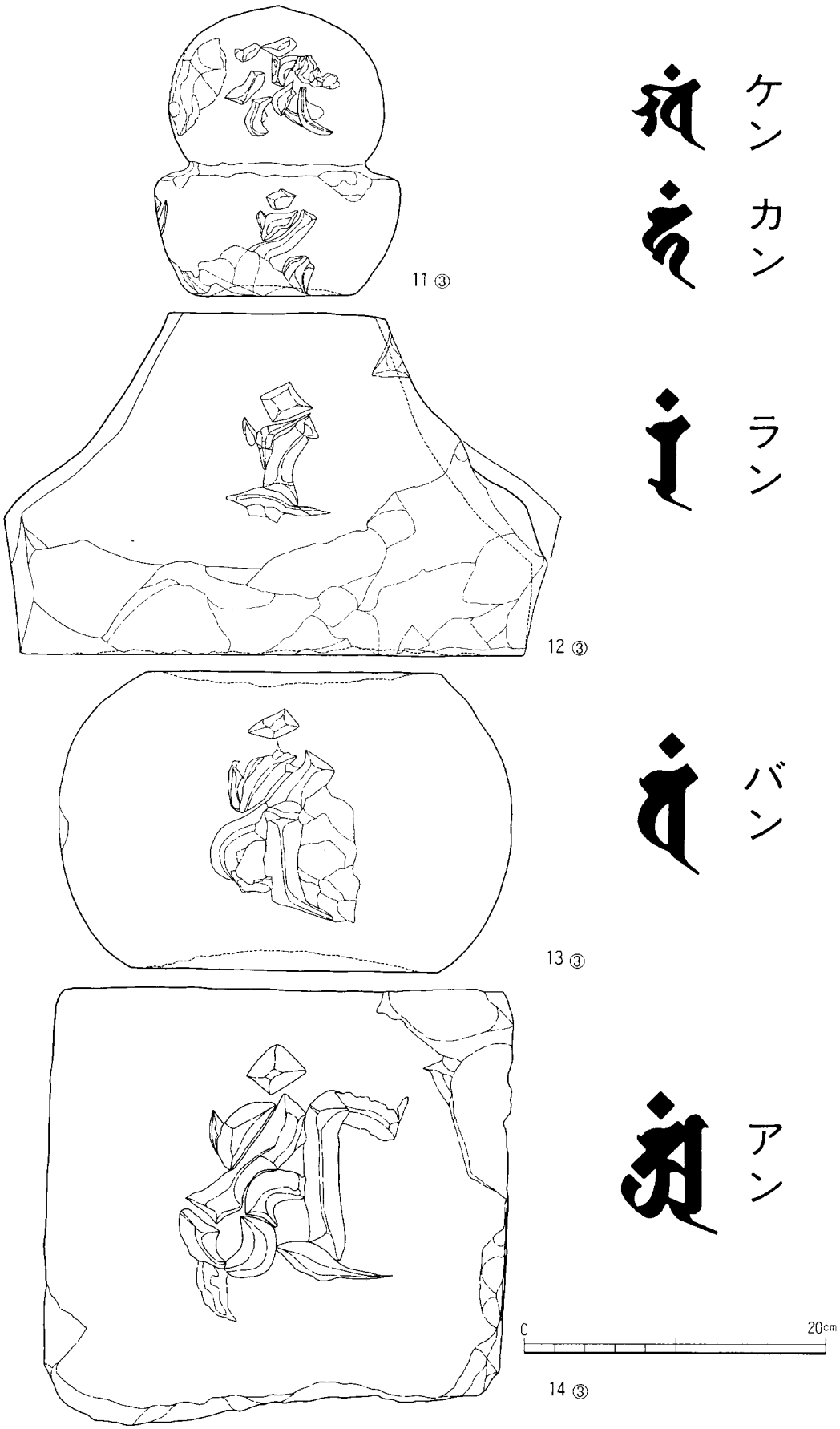
*残部最大幅を示す。



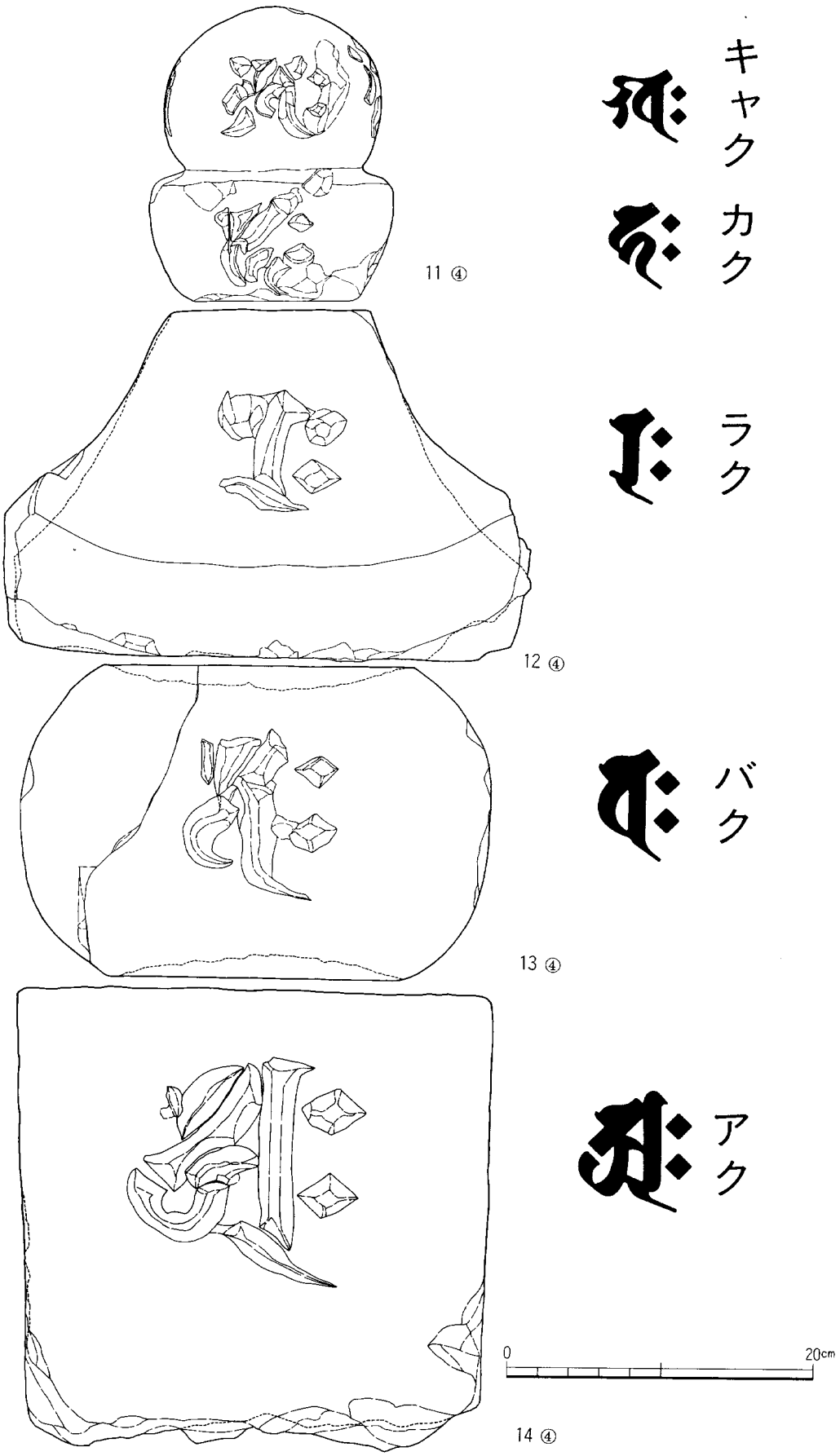
第7図　1. 奥横地　慈眼寺 ②



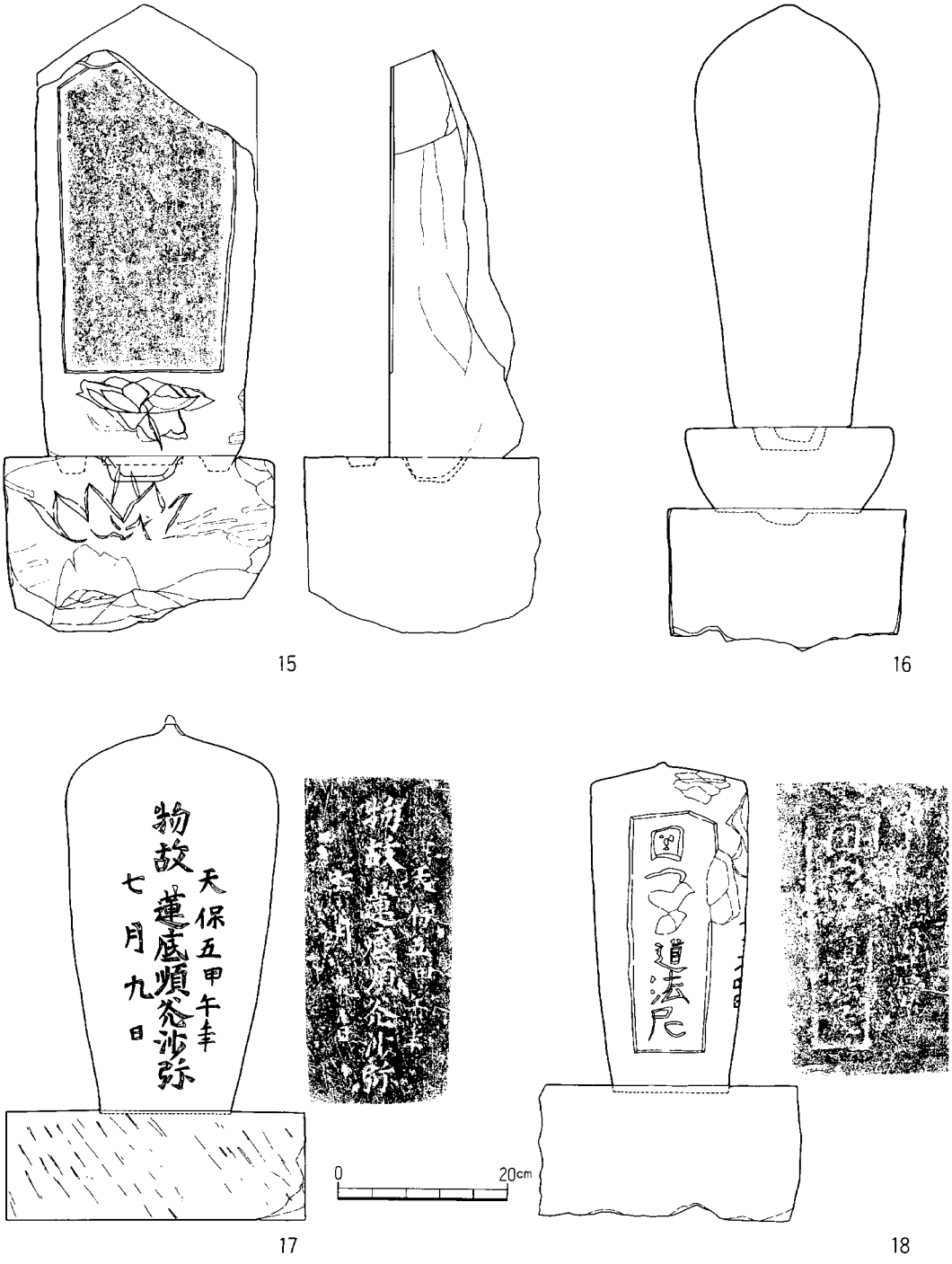
第8図　1. 奥横地　慈眼寺 ③



第9図　1. 奥横地　慈眼寺 ④



第10図　1. 奥横地　慈眼寺 ⑤



第11図　1. 奥横地　慈眼寺 ⑥

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
1慈眼寺	2—11	19.3	10.9	8.4	—	14.1	11.6	15.9	—	緑色変岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
1慈眼寺	2—12	22.5	16.2	5.4	10.9	13.8	34.8	—	—	緑色変岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
1慈眼寺	2—13	19.6	19.1	29.9	20.3	緑色変岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

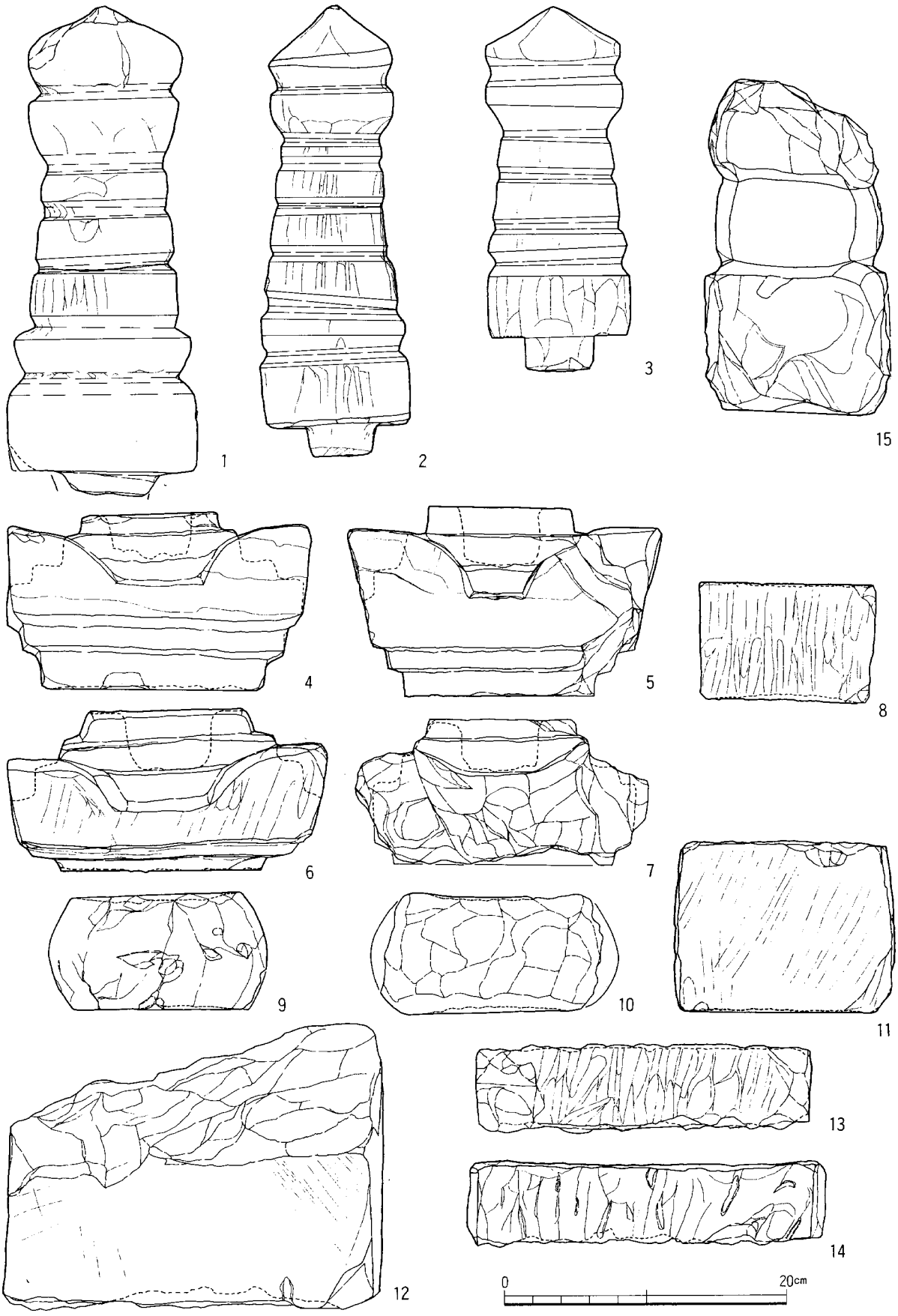
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
1慈眼寺	2—14	29.6	30.6	30.4	緑色変岩

無縫塔・その他　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	塔身高	受花高	台座高	最大径	基部径(幅)	受花径	台座幅	石材・備考
1慈眼寺	6—15	[34.2]	23.8	—	10.2	[13.0]	11	—	16	凝灰岩質砂岩、碑石墓
1慈眼寺	6—16	[37.1]	24.9	4.7	8.5	10.8	6.5	12.3	14.1	凝灰岩質砂岩
1慈眼寺	6—17	[29.2]	22.7	—	6.5	12.4	7.6	—	17.6	輝石安山岩？*1
1慈眼寺	6—18	[26.8]	19	—	7.8	9.2	6.8	—	17	泥岩？*2

*1：天保五(1720)年　七月九日。
*2：明暦九(1663)年　二月二十四日。

2、 延命段



第12図　2. 奥横地　延命段

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
2延命段	1	34.5	6	5.1	11.5	3.5	6.7	1.5	10.9	10.5	10.4	12.4	13.2	8.5	凝灰岩質砂岩
2延命段	2	31.8	5.8	3.7	11.9	3.3	5.3	2.3	8.7	8.7	9.4	10.2	10.5	5	凝灰岩質砂岩
2延命段	3	25.7	4	4.6	9.5	2.5	4.3	2.4	9.5	9.7	8.8	9.5	10	4.9	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
2延命段	4	12.4	4.7	4.3	3.3	4.3	9.6	7.3	21	15.7	3.2	6.2	凝灰岩質砂岩
2延命段	5	13.3	6	5	3.9	3.4	10	9.5	20	13.3	4	6	凝灰岩質砂岩
2延命段	6	11.3	6.3	4.6	2.3	1.9	10.8	8.4	21.6	14.1	4.2	7.7	凝灰岩質砂岩
2延命段	7	10.2	3.7	—	3.5	2.5	10	—	20.5	15.3	3.6	5.7	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
2延命段	8	8.1	12.3	12	凝灰岩質砂岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
2延命段	9	8.1	12	15.4	12.2	凝灰岩質砂岩
2延命段	10	8.1	12.5	—	12.5	凝灰岩質砂岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

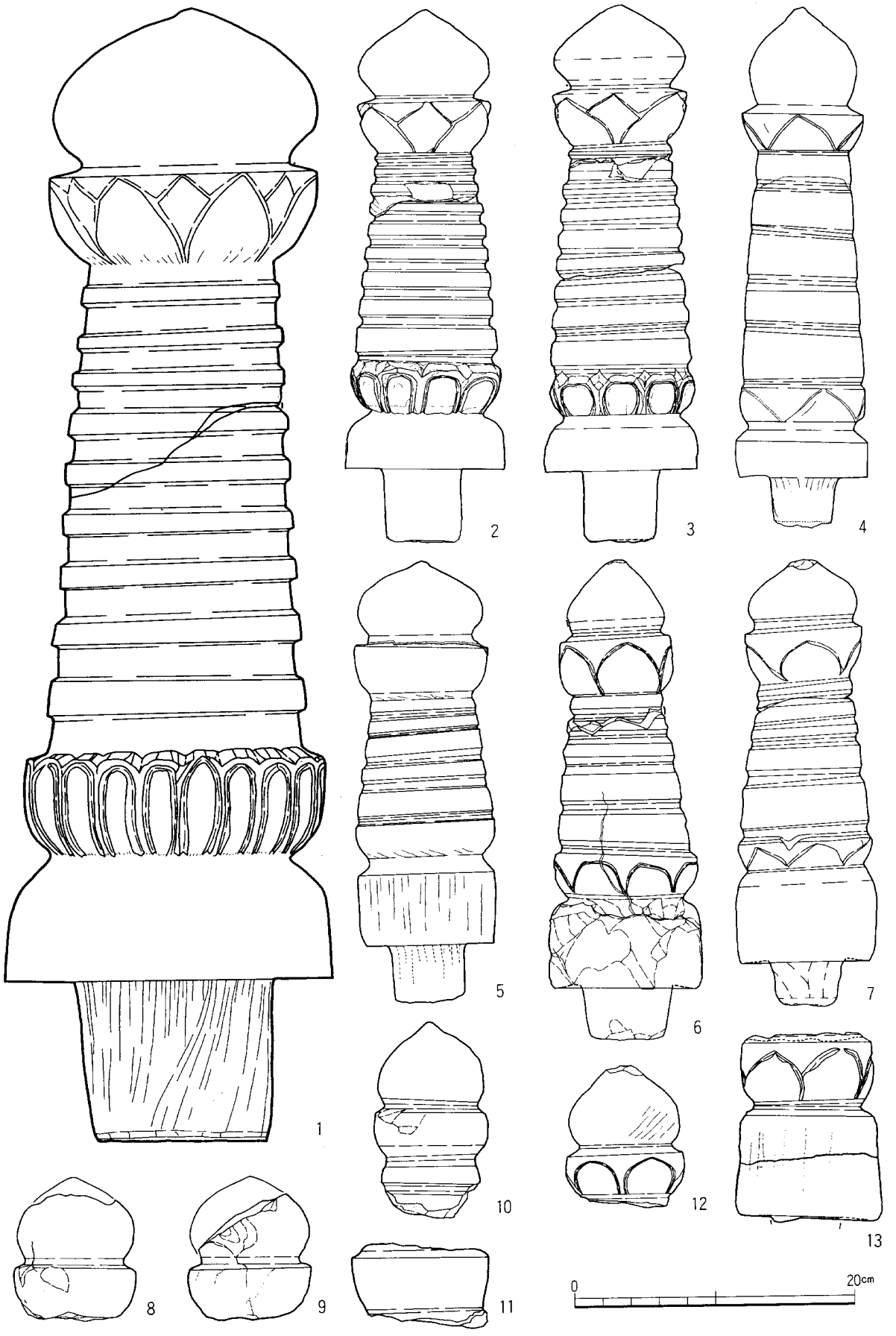
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
2延命段	11	12	14.2	13.7	凝灰岩質砂岩
2延命段	12	20	—	26.5	凝灰岩質砂岩

石塔・礎盤　計測データ　(単位はcm)

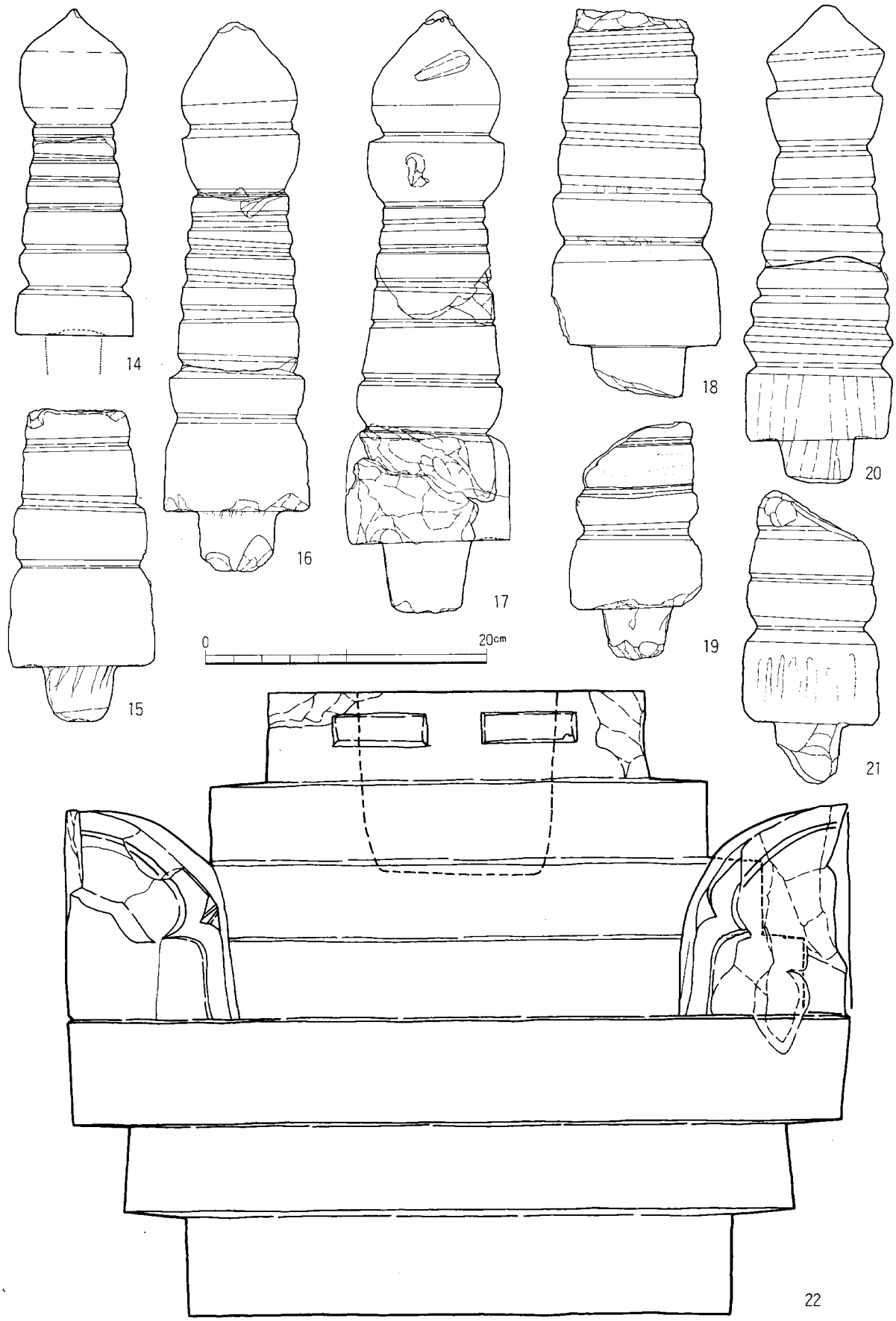
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
2延命段	13	5.9	23.5	23.3	凝灰岩質砂岩
2延命段	14	5.5	24.5	24.7	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

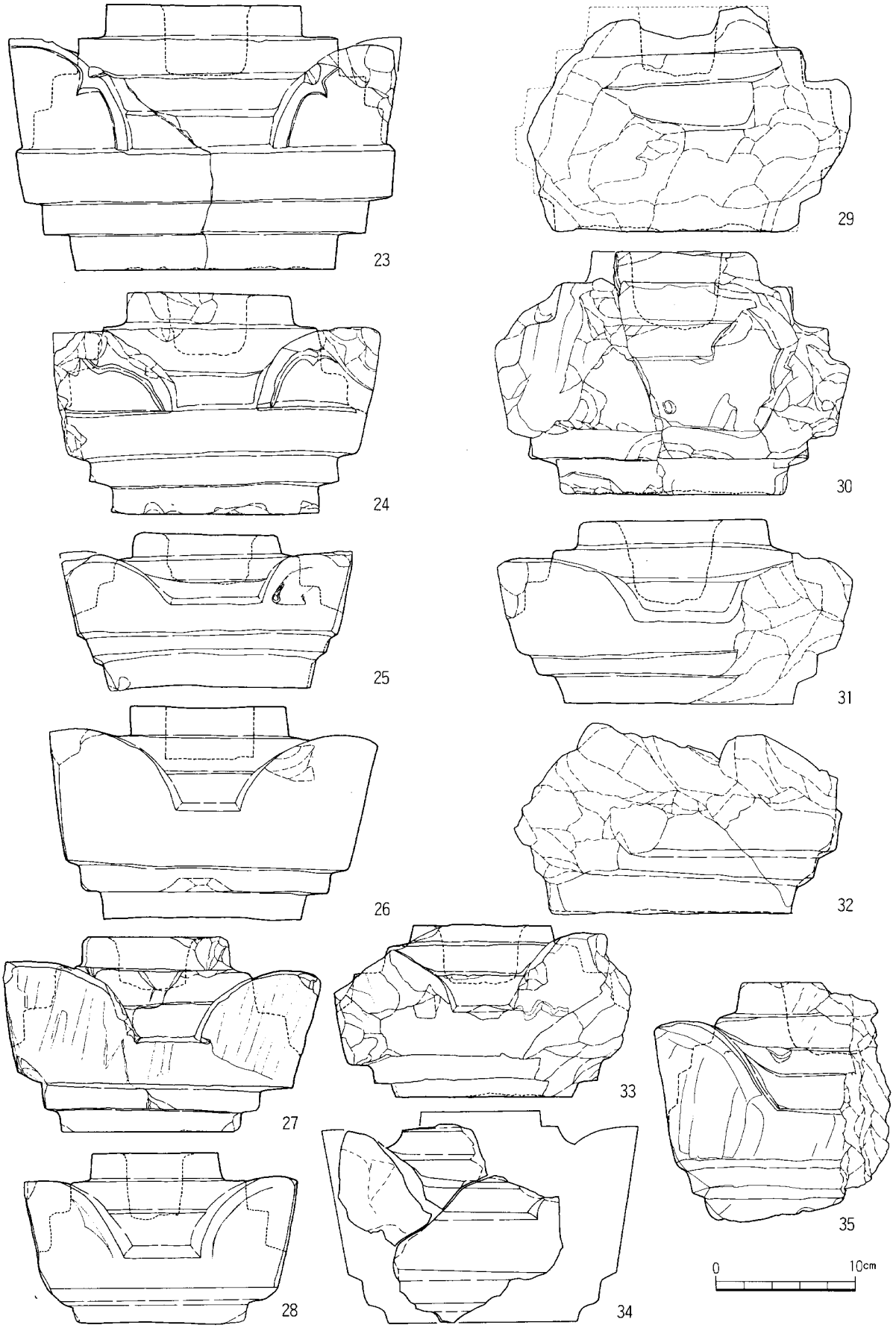
地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
2延命段	15	[23.4]	—	—	7	6.4	10.1	—	—	—	11.7	13	凝灰岩質砂岩



第13図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ①



第14図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ②



第15図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ③

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
3伝横地太郎	1—1	80.6	11.2	7	35	7.5	8.8	11.5	18.8	19.2	18.4	21.4	23.4	14.2	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—2	37.8	6.3	3.8	14.8	3.8	3.9	5.2	9.3	9.5	10.2	10.7	11.3	5.7	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—3	38.2	6	3.9	16	3.3	4	5.1	9.4	9.5	10	10.4	11	5.5	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—4	37	7	3.3	16.5	3.2	3.4	3.6	7.7	8.6	8.6	9	9.5	4.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—5	31.4	5.2	3.5	9.3	2.4	6.2	4.1	8.9	9.5	9.6	9.9	9.8	5.5	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—6	34	5.3	4.3	11	3.5	6.3	3.7	7	8	9.2	10.2	10.9	6.4	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—7	31.7	4.7	4	11.1	2.4	6.7	3.2	7.7	8.3	9.2	9.6	9.9	5.2	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—8	10.3	6.2	4.1	—	—	—	—	8.3	8.7	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—9	8.9	[4.9]	4	—	—	—	—	—	8.7	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—10	13.9	5.9	3.9	[4.1]	—	—	—	7.5	8.1	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—11	6.1	—	—	—	4.4	—	—	—	—	—	9.6	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—12	10.2	5.8	3.7	—	—	—	—	7.9	8.5	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	1—13	13.4	—	—	—	4.6	8	—	—	—	—	9.4	10.5	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

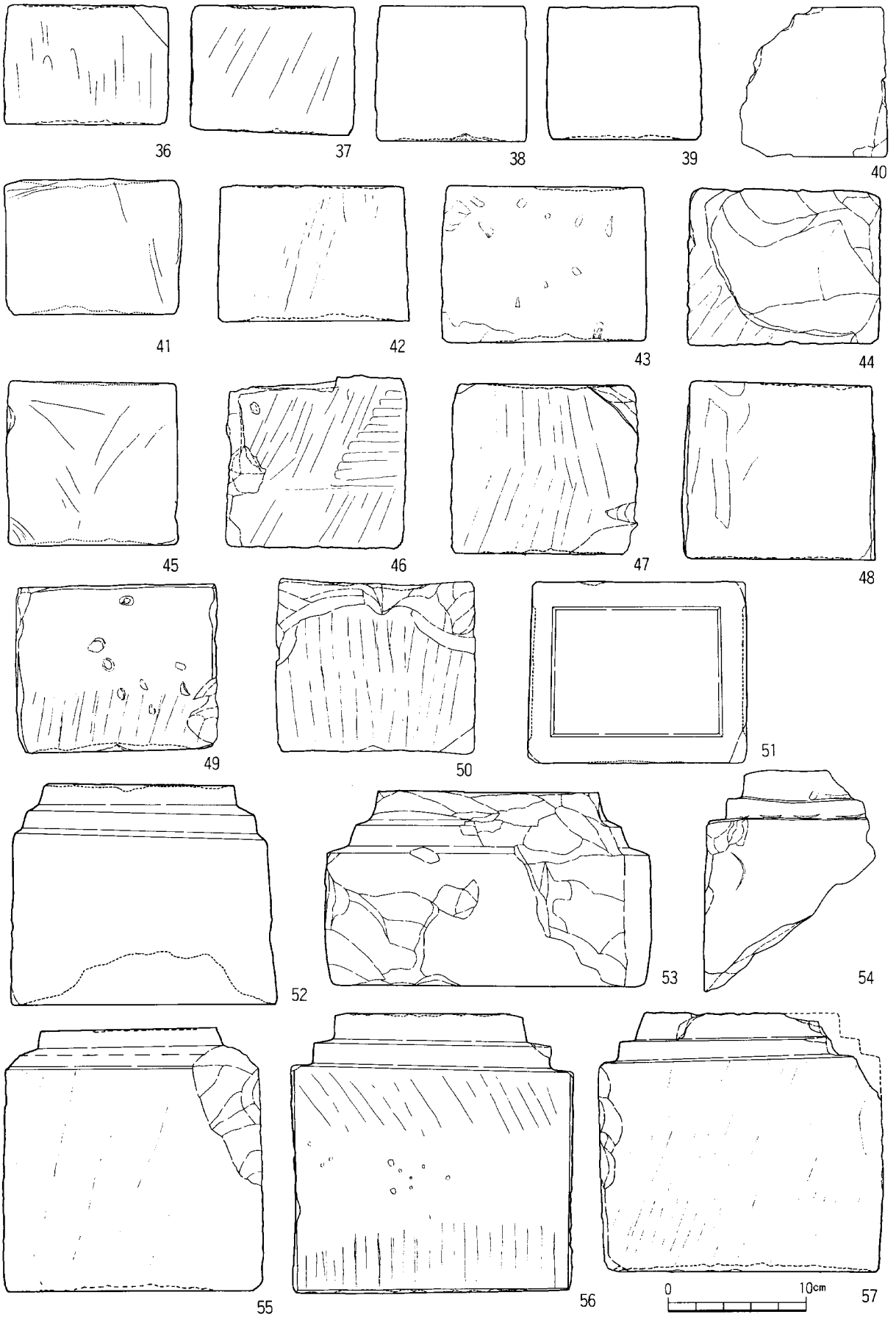
地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
3伝横地太郎	2—14	[23.1]	8.1	—	8.9	2.5	3.2	—	77.5	—	7.5	8	8.4	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—15	[22.1]	—	—	6.5	4.6	7.1	3.9	—	—	8	9.5	10.4	5.3	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—16	39	7.6	4.2	13.1	3.3	6.6	4.3	8.2	8.4	8.5	9.6	10.3	5.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—17	42.3	8.3	4.7	12.5	3.6	7.8	5	9.1	9.7	9.8	10.2	—	6.3	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—18	[27.7]	—	—	11.6	3.7	7.2	[3.6]	—	—	10.4	11.3	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—19	[16.9]	—	—	[4.8]	3.1	5	3.7	—	—	—	8.6	9.4	4.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—20	33.8	5.8	4	12.3	2.7	5.1	3.1	8.4	8.3	9.9	10.7	10.4	5.4	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	2—21	20.8	—	—	6.2	3.7	6.5	4.2	—	—	8.9	9.2	9.7	5.4	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

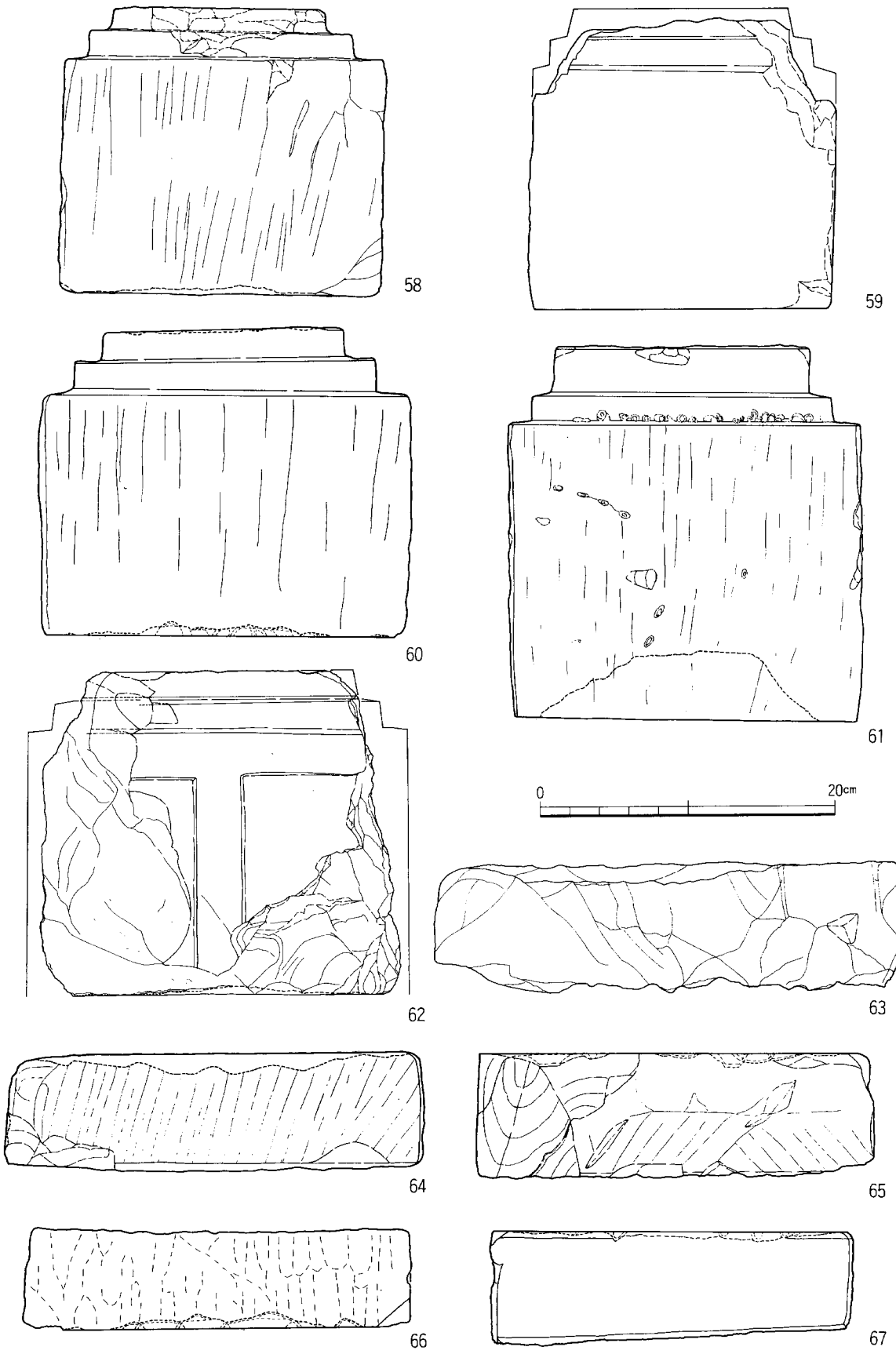
地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
3伝横地太郎	2—22	44.3	23.2	15.3	7.5	13.4	26.8	12.4	55.6	38.5	13.1	14.2	凝灰岩質砂岩「伝横地太郎塔」

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
3伝横地太郎	3—23	18.8	9.9	7.9	4.1	4.8	13.8	7.9	26.9	18.4	4.9	6.4	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	3—24	15.7	7.9	6.1	3.7	4.1	11.6	8.3	21.7	14.8	4.4	6.4	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	3—25	10.8	4.4	4.4	2.6	3.7	9.5	7.5	19.2	14.2	3.5	6.7	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	3—26	14.9	6.7	5.8	4.6	3.5	11	9	21.6	14	3.6	6.3	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	3—27	13.8	7	6	3.8	3	9.5	9.3	20.9	12.2	3.8	6.5	砂岩
3伝横地太郎	3—28	12	6.5	5	3	2.4	9	6.9	17.5	11.7	4.7	5	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	3—29	[15.9]	—	—	—	—	—	—	[22.7]	—	—	—	砂岩
3伝横地太郎	3—30	17.3	7.5	—	5.3	4.5	[9.4]	9.8	25	15.6	5.4	6.5	砂岩
3伝横地太郎	3—31	13	6.4	6.9	3.2	3.7	12.9	10.1	23.7	16.3	5.9	7.9	砂岩
3伝横地太郎	3—32	[13.4]	—	—	3.5	3.9	—	—	23.1	16.9	—	—	砂岩
3伝横地太郎	3—33	12.3	5.7	5.3	3.5	2.9	9.8	8.6	21	12.5	4.3	6.6	砂岩
3伝横地太郎	3—34	[14.2]	[6.3]	—	4.8	3	—	—	—	—	—	—	砂岩
3伝横地太郎	3—35	[17.0]	9	7.1	4.2	4	[5.6]	8.1	[15.7]	—	5.1	—	砂岩



第16図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ④



第17図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ⑤

3、 伝横地太郎塔

宝篋印塔・軸部　計測データ　（単位はcm）

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
3伝横地太郎	4—36	8.6	11.2	11.2	砂岩
3伝横地太郎	4—37	9.2	11.2	11	砂岩
3伝横地太郎	4—38	9.8	10.3	10.5	砂岩
3伝横地太郎	4—39	9.6	10.6	10.4	砂岩
3伝横地太郎	4—40	10.8	[5.0]	[6.6]	砂岩
3伝横地太郎	4—41	9.7	12.3	11.6	砂岩
3伝横地太郎	4—42	9.8	13.2	13.5	砂岩
3伝横地太郎	4—43	11.3	13.9	14.1	砂岩
3伝横地太郎	4—44	11.3	12.2	13.3	砂岩
3伝横地太郎	4—45	11.7	11.8	11.7	砂岩
3伝横地太郎	4—46	12.2	[4.6]	12	砂岩
3伝横地太郎	4—47	12.2	12.2	12	砂岩
3伝横地太郎	4—48	12.7	12.6	13.4	砂岩
3伝横地太郎	4—49	11.9	14.2	13.3	砂岩
3伝横地太郎	4—50	12.1	13.5	13.5	砂岩
3伝横地太郎	4—51	13	14.9	14.9	砂岩

宝篋印塔・基礎　計測データ　（単位はcm）

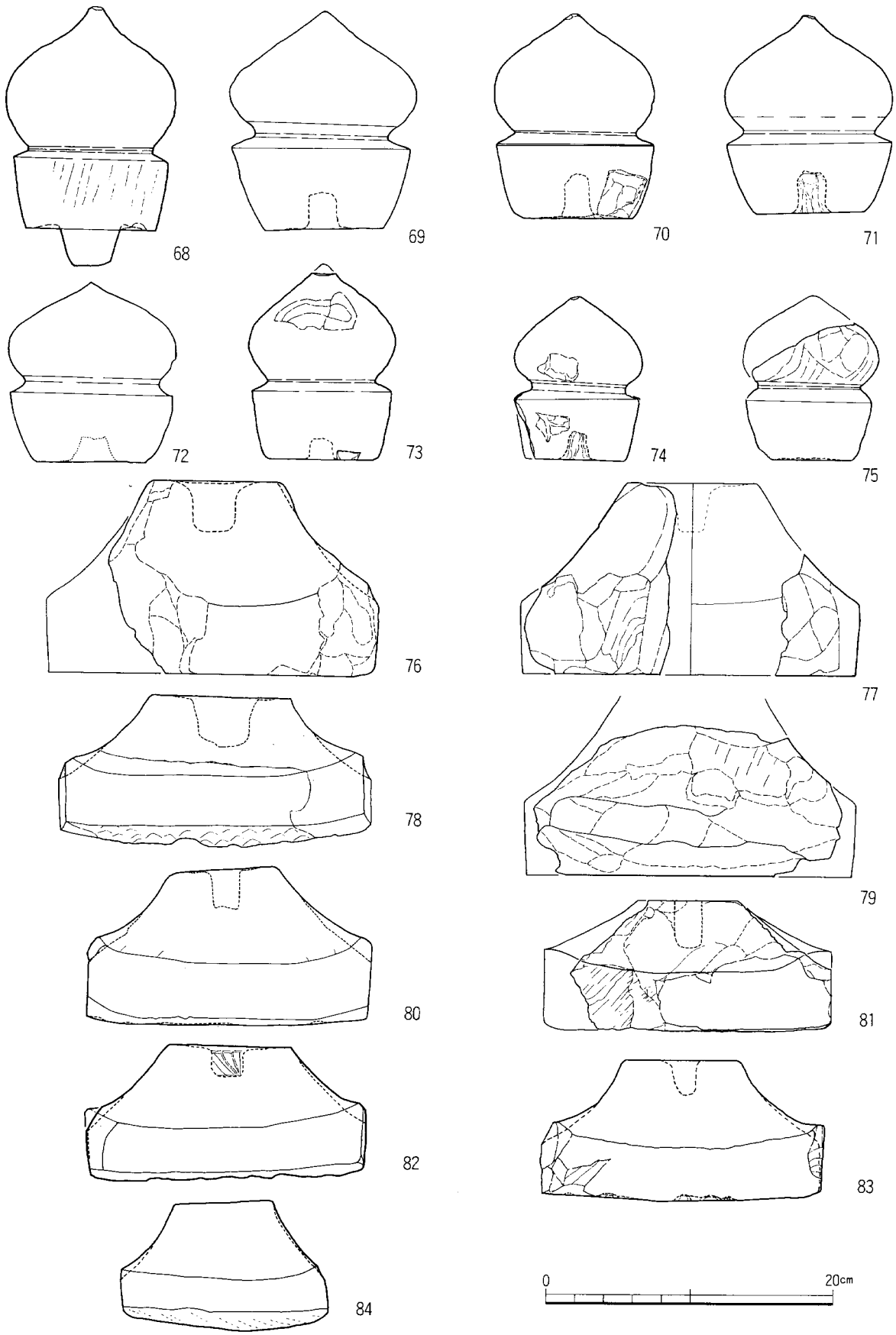
地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
3伝横地太郎	4—52	15.9	3.8	12.1	—	13.5	19	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	4—53	14	4.4	9.6	—	15.9	22	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	4—54	[16.3]	3.6	[12.7]	—	—	—	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	4—55	18.9	2.9	16	—	12.7	17.7	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	4—56	20.1	4	16.1	—	13.6	19.7	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	4—57	18.6	3.5	15.1	—	10.1	18.7	—	花崗岩質砂岩

宝篋印塔・基礎　計測データ　（単位はcm）

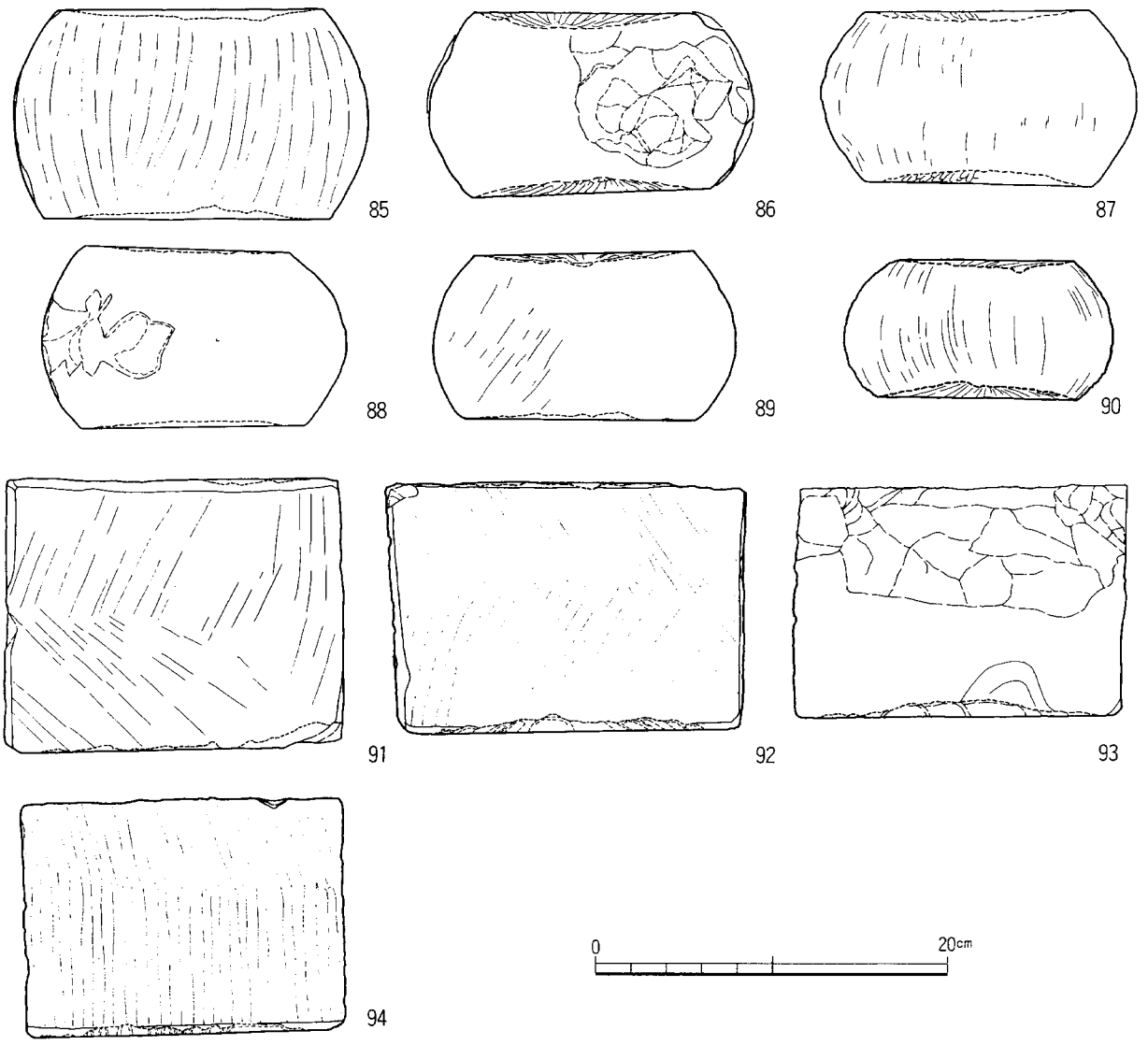
地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
3伝横地太郎	5—58	19.4	3.5	15.9	—	13.8	21.4	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	5—59	[19.6]	[3.6]	16	—	—	19.8	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	5—60	20.7	4.5	16.2	—	15.8	23.5	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	5—61	25.3	5.4	19.9	—	17.1	23.1	—	花崗岩質砂岩
3伝横地太郎	5—62	21.8	4.2	17.6	—	15.3	21	—	花崗岩質砂岩？

宝篋印塔・礎盤　計測データ　（単位はcm）

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
3伝横地太郎	5—63	8.7	29	31	砂岩
3伝横地太郎	5—64	7.9	25.9	27.4	砂岩
3伝横地太郎	5—65	8.3	25.6	26.9	砂岩
3伝横地太郎	5—66	6.5	25.4	26.2	砂岩
3伝横地太郎	5—67	7.2	24	23.9	砂岩



第18図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ⑥



第19図　3. 奥横地　伝横地太郎塔 ⑦

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
3伝 横地太郎	6—68	18	10.1	5.5	2.5	11.7	8.7	10.7	4.1	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—69	15.1	8.9	6.2	2.7	12.9	9.2	12.5	3.4	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—70	14.2	8.3	5.9	3.1	11.1	8.4	10.9	2.3	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—71	13.7	8.2	5.5	3	11.6	9.1	11.5	2.6	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—72	12.5	7	7.5	1.8	11.5	9.5	11.3	3.5	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—73	[12.9]	[7.5]	5.4	1.5	10.2	7.6	9.6	2.1	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—74	11.3	6.6	4.7	2	8.9	6.5	8.6	2.3	凝灰岩質砂岩
3伝 横地太郎	6—75	[9.5]	[4.5]	5	—	—	7.1	8.7	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

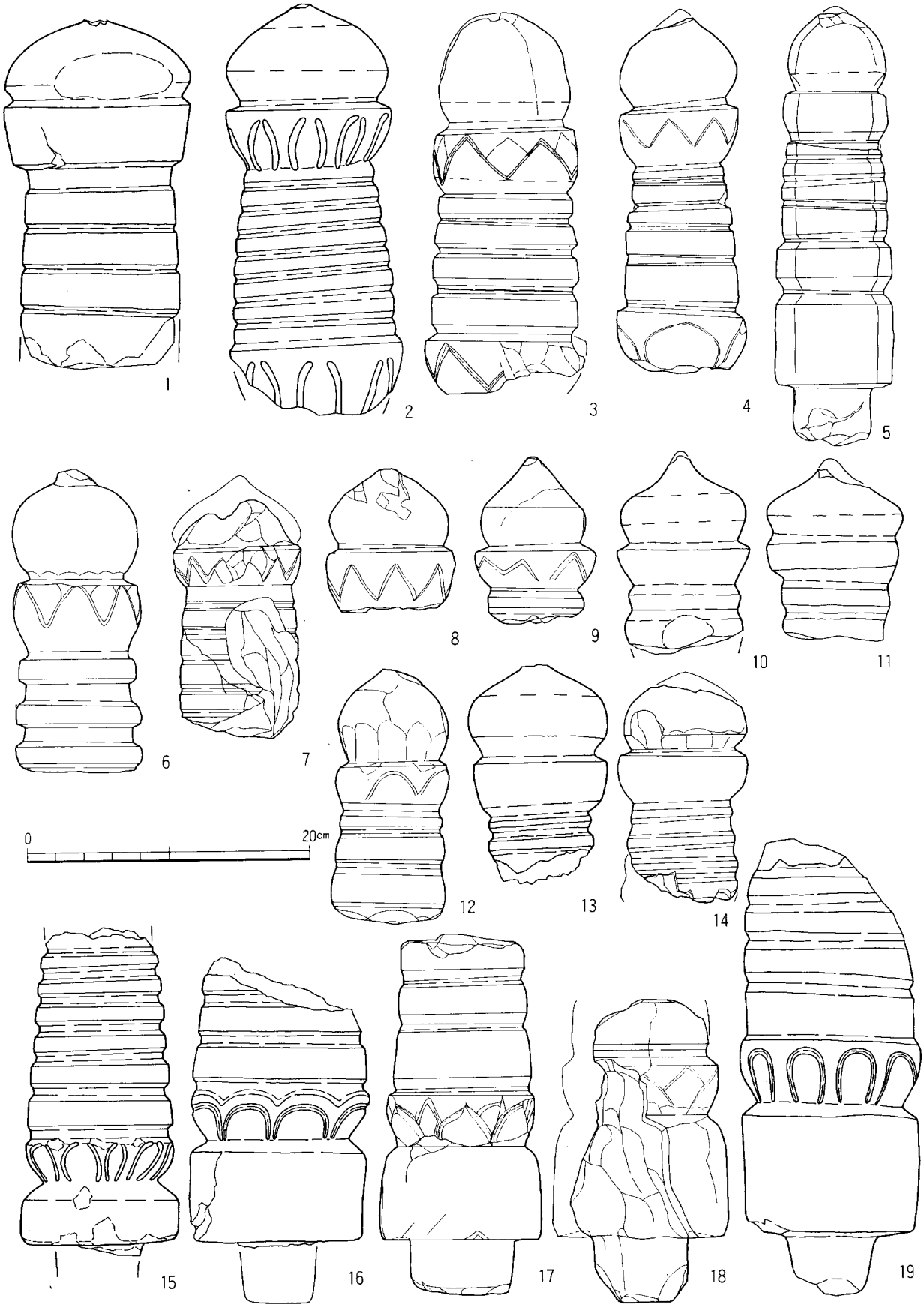
地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
3伝横地太郎	6—76	13.4	8.6	4.8	7.9	8.9	22	3.5	6	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—77	13.2	8.5	4.7	5.5	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—78	10.4	5.5	4.9	5.7	9.7	21.8	3.5	4.7	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—79	[10.5]	—	—	—	—	[21.4]	—	—	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—80	10.8	6.5	4.3	5.7	7.6	19.8	2.8	2.2	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—81	9	4.9	4.1	5.5	[5.2]	[18.0]	3.2	1.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—82	9.1	5.7	3.4	4.7	8.6	19.4	2.2	2.3	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—83	9.8	6	3.8	5	7.8	19.6	2.4	2.7	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	6—84	9.1	5.5	3.6	4	6.8	14.4	—	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

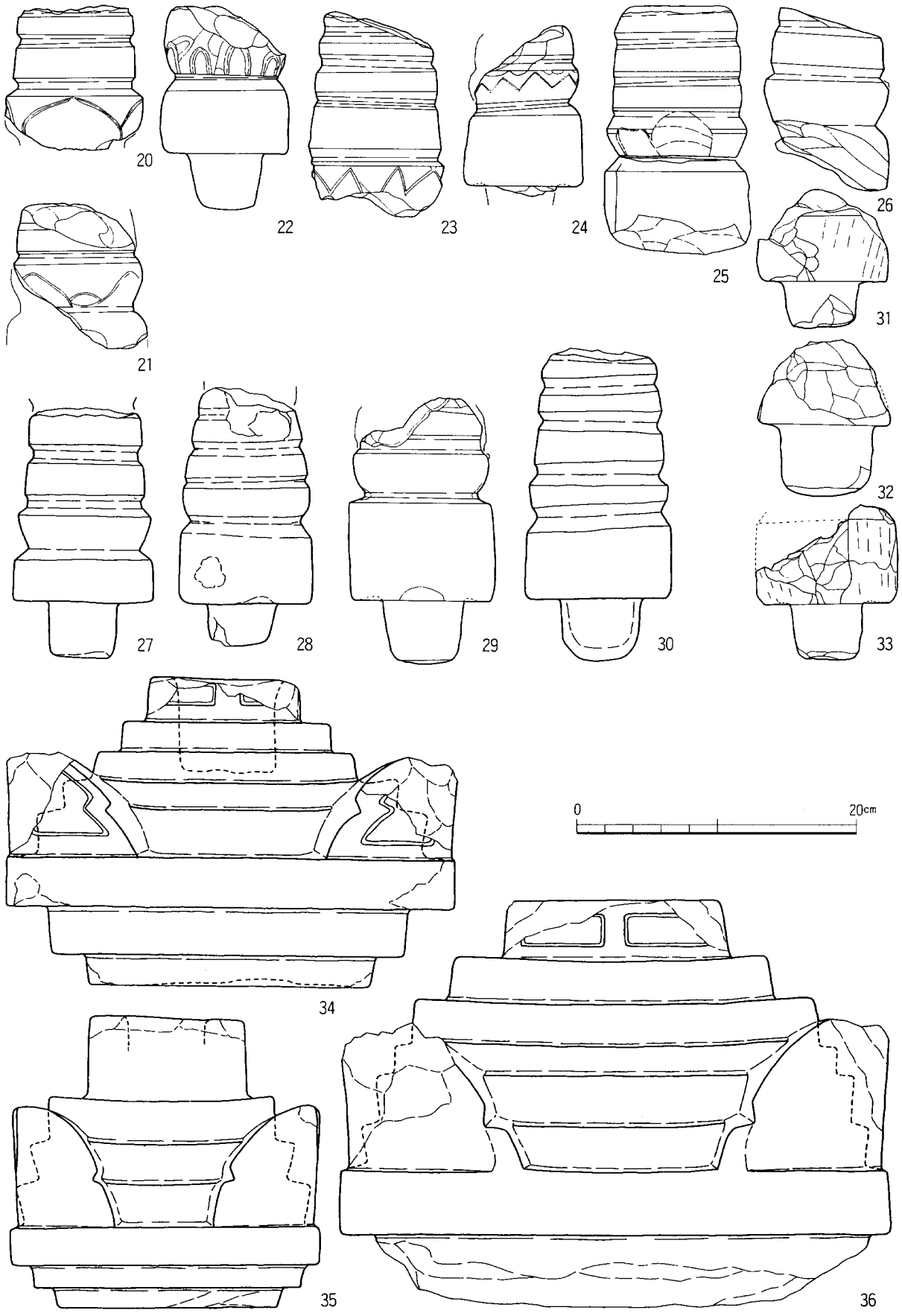
地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
3伝横地太郎	7—85	11.9	15	20	16.3	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—86	10.2	[12.5]	18.4	13.4	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—87	9.7	12.7	17.9	12.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—88	10.1	11.5	17.3	12.8	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—89	9.4	12.4	17.2	12.9	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—90	7.8	10	15.3	11.4	凝灰岩質砂岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
3伝横地太郎	7—91	15.3	18.7	[14.9]	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—92	14.1	[15.4]	18.1	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—93	13	18.5	18	凝灰岩質砂岩
3伝横地太郎	7—94	13.3	17.8	17.1	凝灰岩質砂岩



第20図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ①



第21図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ②

4、 三光寺跡裏

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
4三光寺跡裏	1—1	[24.6]	6.2	4.3	10.3	[3.7]	—	—	13	13.1	10.2	[10.7]	—	—	凝灰岩質砂岩？
4三光寺跡裏	1—2	[29.2]	7.1	4.4	12.7	[4.9]	—	—	11.4	11.4	11.3	12.2	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—3	[26.6]	8.2	4.6	9.9	[4.2]	—	—	9.2	9.7	10.2	[10.2]	—	—	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—4	[25.1]	[6.3]	4	10.3	[4.5]	—	—	8.2	8.3	7.9	9.1	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—5	[30.6]	[5.7]	3.5	7	3.7	6.7	4.1	6.9	7.4	7.3	8.2	8.3	5.6	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—6	[20.5]	7.8	5.1	8.6	—	—	—	8.7	8.9	8.9	—	—	—	花崗岩
4三光寺跡裏	1—7	16.9	—	2.7	[10.9]	—	—	—	—	9.1	8.4	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—8	[9.9]	5.6	4.3	—	—	—	—	8.4	9.1	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—9	[11.7]	6.2	3.1	[2.5]	—	—	—	7.4	8.5	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—10	[14.0]	[6.2]	2.9	[4.9]	—	—	—	8.9	9.4	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—11	[12.1]	[4.7]	3.2	[4.1]	—	—	—	9.7	9.4	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—12	[18.0]	6.5	3.5	6.8	[1.1]	—	—	7.8	7.9	7.9	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—13	[15.5]	6.5	4.1	[4.9]	—	—	—	9.8	9.4	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—14	[15.4]	[4.7]	3.6	[7.2]	—	—	—	8.7	8.9	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—15	[23.4]	—	—	[14.8]	3.2	4.5	—	—	—	10.2	10.4	10.9	[4.7]	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—16	[20.4]	—	—	8.7	4.1	7.3	—	—	—	12.2	12.5	12.4	6.2	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—17	[25.4]	—	—	[11.2]	[3.9]	7	3.9	—	—	9.7	10.4	11.4	7.2	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—18	[21.4]	—	—	[4.1]	4.1	8.7	4.5	—	—	—	—	—	6.9	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	1—19	22.2	—	—	[13.8]	4.8	9.5	4.1	—	—	11.8	12.8	12.4	6.8	凝灰岩質砂岩

1：野澤№16、2：野澤№1、3：野澤№10補訂、4：野澤№8補訂、5：野澤№15補訂、6：野澤№6補訂、8：野澤№4（五輪塔空風輪）訂正、10：野澤№13、11：野澤№7、15：野澤№2、16：野澤№4、17：野澤№5補訂。

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

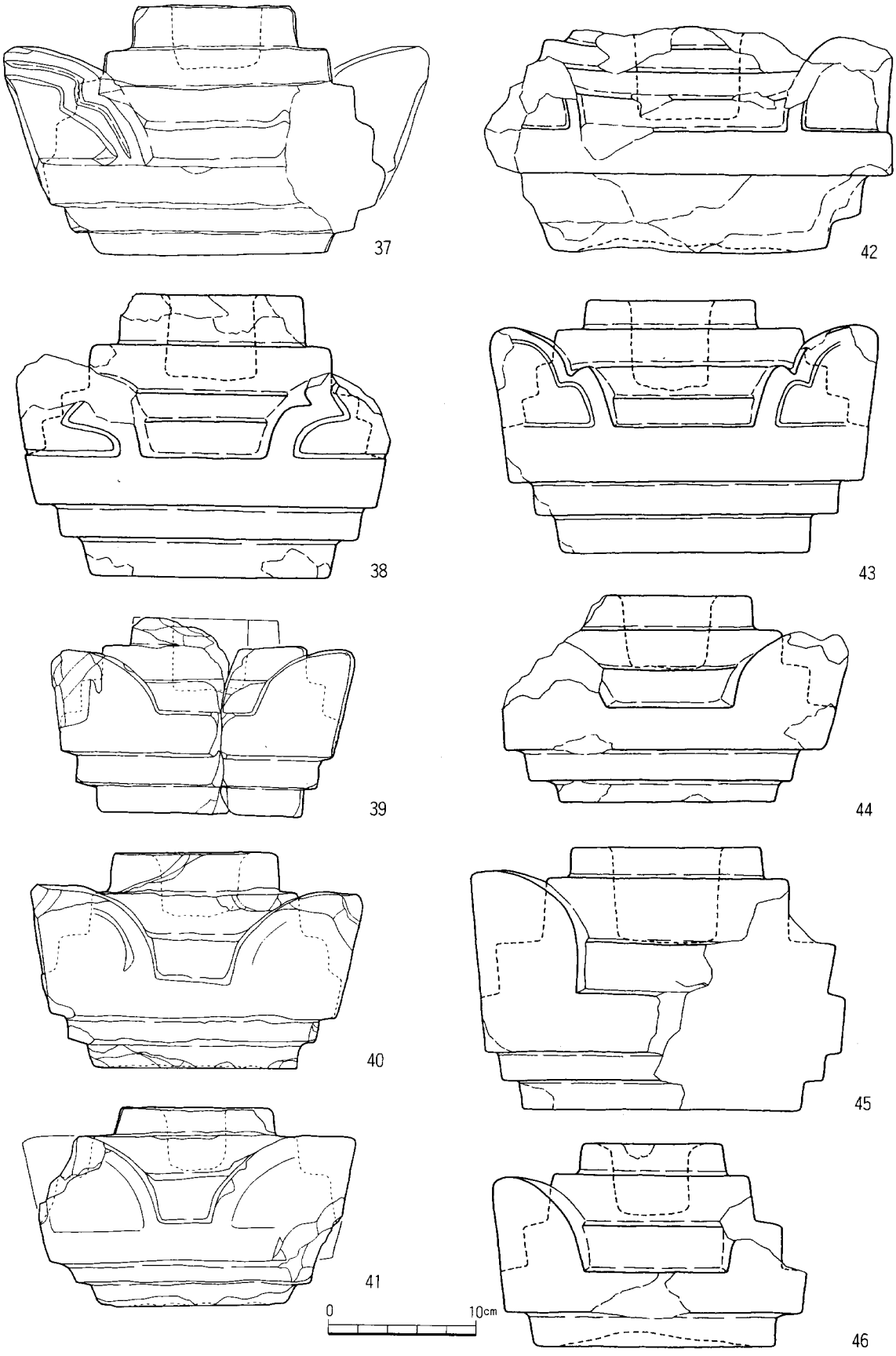
地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
4三光寺跡裏	2—20	[10.2]	—	—	[5.9]	4.9	—	—	—	—	8.7	9.6	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—21	[10.4]	—	—	[3.9]	3.8	[2.6]	—	—	—	8.4	9.1	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—22	[14.4]	—	—	—	5.2	5.3	4	—	—	—	8.5	9	5.5	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—23	[14.5]	—	—	[10.6]	[3.9]	—	—	—	—	9.4	9.3	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—24	[12.2]	—	—	[2.6]	2.9	5.8	[0.7]	—	—	—	—	8.5	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—25	[17.6]	—	—	[7.7]	2.7	6.8	—	—	—	9	9.9	10.3	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—26	[13.2]	—	—	[4.7]	3.5	4.7	—	—	—	8	8.9	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—27	[17.7]	—	—	[7.0]	3	3.7	4	—	—	8.5	9.4	10	5.2	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—28	[18.4]	—	—	[7.8]	2.9	5.8	3	—	—	8.6	8.9	9.5	5.2	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—29	[19.0]	—	—	[3.7]	3.4	7.3	4.5	—	—	—	9.6	10.3	5.8	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—30	[22.1]	—	—	[8.9]	3	5.9	4.5	—	—	9.2	9.8	10.4	6.1	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—31	[9.9]	—	—	—	—	6.5	3.4	—	—	—	—	9.4	6.1	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—32	[11.0]	—	—	—	—	[5.9]	5.1	—	—	—	—	9.4	7.8	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	2—33	[11.0]	—	—	—	—	7	4	—	—	—	—	10	5.3	凝灰岩質砂岩

27：野澤№9、28：野澤№14、30：野澤№11。

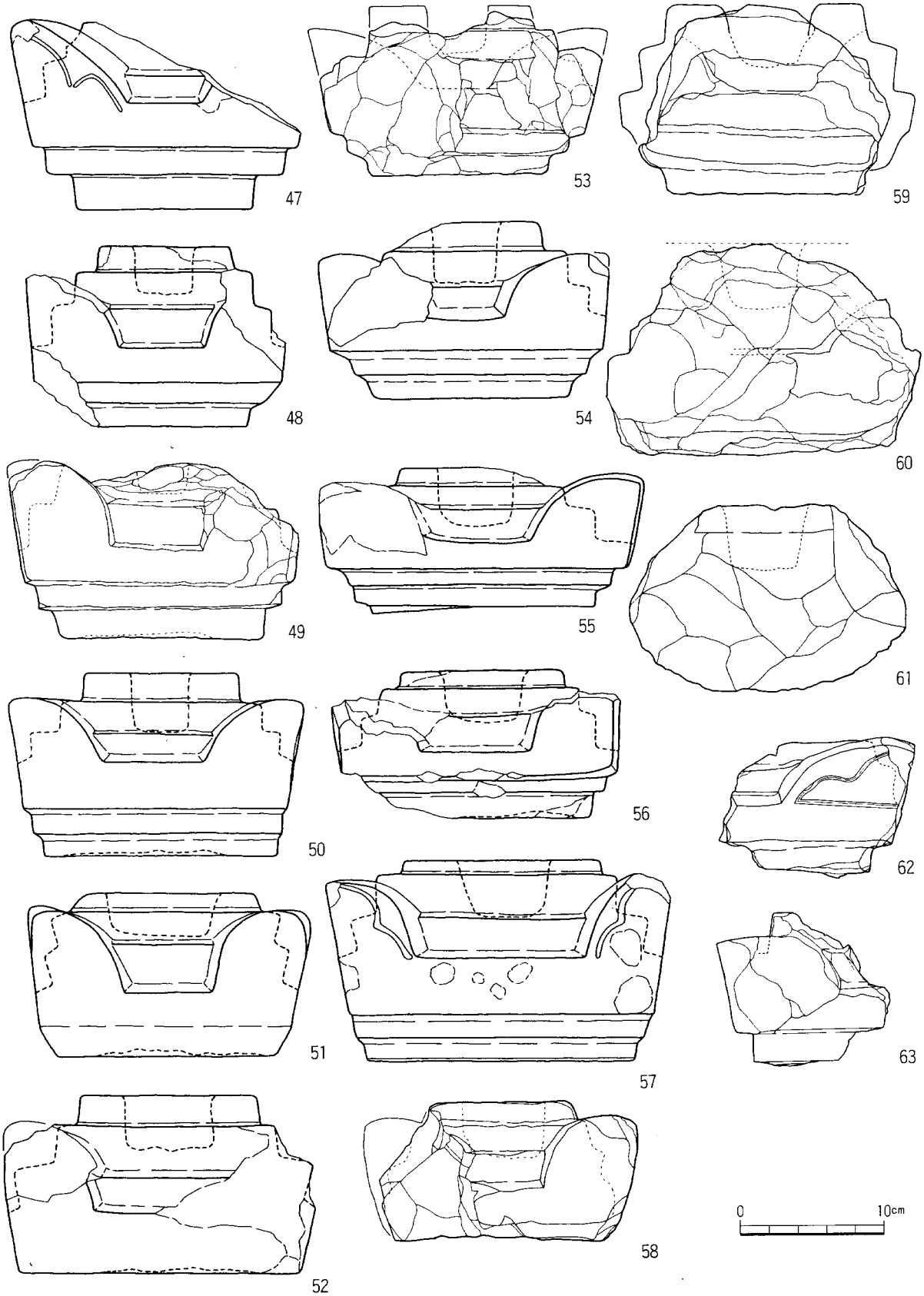
宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺跡裏	2—34	22	12.9	7.4	3.5	5.6	10.4	9.8	31.9	19.7	6.7	7.9	輝石安山岩
4三光寺跡裏	2—35	20.8	15	8.7	2.7	3	10.9	7.5	22	15.4	—	6.2	砂岩（産地不詳）
4三光寺跡裏	2—36	28.9	19.5	10.8	3.4	5.1	14.6	12.4	39.1	—	—	—	凝灰岩質砂岩

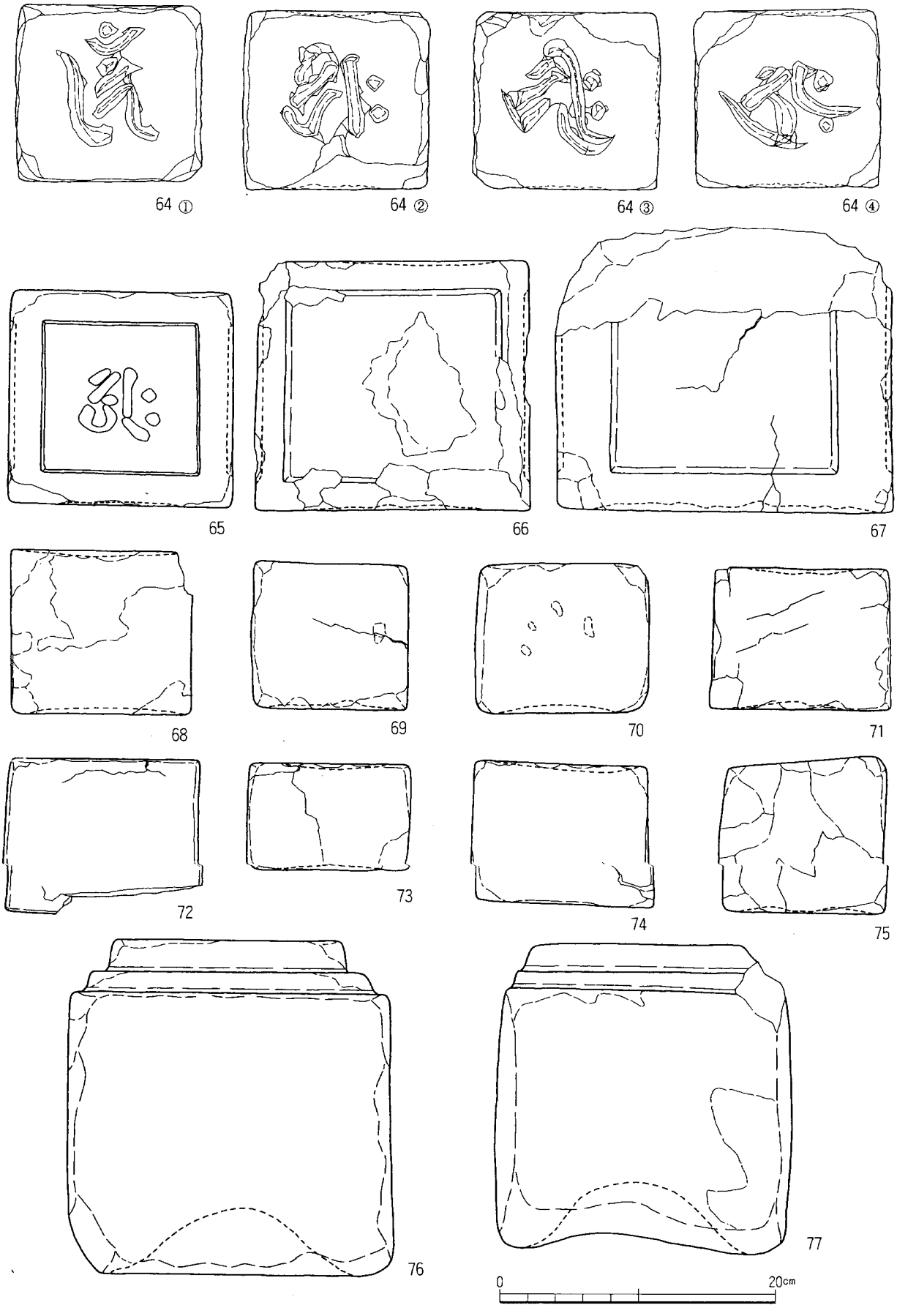
34：野澤№18、35：野澤№22、36：野澤№17。



第22図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ③



第23図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ④



第24図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑤

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺裏跡	3—37	16.9	10.9	140.2	2.8	3.2	10.3	10.3	24.6	15.4	4.3	6.1	花崗岩
4三光寺裏跡	3—38	19	11	6.8	3.2	4.8	[11.0]	6.3	24.3	15.9	5.8	6.1	砂岩
4三光寺裏跡	3—39	13.2	6.6	7.2	2.7	3.9	[9.7]	6.9	19	13.5	4.9	[5.0]	砂岩
4三光寺裏跡	3—40	14.5	8.2	6.1	2.9	3.4	10.7	8.1	20.5	13.7	4.2	6.8	砂岩
4三光寺裏跡	3—41	13.4	7.5	6.2	2.8	3.1	10	9.1	20.5	12.5	4.2	5	砂岩
4三光寺裏跡	3—42	15.2	7	[6.4]	2.9	5.3	—	7.4	[27.6]	18.8	6.2	[7.5]	凝灰岩質砂岩
4三光寺裏跡	3—43	17	8.5	6.7	3.7	4.8	11.1	7.9	24.8	16.6	6	6	凝灰岩質砂岩
4三光寺裏跡	3—44	13.9	7.5	—	2.4	4	[9.7]	8	22.5	14.7	5	6.8	凝灰岩質砂岩
4三光寺裏跡	3—45	17.7	9.7	8.5	4.1	3.9	12.7	7.2	24.7	18.8	6.3	7.8	凝灰岩質砂岩
4三光寺裏跡	3—46	13.7	8.7	6.4	3.1	1.9	9.4	6	20.6	16.2	4.8	7.2	凝灰岩質砂岩

42：野澤№19、43：野澤№21、44：野澤№28、45：野澤№25、46：野澤№29、47：野澤№24、48：野澤№26。

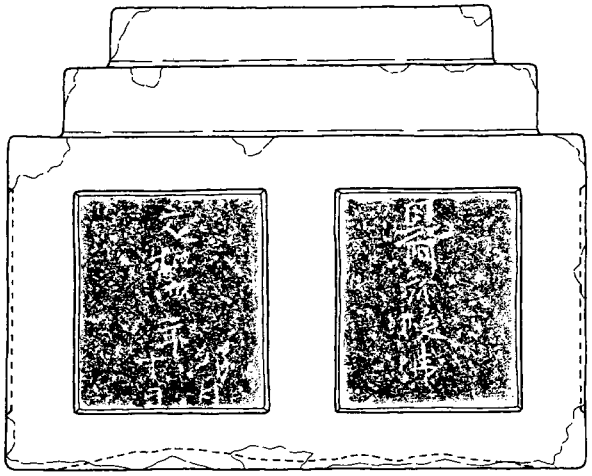
宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

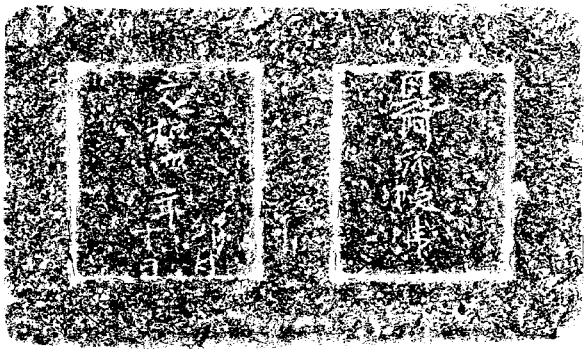
地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺跡裏	4—47	[13.1]	—	5.9	3	4.4	—	7.5	[18.8]	12.1	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—48	12.4	6.7	[5.0]	2.4	3	8.8	6.4	17.5	10.3	3.3	4.5	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—49	[12.3]	—	6.2	2.9	3.5	—	6.9	19.3	13.8	[2.1]	—	砂岩
4三光寺跡裏	4—50	12.5	6.2	4.5	3.2	3.2	10.4	6.7	19.1	16	4	4.4	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—51	11.3	6.9	6.2	2.3	2.1	11.4	6.6	18.1	14.9	3	8	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—52	12.3	8	3.9	4.3	—	12	6.6	21.2	[19.2]	3.9	6.4	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—53	[11.2]	—	—	3.1	2.9	—	7.3	18.9	11.9	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—54	12.1	6.7	4.8	2	3.4	—	7.8	19.3	13.3	4.2	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—55	9.7	5.2	5	1.8	2.7	[5.3]	7.8	21.5	15.6	4	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—56	10.2	5.5	—	2	2.7	10.9	6.9	19.4	[9.5]	3.5	6.4	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—57	13.9	6.7	5.5	3.9	3.3	13.4	6	22.3	18.3	3.9	6.7	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—58	9.5	5.9	4.6	2.4	1	9.2	6.4	[17.1]	14.5	3.8	5.7	花崗岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—59	13	6	—	3	4	—	—	—	12.5	4.3	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—60	[14.5]	7.2	—	—	—	—	—	[21.5]	—	4.5	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—61	[12.9]	—	—	—	—	—	—	[19.0]	—	4.5	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—62	[9.6]	—	4.9	2.8	2.2	—	8.9	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	4—63	[10.5]	—	—	3	1.9	—	—	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩

50：野澤№23、51：野澤№32、52：野澤№33、54：野澤№27、55：野澤№30、56：野澤№31、57：野澤№34。

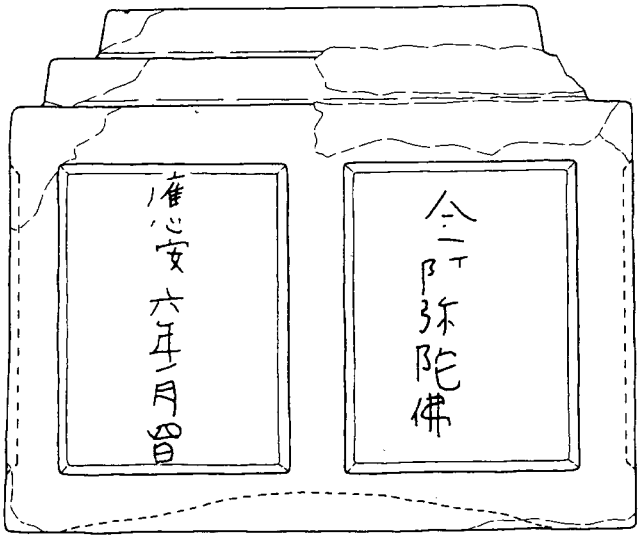
宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
4三光寺跡裏	5—64	12.8	11.9	11.4	花崗岩、野澤№？
4三光寺跡裏	5—65	15.5	15.3	15.8	輝石安山岩、野澤№35
4三光寺跡裏	5—66	18	[17.3]	19.9	凝灰岩質砂岩、野澤№36
4三光寺跡裏	5—67	20.5	—	24.4	凝灰岩質砂岩、野澤№37
4三光寺跡裏	5—68	11.8	[11.9]	12.9	凝灰岩質砂岩、野澤№39
4三光寺跡裏	5—69	10.5	11.1	11.1	凝灰岩質砂岩、野澤№41
4三光寺跡裏	5—70	11.8	[11.4]	12.5	凝灰岩質砂岩、野澤№40
4三光寺跡裏	5—71	10.2	12.5	13.2	凝灰岩質砂岩、野澤№42
4三光寺跡裏	5—72	11.1	13.5	—	凝灰岩質砂岩、野澤№43
4三光寺跡裏	5—73	7.7	11.5	11.3	凝灰岩質砂岩、野澤№44
4三光寺跡裏	5—74	10.2	12.4	12.4	凝灰岩質砂岩、野澤№45
4三光寺跡裏	5—75	11	10.9	11.4	凝灰岩質砂岩、野澤№47





78



79

0　20cm

第25図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑥
上段「見阿弥院仏　文和四年(1355)卯月十日」銘
下段「金阿弥院仏　応安六年(1373)二月四日」銘

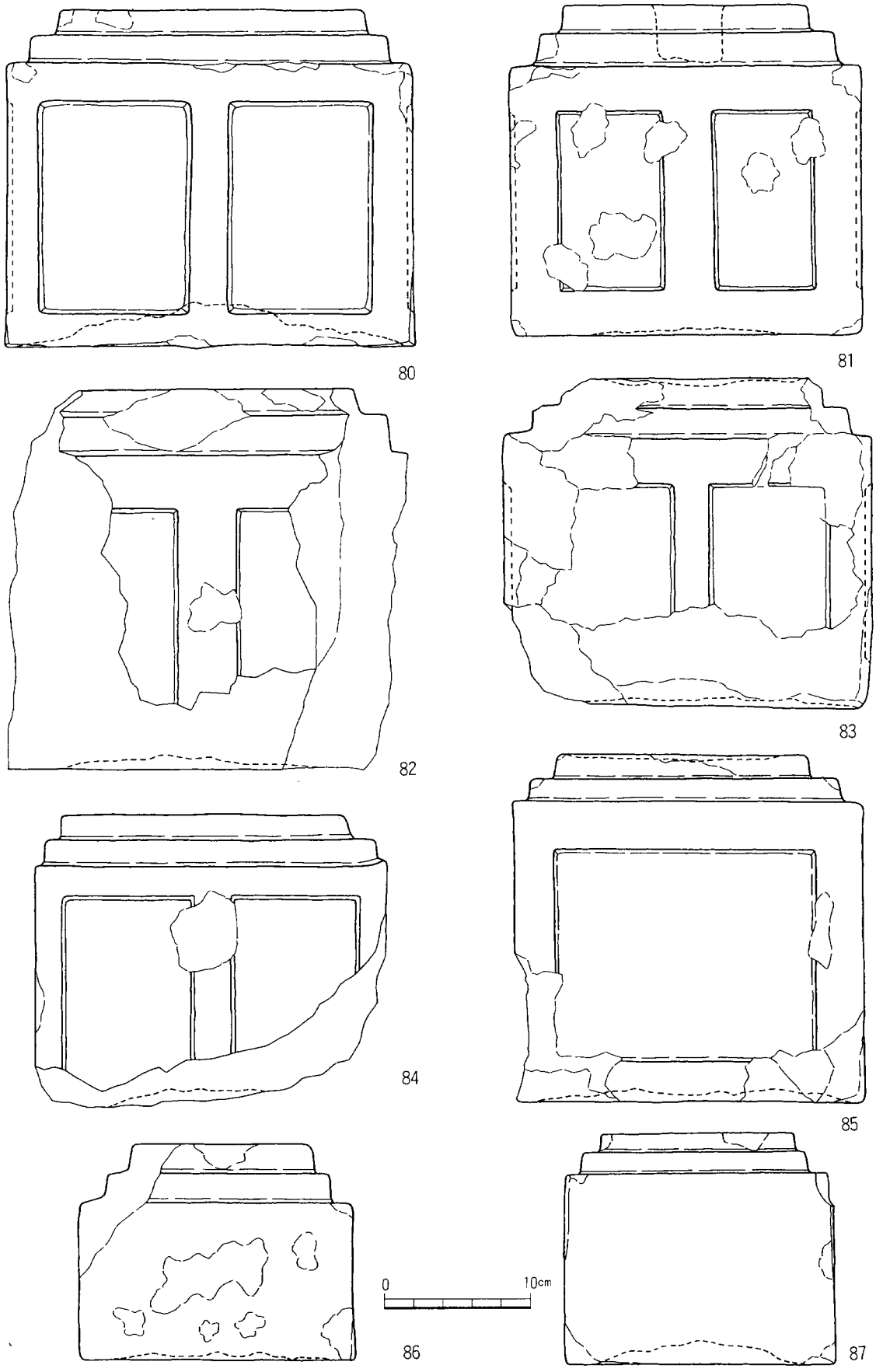
宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
4三光寺跡裏	5—76	24.2	4.8	19.4	—	16.3	19	—	花崗岩、野澤No.70
4三光寺跡裏	5—77	22	3.3	18.7	—	15	18.3	—	花崗岩、野澤No.71

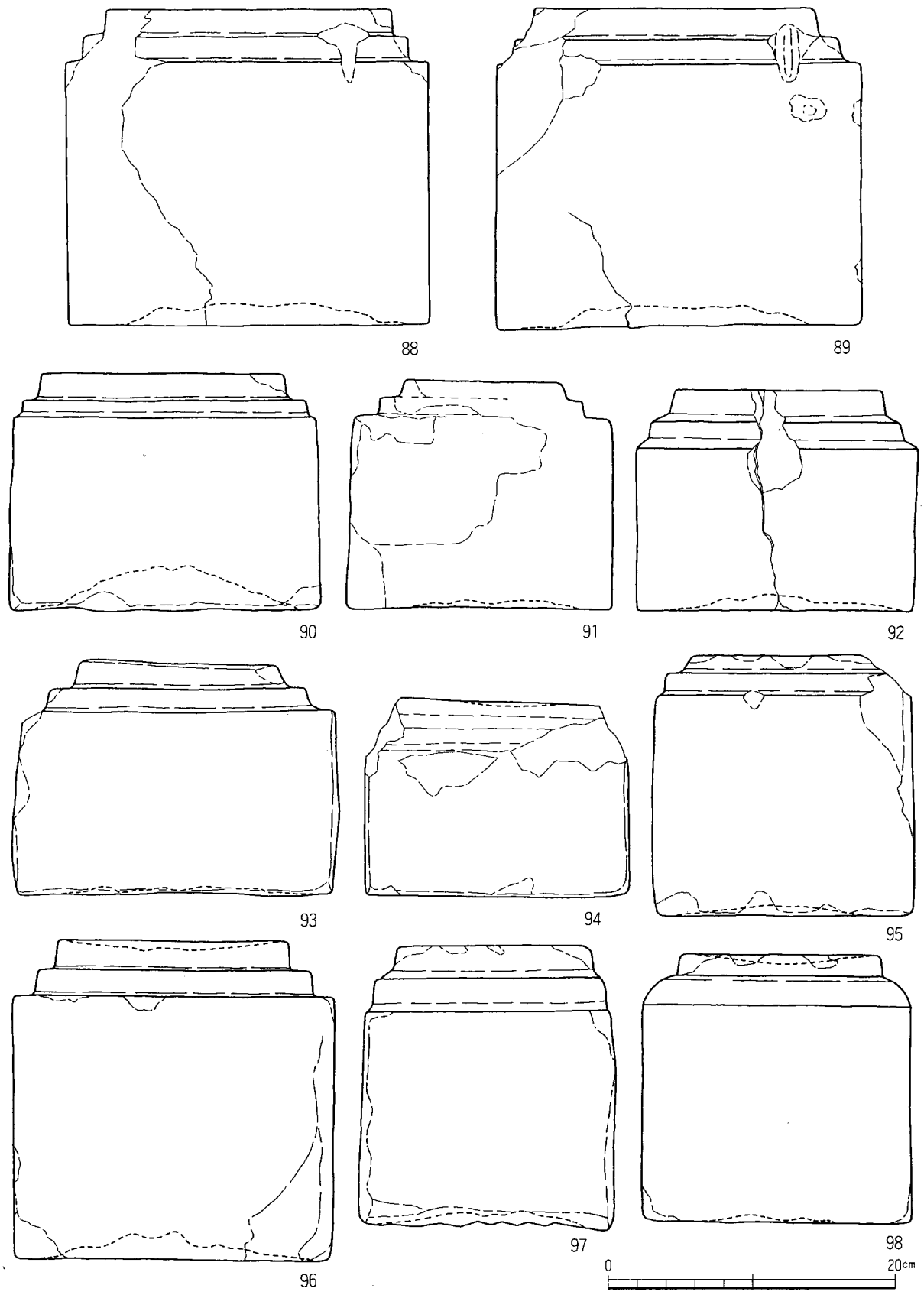
宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
4三光寺跡裏	6—78	24.5	6.9	17.6	11.8	20	30.7	9.9	輝石安山岩、野澤No.48*1
4三光寺跡裏	6—79	27.7	5.1	22.6	16.4	22.4	33.1	12.2	凝灰岩質砂岩、野澤No.50*2

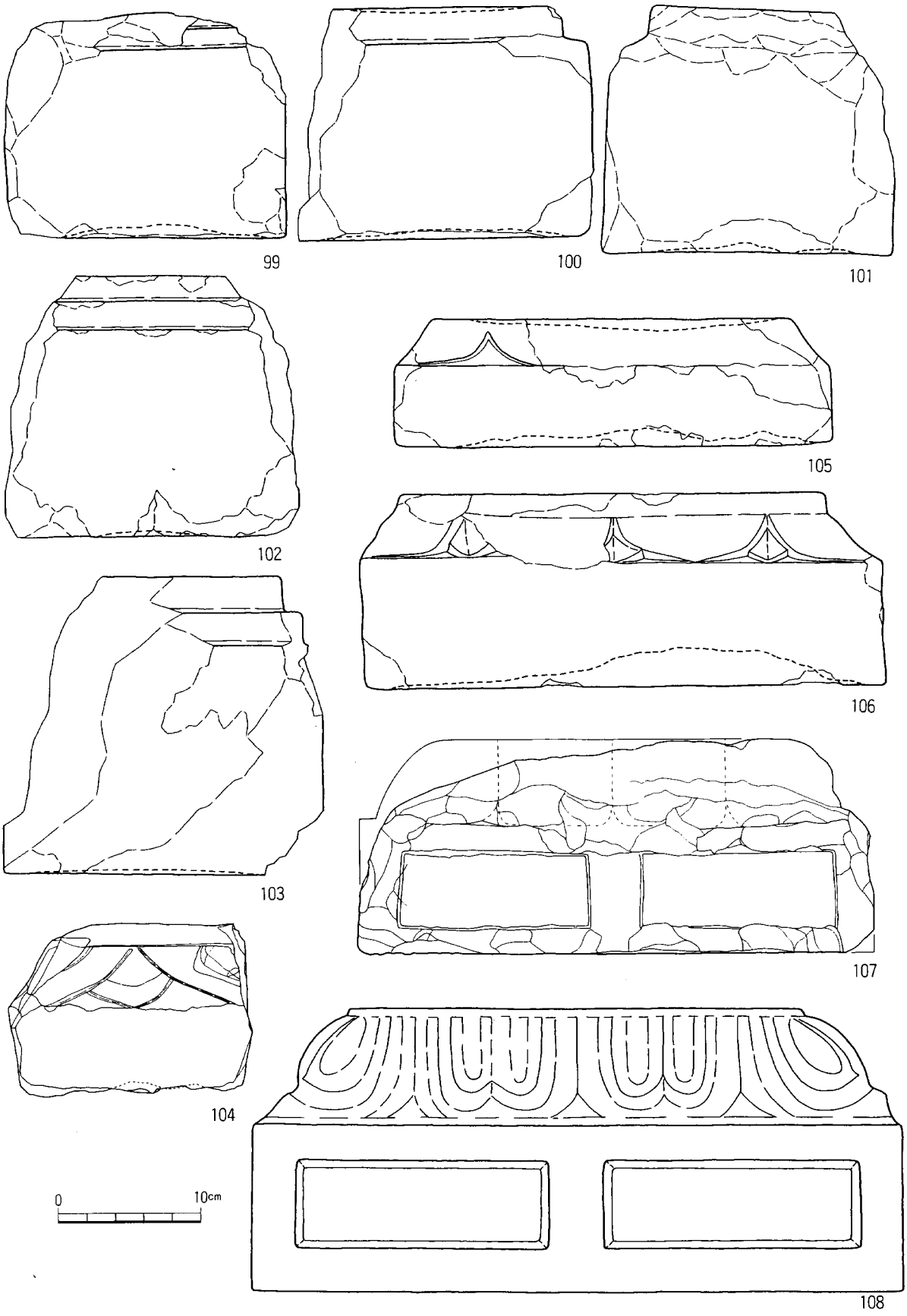
*1：「見阿弥院仏　文和四(1355)年卯月十日」。
*2：「金阿弥院仏　応安」。



第26図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑦



第27図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑧



第28図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑨

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
4三光寺跡裏	7—80	23.1	3.5	19.6	14.5	20.4	28.1	9.9	凝灰岩質砂岩、野澤№49
4三光寺跡裏	7—81	22.6	4.2	18.3	12.3	16.3	23.5	6.9	凝灰岩質砂岩、野澤№51
4三光寺跡裏	7—82	25.9	4.5	21.4	—	[18.5]	[24.3]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№53
4三光寺跡裏	7—83	22.3	4.2	18.1	—	[14.8]	[18.5]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№52
4三光寺跡裏	7—84	[19.3]	3.5	[15.8]	—	19.3	—	—	凝灰岩質砂岩、野澤№54
4三光寺跡裏	7—85	23.5	3.1	20.4	14.5	16.7	23.6	17.9	凝灰岩質砂岩、野澤№55
4三光寺跡裏	7—86	147.7	4	10.7	—	11.7	18.5	—	凝灰岩質砂岩、野澤№61
4三光寺跡裏	7—87	15.7	2.8	12.9	—	13	18.4	—	凝灰岩質砂岩、野澤№57

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

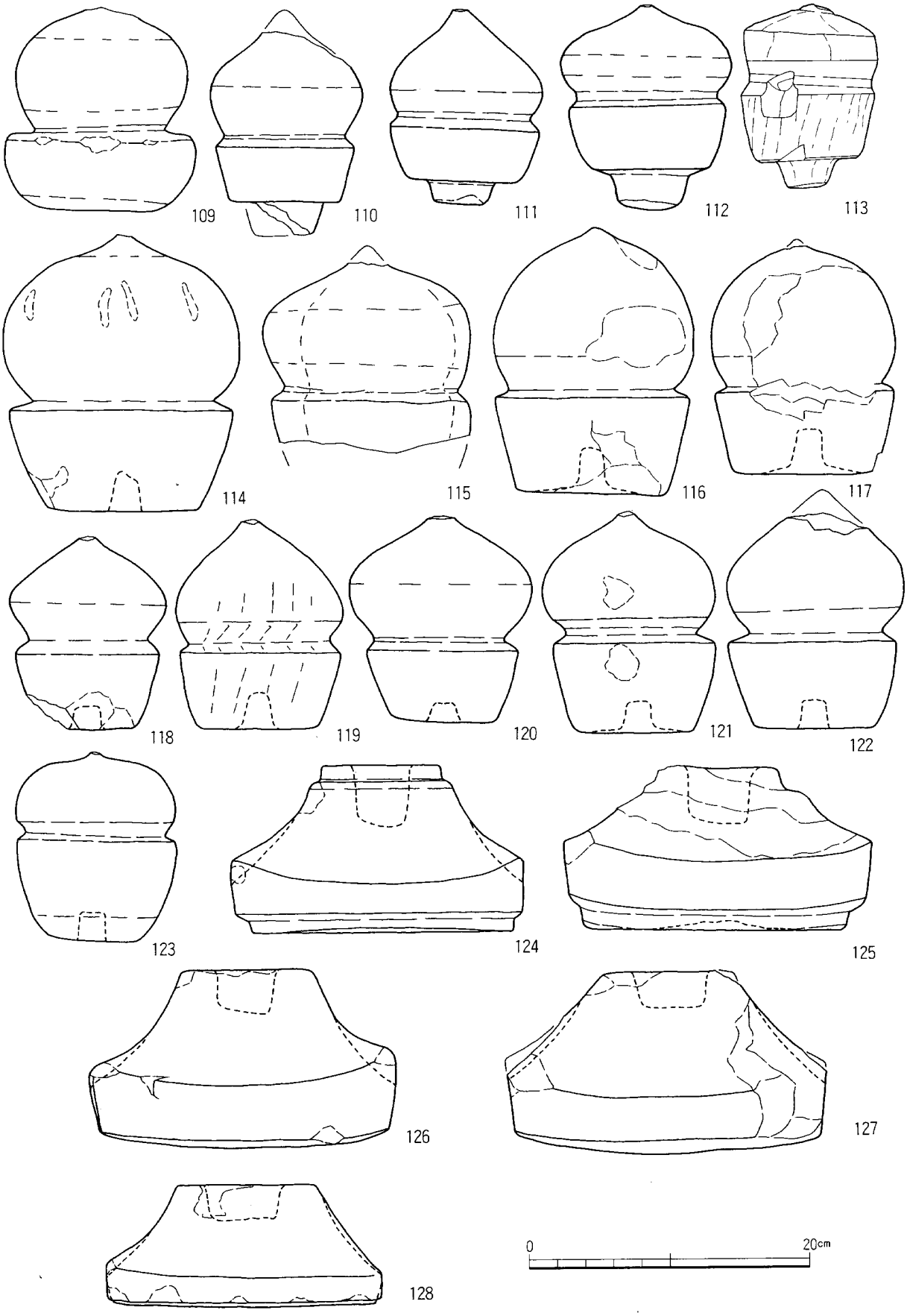
地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
4三光寺跡裏	8—88	21.9	3.6	18.3	—	19.4	24.7	—	凝灰岩質砂岩、野澤№56
4三光寺跡裏	8—89	22	3.9	18.1	—	19.1	24.8	—	凝灰岩質砂岩、野澤№59
4三光寺跡裏	8—90	16.5	3.1	13.4	—	16.6	21	—	凝灰岩質砂岩、野澤№64
4三光寺跡裏	8—91	15.7	2.4	13.3	—	10.7	17.9	—	凝灰岩質砂岩、野澤№63
4三光寺跡裏	8—92	15.2	4.1	11.1	—	14.2	19	—	凝灰岩質砂岩、野澤№65
4三光寺跡裏	8—93	15.9	3.4	12.5	—	13.7	21.5	—	凝灰岩質砂岩、野澤№60
4三光寺跡裏	8—94	13.5	2.6	9.9	—	13.8	17.9	—	凝灰岩質砂岩、野澤№67
4三光寺跡裏	8—95	17.9	2.8	15.1	—	11.7	17.2	—	凝灰岩質砂岩、野澤№74
4三光寺跡裏	8—96	22.1	3.9	18.2	—	16.1	21.7	—	凝灰岩質砂岩、野澤№72
4三光寺跡裏	8—97	19.4	4.6	14.8	—	13.4	17.6	—	花崗岩質砂岩、野澤№73
4三光寺跡裏	8—98	18.5	3.6	14.9	—	13.5	18.3	—	凝灰岩質砂岩、野澤№76

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

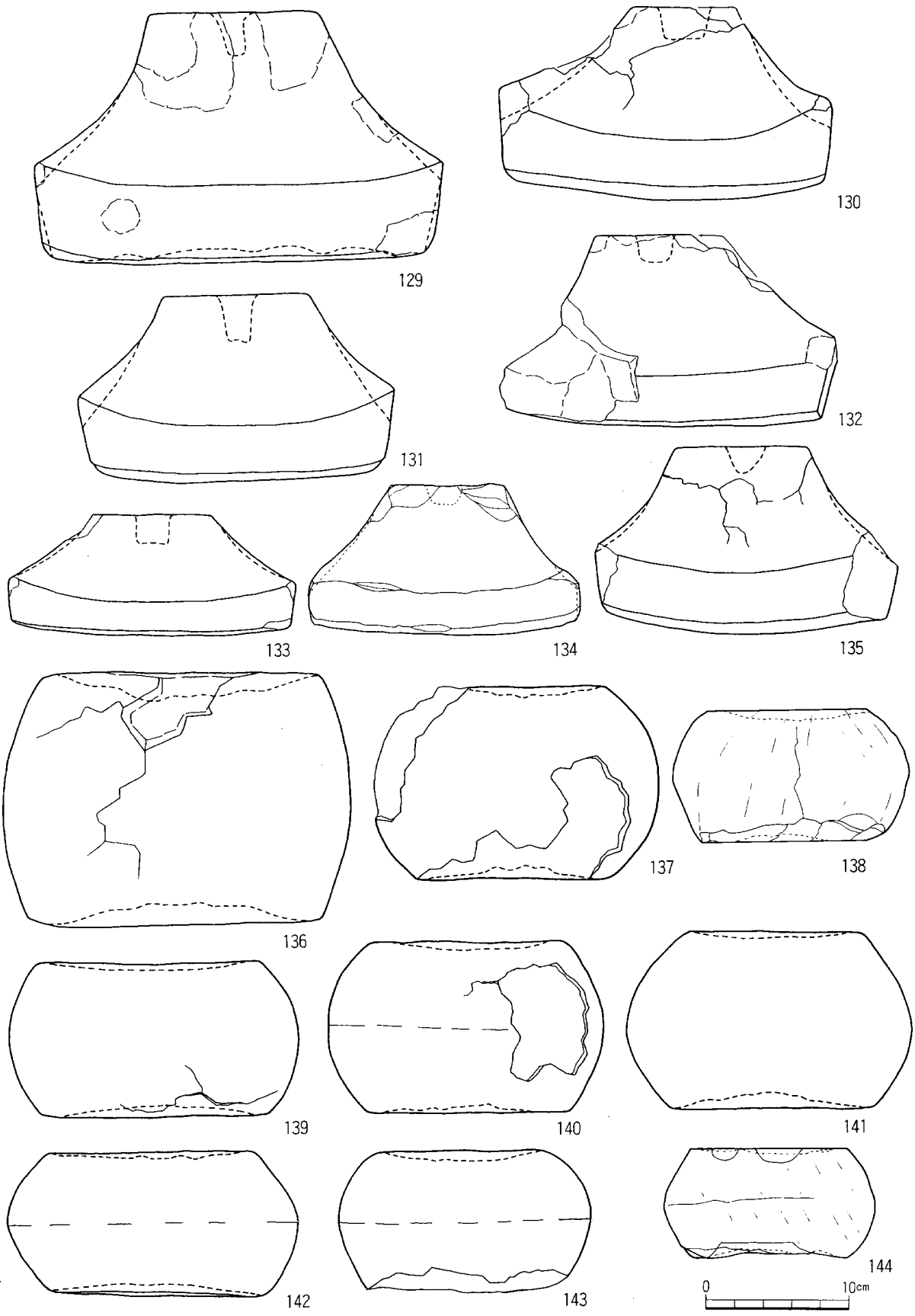
地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
4三光寺跡裏	9—99	15.7	2.5	13.2	—	[4.9]	[15.2]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№66
4三光寺跡裏	9—100	16.2	2.5	13.6	—	[15]	[19.6]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№68
4三光寺跡裏	9—101	16.9	—	—	—	12.5	19.7	—	凝灰岩質砂岩、野澤№69
4三光寺跡裏	9—102	18.2	3.8	14.4	—	[10.4]	[17.4]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№58
4三光寺跡裏	9—103	20.7	4.8	16	—	[12.1]	[18.1]	—	凝灰岩質砂岩、野澤№75

宝篋印塔・台座　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	反花座高	箱部高	上面幅	下面幅	框高	框幅	石材・備考
4三光寺跡裏	9—104	[11.8]	6	[5.8]	—	—	—	—	輝石安山岩
4三光寺跡裏	9—105	8.9	3.3	5.6	24.8	30.2	—	—	凝灰岩質砂岩、野澤№79
4三光寺跡裏	9—106	13.4	4.8	8.6	29.7	35.4	—	—	凝灰岩質砂岩、野澤№78
4三光寺跡裏	9—107	14.9	6	8.9	[3.0]	33.5	6	13.3	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	9—108	19.8	8.2	11.6	31.5	45.4	6.1	17.7	輝石安山岩、野澤№77



第29図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑩



第30図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑪

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺跡裏	10-109	14.4	8.9	5.5	—	12.2	9.3	13.5	—	緑色片岩、野澤No.15
4三光寺跡裏	10-110	16	9.2	4.4	2.4	10.8	8.6	9.9	[4.7]	凝灰岩質砂岩、野澤No.2
4三光寺跡裏	10-111	13.8	7.8	4.4	1.6	10.7	9.5	10.6	4.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.1
4三光寺跡裏	10-112	14.6	6.8	5.4	2.5	12.1	9.9	11.1	5.7	凝灰岩質砂岩、野澤No.3
4三光寺跡裏	10-113	13	5.8	5.2	2	9.3	8.7	9.4	4.5	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	10-114	19.6	11.8	7.8	2.8	16.8	12.8	15.8	2.5	凝灰岩質砂岩、野澤No.10
4三光寺跡裏	10-115	[13.5]	[9.1]	[3.4]	—	14.7	12.3	14.1	—	凝灰岩質砂岩、野澤No.14
4三光寺跡裏	10-116	18.9	11.5	7.4	3.2	14.2	11.8	13.8	7.1	凝灰岩質砂岩、野澤No.8
4三光寺跡裏	10-117	16.2	9.8	6.4	3.2	13.1	11	12.7	6.9	凝灰岩質砂岩、野澤No.9
4三光寺跡裏	10-118	13.8	7.4	6.4	1.7	11.1	8.4	10.3	2.5	凝灰岩質砂岩、野澤No.6
4三光寺跡裏	10-119	14.8	8.8	6	2.5	11.8	10	11.4	3	凝灰岩質砂岩、野澤No.11
4三光寺跡裏	10-120	14.7	9	5.7	1.3	12.9	9.2	10.6	2.4	凝灰岩質砂岩、野澤No.5
4三光寺跡裏	10-121	15.7	8.8	6.9	2.2	12.3	11.1	11.4	6.2	凝灰岩質砂岩、野澤No.12
4三光寺跡裏	10-122	[15.3]	8.5	6.8	2	12.6	9.4	11.9	2.2	凝灰岩質砂岩、野澤No.7
4三光寺跡裏	10-123	13.4	5.9	7.5	2	11.3	9.9	11.2	2	凝灰岩質砂岩、野澤No.13

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

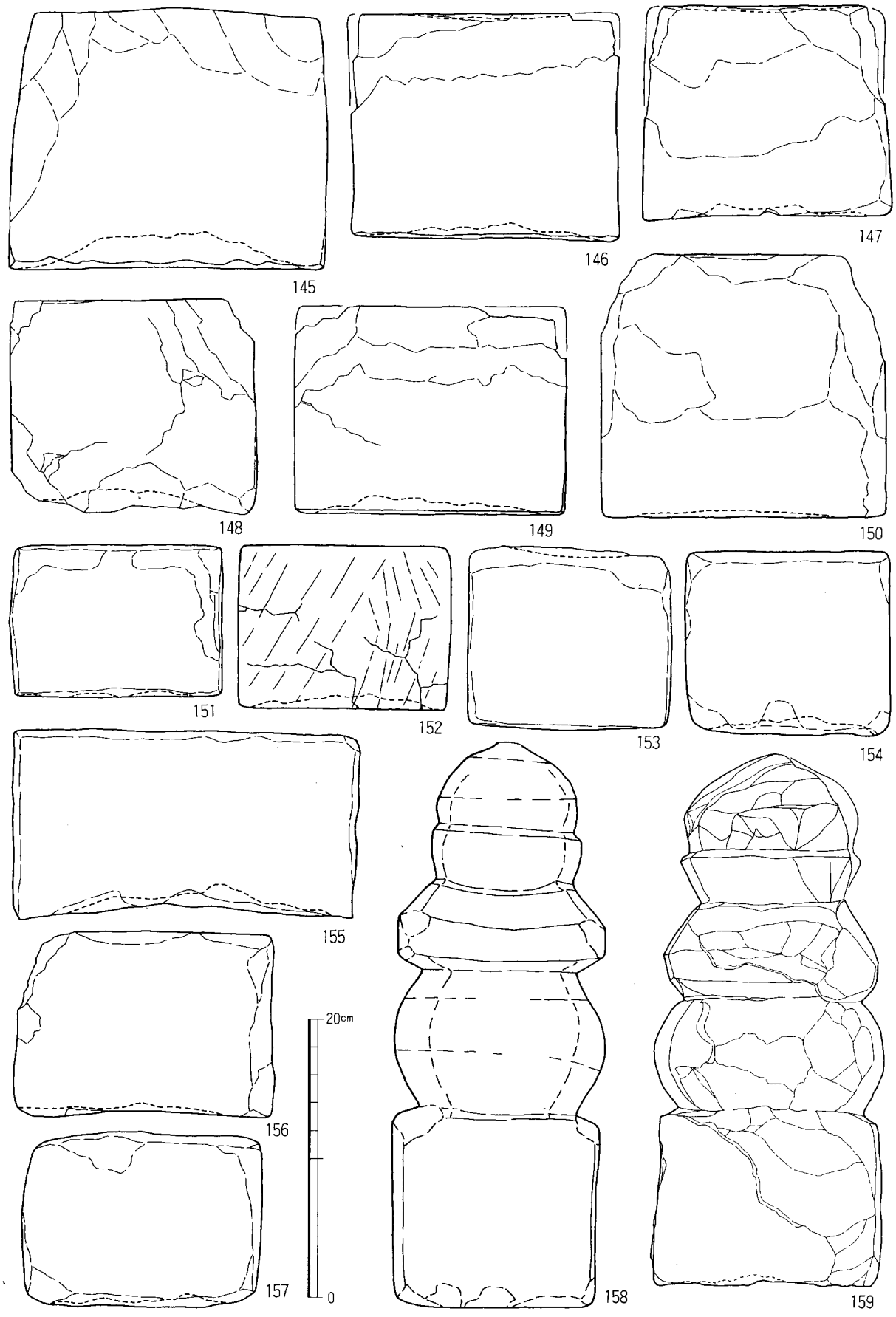
地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺跡裏	10-124	11.9	8.4	3.5	5.2	8.1	20.7	4.4	4.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.19
4三光寺跡裏	10-125	12	6.7	4.9	5.3	7.8	21.9	3.9	5.4	凝灰岩質砂岩、野澤No.20
4三光寺跡裏	10-126	12.7	8.1	4.4	6.8	9.2	21.3	3.2	4.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.16
4三光寺跡裏	10-127	13.9	8.9	4	[6.4]	[7.9]	22.7	2.5	5.5	凝灰岩質砂岩、野澤No.18
4三光寺跡裏	10-128	8.7	6.6	2.1	3.3	9.7	19.5	2.4	5.7	凝灰岩質砂岩、野澤No.21

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
4三光寺跡裏	11—129	17.4	12	5.4	6.8	11.7	28	3	3.2	凝灰岩質砂岩、野澤No.22
4三光寺跡裏	11—130	13.4	9.2	4.2	7.8	7.2	23.1	2.2	3.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.17
4三光寺跡裏	11—131	12.9	9.1	3.8	5.5	10.1	21.8	3.3	3	凝灰岩質砂岩、野澤No.25
4三光寺跡裏	11—132	13.3	9.8	3.5	6.2	[6.5]	[19.4]	1.9	2.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.27
4三光寺跡裏	11—133	8.4	6	2.4	3.7	8.2	21.9	2	2.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.28
4三光寺跡裏	11—134	10.4	7.4	3	4.6	7.4	18.6	1.8	2.7	凝灰岩質砂岩、野澤No.？
4三光寺跡裏	11—135	13	8.6	4.4	6.8	9.6	21	1.8	2.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.24

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
4三光寺跡裏	11—136	17.5	17.7	24.1	19.3	凝灰岩質砂岩、野澤No.32
4三光寺跡裏	11—137	13.3	[9.6]	[19.8]	13.2	凝灰岩質砂岩、野澤No.31
4三光寺跡裏	11—138	9.1	11	16.4	11.4	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	11—139	10.6	15.2	15.9	20.1	凝灰岩質砂岩、野澤No.33
4三光寺跡裏	11—140	11.8	13.6	19	13.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.29
4三光寺跡裏	11—141	12.2	11.9	19.9	14	凝灰岩質砂岩、野澤No.30
4三光寺跡裏	11—142	10	14.1	20.2	14.4	凝灰岩質砂岩、野澤No.35
4三光寺跡裏	11—143	[9.8]	10.7	17.4	[12.7]	凝灰岩質砂岩、野澤No.34
4三光寺跡裏	11—144	[7.8]	[10.7]	14.7	10.9	凝灰岩質砂岩



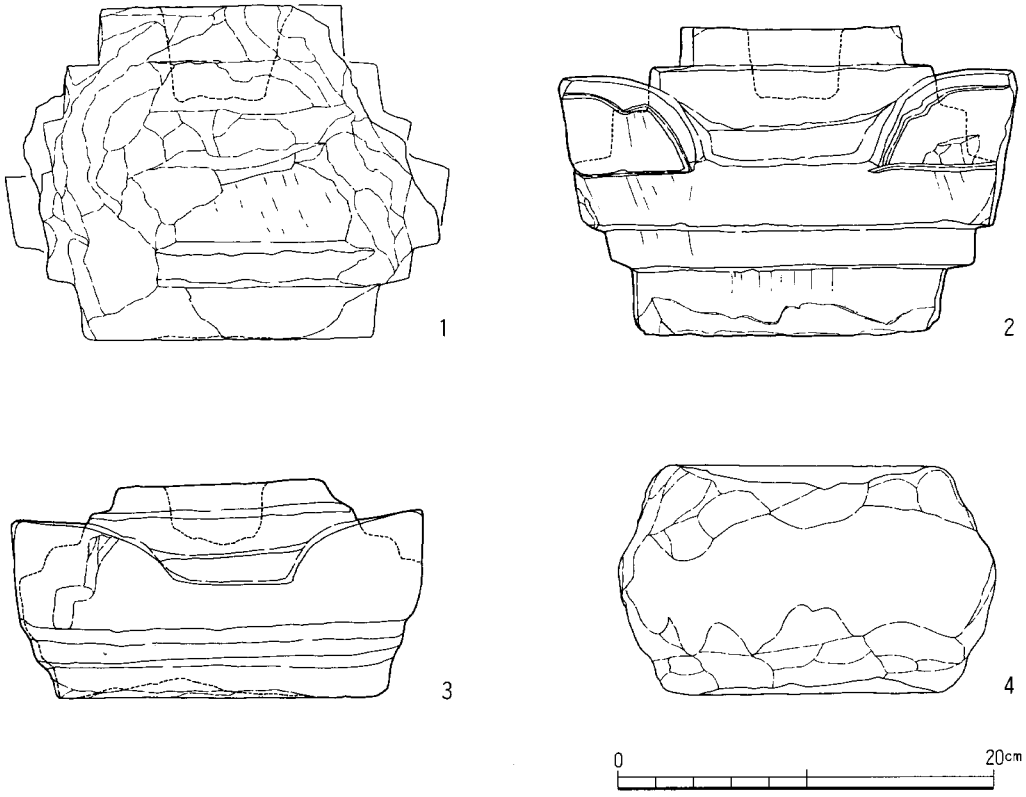
第31図　4. 奥横地　三光寺跡裏 ⑫

五輪塔・地輪　計測データ　（単位はcm）

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
4三光寺跡裏	12—145	18.6	20.4	22.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.47
4三光寺跡裏	12—146	16.1	[14.8]	18.9	凝灰岩質砂岩、野澤No.46
4三光寺跡裏	12—147	15.1	[14.5]	17.5	凝灰岩質砂岩、野澤No.41
4三光寺跡裏	12—148	14.8	[12.9]	17.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.44
4三光寺跡裏	12—149	14.8	[8.0]	19.3	凝灰岩質砂岩、野澤No.39
4三光寺跡裏	12—150	18.8	13.2	20.1	凝灰岩質砂岩、野澤No.45
4三光寺跡裏	12—151	10.9	14.6	14.8	白色凝灰岩、野澤No.36
4三光寺跡裏	12—152	11.7	14.2	14.3	凝灰岩質砂岩、野澤No.46
4三光寺跡裏	12—153	13.1	14.3	13.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.42
4三光寺跡裏	12—154	13.1	13.5	13.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.43
4三光寺跡裏	12—155	13.6	24.5	23.8	凝灰岩質砂岩、野澤No.38
4三光寺跡裏	12—156	13.1	[13.9]	18.3	凝灰岩質砂岩、野澤No.40
4三光寺跡裏	12—157	12.6	[13.5]	15.6	凝灰岩質砂岩、野澤No.37

一石五輪塔　計測データ　（単位はcm）

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
4三光寺跡裏	12—158	46	6.7	4.3	5.4	10.8	13.8	10.1	10.7	14.8	15.1	14.8	凝灰岩質砂岩
4三光寺跡裏	12—159	37.9	7.5	3.4	7.2	8	12	[11.3]	12.2	15.4	16.4	15.5	凝灰岩質砂岩



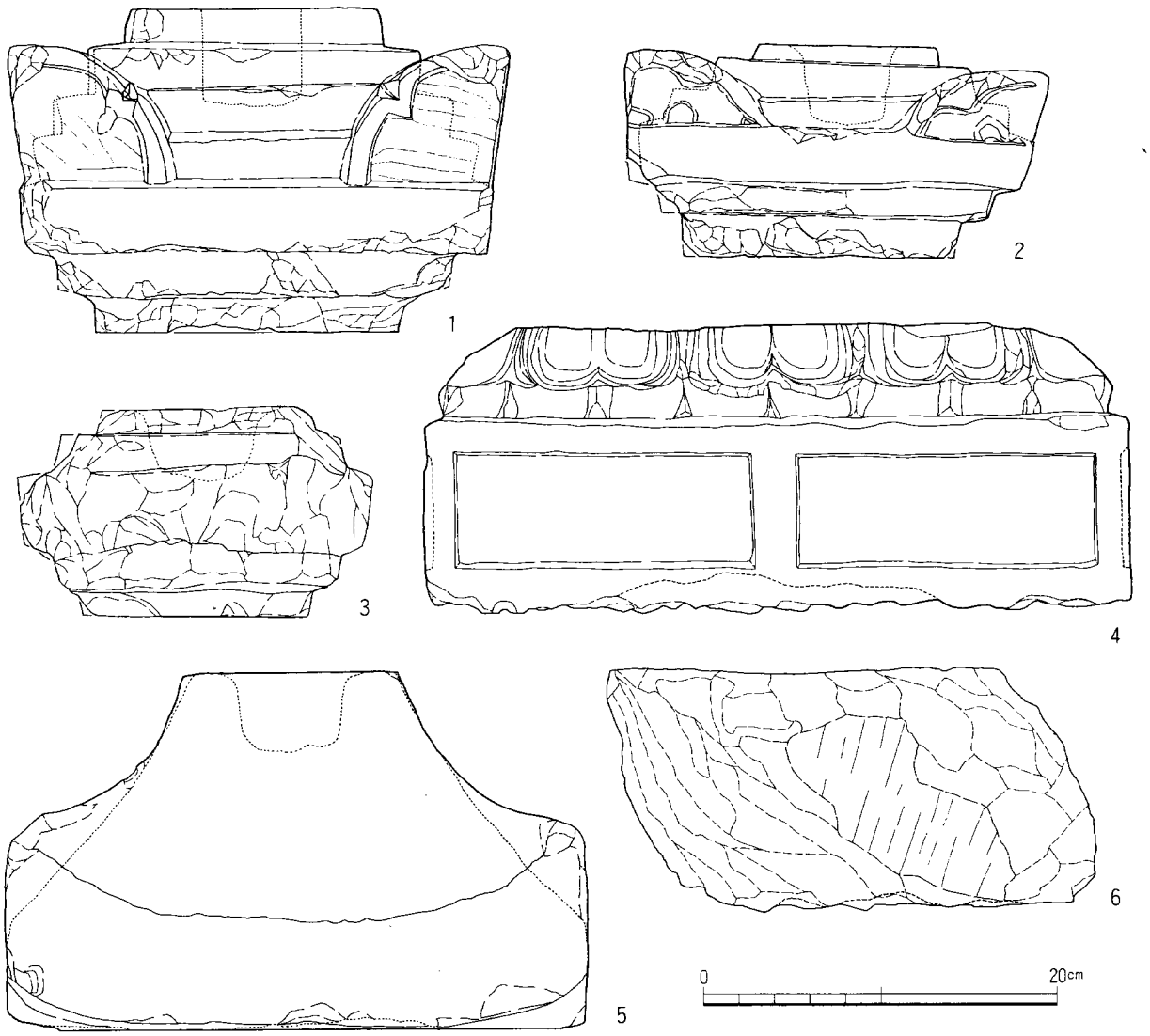
第32図
上段　5. 奥横地 坪井政則氏宅
下段　6. 奥横地 福島唯雄氏宅

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
5坪井氏宅	1	17.6	8.6	—	4.5	4.6	[10.1]	—	[21.0]	15.4	4.9	7	凝灰岩質砂岩
5坪井氏宅	2	16.2	6.9	5	3.4	5.5	11.6	7.5	22.7	16.2	3.5	5	花崗岩質砂岩
6福島氏宅	3	11.2	5	3.5	2.3	3.7	10.8	8.4	21.4	17.6	3.2	5.5	花崗岩質砂岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
6福島氏宅	4	12	14.5	20	14.5	凝灰岩質砂岩



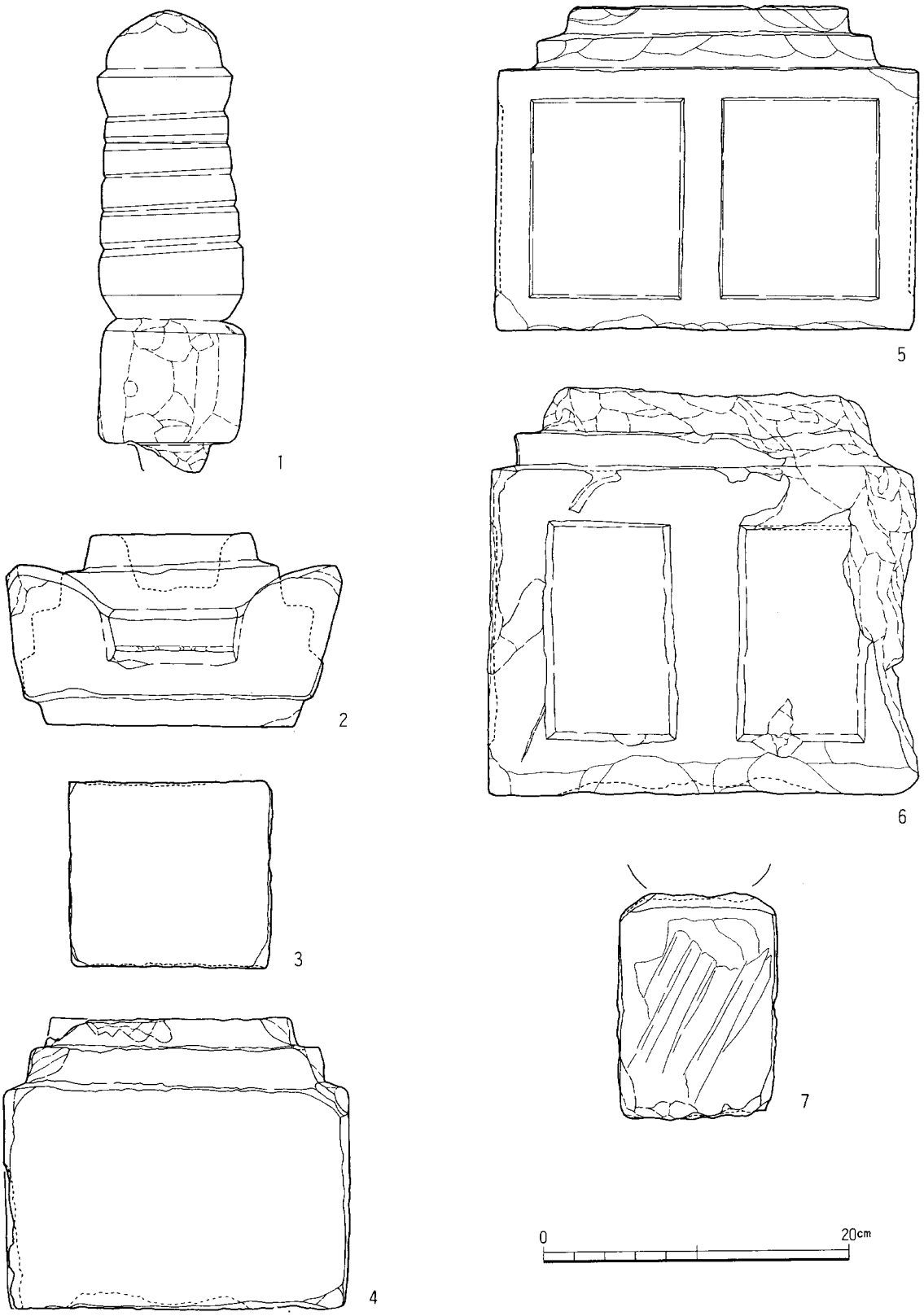
第33図　7. 神尾　宝珠院・宇籐遺跡

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
7神尾宝珠院	1	18.2	9.5	8.1	3.6	4.5	14.9	8.6	26.8	17.1	5.5	5.6	輝石安山岩？
7神尾宝珠院	2	11.9	4.6	4.4	3.4	3.8	10	8.3	22.9	13.8	4.5	6	凝灰岩質砂岩
7神尾宝珠院	3	11.5	3.2	—	4.4	4	[10.1]	—	[19.8]	[11.9]	4.1	8.3	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・台座　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	反花座高	箱部高	上面幅	下面幅	框高	框幅	石材・備考
7神尾宝珠院	4	16.2	5	11.2	28.8	39.8	6.5	16.9	輝石安山岩？



第34図　8. 西横地　藤谷神社下・二俣家墓

8、 藤谷神社下二俣家墓

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
7神尾宝珠院	5	20	14	6	11.8	12.2	32.8	4.5	8	緑色片岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
7神尾宝珠院	6	13.2	—	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
8藤谷神社下	1	30.3	3.8	3	8.5	4.8	8.2	2	7.6	8.9	9.1	9.4	9.1	5	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
8藤谷神社下	2	12.5	8.5	6	2.1	1.8	10.4	6.7	20	16.1	3.7	7.5	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

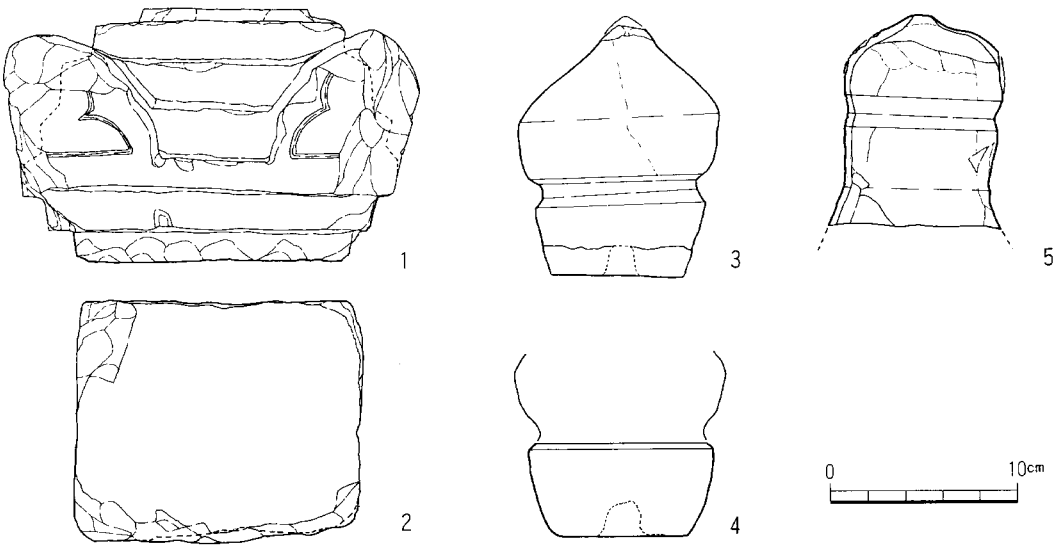
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
8藤谷神社下	3	12	12.7	12.5	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
8藤谷神社下	4	18.9	4.4	14.5	—	[13.0]	21.7	—	凝灰岩質砂岩
8藤谷神社下	5	21	4	17	13	17.9	26.7	9.9	凝灰岩質砂岩
8藤谷神社下	6	26.4	5	21.4	14.3	—	26.5	8.5	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
8藤谷神社下	7	[14.6]	—	—	—	—	14.6	—	—	—	6.4	[10.2]	凝灰岩質砂岩



第35図 9. 土橋 山崎宅

宝篋印塔・笠部 計測データ (単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
9土橋山崎宅	1	13.4	7.7	8.2	1.7	3.7	8.7	7.6	20.2	13.5	—	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部 計測データ (単位はcm)

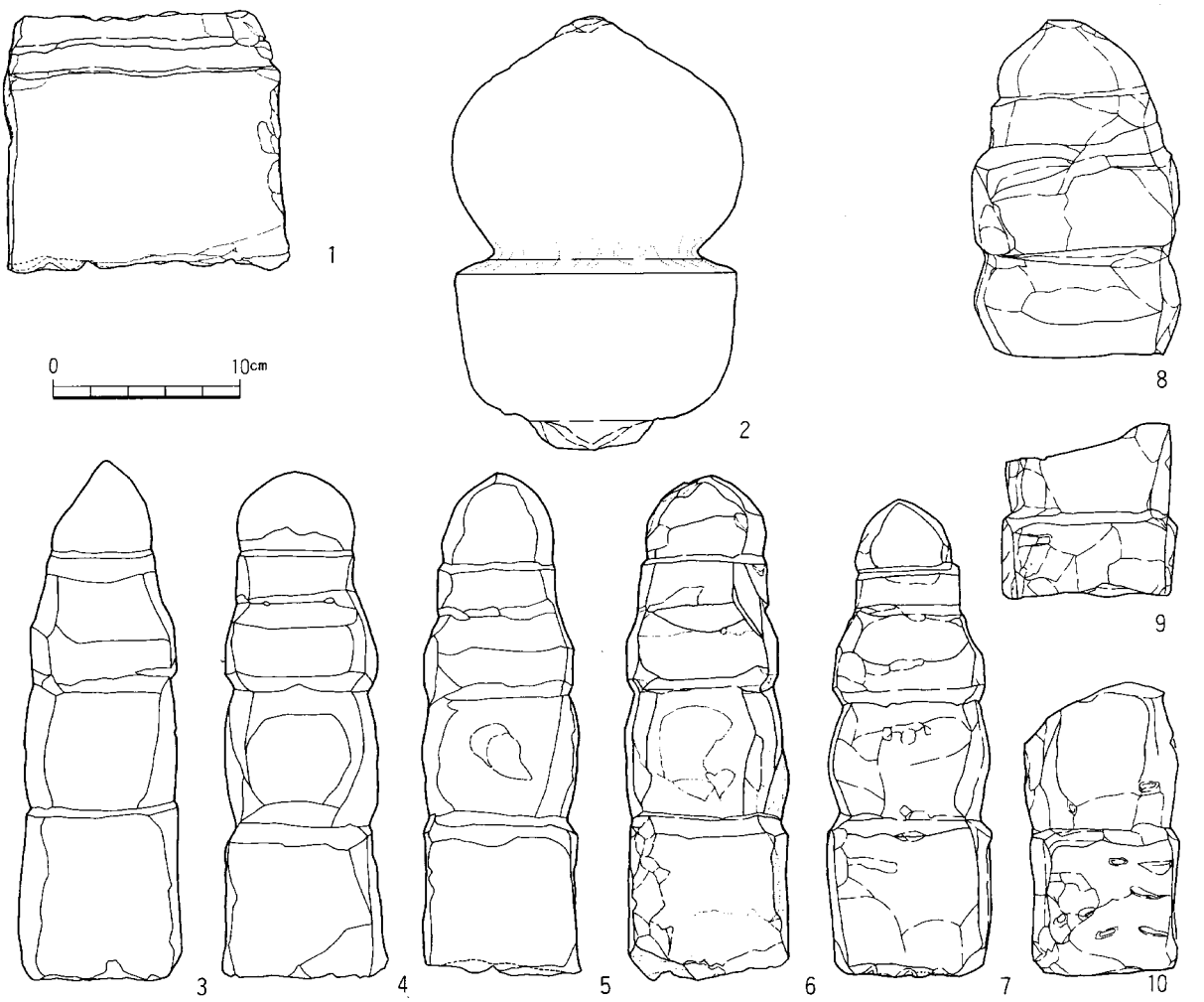
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
9土橋山崎宅	2	12.7	13.9	14.9	花崗岩質砂岩？

五輪塔・空風軸 計測データ (単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
9土橋山崎宅	3	[13.2]	[8.2]	5	1.6	10.6	8.1	9	2	凝灰岩質砂岩
9土橋山崎宅	4	[4.9]	—	4.9	1.9	—	—	9.7	2.6	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔 計測データ (単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
9土橋山崎宅	5	[11.2]	5.3	3.9	2	—	—	8.5	8.2	—	—	—	花崗岩質砂岩



第36図　10. 段横地　旧公会堂

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

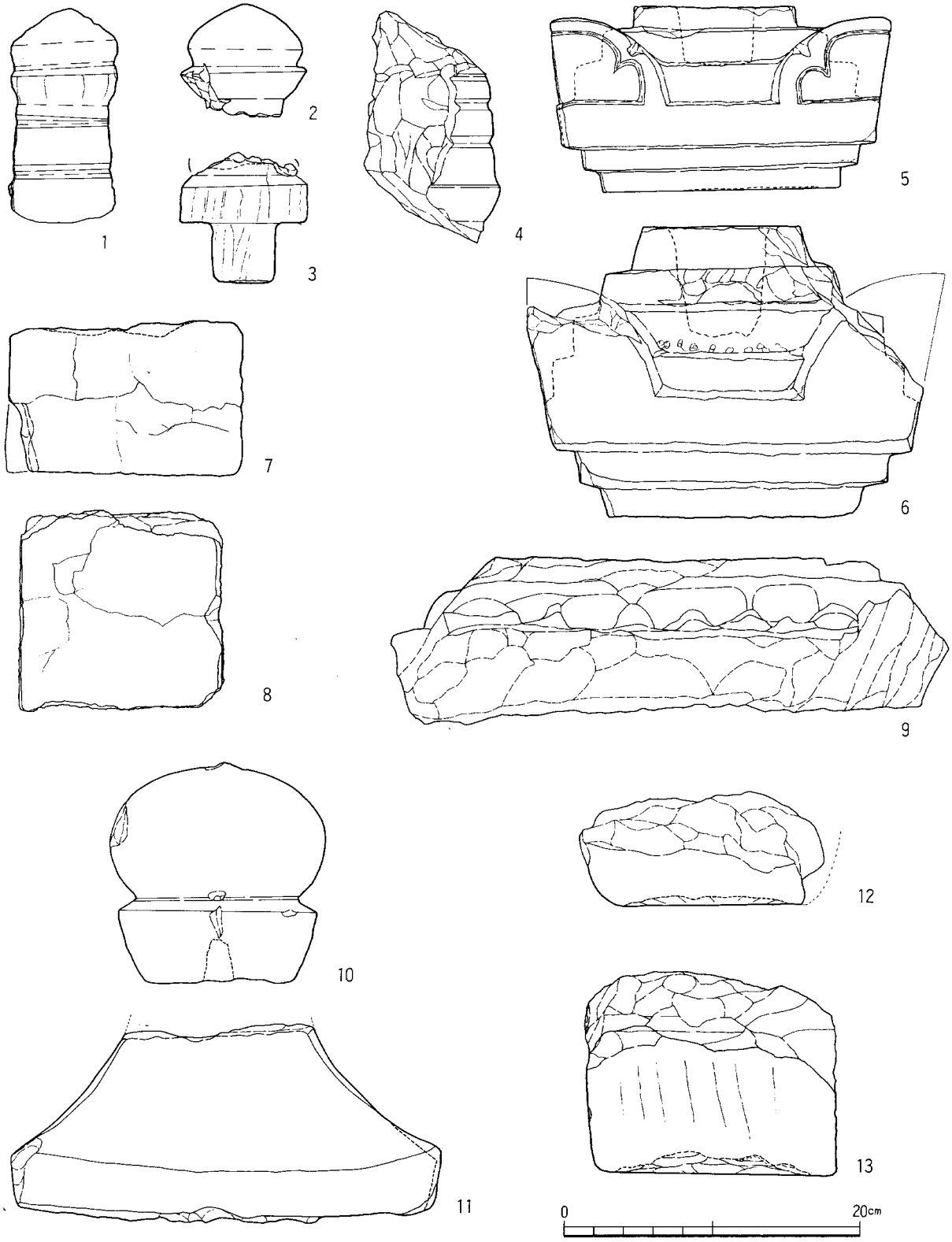
地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
10旧公会堂	1	13.4	3	10.4	—	12	15.1	—	花崗岩質砂岩

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
10旧公会堂	2	23	12.9	8.6	1.5	15.5	10.9	15	6.6	輝石安山岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
10旧公会堂	3	27.6	5.2	1.3	5.1	7	9	5.4	5.9	7.7	8.1	8.7	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	4	27	4.1	2.5	5.1	7.3	8	6.3	5.2	8.2	8.2	8.4	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	5	26.8	4.8	2.9	4.4	6.4	8.5	6	6.3	7.9	8.3	8.2	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	6	27	4.2	2.7	4.5	7	8.5	6.4	7	8.1	8.6	8.5	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	7	25.4	3.8	2.4	5.2	6.3	8.4	5.2	5.6	8.1	8.6	8.7	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	8	[18.0]	4.2	2.5	5.5	5.7	—	7.6	8.9	11	11	—	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	9	[9.2]	—	—	—	[5.3]	4	—	—	—	8.8	9.4	花崗岩質砂岩
10旧公会堂	10	[15.5]	—	—	—	[8.0]	7.5	—	—	—	8.2	8	花崗岩質砂岩



第37図　11. 段横地　天神森

11、 天神森

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
11天神森	1	[14.4]	4	2.5	[7.9]	—	—	—	7.2	7.1	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
11天神森	2	[7.6]	4.1	2.2	—	—	—	—	7.7	8.5	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
11天神森	3	[8.8]	—	—	—	—	3.2	4	—	—	—	—	8.6	4.7	凝灰岩質砂岩
11天神森	4	[15.4]	—	—	11.7	2.4	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
11天神森	5	12.3	6.3	5.8	3	3	10.3	7.6	21.8	16.2	3.6	5.6	凝灰岩質砂岩
11天神森	6	19.5	11.1	—	4.2	4.4	10.6	8.3	25.3	16.4	7.4	7	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
11天神森	7	10.4	14	13.6	凝灰岩質砂岩
11天神森	8	13	12	13.7	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・台座　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	反花座高	箱部高	上面幅	下面幅	框高	框幅	石材・備考
11天神森	9	9.9	4.8	5.3	25.8	33.5	—	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
11天神森	10	14.7	9.3	5.5	2.9	14.5	10.9	13.3	2.1	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
11天神森	11	16.4	12.8	3.6	4.4	15	25.5	4.4	7.5	凝灰岩質砂岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
11天神森	12	[7.6]	—	—	12.1	凝灰岩質砂岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
11天神森	13	[13.5]	—	15.2	凝灰岩質砂岩



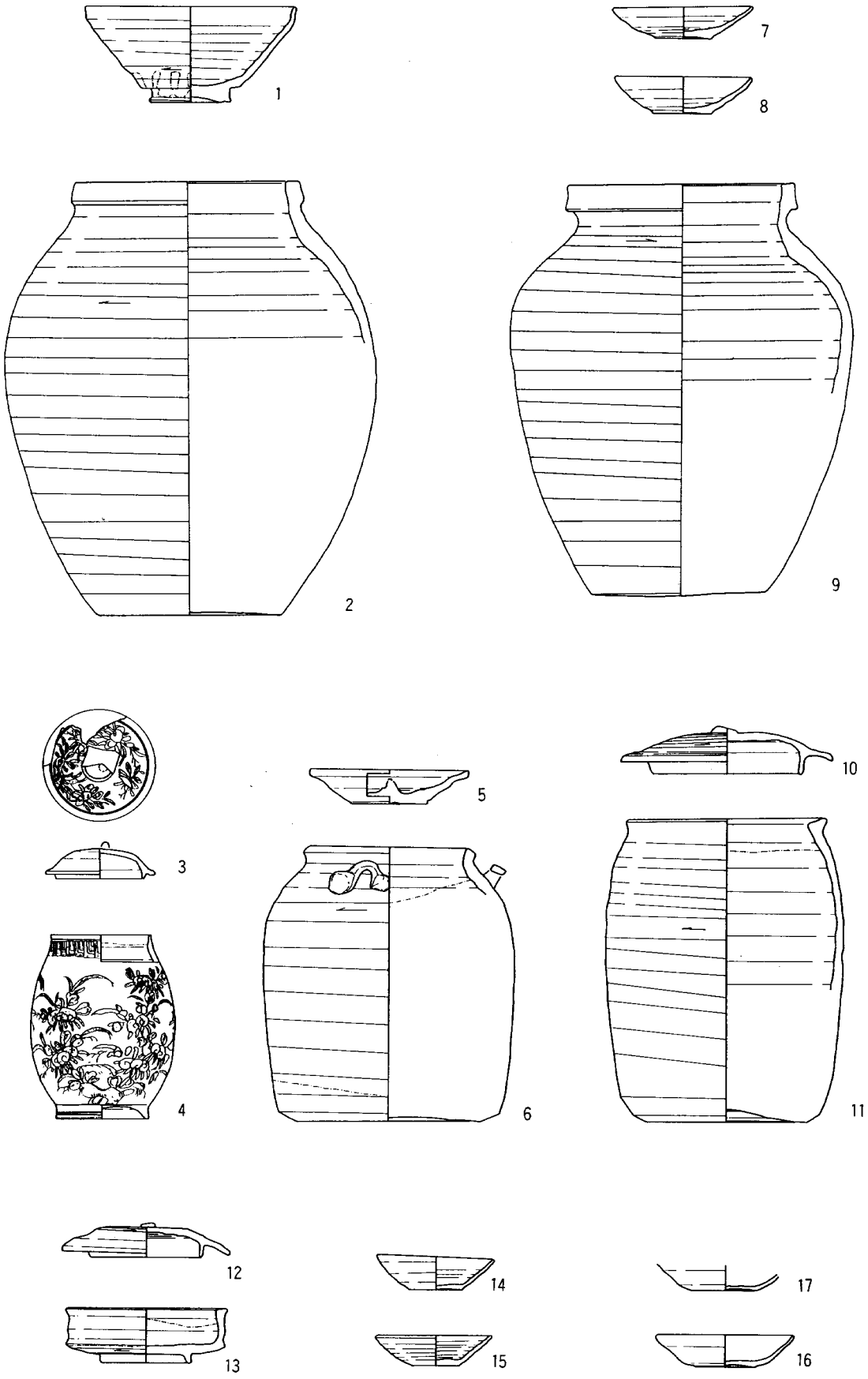
第38図　12. 段横地　興嶽寺墓所平面図



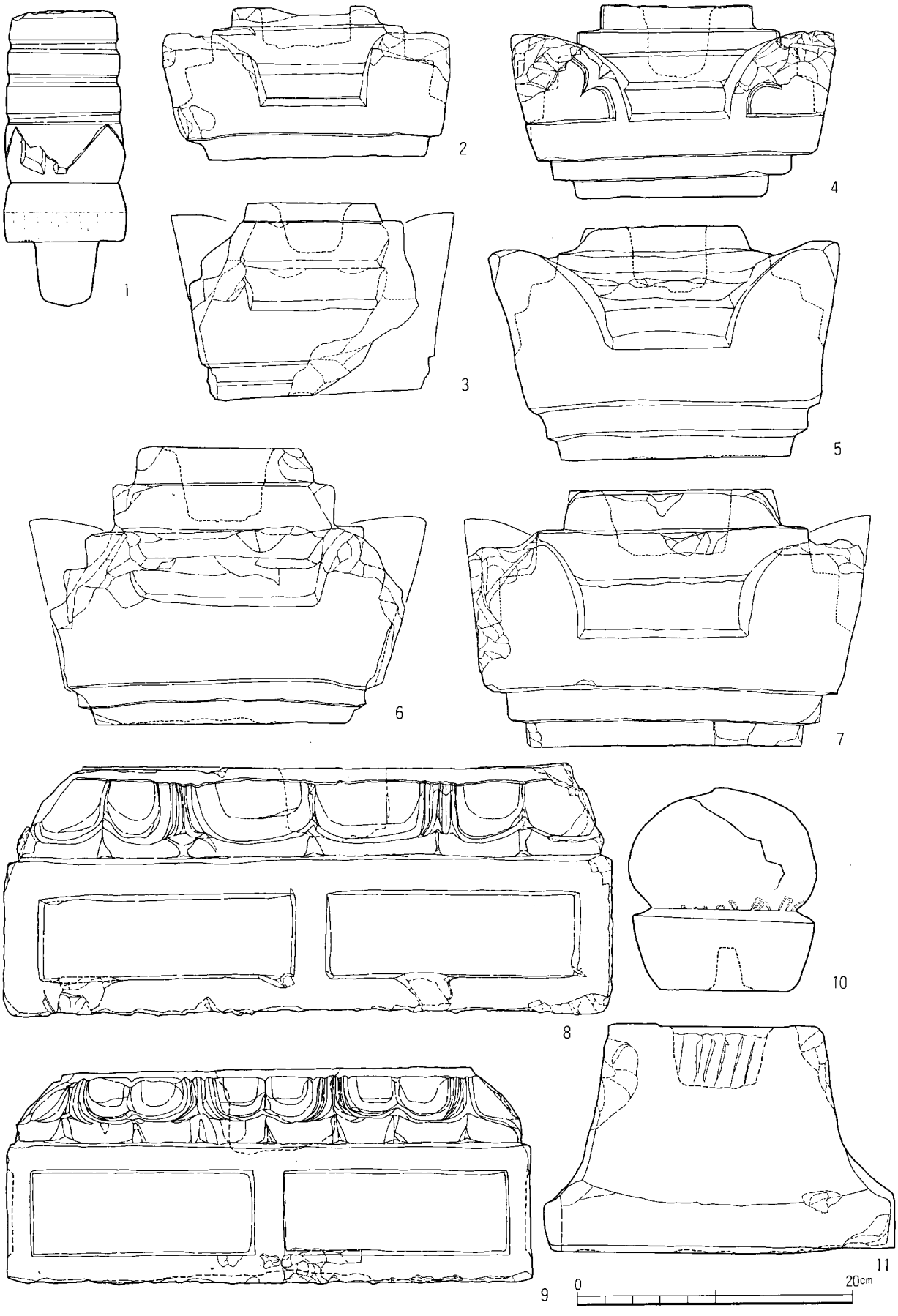
1　興嶽寺墓所石造物



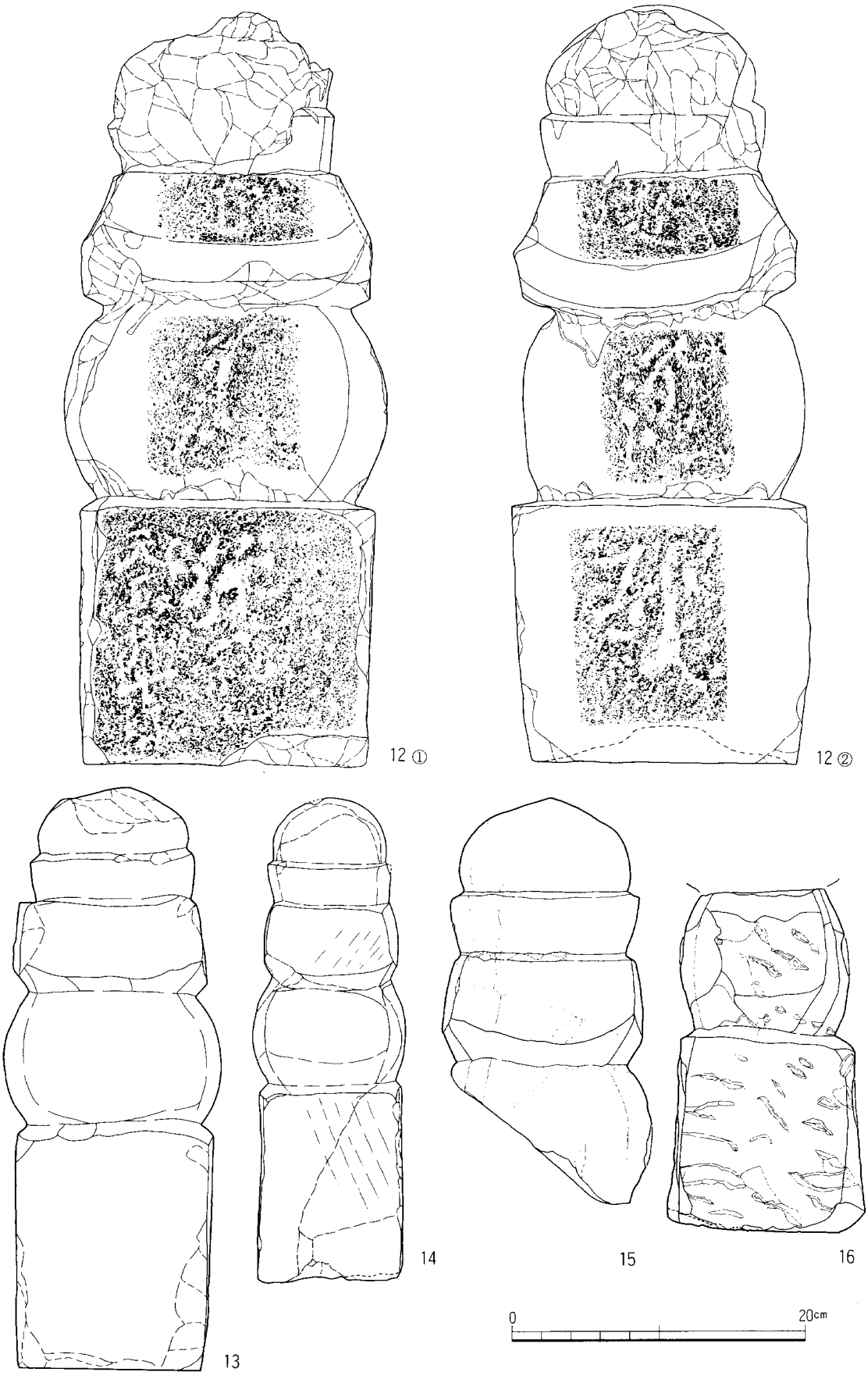
2　興嶽寺墓所石敷状態



第39図　興嶽寺墓所出土遺物（縮尺1/4）　1・2(10世)、3・4(11世)、5・6(12世)、7～9(F墓)、10・11(G墓)
12～15(H墓)、16・17(E墓)



第40図　12. 段横地　興嶽寺 ①



第41図　12. 段横地　興嶽寺 ②

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
12興嶽寺	1—1	[21.4]	—	—	[8.1]	4.4	4.3	4.7	—	—	8.3	8.5	8.9	4.7	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
12興嶽寺	1—2	[11.0]	[6.6]	5.3	2.1	1.8	—	6.9	19.7	15.7	3	6.6	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	1—3	14	7.1	—	4	2.3	9.2	4.6	—	—	3.6	6.1	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	1—4	13.7	7.6	6.6	2.7	2.9	11	7.8	21.6	13.3	5.1	5.6	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	1—5	16.8	7.5	7.3	4.1	3.9	[10.2]	7.3	22.4	16.5	4.8	5.8	花崗岩質砂岩
12興嶽寺	1—6	20	10.8	—	5.5	3	10.9	—	25.7	18.1	5.3	8.1	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	1—7	18.4	10.1	—	3.7	4.2	12.4	7.9	27.1	19.3	4.5	9.4	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・台座　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	反花座高	箱部高	上面幅	下面幅	框高	框幅	石材・備考
12興嶽寺	1—8	17.5	6.7	10.8	35	42.8	6.2	18.7	凝灰岩質砂岩？
12興嶽寺	1—9	15.4	5.7	9.7	29.6	38	6.2	16.3	凝灰岩質砂岩？

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

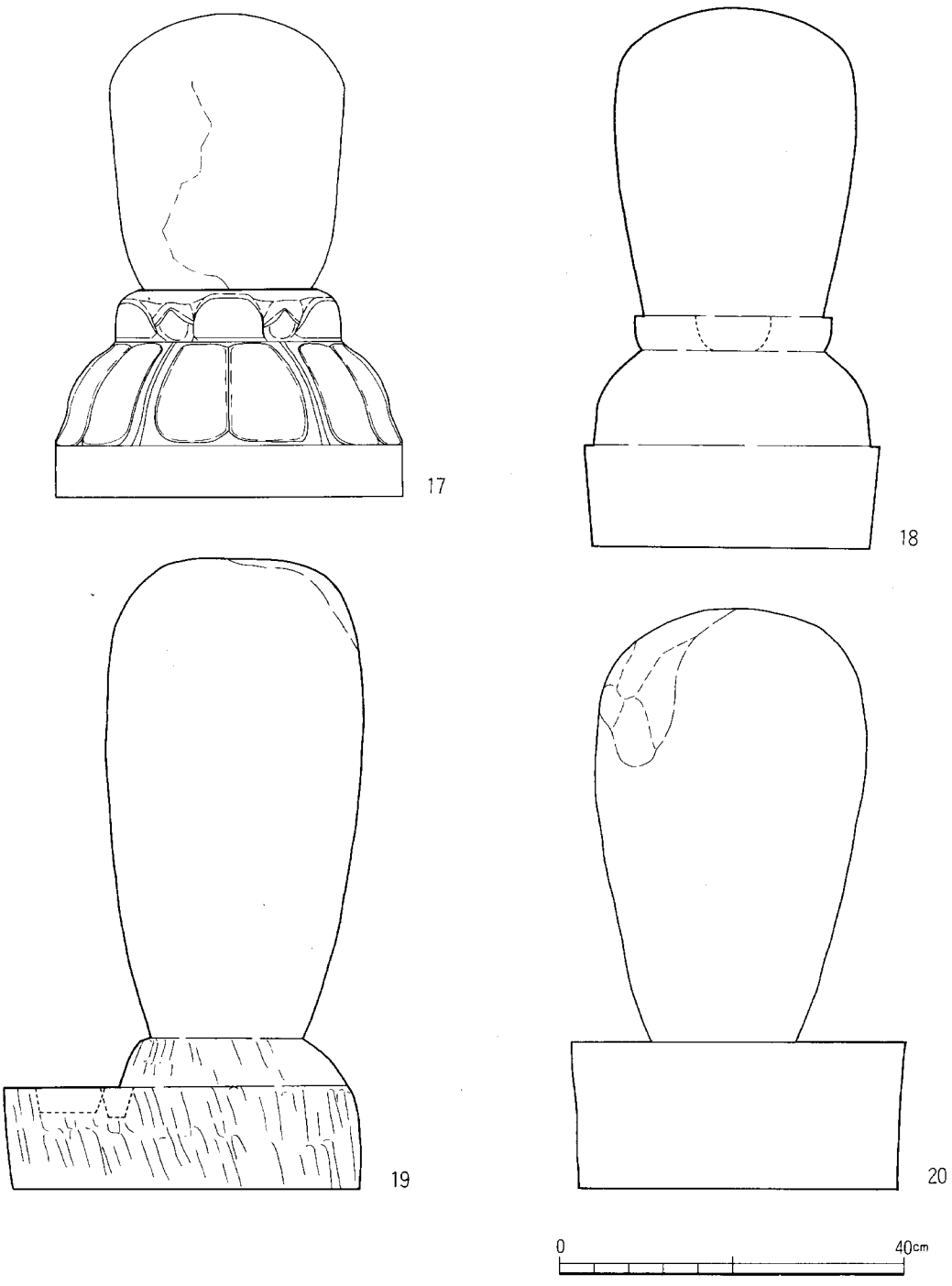
地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
12興嶽寺	1—10	14.7	8.8	5.9	3.1	13.6	10.6	13.2	3.5	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
12興嶽寺	1—11	16.4	12.8	3.6	4.4	15	25.5	4.4	7.5	花崗岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

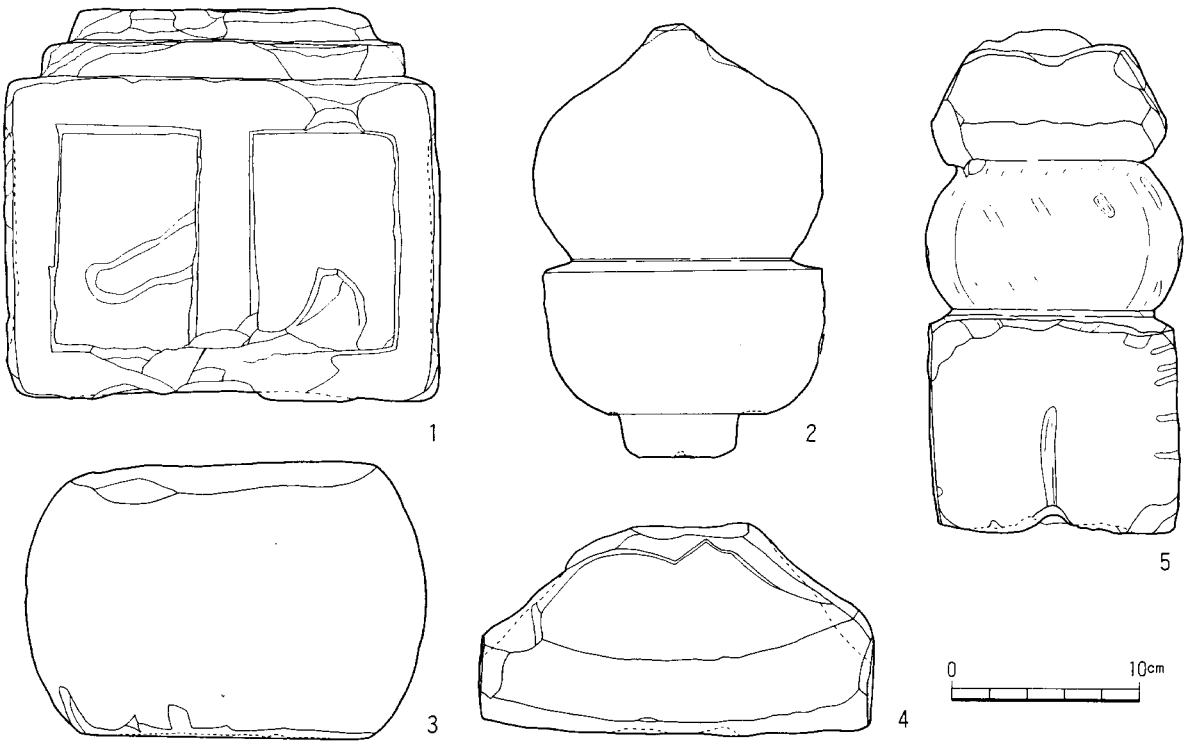
地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
12興嶽寺	2—12	51.1	6.5	4.7	8.7	13.3	18	14.4	15.3	19.8	21.9	20.1	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	2—13	39.5	4.6	3	6.2	8.9	16.8	10.2	11.2	13.1	14.8	13.4	凝灰岩質砂岩
12興嶽寺	2—14	32.7	4.9	2.7	5.6	6.4	13.2	7.7	8.4	9.1	10.4	9.7	凝灰岩質砂岩、発掘出土品。
12興嶽寺	2—15	[27.4]	6.4	4.4	7.5	9.3	—	11.6	12.8	13.7	—	—	花崗岩質砂岩
12興嶽寺	2—16	[23.1]	—	—	—	9.9	13.2	—	—	—	11.5	13.5	凝灰岩質砂岩



第42図　12. 段横地　興嶽寺 ③

無縫塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	塔身高	受花高	台座高	最大径	基部径(幅)	受花径	台座幅	石材・備考
12興嶽寺	3−17	28	16	3	9	13.5	9.7	13	20.1	
12興嶽寺	3−18	31.2	17.8	2	11.4	13.8	10.4	11.4	17.1	
12興嶽寺	3−19	36.5	27.7	2.8	4.9	14.9	8.8	13.2	20	
12興嶽寺	3−20	33.5	25	—	8.5	15.5	8.4	—	19.4	



第43図　13. 段横地　常泉寺

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
13段横地常泉寺	1	20.1	3.6	16.5	11.4	15	22	8	凝灰岩質砂岩

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
13段横地常泉寺	2	22.9	12.3	8	2.3	15.2	11.5	14.8	6.5	輝石安山岩、底面にトンボ穴

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

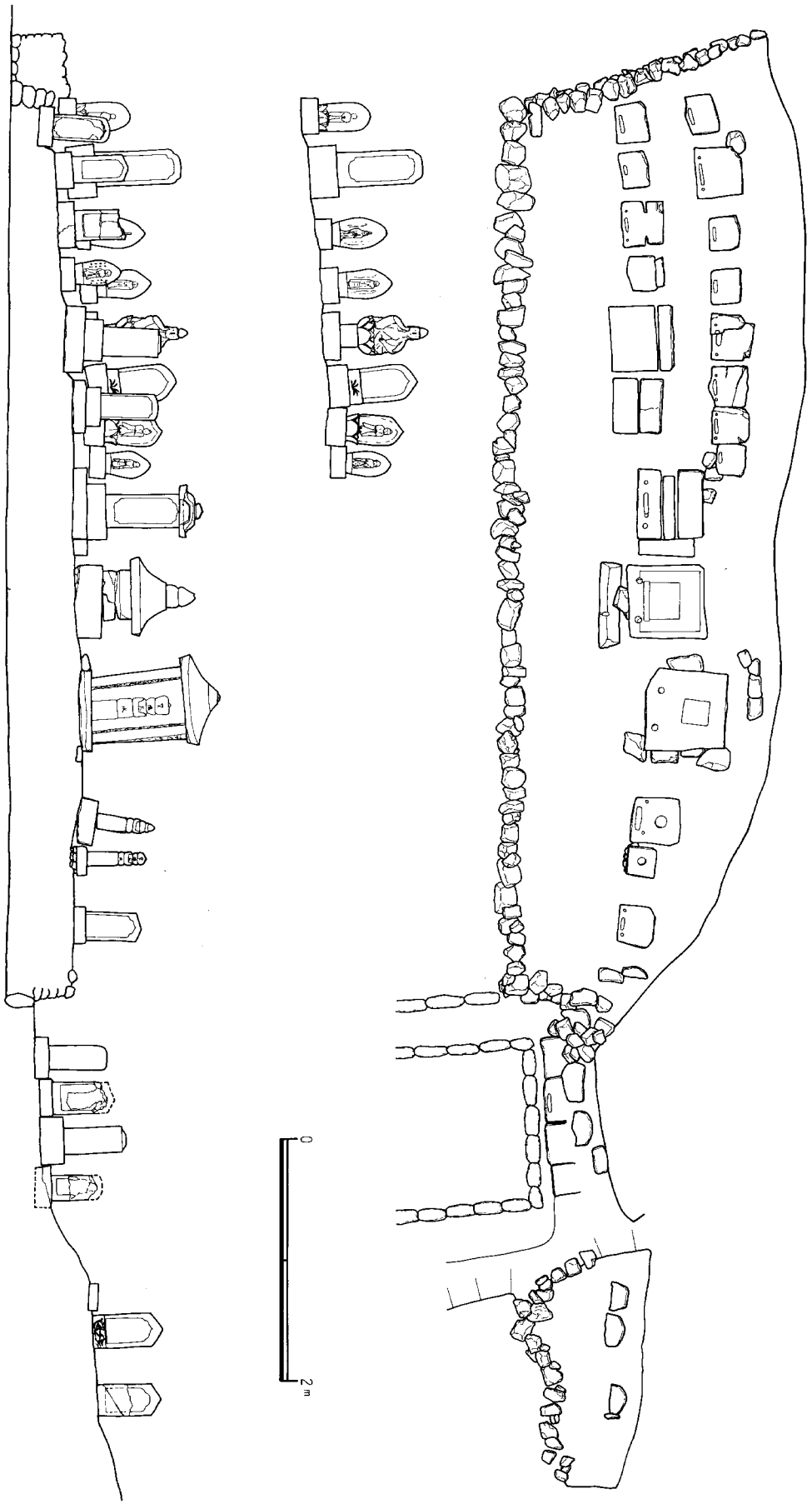
地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
13段横地常泉寺	3	14.4	15	21.2	15.5	花崗岩質砂岩？

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
13段横地常泉寺	4	11.3	7.5	4	6.5	7.2	20.7	—	—	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
13段横地常泉寺	5	[26.6]	—	—	[6.9]	8.2	12	—	—	12.5	13.6	13	凝灰岩質砂岩



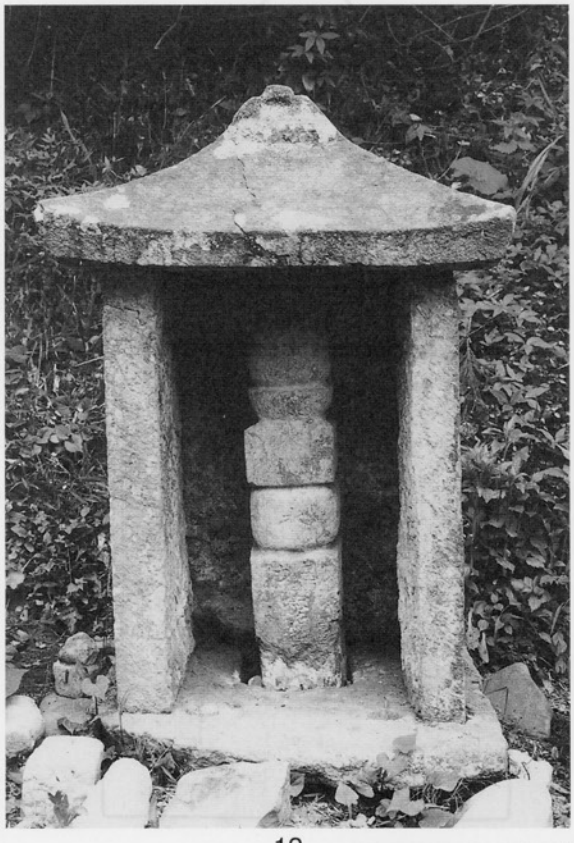
第44図　14. 三沢　龍谷寺墓所平面図



11



10

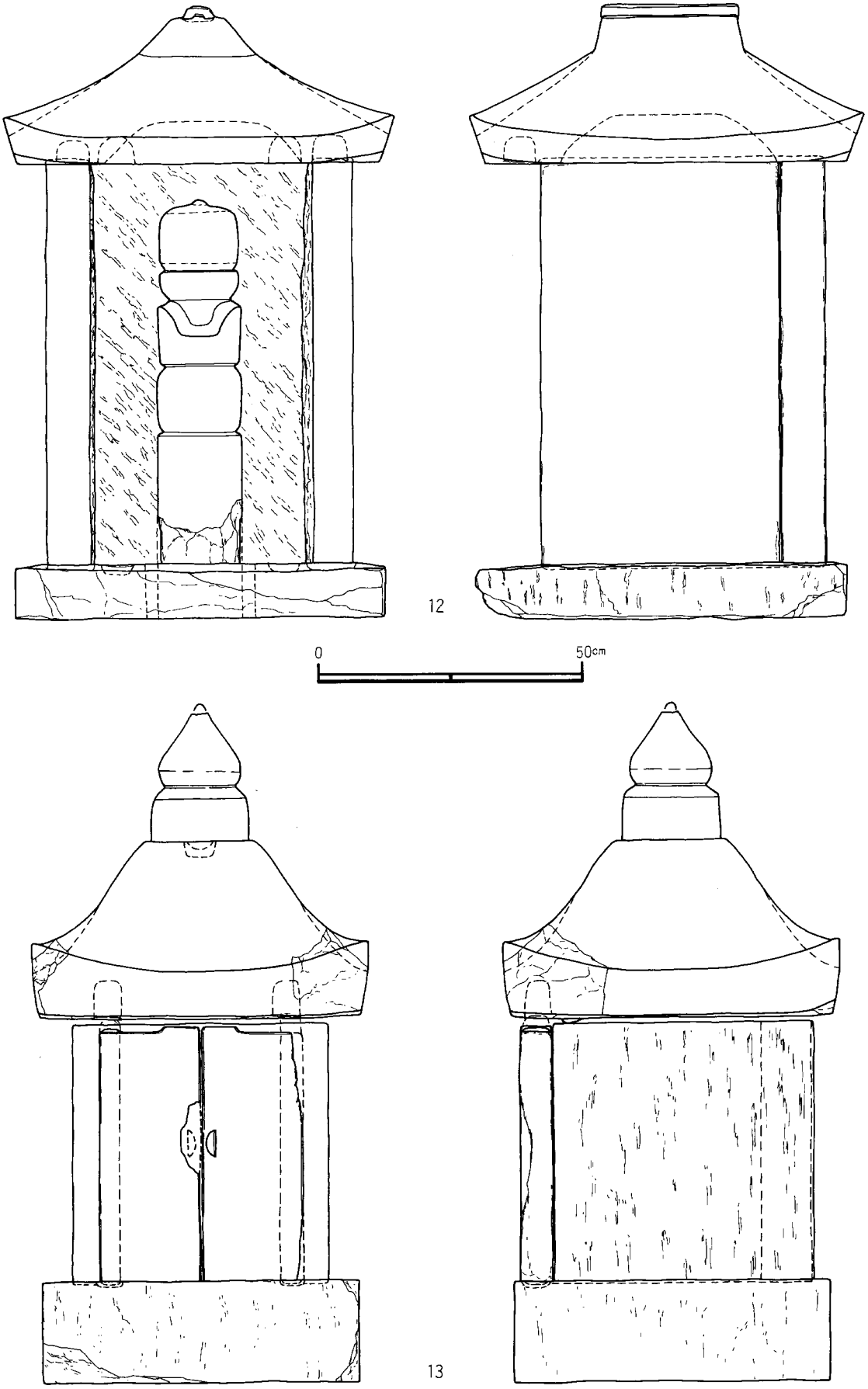


12

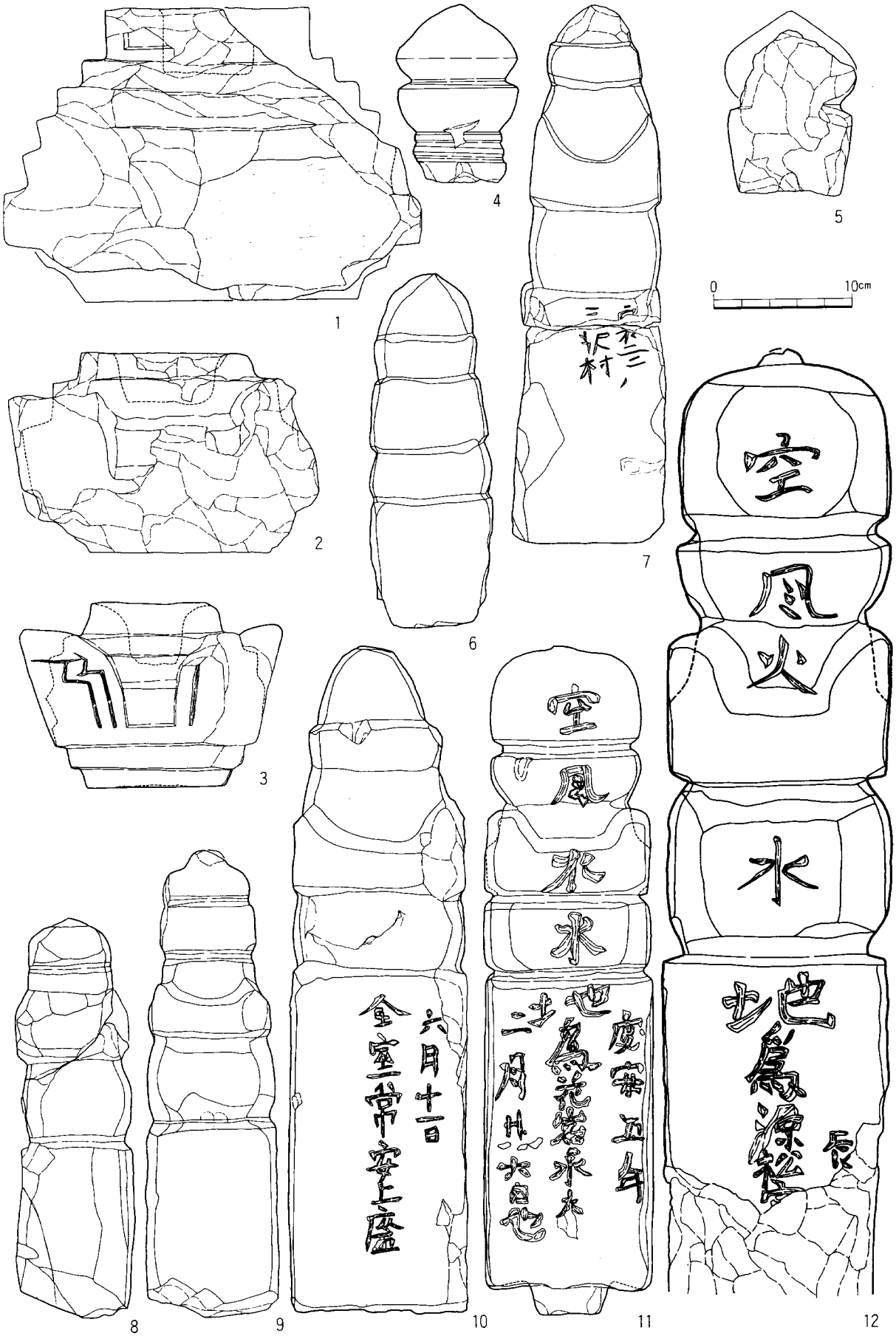


13

3　龍谷寺石塔



第45図　14. 三沢　龍谷寺屋根形覆屋実測図



第46図　14. 三沢　龍谷寺 ①

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
14三沢龍谷寺	1	20.9	10.9	—	6.3	4	[8.5]	—	29.9	4.4	4.5	—	凝灰岩質砂岩　＊砥石に転用。
14三沢龍谷寺	2	14.3	8	7.3	3	2.3	11.6	7.1	—	[12.8]	3.5	8.2	凝灰岩質砂岩
14三沢龍谷寺	3	13.1	8.6	7	10.2	3.1	8.3	5.9	15.4	9.9	4.4	8.4	花崗岩質砂岩

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
14三沢龍谷寺	4	[12.8]	5.5	3.7	3.6	—	—	—	8.7	8.7	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
14三沢龍谷寺	5	[11.5]	5.2	6.3	1.4	—	7.2	8.9	1.6	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
14三沢龍谷寺	6	25.2	4.4	3.1	5	3.6	9.2	6.8	7.4	8.5	8.8	8.8	凝灰岩質砂岩*1
14三沢龍谷寺	7	38.5	2.7	3.3	8.7	5.8	18	5.3	6.7	9.4	9.5	10.9	凝灰岩質砂岩*2
14三沢龍谷寺	8	28.7	3.7	1.6	5	5.7	12.7	6	6.1	8	7.8	8	凝灰岩質砂岩*3
14三沢龍谷寺	9	33.5	3.7	4	5.8	5.8	14.2	6.2	6.9	8.8	9.2	9.3	凝灰岩質砂岩*4
14三沢龍谷寺	10	47.8	5.3	3.7	8.6	5.5	24.6	7.7	9.6	12.2	12.3	12.6	凝灰岩質砂岩*5
14三沢龍谷寺	11	47.9	7.8	3.5	6.5	5.8	22.3	10.8	10.8	11.6	12	12	凝灰岩質砂岩*6
14三沢龍谷寺	12	[68.5]	14.2	6.4	11	12.6	[24.3]	15.2	15.5	16.1	16.1	16.1	凝灰岩質砂岩*7

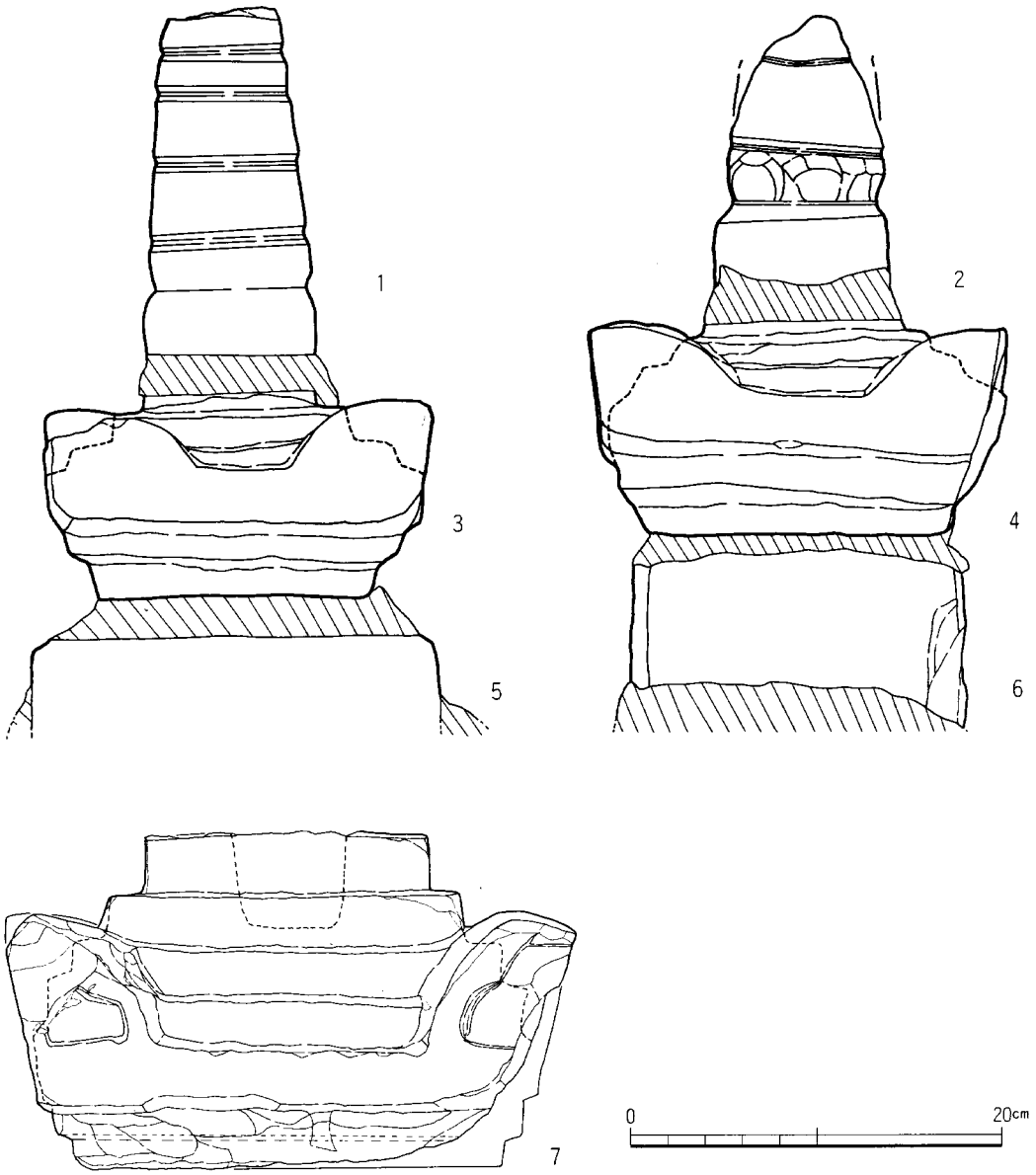
*1 無銘、天和二(1682)没の柏窓妙大姉の供養塔か。
*2「宝永二二　三沢村」銘、宝永四(1707)没の湖相照環大柿の供養塔
*3 無銘、正徳元(1711)没の相厳庭樹大柿の供養塔か。
*4 無銘、貞享三(1686)没の即厳宗心居士の供養塔か。
*5「六月十一日　全室常安上座」銘、元禄七(1694)没の全室常上座の供養塔。
*6「慶安五年　為花岩永春　二月廿六日也」銘、慶安五(1652)没の華岩永春庵主の供養塔。
*7「爲源松宗‥」銘、寛文四(1664)没の源松宗本居士の供養塔。

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
15三沢篠ヶ谷原	1	[18.7]	—	—	12.5	2.3	3.6	—	—	—	8.4	8.7	9.3	—	凝灰岩質砂岩
15三沢篠ヶ谷原	2	[14.4]	—	—	—	3.1	4.3	—	—	—	—	8.4	9.5	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
15三沢篠ヶ谷原	3	10.9	4.1	3.3	3.5	3.3	9	8.2	20.2	14.5	—	—	凝灰岩質砂岩
15三沢篠ヶ谷原	4	11.4	4	3.7	3.2	4.3	10.5	8	22	16	—	—	凝灰岩質砂岩
16三沢太子堂	7	18	11.4	7.2	2.8	3.4	15.1	7.5	27.8	—	5.1	6.2	花崗岩質砂岩



第47図

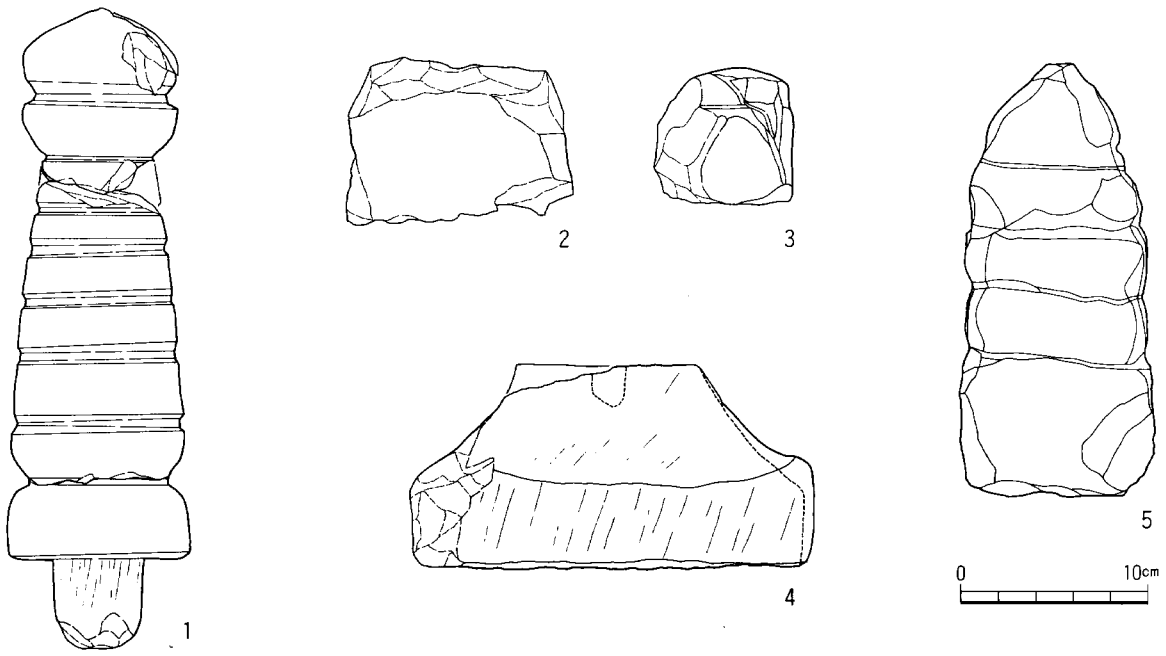
上段　15 三沢　篠ケ谷原宝篋印塔
下段　16 三沢　太子堂

石塔・礎盤　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
15三沢篠ケ谷原	5	—	19.9	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
15三沢篠ケ谷原	6	[7.0]	17.2	—	凝灰岩質砂岩



第48図　17. 三沢　殿ケ谷坂

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
17三沢殿ヶ谷坂	1	33.9	4.8	3.3	14.2	3.4	3.9	4.8	[7.7]	8.1	9	9.3	9.6	4.8	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

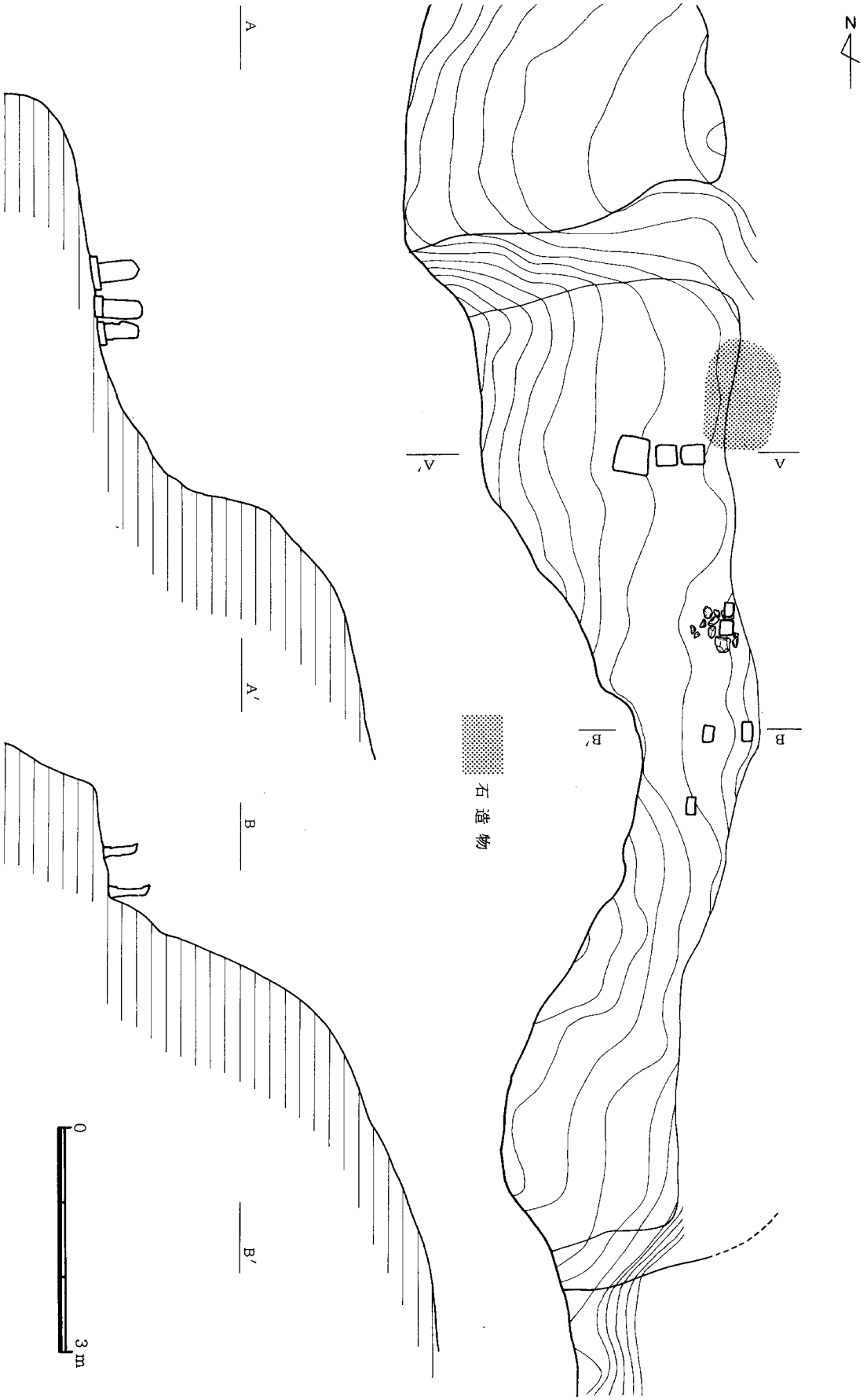
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
17三沢殿ヶ谷坂	2	[8.5]	—	[11.9]	凝灰岩質砂岩
17三沢殿ヶ谷坂	3	[7.2]	—	[7.3]	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火軸　計測データ　(単位はcm)

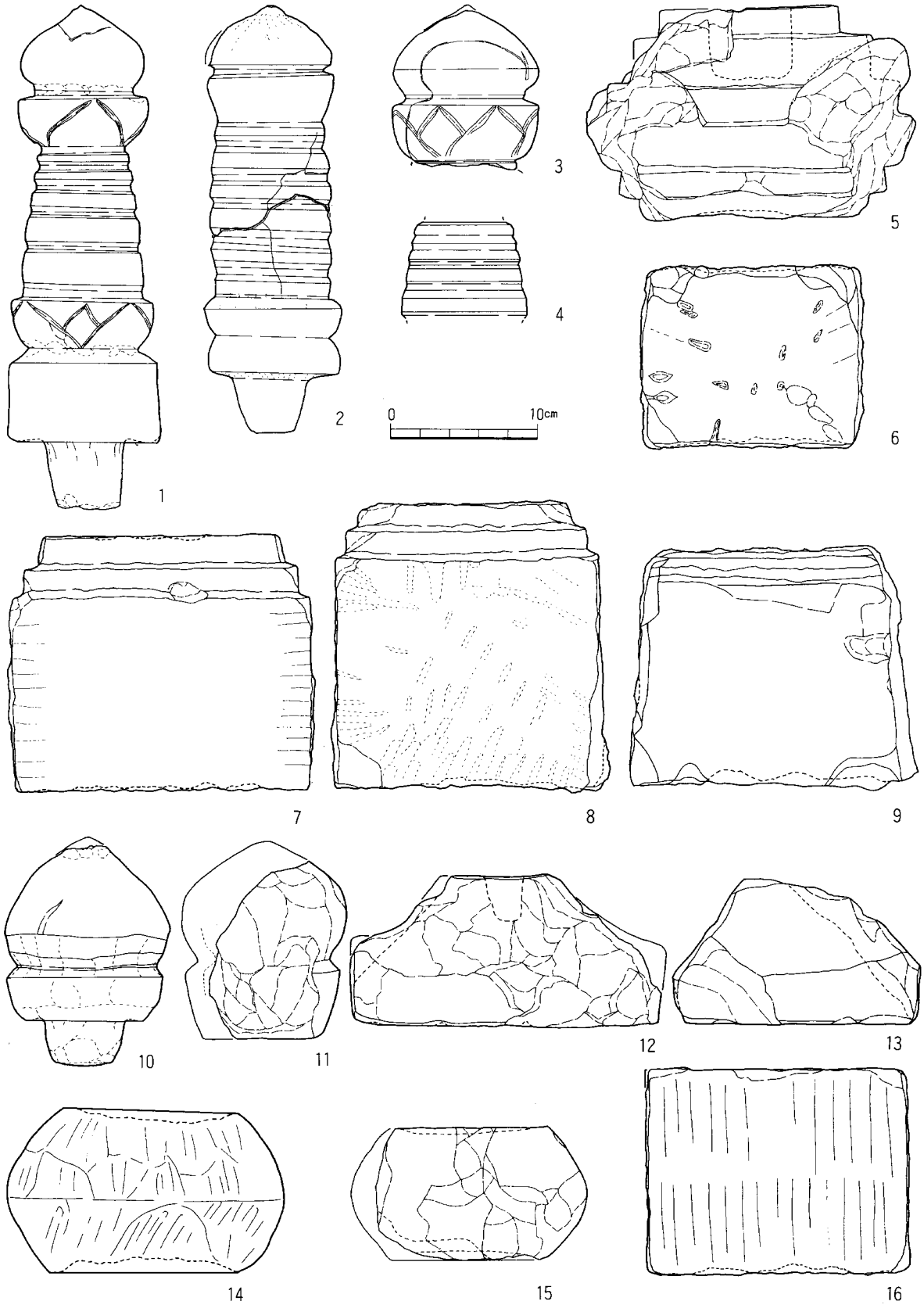
地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
17三沢殿ヶ谷坂	4	10.7	6.2	4.4	5.8	—	20.2	2.1	1.8	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
17三沢殿ヶ谷坂	5	22.8	5.6	3.7	3	3.4	7.1	7.1	9	9.7	9.7	10.3	花崗岩質砂岩



第49図　小川端　渋谷宅裏墓所平面図



第50図　21. 小川端　渋谷宅裏 ①



第51図　21. 小川端　渋谷宅裏 ②



第52図　21. 小川端　渋谷宅裏 ③



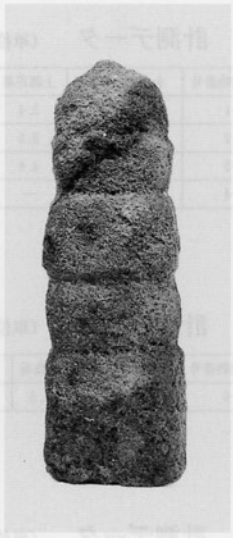
17



18



19



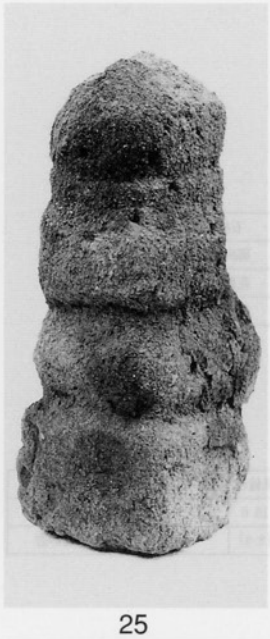
20



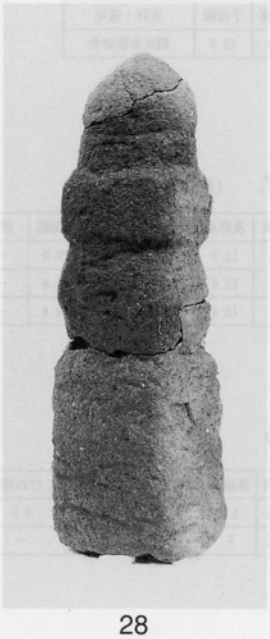
26



24



25



28



22



30



31



32



27

4　小川端　渋谷宅裏石塔

宝篋印塔・相輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	宝珠高	上請花高	九輪高	下請花高	伏鉢高	ホゾ高	宝珠径	上請花径	九輪径	下請花径	伏鉢径	ホゾ径	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―1	34.1	6.1	3.4	10.3	3.5	6.3	4.6	8.4	8.8	8.1	9.7	10.4	5.4	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―2	29	4.7	3.3	11.9	2.5	2.9	3.6	[8.1]	8.5	7.8	9.3	8.9	5.2	凝灰岩質砂岩？
21小川端渋谷宅裏	1―3	[10.5]	[5.9]	4.4	—	—	—	—	9.9	10	—	—	—	—	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―4	[6.3]	—	—	6.3	—	—	—	—	—	8.5	—	—	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・笠部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上段高	隅飾高	軒高	下段高	上面幅	隅飾幅	軒幅	下面幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―5	14.3	7.9	5.8	2.8	3.5	[6.1]	8.7	22.3	14	4.8	—	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・軸部　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―6	12.2	13.9	13.9	凝灰岩質砂岩

宝篋印塔・基礎　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	段部高	基部高	窓高	上面幅	下面幅	窓幅	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―7	17.3	3.6	13.7	—	15.8	19.9	—	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―8	19.2	3.3	15.9	—	12.7	12.8	—	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―9	15.8	2.4	13.4	—	14	19.4	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・空風輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	ホゾ(穴)高	空輪径	くびれ部径	風輪径	ホゾ(穴)径	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―10	[14.9]	[8.4]	3.4	3.1	11	9.5	10.6	5.5	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―11	[12.0]	[6.8]	5	—	—	—	[8.6]	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・火輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	斜部高	軒厚	軒反厚	上面幅	軒幅	ホゾ(穴)深	ホゾ(穴)径	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―12	10.2	4.5	5.6	—	[6.4]	21	3	2.9	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―13	[9.9]	[6.7]	3.2	4.9	—	[16.9]	—	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・水輪　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	上面径	最大径	下面径	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1―14	11	11.9	18.8	12.9	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	1―15	9	[10.3]	[14.3]	—	凝灰岩質砂岩

五輪塔・地輪　計測データ　(単位はcm)

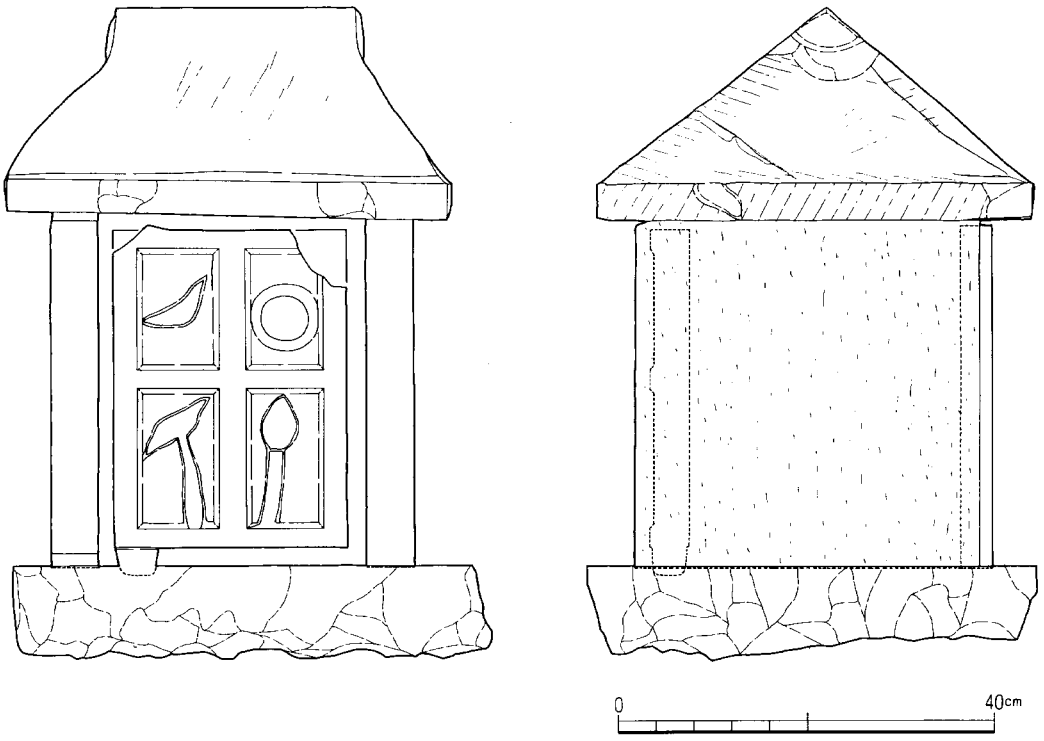
地区名	図版・遺物番号	全高	上面幅	下面幅	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	1—16	13.9	17.2	16.5	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	2—17	21.8	5.5	1.8	3.4	6.1	5	6.7	6.5	7.1	8	7.9	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—18	22.5	6.3	1.8	3	5.5	4.9	6.5	6.7	7.5	8.4	8.6	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—19	21.6	3.6	2.1	2.9	5	8.6	6.1	6.6	7.6	8.3	8.6	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—20	25.6	4.7	3.4	5.2	4.3	8	6.8	7.5	8	8	8.6	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—21	27.3	4.1	2	5.4	5.2	10.6	7.1	7.4	9.3	8.9	9.2	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—22	34.5	4.6	4.1	5.36	6.6	13.6	9.2	9.8	10	11	11.2	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—23	33.6	5.3	4	5.2	6.8	12.3	[8.7]	9.6	10.3	12	11.1	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—24	[34.2]	[5.3]	3.6	6.7	6.4	12.2	9.9	10.2	12.1	12.4	11.9	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—25	30.2	7	2.1	6.3	5.8	9	11.3	10.4	11.5	12.3	13.3	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—26	29.1	4.2	2.9	5.4	5.5	11.1	8.1	8.6	9.6	10.5	9.9	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—27	36.2	6.7	3	7.9	7.9	10.7	11.9	12	17.8	17.9	18.3	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—28	32.7	5.5	2.3	3.7	8	13.2	7	6.9	8.8	9.7	9.7	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	2—29	38.2	4.1	2.9	6.6	8.1	16.5	8.2	8.1	9.7	[9.1]	10.2	凝灰岩質砂岩

一石五輪塔　計測データ　(単位はcm)

地区名	図版・遺物番号	全高	空輪高	風輪高	火輪高	水輪高	地輪高	空輪幅	風輪幅	火輪幅	水輪幅	地輪幅	石材・備考
21小川端渋谷宅裏	3—31	44.4	6	4.2	8.8	9.7	15.7	8.8	10.1	14.5	14.4	15.2	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—32	46.2	7.7	4.8	8	9.6	16.1	12	12.9	14.7	16.5	15.1	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—33	[29.5]	—	—	9.1	10.2	—	—	—	14.5	15.3	—	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—34	[23.0]	—	—	—	10.2	12.8	—	—	—	11.3	11.7	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—35	[23.5]	—	—	5.3	5.7	12.5	—	—	8.7	9.4	9.5	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—36	[18.5]	—	—	—	[6.3]	12.2	—	—	—	10.9	11.1	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—37	[16.4]	—	—	5.2	5.8	5.4	—	—	7.9	8.4	8.7	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—38	[18.0]	—	—	—	4.9	13.1	—	—	—	9.3	9.6	凝灰岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—39	[13.0]	3.2	2.6	4.5	2.7	—	6.2	6.7	7.6	7.7	—	花崗岩質砂岩
21小川端渋谷宅裏	3—40	[11.3]	5.8	2.5	2.9	—	—	8	7.5	8.2	—	—	凝灰岩質砂岩



第53図　32. 奥横地　坪井家墓地

第五章　論考

目　次

○清浄寺過去帳について
はじめに……二九七
一．書　誌……二九七
二．内　容……二九八
三．成　立……二九九
四．特　質……二九九
おわりに……三〇〇

○遠江出土の瀬戸美濃焼
はじめに……三〇三
一．瀬戸美濃系施釉陶器の搬入状況……三〇三
二．舶載陶磁器との補完関係……三一三
（一）遺跡の性格と存続期間……三一三
（二）中世前半の様相……三一四
（三）中世後半の様相……三一四
（四）瀬戸美濃編年からみた舶載陶磁器……三一五
（五）碗皿類の競合関係……三一七
三．志戸呂・初山焼との補完関係……三一九
四．遠江における瀬戸美濃焼流通の諸段階……三二一
おわりに……三二二

○遠江の出土陶磁器組成の特徴―貿易陶磁を中心に
1．資料について……三二五
2．1期の陶磁器組成の概要と問題点……三二五
3．2期の陶磁器組成の概要と問題点……三二七
4．3期の陶磁器組成の概要と問題点……三二九
5．威信財のあり方から……三三〇
挿図・挿表……三三六

○横地城周辺における中世石造物の展開とその意義
はじめに……三四七
Ⅰ．従来の研究法と問題点……三四七
Ⅱ．研究の方法……三四八
Ⅲ．横地城跡周辺の分布する石塔の分類……三四八
Ⅳ．石塔の変遷と編年……三五一
Ⅴ．石材について……三五七
Ⅵ．調査の問題点……三六一
Ⅶ．小　結……三七三
Ⅷ．結　語……三七三
おわりに……三七四
挿図……三七八

清浄寺過去帳について

中山　文人

はじめに

鎌倉後期、勝間田氏の創建と伝える時宗清浄寺（榛原郡榛原町道場）には、現在七点の過去帳が所蔵されている。本報文はこのうちの一点、横地の人々が記される資料の書誌、内容の概略および成立に関わる諸問題を考察する。横地城からはいささか離れた論が展開されようが、ご了承いただきたい。なお、以下で用いる清浄寺過去帳・本資料などの呼称は、いずれも右の一点を指す[1]。

一　書誌

清浄寺過去帳は、八十四枚の楮紙を貼り継ぎ、折本に仕立てたもので、縦は二十七・八糎、横の合計は二、九八二・四糎におよぶ[2]。全体の厚さは六・〇糎。表紙・裏表紙には黒染紙を上貼りするも剥離が甚だしく、題簽の痕跡も辛うじて確認できる程度である。見返しには金紙を貼り、その中央には大きく「南無阿弥陀佛」、左脇に「遊行卅七世書」と墨書する[3]。

表紙を除けば際立った汚れは少なく、状態はおおむね良好である。若干虫損・汚損があり、裏面には固着箇所も見受けられるが、ごく一部分の解読に支障を来たす程度[4]。

本紙は全面に亘って縦横に界線を引いた上、十二・六糎幅で折り返される（紙継ぎ目とは一致させない）。折筋で区切られる一紙面は、正確に縦二段・横六行、という構成をとる（界線縦長は二十三・二糎）。なお裏面は白紙のまま、また補修痕は確認されなかった。

以下の叙述では、右の折筋ごとの区切り（六行分）で一紙面とし、本末表紙（見返し）を除いた冒頭から、順にアラビア数字で表記する。たとえば本紙は1から234まで、ということになる。



清浄寺位置図

なお本資料の内容は三大別できるが、紙質・界線および一部の筆跡・墨色は共通し、損傷も横断的である。ゆえに同時に起筆され、（一定の役割を果たしたのちも）当初の形のまま伝来したものとみなされる。

二　内容

冒頭に「過去帳并序」と記して改行ののち、十二行に亘って序文が続く（1～3）。続いて本文が二種類。4～63の六十紙が日牌式、余白を挟んで68～234の一六七紙が逐次式である。

日牌式過去帳とは、一ヶ月を朔日から晦日まで三十に区分した上、各忌日に霊名を配していくもので、近世寺檀制度の成立（十七世紀初頭～中葉）を経て、とりわけ多く見られるようになる形式。一方かりに逐次式としたものは、原則として死亡順に記入していく、古代以来の、いわば過去帳の原基形態ともいえる形式である[5]。後者は一行一人原則が採られ、上段に戒名[6]、下段に死亡年月日・地名[7]・俗名または続柄などの付随情報、という約束事があった[8]。前者の収載人数は、後述の仏神名などを含めても二五〇程度、余白も多いが、後者は間断なく一、一〇〇超の人間が記される、と圧倒的な差がある。なおいずれも複数の筆からなる。

双方の記述を全面的に比較してはいないが、原則として人間は一致しない。両者はまったく異なった機能を持つ、と考えられる。日牌式は清浄寺にとって、とりわけ重要な人物を載せる特別な記録であった。すなわち歴代遊行上人（当然その多くは遊行派総本山清浄光寺（しょうじょうこうじ）歴代）、二十九世以降の清浄寺住持とその尊属、見付（磐田市）省光寺ほかの周辺遊行派寺院歴代、在俗の高額〔物品〕寄進者などで構成されている。加えて三十日仏名、三十番神、天皇の一部、諸宗高僧といった種々の〈尊名〉さえ麗々しく、それも各日冒頭付近に記される。以上は逐次式には登場しない（僧名の重複記載はある）のだが、つまり日牌式過去帳とは、これら仏神や名立たる人物に列して、月に一度は名前が読み上げられる〈月忌供養の特権〉を持


南無阿弥陀佛
過去帳并序
夫以三界六道昇沉不定也四
生五受苦楽万品迷生生世々
恩所誰覩況諸衆生不辨之可
悲可哀受佛子僧阿弥幸來人道
喜入余門皆恩報恩自利利他
令正是時也依之以所修功
薫先報佛祖恩徳次弔先後
亡魂願名帳一緣輩爲安養
一蓮友乃至遍法界風拂有
頂無間塵埃利衆生兩濁識
圓沙界乾機仍過現名帳序
云尓

清浄寺過去帳（表紙見返し及び序）

つ人物だけが載せられる、いわば権威の書であった、ともいえよう。なお高額寄進者など有力檀那とおぼしき人物の没年は、いずれも十七世紀中葉以降となる。

他方逐次式はこれら特別な人々以外の、近隣のごく一般的な檀家を主対象とした過去帳とみなすべきである。それは収載人数の多さからも、また死亡年月日・地名・俗名（実質屋号、あるいはそれに準ずる認識標章になろう）または続柄を完備することで、檀家個々の、十三仏事を始めとする年忌供養に長期間対応可能な体裁を整えている事実からも帰納されよう。

三　成立

過去帳の形式上、逐次式は日牌式に先行し、また本資料における―〈尊名〉を除いた―実際の記事年代（没年）も同様である。加えて「横地」が逐次式に限られることからも、本章以降ではこちらの検討を主眼に据える。

逐次式過去帳は「丁卯」の宣阿弥陀佛、「癸酉」の妙一房から書き出される。三人目が天正十年（一五八二）なので、先行記事とみなせば、もっとも近いのは永禄十年（一五六七）と天正元年（一五七三）、となる。最後は最終頁である234の四行目、文化元年（享和四・一八〇四）の専佛妙念信女だが[9]、これは他の六点の過去帳中、二点が享和四年から始まるのと連動する現象であろう。紙面が尽きたための新調、ということである。収載人数が増え始めるのは寛文年間（一六六一～）以降といえようが、天正十年からほぼ連年、複数名ずつの記入が常態となるので、同年以降の記録が大本の情報とされた、と判断できる。

冒頭の68・宣阿弥陀佛から、104の二人目、慶安四年（一六五一）・春阿弥陀佛までは、墨に濃淡はあるものの同筆、すなわち同一人物によって―若干の時間幅は想定されるが―一括記入されたものである。次行の品仏房（同年）からは複数名単位で墨色・筆跡が変化する。こちらはある程度まとまった時点で追記されたことになろう。

また表紙見返しの「遊行卅七世書」は重要なヒントとなる。これは託資上人のことで、有名な『時衆過去帳』（清浄光寺所蔵・重要文化財）が天正年間に一旦寺外へ流失したのち、正保二年（一六四五）、再入手に成功した当事者として、同帳「僧衆」分末尾にその経緯を記した人物である[10]。先の慶安四年は、託資上人が三年間の遊行を終え、藤沢山十六代として清浄光寺に在住していた時期に当たる（入滅は万治元年・一六五八年）[11]。この点は日牌式に記される遊行上人中、三十六代如短上人（八日条）までが同筆・同墨であることとも関係しよう。

以上の検討により、清浄寺過去帳は一六五〇年代に作成されたことが判明する。その際、三十七代遊行上人より清浄寺三十世覚阿弥陀佛（日牌式七日条・一六七七年入滅）へ金紙六字名号が授与されたことになるが、あるいは装丁済みの料紙一式が下賜された可能性もあろう[12]。

四　特質

逐次式冒頭の宣阿弥陀佛から天正十二年（一五八四）の観阿弥陀佛までの連続する五人は、いずれも「ヨコヂ（横地）」が在所であり、同年の善阿弥陀佛（70・十三人目）、慶長十六年（一六一一）の宣阿弥陀佛（83・九十四人目）を加えた七人が清浄寺過去帳での横地関係者のすべて、である。かかる傾向を示す理由は、現段階では不明とせざるを得ない。しかし初期記事群の分析は、本資料自体の機能や伝来の問題とも関わるところから、これらを概観し、その特質の一端を考えることにしたい。

一六五〇年代以前の記事に関連しては、「同寺ではこの過去帳（本資料・引用者注）を二冊目のものと言い伝え、最初の一冊は失われたと伝承する」[13]という証言が注目される。先行する記録類は必須だが、かりに原過去帳の存在を措定した場合、その様態や本資料との関わりについて、どの程度まで考察が及ぼし得るだろうか。

逐次式での記述のありようは、慶長年間（一五九六～一六一五）に大き

く変化する。まず年次の錯綜や未記入が見受けられなくなるのは、慶長二年以降（74・五十五人目）であること。それ以前では、二十六もの霊名が一行に二、三名ずつ集中することさえある（72～73）[14]。扱いとしては薄礼な仕法となろう。次に俗名ないし続柄が要件として意識されるのは、おおむね慶長十四年（83・一〇五人目）以降とみなされること。

寛永二十年（一六四三）を初見として（100・101間）、狭い行間に敢えて霊名以下の諸要件を挿入してまで年次を遵守する姿勢とは対照的である[15]。年忌供養の対象者とその子孫（檀家）を漏れなく把握する意図は明瞭だが、慶長十四年頃までの記述は敢えてそれを踏襲しない。つまり当該期までの死者は－本資料作成時点の認識として－檀家と直結し得ない、したがって十七世紀中葉以降の寺院経済に貢献しない群とみなされていたことになる。

そのような記録群をも収載した理由は、二十九世時代への認識と関わりがあろう。二十九世・三十世は、とともに「中興」と特記される人物だが[16]、他方、年月を欠く「當山開基恵法和尚」（以上日牌式）を例外として、二十八世までが本資料のどこにも見出せない。清浄寺の復興はこの二世代によって達成されたのか。いずれにせよ三十世が、前住時代を寺史上の画期として強く意識していたことは間違いない。また、さきの転換点を慶長十四年（一六〇九）頃とすれば、寛永六年（一六二九）入滅の二十九世の在住中と考えて大過あるまい。他の資料は未見のため、就任が慶長二年または天正十年に遡るか否か、判断材料を欠いているが、以上の検討から、原過去帳は二十九世によって情報が整理され、成立をみたと考えるべきである。またそれゆえにこそ本資料へ転記された、とみなし得るのではないか。

慶長年間という記述上の転換点を軸に重ねた推論を、一応まとめておく。逐次式に先行する原過去帳は、二十九世弥阿弥陀佛によって作成されたもので、その際、住持就任時またはその前代の、天正十年以降の情報が起点になった[17]。また逐次式において慶長十四年頃より記載要件が完備されてくるのは、継続的な追善仏事を基幹収入の一端に据えた寺院復興の意志を反映しており、これもまた二十九世時代の画期的な施策であった、と推測される。そして右のごとき経緯ゆえに、本資料への転載も行われ得たのではないか[18]。

これ以上原過去帳の様態に迫るのは危険であるが、若干の贅言を添えて擱筆したい。注5所掲の拙稿でも述べたとおり、報告者は十三仏事などの年忌供養が広く浸透するのは十七世紀、それも本格化するのは近世国家が寺請制に象徴される宗教・民衆統制を確立した中葉以降で、それ以前は－行われたとしても－葬送時を中心とした、短期間・数回程度の追善が主流であったと考えている。そして、かかる政策を実現せしめた前提として、寺家が外護者の盛衰・転変や諸宗派間の競合に対処するため、一般在家向けの葬祭や墓地経営などへ収入の比重を移していく、いわゆる葬式仏教を志向するのが戦国期であった、との見通しを持っている。慶長年中での記述の変化も同様の文脈で理解できるのではないか。当該期以前においては一般在家を取り込む意図こそあれ、長期間におよぶ関係形成は到底結び得なかった状況が端的に表現されている、と考えたいのである。原過去帳の問題に戻れば、本資料への転記の際に員数や要件が抄録されたのではなく、本来この程度の情報しか蓄積され得なかったのではないか、ということである。

おわりに

清浄寺過去帳、とりわけ戦国期の人間を載せる逐次式過去帳に先行する原記録が存在したことは自明だが、その具体像は判然としない。しかしその記録化が、天正年間後半という時代の大きな転換点で開始された理由は、一時宗寺院の個別事情に留まらない可能性がある。慶長年間での変容は尚更である。

「横地」が初期に集中する点も同様だろう。こちらは前章での考察とも関わりつつ、時宗全体の問題とも絡んだ清浄寺教線の縮小や変更、あるい

は近世において横地が東西二村に分割されるという事情－村切り後の在地の変動－や曹洞宗の浸透といった横地固有の問題、ひいては徳川氏の進出など複数の要因が考えられるが、いずれも今後の究明課題である。

---

1 他の六点は十九世紀以降の起筆にかかり、また諸霊の没年も同様であるため、適宜言及するに留める。

2 一枚の長さ（横）は第一紙と第八十四紙をのぞき、三十五糎代の後半が多い。

3 表紙見返しの六字名号は真書、裏表紙見返しで行書の違いはあるが、署名も含め同墨とみなされる。

4 とりわけ日牌式（後述）では、白墨や貼紙による抹消・訂正が少なくない。

5 正確には、寺家がなんらかの仏事を執行するにしたがい、逐次記入されていくもの（死亡日に遡って記入すれば、結果的に日付順序の逆転も発生し得る）、と考えている。なお中世から近世にいたる過去帳の形式・内容および機能の変遷に関しては、拙稿「中世の過去帳について－本土寺過去帳研究の前提として－」（松戸市立博物館『紀要』第三号、一九九五年）、「本土寺過去帳をめぐる諸問題」（地方史研究協議会編『地方史・研究と方法の最前線』、雄山閣出版、一九九七年）などを参照されたい。

6 当初男性は阿弥号、女性は房号に統一されていたが、徐々に信士・信女（または童子・童女）号が見え始め、宝永三年（一七〇六）頃からは後者が多数派となる。

7 植松、道場、鹿島（以上榛原町）、堀切、大磯、法京、坂井、相良（以上相良町）、横地、三沢（以上菊川町）など近隣地域が中心で、とくに植松、鹿島、堀切、大磯、法京、坂井が頻出する。なお時折地名に添えて、あるいは単独で「江戸ニテ往生ス」など死亡場所が注記されるところから、逆に通常の地名記事は当該人物の在所を表現し、すなわち死亡地である、とみなし得る。ただし地名の件も含め、本章で示した諸傾向が逐次式の記述すべてに適合する特性とは言えず、むしろ時期によって変化があることは、第四章で記すとおりである。

8 寛政三年（一七九一）以後は、頭書に年次を明記した上、その年の霊名を一行二人ずつ記す。これは紙面節約のための措置。

9 五・六行目にかけて、寛政十一年（一七九九）時の故事を記す。

10 大橋俊雄編著・時衆史料第一『時衆過去帳』（時宗総本山清浄光寺内教学研究所、一九六三年）

11 高野修・史料紹介「遊行・藤沢両上人御歴代系譜」（藤沢市文書館『紀要』三、一九七七年）

12 このように仮定すると、至宝・時衆過去帳の返還という慶事に因んだ藤沢山主導の行為、との想像も可能であろう。本資料の作成は外的要因に端を発する、というものだが、これは時宗宗門全体で検討すべき問題であり、さらに全国的にみても過去帳が寺院の什物として意識され始める時期、言い換えれば幕府の宗教政策の完成期とも一致するため、軽々な断定は差し控えたい。また石田善人は「同寺ではこの過去帳を二冊目のものと言い伝え、最初の一冊は失われたと伝承するが、同寺がなかごろに荒廃して、第三十世住持のとき再興されていることから考えると、この過去帳は再興されてからのものであることがわかる」と、やや曖昧な言辞ながらも推定を行っている（「勝田証阿弥陀仏とその周辺」、同著『一遍と時宗』、法蔵館、一九九六年、初出は一九六七年）。本文でも記したように、日牌式七日条の三十世「當寺中興覚阿弥陀佛」の入滅は延宝五年（一六七七）、十五日条の二十九世「中興」弥阿弥陀佛が寛永六年（一六二九）寂である。当座は寺院復興途上の一齣とみなし、石田説の妥当性を支持するに留めたい。なお余談ながら、石田が清浄寺には「折本の天正十一年（一五八三）から書き継がれている過去帳が伝えられ、その見返しには三十一世遊行他阿上人筆の六字名号が」記されている（傍点は引用者）、とするのは本文のごとく訂正されなければならない。

13 前注参照。

14 うち戒名のみが十八人。これらは文禄二年（一五九三）三月と五月の霊名の間に置かれる。しかしその後も天正年間がみえるなど、順序は錯綜する。

15 その後の記述においても若干年次は錯綜するものの、全体数からすれば圧倒的少数である。

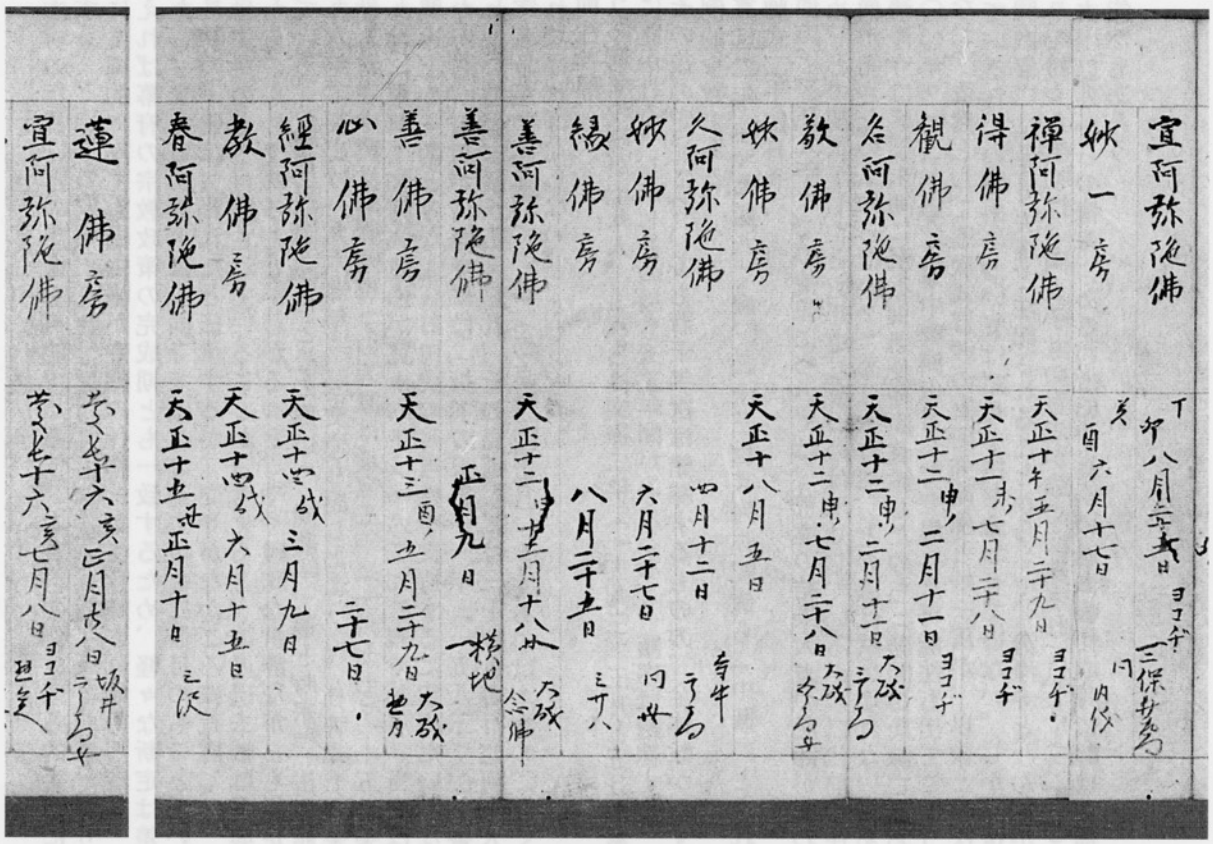
16 寛延二年（一七四八）寂、三十三世其阿弥陀佛も「中興」とされる（日牌式二十四日条）。

17 他方、天正九年までの情報については、荒廃の結果大方の記録が失われたため、との解釈がもっとも想定し易いのは承知しているが、二代前の住持を寺僧が記さない（知らない？）のは不自然、との感は拭い切れない。あるいは清浄寺は戦国末期に至る相当長期間衰微したのち（勝間田氏滅亡後およそ一〇〇年？）、二十九世が中興開山として登場した可能性も出てこよう。

18 なお、依然として逐次式冒頭の宣阿弥陀佛と妙一房が、以後と年次が離れているらしい理由については定見を持ち合わせていない。しかし後者に「同内儀」、つまり夫婦と注記されることからして、清浄寺となんらかの関わりを持った当初は、両人子女の意志が強く反映されていたようである。原過去帳以外からの情報、あるいはいずれかの過去帳作成時における補記の可能性もあろう。

68	69	70	83
宣阿弥陀仏	敬仏房	善阿弥陀仏	蓮仏房
妙一房	妙仏房	善仏房	宣阿弥陀仏
禅阿弥陀仏	久阿弥陀仏	心仏房	
得仏房	妙仏房	経阿弥陀仏	
観仏房	緑仏房	教仏房	
名阿弥陀仏	善阿弥陀仏	春阿弥陀仏	

68	69	70	83
（永禄十カ）丁卯八月二十五日ヨコヂ二保（俣カ）升左衛門	天正十二申ノ七月二十八日大磯五郎エ門女	天正十二申ノ七月二十八日大磯物□	慶長十六亥正月廿八日坂井二郎エ門女
（天正元カ）癸酉六月十七日　同内儀	天正十　八月五日	二十七日	慶長十六亥七月八日ヨコヂ
天正十午五月二十九日ヨコヂ	四月十二日寺中二郎エ門	天正十四戌三月九日	
天正十一未ノ七月二十八日ヨコヂ	六月二十七日同女	天正十四戌六月十五日	
天正十二申ノ二月十一日ヨコヂ	八月二十五日ミサハ	天正十五丑（亥）正月十日三沢	
天正十二申ノ二月十一日大磯三郎エ門	天正十二申□十二月十八日大磯念仏	正月九日横地	
天正十三酉ノ五月二十九日大磯			



清浄寺過去帳（68～70・83）

遠江出土の瀬戸美濃焼

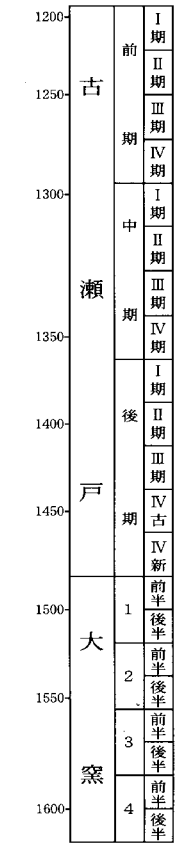
藤澤良祐

はじめに

本稿は、中世唯一の国産施釉陶器である瀬戸美濃焼（古瀬戸製品および大窯製品）の流通について、主に静岡県西部の遠江地方の遺跡を対象として考察したものである。

まず、主要遺跡における陶磁器全体の組成と、瀬戸美濃焼と補完関係にあるとされる舶載陶磁器の搬入状況を概観しつつ、瀬戸美濃焼の器種別・時期別の搬入の実態を明らかにする。次に、各遺跡の性格や存続期間を考慮し、舶載陶磁器と瀬戸美濃焼の補完の在り方を述べるとともに、特に両者が競合した碗皿類の搬入量を比較することによって、当該期の瀬戸美濃焼の性格について検討を加えたい。さらに遠江地方には、志戸呂窯・初山窯といった瀬戸美濃窯の生産技術を有する窯が存在するが、それらの製品と瀬戸美濃焼との補完関係を検証し、その成立の背景を探るとともに、当地方における瀬戸美濃焼の流通の特徴を明らかにしていきたい。

表1　瀬戸美濃焼編年表



一、瀬戸美濃系施釉陶器の搬入状況

さて、これから挙げる三二の中世遺跡は、山茶碗類や土師質土器類はもとより、特に舶載陶磁器の詳細なデータが得られており、また、舶載陶磁器の検討から遺跡の概要についても既に述べられているが（註1）、ここでは、瀬戸美濃焼および瀬戸美濃系の志戸呂・初山焼（以下、本稿ではこれらすべてを瀬戸美濃系施釉陶器と総称する。）の搬入状況という情報を加えることによって、各遺跡の性格や存続期間について再検討を試みる。なお、数値は原則として接合前の破片数を用いており、個体数を表していないことを予めお断りしておきたい。ところで静岡県東部の伊豆地方では、御所之内遺跡群第13次調査（北条氏邸跡）の陶磁器の分析から、十四世紀中頃を境に中世の前半（十二世紀後半～十四世紀前半）と後半（十四世紀後半～十六世紀）とでは、舶載陶磁器と瀬戸美濃焼の搬入状況に大きな差があることが明らかにされており（註2）、本稿でもその点に留意しつつ瀬戸美濃系施釉陶器の搬入状況をみていきたい。

（一）殿ケ谷遺跡（小笠郡菊川町東横地字殿ケ谷）

本遺跡では、遠江地方では稀少な大型の礎石建物が検出され、在地領主横地氏惣領の居館と推定されている。これまで四八一㎡が発掘調査され陶磁器類の㎡あたりの出土点数は九九・七点と極めて高い。陶磁器の構成比は、かわらけを主体とする土師質土器類が実に九六％以上を占め、山茶碗類が二％強、瀬戸美濃系施釉陶器・舶載陶磁器・常滑産陶器とも一％にも満たない。ただし、これはかわらけの出土量が圧倒的に多いためであり瀬戸美濃系・舶載陶磁とも一定量出土している。舶載陶磁は一六三点出土し、内訳は青磁七七点、白磁四五点、青白磁三四点、陶器七点である。時期が確定できるものでは、中世の前半が一四三点と圧倒的に多く、中世後半のものは僅か四点にすぎない。なお、前者には白磁四耳壺・青磁酒会壺・青白磁梅瓶・泉州窯産緑釉盤などがあり、東国最大の都市遺跡である鎌倉遺跡群との関係が指摘されている。

瀬戸美濃系は一六一点出土し、時期の確定できるものは古瀬戸製品一一六点、大窯製品三五点である。古瀬戸前Ⅱ期から大窯第3段階までが認められ、出土数は後Ⅳ期新段階が最も多く、大窯第1段階がそれに次ぎこの

二時期だけで全体の約半数を占める。器種別には擂鉢と小皿類の構成比率が高く、天目類はあまり多くない。ただし、舶載陶磁の中世前半にほぼ並行する古瀬戸前期から中期のものが三二点出土し、遅くとも前Ⅲ－Ⅳ期には卸皿や壺瓶類が搬入され、また、鎌倉以外の地域では稀少な入子が一五点認められ、舶載陶磁の特殊品と同様鎌倉との関係が窺われる。本遺跡の存続期間は、山茶碗類と舶載陶磁からみて十二世紀中葉に始まり、その最盛期は中世前半にあったことは明らかであるが、瀬戸美濃焼の編年観から十六世紀中頃までは存続したと考えられる。

（二）伊平遺跡（小笠郡菊川町東横地字伊平）

東西五〇m、南北七〇mの屋敷地から十数棟の掘立柱建物、厩等の施設とされる大型建物が検出され、後述する舶載陶磁の豊富さから横地氏の有力な庶流の屋敷と推定されている。調査面積は五八八七㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・八点。陶磁器の構成比は山茶碗類が三八％で最も多く、かわらけ主体の土師質土器類が二〇％、瀬戸美濃系が一八％、常滑産が一六％、舶載陶磁が七％と続く。舶載陶磁は三四二点出土し、内訳は青磁二二三点、白磁八三点、青白磁二八点、陶器六点、染付二点で、中世前半までのものが二九六点と圧倒的に多く、白磁四耳壺・青白磁梅瓶・高麗青磁などの特殊品も認められるが、中世後半のものは一六点と激減する。

それに対して瀬戸美濃系は八五〇点出土し、古瀬戸前Ⅰ期から大窯第４段階まで各時期のものが継続して認められる。古瀬戸前期から中期のものは七七点あり、前期には卸皿・洗・四耳壺、そして若干ではあるが入子も確認され、中期には折縁深皿をはじめ各器種が認められる。出土数は古瀬戸後期が六六四点と最も多く、特に後Ⅰ期に急増し天目類・碗類・小皿類・盤類がセットとして搬入される。しかし、後Ⅳ期新段階に擂鉢を主体に若干増加するものの、後Ⅲ期以降はやや減少する傾向がみられ、大窯製品は五三点にすぎず、第2段階以降は激減し遺跡は衰退したものと思われる。器種別には天目類の構成比率が高く、盤類がそれに次ぎ擂鉢はあまり多くない。したがって本遺跡は、山茶碗類や舶載陶磁から殿ケ谷遺跡と同様、十二世紀中葉に始まり中世前半に最盛期を迎えたと考えられるが、瀬戸美濃系の出土数の多さや器種の豊富さから、中世後半、特に十四世紀後葉から十五世紀前葉にかけてもその優位性が保たれ、十六世紀初め頃まで存続していたことは明らかである。

（三）土橋遺跡（小笠郡菊川町土橋字西軒）

建物跡は検出されていないが、屋敷地を廻る濠跡から豊富な呪術資料（木製品）が出土したことで注目される。調査面積は約四〇〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・八点。構成比は山茶碗類が八三％と極めて高く、常滑産が一一％、土師質土器類が五％、舶載陶磁が一％、瀬戸美濃系は僅か〇・二％である。舶載陶磁は青磁七点、白磁一六点、陶器一点の計二四点で、時期の判るものはすべて中世前半に位置付けられる。瀬戸美濃系は古瀬戸前期の梅瓶が二点、後期の擂鉢など五点の計七点と極めて少なくむろんセットとして搬入された形跡も認められない。したがって本遺跡は山茶碗類や舶載陶磁の編年観から中世前半でも十四世紀初め頃には廃絶したものと思われる。

（四）林光寺遺跡（小笠郡菊川町土橋字東軒）

約三四〇〇㎡発掘調査されているが、遺構の密度が低く小規模な掘立柱建物が中心であることから、殿ケ谷や伊平遺跡が有力者の屋敷地とすれば本遺跡は一般的な集落といえよう。㎡あたりの出土点数は〇・八点。土橋遺跡と同様山茶碗類が八三％と高い比率を占め、土師質土器類一四％、常滑産二％、舶載陶磁・瀬戸美濃系はともに一％未満である。舶載陶磁は青磁二点、白磁七点、青白磁一点の計一〇点で、確実に中世後半に位置付けられるものは確認されていない。瀬戸美濃系は一二点、古瀬戸前期・中期のものは皆無で、古瀬戸後期が八点、大窯製品が四点みられるがセットとしては出土しておらず、十二世紀前葉に始まる中世前半の遺跡であろう。

（五）宇藤遺跡（小笠郡菊川町神尾字大平）

菊川と牧之原、横地とを結ぶ交通の要所に立地する集落で、数棟の堀立柱建物が検出されている。約五〇〇〇㎡発掘調査され、㎡あたりの出土点数は〇・六点。山茶碗類が八〇％近くを占め、土師質土器類は一〇％、瀬戸美濃系が七％前後でそれに続き常滑産は三％、舶載陶磁は一％すぎない。舶載陶磁は青磁二六点、白磁四点、青白磁一点、染付五点の計三六点出土し、このうち中世前半が一一点、後半が二二点とやや増加する。

瀬戸美濃系は一九七点出土し、古瀬戸中期までは壺瓶類などが僅か四点にすぎないが、後期には九八点、大窯製品は九五点と急増する。しかし、各器種がセットとして搬入されるのは後Ⅳ期新段階以降で、大窯製品も各段階のものがみられ登窯製品も連続して搬入される。器種別には天目類・小皿類・擂鉢がほぼ同数出土している。本遺跡は、山茶碗類の出土数の多さから十二世紀後半に始まる中世前半が主体の集落と思われるが、十五世紀後半頃に再び営まれ、近世にかけて存続した可能性が高い。

（六）潮海寺門前町遺跡（小笠郡菊川町潮海寺字下ノ段）

真言宗潮海寺の南側門前に位置する集落で、数棟の掘立柱建物が検出されている。調査面積は約七〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は三・六点。構成比は山茶碗類が六五％、常滑産が一四％、かわらけと鍋類とがほぼ拮抗する土師質土器類が一一％、瀬戸美濃系が六％、舶載陶磁が二％。舶載陶磁は青磁四四点、白磁七点、計五一点出土し、時期の判るものは中世前期が二一点、中世後期が二〇点とほぼ同数である。

瀬戸美濃系は一六五点で、古瀬戸前期・中期は六点と極めて少ないが四耳壺・梅瓶・卸皿などが出土している。後期には一二〇点と急増し、各器種がセットとして搬入されるのは宇藤遺跡より早く後Ⅲ期まで遡る。大窯製品は三二点と減少するものの第4段階まで連続して搬入される。器種別には擂鉢がやや多く、碗類・小皿類がそれに次ぐ。以上のことから本遺跡は、山茶碗類の搬入の始まる十二世紀中頃以降、十七世紀に至るまで連綿と営まれたものと考えられる。

（七）善福寺遺跡（小笠郡菊川町富田字大門）

東西一〇〇m、南北一三〇mにも及ぶ方形居館の外側に拡がる集落で、数棟の掘立柱建物が検出されている。調査面積は約一五〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・二点。構成比は瀬戸美濃系が三三％と最も高く、土師質土器類は二四％、山茶碗類は二〇％、常滑産は一九％、舶載陶磁は五％を占める。舶載陶磁は青磁一五点、白磁三点、計一八点と少なく、時期の判明するものは中世前半のものに限られる。

瀬戸美濃系は一二〇点出土し、古瀬戸製品は前期のものはなく、中期も壺瓶類や盤類が五点と極めて少ない。後期以降継続的に出土しはじめ一一〇点と急増し、後Ⅳ期古段階には各器種がセットとして搬入される。大窯製品は第4段階まで認められるが五点にすぎず、遺跡が急速に衰退したことを示している。器種別には天目類や碗類・神仏具が多いのが特徴で、主に十二世紀中頃から十五世紀後葉にかけて存続した集落とみることが許されよう。

（八）勝間田城跡（榛原郡榛原町勝田）

国人領主勝間田氏により室町時代の初め頃に築かれた山城で、文明八年（一四七六）に今川義忠の攻撃により落城したとされる。これまで約二三〇〇㎡発掘調査され、㎡あたりの出土点数は二・二点。かわらけを主体とする土師質土器類が八〇％以上を占め、瀬戸美濃系が一四％、常滑産と舶載陶磁はともに二％前後、山茶碗類はほとんど出土していない。舶載陶磁は青磁五〇点、白磁四六点、陶器八点、染付一五点、計一一九点出土し、中世前半のものは僅か四点にすぎず、中世後半のものが圧倒的に多い。

瀬戸美濃系は七二点出土。古瀬戸製品は、時期が確定できるものでは後Ⅳ期古段階が若干みられるものの、大半が後Ⅳ期新段階で占められ、大窯製品は全く確認できず、極めて一括性の高い瀬戸美濃焼編年の標識となる資料といえる。器種別には擂鉢が最も多く過半数を占め、茶壺を主体と

する壺瓶類がそれに次ぎ、以下、小皿類・天目類の順で碗類は少ない。したがって、本城跡の居住空間としての利用は、十五世紀第3四半期にほぼ限定されよう。

（九）掛川城跡（掛川市掛川字元城中）

今川氏の重臣朝比奈氏によって永正十年（一五一三）頃に完成したとされる平山城で、永禄十二年（一五六九）には徳川方の石川氏が入り、さらに天正十九年（一五九一）に入部した山内一豊により改修され近世城郭へと変貌する。山内氏が土佐へ転封される慶長五年（一六〇〇）以降、様々な城主が入・転封をくり返し明治維新を迎える。舶載陶磁以外の調査は不充分であるため構成比は提示できない。舶載陶磁は青磁四八点、白磁四五点、染付八五点、陶器五点の計一八三点出土し、時期の判るものは中世前半一二点、後半一五七点と後者が圧倒的に多い。

瀬戸美濃系は一〇一点まで確認した。このうち古瀬戸製品は一九点で、中期の壺瓶類が六点みられるが、これは下層の中世墓で使用された蔵骨器であろう。後期のものは一三点で、時期の判明するものは後Ⅳ期古段階以降のものに限られる。大窯製品は八二点と急増し、小皿類を主体に各段階のものが一定量みられ、登窯製品も継続的に搬入されている。以上のことから、本城跡への定住化は十五世紀中頃まで遡る可能性があり、十六世紀以降さらにその利用が拡大したものと思われる。

（一〇）殿谷城跡（掛川市本郷字中殿谷）

国人領主原氏の居城で、文明年間（一四六九～八七）に築城され、明応三年（一四九四）に今川氏の攻撃を受け落城したとされる。調査面積は約四〇〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・二点。構成比は瀬戸美濃系が四二%、信楽産の茶壺が二六%、舶載陶磁が二四%、かわらけ主体の土師質土器類が七%、常滑産が一%を占め、山茶碗類は全く出土していない。舶載陶磁は青磁八点、白磁六〇点、染付七一点、南蛮五二点の計一九一点出土しているが、中世前半のものは僅か一点にすぎず、青磁の占める割合が極めて低いのが特徴である。

瀬戸美濃系は三四〇点。古瀬戸後期の製品が五七点と一定量出土しているが、大半が壺瓶類で各器種がセットとして搬入された形跡はない。主体は二五五点からなる大窯製品で、第1段階のものが最も多く築城に伴ない大量に搬入されたと思われる。第2段階には減少傾向に転じ、第3段階はその前半に属するものが若干認められるにすぎない。器種別には小皿類が最も多く過半数を占め、天目類がそれに続く。以上のことから、本城跡の居住空間としての利用は、殿谷城が落城したとされる十五世紀末から十六世紀中頃にかけてであり、その後武田氏に属した原氏が、徳川方の久野氏に攻められ遠江を去る天正元年（一五七三）頃まで存続した可能性が高い。

（一一）笹岡城跡（天竜市二俣町二俣）

文亀年間（一五〇一～〇四）、二俣近江守により築城とされる説があるが詳細は不明である。調査面積は約九〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・九点。陶磁器の構成比は、かわらけを主体とする土師質土器類が八四%、山茶碗類が八%、瀬戸美濃系が五%、舶載陶磁が二%、常滑産が一%である。舶載陶磁は青磁七点、白磁四点、青白磁二点、染付四点の計一七点で、青白磁を除くとすべて中世後半に位置付けられる。

瀬戸美濃系は四〇点出土。うち古瀬戸製品は三三点で、前期の壺瓶類が僅かに認められるが、擂鉢を主体とする後Ⅳ期新段階のものが過半数を占め、この時期に限りセットで搬入されている。大窯製品は七点ですべて第3段階以降のものである。山茶碗類が一定量出土しており、中世前半の遺構が存在した可能性を残すものの、本城跡への定住化は、勝間田城跡と同様十五世紀の第3四半期が主体で、十六世紀後半頃に再利用されたものと考えられる。

（一二）高根城跡（磐田郡水窪町地頭字久頭合）

国人領主奥山氏により、応永二十一年（一四一四）前後に築城された山城で、享禄元年（一五二八）あるいは永禄十二年（一五六九）の落城とさ

れる。調査面積は約二六〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・五点。常滑産の壺甕類が六八%と最も多く、瀬戸美濃系が一八%、土師質土器類が一一%、舶載陶磁が三%を占め、山茶碗類は確認されていない。舶載陶磁は青磁三一点、白磁七点、染付一点の計三九点で、すべて中世後半に位置付けられる。

瀬戸美濃系は二〇八点出土し、古瀬戸中期が一六点みられるものの、壺瓶類に限定されるためおそらく伝世品であろう。後期は一七〇点で、後Ⅲ期以降搬入が本格化する。大窯製品は一六点、すべて第1段階に位置付けられ第2段階以降のものはみられない。器種別には壺瓶類が過半数を占め、擂鉢・盤類・天目類の順で続き、碗類・小皿類は極めて少ない。したがって、本城跡の居住空間としての利用は、十五世紀前半まで遡る可能性があり、十六世紀初め頃まで継続したものと思われる。

（一三）元島遺跡（磐田郡福田町豊浜字一本松）

約二〇〇〇㎡の発掘調査によって、四方を水路状の溝で区画された屋敷地には、水路に直行して舟入りと考えられる入り江が検出され、太田川河口に位置する福田湊に関連した集落と推定されている。㎡あたりの出土点数は〇・四点で、鍋類が主体の土師質土器類が五四%、瀬戸美濃系が二八%、山茶碗類・常滑産が各八%、舶載陶磁は二%を占める。舶載陶磁は青磁九七点、白磁五八点、青白磁六点、陶器七点、染付一三点の計一八一点出土し、このうち中世前半は四二点にすぎないが、後半には一三〇点と急増している。

瀬戸美濃系は二四〇〇点出土。古瀬戸製品は前Ⅱ期から継続して搬入され、前期には四耳壺・梅瓶・瓶子など壺瓶類が一八点、中期には小皿類・盤類・卸皿・壺瓶類などの器種が九二点と増加傾向が認められる。後期のものは実に一六七七点を数え、後Ⅰ期からセットで搬入され後Ⅲ期には倍増し、擂鉢が搬入される後Ⅳ期古・新段階にピークを迎える。大窯製品は五九三点とやや減少するものの第4段階まで継続して搬入される。器種別には古瀬戸・大窯製品とも小皿類の構成比率が高いのが特徴で、擂鉢がそれに次ぐ。以上のことから、本遺跡の成立は十二世紀中葉まで遡るが、その最盛期はむしろ中世後半にあり、文献史料が示すとおり慶長九年（一六〇四）の太田川改修に伴い廃絶した可能性が高い。

（一四）大見寺遺跡（磐田郡見付字小路）

本遺跡は、後述する見付端城遺跡の第5次調査地点にあたるが、日照山大見寺の境内であることから一応区別してカウントした。約三四〇㎡発掘調査されており、山茶碗類と土師質土器類は未調査であるため、㎡あたりの出土点数は二・三点以上としておきたい。山茶碗・土師質土器類を除く構成比は常滑産五〇%、瀬戸美濃系二八%、渥美産の甕類一五%、舶載陶磁七%を占める。舶載陶磁は青磁三九点、白磁六点、天目一〇点の計五五点出土し、時期別には中世前半が二七点、後半は一五点とやや減少する。

瀬戸美濃系は二一七点出土。すべて古瀬戸製品で、前期は壺瓶類が僅か一点、中期も九点と少ないが各器種が認められる。元島遺跡と同様後期に二〇七点と急増し、後Ⅳ期古・新段階には各器種がセットとして搬入される。器種別には擂鉢が最も多く、天目類・小皿類・壺瓶類・碗類の順でそれに続く。なお、本遺跡では大窯製品は全く確認されていないため、山茶碗類の編年観から十二世紀後半に成立し、以降十五世紀後葉にかけて存続したものと考えられる。

（一五）見付端城遺跡（磐田市見付）

見付端城は室町時代初期に築城され、天文六年（一五三七）に今川義元の命を受けた天野氏の攻撃により落城し、永禄十二年（一五六九）、徳川家康により城ヶ崎城（見付端城）への移転に伴い廃絶したとされる。ただし、調査地点は、御殿・二之宮地区にあった遠江国府が平安時代後期に移転してきた地域で、また中世には遠江守護所の推定地と考えられている。調査面積は約二四〇〇㎡。山茶碗類と土師質土器類は未調査で、㎡あたりの出土点数は一・七点以上である。山茶碗・土師質土器類を除く構成比は

常滑産五一％、瀬戸美濃系三三％、舶載陶磁一〇％、渥美産五％を占める。舶載陶磁は青磁二七八点、白磁一二一点、染付二二点、陶器一〇点の四三一点まで確認されており、時期の判るものは中世前半が一五〇点、後半は二〇八点とやや増加する。なお、前者には白磁四耳壺・白磁水注・青磁酒会壺・泉州窯産陶器盤など特殊品も含まれている。

瀬戸美濃系は一三六八点で、このうち古瀬戸製品は前期二八点、中期五八点、後期一二二九点の計一三一五点確認されている。前Ⅰ期から四耳壺・瓶子・水注など壺瓶類を主体に、洗などが一定量継続して搬入されており、前記の元島遺跡と同様、中期には天目類をはじめ各器種が登場し、後Ⅰ期には生産地の器種がセットとして搬入され、後Ⅳ期古・新段階には擂鉢や壺瓶類が増加しピークに達する。すなわち、古瀬戸製品の時期別の搬入状況は元島遺跡に類似しており、両遺跡の密接な関係が指摘できよう。しかし、大窯製品は四九点と激減し、元島遺跡とは異なり急速に衰退したことを示している。器種別には壺瓶類の構成比率が最も高く、盤類・擂鉢・天目類・碗類・小皿類の順でそれに次ぐ。本遺跡は、中世遺跡としては十二世紀中頃に成立しており、出土遺物の豊富さから以後遠江守護所として機能し、十六世紀初め頃には廃絶したものと考えられる。

（一六）野際遺跡（磐田市東貝塚）

調査地周辺は、平安時代に成立した鎌田御厨の推定地であり、室町時代後期には国人領主松井氏の所領の一部となっている。これまで約四七〇〇㎡が発掘調査されているが、目立った中世の遺構は検出されていない。やはり山茶碗類と土師質土器類は未調査で、㎡あたりの出土点数は〇・〇四点以上。それら以外の構成比は瀬戸美濃系四三％、舶載陶磁三一％、渥美産二〇％、常滑産六％である。舶載陶磁は青磁三二点、白磁三〇点、青白磁二点、染付一点、計六五点出土し、中世前半のものが六一点、後半は僅か四点で、前者には白磁四耳壺が含まれる。

瀬戸美濃系は九一点出土。古瀬戸製品には前Ⅰ期の四耳壺や前Ⅱ期の水注がみられるものの、前期と中期は合わせて僅か四点にすぎず、継続的に搬入された形跡はない。後期に六九点と急増するが、まとまって出土するのは後Ⅳ期古・新段階で、この時期に全体の過半が集中する。大窯製品は一八点と減少し、第3・4段階を中心に各段階のものが数点みられる程度である。器種別には擂鉢が多く壺瓶類がそれに次ぎ、天目類・碗類・小皿類は少ない。以上のことから、本遺跡は中世前半を主体としつつも、少なくとも十五世紀中頃や十六世紀後葉頃にも存在したと考えられる。

（一七）横地城跡（小笠郡菊川町東横地字杉ノ谷）

鎌倉御家人としても活躍した横地氏によって室町時代初期に築城された山城で、前記の勝間田城と同様、文明八年に今川氏の攻撃により落城したとされる。これまで約一三〇㎡の範囲確認調査が行われており、㎡あたりの出土点数は一・四点。かわらけ主体の土師質土器類が六一％、瀬戸美濃系一七％、舶載陶磁一五％、常滑産六％、山茶碗類は僅か一％にすぎない。舶載陶磁は青磁二二点、白磁三点の計二五点で、染付は確認されていないが時期の判るものはすべて中世後半に属する。

瀬戸美濃系は二九点で、すべて後Ⅳ期古あるいは新段階に位置付けられる。調査面積が少なく断定はできないが、勝間田城跡と同様、十五世紀第3四半期頃に本城跡が居住空間として利用された可能性は高い。

（一八）高天神城跡（小笠郡大東町上土方嶺向字鶴翁山）

築城時期は不明であるが、永正十年（一五一三）以前に今川氏親の重臣の福島氏が在城したことが知られている。その後、小笠原氏が城主となり徳川方の城となるが、天正二年（一五七四）武田勝頼の攻撃により降伏、以降武田方の城となり、天正九年には徳川家康の攻撃により落城し廃城となる。堂の尾曲輪の約一二〇〇㎡が発掘調査されており、㎡あたりの出土点数は〇・三点。構成比は土師質土器類が五六％、瀬戸美濃系二二％、常滑産一五％、舶載陶磁七％で、山茶碗類は全く出土していない。舶載陶磁は青磁四点、白磁一〇点、染付四点、陶器三点の計二一点まで確認され、

時期の判るものはすべて中世後半に属する。

瀬戸美濃系は六八点。古瀬戸後期の茶壺五点を除くとほとんどが大窯製品で、大半が第2・3段階に位置付けられ、小皿類・擂鉢・天目類がセットで出土している。なお、瀬戸美濃系の中には僅かではあるが初山窯製品が含まれており、遠江の瀬戸美濃系大窯の成立を考える上で重要な資料といえよう。

(一九) 蒲原城跡（庵原郡蒲原町字城山）

南北朝期に蒲原氏により築城されたと推測される山城で、戦国期には今川方、その後北条方の城となるが、永禄十二年（一五六九）に武田信玄の攻撃により落城したとされる。約三三〇〇㎡が発掘調査され、㎡あたりの出土点数は〇・六点。かわらけ主体の土師質土器類が八五%、舶載陶磁が七%、瀬戸美濃系が五%、常滑産が二%で、山茶碗類は確認されていない。舶載陶磁は青磁四点、白磁四六点、染付九四点、陶器三点の計一四七点出土し、時期の判るものはすべて中世後半に位置付けられ、青磁が少ないことが特徴である。

瀬戸美濃系は一〇七点。このうち古瀬戸製品は二九点で、天目類を主体に過半が後Ⅳ期新段階に属するが、この時期に確実に位置付けられる擂鉢は出土していない。大窯製品は七二点確認され、擂鉢・小皿類・天目類の順で第3段階前半までセットで搬入されている。したがって、本城跡の居住空間としての利用は、前記の殿谷城跡などと同様、十五世紀末から十六世紀中頃にかけてと推察される。

(二〇) 中島遺跡（磐田郡浅羽町長溝字中島）

約九五〇〇㎡発掘調査され、濠を廻らした屋敷地に竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。㎡あたりの出土点数は八・八点。山茶碗類が八九%と圧倒的に多く、鍋類が主体の土師質土器類が六%、常滑産・渥美産がともに二%前後、舶載陶磁が一%を占めるが、瀬戸美濃系は全く出土していない。舶載陶磁は青磁三七点、白磁四八点、青白磁三点の計八八点で、すべて中世前半に位置付けられる。山茶碗類や舶載陶磁の編年観から十二世紀初めから十三世紀中頃にかけて存続したものと思われる。

(二一) 原川遺跡（掛川市領家字原川）

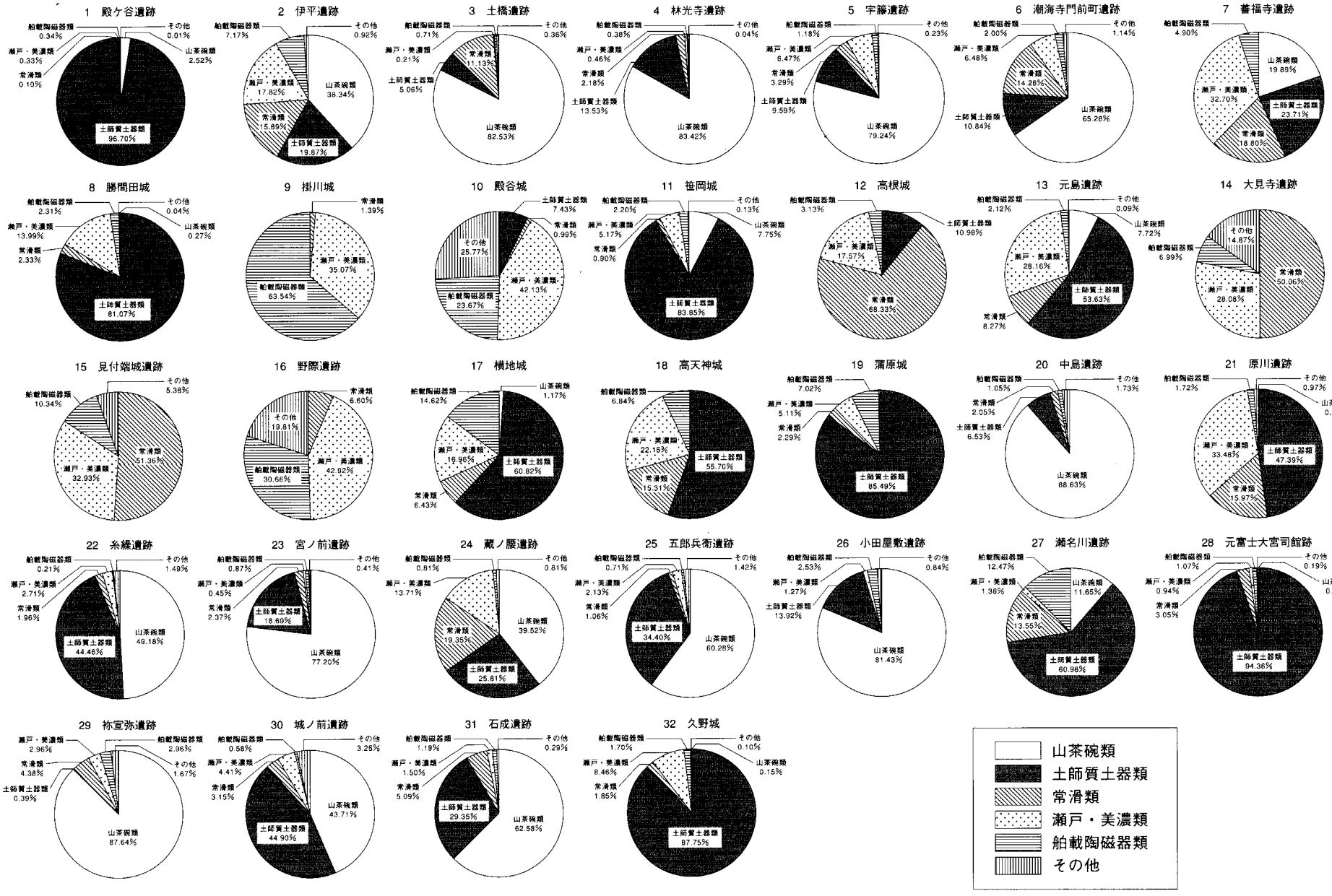
本遺跡は原野谷川流域に立地し、江戸時代には東海道の宿場町袋井宿と掛川宿の間にあって「原川町」と呼ばれ、在郷町として大いに発展したといわれている。調査面積は約八九〇〇㎡。山茶碗類と土師質土器類は未調査で、瀬戸美濃系では大窯期の志野製品をカウントしておらず不充分なデータである。㎡あたりの出土点数は〇・八点以上、カウントされた陶磁器の構成比は瀬戸美濃系六四%、常滑産三一%、舶載陶磁三%、渥美産二%を占める。舶載陶磁は青磁九二点、白磁一三点、青白磁二点、染付一二点の計一一九点出土し、このうち時期の判るものは中世前半が六九点、中世後半が四四点である。

瀬戸美濃系は二三一二点まで確認している。古瀬戸製品は前Ⅱ期から搬入されるが、中期までのものは四耳壺・梅瓶・水注など壺瓶類を中心に二〇点と少ない。後期には五〇一点と急増し各器種がセットで搬入され、後Ⅲ期には出土数はさらに増加し、後Ⅳ期古・新段階でピークに達する。器種別には擂鉢が主体で壺瓶類がそれに次ぎ、天目類・碗類・小皿類はほぼ同数確認されている。一方、大窯製品は一〇七二点と出土数はさらに倍増し、この他に古瀬戸後期か大窯製品か未分離の擂鉢が七一一点存在するため、擂鉢を主、小皿類を従に各段階とも安定的に搬入されている。また登窯製品の出土も多いことから、本遺跡は中世前半に成立し、中世後半から近世にかけてさらに発展した集落といえよう。

(二二) 糸繰遺跡（小笠郡大東町千浜字糸繰）

約一五〇〇㎡が発掘調査され、数棟の掘立柱建物・溝状遺構・土坑などが検出されている。㎡あたりの出土点数は一・三点。構成比は山茶碗類が四九%、土師質土器類四四%、瀬戸美濃系三%、常滑産二%で、舶載陶磁は一%未満である。舶載陶磁は青磁・白磁が各二点の計四点で、時期の判

表2　中世遺跡における陶磁器の構成比



るものは少なく染付は確認されていない。瀬戸美濃系は五一点出土しているが、古瀬戸製品は五点にすぎず後Ⅲ期までのものは認められない。大窯製品は四六点。大半が第3・4段階に位置付けられ、この時期には天目類・小皿類・擂鉢がセットで出土し、登窯製品も連続して搬入される。したがって本遺跡の存続期間は、十二世紀中頃から十三世紀中頃までと、十六世紀後半以降十七世紀にかけての二時期に分かれるものと推察される。

(二三) 宮ノ前遺跡（小笠郡小笠町川上字宮ノ前）

交通の要衝に立地する集落であるが、トレンチ調査であったため遺構の状況は判然としない。調査面積は約九〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は二・九点。内訳は山茶碗類が七七%、かわらけ主体の土師質土器類が一九%、常滑産二%、舶載陶磁一%、瀬戸美濃系は〇・五%と極めて少ない。舶載陶磁は青磁一六点、白磁六点、青白磁一点の二三点で、時期の判るものはすべて中世前半に位置付けられる。瀬戸美濃系は一二点。ほとんどが古瀬戸製品で前Ⅲ－Ⅳ期の瓶子や卸皿、中Ⅰ－Ⅱ期の底卸目皿などがみられるが、セットとして搬入された形跡はない。山茶碗類や舶載陶磁からみて中世前半を主体とする集落であったものと思われる。

(二四) 蔵ノ腰遺跡（小笠郡菊川町東横地字蔵ノ腰）

調査面積は五四㎡と極めて少なく、建物等の遺構も検出されていない。㎡あたりの出土点数は二・三点で、構成比は山茶碗類が四〇%、土師質土器類二六%、常滑産一九%、瀬戸美濃系一四%、舶載陶磁は一%未満である。舶載陶磁は中世前半の青磁碗が一点のみ出土している。瀬戸美濃系は一七点で、すべて後Ⅳ期新段階以降のものである。本遺跡の存続期間は、山茶碗類が主体となることから中世前半が中心となろうが、本遺跡周辺には、十五世紀後葉から十六世紀にかけての集落が存在した可能性が高い。

(二五) 五郎兵衛遺跡（小笠郡菊川町東横地字五郎兵衛）

調査面積は五一㎡と極めて少なく遺構の状況も判然としない。㎡あたりの出土点数は五・五点で、構成比は山茶碗類が六〇%、土師質土器類が三四%を占め、瀬戸美濃系二%、常滑産一%、舶載陶磁は一%未満である。舶載陶磁は白磁碗と染付皿が各一点、瀬戸美濃系は、古瀬戸後Ⅲ期から大窯第2段階のものが計六点確認されている。山茶碗類の構成比の高さから中世前半を主体とする集落の存在が予想されるが、その時期に該当する古瀬戸製品は存在せず、舶載陶磁も極めて少なく、殿ケ谷・伊平遺跡とは異なった一般的な集落の様相が窺われる。

(二六) 小田屋敷遺跡（小笠郡菊川町東横地字慈眼寺前）

調査面積は二〇五㎡とあまり多くないが、屋敷地の区画溝が検出されている。㎡あたりの出土点数は一・二点で、構成比は山茶碗類が八一%、土師質土器類が一四%、舶載陶磁三%、瀬戸美濃系二%を占める。舶載陶磁は青磁三点、白磁二点、青白磁一点が出土し、うち五点が中世前半に位置付けられる。瀬戸美濃系は古瀬戸後期から大窯のものが僅かに三点出土したにすぎない。山茶碗類の構成比が極めて高いことから、五郎兵衛遺跡と同様中世前半を主体とする集落が存在したものと思われる。

(二七) 瀬名川遺跡（静岡市瀬名川）

鎌倉期に成立したとされる瀬名川宿との関係が指摘される遺跡で、総柱構造の掘立柱建物が検出されている。調査面積は約一三〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は〇・三点。陶磁器の構成比は土師質土器類が六一%、常滑産が一四%、舶載陶磁は一三%で、駿河西部という立地条件からか山茶碗類はやや低く一二%、瀬戸美濃系は僅か一%にすぎない。舶載陶磁は青磁四四点、白磁二点の計四六点で、中世後半のものは確認されていない。瀬戸美濃系は、前Ⅰ期の四耳壺、中Ⅰ－Ⅱ期の卸皿をはじめ後Ⅱ期までのものが計五点認められるにすぎず、セットで搬入された形跡は全くない。したがって本遺跡は、十二世紀後葉以降十五世紀初めにかけて存続した可能性は残すものの、やはり中世前半を主体とする集落とみてよいであろう。

(二八) 元富士大宮司館跡（富士宮市元城町）

浅間神社の大宮司で国人領主としても知られる富士氏の居館で、これま

で約三七〇〇㎡が発掘調査され、堀・土塁・礎石建物等の様々な遺構が検出されている。㎡あたりの出土点数は九・〇点。かわらけを主体とする土師質土器類が九四％を占め、常滑産三％、舶載陶磁・瀬戸美濃系ともに一％で、駿河東部という立地条件から山茶碗類は極めて少ない。舶載陶磁は三五五点出土し、内訳は青磁一九六点、白磁五八点、青白磁一九点、陶器八二点で、染付は確認されていない。また、時期別には中世前半が二七一点、後半二八点を数え、前者には白磁四耳壺・青白磁梅瓶・泉州窯産盤・青磁酒会壺などの特殊品が、高い比率で含まれることは注目されよう。

瀬戸美濃系は三一四点出土。古瀬戸製品は前期一〇点、中期六点、後期二七一点の計二八七点で、前Ⅱ期から中Ⅱ期にかけての四耳壺・水注・卸皿・折縁深皿などが若干存在するが、出土量が増えるのは後Ⅰ期からで、後Ⅲ期には急増し各器種がセットとして搬入され、擂鉢が流通する後Ⅳ期古・新段階にピークに達する。器種別には擂鉢に続き盤類が高い比率を占め、碗類・天目類・小皿類の順に続く。しかし、大窯製品は激減し確実なものは二〇点にすぎず、かえって初期登窯製品の方が目立つ。本遺跡の成立は、舶載陶磁の器種組成から十二世紀後半代まで遡ることは確実で、少なくとも十五世紀後葉頃までは連綿と存続したものと思われる。

（二九）祢宜弥遺跡（袋井市愛野字祢宜弥）

約一二〇〇㎡の発掘調査によって、掘立柱建物や溝などが検出されており、㎡あたりの出土点数は〇・六点。山茶碗類が八八％と高率を占め、常滑産が四％、舶載陶磁・瀬戸美濃系ともに三％前後、土師質土器類はほとんど出土していない。舶載陶磁は青磁一六点、白磁四点、陶器三点の計二三点で、すべて中世前半に位置付けられ、泉州窯産盤も出土している。瀬戸美濃系は二三点出土。古瀬戸前Ⅲ－Ⅳ期の四耳壺、中Ⅰ－Ⅱ期の卸皿をはじめ大窯第3段階まで各時期のものがみられ、後Ⅰ－Ⅱ期と第1段階の出土数がやや多いが、セットで搬入された形跡は認められない。山茶碗類の出土量の多さからみて、本遺跡の最盛期は中世前半と考えられる。

（三〇）城ノ前遺跡（浜名郡新居町中之郷）

本遺跡では、松田城の外堀と考えられる遺構が検出され、陶磁器の多くはそこから出土したものであるが、堀の埋土は松田城側からではなく浜名湖側から流れ込んでおり、明応七年（一四九八）の地震によるものと推察されている。調査面積は約九〇〇㎡で、㎡あたりの出土点数は五・四点。かわらけと鍋類が拮抗して出土する土師質土器類が四五％と最も高く、山茶碗類が四四％、瀬戸美濃系が四％、常滑産が三％を占め、舶載陶磁は一％にも満たない。舶載陶磁は青磁二一点、白磁七点の計二八点出土し、中世前半が二〇点、後半が八点確認されている。

瀬戸美濃系は二一四点。ほとんどが古瀬戸製品で、前Ⅰ期から中Ⅱ期までのものが四耳壺・水注など壺瓶類を主体に二九点出土している。後期のものは一八四点で後Ⅰ－Ⅱ期には各器種がセットで搬入され、後Ⅲ期に増加し後Ⅳ期古・新段階でピークとなるが、大窯製品は混入と考えられる第3段階の擂鉢が一点みられるにすぎない。なお、古瀬戸後期の器種別の搬入状況は、擂鉢が最も多く、小皿類・壺瓶類・天目類の順でそれに続く。確実に中Ⅲ－Ⅳ期に位置付けられる製品は出土していないが、本遺跡周辺には、十二世紀中頃から十五世紀後葉頃まで継続的に営まれた集落が存在した可能性が高い。

（三一）石成遺跡（島田市落合字石成）

調査地周辺は、平安時代末から鎌倉時代前半にかけて伊勢神宮の大津御厨に推定される地域で、約八三五㎡の発掘調査によって、区画溝をもつ屋敷地に小規模な掘立柱建物が数棟検出されている。㎡あたりの出土点数は一一・二点。山茶碗類が六三％、かわらけ主体の土師質土器類が二九％、常滑産が五％、瀬戸美濃系が二％、舶載陶磁が一％を占める。舶載陶磁は青磁五四点、白磁四七点、青白磁四点、陶器類六点の計一一一点出土し、このうち確実に中世後半に位置付けられるものは僅か五点にすぎず、中世前半が主体で泉州窯産の盤なども出土している。

瀬戸美濃系は一四〇点出土し、うち一三八点までが古瀬戸製品である。前Ⅰ期から中Ⅱ期までのものが四八点あり、四耳壺・瓶子・梅瓶など壺瓶類や洗・卸皿などの器種が一定量継続して搬入されるが、中Ⅲ－Ⅳ期のものはみられない。後期のものは九〇点確認され、後Ⅲ期には天目類・碗類・盤類などがセットで出土しピークとなるがそれ以降やや減少する。以上のことから、本遺跡は十二世紀前半に成立した中世前半を主体とする集落であるが、十四世紀後葉以降も調査地点あるいはその周辺に遺跡が存在したことは確実で、十五世紀後葉頃までは存続したものと思われる。

（三二）久野城跡（袋井市鷲巣上末本）

明応年間（一四九二～一五〇一）に久野氏により築城され、天正十八年（一五九〇）からの一時期豊臣系の松下氏が城主になるが、関ヶ原後再び久野氏、その後北条氏が入り、正保元年（一六四四）には廃城になったとされる。これまで約四二〇〇㎡が発掘調査され、㎡あたりの出土点数は二・五点。構成比は、かわらけ主体の土師質土器類が八八％を占め、瀬戸美濃系が八％、舶載陶磁と常滑産が二％弱で、山茶碗類はほとんど出土していない。舶載陶磁は青磁二六点、白磁五九点、染付九一点、陶器一点の計一七七点で、このうち確実に中世前半に位置付けられるものは僅か三点にすぎず、中世後半が主体である。

瀬戸美濃系は八三三点まで確認され、このうち確実に古瀬戸製品とされるものは一二七点で、前期の卸皿と中期の壺瓶類が各一点認められるにすぎず、他はすべて後期のものである。ただし、各器種がセットで出土するのは後Ⅳ期古段階で、後Ⅳ期新段階には出土数も急増し、この時期に築城された可能性は高い。大窯製品は六八七点で、第1段階にはさらに出土数が増加し、第2・3段階にピークに達し、第4段階に減少するものの初期登窯製品も引き続き出土している。器種別には擂鉢・小皿類が主体で、天目類がそれに続く。したがって、本城跡の居住空間としての利用は、十五世紀後半まで遡り、以降十七世紀前半にかけて継続したものと思われる。

二、舶載陶磁器との補完関係

（一）遺跡の性格と存続期間

これまで遠江地方を中心とした三二の遺跡における陶磁器の概要を述べてきた。これらの遺跡は、いわゆる中世集落と城跡とに区分され、さらに中世集落は、横地氏関係の殿ケ谷遺跡や伊平遺跡、守護所と推定される見付端城遺跡、富士氏の元富士大宮司館跡などの在地領主クラス以上の居館と、その他の集落とに大別が可能で、遺跡の性格や存続期間により陶磁器全体の組成にかなりの差がみられることが明らかになった。

まず、山茶碗類については、駿河地方の瀬名川遺跡や元富士大宮司館跡を除くと、中世集落では山茶碗類の構成比率が一般的に高く、城跡では山茶碗類はほとんどみられない。これは遺跡の成立時期に関係する。すなわち、当地方の中世集落は十二世紀中頃に成立してくるが、主要な供膳具は山茶碗とそのセットとなる小皿で（註3）、搬入時期は渥美・湖西産や東遠産の生産が終息する十三世紀中頃までを主体とし、一部の集落で瀬戸産や東濃産が引き続き搬入されるものの、ほとんどの遺跡で十四世紀代には出土しなくなる。したがって、山茶碗類の構成比率が高ければ高いほど中世前半に主要存続期間を置く遺跡で、中世後半まで存続した遺跡は、相対的に山茶碗類の構成比率は低くなり、十五世紀中頃以降に居住空間としての利用が始まる城跡で山茶碗類がみられないのは当然である。なお、中世集落の中では、居館の方が山茶碗類の構成比率が相対的に低く、他の陶磁器の比率が高いという傾向が窺われた。

次に、壺・甕・鉢を主体とする常滑産の焼締陶器は、各遺跡とも一定量継続して搬入されたようで、遺跡の性格による明確な搬入量の違いは認めがたい。ただし、瀬戸美濃系施釉陶器との関係でみれば、山茶碗類が高い構成比率を占める中世前半の集落ほど常滑産の比率も高く、中世後半の集落や城跡では瀬戸美濃系の比率よりも低いという傾向が認められる。おそらくこれは、当地方では瀬戸美濃系の擂鉢が十五世紀中頃以降大量に搬入

され、常滑産の鉢（片口）と競合し、駆逐していくことと無関係ではないと思われる。

また、土師質土器類の内、かわらけの構成比率は、従来から指摘されているように遺跡の格式の違いを反映している（註4）。当地方の国人クラスの城跡でも勝間田・笹岡・横地・蒲原・久野城のデータが示すように、ハレの場で大量に消費されるかわらけが、高い比率を占めることが多いという結果が得られた。なお、中世前半に中心のある殿ケ谷遺跡・元富士大宮司館跡といった居館でも同様な傾向が認められ、かわらけの構成比率の高さは、戦国時代の城跡に限らず中世全般を通じて遺跡の社会的地位の優位性を表現している。一方、潮海寺門前町・元島・中島・城ノ前遺跡などでは、土師質土器類のうち鍋類の比率が高いことが知られており、これらの遺跡は、立地条件等からみて流通に関係する集落であった可能性が高い（註5）。

こうしたなか、瀬戸美濃系施釉陶器と舶載陶磁器の搬入状況は、伊豆の御所之内遺跡で指摘されたように、十四世紀の中頃を境に中世前半と中世後半とでは大きな違いがあることも判明した。そこで、遺跡の性格等を考慮に入れつつ、当地方の主要遺跡を中世の前半と後半に分けて両者の補完の在り方を検討してみたい。

（二）中世前半の様相

今回取り上げた二三の中世集落は、十二世紀中頃には集落として成立してくるが、全体的な傾向としては、舶載陶磁器はすべての集落で中世前半のものが多かれ少なかれ出土しているのに対し、それにほぼ並行する古瀬戸前期から中期にかけての瀬戸美濃系施釉陶器の出土数は少なく、碗皿類を主体とする舶載陶磁が出土数では確実に上回っている。

これを遺跡の性格別にみると、山茶碗類が極めて高い構成比率を占める一般的な集落の方がその傾向が顕著で、瀬戸美濃系施釉陶器の出土数は非常に少なく、林光寺・糸繰・蔵ノ腰・五郎兵衛・小田屋敷・中島遺跡では当該期の瀬戸美濃系は全く確認されていない。それに対して舶載陶磁は一定量存在し、当地方では一般的な村落まで浸透していたと思われる。

一方、かわらけが多く山茶碗類の構成比率が相対的に低い在地領主クラス以上の居館では、舶載陶磁の出土数が多く器種も豊富で、白磁四耳壺・青白磁梅瓶・青磁酒会壺・泉州窯産の陶器盤などの特殊品、いわゆる威信財が存在し社会的地位の高さを示している（註6）。また、こうした居館ほど、古瀬戸前期の器種も多いという傾向が認められ、舶載陶磁には及ばないものの四耳壺・瓶子・梅瓶・水注といった壺瓶類を主体に、卸皿・洗など各器種が出土しており、当地方では彼ら居館の住人が当該期の古瀬戸の主な受容層であったと推測される。ただし、古瀬戸前期の壺瓶類が、その他の集落でも僅かではあるが出土していることは興味深い。すなわち、当地方では村落領主クラスまで古瀬戸製品が使用されていた可能性があり、これが生産地近い遠江ならではの状況であるのか、全国的な傾向であるのかは今後の調査課題としておきたい。

なお、中世前半における古瀬戸と舶載陶磁との関係については、鎌倉遺跡群における両者の共伴関係から、当該期の古瀬戸は、中国陶磁の主体である碗皿類をほとんどコピーせず、卸皿・入子・柄付片口のように中国陶磁にないもの、あるいは壺瓶類や盤類などのように、搬入量が少なく入手困難なものを主に生産し流通させたことを明らかにしたが（註7）、遠江においても量的には少ないもののほぼ同様な傾向が指摘できよう。

（三）中世後半の様相

次に、集落における中世後半の様相についてみると、全体的な傾向としては、当該期の陶磁器が極めて少なく遺構の存在も判然としない土橋・林光寺・中島・小田屋敷・宮ノ前・祢宜弥遺跡などを除くと、遺跡の性格を問わずすべての集落で瀬戸美濃系施釉陶器が纏まって出土しており、出土数は当該期の舶載陶磁を遥かに上回っている。特に、古瀬戸後期の施釉陶器は村落レベルまで浸透した可能性が極めて高く、中世前半とは全く逆の

現象が起こっている。

古瀬戸製品の時期別の搬入状況は、伊平・見付端城遺跡、元富士大宮司館など領主クラスの居館をはじめ、元島・原川・城ノ前遺跡など交通の要衝に立地する流通関係の集落では、後Ⅰ期（十四世紀後葉）には生産地の主要器種である天目類・碗類・小皿類・盤類などがセットとして搬入され、遺跡が衰退する伊平遺跡を除くと、後Ⅲ期（十五世紀前葉）以降さらに増加し、特に擂鉢の本格的な流通が開始される後Ⅳ期古・新段階（十五世紀中頃）にはピークに達する。その他の集落でも搬入時期はやや遅れるものの類似した出土傾向を呈し、遅くとも後Ⅳ期には擂鉢を主体に一定量セットで搬入される（註８）。しかし、中世集落における瀬戸美濃系の搬入は、十五世紀の終末近くなると大きな変化をみせはじめる。大見寺・城ノ前・善福寺・石成遺跡などでは大窯製品はほとんど出土せず、元富士大宮司館、見付端城・伊平・野際・潮海寺門前町遺跡でも搬入量は激減し、大窯製品が一定量出土する集落は、宇藤・元島・原川遺跡といった拠点的な遺跡に限られるようである。そして、これらの遺跡では天目類・小皿類・擂鉢をセットとする各段階の大窯製品が搬入されている。

それに対して舶載陶磁器は、殿ケ谷・伊平遺跡、元富士大宮司館などの居館をはじめ、善福寺・野際・城ノ前・石成遺跡など古瀬戸後期の施釉陶器が纏まって出土する遺跡でも、中世前半と比べると搬入量は激減する。また、宇藤・見付端城・元島遺跡では、舶載陶磁の搬入量が増加する傾向がみられるものの瀬戸美濃系の量には及ばない。さらに、大窯製品が一定量出土する宇藤・元島・原川などの集落でも、それに並行するとされる染付をはじめとする舶載陶磁は極めて少ない。

さて、中世後半には城郭が居住空間として利用されはじめる。今回は九の城跡のデータを提示したが、これらの城への定住化は、後Ⅲ期まで遡る可能性のある高根城を除くと概ね後Ⅳ期以降で、その存続期間は、勝間田城や横地城のように大窯製品の搬入以前に廃絶する城、掛川城や久野城のように大窯全般に亙って継続する城、殿谷・蒲原・高天神城のように大窯期に成立し第３段階（十六世紀中頃）には廃絶する城など様々である。全体的な傾向としては、かわらけの量比に関わらず瀬戸美濃系を主体とするが、集落と比べると舶載陶磁の構成比率が相対的に高く、蒲原城のように染付を主体とする舶載陶磁の方が多い城跡もみられる。

ところで、中世後半の瀬戸美濃系施釉陶器と舶載陶磁器の関係について、ここまでは単純に出土総数のみで比較してきた。それによって、遠江では一般的に瀬戸美濃系の搬入量が舶載陶磁を上回ることが明らかになったが、本稿でいう中世後半は十四世紀後半から十七世紀初頭にかけての約二五〇年に及んでおり、その間の舶載陶磁の搬入の主体は一貫して碗類と小皿類であったのに対し、瀬戸美濃系では碗皿類以外に、舶載陶磁には少ない天目類・盤類・壺瓶類・神仏具や、舶載陶磁には全くみられない卸皿・擂鉢などがあり、舶載陶磁と競合しない器種も少なくない。したがって、両者の関係を明確にするには碗皿類のみで比較する必要があり、さらに関係の時間的な変遷を知るためには、両者の共伴関係を明らかにしておく必要があろう。そこで本稿では、瀬戸美濃焼の編年観を基に舶載陶磁の搬入時期を検討することによって、中世後半における両者の競合関係を少し詳しくみていきたい。

（四）瀬戸美濃焼編年からみた舶載陶磁器

まず、瀬戸美濃系施釉陶器が後Ⅳ期新段階にほぼ限定できる勝間田城の共伴関係をみてみよう。勝間田城では青磁碗のＢ４・Ｃ２・Ｅ類、青磁稜花皿、白磁皿Ｂ・Ｃ１群、染付碗Ｂ群、染付皿Ｂ１群が主体となっており、少なくともこれらの器種はこの時期に搬入された可能性が高い。ただし、勝間田城とほぼ同時期に廃絶する元富士大宮司館、城ノ前・大見寺遺跡、横地城では染付類は確認されていないため、染付碗Ｂ群や染付皿Ｂ１群、白磁皿Ｃ１群の登場は、後Ⅳ期新段階でも終わり頃と推察される。

続く大窯期については、第１～３段階の殿谷城や蒲原城では、旧来の青

表3　主要遺跡における中世後半の舶載陶磁器（碗皿類）

	瀬戸美濃系の主要搬入時期	青磁碗								青磁皿				白磁碗	白磁皿						染付碗					染付皿				
		B2	B3	B4	C2	D1	D2	E	小計	端反	稜花	菊皿	小計		B	C1	C2	D	E	小計	B	C	D	E	小計	B1	B2	C	E	小計
殿ケ谷	?			3					3		1		1	0						0					0					0
伊平	後Ⅰ期～後Ⅲ期	3		1		1			5		1		1	0	8					8				1	1	1				1
見付端城	後Ⅰ期～大窯1		7	22	32	16	10	25	112	5	7		12	2	47	2				49	8				10	12				12
大見寺	後Ⅳ期古・新		4	1				1	6		6		6	0						0					0					0
元島	後Ⅰ期～大窯4	3		21	6	12	9	13	64		6		6	3	30	5				35	9	3			12	1				1
潮海寺門前	後Ⅲ期～大窯4	3	1	2	2		1	4	14			3	3	0				1	1	2					0					0
宇籐	後Ⅳ期新～大窯4			7			4	4	15		2		2	0						0		2	1		3			2		2
野際	後Ⅳ期古・新		1	1					2				0	0	1					1					0	1				1
勝間田城	後Ⅳ期新			13	13	1	1	5	33		15		15	0	11	3				14	7				7	6				8
高根城	後Ⅲ期～大窯1		2	16			1	4	23				0	0						0	1				1					0
笹岡城	後Ⅳ期新・大窯3			3			2		5		2		2	0	1	1		1		3					0		3		1	4
殿谷城	大窯1～大窯3								0			7	7	0	5	46		5	1	57	1	16			18	23	3	11		44
掛川城	後Ⅳ期古～大窯4	4	3	10	1		9	1	28		2		2	0	1	35				36	7	16	2	2	28	23	2	13	11	59
横地城	後Ⅳ期古・新		1	2	1		1		5	13	2		15	0		3				3					0					0
蒲原城	大窯1～大窯3				4				4				0	0		1	32		5	38		16	1	2	19	29	2	21	2	72
原川	後Ⅰ期～大窯4		2	3	6		8	5	24		6		6	1						0					0	6	1		5	12
高天神城	大窯2・大窯3								0			1	1	0			9	1		10		1			1	1				1
元富士館	後Ⅰ期～後Ⅳ期新		2		6	9	3		20		3		3	0	2					2					0					0
城ノ前	後Ⅰ期～後Ⅳ期新			1	2	3			6				0	0						0					0					0
久野城	後Ⅳ期古～大窯4	1		4	1	1	1	2	10	1		7	10	0	3	38	3	4	2	57	2	12		7	25	27	6	5	16	61
上杉氏憲邸	中Ⅲ期～後Ⅱ期					○									+															
保寧寺	中Ⅳ期～後Ⅲ期	○				○								○	○															
十三湊	中Ⅲ期～後Ⅳ期古	○				○	○							○	○															
普正寺	中Ⅲ期～後Ⅳ期古	○			○	○	○	○		○				○	○															
志苔館	後Ⅲ期～後Ⅳ期古	○	○				○			○				○	○															
尻八館	後Ⅲ期～後Ⅳ期新	○	○	○	○		○				○			○	○						○									

※小計にはその他の器種あるいは分類不能な器種が含まれる。

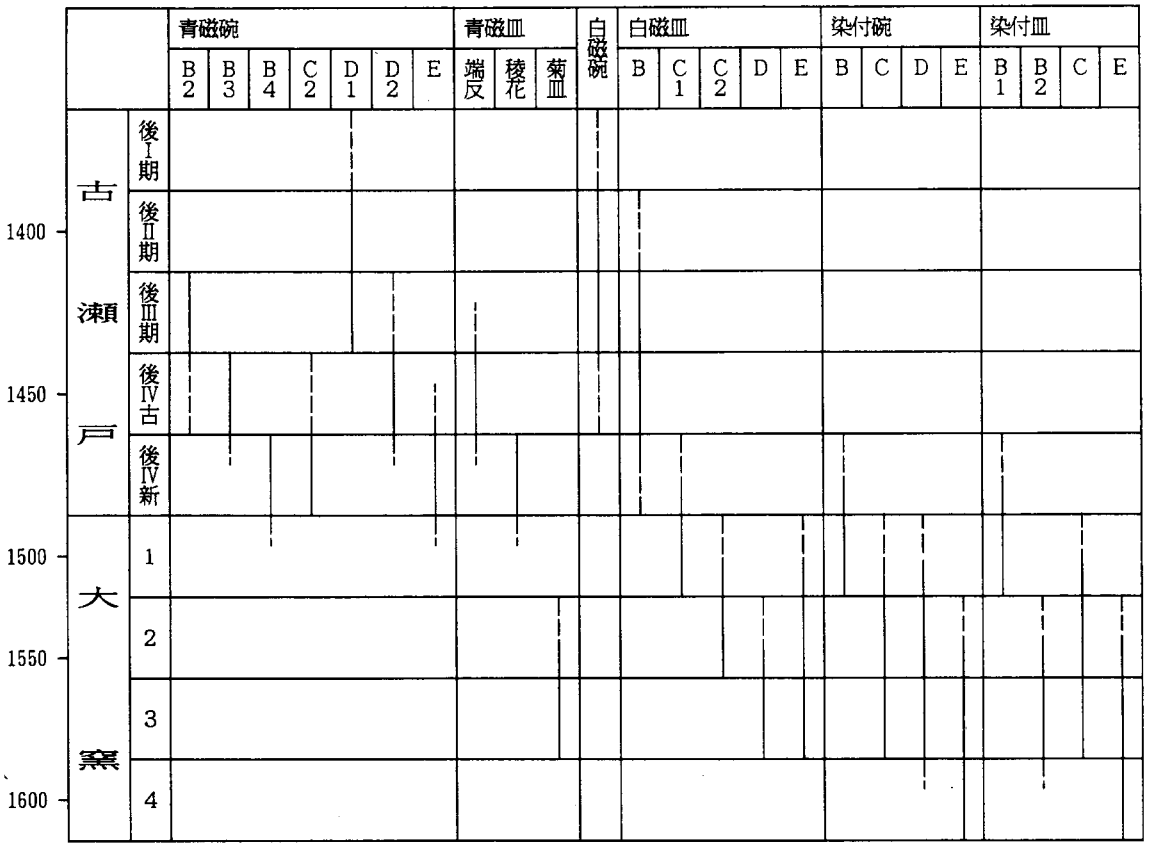
磁の碗皿類や白磁皿B群はほとんどみられないことから、これらの器種は大窯第1段階には搬入されなくなった可能性が高い。また、これまでの舶載陶磁の研究から、第1段階の後半には白磁皿C2・E群、染付碗C群、染付皿C群などの新器種が出現し、おそらく第2段階から第3段階にかけて青磁菊皿や白磁皿D群、染付碗E群、染付皿B2・E群が搬入されたものと思われる（註9）。

それでは、後Ⅳ期古段階以前の共伴関係は如何に設定できるであろうか。表3からも明らかなように、当地方では遺跡の存続期間が長期に亙るため、この段階の共伴関係の証明は困難である。そこで、他地域の一括性の高い遺物群の調査成果を援用すると、鎌倉遺跡群の上杉氏憲邸跡や保寧寺跡では、古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期に並行する舶載陶磁器は、青磁碗D1類や白磁端反碗が存在する程度で皿類はほとんどみられず、後Ⅲ期になって青磁碗B2類や白磁皿B群などが登場してくるようである（註10）。このことは、地域はかなり離れるが舶載陶磁の搬入量が多い北東日本海域の調査成果（註11）と矛盾するものではなく、続く後Ⅳ期古段階には青磁碗D1類はほとんどみられなくなり、替わって青磁碗B3・D2類が出現し、青磁端反皿もこの時期に搬入されたものであろう（註12）。

（五）碗皿類の競合関係

表4は、瀬戸美濃焼の編年観に舶載陶磁器の碗皿類を位置付けたものである。各器種には使用期間があり、それをどの程度に設定するか問題が残るが、これによって、当地方における両者の碗皿類の競合関係を検討してみよう。まず碗類では、古瀬戸後Ⅰ－Ⅱ期に並行する青磁碗D1類や白磁端反碗や、後Ⅲ期には登場してくる青磁碗B2類は、D1類が見付端城や元島遺跡でやや目立つものの、伊平遺跡のデータが示すように平碗をはじめとする古瀬戸後Ⅰ～Ⅲ期の瀬戸美濃系の碗類と比べると圧倒的に少ない。しかし、後Ⅳ期古段階になると青磁碗のB3・D2類、後Ⅳ期新段階にはB4・C2・E類が出現し出土数も急増する。そして、この段階には大見

表4　瀬戸美濃焼編年からみた舶載陶磁器の消長（碗皿類）



寺・伊平・城ノ前遺跡などでは瀬戸美濃系が圧倒するものの、元島・原川・潮海寺門前町遺跡、元富士大宮司館では拮抗し、見付端城・宇藤遺跡、勝間田・高根・笹岡城では、舶載陶磁の搬入量が瀬戸美濃系を確実に凌駕しているのである（表5）。すなわち、当地方の城館では後Ⅳ期段階には舶載陶磁の碗類が流通の主体となっており、この舶載陶磁優位の傾向は、大窯期の瀬戸美濃窯では碗類の生産が激減することもあって、さらに十六世紀にかけて継続したものと思われる。

表5　古瀬戸後期の瀬戸美濃系施釉陶器と舶載陶磁器（碗類）

遺跡名	後Ⅰ～Ⅲ期			後Ⅳ期古・新		
	破片数		比率	破片数		比率
	瀬戸	舶載	瀬戸：舶載	瀬戸	舶載	瀬戸：舶載
元富士館	18	9	1：0.5	12	11	1：0.92
石成	6	0	1：0.00	5	1	1：0.2
伊平	56	4	1：0.07	17	1	1：0.06
潮海寺前	7	3	1：0.43	12	10	1：0.83
宇藤				4	15	1：3.75
原川	17	1	1：0.06	21	24	1：1.14
元島	47	18	1：0.38	71	58	1：0.82
大見寺	2	0	1：0.00	17	6	1：0.35
見付端城	71	18	1：0.25	76	104	1：1.37
城ノ前	7	3	1：0.43	7	3	1：0.43
勝間田城				20	38	1：1.9
横地城				5	5	1：1
久野城				5	10	1：2
掛川城				0	31	1：∞
笹岡城				1	5	1：5
高根城				1	24	1：24

※瀬戸美濃系は「後期」「後Ⅲ-Ⅳ期」など曖昧なものを除外し、舶載陶磁の後Ⅰ～Ⅲ期は青磁碗B2・D1類、白磁端反碗の合計、後Ⅳ期古・新段階は青磁碗B3・B4・C2・D2・E類、染付碗B群の合計を表示した。なお、掛川城の瀬戸美濃系はカウント途中のデータである。

それでは、小皿類はどうであろうか。遅くとも後Ⅲ期には白磁皿B群が出現し、やはり見付端城と元島遺跡で出土数は目立つが、白磁皿B群の搬入は後Ⅳ期新段階まで継続することから、後Ⅰ～Ⅲ期までは縁釉小皿など瀬戸美濃系の小皿類が圧倒的に多いことは明らかである。しかし、後Ⅳ期古段階には青磁端反皿、後Ⅳ期新段階には青磁稜花皿、やや遅れて白磁皿C1群や染付皿B1群が出現し、舶載陶磁の出土数が増加する傾向が認められ、瀬戸美濃系を凌ぐほどは出土していないものの、勝間田城や横地城ではある程度競合したと推察される。そして、大窯段階になると蒲原城では、染付類を主体とする舶載陶磁の小皿類が瀬戸美濃系を圧倒し、見付端城遺跡、笹岡・殿谷・高天神城などでも瀬戸美濃系と拮抗するようになる。ただし、舶載陶磁が多い遺跡は当地方では城跡に限られるようで、一般的な集落では瀬戸美濃系が舶載陶磁を圧倒している（表6）。

以上のことから、当地方における瀬戸美濃系施釉陶器と舶載陶磁器の碗皿類の関係は、古瀬戸後Ⅰ期～Ⅲ期には、舶載陶磁がほとんど搬入されないこともあって瀬戸美濃系の碗皿類が、かつて舶載陶磁の持っていた高級

表6　大窯段階の瀬戸美濃系施釉陶器と舶載陶磁器（小皿類）

遺跡名	破片数		比率
	瀬戸	舶載	瀬戸：舶載
殿ヶ谷	9	0	1：0.00
伊平	19	1	1：0.05
宇藤	27	5	1：0.19
潮海寺前	9	5	1：0.56
糸繰	11	0	1：0.00
原川	393	12	1：0.03
元島	287	6	1：0.02
見付端城	13	14	1：1.08
蒲原城	24	109	1：4.54
掛川城	45	94	1：2.09
殿谷城	148	103	1：0.70
久野城	230	115	1：0.5
高天神城	17	12	1：0.71
笹岡城	4	6	1：1.5

※瀬戸美濃系は大窯段階の小皿類の総合計、舶載陶磁は青磁菊皿・白磁皿C～E群・染付皿類の合計を表示した。なお、掛川城の瀬戸美濃系はカウント途中のデータである。

供膳具としての機能を完全に補完したが、後Ⅳ期古段階以降、舶載陶磁の器種や搬入量が増加し瀬戸美濃系と競合するようになり、遅くとも後Ⅳ期新段階には碗類が、大窯第1段階には染付の大量搬入により小皿類も、舶載陶磁が瀬戸美濃系を凌ぐ城跡が登場するのである。なお、第1段階の大窯製品に舶載陶磁をモデルとしたものが多いということは、国産施釉陶器としての瀬戸美濃系がコピー商品を量産することによって、価格面で舶載陶磁に対抗しようとした姿を示したものであろう（註13）。

三、志戸呂・初山焼との補完関係

ところで中世後半になると、遠江地方では志戸呂窯や初山窯にみられるように、瀬戸美濃窯（瀬戸窯・美濃窯・藤岡窯）と同一の技術体系を有する施釉陶器の生産が行われている。これまでは、舶載陶磁器との補完関係をみるために、両者を瀬戸美濃系施釉陶器と一括してきたが、ここでは両者を分離することによって搬入状況を比較し、その補完関係を検討してみたい。

（一）古瀬戸系施釉陶器窯

まず、古瀬戸後期段階には志戸呂窯側の榛原郡金谷町地内に、三ツ沢窯・川根沢窯という二基の窖窯の存在が知られている（註14）。両窯の生産器種は、擂鉢を筆頭に小皿類・天目類・碗類・壺瓶類・盤類・神仏具・その他古瀬戸後期の様々な器種が認められ、また、胎土は異なるものの各器種の型式は当該期の古瀬戸製品に酷似しており（註15）、さらに窯体構造、窯道具や重ね焼き方法の類似性等、瀬戸美濃窯の陶工の直接的な移動によって成立したことは疑いがない。瀬戸美濃焼の編年では、両窯とも後Ⅳ期古段階あるいは新段階に位置付けられ、成立の歴史的背景については、越前・尾張・遠江の三国守護であった管領斯波氏との関係が指摘されている（註16）。

それでは、古瀬戸後期の瀬戸美濃焼と志戸呂焼との当地方における搬入状況を比較してみよう。後Ⅳ期古・新段階における両者の出土数を比較した表7によると（註17）、潮海寺門前町・大見寺・野際遺跡、掛川城のように、志戸呂焼が瀬戸美濃焼の搬入量を上回る遺跡や、石成・原川・善福寺・見付端城・元島遺跡、勝間田城のように、瀬戸美濃焼には及ばないものの志戸呂焼が一定量出土し拮抗する遺跡が存在する反面、元富士大宮司館、宇藤・殿ケ谷・伊平遺跡、横地・笹岡・高根・蒲原・久野城のように志戸呂焼が極めて少ない遺跡が存在することが判明した。しかも、この搬入状況の相違は、村落・居館・城跡といった遺跡の性格によるものではなく、遺跡の立地条件に関係する可能性が高いことが明らかになった。

というのは、志戸呂焼は駿河側では島田市の石成遺跡を除くと極めて少なく、今回提示したデータでは遠江側が主な流通圏で、同じ遠江の中でも例えば菊川町内では、内陸部の潮海寺門前町や善福寺では志戸呂焼が瀬戸美濃産と拮抗するのに対し、菊川下流域の殿ケ谷・伊平遺跡や横地城ではほとんどみられないこと。磐田市周辺でも内陸部の大見寺・野際・見付端城遺跡の方が、河口部の元島遺跡より志戸呂焼の比率が高いこと。さらに

表7　古瀬戸後Ⅳ期の瀬戸美濃焼と志戸呂焼

遺跡名	破片数		比率
	瀬戸	志戸呂	瀬戸：志戸呂
元富士館	157	12	1：0.08
蒲原城	16	0	1：0.00
石成	20	16	1：0.8
勝間田城	443	251	1：0.57
殿ヶ谷	59	0	1：0.00
伊平	106	15	1：0.14
横地城	26	3	1：0.12
宇藤	27	9	1：0.33
潮海寺前	39	41	1：1.05
善福寺	30	20	1：0.67
掛川城	4	7	1：1.75
殿谷城	9	4	1：0.44
原川	185	153	1：0.83
元島	626	325	1：0.52
大見寺	64	94	1：1.47
見付端城	425	267	1：0.63
野際	14	33	1：2.36
城ノ前	97	36	1：0.37
久野城	96	11	1：0.11
笹岡城	23	1	1：0.04
高根城	69	8	1：0.12

※瀬戸美濃焼の破片数は「後期」「後Ⅲ-Ⅳ期」など曖昧なものは除外してある。

内陸部でも天竜川中流域の笹岡・高根城では志戸呂焼は極めて少ないことから、唯一久野城のデータを除くと、志戸呂焼は遠江側の旧東海道沿いの遺跡に多いという結果が得られたのである。

また、志戸呂窯の成立については、前述のとおり遠江守護との関係が指摘されるが、守護所と推定される見付端城遺跡では、他の遺跡では擂鉢が大半を占めるのに対し、生産地で確認される有りと有らゆる器種が出土しており、製品の流通面からもそれが裏付けられるのである。すなわち、当該期の志戸呂焼は、おそらく旧東海道を西進して見付にもたらされたため、東海道沿いの遺跡では瀬戸美濃焼と競合関係にあったと考えられる。なお、両者が競合したのは遠江一国にほぼ限られるようであるが、当該期の志戸呂焼の小皿類や擂鉢は南関東でも散見される。南関東への流通が海路によるものであったとすれば、遠江からの志戸呂焼の積み出しは、見付の膝元にあって福田湊との関係が予想され、志戸呂焼の小皿類が多量に出土する元島遺跡であった可能性が指摘されるのである。

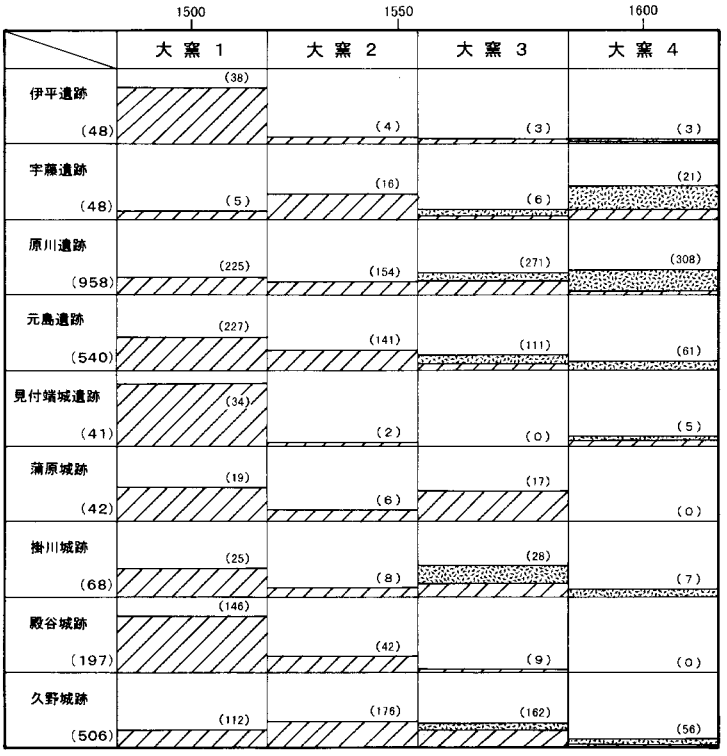
（二）瀬戸美濃系大窯

大窯段階には、初山窯として引佐郡細江町地内に釜下・宝林寺境内など数基、志戸呂窯としては榛原郡金谷町地内の上志戸呂窯と島田市内の神座窯の存在が知られている（註18）。大窯期の初山・志戸呂窯の生産器種は、その胎土は異なるものの天目類・小皿類・擂鉢を主体とし、各器種の型式も当該期の瀬戸美濃大窯製品に類似しており、やはり瀬戸美濃窯からの直接的な陶工の移動によって成立したことは明らかである。ただし、詳細についてみれば、例えば小皿類では、初山窯では鉄釉の内禿皿、志戸呂窯では灰釉の丸皿が主体で、当該期の瀬戸美濃大窯で量産された灰釉の内禿皿や折縁皿はほとんど生産されていない。また、志野製品も皆無で地方窯としての独自性が窺われる。なお、志戸呂窯では、十七世紀以降も引き続き生産が行われており、さらに独自性を強めていくようである。

両窯の編年的位置付けや成立の歴史的背景については、様々な論稿があり（註19）、特に古文書が残っていない初山窯については未解決の部分も多いが、本稿では初山窯は大窯第３段階後半に、志戸呂窯は大窯第３段階の末以降に位置付け、両者の操業期間にはほとんど重複がないとみている（註20）。

それでは、大窯段階の瀬戸美濃焼と初山・志戸呂焼の時期別の搬入状況を比較してみよう。表８は、「大窯１か２」「大窯３か４」などといった曖昧なものを除外して、段階毎に大窯製品の出土数を表示したものである。これによると、当地方では集落・城跡に関わりなく大窯第３段階以降、瀬戸美濃焼の搬入量は減少する遺跡が多く、第４段階には激減する。そして、それに替わって第３・４段階には初山・志戸呂焼が搬入されたことは明ら

表8　大窯段階における瀬戸美濃焼と初山・志戸呂焼



※（　　）は破片数、▨は瀬戸美濃焼、▩は初山・志戸呂焼

かである。しかも、古瀬戸後期の志戸呂焼にみられた立地による相違も認めがたく、また、初山焼から志戸呂焼への移行もスムースに行われたようである。

すなわち、遠江地方では、特に大窯第3段階後半以降、瀬戸美濃焼は流通しにくい状況にあったようで、当該期の初山・志戸呂焼は、競合関係にあった古瀬戸後期の志戸呂焼とは異なり、まさに瀬戸美濃焼の流通量の不足分を補完していたのである。なお、このような搬入状況は南関東でも指摘されており（註21）、初山・志戸呂焼は、遠江から南関東を中心に西は愛知県東部、東は福島県までの広い範囲で確認されることから、流通ルートそのものも瀬戸美濃焼のそれを継承した可能性も否定できない（註22）。

四、遠江における瀬戸美濃焼流通の諸段階

以上、遠江地方における瀬戸美濃焼の流通について、舶載陶磁器および志戸呂焼・初山との補完関係から眺めてきたが、瀬戸美濃焼の流通にはいくつかの段階が設定できることが明らかになった。まず、当地方への瀬戸美濃焼の搬入は、古瀬戸前Ⅰ期でもその後半、前Ⅰb期（十三世紀初頭）まで遡る。この時期の瀬戸美濃焼は、鎌倉を中心に東海から関東地方にかけて、ようやく広域流通陶器としての地位を確立しつつあり、遠江では古瀬戸中Ⅱ期（十四世紀第2四半期）頃にかけて、在地領主クラス以上の居館を中心に、四耳壺・瓶子・梅瓶・水注など舶載陶磁の威信財を模倣した壺瓶類が主体に搬入される。これらは、東日本における舶載陶磁の流通量の不足分を補ったものであろうが、この段階には、僅かではあるが壺瓶類がその他の集落でも出土しており、遠江では村落領主クラスまで古瀬戸製品が受容されていた可能性がある。

続く画期は、古瀬戸中Ⅲ－Ⅳ期（十四世紀中頃）あたりに訪れたと思われる。舶載陶磁に替わって瀬戸美濃焼が、当地方では有力者の居館や町場を中心に一定量搬入しはじめ、十四世紀後葉、古瀬戸後期に入るとさらに搬入量が増加する。器種は前段階の威信財（壺瓶類）主体から、碗皿類や盤類・天目類など供膳具や喫茶具へと移行し、様々な器種がセットで搬入される。このような出土傾向は、古瀬戸後Ⅲ期（十五世紀前葉）にかけて多かれ少なかれ全国的に認められ、この段階の瀬戸美濃焼は、舶載陶磁の搬入量の減少を背景に高級施釉陶器として流通圏を拡大したのであり、古瀬戸後期の器種に舶載陶磁の影響が少ないのはその証左となろう。なお、遠江では、この段階の終わり頃には居館・町場ばかりでなく村落でも一定量搬入されており、瀬戸美濃焼受容層の拡大を示している。

ところが、古瀬戸後Ⅳ期古段階（十五世紀中頃）になると、遠江では舶載陶磁の搬入量は再び増大し、城館など都市的な場を中心に碗皿類で瀬戸美濃系施釉陶器と競合するようになる。瀬戸美濃系の搬入量は集落・城跡を問わず増加するものの、その主体は常滑産の片口鉢と競合しつつ東海から南関東にかけて流通した擂鉢で、前段階とはその内容が大きく異なっている。なお、舶載陶磁と瀬戸美濃焼との競合関係は、舶載陶磁がより優勢な西日本や北東日本海域では十五世紀前半代まで遡る可能性があり、十五世紀後半には瀬戸美濃焼の販路は圧迫され、全国流通からの供膳具部門での撤退を余儀なくされる（表9）。すなわち、この段階の瀬戸窯は、広域流通の高級施釉陶器生産から、中域流通陶器生産へと転換を図りつつあったと思われ、それに伴い生産地でも瀬戸窯の中心赤津区から窯は拡散し、各地に古瀬戸系施釉陶器窯が成立するのである。遠江では三国守護斯波氏の一定の関与のもと志戸呂窯が成立し、流通ルートであった旧東海道沿いの遺跡では瀬戸美濃焼と競合するが、主要流通圏は遠江一国に留まり、斯波氏の勢力の衰退とともに大窯に転換することなく廃絶してしまう。

さて、十五世紀の終わり頃から遠江地方にも連続して大窯製品が搬入される。大窯段階には前段階の様々な器種が淘汰され、天目類・小皿類・擂鉢に特化された形で生産が行われる。このうち、前二者は舶載陶磁をモデルとしたものであるが、中国産天目は当時全く生産されておらず、（註23）、

舶載陶磁と競合関係にあったのは小皿類である。大窯成立期には、青磁稜花皿や白磁皿Ｃ１群・染付皿Ｂ１群、やや遅れて白磁皿Ｃ２群や染付皿Ｃ群、さらに青磁菊皿・白磁皿Ｄ群などが本格的に模倣され、匣鉢詰め方法の改良により、古瀬戸後期段階までには作り得なかった全面施釉の小皿類を量産している（註24）。すなわち、大窯段階の小皿類は、生産器種の特化と高品質化という両面から舶載陶磁に価格的に対抗し、舶載陶磁のそれと競合しつつ、天目類とともに全国的に流通したのである。この段階の瀬戸美濃焼は、西日本や北東日本海域の城館跡では染付の碗皿類を主体とする舶載陶磁には及ばないものの、遠江では城館クラスで両者が拮抗し、集落では瀬戸美濃焼が舶載陶磁を圧倒している。

そして、大窯第３段階後半（十六世紀後葉）になると、瀬戸美濃窯は再び拡散し、遠江では初山・志戸呂窯に瀬戸美濃系大窯が成立する。この段階の瀬戸美濃窯は、瀬戸窯から美濃窯へと生産地が移動し、美濃窯では土岐川以北の地域と、土岐川以南の東部地域とに二極化する動きをみせる。前者の製品は、京・堺・大坂といった大都市圏を中心に西日本各地へ、まさに舶載陶磁を凌駕する勢いで搬入される（註25）。一方、後者の製品は東海以東の太平洋側がその流通圏と想定されるが、当地方での瀬戸美濃焼の搬入量は激減する。初山・志戸呂焼はその不足分を補完したと考えられ、古瀬戸後期の志戸呂窯とは成立事情がかなり異なっている。初山・志戸呂窯の成立には、戦国大名徳川家康が深く関わったと思われるが、両窯の製品は遠江一国に留まることなく東北南部まで流通しており、その背後には流通機構を掌握した問屋商人の存在が窺われる。なお、瀬戸美濃焼の流通が遠江で再び活況を取り戻すのは、名古屋城築城に伴い土岐川以南東部の陶工が瀬戸市域に召還される十七世紀前葉以降のことと推察される。

表9　北東日本海域における瀬戸美濃焼の搬入量

	1350		1400		1450	
	中Ⅳ期	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ古	後Ⅳ新
青森県 根城跡本丸 (79)	(0)	(4)	(11)	(34)	(29)	(1)
青森県 浪岡城跡内館 (157)	(8)	(17)	(10)	(93)	(23)	(6)
秋田県 後城遺跡 (145)	(3)	(9)	(51)	(60)	(17)	(5)
山形県 藤島城跡 (76)	(1)	(15)	(17)	(24)	(5)	(14)
新潟県 江上館跡 (264)	(24)	(39)	(86)	(71)	(24)	(20)
石川県 西川島遺跡群 (223)	(9)	(42)	(52)	(60)	(25)	(35)

※（　）は、古瀬戸中Ⅳ期から後Ⅳ期新段階のみを対象とした破片数で、時期が複数にまたがるものは除外してある。

おわりに

横地城関連の資料調査に参加して、陶磁器の分析を通じて瀬戸美濃焼の流通という観点から検討を加えたのが本稿であるが、舶載陶磁器との関係については大方の予想通りの結論といえよう。しかし、それを全国的にも検証可能な時期別の数値データとして提示しえたことは、今後の陶磁器流通の研究に資するところが大きいと思われ、小野正敏氏をはじめ原廣志・塚本和弘氏の努力にまずは敬意を表したい。また、志戸呂・初山焼との関係を流通の面から検討したことによって、両窯成立の歴史的背景について一定の合意が得られるものと確信している。

なお、瀬戸美濃焼の流通経路や流通システムなど、今回言及できなかった問題も多い。当地方の中世遺跡は、その性格によって城館・それ以外の流通関係の集落・その他の村落等に大別でき、それらがどのようなネットワークで結ばれていたか、陶磁器の組成から検証しうる日は近いと思われ

る。しかし、全国的には陶磁器組成の詳細な検討は緒に就いたばかりであり、今後さらなる資料の蓄積を俟って言及したいところである。

註1　原廣志「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」
『横地城跡　―総合調査報告書―』菊川町教育委員会一九九九、および本報告書第三章考古資料掲載の論文参照。

註2　池谷初恵「韮山町御所之内遺跡群における貿易陶磁の変遷」
『静岡県考古学研究№31』静岡県考古学会一九九九

註3　静岡県東部における山茶碗類の消費圏は、富士川・薩田峠付近を境界とするといわれている（足立順司「中世陶器生産と消費・序説」『東笠子第27地点発掘調査報告書』一九八二）。

註4　小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社一九九七

註5　金子健一「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」
『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第8輯』二〇〇〇

註6　小野正敏「横地氏とその本拠の構造」『横地城跡―総合調査報告書―』
菊川町教育委員会一九九九

註7　藤澤良祐「中世都市鎌倉における古瀬戸と輸入陶磁」
国立歴史民俗博物館（近刊）

註8　なお、中Ⅲ―Ⅳ期（一四世紀中葉）の古瀬戸製品の搬入量は少なく、各器種がセットで認められるのは居館クラスの遺跡に限られるようである。

註9　小野正敏「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」
『ＭＵＳＥＵＭ№４１６』東京国立博物館一九八五

註10　鎌倉市教育委員会「上杉氏憲邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』
一九九五、鎌倉市教育委員会「保寧寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』
一九九三、保寧寺跡発掘調査団『保寧寺跡―第2次調査―』一九九七

註11　尻八館調査委員会『尻八館調査報告書』一九八一、石川県立埋蔵文化財センター『普正寺遺跡』一九八四、函館市教育委員会『史跡志苔館跡』一九八六、榊原滋高「十三湊出土の陶磁器」『東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会一九九七、鈴木和子「青森県十三湊と出土陶磁器」『貿易陶磁研究№18』日本貿易陶磁研究会一九九八
ただし、太平洋側と日本海側という地域差について、今回はほとんど検討しておらず、取りあえず表4は東海・南関東限定版としておきたい。

註12　小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社一九九七

註13　静岡県教育委員会『静岡県の窯業遺跡』一九八九ほか

註14　なお、志戸呂窯では擂鉢や小皿類の生産比率が高いことが予想され、瀬戸美濃窯とは生産器種の構成比率は異なる可能性がある。今後の研究に期待したい。

註15　足立順司「遠江三ツ沢窯とその背景」『楢崎彰一先生古希記念論文集』
真陽社一九九八

註16　瀬戸美濃焼の場合、「後期」や「後Ⅲ―Ⅳ期」などの曖昧なものを除外しており、実際にはこれより多いことは確実である。

註17　細江町教育委員会『初山焼釜下古窯発掘調査報告書』一九八五、金谷町教育委員会『上志戸呂古窯跡発掘調査報告』一九九一

註18　足立順司「歴史に見る県下の窯Ⅱ」『静岡の文化第12号』静岡県文化財団
一九八八、松井一明「久野城出土の陶磁器・土師質土器が提示する諸問題」
『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会一九九三、藤澤良祐「瀬戸・美濃系大窯の成立過程」『瀬戸市史陶磁史篇四』一九九三ほか

註19　かつて筆者は、主に擂鉢の型式の類似性から初山窯を大窯第3段階の前半に位置付けたことがあったが、鉄釉内禿皿の量産、長脚ピンや挟み皿を使用しない焼成方法の特徴から、現在は第3段階後半に置きたいと考えている。また、今回提示した資料でも蒲原城や殿谷城では初山・志戸呂窯の製品は確認されておらず、天正九年廃絶の高天神城で僅かに初山窯製品が認められるにすぎない。したがって、初山窯は天正期前半、志戸呂窯は古文書の存在からも知られるように天正末年に成立したことになり、とすると、両窯の成立には徳川家康が深く関わっていた可能性が高い。

註21　服部実喜「南武蔵・相模における中世の食器様相（5）」『神奈川考古第34号』神奈川考古同人会一九九八

註22　徳川領国から後北条領国への初山・志戸呂焼の流通については、大湊を中心とする伊勢廻船問屋が関与した可能性が指摘されている（服部実喜「土器・陶磁器の流通と消費」『小田原市史通史編原始・古代・中世』一九九八）。

註23　瀬戸美濃焼の天目茶碗の生産と流通については、藤澤良祐「瀬戸・美濃の天目について」『茶の湯の名碗－和物茶碗－』茶道資料館一九九九参照。

註24　なお、瀬戸美濃焼の碗類には、大窯成立期に青磁碗のB4・E類をコピーした丸碗や、青磁碗B2類をコピーした平碗が存在するが、小皿類ほど生産されず、当地方の船載陶磁の搬入量も前段階と比べ多いとはいえない。陶磁器の碗類の減少については漆器椀との関係からも検討する必要があろう。

註25　藤澤良祐「瀬戸・美濃系大窯製品の流通」『瀬戸市史陶磁史篇四』一九九三

遠江の出土陶磁器組成の特徴—貿易陶磁を中心に

小野正敏

1　資料について

横地城総合調査の一環として、横地遺跡群の位置づけをみるために、遠江を主として遺跡出土の陶磁器組成を調査した。各遺跡の調査担当者と関係機関の協力により、出土陶磁の実物にあたり、同じ分類基準のもとに計数することができた。これを数値化して相互に比較するための基礎資料としたのが、第三章の各表である。ここではその基礎資料表にもとづき、二種類の表を作成した。なお、各遺跡の概要に関しては、第三章にまとめられているので参照してほしい。

表1は、遺跡ごとに陶磁器の生産地の破片数をまとめたものであり、これに調査面積と一平方メートルあたりの破片数を示した。表2(1)～(5)は、時期別組成表で、型式分類による計数の中心となった瀬戸と中国陶磁について、遺跡ごとに3時期にわけてその器種構成を数値化したものである。

時期の区分は、中国陶磁の年代観から、遺跡の時間的な継続性などを考慮し、1期を十二～十四世紀中葉、2期を十四世紀後半～十五世紀前半、3期を十五世紀後半～十六世紀とした。これに藤沢良祐氏による瀬戸編年を対応させると、1期は、古瀬戸前期～中期3，2期は古瀬戸中期4～後期3，3期は古瀬戸後期4～大窯期に相当する。表の中で分離した志戸呂は、時期的に瀬戸のコピーを始める穴窯期から大窯を含め3期相当とした。また、中国陶磁の1～3期としたものは、主として威信財などにみる陶磁器であり、骨董品としての伝世使用を考慮して、生産年代から分離して表示した。土鍋類については、塚本作成の鍋類一覧から引用し、伊勢鍋を1期に、十五世紀前葉に出現する羽釜を2期に、くの字型内耳鍋を十五世紀中葉出現として3期に相当させ、内耳付き伊勢鍋（内耳鍋B）を十五世紀後半～十六世紀に対比し、これも3期にした。山茶碗については、生産地が分離されていないものの、地元の皿山系や金谷系が主体と考えられ、その生産がおよそ十三世紀中葉には終焉するとされる（塚本一九九四）ので、1期とした。

以下これらの表を資料として若干の問題を検討したい。

2　1期の陶磁器組成の概要と問題点

遠江の遺跡において、1期の陶磁器組成で、最も多いのは山茶碗とかわらけである。山茶碗は、地元の皿山系や金谷系を主とし、これに知多常滑系、湖西渥美系が加わるが、その内訳は数値化していない。土鍋は、伊勢鍋である。甕・壺・擂鉢類は、常滑焼を主体にして、十三世紀前半頃までは少量の渥美焼が混じる。中国陶磁は白磁と青磁の碗皿を主体とし、これに瀬戸が、盤や鉢、卸皿、壺瓶といった器種を補完している。

この1期は、貿易陶磁からみると、白磁2類、4類、5類の碗皿を中心とする十二～十三世紀初期までとそれ以後の龍泉窯系青磁1類や同安窯系青磁の碗皿を中心とする時期とに大きく分かれる。城館のような政治的な契機をもつ遺跡を除くと、主要な集落はこの時期には確認され、そこでは、量比には差があるものの、いずれの遺跡でもほぼこの白磁の段階から中国陶磁が使われていることがわかるが、西国に比べると非常に少ない。また、旧太田川河口の福田港に関連した集落とされる元島遺跡や潮海寺門前町遺跡のように2，3期までつづく集落もこの時期から継続される。特に土橋遺跡、林光寺遺跡、中島遺跡、石成遺跡、野際遺跡、瀬名川遺跡などは、この時期の様相をよく示している。

組成比では、貿易陶磁はいずれも1%未満であり、碗皿の供膳具は、その機能分担を土橋遺跡83%、林光寺遺跡83%、宮ノ前遺跡77%といった約8割を占める山茶碗によっていることがわかる。これに数%の常滑焼を主とする甕壺鉢から構成される。（中国陶磁＋瀬戸）を1としたときの山茶碗の比率関係からいえば、土橋、林光寺、宇藤遺跡が各132、218、201であるのに対し、元島、潮海寺門前町などの町場や流通に関わる集落では、8、69

と山茶碗の比率が低いことがわかる。この傾向は、同じ横地氏関連遺跡の中で比較するとより明瞭になる。殿ケ谷遺跡では威信財の中国陶磁を除いて1.8以下、同じく伊平遺跡は6.0以下であり、それが宇藤遺跡では201となる。当然ながら、碗皿におけるランクは、中国陶磁、瀬戸、山茶碗であり、山茶碗の比率の違いは、同じ流通地域においては、館、町場、集落などの階層差やそれを反映した場の違いを示していると言えよう。さらに地域構造の視点からは、今後、野際遺跡、中島遺跡、見附端城遺跡など、府中域に近い諸遺跡の数値がその周辺地域と比較されることが重要である。

また、遠江府中における守護所に関連すると推定される見附端城・大見寺遺跡、鎌倉御家人横地氏の館とする殿ケ谷遺跡やその一族の居館と推定する伊平遺跡、さらに駿河の富士大宮司館とされる大宮城など、地域支配の拠点では、大量の威信財を含む中国陶磁の質量の高さをみることができる。後述するように、特にかわらけと連動した威信財のあり方は、伊豆の北条氏関連遺跡をはじめ関東各地の鎌倉御家人や同じクラスの館などにも共通する様相であり、そこでは絶対量こそ劣るものの、中国陶磁のあり方は鎌倉をモデルとする嗜好といってもいいだろう。

一方、中国陶磁と瀬戸の関係については、この地域の1期の瀬戸の量が中国陶磁に対してきわめて少ない傾向が認められる。表2にみるように、遠江で瀬戸が急激に増加するのは、2期一四世紀後半からである。この状況は、駿河・大宮城や伊豆・北条氏関連遺跡における御所之内遺跡でも同じ傾向である。特に、御所之内では、十三世紀後半から十四世紀前半はごく少量であり、十四世紀後半以降になると、二〇倍近くに急増すると指摘されている（池谷初恵一九九九）。

具体的に1期について、瀬戸を1としたときの中国陶磁の比率をみてみると、野際遺跡の20を最高、元島遺跡1を最低として、大宮城19、宇藤遺跡12、土橋遺跡10、伊平遺跡8、宮ノ前遺跡6、殿ケ谷遺跡6、見附端城遺跡5である。この数値について、明確な解釈を示すことができないが、およそ数倍部の空間にみる陶磁器組成の違いに関しては、馬淵和雄氏の仕事があり、特に、ハレの空間機能の存在を象徴するかわらけの消費量に都市鎌倉の中心部と前浜の違いを強く指摘する（馬淵一九九七）。また、鎌倉の周辺部地域として三浦半島の逗子・池子遺跡は11.8、横須賀市・蓼原東遺跡は5.8である（中三川昇一九九九）。絶対量は、格段に減少するものの、組成はおよそ類似するのではないかと予想される。

西国や瀬戸から鎌倉への中間地帯に相当する遠江における中国陶磁と瀬戸のあり方についての鎌倉との異同は、流通問題を考えるとき、房総、武蔵、相模とは別の地域故に有効な資料になるといえる。特に瀬戸と中国陶磁について、この時期の流通経路と機構との関係で、鎌倉を東国の巨大消費地として、また流通のターミナルとして、どのように位置づけるのかという問題に対してである。

服部実喜氏は、南関東における豊富な事例を分析し、その結果から、都市鎌倉と周辺部との量的、質的な格差を指摘した。そして、鎌倉に搬入された陶磁器は鎌倉の消費のためのものであるとし、鎌倉は、南武蔵や相模などの周辺地域に対する流通の窓口ではなかったと理解した（服部実喜一九九五など）。この理解の前段は原則的には支持しうるものであるが、後から一〇倍程度の関係にある遺跡が多いことはいえよう。御所之内遺跡では、具体的な数値は示されていないが、図示されたグラフから概算すると30前後の数値になり、かなり高いといえる（池谷一九九九）。これは、大宮城などの高い数値に通じ、この数値の差が有意であることが予測される。

関東においても、そうした数値化ができる遺跡は少ないが、ちなみに、鎌倉では、都市の中心に近い北条時房・顕時邸（雪の下一丁目二七二）遺跡が5.3、蔵屋敷遺跡が9.8、周縁である浜地に相当する由比ヶ浜（四丁目一一三六）遺跡が1、由比ヶ浜（四丁目一一三〇）遺跡が0.8という数値が得られる（福田誠、宗臺秀明、大河内勉一九九九）。少ない事例による指摘ではあるが、鎌倉においては、都市空間の階層が下位である浜地の特徴

の一つが瀬戸の比率の高さに表現されることは注意すべきである。鎌倉内段についてはまだいくつかの視点からの再検証が必要であると考える。

例えば、一次流通と二次流通の視点である。一般的に、流通において巨大消費地は、一次流通の結節点であると同時に二次流通の拠点でもある。東国を問題にしたときには、ターミナル鎌倉への一次流通と鎌倉をハブとしたさらに地方への二次流通が予測できる。このとき、末端の消費地の需要を反映した鎌倉での流通フィルターを経由した商品がむかうと考えられる。その時、経由地の鎌倉とその周辺の消費地とは、同じ組成である必然性はないのである。かつて、戦国期について、都市の消費と農村や在地の館、屋敷の消費を比較して、都市の消費の階層を越えた均質性と質・量の高さ、それに対する周辺部の村や館の格差や消費形態の違いについて指摘したが、同じ論点がここにもあるといえる（小野一九九一）。

ここに示した1期の遠江における瀬戸と中国陶磁の組成比にみる数値からは、鎌倉との明確な差異を指摘できなかった。まだ数値化できていないが、遠江において予測される西国の瓦器、備前焼、東播磨産鉢など流通に関連した副次的な品物の少なさからは、鎌倉をメインとはしない、別の第一次流通の存在の可能性も検証されるべきだと考えている。その場合、中国陶磁、瀬戸、常滑などの各商品が同じ手段で流通したかどうかという問題も残されるが、いずれにしても、藤沢良祐氏が指摘した、この時期の瀬戸製品が、鎌倉を主要市場にしていたという問題に対して、その流通の実態を知るためには、この経路にあたる遠江を含む周辺地域と鎌倉内部の陶磁器組成の量的、組成的な再検証が有効なことは言を待たない。特に鎌倉内部の陶磁器組成の数値化の進展を望むものである。

3　2期の陶磁器組成の概要と問題点

2期の特徴は、山茶碗の減少、中国陶磁と瀬戸の関係変化に顕著に現れる。山茶碗の減少、瀬戸の急激な流通量の増大、中国陶磁の落ち込みという三元の変化が時期的には同じ頃に重なることの評価が問題である。

十二，十三世紀に東海地域の陶磁器の中で圧倒的な量を占めてきた山茶碗の急激な減少は、見かけ的に、陶磁器全体の消費量の激減となり、特に碗皿の供膳具の絶対量が減少することになる。これに関連して、全体の中で高い組成比をもつもう一方のかわらけの年代的な帰属の問題があるが、この表では、時期の分離がされていないので保留せざるを得ない。

山茶碗の減少について、藤沢良祐氏は、山茶碗の生産と流通が、原則的には小地域の需要に即したものであり、それ故その消長―山茶碗が食膳具として機能を失う時期には地域差があったと指摘し、それに代わる器については木製挽物を想定している（藤沢一九九九〇、九四）。尾野善裕氏は、山茶碗の減少と瀬戸の増加が同じ頃におきたことについて、消費地の天白・元屋敷遺跡などの器種構成の変遷から、そのすべてを瀬戸の施釉陶器が代わったとは言えないと指摘し、さらに、山茶碗の機能に関しても、すべてを碗皿として食器に使用したのではなく、その使用痕から卸皿など調理具としての機能を想定している（尾野一九九六）。筆者は、この問題に関して独自の見解を用意していないが、この時期の瀬戸の流通量の急激な増加との関係については、それが東日本における共通する現象であり、山茶碗の流通地域だけの現象ではないことから、結果として、瀬戸の同じ機能がそのシェアーを奪ったとしても、その契機については山茶碗の機能論を含んだ議論が必要であるという指摘の部分は支持できる。

前項に示したような遺跡の階層性を反映すると推定される山茶碗のあり方は、食膳具としたときの器利用の階層性からは納得できるものの、消費の絶対的な多寡が反転する大量消費の意味は、説明がむずかしい。今後、山茶碗そのものの機能や日常器か非日常器かという性格などの検討が必要になるだろう。

次に2期における中国陶磁の減少と瀬戸の増加の問題を見てみたい。

十四世紀後半から十五世紀前半の時期に、貿易陶磁が減少することに関

しては、全国的な現象であり、既に多くの研究者により指摘されている。その原因については、中国側の貿易統制、一三六八年から始まる明の太祖による倭寇を理由とした「下海通蕃」の禁止、つまり朝貢以外の貿易を禁じた海禁によるとの考えかたが主流であり、筆者も原則的に同じ考えを提示してきた。

陶磁器の出土状況からみると、三山と琉球の時代であった沖縄地域を除くと列島各地の遺跡で貿易陶磁が大きく減少しているが、さらに陶磁器を細分して検討すると、大きく前後の二時期に分けられる。前期は十四世紀後半に相当し、指標となる貿易陶磁では、青磁碗Ｄ１群や白磁端反碗群、端反皿群など、端反りの器種と白磁皿Ｂ群の古いタイプの内湾系皿である。後期は十五世紀前半であり、端反青磁碗Ｄ２群と内湾系の青磁碗Ｃ１群、白磁Ｂ群の皿や杯が主体となる。遠江の出土状況からもわかるように、この前期に相当するセットは特に出土量が少なく、後期のセットはその後に続く３期に比べると少ないとはいえ各地で確認されるものである。この差は、海禁の段階差にあったと推定される。つまり、この前期は海禁の開始によりその運用が最も厳しかった時期に相当し、この後期は、一四〇五年に泉州、広州、明州の３市舶司が再開された影響による、貿易量の一部回復があったと推定する時期に相当すると考える。次の段階が十五世紀の第３四半期からの染付を主体とする中国陶磁が再び急増する時期（小野一九八五の２期）となる。

この２期には、東シナ海を共有して地理的に近い沖縄地域では、前期、後期を通じて大量の陶磁器が確認され、民間貿易による活発な流通量が確保されたことがわかる。特に琉球は、周辺の国々の中でも最多の一七二回という回数を誇る朝貢も含めて、海禁を主要素とする国際関係を背景に、地の利を生かした中継貿易で生きていた状況が陶磁器の出土状況にも反映されているといえよう。したがって、日本側で染付の大量出土に象徴されるように中国陶磁の流通が復活する時期に、その裏返しのように沖縄地域の遺跡から急激に中国陶磁が減少することは、まさにこの時期の琉球の位置づけを意味しているものといえる。

このような背景を考慮すると、瀬戸が十四世紀後半以降、急激に生産を増し、流通量が増加するのも、施釉陶器として補完関係にあった中国陶磁の減少が主因の一つと考えられる。中国陶磁が市場から消えた分のシェアーを確保し、国内唯一の施釉陶器産地として急激に市場に席巻したのだといえる。図１の生産地別の組成グラフのうち普正寺以下の五遺跡の状況はそれを顕著に示す例である。いずれも２期後半に相当する東日本の例として、日本海側の石川県普正寺遺跡、福島県南古館遺跡、千葉県小林城、岩川館、篠本城をしめした。図１で瀬戸と中国陶磁の関係をみると、この前後の１，３期では、原則的に中国陶磁を主とし、それを補完する瀬戸という関係であり、およそ瀬戸１に対して中国陶磁がその数倍の組成比をもつのが一般的な数値である。東国では、西山真理子氏は、先の南古館をはじめとする南東北太平洋岸の遺跡の組成を比較し、そこにみられる瀬戸を優位とする様相（Ａ類型組成）について、地域的特徴としたが（西山一九九四）、Ａ類型とした遺跡の多くがここにいう２期に相当することを考えると、これも地域的な様相というよりも時代的に共通する様相としたほうが妥当と考える。３期における中国陶磁は、碗皿をはじめ日常生活財としても威信財としても、商品のモデルとしての位置づけのみならず、流通量の大きさ、その廉価な価格など、多くの面で常に市場をリードする存在であった（小野一九九七）。しかし、この２期については、篠本城を筆頭に瀬戸との組成値が逆転したり、普正寺や岩川館のおよそ等値となることがわかる。図１の１，２期の中国陶磁と瀬戸の関係をみると、遠江では瀬戸の産地に近いという地理的な位置を反映してか、関東などにくらべて、中国陶磁の減少に連動した瀬戸の増加現象が顕著であり、相互のシェアーの交代状況が明瞭に示される。これは池谷氏が指摘した伊豆・御所之内遺跡でも同様である。

4　3期の陶磁器組成の概要と問題点

3期は、中国陶磁の少ないままの状況が継続することが遠江の特徴である。一方、瀬戸は天目茶碗、灰釉皿、擂鉢を中心に増加している。碗皿の供膳具、調理具にとどまらず、天目茶碗や茶壺、香炉などの茶花香を主体とする威信財などの分野でも瀬戸が中心になっている様相がわかる。

この時期、中国陶磁では、特に青磁碗皿が減少し、青磁は骨董を含めて威信財が目立つようになり、あらたに染付が碗皿の主体となるのが全国的な大きな流れである。

しかし、遠江や関東では、染付を主体とする3期、特に十六世紀になると極端に陶磁器の碗皿が少ない傾向が特徴である。さらに、その少ない中でも、碗が少なく、皿が主となる傾向も、東国に共通するものである。例えば、千葉県本佐倉城をみてみよう。本佐倉城は、千葉氏宗家の本拠としてこの時期の陶磁器をよく残し、東国のこのクラスの陶磁器保有のあり方をよく示している。概報によれば、中国陶磁の計５５０点のうち、皿が３８４，碗が２５，杯が４１、他が１００となり、70％が皿となる。碗１に対して15倍に相当する。染付だけをみると碗８に対して皿２６８，約34倍になることがわかる。瀬戸美濃においても碗１０に対して皿は灰釉を主に２０９，約21倍になっている。

一方、日本海側の福井県一乗谷三六次調査では、同様に中国陶磁の計４８９２点のうち、皿が３３９１，碗が１１５７，その他３０４で、碗１に対し皿は２となる。白磁と染付だけでみても、碗４６９に対して皿２８７８で、約６倍である。因みに瀬戸美濃でみると、天目茶碗６３０，灰釉碗１２２，灰釉と鉄釉皿９０４となり、碗１に対し皿が約７で、よく似た数値となることがわかる。

関東においては、その傾向が3期後半には、一段と強くなるとみられ、八王子城の御主殿の陶磁器様相がそれを顕著に示すと考えられる。

表２によると遠江の3期を中心とする遺跡、例えば、掛川城、久野城、殿谷城、蒲原城などの城館を中心とした遺跡にこの時期の陶磁組成の特徴がよく見られる。当然こうした遺跡では、瀬戸美濃製品も多く確認される。すなわち、碗皿においては、中国陶磁の染付と白磁、瀬戸美濃の灰釉皿が中心である。その数値をみると、関東とは異なり、どちらかというと日本海側の一乗谷などの様相に近いことがわかる。例えば、白磁と染付の碗と皿の比率は、碗１に対して、掛川城では約５，久野城は６，殿谷城は６，蒲原城は６で、よく似た数値を示しており、この時期の使用形態の類似性がうかがわれる。それに対して、瀬戸美濃の碗皿では、ばらつきがあり、まとまった傾向をつかむのはむずかしい。また、この地域においては、集落では染付や白磁を出土する遺跡が少なく、一部の城館などの遺跡に集中する状況があるという清水尚氏の指摘は的確である（清水一九九九）。清水氏は、白磁皿Ｃ群に大きな注意をはらっているが、染付皿Ｂ１群と白磁皿Ｃ群は同じセットの中で機能分担する器種であり、この時期の白磁は皿を主体とする。こうしたあり方からは中国陶磁使用の格差から城館型と集落型的な組成の違いが指摘できそうである。

一方、高根城、笹岡城などの城郭のなかでも染付をあまり持たない遺跡があり、その違いが注意される。これについては、房総における城郭遺跡での違いが参考になるかもしれない。房総の2期と3期に該当する城郭を比較すると、2期では、およそどこの城郭でも陶磁器の出土様相が類似しているが、次の3期の城郭では、陶磁器を大量に消費した遺跡と、城郭の構造や記録から使われていたことが確認されるにも関わらず、陶磁器をほとんど残さない城郭があるという違いが指摘できる。つまり2期においては、各々の城郭が小地域の拠点として領主の生活機能をもつ空間であったものが、3期においては、集約され、城の機能に差が生じてきたことが推定できる。陶磁器に示される生活機能を多く残す城郭は、図１に例をあげた本佐倉城をはじめ、千葉県臼井城などのような、国城や地域の中での拠点になった城郭であることが特徴である。それ以外の陶磁器を多く残さな

い城は、集約化の結果、番城とか戦時のみに使われる城に変化した様子がうかがわれるのである（小野一九九六）。今後、検討例の増加のなかで、遠江の城についても、そうした視点を意識して陶磁組成の違いをみていく必要があろう。

なお、3期について西日本や日本海側と比較したときに注目される特徴のもう一つが、朝鮮製陶磁器のほとんどないことである。これは関東にも共通する様相である。西日本や日本海側においても中国陶磁に比較するば量的にかなり少ないことは周知のとおりであるが、少ないながらも各遺跡から一定量出土することはいえよう。そして、時期的には、十五世紀第3四半期頃から粉青沙器の碗皿が増加するように観察される。これは染付碗皿の大量消費がはじまる時期に重なっており、大枠としては、応仁文明の乱以後の都市消費の急激な需要に伴う流通の整備、供給拡大の一端だったことがうかがわれるが、その直接の契機としては、生産地である朝鮮側の仕掛けによる朝鮮遣使ブームにあったと考える。朝鮮遣使ブームは、朝鮮国王世祖による自己の正当性表現のための奇瑞頻発により、その慶賀使節の名目で、多くの無名の通行者をも含んで、使節通行を急増させた一四六〇年代から一四七〇年代の現象であり、その通行者の範囲は琉球と西日本を中心で、瀬戸内全域、山城、日本海側は若狭まで、信濃であったとされる（高橋公明一九八七）。信濃は状況がまだ明確ではないが、日本海側は北国船によりさらに北まで流通したのは当然とすれば、地域的な偏りとよく符号するものである。

5　威信財のあり方から

図2のグラフにより、時期が分離されていない状況で、多少広い意味ではあるが、威信財と推定される中国陶磁における碗皿以外の器種についての組成比をみると、大きく約10％まで、約20～30％、約40％以上の三ランクに分かれる。低いグループは、城の前、野際、中島、元島、潮海寺門前町、掛川城、蒲原城、高根城、宇藤、伊平などである。中のグループは、見付端城、宮ノ前、殿谷城、勝間田城であり、高いグループが、大宮城、殿ケ谷、大見寺である。特に大宮城の60％強は際だっている。これらは発掘面積の極端に狭い遺跡を除外した結果である。

低いグループに共通するのは、貿易陶磁の組成比そのものが2～3％以下の低い遺跡が多いことであり、いくつかの城郭を含むが集落遺跡が目立つことが指摘できる。従来よりいわれている威信財の組成比の差は、原則的には遺跡の階層差として理解できるだろう。この中で、横地の中心の屋敷のひとつと考えてきた伊平遺跡が威信財が低いグループに属していることが注目されるが、それは同じ地区にあるまさに横地氏の館と推定した殿ケ谷に比較して、山茶碗とかわらけ、土鍋の組成比の大小がまったく逆転していることと符合しており（表1）、既に述べたように、これらの相互関係が階層差を示す指標になる。同じように威信財の比率が高い大宮城において、山茶碗と土鍋が低く、かわらけが高い組成を占めていることが確認でき、同じ関係をみることができる。このことは、例えば、図1に例示したが、日本海側では、城下町一乗谷における戦国大名朝倉館と三六次町屋地区にみられるかわらけや貯蔵、調理機能を担う越前焼の比率に顕著な違いがしめされるように、一般的な傾向として指摘されることである（小野一九八四）。

ただそれとは逆に、低いグループ中に含まれた城館のなかでは、掛川城と高根城はかわらけの比率が低く、蒲原城では反対に高いという両者がみられる。城跡の場合は、次には、どの曲輪に属する資料かによって、空間ごとの機能差をそこに検討しなければならないだろう（小野一九九一、中井一九九八）。例えば、東国の例では、千葉県本佐倉城の実城地区の曲輪群と外城地区の曲輪群では、かわらけや土鍋の比率、中国陶磁と瀬戸美濃の相対比などにその違いがあり、曲輪ごとに空間機能の違いが陶磁器組成に明瞭に反映されるからである（木内一九九五）。

3時期に分解した表2について、別項目に分けたように、碗皿以外の特に、威信財と考える陶磁器については、その使用された時期を決定するのはむずかしい。既にのべたように、例えば、勝間田城や殿谷城のように3期を主体とする遺跡においても、威信財については1，2期と同じ器種をみることができ、それらは積極的に骨董品としての伝世使用を考慮する必要があるからである。おそらく一定の割合でみられる瀬戸の瓶子や壺類についても同じような問題があると考えられる。むしろ中国陶磁の威信財については、それが鎌倉時代、つまり1期の骨董品であることに大きな意味があるともいえるからである。

次に具体的に威信財として考えられる器種をみてみよう。

この地域の1期の例は、殿ケ谷、伊平、土橋、大宮城の諸遺跡に示される。器種は、白磁の四耳壺、梅瓶、青磁の盤、中国製の天目茶碗と茶入などが一般的であり、一定の階層以上ではこれに青磁酒海壺、泉州窯系洗や高麗青磁、青白磁合子などが加わる。富士大宮司館である大宮城の組成の主体は1期から2期とに及ぶが、この地域の最上層の組成を示しているようであり、これ以外に青磁花瓶、花生などももっている。おそらく殿ケ谷も同じランクになるであろうと予測される。

東国の他の地域の例をみると、例えば、一三六八年頃に焼けたと推定されている埼玉県川越館では、白磁梅瓶を数個体、白磁四耳壺、青白磁合子、泉州窯系の黄釉や緑釉洗と壺、青磁盤、浮牡丹文花瓶、大香炉、中国天目茶碗茶入などのセットである（田中信一九九六・川越市立博物館一九九九「川越氏と川越館」）。埼玉県安保館では、白磁梅瓶数個体、泉州窯系の黄釉、緑釉洗と緑釉壺をもつ（埼玉県児玉郡神川町遺跡調査会一九九五）。荘氏関連の埼玉県大久保山では、3A地区で白磁四耳壺、3C地区で泉州窯系緑釉壺が出土しており、調査者の荒川正夫氏により威信財として指摘されている（早稲田大学本庄校地文化財調査室一九九八）。また、栃木県宇都宮城下層（本稿でいう1期相当）の遺構面からは、白磁四耳壺、梅瓶、青白磁合子、青磁酒海壺、泉州窯系緑釉洗、高麗青磁などが確認されている（宇都宮市教育委員会一九九六ほか）。一四世紀後半に落城と推定される栃木県飛山城では、白磁梅瓶が多く、青磁の盤、太鼓胴盤、白磁香炉などをもっている（宇都宮市教育委員会一九九六ほか）。川越氏は鎌倉御家人であり、安保氏は北条得宗被官、宇都宮氏も得宗家人かと想定されるランクであり、いずれも鎌倉と深い関係をもつことが特徴である。よく知られるようにこうした器種は、鎌倉の中でも得宗に近い最上級の武家屋敷とされる今小路西遺跡北谷3面の被災した高級陶磁器などにそのモデルをみることができるセットであり、それらを規範と意識した在地における威信財のあり方をよく示すといえる。

また、瀬戸がその成立期、前期においてコピーした主要な器種が、中国陶磁の白磁四耳壺、泉州窯系洗、白磁梅瓶、高麗青磁瓶子などであったと指摘されているように（藤沢一九九八など）、東国における中世初期の威信財としての陶磁器の出土状況ともよく符号するものであり、その趣旨は明確である。特に東国においては、洗の保有がメルクマールになりそうである。東国における緑釉や黄釉洗の出土をみると、鎌倉や韮山御所内のその多さは注目されるが、先述の遺跡以外にも、さらに岩手・平泉や宮城・松島円福寺、王の壇遺跡（仙台市教育委員会一九九三）、千葉・東条御厨の東条氏館（遺跡名は西郷氏館跡）（鴨川市教育委員会二〇〇〇）、外箕輪遺跡（君津郡市文化財センター一九九四）など、ランクと時期が限定される特徴的な出土状況を示している。白磁や青磁の主要な威信財は、次の2期や3期においても保有されるが、洗の保有はないようで、1期を特徴づけるものといえる。

これを強いてさらに細分すれば、平泉をモデルとする十二世紀から十三世紀前半までの白磁を主体とする様相と、鎌倉で一般的な十三世紀後半以降の青磁を主体とする様相に分けることがで可能であろうが、遠江では時期的に分離できる良好な資料はまだない。

全国的にみた2期、3期の威信財の器種構成は、白磁の四耳壺、梅瓶、青磁の盤、酒海壺、花生、香炉、さらに天目茶碗、茶入などが継承される。それらは、例えば酒海壺の好みが鎬文から牡丹文へ変化するなどの、各器種内の型式変化を除けば同じであり、むしろそれらの器種が継承されることに意味をもっているといえる。

一方、2期から新たに目立つのが青磁器台と馬上杯、元代や明代初期の染付の酒海壺、盤、鉢などである。こうした状況をセットとしてよく示すのが、越後守護上杉氏の迎賓館的機能をもつ新潟・至徳寺（小島幸雄一九九五）、奥山荘の惣地頭の江上館（中条町教育委員会一九九三ほか）、長野では北信中野氏の館（遺跡名は高梨氏館）（中野市教育委員会一九九〇）、岐阜では飛騨尾崎城（丹生川村教育委員会一九九三）などの、十五世紀前半を主体にした十五世紀後半までの、本稿にいう2期後半3期前半に相当する遺跡の資料である。表に示した福井・朝倉館（朝倉氏遺跡調査研究所一九七九）や山梨・武田館（甲府市教育委員会一九八五）、東京・八王子城（八王子市教育委員会一九八三）などにみるように、このセットの大枠は、3期においても継承される。

遠江における二，三期の出土状況は、分離することができない上に、見附端城を除くとこの時期の威信財としての陶磁保有は少ない。見附端城の器種は、元染付や器台を除くと、高麗青磁など全国レベルでのトップクラスだけがもつ特殊な器種はないものの、遠江の府中の城として相応しいセットであることがわかる。一方の勝間田城、高天神城、殿谷城などは、青磁盤と天目茶碗、茶入、香炉など、威信財の中でも一般的な器種にとどまり、現在の発掘成果からは1ランク落ちたその階層性が明瞭に示されているといえる。

こうした器種構成は、個々の遺跡の発掘資料では完璧ではないが、大略すると各地に共通であることが特徴であり、また年代的には、中国の宋代、元代の十三，十四世紀の生産年代をもつ資料が多く、骨董品としての伝世使用が顕著であることがもうひとつの特徴である。その上位モデルとも言うべきものが、将軍家を頂点とする室礼の規範書類であったと考えている（小野一九九七）。

例えば、一四〇五年後小松帝が足利義満の北山殿へ行幸したときの記録「北山殿御飾記」や一四三七年後花園帝が足利義教の室町殿を行幸したときの記録「室町殿行幸御餝記」、文明年間に記された足利義政の東山殿の記録「君台観左右帳記」などがそれである。「北山殿御飾記」には、「酒海」が記され、「室町殿行幸御餝記」には、陶磁器として天目茶碗や小壺（＝茶入）の他に、「枕青磁」（＝高麗青磁陶枕）、「酒海青磁」、「水覆染付」、「下水染付」、「蓋置青磁」（＝小型器台）、「馬上盞」、「湯瓶青磁」、「石鉢青磁」、「水指青磁」、「茶碗」（青磁、白磁、染付）などが記され、2，3期の出土状況とよく符号することがわかる。

当然のことながら、こうした威信財は、本来それが使われる空間、主として「会所」や「茶座敷」といった建物、庭園と一体のものであり、そうした施設の整備とともにあったものであることはいうまでもない。しかし、本稿では陶磁器をテーマとしており、詳しくはふれないが、それらの道具が対応する場と機能の違いがある。図4に模式化したように、この時期の威信財が機能する空間には、3つの場があった。大きくはハレとケの空間に大別でき、そのハレの空間は儀式空間である「表」と、遊芸、饗宴空間である「奥」とに分かれる。唐物荘厳を主体とする座敷飾りは会所や茶座敷などの奥の空間の道具である。一方、表の主空間、主殿の儀式では、高価な貿易陶磁に代わり、土器＝かわらけが主役であり、権力者が式三献をはじめとする儀式における権威の象徴としてもっとも意識した焼物でもあった。特に京都系の手づくねのかわらけの模倣と受容は、規範性の表現として大きな意味をもつ。

もうひとつがケの空間における威信財の在り方である。例えば、豊臣秀吉の関東攻めにより、一五九〇年に落城した武蔵・八王子城の、城主氏照

の居館「御主殿」からは、その格にふさわしく山裾の庭園をはさんで並ぶ豪華な主殿と会所の建物をはじめ、約7万点におよぶ陶磁器が焼けたままに出土した。しかし、そのセットにはベネチア産レースガラスや小型白磁梅瓶などがあるだけで、室礼の陶磁は少なく、碗皿や甕、擂鉢などの日常的な生活用具が多いことが特徴である。特に染付皿は最新流行の同じ文様のものが数百点ずつ数組にまとまっており、新たな城で使うはずだった道具類が、臨戦態勢でそのまま保管されたものと推定されている。その中には、出土例の少ない瑠璃釉碗や五彩皿が10客ずつセットで含まれており、日常の道具＝ケの器に高級奢侈品を使うことが特徴である。対照的に、山上からは戦火に際して御主殿から待避したと推定される白磁梅瓶や青磁器台・大型盤・酒会壺など、先にみた共通する骨董のセットが発掘されている。このように威信財は、ハレの場で使われる伝統的価値に根ざした道具類と、ケの場で使われる最新流行の高級什器という、場と機能による対照的な二つの顔をもっていることがわかる。

梅瓶や青磁盤についても、十三、十四世紀における絵画資料である「慕帰絵詞」や「松崎天神縁起絵巻」、十五世紀前半代の「福富草紙」などに描かれた使用状況をみると、梅瓶は酒器として、青磁の盤は盛皿として、宴会の準備をする空間や主人夫婦が居間でくつろぐ場面に描かれており、ケの空間で高級陶磁器を実用奢侈品として使うことでステータスを表現する小道具として描かれたことが理解できる。つまり、十五世紀前半までは、本来、梅瓶や青磁の大盤はケの空間の威信財であったといえる。それらがおよそ十五世紀中頃を境にして、ケの道具からハレの道具への変化があったと推定される。十二世紀、同時代の京都や太宰府、博多などと比べて、奥州平泉では白磁四耳壺や渥美の絵画文壺（八重樫忠郎一九九七）、鎌倉では梅瓶の組成率が異常に高く、東国の袋物好みを象徴してと理解され、同じ白磁四耳壺や梅瓶などが、十六世紀後半においても、大名クラスのみならず、数ランク格が下の武家屋敷や館からも発掘されることを考えると、威信財としての意識が時代と階層を超えて共有されていたことを示している。この白磁四耳壺や梅瓶、青磁盤についても、既に戦国期においては骨董品となっていたわけで、それが会所の座敷飾りとなっていたかは不明だが、少なくとも、正式ではない、くだけた饗宴の場におけるハレの道具となっていたことは予測できるだろう。そこには饗宴のスタイルそのものにも変質があり、その延長にあるのが荒川正明がいう「大皿の時代」であったといえよう（出光美術館一九九八）。。

この地域の威信財の陶磁器を語るとき、日常什器としての碗皿で問題としたのと同様、地域特性として、瀬戸美濃製品威信財のあり方についても、他地域との比較が必要になろうことは明白である。今後の課題としたい。

参考引用文献

藤沢良祐　一九九〇年「尾呂ー愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」瀬戸市教育委員会

松井一明　一九九三年「久野城出土の陶磁器・土師質土器が提供する諸問題」『久野城4』袋井市教育委員会

藤沢良祐　一九九四年「山茶碗研究の現状と課題」三重県埋蔵文化財センター「研究紀要」三号

塚本和弘　一九九四年「皿山古窯跡群の成立と終末について」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集

足立順司　一九九四年「消費地出土の初山・志戸呂焼―原川遺跡を中心に」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集

西山真理子　一九九四年「南陸奥の焼物は何を語るか？―福島県内における一五・一六世紀の城館跡出土陶磁器から」『福島考古』三五号

木内達彦　一九九五年「本佐倉城跡発掘調査報告書」酒々井町教育委員会

服部実喜　一九九五年「都市鎌倉と周辺の陶磁器」『貿易陶磁研究』一五号ほか

尾野善裕　一九九六年「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」中近世土器の基礎研究」九号　日本中世土器研究会
宇都宮市教教育委員会　一九九六年「飛山城跡第3，4，5次確認調査概報」、担当者の神野安伸、今平利幸、高栖良子、小野敬子氏の好意により資料を実見した。
田中　信　一九九六年「川越市内出土の中世土師器皿について－特に河越館跡及び周辺を中心に」川越市埋蔵文化財発掘調査報告書十一
馬淵和雄一九九七年「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告七一集
八重樫忠郎　一九九七年「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』十七号
荒川正明　一九九八年「大皿の時代」出光美術館
中井　均　一九九八年「戦国期城館出土の貿易陶磁器」貿易陶磁研究会関西大会資料集
早稲田大学本庄校地文化財調査室一九九八年「大久保山6」
清水　尚　一九九九年「静岡県出土の一五～一六世紀の貿易陶磁－その流通に関する問題点の抽出と若干の考察」『静岡県考古学研究　三一号』
池谷初恵　一九九九年「韮山町御所之内遺跡群における貿易陶磁の変遷－貿易陶磁の流通からみた遺跡の盛衰」静岡県考古学研究　三一号
宮田　真　一九九九年「鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）」貿易陶磁研究会鎌倉大会資料集
中三川昇　一九九九年「三浦半島における中世前期の貿易陶磁について」貿易陶磁研究会鎌倉大会資料集
福田　誠　一九九九年「鎌倉市．大倉地域周辺の様相」貿易陶磁研究会鎌倉大会資料集
宗臺秀明　一九九九年「鎌倉市．若宮大路周辺の事例－北条時房．顕時邸跡、雪の下一丁目二七二番地」貿易陶磁研究会鎌倉大会資料集
大河内勉　一九九九年「鎌倉市．由比ヶ浜地域周辺の様相」貿易陶磁研究会鎌倉大会資料集
小山市立博物館　一九九九年「中世の祇園城」、並びに担当者秋山隆雄氏の好意により資料を実見した。
鴨川市教育委員会二〇〇〇「東条地区遺跡群発掘調査報告書」、担当者高梨俊夫、杉山春信氏の好意により資料を実見した。
金子健一　二〇〇〇年「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第八輯
小野正敏　一九八四年「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』四号
小野正敏　一九八五「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の素描」ＭＵＳＥＵＭ四一六号
小野正敏　一九九一年「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』
小野正敏　一九九六年「出土陶磁よりみた房総の城館」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書2』千葉県教育委員会
小野正敏　一九九七年「戦国城下町の考古学」講談社選書メチエグラフ、表作成に関する報告書
浪岡町教育委員会　一九七八年～「浪岡城跡発掘調査報告書　浪岡城跡1～」
八戸市教育委員会　一九七九年～「史跡根城発掘調査報告書」
朝倉氏遺跡調査研究所　一九七九年「朝倉館の調査　越前朝倉氏遺跡発掘調査報告書1」
神岡町教育委員会　一九七九年「江馬氏城館跡発掘調査概報」、神岡町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室一九九五年、同九六年「江馬氏城館跡1，2」など
八王子氏教育委員会　一九八三年「八王子城」

石川県立埋蔵文化財センター　一九八四年「普正寺遺跡」
甲府市教育委員会　一九八五年～二〇〇〇年「史跡武田館跡1～7」
市川一秋　一九八八年「南古館1」福島県岩瀬郡長沼町教育委員会
中野市教育委員会　一九九〇年～九二年「高梨氏館跡発掘調査概報1～3」
岐阜県、丹生川村教育委員会一九九三年「尾崎城跡発掘調査報告書」
中条町教育委員会　一九九三年～九七年「江上館跡1～5」
君津群文化財センター　一九九四「外箕輪遺跡発掘調査報告書」
仙台市教育委員会　一九九三「王の壇遺跡」仙台市文化財パンフレット32
埼玉県児玉郡神川町遺跡調査会一九九五「安保市館跡」
財団法人千葉県文化財センター　一九九四年「印西町小林城跡」
小島幸雄　一九九五年「越後府中とその周辺遺跡出土の陶磁器」『越後の出土陶磁器』日本貿易陶磁研究会
愛媛県埋蔵文化財調査センター　一九九八年、二〇〇〇年「湯築城跡」
東総文化財センター　二〇〇〇年「篠本城跡、城山遺跡」

数値資料を提示した各遺跡についての報告書は、第三章の遺跡の概要に示されているので、ここでは省略した。

表－1　遠江を主とする陶磁器組成

	殿ケ谷	伊平	宇藤	小田屋敷	蔵ノ腰	五郎兵衛	横地城	勝間田城	高天神城	殿谷城	笹岡城	高根城	蒲原城	大宮城	林光寺
山茶碗類	197	1829	2412	193	49	170	2	14	0	0	60	0	0	131	2183
土師質土器	46353	948	292	33	32	97	104	4184	171	60	649	130	1791	31410	354
常滑焼	47	758	100	0	24	3	11	120	47	8	7	809	48	1015	57
渥美・湖西	4	44	7	2	1	4	0	2	0	0	1	0	2	62	1
貿易陶磁	163	342	36	6	1	1	25	119	21	191	17	37	147	355	10
瀬戸・美濃	135	833	164	1	15	6	26	471	69	339	36	200	107	293	9
志戸呂	0	17	37	1	1	0	3	251	0	1	2	8	0	20	2
初山窯	0	0	4	1	1	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	208	0	101	0	0	0
合計	46899	4771	3052	237	124	281	171	5414	309	807	774	1184	2095	33287	2616
調査面積	481	5887	5020	205	54	51	126	2300	1200	4000	900	2600	3277	3700	3400
	97.50	0.81	0.61	1.16	2.30	5.51	1.36	2.35	0.26	0.20	0.86	0.46	0.64	9.00	0.77
かわらけ	46353	688	252	33	30	80	101	4118	66	59	626	97	1786	31377	234
鍋類	9	201	9	0	1	14	0	64	0	0	2	0	0	12	114
その他	41	0	1	0	1	3	3	2	0	1	21	4	5	21	2
土器合計	46353	889	262	33	32	97	104	4184	66	60	649	101	1791	31410	350

	善福寺	潮海寺門前町	土橋	元島	中島	糸繰	宮ノ前	掛川城	見付端城	野際	大見寺	祢宜弥	城ノ前
山茶碗類	73	1662	2773	658	7419	927	2049	?	?	?	?	681	2122
土師質土器	87	276	170	4571	547	838	496	?	?	?	?	3	2180
常滑焼	69	363	374	705	172	37	63	4	2140	14	394	34	153
渥美・湖西	0	29	12	8	138	28	11	0	224	42	117	13	158
貿易陶磁	18	51	24	181	88	4	25	183	431	65	55	23	28
瀬戸・美濃	98	107	4	1951	0	15	12	70	1099	46	123	?	?
志戸呂	22	53	3	386	0	24	1	14	269	43	94	0	?
初山窯	0	5	0	63	0	8	0	17	4	2	4	0	?
その他	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0		0
合計	367	2546	3361	8523	8371	1881	2657	288	4167	212	787		
調査面積	1500	702	4000	20000	950	1500	900	?	2400	4700	340		900
	0.24	3.63	0.84	0.43	8.81	1.25	2.95						
かわらけ	50	154	149	1427	110	504	479					0	1140
鍋類	20	13	21	1965	432	134	17					3	1028
その他	2	0	0	1	5	1	0					0	12
土器合計	72	167	170	3393	547	639	496	?	?	?	?	3	2180

表－２　時期別 中国・瀬戸美濃系組成（１）

時期別組成	１期；12～14世紀中（古瀬戸前期～中期３）					２期；14世紀後半～15前（古瀬戸中期４～後期３）					３期；15世紀後半～16（古瀬戸後期４～大窯）														
	殿ケ谷			志戸呂		伊平			志戸呂		宇藤			志戸呂		蔵ノ腰			志戸呂		見付端城			志戸呂	
	１期	２期	３期	不明	1～3	１期	２期	３期	不明	1～3	１期	２期	３期	不明	1～3	１期	２期	３期	不明	1～3	１期	２期	３期	不明	1～3
天目茶碗	0	4	10	0		0	143	109	5		0	0	29	18		0	0	2	1		1	63	114	13	
碗類	0	5	3	0		1	60	29	2		0	1	10	1		0	0	0	0		1	75	76	7	
皿類	0	0	29	0		1	45	54	1		0	1	37	1		0	0	4	0		2	20	105	7	
卸皿	3	0	0	0		8	15	17	8		0	1	2	0		0	0	0	0		5	7	17	8	
盤類	3	11	1	0		19	133	6	1		0	0	12	0		0	0	0	0		6	134	69	8	
擂鉢	0	0	60	0		0	0	105	0		0	0	36	14		0	0	9	0		0	0	140	76	
鉢類	0	2	0	0		0	3	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	3	3	2	
瓶壺類	2	2	3	0		4	4	8	0		1	1	8	2		0	0	0	0		39	25	152	144	
仏具類	0	0	0	0		1	8	0	0		0	0	0	1		0	0	0	0		2	4	9	2	
入子	15	0	0	0		4	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
その他	0	3	4	0		0	0	55	0		0	0	17	0		0	0	0	0		1	13	13	2	
瀬戸志戸呂計	23	27	110	0		38	411	383	17		1	4	151	37		0	0	15	1		57	344	698	269	
青磁碗類	53	7	0	6	0	182	5	0	12	0	7	11	4	0	0	1	0	0	0	0	72	87	25	22	0
青磁皿類	4	0	3	0	0	22	0	3	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	5	8	0	0
白磁碗類	1	0	0	2	0	17	0	0	4	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	40	0	2	0	0
白磁皿類	21	0	0	3	0	44	8	0	8	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	16	47	2	0	0
白磁杯類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
染付碗	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8	2	0	0
染付皿	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0
青磁ほか	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	30	29
白磁ほか	0	0	0	0	18	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	4
青白磁皿など	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
青白磁ほか	0	0	0	1	29	0	0	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ほか；褐釉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
ほか；三彩	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
中国計	85	7	3	12	52	265	13	5	24	40	11	11	11	2	1	1	0	0	0	0	131	150	51	59	40
瀬戸+中国計	108	34	113	12		303	444	388	41		12	15	162	39		1	0	15	1		188	494	749	328	
鍋	4	4	0			180	19	2			2	4	1			0	0	0	1		0	0	0	0	
山茶碗	197					1829					2412					49									
合　　計	309	38	113	12	52	2312	463	390	41	40	2426	19	163	39	1	50	0	15	2	0	188	494	794	328	40

遠江の出土陶磁器組成の特徴

表－２　時期別 中国・瀬戸美濃系組成（２）

大見寺			志戸呂		大宮城			志戸呂		高根城			志戸呂		笹岡城			志戸呂		掛川城			志戸呂		久野城			志戸呂	
１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３
1	10	13	1		0	4	28	0		0	2	18	0		0	0	5	0		0	0	9	1		0	0	116	0	
0	2	18	0		0	19	20	0		0	0	1	0		0	0	1	1		0	0	0	0		0	0	22	0	
2	2	6	14		0	4	22	3		0	0	4	0		0	0	6	0		0	0	33	5		0	1	223	0	
1	0	5	2		5	1	3	1		0	0	3	0		0	0	1	0		0	0	1	0		1	0	1	0	
3	9	5	0		2	32	30	2		0	10	15	0		0	0	1	0		0	0	1	0		0	0	2	0	
0	0	19	72		0	0	79	10		0	0	25	8		0	0	16	1		0	0	13	1		0	0	255	7	
0	0	0	0		0	4	0	0		0	2	1	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
2	0	19	4		8	2	24	4		15	5	83	0		2	3	0	0		3	3	12	7		0	3	8	5	
1	0	1	1		0	0	3	0		0	0	0	0		0	1	0	0		0	0	1	0		0	2	5	0	
0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
0	0	4	0		0	0	3	0		0	0	16	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	54	2	
10	23	90	94		15	66	212	20		15	19	166	8		2	4	30	2		3	3	70	14		1	7	656	14	
11	5	1	0	0	81	20	0	0	0	0	19	4	5	0	0	3	2	0	0	5	27	1	0	0	3	7	2	1	0
1	0	6	0	0	5	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	0	0	1	8	0	0
3	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	4	1	36	1	0	0	3	47	0	0
0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	21	0	0	0	2	21	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	62	0	0	0	0	82	1	0
0	0	0	6	8	0	0	0	0	42	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8	4	0	0	0	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	4	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	10	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	79	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	5	7	6	18	108	25	3	0	174	0	25	4	5	3	0	4	10	2	0	10	35	123	12	4	3	15	160	3	0
28	28	97	100		123	91	215	20		15	44	170	13		2	8	40	4		13	38	193	26		4	22	816	17	0
0	0	0			6	6	0			0	0	0			0	0	0	0		0	0	0							
					131					0					60														
28	28	97	100	18	260	97	215	20	174	15	44	170	13	3	62	8	40	4	0	13	38	193	26	4					

表－２　時期別 中国・瀬戸美濃系組成（３）

潮海寺門前町			志戸呂		土橋			志戸呂		林光寺			志戸呂		元島			志戸呂		野際			志戸呂		宮ノ前			志戸呂
１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明	１～３	１期	２期	３期	不明
0	1	17	2		0	0	0	0		0	0	0	0		0	39	155	17		0	3	0	1		0	3	0	0
0	7	12	4		0	1	0	0		0	1	0	0		0	48	80	11		0	1	3	0		0	0	0	0
0	6	10	15		0	0	0	0		0	0	3	1		5	84	620	65		0	1	5	1		1	0	0	1
1	1	1	0		0	0	0	0		0	0	1	0		5	23	21	1		0	0	0	0		2	1	0	0
0	6	5	3		0	0	0	0		0	0	0	0		9	132	76	23		0	0	3	0		0	0	0	0
0	0	29	24		0	0	0	3		0	0	2	1		0	0	329	223		0	0	11	34		0	0	2	0
0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	12	2	1		0	3	0	0		0	0	0	0
2	2	5	5		2	0	1	0		0	0	1	0		18	25	116	29		3	3	8	7		1	0	0	0
1	0	2	0		0	0	0	0		0	0	1	0		0	4	6	5		0	1	0	0		0	0	0	0
0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0
0	0	2	0		0	0	0	0		0	0	0	0		7	0	135	11		0	0	1	0		0	1	0	0
4	23	83	53		2	1	1	3		0	0	8	2		44	367	1540	386		3	12	31	43		4	5	2	1
16	9	5	7	0	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	19	52	13	0	0	25	2	0	0	0	13	0	0	0
3	0	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5	0	6	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	1	0	8	0	0	1	0	5	0	0	0	0	5	3	0	0	0	25	0	0	0	0	2	0	0	0
0	0	2	2	0	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	5	33	5	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20	10	10	10	1	15	0	0	5	4	9	0	0	0	1	38	103	28	1	11	57	3	1	0	4	19	0	0	0
24	33	93	63		17	1	1	8		9	0	8	2		82	470	1568	387		60	15	32	43		23	5	2	1
3	0	9			19	1	0			101	0	0			119	805	1089			0	0	0			14	3	0	
1662					2774					2183					658										2049			
1689	33	102	63	1	2810	2	1	8	4	2293	0	8	2	1	859	1275	2657	387	11	60	15	32	43	4	2086	8	2	1

遠江の出土陶磁器組成の特徴

表－２　時期別 中国・瀬戸美濃系組成（４）

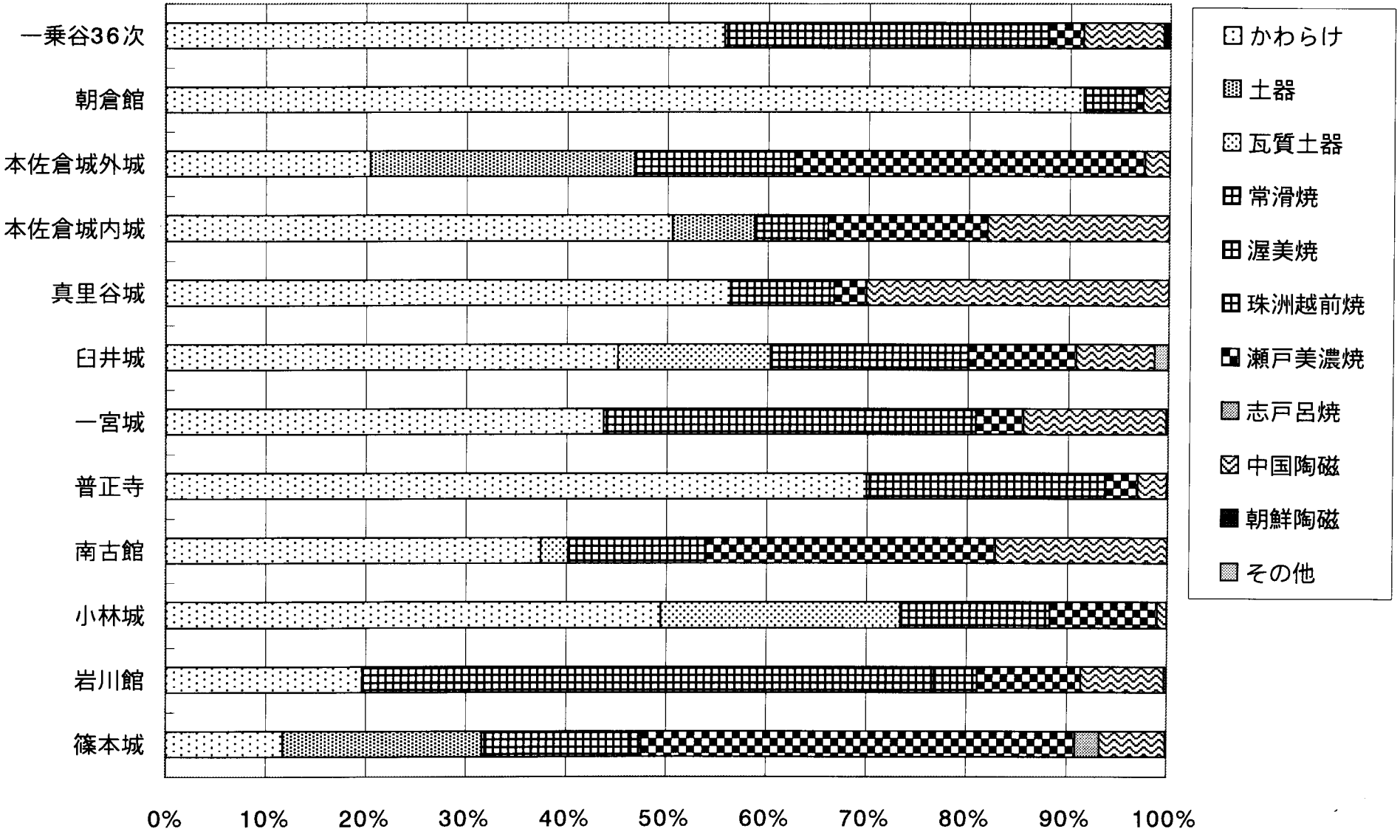
勝間田城			志戸呂		横地城			志戸呂		殿谷城			志戸呂		高天神城			志戸呂		蒲原城			志戸呂		善福寺			志戸呂	
1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3
0	0	46	0		0	0	7	0		0	0	57	0		0	0	8	0		0	0	15	0		0	7	15	1	
0	0	18	2		0	0	3	2		0	0	1	0		0	0	0	0		0	0	5	0		0	11	11	3	
0	0	61	1		0	0	7	0		0	0	148	0		0	0	17	0		0	0	25	0		0	4	9	0	
0	0	4	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	1	0	
0	0	10	0		0	0	0	0		0	0	3	0		0	0	0	0		0	0	9	0		1	0	6	1	
0	0	311	155		0	0	1	1		0	0	22	1		0	0	15	0		0	0	33	0		0	0	8	3	
0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	3	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
0	0	17	88		0	0	0	0		0	0	89	0		0	0	22	0		0	1	19	0		2	6	9	3	
0	0	0	5		0	0	8	0		0	0	5	0		0	0	1	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0	
0	2	1	0		0	0	0	0		0	0	11	0		0	0	6	0		0	0	0	0		0	6	1	11	
0	2	468	251		0	0	26	3		0	0	339	1		0	0	69	0		0	1	106	0		3	35	60	22	
2	27	6	0	0	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	10	0
0	0	15	0	0	0	13	2	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
2	11	0	1	0	0	0	3	0	0	0	5	52	0	0	0	0	10	0	0	0	0	38	0	0	0	0	0	2	0
0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0
0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	18	0	0	0	0	1	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	0	0	0	0	3	0	0	0	0	75	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
0	0	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
4	47	23	28	6	0	18	5	2	0	0	9	129	0	1	0	0	15	0	6	0	5	138	4	0	0	1	2	15	0
4	49	491	279		0	18	31	5		0	9	468	1		0	0	84	0		0	6	244	4		3	36	62	37	
0	64	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	9	11		
14					2					0					0					0					73				
18	113	491	279	6	2	18	31	5	0	0	9	468	1	1	0	0	84	0	6	0	6	244	4	0	76	45	73	37	0

表－２　時期別 中国・瀬戸美濃系組成（５）

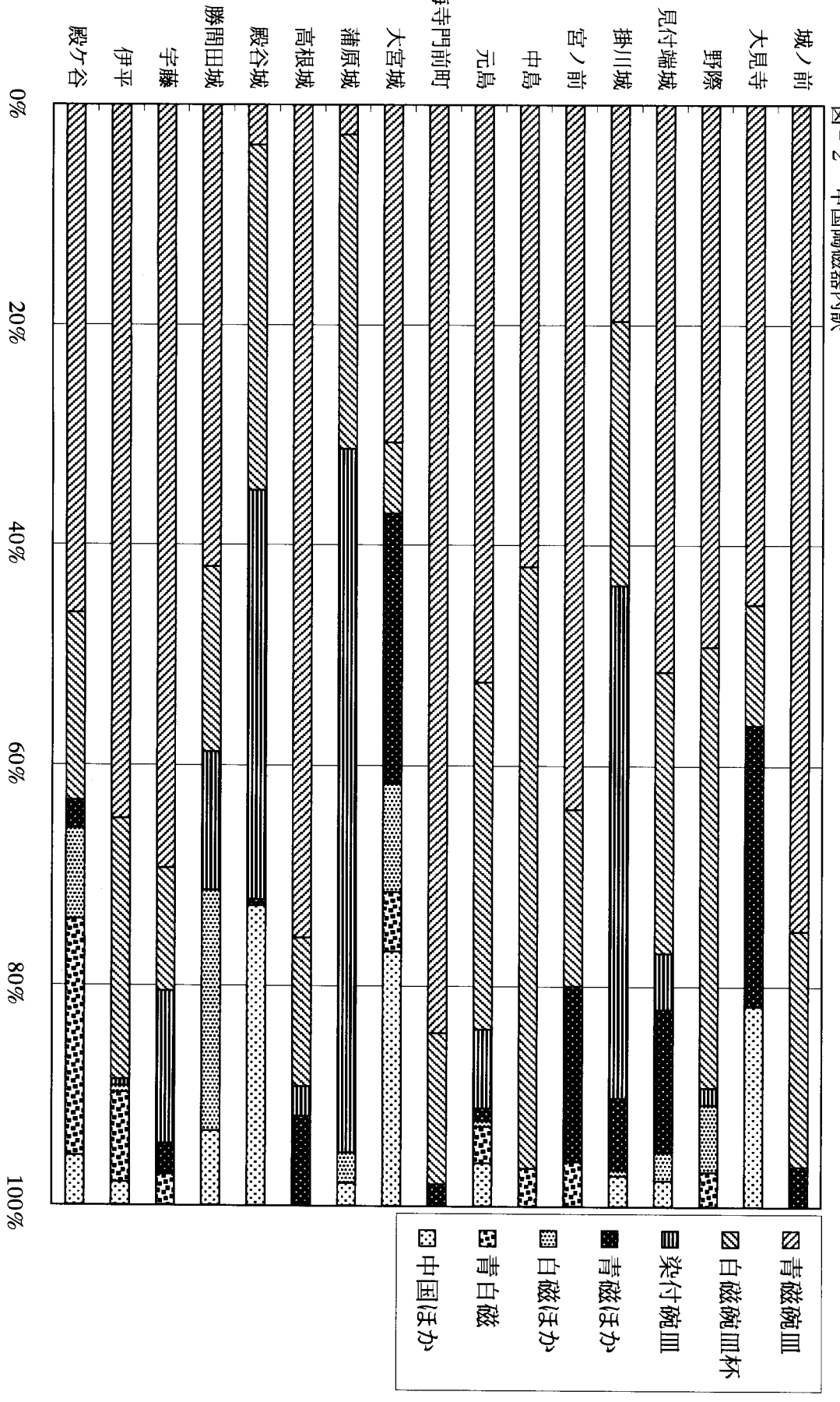
	糸繰			志戸呂		中島					石成			志戸呂		城ノ前			志戸呂		瀬名川					原川				
1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	不明	1～3	1期	2期	3期	志戸呂	1～3
	0	0	6	2							0	16	1	0		0	3	14	0							0	17	109	2	
	0	0	1	0							0	7	5	0		0	7	7	0							0	28	21	8	
	0	0	2	2							1	2	3	0		0	16	17	3							0	27	290	2	
	0	0	0	0							14	1	0	0		0	0	0	0							1	5	1	0	
	0	0	0	0							1	0	6	2		0	10	2	3							0	22	9	4	
	0	0	2	13							0	2	5	9		0	0	56	23							0	0	329	105	
	0	0	0	0							0	1	1	3		0	0	0	0							0	0	0	1	
	0	0	4	7							31	8	1	1		27	8	6	6							17	24	30	22	
	0	0	0	0							0	2	0	0		0	0	0	0							0	9	3	5	
	0	0	0	0							0	0	0	0		0	0	0	0							0	0	0	0	
	0	0	0	0							0	1	2	1		0	2	0	1								10	4	3	
	0	0	15	24							47	40	24	16		27	46	102	36							18	142	796	152	
0	0	0	0	0	0	34	0	0	0	0	47	1	1	1	0	11	6	0	0	0	38	0	0	1	0	51	17	5	0	0
0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	5	0	0	0	0	2	0	6	0	0
0	0	0	0	2	0	37	0	0	0	0	32	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0	0
0	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	9	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0
3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	4
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	1	0	0	82	0	0	0	0	91	1	2	8	7	21	7	0	0	1	45	0	0	1	0	65	17	24	6	5
	0	0	16	24							138	41	26	24	7	48	53	102	36							83	159	820	158	5
	95	1	0			430	2	0								50	18	868			44	33	0			2	79	64		
	927					7419										2122														
4	1022	1	16	24	0																									

遠江の出土陶磁器組成の特徴

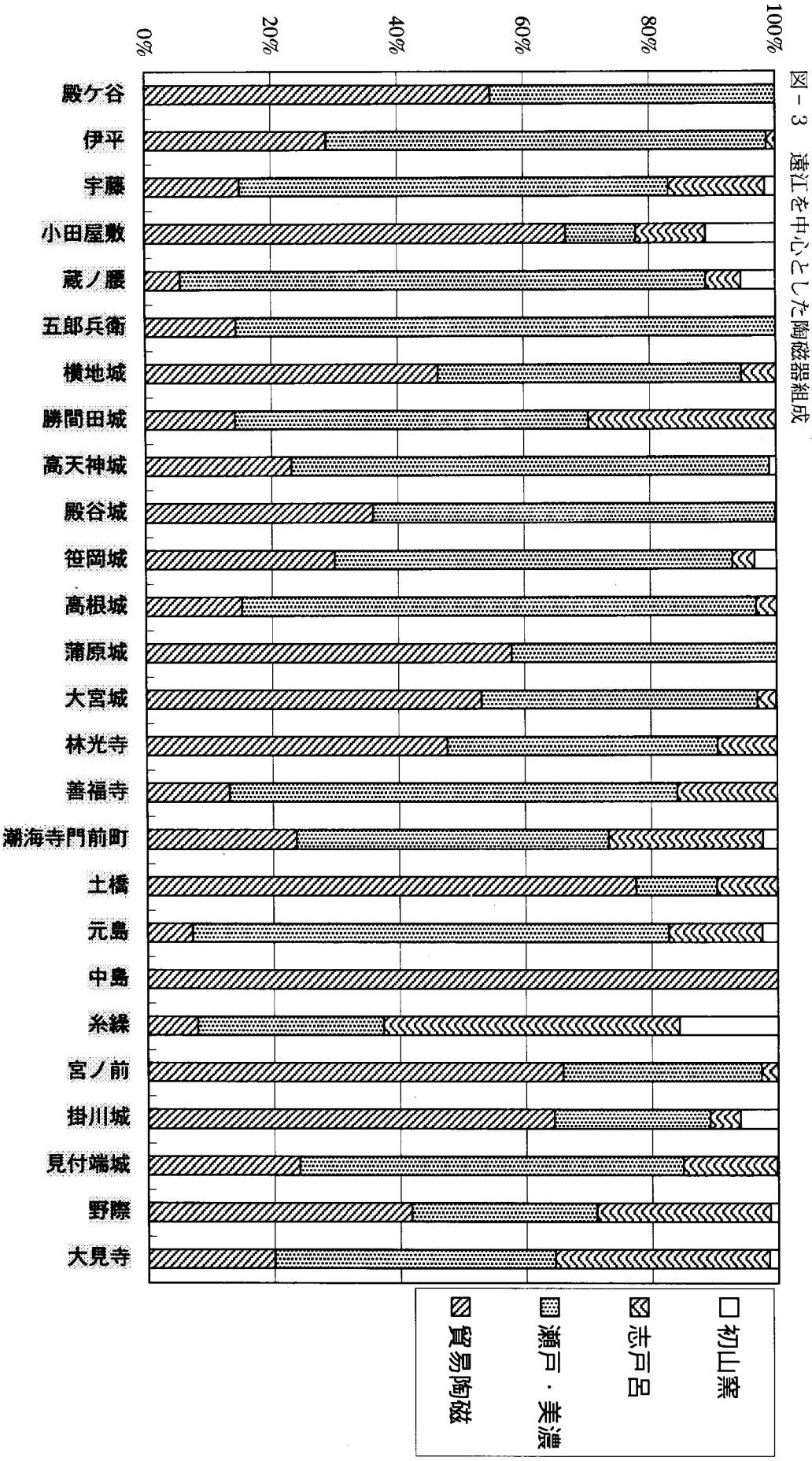
図－１　東国を中心とした生産地別組成例



図－２　中国陶磁器内訳


城ノ前
大見寺
野際
見付端城
掛川城
宮ノ前
中島
元島
潮海寺門前町
大宮城
蒲原城
高根城
殿谷城
勝間田城
宇藤
伊平
殿ケ谷
0%
20%
40%
60%
80%
100%
青磁碗皿
白磁碗皿杯
染付碗皿
青磁ほか
白磁ほか
青白磁
中国ほか

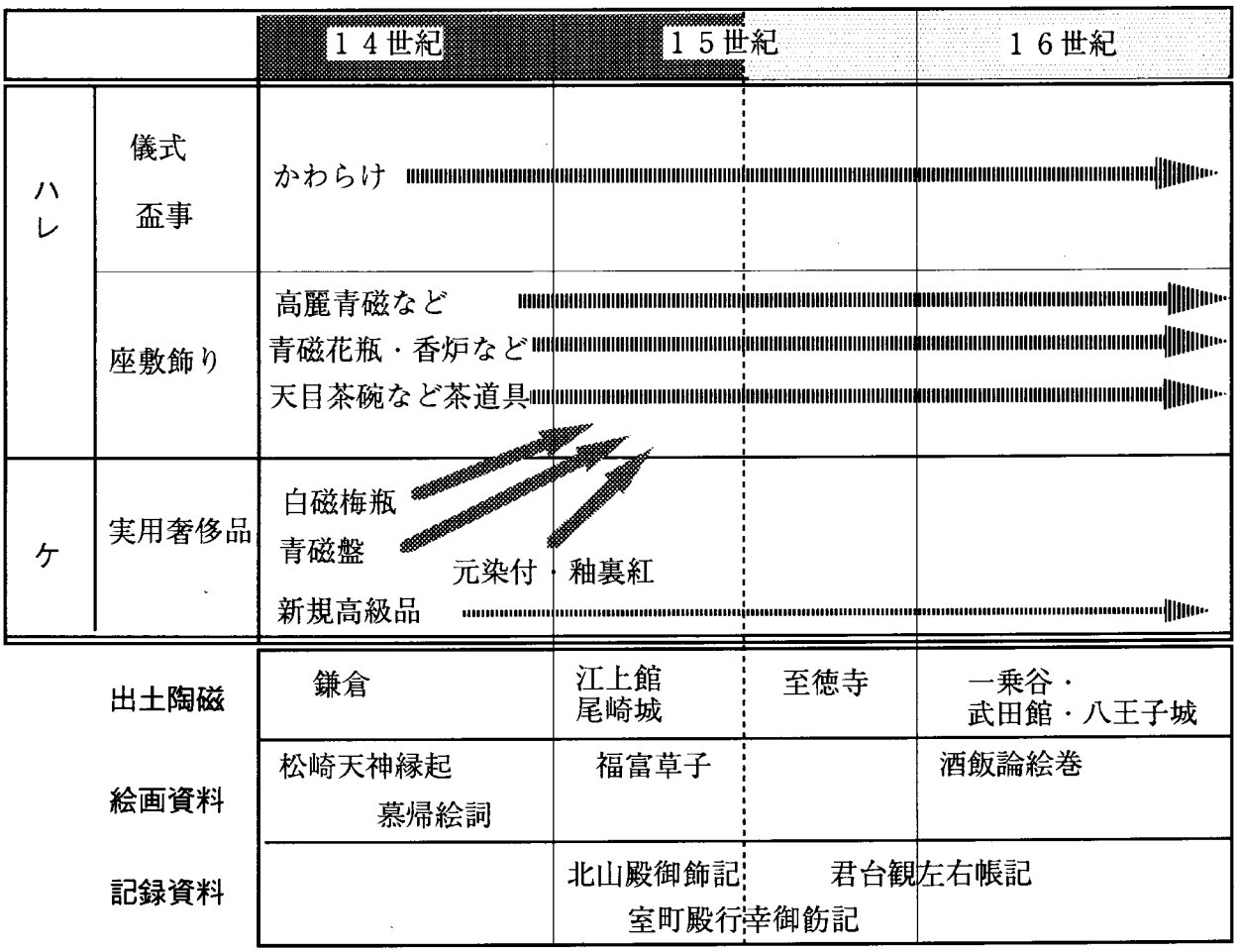
図－3　遠江を中心とした陶磁器組成



図－４　主要威信財の出土状況

	白磁梅瓶・四耳壺	青磁盤	青磁酒海壺	青磁花生	青磁太鼓胴盤	青磁器台	天目茶碗・茶入	元代染付	その他	庭園
浪岡城	○	○	○			○	○		陶枕	■
根城	○	○	○				○		馬上杯	■
江上館	○	○	○	○	○	○	○			■
至徳寺	○	○	○	○		○	○	○玉壺春	釉裏紅玉壺春、碗	
高梨館		○	○	○	○	○			耳かわらけ多い	○
尾崎城	○	○	○	○	○	○	○	○皿	馬上杯、朝顔型天目	■
江馬館	○	○		○			○		高麗青磁碗	○
朝倉館		○	○	○	○	○	○	○酒海壺盤	高麗青磁陶枕、定窯白磁鉢	○
本佐倉城	○	○	○	○			○			
武田館	○	○	○		○		○	○酒海壺	宋胡録香合	○
八王子城	○	○	○	○		○	○		ベネチアングラス	○
川越館	○	○					○		青磁花瓶、泉州窯洗	
祇園城	○	○		○			○		浮牡丹大香炉、	
湯築城	○	○	○	○	○		○		高麗青磁瓶子	○
殿ケ谷	○	○	○				○		泉州窯洗	
伊平	○						○		青白磁合子、高麗青磁か	
土橋	○	○								
野際	○								青白磁合子	
原川	○水注	○								
大宮城	○	○	○	○			○		高麗青磁か、泉州窯洗	
見附端城	○	○	○	○			○			
大見寺		○					○			
潮海寺		○								
勝間田城							○			
掛川城		○								
高根城										
元島	○	○					○			
高天神城							○		華南三彩香炉	
殿谷城		○								
笹岡城									青白磁合子	

図－５　威信財と３種の場



表－３　東国を中心とした陶磁器組成

	篠本城	岩川館	小林城	南古館	普正寺	一宮城	臼井城	真里谷城	本佐倉城内城	本佐倉城外城	朝倉館	一乗谷36次
かわらけ	130	175	411	109	7715	445	363	1600	1464	157	56342	33890
土器	221	0	0	0	0	0	0	0	237	202	0	0
瓦質土器	3	0	199	8	32	3	122	0	0	0	13	175
常滑焼	161	508	124	40	0	375	159	294	211	122	0	0
渥美焼	13	38	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
珠洲越前焼	0	0	0	0	2596	0	0	0	0	0	3249	19454
瀬戸美濃焼	480	92	89	84	352	48	86	93	460	268	434	2108
志戸呂焼	27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中国陶磁	73	74	8	50	322	145	63	856	525	19	1562	4892
朝鮮陶磁	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	234
その他	0	2	0	0	8	2	11	0	0	0	0	153
合　計	1119	889	831	291	11025	1018	804	2843	2897	768	61665	60906

横地城周辺における中世石造物の展開とその意義

桃崎祐輔

はじめに

横地城総合調査にかかる石塔の悉皆調査を通じ、遠江に数多く見られる中世石塔を研究する上での基礎資料が蓄積されたが、菊川町周辺の限られた範囲内だけでは、その位置付けは難しい。しかし幸いなことに、周辺市町村における調査が徐々にではあるが進展しており、中世石塔を通じて地域の中世史を復元する見通しも得られてきた。本論では、こうした調査を整理統合し、現在の到達点を明らかにするとともに、横地城周辺石造物の位置付けを試み、その歴史的意義を明らかにしたい。

I　従来の研究法と問題点

遠江地域の中世石造物については、はやくも一九四〇年に黒田昇義氏が豊田町行興寺の「熊野の墓」宝篋印塔を紹介している（黒田一九四〇）。遠江地域における中世石造物の本格的研究は一九五〇～六〇年代に始まり、一九五七年には川勝政太郎氏が宝篋印塔の関東型式と関西型式の境界地域として取り上げたが（川勝一九五七）、日野一郎氏は両型式の接触点として天竜川流域の石造物、特に宝篋印塔に着目し、磐田市鎌田兵衛五輪塔や掛川市本郷周辺の長福寺宝篋印塔、曽我十郎塔などを紹介した（日野一九六八）。川勝政太郎氏は、榛原町清浄寺裏山石塔群の所謂混合式塔・相良町平田寺の変形宝塔に注目し、遠江東部地域に展開した石造物の特異な地域性に着目（川勝一九七〇・一九七三）、特に「混合式」塔の概念をめぐっては、研究者間で活発な論争も行なわれ、斎藤彦司氏が研究史を整理している（斎藤一九八七）。沼津霊山寺にある石造遺品を、川勝政太郎氏は「五輪・宝篋印混合式石塔」として、おもに静岡県下に存在する他の類例とともに紹介した（川勝一九七〇・川勝一九七三）。一方、田岡香逸氏は混合式石塔の存在を否定し、霊山寺の石塔は単なる五輪塔と宝篋印塔の断石を積み上げた「寄せ集め塔」であるとの見解を示した（田岡一九七五）。その後、鈴木富雄氏は川勝氏の論を支持する立場から、混合式石塔の存在を肯定する見解を示した（鈴木一九七五）。また、福沢邦夫氏は田岡氏の論を補強する立場から「寄せ集め塔」であると主張した（福沢一九七六）。川勝氏は、その後出版された著書においても、霊山寺の石塔を「五輪・宝篋印混合式塔」として紹介した（川勝一九七八）。

混合式塔の研究史から窺えるように、従来の石造物研究ではセットが完全で大型、美術的完成度の高い遺品を主な対象として、石工の系譜や規格の検討がなされ、計測寸法を重視した建築学的な作図法による概念図や拓本・写真に頼る研究に拠っていた。このため同一精度・同一縮尺の実測図の比較検討による分類・編年という考古学の基本的な研究法は一般化せず、ために部材の組み合わせが当初のものか寄せ集めかという点で議論が膠着し、地域史解明とは無縁の水掛け論に陥った。細工が複雑な反花座などを除くと、中小石塔の各部材が乖離したものについてはほとんど分析をなしえなかった。こうした状況に変化をもたらしたのは、尾形禮正氏による伊豆韮山町の石塔悉皆調査である。石塔群ごとに部材の全点計測を行ない、各部材の部位ごとの長幅比率の変化と紀年銘資料や出土層位、寺院沿革を対比して石塔の型式学的変遷を明らかにした（尾形一九八八）。これによって横地城周辺の石塔群のように造立当初の状況が失われた寄せ集めの石塔部材にも検討の可能性が開けてきた。

一方一九八〇年代以降は相良町（相良町教育委員会一九八六）・榛原町（榛原町教育委員会一九八七）などで地元の文化財読本に石造物が取り上げられる機会が増えたほか、磐田市の大原墳墓群（磐田市教育委員会一九八四）・一ノ谷中世墳墓群（磐田市教育委員会一九九三）などの調査で大量の石塔部材が出土し、考古学的な実測図を添えた報告がなされ、出土状態が示す部材の組み合わせや共伴遺物が示す実年代を総合することで石塔部材の型式学的編年研究への端緒が開かれた。こうした中で掛川城本丸下層（掛川市教育委員会一九九八）や峯遺跡（戸塚一九九五）など年代決定の基準資料が増えたほか、

最近では野澤則幸氏が横地三光寺跡周辺の石塔調査で全点実測と分類、石材産地の推定が試みており（野澤一九九五）、また『静岡県における中世墓』シンポジウムでは石造美術・考古遺物両研究の融合を模索する新たな研究の可能性が提示され（静岡県考古学会一九九七）、石川治夫氏による「静岡県東部地域の石造塔」では伊豆の輝石安山岩製石塔を中心に主要な紀年銘塔が集成・整理され、贄恵子氏の「石塔の変遷」では一ノ谷中世墳墓群の成果を基礎に遠江の石塔部材の傾向や変遷が整理され（贄一九九七）、造塔階層や宗派の問題も取り上げられた。

最近では河合修「供養塔の形態と変遷－特に西駿河の一石五輪塔について－」（河合一九九八）、本間岳人「遠江における中世石製塔婆の様相」（本間一九九八）、筆者による「石造物からみた中世の横地－横地城周辺石造物調査の成果と課題－」（桃崎一九九九）などによって、遠江の石造物研究も基礎資料の蓄積と分析が進み、編年の大枠や地域性もある程度把握されており、自治体史や文化財図録の刊行で石造物の集成も進み、自治体史編纂事業に関連して各地の石材産地に関する研究も進展を見せている。

遠江地域は、鎌倉を中心とした東国的世界の西縁と京都を中心とした西日本の東縁の出会う場であり、東海窯業地帯の一端を担う地域でもある。石塔にもその位相が端的に現れており、横地氏の性格を考える上で、石塔の様式や石材の地域性の解明は重要な意味を持っている。

また石塔は中世仏教の産物であり、造塔は仏教諸宗派の思想や活動と不可分の関係にあるが、従来はこうした研究が不十分であった。遠江における仏教諸宗派の活動と石塔造営の相関も検討したい。

更に多数の石塔造営を支えたのは、単に仏教諸宗派の活動の成果にとどまらず、石塔造営を必要とした当時の社会状況が背景にある。石塔造営の象徴性の解明もまた求められる。

石塔はしばしば寺院址や居館に伴って見いだされるから、造立された地点の性格を解明することも、中世景観の復元の上で重要であり、特に居館との隣接関係が重視される。

II　研究の方法

調査は以下の手順で行ない、本論では現時点での成果の一部を示した。

①横地地区を中心に石塔の分布図を作成し、周辺の歴史的環境を調査する。
②各石塔群ごとに部材を全点実測する。
③石塔群を種別・部材ごとに分類して内訳を明らかにし、大きさ、石材、形態などの所見も含め型式学的操作で整理する。
④石材産地の検討から製作地との流通範囲を明らかにする。
⑤遠江を中心に銘文や共伴遺物・出土遺構より年代の判明する石塔と対比して年代決定を行ない、変遷をたどる。
⑥各石塔群の形成時期と存続期間を推定する。
⑦石塔群と寺院や宗派、居館址との関係を明らかにする。

III　横地城跡周辺に分布する石塔の分類

横地城周辺石塔の部材について、五輪塔・宝篋印塔・一石五輪塔の種別ごとに形態の比較による分類を行なった。野澤（一九九五）による三光寺石塔群の分類案、本間（一九九八）による遠江地域の分類案を参考に作成したが、今後未知の型式が知見にのぼれば、改めて分類を行なう必要があろう。

(1)　五輪塔

五輪塔は、宝珠・半球の結合した空風輪、笠形の火輪、球形の水輪、角形の地輪よりなる。

一般的に空・風輪が球形基調で丁寧な仕上げのものから円筒・円錐型基調の粗雑なものへ、火輪が高いものから低いものに、軒が厚く反るものから薄く反らないものへ、水輪が球状から偏平へ、地輪が低いものから高いものへと形態が変化する。石材は緑色変岩、安山岩、凝灰岩、砂岩である。

空・風輪

火輪と接する部分がホゾ付き（1類）、ホゾ穴（2類）、ホゾなし（3類）の三種類がある。

B類は空輪が宝珠形や球状をなし、くびれが顕著なもの。ホゾの付くB1類、ホゾ穴のあくB2類。

C類は空輪が円錐形でくびれが弱く仕上げも粗い。ホゾの付くC1類、ホゾ穴のあくC2類。

D類はホゾが付かず、ホゾ穴もあいていないもの。

火輪

ホゾ穴の径の大きいもの（1類）、小さいもの（2類）、無いもの（3類）の区別がある。空・風輪の1・2類、3類にそれぞれ対応するものである。

B類は軒下端部幅に比して高さの割合が大きいもの。ホゾ穴の径の大きいB1類、小さいB2類。

C類は軒下端部幅に比して高さの割合が少ないもの。B類にくらべ軒厚が薄く、軒反りもない。ホゾ穴の径の大きいC1類、小さいC2類。

D類は上端と下端の段形が一段となるもの。宝塔の笠には多いが、五輪塔では珍しい。

水輪

最大径と高さの割合から2分類できる。

B類は最大径に対して高さの割合が比較的大きいもの。古式大～中型のものが多い。

C類は径に対し高さが低く、偏平なもの。新式小型のものが多い。

地輪

幅と高さの割合から2分類できる。

B類は軒に対して高さの低い、偏平な感のするもの。

C類は幅に対し高さが高くなるもの。

(2) 宝篋印塔

宝篋印塔は、円柱形の相輪と、平面方形の笠・軸・基礎・台座よりなり、前者は方形柱状、後者は方形ブロック状の石材より削り出したもので、原材の石取り方法に相違がある。相輪は断面形、請花や九輪のメリハリや蓮弁の有無、笠は四隅に造り出した隅飾、軒上・軒下の屋根の段数の変異や細工の巧拙が年代決定の根拠となる。石材は砂岩、安山岩、花崗岩である。

相輪

相輪は宝珠、請花、九輪、請花、伏鉢の五つの部分から構成されている。

a1類は低い玉葱形の宝珠で半球形の上請花に間弁蓮弁を肉彫したもの。九輪タガ状で断面正円形。下請花に蓮華を肉彫し伏鉢半球形で低い。横地太郎塔を標識とし、三光寺にも破片が見られる。

a2類は玉葱形の宝珠に半球形の上請花がつき単弁蓮弁を線刻したもの。九輪の彫りが弱く断面円形。下請花に蓮華を線刻し伏鉢台形で高い。小川端・横地太郎塔群例を標識とする。

b1類は球状の宝珠で上請花に蓮弁を線刻したもの。九輪タガ状で断面円形。下請花に蓮華を線刻する。古式のものが榛原町伏方中田家裏山例（安山岩）、新式のものが豊田町行興寺例。

b2類は球状の宝珠に半球形の上請花がつき蓮弁を線刻したもの。九輪タガ状で断面円形。下請花に蓮華を線刻し伏鉢台形。三光寺例（花崗岩質砂岩）のほか磐田市住吉遺跡例を標識とする。

c1類はa2類に似るが上下請花とも素文。玉葱形の宝珠に半球形の上請花がつき九輪の彫りが弱く断面円形。伏鉢の形態はさまざま。三沢殿ケ谷坂・横地太郎塔群例を標識とする。

c2類は桃形の宝珠に半球状の請花がつくもの。九輪の溝は浅く断面円形。伏鉢は台形で高い。全体的に非常に背が高い。横地太郎塔群例を標識とするが、三光寺の花崗岩製相輪が祖型か？

d類は円錐形の宝珠に逆台形の請花がつく。整形が雑で九輪と下請花の区別が不明瞭で伏鉢は円柱形臼状。断面は楕円形でやや偏平。延命段・横

地太郎塔群例を標識とし掛川市峯遺跡にも破片がある。

e類は全体的に方柱状の角張った形状で、宝珠と請花のくびれが弱く上下請花・九輪は退化鉢の退化し伏鉢が方形ブロック状で高い。二俣家墓地・報恩寺・春岡町天野家墓地例を標識とする。

笠

軒上の段形は三～六段、軒下の段形は〇～二段までバラエティーがある。

a1類は軒上が四～六段で、最上段に二窓の露盤の表現があるものを含む。軒と隅飾りの境界が明瞭で隅飾は直立に近く輪郭は内抉りで一段低くなる。

a2類は軒上が三～四段で、最上段は素文で軒と隅飾りの境界が不明瞭になり、隅飾の斜辺が二弧をとどめる。隅飾は直立に近く、輪郭は線刻で縦長である。

b1類は軒上が四～六段で、最上段に二窓の露盤の表現のあるものを含む。軒と隅飾りの境界が明瞭で隅飾の斜辺は二弧で、内抉りで横長の輪郭を設ける。三光寺・笠名・三沢太子堂例。

b2類は軒上が三～五段で、軒と隅飾りの境界が不鮮明になり、外反気味の隅飾の斜辺は二弧をとどめる。線刻で横長の輪郭を設ける。東横地坪井家・土橋・横地太郎塔群など。

c1類は素文直立気味の隅飾の比率が大きく隅飾間が狭いのが特徴。横地太郎塔や龍谷寺が典型。

c2類は軒下の段がくずれて横帯状になったもの。三光寺や慈眼寺に例がある。

d類は上下に極端に偏平なのが特徴で、軒上の段形が二～三段で、軒と隅飾りの境界が不鮮明になり、低く外反気味の隅飾りに横長の輪郭を設けるd1類と素文のd2類。延命段・浜松城例。

e類はc類に近いが丸い隅飾で比率が小さく間隔が大きい。軒上二～四段だが軒下が一段もしくは斜段で無段のものもある。隅飾にはΣ形の線刻を伴い掛川城本丸下層例がやや古く、春野町下石切塔例がやや新しい。更に素文となる。報恩寺の高い外反する隅飾で軒上四段になるものは延命段タイプや二俣家タイプの角柱状の相輪と組み合う。

塔身

a類は側面の周囲に輪郭を設け、内側凹面に金剛界四仏の種子を刻むa1類と素文のa2類。

b類は輪郭のないもので、ほぼ直方体を呈するもの。側面に金剛界四仏の種子を刻むものがある。

c類はb類にくらべ高さが低いもの。殆どが素文である。

d類は成形後の彫整が不十分でノミ痕を残す荒造りのままのもの。

基礎

a1類は各面二窓の凹面（稀に輪郭表現）表現が特徴。側面が高くなると同時に段形が低くなる。a2類は各面一窓の凹面表現が特徴。側面が低く段形の立ち上がりが目立つ。

b類は軸に対して高さの低いもの。段形の多くは二段であるが、稀に一段のものがある。

c類はb類にくらべ高さの高いもの。稀に底面に納入孔の設けられたものがある。

d類は段形が一段に省略されて角が丸みを帯びている。

反花座

a類は上端の反花が複弁で、側面は輪郭をもって凹面に二区に分けられている。

b類は上端の反花が単弁で、側面に輪郭がなく無地である。a類に比べて高さが低い。

(3)　一石五輪塔

角柱状の石材にくびれを削り出した各輪部の境を表現した五輪塔だが、空風輪の比率が通常の五輪塔に比べて大きいのに対し、火輪・水輪は偏平

で比率が小さい。通常の五輪塔に近いメリハリのあるものから木製卒塔婆を石製にしたような棒状偏平なものまで様々である。古いものは単独で大型、ついで小型密集となり、近世に入ると屋形状の石龕に紀年銘を刻む夫婦の石塔を納めるものが多い。石材は殆どが砂岩だが、他地域には花崗岩・輝石安山岩のほか緑色変岩のものも稀に見られる。

A類は安置式で通常の積上五輪塔と同様なプロポーションのもので地輪を埋め込まない。

B類は埋込・立て掛け式で地輪部が長く埋め込む。そのまま立つものと自立できないものがある。

C類はホゾ穴式で台石に皿状のホゾ穴を施した上に出ホゾではめこむ形式のもの。

Ⅳ　石塔の変遷と編年

(1)　五輪塔

遠江地域の五輪塔は緑色変岩→伊豆安山岩→砂岩タイプへと変化し、異なる系譜の緑色変岩製（ホゾなし）と安山岩製（ホゾあり）の両要素が砂岩製五輪塔で合流し、その後はもっぱら安山岩製の影響下で砂岩製五輪塔の型式学的変遷がたどれる。緑色変岩製では十三世紀後半～十四世紀初頭前後の慈眼寺五輪塔（図1－2）・内田應聲教院の伝法然塚などは梵字の彫りが比較的はっきりした薬研彫りであるが、小笠町小堤城や川西地蔵堂などでは梵字の彫りが細く微弱となっており、これらは南北朝期に降るものと思われる。袋井市用福寺の伝橘逸成墓では雄渾な薬研彫りの梵字を刻む緑色変岩の五輪塔部材に全く同型・同法量の砂岩製部材が混在して見られること、十四世紀末頃の榛原町伏方中田氏宅裏山五輪塔（砂岩，図版1－7・8）でも已然として空風輪がホゾ無しの系譜をひく点などから、緑色変岩五輪塔で出現したホゾ無し空風輪の系譜の一部は、早い段階で砂岩にも移転し、長く遺存したとみられるが、神尾宝珠院では緑色変岩の大型火輪の頂部に出ホゾ空風輪に対応するホゾ穴を伴うものがあることから、状況は単純ではない。

伊勢湾以東では長野県飯田市文永寺に弘安六年（一二八三）銘の花崗岩製五輪塔が見られ、これは南都石工の作で、茨城県の筑波山麓や静岡県東部の一部、三河にも律宗の教線を介して出ホゾを基調とする西大寺様式の花崗岩製五輪塔が出現する。遠江では「三河石」・「岡崎石」と呼ばれる岡崎中目の花崗岩（池上一九六六他）が搬入されたと考えられ、原野谷川流域を所領とした地頭原氏ゆかりの掛川市本郷周辺に遺品が集中する。長福寺境内には花崗岩製で梵字を刻んだ大型の五輪塔があり、かつて完形で長福寺裏山古墳の上に立っていたが、崩落で空風輪・火輪を失っている。本郷照月寺は長福寺の旧末寺で古式の大型五輪塔がある。同様なものは豊岡村永安寺のほか一宮市法圓寺中世墓（図版1－6）にもみられる。

一方永仁三年（一二九五）の箱根虎御前塔を嚆矢として西大寺様式の定型化した伊豆輝石安山岩製五輪塔が出現し、鎌倉極楽寺忍性塔（一三〇三）や三世善願房順忍の忍公塔（一三三六）、善願の銅蔵骨器を出土しその分骨塔を含む伊豆修善寺町牧ノ郷五輪塔群など律宗寺院を中心に底面にトンボ目のある出ホゾ空風輪を伴う安山岩製五輪塔が盛行するが、駿河東部域の沼津霊山寺では開山宗賢房成尋塔（一三三三）を筆頭に凝灰岩製五輪塔が卓越する。

遠江では先行して緑色変岩製五輪塔が普及していたためか、出ホゾ空風輪の安山岩製五輪塔が出現するのはやや遅れるようで段横地常泉寺・公会堂（図版1－4・5）や西横地幢照寺跡、小川端加茂橘北方墓地、榛原町清浄寺裏山の勝間田氏墓所、磐田市見付の一の谷中世墳墓群遺跡（図版1－3）や見性寺に十四世紀中葉～後半の例が見られる。特に見性寺無縁墓地の五輪塔は梵字を刻み一具完存の好例であるが、西横地幢照寺跡には梵字を刻む空風輪・地輪が残されており、同様な五輪塔の存在を推測しうる。

なお駿河西部の藤枝市鬼岩寺は忍性の中興を伝える律宗寺院を前身とし、応安六年（一三七三）銘の在地砂岩製の大型納骨五輪塔が見られ、裏山産出の

鬼岩寺石もしくは掛川の日坂石製と推定される。前述の榛原町伏方中田氏宅裏山五輪塔は空風輪に出ホゾこそ伴わないが、大型の在地砂岩製である点からこうした西大寺様式の大型五輪塔の影響下にあるのは確実であろう。

浜北町北岡古墓では出ホゾを伴う頂部の丸い空風輪の五輪塔（砂岩，図版1－9）が見られ、塔下から十五世紀前半頃の常滑小壺を出土している。掛川城跡本丸下層墳墓群では永正築城（一五一三前後）以前の層より空輪頂部が円錐形に退化した出ホゾの空風輪（日坂石）が出土しており十五世紀後半～末前後の年代が考えられ、潮海寺門前にも同形態の空風輪が見られる。十六世紀に入る頃には空風輪・火輪とも小ホゾ穴を有するタイプが現れ、両者は小さい木製ホゾを介して連結されていたと推測される。当然木ホゾの腐朽とともに崩れてしまう永続性の低いものであったと考えられる。磐田市一の谷中世墳墓群の八三二号墓出土五輪塔（砂岩，図版1－10）では木ホゾ連結型の組み合わせが確認できる（加藤一九九三）。このタイプも古い段階では頂部が丸く、新しい段階では円錐形により近くなる。

(2) 宝篋印塔

宝篋印塔は伊勢湾以東では鎌倉のやぐら内より出土した寶治二年（一二四七）銘のものが最古とされていたが、近年の調査進展で、やぐらの出現年代との齟齬や類例が皆無であることから贋作であるとする見方もある。実際の初期の宝篋印塔には軟質石材を使用するものの存在が推定されているが、これらはほとんど風化崩壊して実態が不明である。現存資料では一二六〇～七〇年代頃の造営と考えられる茨城県つくば市の宝篋山宝篋印塔（花崗岩）が関西形式（特殊様式）の古い例だが孤立しており、所謂「関東型式」につながる宝篋印塔では静岡県箱根町の永仁四年（一二九六）銘箱根山宝篋印塔が最も古く、十三世紀末～十四世紀初頭にかけて伊豆・駿河地域に定着し、遠江地域にも伝播すると考えられる。

宝篋印塔は、遠江では古式で大型のものは相輪・笠・軸・基礎の四部材を基本に、台座を加え五部材よりなるものが一般的で、基礎に二区の窓を設け、台座に反花座・框座を伴う所謂「関東形式」が主流だが、小型で新式のものは、基礎に框座がなく台座を伴わない「関西形式」系統のものが多い。宝篋印塔の年代は笠の露盤の有無、段形の段数、隅飾の形状や傾斜の度合い等を指標に新旧の目安が得られる。遠江の紀年銘石塔は大部分が安山岩製で、榛原町中の栗原家墓地の「観阿弥陀仏　正和元年（一三一二）壬子七月廿九日」銘安山岩製基礎は小型だが高い段と正方形に近い二窓の区画が特徴で、これに組み合う笠は軒上四段・軒下二段でやや上下に偏平、隅飾が直立し一弧であるなど古相を示し、現在遠江地域で確認しうる最古の宝篋印塔である。静波鈎学院にも「也阿弥陀仏　元徳四年壬申（一三三二）四月三日　奉建石塔□□□四月□」銘基礎があり反花座を伴っている。

榛原町道場清浄寺裏山の「勝間田氏一族の墓」石塔群には伊豆安山岩製の宝篋印塔部材が多数あり、基礎に「観応貳年（一三五一）願主　智阿弥陀佛　四月四日」（図版8－13）「住一房　建武四年（一三三七）　正月八日　奉造塔　文和二年（一三五三）　四月八日」と刻むものがある。

三光寺跡裏の宝篋印塔群は、部材の大部分は掛川日坂産の硬質砂岩であるが、輝石安山岩製の宝篋印塔の反花座・基礎・塔身・傘が含まれ塔身には梵字が彫られているが、相輪は失われている。基礎の窓部には、「見阿弥陀仏」「文和四年（一三五六）卯月十日」と刻まれている（図版8－13）。

横地太郎塔は大型の砂岩製宝篋印塔で相輪と笠が残り、十四世紀中葉～後半の年代が推定される（図版8－2）。またその約二分の一の規格に相当する同型式の中型宝篋印塔が横地太郎塔群（図版8－4）・神尾宝珠院1号笠（図版5－12）にみられる。いずれも軒と隅飾に段差があり、隅飾内の装飾は縦長で内抉を残すという特徴があり、横地太郎塔や三光寺応安銘塔が露盤の表現を伴うのに対し、横地太郎塔群・神尾宝珠院（宇藤遺跡）例には露盤の表現がない。また神尾宝珠院（宇藤遺跡）4号台座は本格的な関東様式宝篋印塔の部材と考えられ（図版7－9）、反花座表現は本川根町永徳三年（一三八三）銘塔（図版7－6）より新相を示し、十四世紀

末～十五世紀前葉頃の年代が推定され、興嶽寺にも前後および後続する二点の台座がある（図版7－10・11）。

掛川市宗塔庵跡の伝曽我十郎塔は推定総高一六一㎝で、凝灰岩質？の石材が使用されており、細部形態の特徴からみて伊豆半島で製作された部材が搬入されたと見られ、特に反花座の蓮弁が長く立ち上がる点は伊豆半島南部の下田周辺の例に類似している（図版8－5）。これとほぼ同形態で僅かに小規模な宝篋印塔部材二個体分前後が隣接する本郷照月寺の原氏墓地に見られる（図版8－3・6，本間一九九八）。

菊川町三光寺跡裏の砂岩製大型基礎には「金阿弥陀仏」「應安六年（一三七三）一月四日」？銘があり、これと同一セットの可能性がある大型の軸・笠・相輪の破片も見られるが、石質や組み合わせに齟齬をきたす部材もあるため二m前後の二個体の宝篋印塔の存在が推定される（図版9－1）。これらの部材に台座を補えば、その規模は「永徳三季（一三八三）」銘があり総高一九四㎝をはかる本川根町小長井の伝小長井長門守墓（図版9－2，本間一九九八）と極めてよく似ており、僅か十年差の三光寺塔・小長井塔は同一に近い規格で製作された可能性が高い。

また掛川市本郷長福寺には伊豆の安山岩製と推定される異常に高い台座を伴う大型宝篋印塔がある（図版9－20）。その部材は軒上六段＋高い露盤、軒下三段の段数に加え、細長い円筒形の相輪が径の大きな請花に乗るのが特徴で、小山町菅沼の嘉慶二年（一三八八）銘塔（図版9－21）の相輪との類似から十四世紀末葉を前後するものと想われるが、こうした特徴の安山岩製宝篋印塔は小型のものも見られ、榛原町勝田中田氏宅裏山に細い相輪と軒上三段＋高い露盤、軒下二段の笠のセットがみられる（図版9－16）。この笠と同様な構成で砂岩製の小型のものが三光寺跡裏山にみられる（図版4－5・11）。十四世紀中葉～第3四半期頃、安山岩製大型宝篋印塔を模倣した砂岩製大型宝篋印塔が出現するとみられる。石材の在地化で新たな造塔階層の開拓が行なわれたためか小型化も急速に進むようで、大井川対岸、駿河西部域の藤枝市鬼岩寺の矢部隼人宝篋印塔は砂岩製で日坂石もしくは寺の裏山から産出する鬼眼寺石と推定され、「永徳元年（一三八一）七月二十日」銘がある。

相良町笠名の椀貸せ松旧在の砂岩製基礎は一窓横長の方形内抉内に「応永五年（一三九八）三月二十二日」銘があり（図版6－12）、これと組み合う笠は軒がやや外反し、軒下二段は内傾、頂部に露盤の表現をとどめる（図版4－14）。同様な形態・構成の砂岩製宝篋印塔部材は本川根町谷畑に、同様な砂岩製笠は掛川市本郷照月寺（図版4－15）、小笠町小堤城に隣接する林正院阿弥陀堂の墓地に見られる。これらと同様な形態の安山岩製笠が豊田町行興寺などに見られ（図版4－6）、その模倣品と考えられる。これらは十四世紀後葉～末に安山岩製宝篋印塔の小型化や型式変化と連動しながら砂岩製の小型宝篋印塔が出現したことを示しているが、藤枝市鬼岩寺・相良町笠名・谷畑例は笠部が伊豆の関東型式系の要素を示すにもかかわらず、いずれも基礎が一窓となる関西形式の影響を示しており、いわば関東・関西型式の折衷ともいうべき様相を呈している。特に鬼岩寺には永徳元年銘塔も含め、関西形式で反花座表現のある一窓式基礎が多く見られ、一宮市法圓寺中世墓（図版6－13・14）など三河地域の強い影響を窺わせ、これらが在来の関東形式の石塔に影響を与えたと考えられる。

反花座・框座を伴う台座は、関東形式に伴いこれを特徴付けるもので、花弁の彫りの深さや割り付けの変化から退化過程も跡づけられるが、関西形式系統では反花座のみからなる偏平な礎盤状の台座を伴うのが普通である。基礎についても横幅が広く低いものが台座を伴うのに対し、台座を伴わず縦長で底面に抉りのあるものへの変化もこれと対応していると考えられる。

天竜川東岸の豊田町池田に所在する行興寺には、熊野御前とその母の供養塔と伝える安山岩製宝篋印塔があり、それぞれ一五三㎝、一五六㎝を測る（図版9－23・24）。いずれも塔高全体の中で相輪高の比率が増大し、なお

かつ太くメリハリのない鈍重な作りとなっており（図版2－12・13）、基礎の二窓の内抉りが著しく縦長の長方形となっていること（図版6－6）、隅丸側面二弁の半花座は細工の退化が進行している（図版7－4）。こうした特徴は小山町甘露寺の応永七年（一四〇〇）銘塔（図版9－22）に後続するもので、十五世紀前半～中葉に降るものと推定される。磐田市住吉遺跡（磐田市教育委員会一九九三）や三光寺跡裏、照月寺墓地に見られる太く頂部が丸い花崗岩質砂岩の宝篋印塔相輪（図版2－16～19）はこの形態の影響下に出現すると考えられ、十五世紀前半～中葉に位置付けられよう。

一方十五世紀前半と考えられる凝灰岩質砂岩の部材には、露盤の表現がなく、軒と隅飾突起との段差が焼失し、隅飾突起の装飾は縦長だが線刻となる興嶽寺・天神森などの例がある（図5－13・14）。また井伊氏の領域である引佐町北岡中世墓では、十五世紀前半の常滑壺を伴う墳墓付近より長大な宝篋印塔相輪が出土している（図版2－14）。こうした長大な相輪は小笠町にも見られる。

三光寺跡裏では三河花崗岩製の宝篋印塔の部材一具が含まれ（図版9－3）、笠は外反する隅飾突起に二重の輪郭沈線を施したもので（図版5－24）、類似するものは三ヶ日町麻訶耶寺・幡教寺跡（図版5，本間一九九八）や愛知県一宮市法圓寺中世墳墓5号集石墓（図版9－4，一宮市教育委員会一九九五）にみられ、後者は十三世紀後半～十五世紀末までの複数の蔵骨器とともに花崗岩製宝篋印塔一具、一石五輪塔が出土している。

三光寺の花崗岩部材は、遠隔地からの搬入石材である点から横地氏滅亡の文明八年（一四七六）以前のものと考えた方が妥当と思われ、類例とともに十五世紀代中葉～後半頃の年代が推定され、遠江における関西系統の小型宝篋印塔の出現に三河以西の影響があることを窺わせる。三光寺例と同時期か前後する型式の花崗岩製宝篋印塔が愛知県岡崎市本宗寺の伝石川数正塔（昭和にはいって境外より移築。相輪・軸は別部材）に見られ、これより退化した型式が同寺の伝石川政康塔（図版9－11）で「文亀二壬戌年（一五〇二）」銘があり隅飾突起は垂直に近く変化している（図版9－13）。これに近い形態のものは掛川市本郷照月寺原氏墓地に見られ、原氏の滅亡した十五世紀末前後を下限とすると考えられる。なお本間岳人氏は伝石川数正塔をその没年である文禄二年（一五九三）に置き年代が下降し「古相を示す」伝政康塔に後続すると見ているが（本間一九九八）、十五世紀末～十六世紀初頭の砂岩製宝篋印塔では隅飾突起の内抉が退化し完全に線刻化している点からもむしろ組列は逆に考えるべきであろう。

十五世紀以降の砂岩製宝篋印塔は中型・小型のものが増大し二m以上のものは殆ど見られなくなる。隅飾突起の線刻は十五世紀末～十六世紀初め頃に横長からΣ状に退化していくのが特徴だが、これは西遠江周辺に限定されるようで、三河岡崎市大林寺の天文八年（一五三九）銘砂岩製宝篋印塔（図版9－15）では隅飾装飾が線刻化しているものの横長形で（図版5－37）、これは西遠江に多い花崗岩質砂岩部材の産地推定に示唆を与える。

掛川城跡本丸下層墳墓群は永正築城（一五一三前後）以前に当地に存在した中世寺院址（懸川山神宮寺か）に伴う石塔部材で、石材は非常に精良緻密な白色の花崗岩質砂岩から礫岩質の日坂砂岩まで様々である。報告書には笠一点（図版5－28）、相輪基部片一点（図版3－6）が図示されており十五世紀後葉～十六世紀初頭の年代が考えられる。このうち宝篋印塔笠は花崗岩質砂岩製で隅飾突起の内抉が完全に退化し単なる線刻となっているが、外周輪郭沈線は残存している（掛川市教育委員会一九九八）。

これに後続すると考えられるのが太田川上流の春野町豊岡下石切の二基の宝篋印塔で（図版9－8・9）、相輪頂部は宝珠形だが、断面が隅丸方形をなし、請花の線刻も形骸化（図版3－23・24）、笠は軒上三段軒下一段で隅飾りにΣ形の線刻を施すが外周輪郭沈線は消失している（図版5－30・31）。塔身には丸い月輪のみが施され（おそらく漆や金箔で彩色した梵字が描かれていたのであろう）、基礎は無窓で上部に二段を削り出しており、十六世紀初頭～前半頃のものと考えられる。

太田川下流域の中世港湾跡である福田町元島遺跡出土の宝篋印塔部材のうち、1号笠（図版5－29）は掛川城本丸下層のものに後続し、春野町豊岡下石切の二基の宝篋印塔笠に先行する。するとその実年代は十五世紀末～十六世紀初頭に位置付けられ、部材の状況から造立後さほど風化を経ずして埋没したとみられる。ここで注目されるのが明応・永正の地震津波との関係である。明応七年（一四九八）八月二十五日、静岡県南方海中を震源とするマグニチュード推定8.2～8.4という史上最大級の地震が起こり、房総半島から紀伊半島に至る太平洋岸に大津波が襲来、特に遠江は続く永正地震（一五一〇）の被害もあって、浜名湖の浜堤が切れ海とつながるなど大災害を被った（矢田一九九六・一九九八，家永一九九九）。1号笠がこの二回の津波のいずれかによって倒壊したとする想定が妥当であれば、年代決定の定点に加え災害史上の資料として注目されよう（桃崎一九九九）。

なお他地域の例であるが、佐賀県武雄市若木町秀岩寺の馬渡一族墓地にある天文癸巳（天文二年、一五三三）銘の馬渡秀岩塔（一七〇cm）と、弘治四年（一五五八）銘の妻の塔（一三〇cm）はともに相輪が隅丸角柱状で前者の宝珠は丸く高いが後者は退化しつぶれ、隅飾突起の装飾は線刻化している。こうした様式が十六世紀前半～中葉前後に西日本に広く盛行したことをうかがわしめる（武雄市教育委員会一九九八・大石二〇〇〇）。

掛川市峯遺跡では十六世紀後半の瀬戸大窯期の陶器と宝篋印塔の笠・基礎が出土し、笠は軒下が斜段となり（図版5－22）、基礎も極端な縦長形で、段の退化も進んでいる（図版6－17，戸塚一九九五）。二俣家墓地宝篋印塔（図版9－10）は、相輪は宝珠がつぶれ隅丸角柱状をなし（図版3－29）、十六世紀後半頃の年代が推定される。なお榛原町清浄寺の過去帳には、永禄十年（一五六七）、天正元年（一五七三）に二俣氏の夫婦が記載されており、これらの人物の墓塔の可能性も残る。

浜松城東南石垣の裏込め中から出土した宝篋印塔笠は、徳川家康が関東に転封され秀吉配下の堀尾吉晴・忠氏らが石垣・瓦葺化を進行した天正十八年（一五九〇）以前のものと考えられるが、直線状に外反した隅飾突起の粗い抉りが特徴で、中世末期の様相を示している（図版5－40，浜松市教育委員会一九九六）。こうした中世的な宝篋印塔は、大須賀町撰要寺の天正十六年（一五八八）銘塔（大須賀町教育委員会一九八一）を嚆矢とする伊豆安山岩製の江戸時代様式宝篋印塔の出現以降、急速に姿を消していくと考えられる。

(3) 一石五輪塔

大阪府貝塚市半田墓地の砂岩製応永六年（一三九九）銘塔が在銘最古で、南河内では千早赤坂村森屋墓地にある砂岩製嘉吉二年（一四四二）銘塔が最も古く、十四世紀末に大阪湾岸で出現し、十五世紀に近畿地方にまず拡がり、十五世紀後半には伊勢湾岸に拡散し、遠江や北陸に達するのは十五世紀末前後で十六～十七世紀にかけて多く造立されたと考えられる。現在までの報告例で最新の一石五輪塔は堺市経王寺の安政四年（一八五七）銘塔で、南河内の在銘最新は千早赤坂村小吹墓地にある砂岩製文政十一年（一八二八）銘塔であるという。木下浩良氏は、高野山の一石五輪塔を分析し、新旧の目安に石材の変化とともに「埋込式」→「ホゾ穴式」→「安置式」という変遷を設定し、地面に突き立てたものから、地面の上に置くものへと変化していくこと、次第に全長が長くなっていくことを指摘している（木下一九九二）。

遠江地域の一石五輪塔は、木ホゾ連結式の五輪塔と形状・時期ともに対応関係があると考えられる。当地で実年代の判明する最古の一石五輪塔は、掛川城跡本丸下層墳墓群の出土品で、厚く直線的な火輪と尖った空輪、さほど長くない安置式の地輪が特徴である（図版10－1）。この墓地は朝比奈氏による永正年間（一五一三前後）の掛川城築城に先立つものと考えられ、石塔類に著しい攪乱が見られないことから、普請直前の一五〇〇年代初めまでには一石五輪塔が出現していたとわかる。ただし出土した一石五輪塔はすべて白色の「花崗岩質砂岩」で、凝灰岩質砂岩の日坂石製品は宝篋印塔・五輪塔部材のみで一石五輪塔を含まない。日坂石の一石五輪塔出現は十六世紀以降であることを示唆するものであろうか。

小笠町正林寺には台石を伴う日坂石製の大型一石五輪塔があり、本体四九．七㎝を計る（図版10－11）。薄手で反りのある軒と長大化の途上にある地輪が特徴で、文明八年（一四七六）春に横地・勝間田氏との戦闘で傷死した今川義忠墓塔と伝承し、正林寺の前身である昌桂寺が創建された永正十四年（一五一七）頃に造立されたと推定される（河合一九九八）。

以上をふまえ横地城周辺を見ると、三光寺跡裏に二点の古式一石五輪塔がみられるほか、小川端渋谷宅裏石塔群にはきわめてバリエーションに富む一石五輪塔がみられ、掛川城本丸下層や正林寺のものとほぼ同法量・同形態・同石材のものを含んでおり（図版10）、磐田市大原墳墓群や一ノ谷中世墳墓群に近い組成を示している。菊川町内でも十五世紀末頃には花崗岩質砂岩の一石五輪塔が出現し十六世紀初頭以降に凝灰岩質砂岩の一石五輪塔が展開すると考えられる。

興嶽寺歴代墓所には脆弱な凝灰岩質砂岩（天宮石？）製の大型一石五輪塔があり、四面に梵字を刻んでいる（図版10）。地輪部に「天□」銘があり、天文（一五三二～一五五五）、天正（一五七三～一五九二）のいずれかと考えられる。この一石五輪塔は薄く反りのある軒と丸々と張った水輪部が特徴だが、水輪の最大径が火輪軒や地輪の幅より大きいものの方が石材からの加工工程が煩雑で、同じ幅のものは方柱状の石材にくびれを刻むだけでよいから、前者の方が古いタイプであると考えられる。

掛川城峯遺跡では十六世紀後半の一石五輪塔片が出土している（図版10－22）。全容が不明なのが惜しまれるが、地輪部が極端に長い埋め込み式の可能性が高い。当初は自立可能な安置型に近いものだったのが、次第に偏平で不安定なつくりとなり、自立不可能な完全な埋め込み式（または立て掛け式）になるようだ。一方この時期には極端に地輪部が短く、横幅の広い安置式も見られる。

浜松城では一五九〇年築造の南東石垣裏込より梵字を墨書した小型の規格品とみられる一石五輪塔が出土しており（図版10－27）、無文の一石五輪塔の多くは本来墨書を伴っていたと考えられる。十六世紀後半～十七世紀初めにかけて段横地公会堂の一石五輪塔群のような小型の規格品（図版10－28～33）が量産されるようである。

十六世紀の一石五輪塔がやや偏平でハツリ痕やノミ条痕を残す粗い仕上げのものが多いのに対し、十七世紀以降のものは彫整痕が丁寧に消され、のっぺりした角柱状の外観を呈する。袋井市春岡林光寺、市川家墓地の「寛永十二（一六三五）季」銘塔は全高七五㎝程で、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の種子を刻んでいるが、全高九七．二㎝に達する静岡市小坂安養寺（曹洞宗）の「元和二」（一六一六）銘塔では既に刻字が梵字から漢字の「地・水・火・風・空」に変化している（河合一九九八）。

三沢龍谷寺は刻銘や江戸期の覚書より石塔の被葬者と没年が判明する貴重な事例で、一石五輪塔は地輪部の長大化が著しく、埋め込み式やホゾ式、石龕内への立て掛け式とでもいうべき形状を示している。また石龕を伴うものは、一対となる夫婦の一石五輪塔を安置していたことが記録から判明する。慶安五年（一六五二）銘のものは俗名長太夫、法名華（花）岩永春庵主の供養塔で、出ホゾをそなえ方形の台石上に建てられたもので、「地・水・火・風・空」の刻字がある（図版10－33）。最大のものは寛文四年（一六六四）に没した法名源松宗本居士の供養塔で「空・風・火・水・地」を刻字し、石龕内床石の方形孔に差し込まれた下部を含めた総高は八〇㎝に達すると考えられる（図版10－34）。また現在精査していないが、菊川町上本所の陽法寺墓地には寛永前後ころの極めて大型の一石五輪塔が複数あり、夫婦墓を含むと考えられるが、いずれも「空・風・火・水・地」を刻字し、その総高は一m前後にも達する。

小笠町中嶺田の寺本家薬師堂裏手には空輪頂部が丸く火輪部が平坦な台形で表面が丁寧に仕上げられた中型の一石五輪塔があり、寛文十年（一六七〇）銘を有する。このタイプの基準資料として重要だが、寺本家は小笠町の議長もつとめた旧家であることから、一石五輪塔が近世名主クラスの墓に採

用された実例として注目される。掛川市子隣角皆英明氏宅墓地にも屋形形の石龕を伴い空風輪の頂部が丸く、各輪の彫りが浅い退化の進んだ一石五輪塔が見られ、同時期頃のものを含むと考えられる。なお三沢龍谷寺の寛文四年銘の大型一石五輪塔とともに石龕に納められていた小型の一石五輪塔は天和二年（一六八二）に没した法名柏窓妙松大姉の供養塔と推定されるが、火輪が台形である点が共通するが頂部がやや尖り退化が進んでいる（図版10－35）。吉田町能満寺境内の「天和三年（一六八三）」銘塔では、空風輪は先端が尖り大きく膨らんで括れはきわめて弱く紡錘形に境の溝を彫る程度となっているが、いまだ各輪の比率は均分である。ところが三沢龍谷寺の元禄七年（一六九四）造立塔・宝永四年（一七〇七）銘塔は空風輪がかなり小さくなり、細口瓶を思わせる急激なすぼまりを示している（図版10－37・38）。

以上、遠江地域での一石五輪塔は、出土遺跡の年代観や紀年銘資料からみて十五世紀後葉以降に出現し、本格的な造立は十六世紀前半～十七世紀代と考えられ、関西地方での型式変化が進行した段階で受容されたようだ。当初は安置式で、次いで埋め込み式が現れ、江戸期に入ってホゾ式や石龕が現れるようで関西地域とは様相が異なる。遠江内独自の編年と分類を進める必要がある。

V　石材について

(1)　石材産地と流通

横地周辺の石塔石材は、砂岩が圧倒的多数を占め九〇％以上に達し、大部分は菊川町域に隣接する掛川市日坂産と推定される。また、少数ながらも遠隔地より搬入された石材が用いられており、安山岩、緑色変岩、花崗岩、凝灰岩などの存在が確かめられる。

静岡県下においては、伊豆半島の安山岩や森町の天宮石などに石材産出地ならびに石工職人の存在形態や系譜、流通などについての幾つかの研究成果があるが、石塔石材との対比はいまだ途上である。一の谷中世墳墓群の報告書（伊藤一九九三）では、石塔材質主体をなす砂岩には花崗岩質砂岩と凝灰質砂岩の二種があるとしており、これらうち凝灰質砂岩は遠江国内の掛川市日坂や森町天宮などで産出したと推定されるが、伊豆地方でもこの種の石材を産出するようである。

白色緻密の花崗岩質砂岩は十五世紀以降の宝篋印塔や一石五輪塔などやや遅れて出現し、菊川町周辺など遠江東縁には少なく、掛川市以西に多い印象を受けるので日坂石よりも西方の地域に別な産地があるものと想像するが、森町の天宮石は泥岩もしくは凝灰岩質の脆弱な石材で硬質の花崗岩質砂岩とは特徴が異なる。憶測の域を出ないが、愛知県東部、奥三河の玖老瀬（くろせ）石、浦川石、蛭井戸石などが花崗岩質砂岩の産地候補にあげられている（野澤一九九五）。特に南設楽郡鳳来町の玖老瀬石は安定した良質の砂岩層が広く分布し、水陸交通の要衝に位置し搬出の便も良いことから広域な流通が推定されている。ただし現状では、原産地石材と製品の対比作業を殆ど行なっていないので、石材産地の特定は今後の課題である。

日坂砂岩（掛川市日坂）

遠江東部から駿河西部の石塔材に多用された砂岩の大部分は、掛川市東部の日坂から菊川町北部の公文名にかけて産出する通称「日坂石」であると考えられる。日坂石は灰緑色の大小チャート礫を多く含み空隙の多い粗性の礫砂岩から、微砂主体のキメ細い凝灰岩質砂岩まで様々な変異があり、風化や経年変化で含有鉄分が褐色に変色することもあるが、本来は淡灰褐色を呈する石材と考えられる。

日坂で現在も石工業を営む「石由」（＝いしよし，屋号）は現当主内田雅巳氏で十八代目を数える由緒ある家系で、遠江各地には「石工内田」と銘刻された近世石造物が残されているという。当家の内田美枝子氏によれば、昭和四十年代頃までは街道脇に位置する石丁場で発破で切り崩した石材の中から芯の良質な部分を灯籠や石塔に、質の悪いものは間知石や砕石などの土木資材に用いていたという。「日坂石」は周智郡森町～掛川市日

坂にかけて分布している第三紀中新世の倉真（くらみ）層群の天方（あまかた）砂岩層から産出している公算が高いという（野澤　九九八）。

なお現在の石丁場に近い日坂宮村耕地整理で高台より出土した宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔には、チャート礫を含む凝灰岩質砂岩、花崗岩質砂岩の両方が含まれており、やはり日坂に比較的近い掛川城本丸下層出土石塔にも白色できめの細かい花崗岩質砂岩が多く含まれている（戸塚和美氏に掛川市教委保管品についてご教示を得た）。日坂でも産出層位や地点によっては、花崗岩質砂岩のような石材も産出した可能性が残るが、花崗岩質と凝灰岩質の砂岩石塔は作風や製品、盛行時期や分布にも若干の相違が感じられるので、筆者は花崗岩質砂岩は三河産の可能性が高いと想像している。

天宮砂岩（森町天宮）

森町の天宮・橘・蓮華寺の八形山地区では、天宮石（あまみやいし）と呼ばれる、軟弱で泥岩もしくは凝灰岩質に近い砂岩が産出する。粒子が細かく軟質で、石塔などの加工が容易で、出来栄えも滑らかで美しい。その利用は古く森町飯田地区や園田地区の古墳石室材にも用いられており、石塔では近世の碑石墓や無縫塔などにしばしば用いられている。古老の伝承では、御影石のように水滴を吹き出す石を「生き石」、水分を石塔の表面に吹き出さない吸水性の高い石を「死に石」と呼び、太田川周辺では墓石には「死に石」を好んで用いたという。しかし吸水性が高く凍結作用による球状剥離で二～三〇〇年を経過すると風化崩壊してしまう短所があり、中世前期までさかのぼる遺品は現存していないという。森町三倉田能蔵泉寺に戦国～近世初期の一石五輪塔や寛文～延宝期の船底型墓石が残存している。三ケ日町摩訶耶寺には元禄期の船底型光背の西国三十三観音像が見られる。

一宮別当蓮華寺は、法然に師事した僧禅勝房ゆかりの浄土系の寺院だが、古文書類の検討によれば東国に多い法然系の念仏とは異系統で南都仏教の影響も窺える特異な存在であるという。市の立つ森山（三嶋大明神社山）南麓は太田川の河原で中世の津も隣接した。蓮華寺は鋳物師・番匠・土師・瓦師など、森の職人集団を支配していたことが文書類から窺え、中世以来石工衆にも採石の権利を与えていたとみられる。寛永十七年（一六四〇）の蓮華寺文書（『森町史』資料編五、蓮華寺関係資料151号）に、「八形山大ひらの尾崎にて、ふすま村の谷と申所に三郎左衛門（高木）石を切申候時、とかく申候は、寺一石役之分を何にても御用次第に仕るべしと申候間、ゆるし置候処其後石役不仕候間」とあり、蓮華寺に「石役」があって、一宮橘山の山役であった高木氏が蓮華寺山の石役も勤め、蓮華寺山石材の管理人として盗掘を取り締まっていた。また鋳物師が用いる鋳型の砂も付近から採取された。明治期まで石工であった天宮大上の竹島家の代々には「石峯道全上座・石心童子」などいかにも石工らしい法名が知られている。竹島家では蓮華寺八形山の東に延びる尾根を「石山」と呼び、採石権を持っていた。天宮大上の「石山」の北の谷を「石取場」と呼び、比高差四〇mに及ぶ採石場をなし、切り出した石は背負い子で屋敷内の作業場に運んで加工したが、竹島家では墓石の竿部分のみを製作し、橘の森松家が台座部分を作ったと言う。天宮石は寺院や神社、民家などの建造物の礎石・石段・石垣・石臼・庭石などにも利用された（『森町の棟札・金石文』）

緑色変岩（天竜川城流域か）

遠州地方では「青石」と通称され風化に強い硬質の石材で、碧玉質から緑色凝灰岩質まで若干の変異がある。中世前期の五輪塔では、奥横地慈眼寺に総高九〇cmを測る五輪塔一具を含む数個体分の部材が見られ、内田應声教院裏山の法然塚には五輪塔一具（空風輪は後補）がある。三光寺跡裏にも空風輪が見られるほか、神尾宝珠院の五輪塔火輪や小笠町小堤城五輪塔もこの石材の可能性がある。森町一宮片瀬薬師堂、同大久保共同墓地、円田大城戸、飯田崇信寺墓地（『森町の棟札・金石文』）、袋井市友永積雲院の伝源朝長五輪塔、宇刈春岡西楽寺五輪塔、春岡用福寺伝橘逸勢墓、磐田市鎌田兵衛墓石塔群（かつて五輪塔に永仁七年（一二九九）銘があったと

いうが現在確認できない）など太田川流域に集中して遺品が見いだされ、榛原町中石塔群・勝田伏方石塔群から島田市医王寺墓地・藤枝市鬼眼寺など大井川流域まで広く分布し、未確認だが清水市一乗寺の五輪塔（大川一九三）も形態からみて緑色変岩製の可能性が高くこれが現在知られる東限である。

西方では緑色凝灰岩製と報告されている愛知県一宮市法圓寺中世墓の五輪塔も同質の石材である可能性が残る。浜北町宮口大屋敷など天竜川流域まで広く分布しており、宮口大屋敷の五輪塔は九〇㎝を測り（久野一九八七）、慈眼寺例とほぼ同規模同形態で規格品が定量的に供給されていたようである。緑色変岩の最大の遺品は、相良町平田寺の延慶三年（一三一〇）沙弥如蓮銘の異形宝塔であるが、相輪上部のみ砂岩製部材で補っており、遠隔地で製作され搬入されたと考えられる。よって緑色変岩は伊豆安山岩に先行して出現し、別個の技術系譜下で使用された石材と考えられる。塔下に十三世紀前半生産の常滑の蔵骨器を伴う愛知県一宮市法圓寺4号中世墓の五輪塔（図版2－5）はよく似た色調の緑色凝灰岩製で、緑色変岩の使用開始はこの石材を強く意識していたと考えられる。また緑色変岩五輪塔とほぼ同形同法量の砂岩製五輪塔が混在して見いだされる袋井市用福寺の「橘逸勢墓」五輪塔例から、その技術は初期の砂岩製五輪塔に継承されたと考えられる。

この種の鉱物は地質図によれば小規模局地的な露頭が点在する「緑色岩」に相当すると考えられ、広い分布を示す基盤層群や岩盤の狭間に局地的に存在し、なおかつそれらが点在しているため産地の特定は難しいが、石塔の分布からみて天竜川や太田川水系などの水蝕で形成された小露頭に由来すると考えられ、いまのところ天竜川上流の産出と推定されている（『森町の棟札・金石文』）。

なお緑色変岩五輪塔の所在地を結んでいくと、川上谷田寺・川西赤堀晏平氏宅裏・地蔵堂・小沢美喜夫氏隣祠と高橋、小笠町小堤城・棚草星ケ谷と平川、慈眼寺・三光寺跡裏と横地、本郷照月寺と和田岡、春岡西楽寺、上山梨用福寺と宇刈、友永積雲院、宮口大屋敷と二俣が比較的近く、すなわちその分布は、「塩の道」のルートと隣接関係を有している。近世には、遠江東部の海岸部で生産された海産物と塩は、信濃地方を中心に牛を使って輸送販売され、これを「牛荷（ほっか）」と称し当地の有力な財源であった。牛方は一頭の牛に六〇kgくらいの塩を乗せ、強い牛を先頭に、六頭を単位として搬送し、帰路では彼地の特産品や酒、山岳茶などを持ち帰った。これらを扱う定期市が開かれ、虚空蔵（小笠町高橋）が有名である（松本一九七九）。浜岡町桜ケ池の底が信濃諏訪湖や善光寺とつながっているとする伝承（平一九六二）などから勘案して、この「塩の道」は中世からそれ以前まで遡る可能性が高いと考えられ、よって緑色変岩五輪塔の部材の一部は、天竜川上流から遠州への塩の帰り荷として牛の背に乗せられ陸路を搬送されてきた可能性が考えられる。

この石材は中世の五輪塔だけでなく、十七世紀の一石五輪塔（金谷町利生寺裏墓地）・近世墓碑（河城・菊川駅前墓地）への使用が確認され、中世前期・近世の石丁場の存在が推定されるが、いまのところ宝篋印塔への使用例が知られておらず、中世後期にはあまり利用されなかったようだ。

輝石安山岩（伊豆半島周辺）

輝石安山岩は黒灰色～暗紫色硬質の石材で、石塔は十三世紀末に箱根周辺で出現する。永仁四年（一二九六）の箱根山宝篋印塔、箱根町永仁三年（一二九五）銘五輪塔はその初期の遺例である。硬質石材加工技術の導入の背後には南都西大寺流の真言律僧、忍性の傘下にある大蔵派石工の関与が推定されている。沼津市南方、内浦湾奥に位置する豆州君沢郡重寺村の室伏家は中世以来の旧家で、慶長以降の文書多数が伝わり、一〇〇通にのぼる淡島・大洞の石切出しに関する記録が含まれている。淡島からは輝石安山岩（通称堅石）、凝灰岩（通称伊豆石）、玄武岩の柱状石（通称扇石）を産出し、現在も西海岸を中心に矢穴を残す石が散在している。文献による石切出しの初見は正保三年（一六四六）で、駿府城・久能山・江戸城・浅間神社などで

地震・風水害による石垣の破損修理の用材を供給したことが記録にあるが、実際はそれ以前から採掘されていたと考えられる（高本一九八一）。当地をはじめ伊豆では輝石安山岩と凝灰岩が隣接した丁場から採掘され、硬質石材加工技術の軟質石材への転移が確かめられる。淡島も含め江戸城関連の石垣石などを切り出した石丁場跡の分布状況より、近世以前からの丁場として①真鶴半島周辺、②伊豆半島東海岸沿い、③伊豆半島北西部の駿河湾沿い、などが挙げられる。金子浩之氏等によれば、伊豆半島内での石材には大別して安山岩・玄武岩系の硬質石材と、砂岩系の軟質石材（通称「沢田石」）が代表的）の大別硬軟二種がある。『伊豆石』は砂岩系のものを、『伊豆青石』は安山岩系の石材を指すという（金子・岡田一九九四）。

河津町今井浜海岸は近世以降の石丁場の一例で、海岸の直径数mを越える安山岩塊に矢穴が観察され、岩塊を割り取って石材を生産したと考えられる。中近世の石丁場は、土中から掘り出す手間が不要で、水運の便の良い海岸に立地することが一般的であったと考えられる（金子一九九五）。

安山岩製石塔は、菊川町内でも三光寺跡裏で宝篋印塔、段横地公会堂・常泉寺、西横地幢照寺、小川端加茂橋北方墓地などで五輪塔空風輪が確認されているがさほど多くない。輝石安山岩製の石塔の分布は、国府のある磐田市見付周辺の一の谷中世墳墓群遺跡（加藤一九九三）出土例や西光寺宝塔（本間一九九八）、見性寺五輪塔のほかは、榛原町や相良町など沿岸部に偏って見いだされ、内陸部に入ると急激に減少する。遠江地域に供給された安山岩の産地は伊豆半島東海岸が候補に考えられ、製品搬入や石工の出職が考えられる。遠隔地石材の搬入は一見コスト面で不利にみえるが、福井県の若狭湾沿岸、高浜町の日引石（安山岩質凝灰岩）は、松浦党など前期倭寇の船の帰り荷のバラストとして長崎県五島列島・鹿児島県坊津までひろく搬入されたと推定されている（大石一九九七）。また中世には港湾使用料として堤防修築の用途に船のバラスト石を「置石」の名目で徴収する場合があった（網野一九九二）。バラスト材であれば、輸送コストは非常に低かったと考えられ、伊豆安山岩も廻船ルートの副次的な輸送物として持ち込まれた可能性がある。

凝灰岩（伊豆半島周辺ほか）

三光寺跡裏に凝灰岩製五輪塔地輪が一例のみ認められる。石質は空隙が多く白色を呈する。白色の凝灰岩は菊川流域の白岩石が横穴墓内の石棺に用いられている例があるが、脆弱で石塔部材の製作には耐えないという。また愛知県鳳来町門谷平沢家墓地の十六世紀後半頃の石造宝塔は、奥三河産の凝灰岩製とみられるが石質は三光寺址のものと異なる（野沢一九九五）。一方伊豆半島周辺では安山岩と凝灰岩が一連の丁場から産出する。伊豆長岡町の大北横穴群では「若舎人」銘をはじめとする古代の火葬石櫃に白色凝灰岩が用いられている。なお近年の沼津市霊山寺の石塔調査によれば、若干の安山岩製空風輪を除くと嘉元二年（一三〇四）・正和三年（一三一四）銘混合式塔、元亨三年（一三二三）の成真五輪塔を含む大型石塔部材の大部分は凝灰岩（伊豆石）製であると報告されている（吉沢一九九八）。伊豆地方からの搬入石材は輝石安山岩ばかりが目につくが、現在石材産地を確定できない掛川市本郷宗塔庵宝篋印塔は、その形態からみて伊豆凝灰岩の可能性が十分にある（本間一九九八）。遠江の砂岩製大型宝篋印塔の出現背景についても、安山岩だけでなく凝灰岩からの技術移転を想定しておく必要があろう。

花崗岩（愛知県岡崎市中目産か）

掛川市長福寺境内には花崗岩製で梵字を刻んだ大型の五輪塔があり、かつて完形で長福寺裏山古墳の上に立っていたが、地すべりで崩落し空風輪・火輪を失い移築されている。掛川市本郷照月寺は原野谷川流域の原荘を所領とした地頭原氏の菩提所で、花崗岩製の大型五輪塔がある。これと同様な五輪塔は豊岡村永安寺にもある。三光寺跡裏墓地では、ほぼ一具に復元しうる花崗岩製宝篋印塔部材四点が含まれている。この宝篋印塔は軒が強く外反するなど尾張・三河地方の十五世紀頃の遺品と酷似しており、「三河石」・「岡崎石」と呼ばれる岡崎中目の花崗岩製品が搬入されたと考えら

れる（池上一九六六他）が、同様な花崗岩製宝篋印塔は遠江西端の引佐郡三ヶ日町麻訶耶寺・幡教寺跡に見られ、特に幡教寺は石塔部材の大部分が花崗岩で占められ、セット関係の判明する個体が複数存在している（本間一九九八）。また豊川中流域の愛知県一宮市法圓寺中世墳墓5号集石墓（一宮市教育委員会一九九五）では十三世紀後半～十五世紀末までの複数の蔵骨器とともに同様な花崗岩製宝篋印塔一具が出土しているほか、五輪塔部材の大部分は五輪塔で占められている。なお一ノ谷出土の石塔石材を分析した伊藤通玄氏は、花崗岩・花崗岩質砂岩・凝灰質砂岩を愛知県東部（設楽地方）の産出と見ている（伊藤一九九三）が、法圓寺や幡教寺の状況からみて、豊川およびその支流域にも花崗岩の産地がある可能性を想定しておく必要がありそうだ。なお尾張域の愛知県瀬戸市の赤津長根窯では鎌倉後期の窯址に隣接して古い石切り場の跡がある（瀬戸市埋蔵文化財センター一九八一）。

VI　調査の問題点

(1)　横地慈眼寺と内田應聲教院五輪塔の問題点

－緑色変岩石塔と浄土宗と塩の道

菊川町内最古の石塔は、奥横地慈眼寺にある緑色変岩製五輪塔で、四面に薬研彫りのしっかりした梵字を彫っている（図版1－2）。全高九〇．一cmを測り慈眼寺開基の信寂の墓と伝承する。法然が八十歳で入寂した建暦二年（一二一二）、栂尾の高辯（明恵）は『摧邪輪』、更に翌三年に『摧邪輪荘厳記』を選して『選擇集』を批判した。これに対して信寂房は『慧命義』を著わして論駁した。信寂は寛元元年（一二四三）横地に下り、寛元二年（一二四四）三月二日当地で没したと伝える。

『法然上人行状記』によれば、法然は弟子の「眞観房感西」と「西傳」ら二名を伴い浜岡町桜ケ池を訪れ、大蛇となって棲息していた師の皇圓阿闍梨を念仏で成仏させたと伝える。これはもとより史実とは考えられないが、眞観房感西は内田應聲教院の開基で法然に先立ち正治二年（一二〇〇）閏二月六日に四十八歳で没した伝える。應聲教院裏山山林中の古墳の上に「法然塚」と通称される高さ一m弱の五輪塔がある。慈眼寺と対照的にあまり知られておらず訪れる人も稀だが、空風輪は砂岩製で後補と思われるが、火・水・地輪は緑色変岩で、水輪のみ四方に梵字を刻む。水輪は球状に近く、梵字は慈眼寺のものに比べ薬研彫が崩れているので、若干時期が下降するとみられる。

西傳は浜松市西伝寺の開基で、法然の遺骨を持ち帰って境内に法然塚（五輪塔）を建てたと伝え、念仏教団迫害（嘉禄の法難）の受難者の一人と目される。また『法然上人行状記』にみえる遠江出身の「西蓮」と「西傳」を同一人物とみる説もある（平一九六一）。なお『円通寺文書』「浄土惣系図」では「西蓮」と法然面授の弟子である播磨国朝日山信寂房を同一人物かとしている。おそらく西蓮は横地氏、感西は内田氏などの出身者で天台僧出身であったと想像される。なお『法然上人絵伝』巻四十五に、法然の弟子隆寛律師が見付に滞在した折には、近隣の地頭が結縁のため参集したといい、浄土宗の勢力は遠江を広く覆っていたと考えられる。こうした法然門徒の開基を伝える寺院には緑色変岩の古式五輪塔がしばしば見られ、五輪塔と浄土宗布教の関係が推定されるが、大日如来の三昧耶形である五輪塔が真言密教の産物である点を重視すれば、浄土宗が中国の浄土教学や南都仏教・真言密教を摂取して変質し、専修念仏を放棄して兼学を強める一二五〇年代以降に出現したと見るべきで、十三世紀後半～末という塔の年代観もこれに矛盾しない。

袋井市上山梨の用福寺には、承和の変（八四二）の主謀者として伊豆に流される途中に遠江で病死した橘逸勢（？～八四二）の供養塔と伝える五輪塔群があり、薬研彫りの梵字を刻む緑色変岩の五輪塔部材に全く同型・同法量の砂岩製部材が混在して見られる（『袋井市の文化財』）。

袋井市友永積雲院の源義朝・兄の義平・朝長の三人を祀ったと伝える三基の五輪塔があり、平治の乱（一一五九）で自害した朝長の首塚と伝える。

建久元年（一一九〇）年、頼朝が上京に際しこの地に立ち寄り兄朝長の墓へ参ったという（『袋井市の文化財』）。

磐田市鎌田、太田川西岸の台地縁に位置する鎌田兵衛の居館の伝承地で付近の堂内に緑色変岩製五輪塔が三基分以上集積されている。火輪が高く十四世紀初頭前後のものと思われる。これらのうちにかつて永仁七年（一二九九）銘が判読されたというが確認できない（日野一九六八）。

以上のように遠江東部から天竜川の両岸にかけては、鎌倉後期に遡る緑色変岩五輪塔が広く分布しており、これを当時の浄土宗の興隆と結びつけて理解することが可能であろう。

なお緑色変岩五輪塔の分布は、「塩の道」のルートと隣接関係を有している。小型の部材の一部は、天竜川上流から遠州への塩の帰り荷として陸路を搬送されてきた可能性が考えられ、また法然と弟子の伝承を伝える桜ケ池の底が諏訪湖や善光寺とつながっている伝承があるが、塩の道は善光寺参詣ルートとも重複していたと考えられる。

『南無阿弥陀仏作善集』によれば東大寺大勧進となった重源も一一六〇～七〇年代頃に二度善光寺に参詣したことを記しているが、善光寺は治承三年（一一七九）に完全に焼失し、頼朝の命で復興され建久二年（一一九一）に再建した経緯がある。伊豆走湯山の天台僧で法然の高弟であった浄蓮房源延は、建久六年（一一九五）以来毎年三度信濃善光寺に参詣し、法然門下と善光寺信仰は密接な関係があった。このため法然系念仏も善光寺参詣ルートに展開し、その過程で緑色変岩五輪塔と結びついたのであろう。

法然系念仏と善光寺信仰の関係について今堀太逸氏は法然を天台円頓戒僧として捉え、後継者たちによって法然と俊乗房重源との関係が強調されたことを明らかにし、法然系の念仏拠点として走湯山権現があげている。今堀氏はこうした法然流が東国布教の過程で法然の戒律と念仏、重源との関係や宇都宮氏ら東国武家の帰依を強調したとみている（今堀一九九五）。牛山佳幸氏は善光寺縁起の分析を通じて時衆と極楽寺律僧の競合や律僧の善光寺信仰を明らかにしている（牛山一九九六）が、特に善光寺信仰を担った時宗は天台宗の古義の影響を受けた時宗解意派であった。すなわち善光寺は、あらゆる宗派の尊崇の対象であったが、鎌倉前期の浄土宗、鎌倉後期の時宗が特に深いかかわりを持っていた。

愛知県一の宮市法圓寺は、寺伝によれば十五世紀前半に隆尭法印によって建立された天台宗寺院と伝承し、その後戦火により焼失、百年間無住の後、達空通元上人により浄土宗寺院として再興されたと伝え、境内に「当寺開山通元上人」「弘治三年（一五五七）十月三日」と陰刻された宝篋印塔基礎があるが、境内の発掘で多量の石塔・集石墓および十三世紀前半以降の火葬蔵骨器が出土し、少なくとも十三世紀中葉～後半の早い段階には墓地の形成が開始されたとみられ、また瓦が出土している点から墳墓堂の存在を推定する見解もある。墓地内最古の石塔は緑色変岩と考えられる五輪塔で、出ホゾある空風輪と水輪に蓮座と月輪で荘厳された梵字を刻む点が特徴で、十三世紀後半から十四世紀初め頃のものと考えられる（図版1－1，一宮市教育委員会一九九四）。こうした状況は慈眼寺境内の状況と一致しており、この寺院も、本来は浄土宗ないし天台系浄土信仰の菩提所として成立した可能性が高いものと想像される。

緑色変岩製の石塔に紀年銘を残す古い作例に、小笠郡相良町大江四六〇番地の平田寺裏山墓地の石造宝塔がある（図版8－1）。平田寺は臨済宗妙心寺派、足利尊氏の叔父にあたる龍峯宏雲の開山で、上杉憲藤の開基になる。宝塔は現在収蔵庫に収められており、緑色片岩製で全高一九五cm，相輪頂部は丸く下に請花露盤に格狭間。また塔身には各面二窓ずつ舟形龕を備える。また台座に格狭間表現あり。露盤・台座とも格狭間は線刻で彫り窪めていないのが特徴。中央作とはいいがたいものの、地方作としては秀逸である。格狭間内部に願文によれば「延慶三年（一三一〇）庚戌正月　日　願主沙弥如連」と二行の銘文が刻まれている（川勝一八七三，本間一九八八）。紀年銘塔の確かな例としては遠江最古で、相良庄を本願とする御家人一族

のうち、肥後人吉庄西遷の後も相良庄に残留した相良頼綱の供養塔とみる見解がある。

なお肥後相良庄にあたる熊本県玉東村西安寺白山宮の裏手の相良氏墓地には西遷した相良氏の石塔があり、中世の板碑群が散在する中に、「奉造立　五輪率塔婆一基　正嘉元年（一二五七）丁巳八月日　（アン）　当寺大檀那　遠江国住人相良五郎　左衛門入道浄信」銘五輪塔がある。凝灰岩製、総高二三〇cm。五輪四面には月輪を陰刻し、種子を薬研彫りし、地輪の西面、アンの右左に銘文がある。

相良家譜によれば、同氏は藤原南家乙麻呂流、遠江守維兼の孫周頼が遠江国榛原郡相良荘園に土着して相良氏を称し、建久九年、その子孫長頼が、肥後球磨郡の地頭職に補せられて人吉荘に赴き、肥後の相良氏となった。その子孫頼平が分れて玉名郡に住して山北五郎左衛門尉を称したと言うから、この正嘉塔の銘に「相良五郎左衛門入道浄信」とあるのは山北頼平と推定されている。左に総高一五八cmの五輪塔があり、「奉造立　五輪率塔婆一基　正応元年（一二八八）歳次戊子七月日（アン）当寺大檀那　遠江国住人相良三郎　左衛門入道浄□」。右に総高一五八cmの五輪塔があり、「奉造立　五輪塔婆一基　嘉元二年（一三〇四）甲申八月日（アク）当寺大檀那　遠江国住人相良三郎　左衛門入道浄位」。南に地輪・水輪のみが原物、火風空輪はよせ集めの総高一三五cmの塔があり、地輪に銘あり。「右志趣者三宝□□□…　沙弥□□□□…　為現当之□地子□□□□…　安□□□□…　（アン）　豈文仲二年（一三七三）癸丑八月中□（旬カ）」ちなみに文仲二年（一三七三）は南朝年号である。六基中最南端に総高一三〇cmの寄せ集め塔があり、「洛陽六波羅住　諸岡三郎左衛門　入道沙弥沙弥定智（バン）　嘉元二年（一三〇四）壬辰七月　九日酉剋入滅生年六十八」銘がある。このほか同一場所に、嘉元二年（一三〇四）七月の宝塔と八月の五輪塔の二基がある（千々和一九七三）。

以上、西遷した相良氏は十三世紀中葉には五輪塔造営を開始しているが、これと遠江の五輪塔出現に関係があるのか、興味が持たれる。また一三〇〇年代の相良荘で嘉元二年（一三〇四）七月銘の宝塔が造営されている点からすれば、平田寺の宝塔もこの影響下にある可能性があろう（千々和一九七三）。

緑色変岩のこの種の五輪塔がいつごろまで使用されたかははっきりしないが、掛川市西郷の観音寺には緑色変岩？製で「仰謄祀斯者　永清滅於罪垢　乃至法界全生　同徳智者也　冥莱在丙戌　貞和二稔（一三四六）朱夏　王戌菩薩戒　光明心」銘のある五輪塔地輪とおぼしき部材があり、十四世紀中葉かそれ以降まで遺存していたと考えられる。

(2) 三光寺裏墓地宝篋印塔について

－阿弥陀名号石塔と時宗の関係について

三光寺跡裏の輝石安山岩製宝篋印塔は基礎の窓部に「見阿弥陀仏」「文和四年（一三五五）卯月十日」と刻まれている。この宝篋印塔は、榛原町清浄寺裏山の勝間田氏一族の墓所とされる石塔群の中の観応二年（一三五一）銘混合式塔と笠・基礎・台座に極めて共通点が多い。

また砂岩製大型基礎に「金阿弥陀仏」「應安六年（一三七三）一月四日」？銘がみられ、これと同一セットの可能性がある大型の軸・笠・相輪の破片も存在する。これらの部材に台座を補えば、その規模は「永徳三季（一三八三）」銘があり総高一九四cmをはかる本川根町小長井の伝小長井長門守墓（本間一九九八）と極めてよく似ている。

榛原郡榛原町道場所在の雲海山清浄寺は、現在浄土宗であるが、当初は時衆道場として弘安六年（一二八三）頃の開基を伝える勝間田氏の菩提寺である。藤井学氏の紹介した内閣文庫所蔵の「時衆末寺帳」には道場南方の鹿島村に証誠寺があり、四石八斗の除地があったと記されており、清浄寺の前身とみられる。このほか遠江東部では、横地の三光寺、相良の清浄寺、見付の省光寺・西光寺などの時衆寺院の記載がある。清浄寺の裏山には勝間田氏一族の墓所とされる石塔群があり、もと裏山一帯に散在していたのを、村人たちが今の場所に集めてまつったという。石塔群は中央部に比較的大きい混合式塔が八基立ち、周辺には小五輪塔が数多く見られ、いずれ

も輝石安山岩製である。混合式塔二基の基礎に刻銘があり、うち総高一・一二mのものに「観応貳年（一三五一）願主　智阿弥陀佛四月四日」の刻銘がある。総高一・一五mのものに「住一房　建武四年（一三三七）　正月八日　奉造塔　文和二年（一三五三）　四月八日」とみえ、建武四年没の住一房の供養塔として十六年後の文和二年四月八日に造立したものである。榛原町にはこの他にも中所在栗原富美子氏所蔵宝篋印塔台座に「観阿弥陀仏　正和元年（一三一二）壬子七月廿九日」、静波鈎学院所蔵の宝篋印塔台座・五輪塔の寄せ集め塔に「也阿弥陀仏　元徳四年壬申（一三三二）　四月三日奉建石塔□□□□四月□」とみえる。

これらの石塔に見える「～阿弥陀仏」とは、時衆の信徒に授けられた阿弥陀名号であると考えられ、一三一〇年代前後から阿弥陀名号を刻んだ時宗門徒の造塔が始まるようだ。

阿弥陀名号は一般に遁世者の称号で浄土真宗や浄土宗では殆ど用いず（金井一九七五・水上一九六九・梅谷一九八二）、石塔より後の時代であるが、横地三光寺は『時衆末寺帳』にみえ、横地三光寺も時宗総本山である神奈川県藤沢市の清浄光寺の末寺であった。

横地・勝間田氏と時衆の関係については、『他阿上人法語』に「延慶三年（一三一〇）九月の頃、熊野より下向に、遠江鎌塚の宿にて、勝田証阿弥陀仏（長清）越前入道左近太夫蓮昭まうでて十五番の歌合申行ふ侍けるに…（中略）…同時、横地九郎左衛門入道新西、我亭へいれ奉りて後に奉りける」とみえ勝間田氏の屋敷を訪れ、遠江鎌塚の宿で「横地九郎左衛門入道新西」と歌合をした記事がある。勝田証阿弥陀仏とは『他阿上人和歌集』に「慈阿弥陀仏（勝田孫四郎實長）」とみえる勝田長清で『夫木和歌抄』の撰者として知られ、熱心な時衆信徒であると同時に歌人として遊行二世他阿真教と親交があった。

神奈川県藤沢清浄光寺の『時宗過去帳』に勝田の裏書きのある僧尼として「文和五季五月十一日　也阿弥陀仏」（一三五六）「康安二年五月二日　也阿弥陀仏」（一三六二）「貞治四年十一月十九日　也阿弥陀仏」（一三六五）「貞治四年十一月十九日　生一房」（一三六五）「応安四年十月廿九日　大一房」（一三七一）をあげる。元徳四年壬申（一三三二）の也阿弥陀仏と文和の也阿弥陀仏は残念ながら別人のようである。

今枝愛真氏は勝田（勝間田）氏と時宗の関係を詳細に検討し、『往古過去帳』には証阿弥陀仏（長清）、慈阿弥陀仏（実長）、戒仏房の名が現れないことから、也阿弥陀仏・生一房・大一房などの僧尼は、勝田一族が建立した時宗寺院の止住時衆の名であろうと推定する。『往古過去帳』には時衆僧尼は記載されるが、いかに有力な檀越でも在俗のものは記載されないのが原則であったようで、たとえば甲斐国一条道場一蓮寺について裏書きのあるものは、歴代住持の法阿弥陀仏はその名が記載されるが、大檀越の一条氏を始めとする武田一族の名は記載されず、それらは「一蓮寺過去帳」に記されている。証阿弥陀仏などの勝間田一族の名も、おそらく勝間田一族の建てた時衆寺院の過去帳に記されていたと考えられる。清浄寺には天正十一年（一五八三）から書継がれている折本の過去帳が伝えられ、見返しには三十一世遊行上人他阿上人の六字名号が真行二様で書かれている。同寺ではこの過去帳を二冊目のものと言い伝え、最初の一冊目は失われたと伝承するが、同寺がなかごろに荒廃して、第三十世住持のとき再興されていることから考えると、この過去帳は再興後のものとみられる（今枝一九六七）。なおこの過去帳の冒頭には横地氏の連名があるが、いずれも「横地…阿弥陀仏」と阿弥陀名号がある。横地三光寺跡裏石塔の「見阿弥陀佛」「金阿弥陀仏」塔についても、三光寺もしくは清浄寺の過去帳に記載されていた横地氏一族の中で時宗に帰依した人物の墓塔か供養塔と考えられる。神奈川県当麻無量光寺には一遍廟塔を含め時宗歴代遊行上人の墓塔があるが、

二世真教以下の他阿上人の墓塔はいずれも関東形式台座・反花座を具える宝篋印塔で、南北朝～室町頃の様式を示している。遊行上人墓塔への宝篋印塔の採用を規範として衆僧や在俗の檀越もこれに倣ったようで、時宗末寺では、宗祖をまねて墓に宝篋印塔を立てる風が行なわれたようだ。勝間田氏は鎌倉末の元弘の乱に際しては伊賀路より赤坂城攻めに加わった。建武一統が破れたあとは足利尊氏に属して転戦し、九州まで尊氏に従い、観応の争乱には足利直義側に、のち尊氏側に属し、室町時代を通じて遠江の有力武士として活躍、一族からは将軍近習も輩出している。

『楠木合戦注文』(『正慶乱離志』)によれば、元弘三年(一三三三)正月、鎌倉幕府が河内千早城を攻めた時、これに従う時衆は二百人もいたという(今枝一九六七・大橋一九七三)。また『金台寺文書』の「他阿真教書状」は遊行二代の真教が元弘三年(一三三三)、遠江勝田蓮昭に宛てたもので、「鎌倉ハをひたゝしきさはきにて候つれとも、道場ハ殊に閑に候つる也、其故ハしけく来候殿原ハ皆合戦の場へ向候、これハ留守の跡にて無別事候、たゝかひの中にも、よせ手城のうちともに皆念仏にて候ける、としうち(=同士討)したりとて、後日に頸めさるゝ殿原、これの御房達はまへ出て、念仏者にハこれゝを皆見知して、人々念仏の信心、弥興行忝候、命延候とは可申承、あなかしく、南無阿弥陀仏、五月廿八日(元弘三年)　他阿弥陀仏(真教)　証阿弥陀仏参(勝田蓮昭)」とあり(静岡県一九八九)、横地・勝間田氏は戦いの中で時衆との接点を持ったことを窺わせ、赤坂城攻めや南北朝争乱に参加した際は、時衆を具していたと考えてよかろう。

観応年間(一三五〇―五二)には「軍陣に相伴う時衆の法様」がつくられ、従軍僧たちに与えられたと伝えるが、応永六(一三九九)年十一月二十五日付、他阿弥陀仏時空の教誡状(七条金蓮寺旧蔵・現東山長楽寺保管)によれば、その内容は「今は見および、聞およべる時衆も不レ可レ有」とあり、一旦失われ、同年改めて「心得らるべき条々」を定めたという。「時衆が軍陣に同道するのは十念一大事のためであるから、弓矢のことで使者となってはいけない」「軍隊においては護身のため鎧甲を身に付けてもよいが、弓箭兵杖を手にして殺生してはならない」「旦那の一大事(戦死)を見届けるのに身体がひもじくては叶わないから、食事はいつでもあるにまかせて食べておけ」等々教誡状は従軍僧に与えられた戦陣訓をなす(今枝一九六七)。

鎌倉後期、得宗体制下の社会の権威・秩序の維持装置として律系葬送集団が死を荘厳したのに対し、時衆の顕在化は鎌倉幕府滅亡から南北朝にかけて顕著で、戦乱、それも遠隔地への転戦という非常時に即したかたちで展開する。彼らの存在を支えたのは、死は恐れぬが地獄墜ちを恐れる中世武士独特の精神構造と、時局に叶った機動僧団の必要性であった。

時衆は従軍僧として、合戦の後に戦傷者の治療にあたる従軍医であるとともに、檀那の一大事(討死)に際しては十念を授け、戦死者を葬送し縁者に遺骨を届けその最後を伝える葬送集団としての側面ももっていた(大橋一九七三)。また時衆には戦時のつれづれを慰める芸能者も含まれており、のち守護大名や国人領主の軍使や芸能の奉仕者たる同朋衆となったものがおり、室町幕府でも将軍の近従として制度化された(村井一九七九・北西一九八七)ため、文化集団としての時衆の貴族化や将軍の帰依にもつながる。あるいは横地城の作庭に善阿弥が招かれたとする説も傾聴に値する(松本一九八九)。

なお時衆の葬送とのかかわりの具体例は、『中原師守記』中に師守の父師右の卒去前後の条にみえる。貞和元年(一三四五)三月四日、その四七日の墓参の折、墓前で参会の人々を挙げたなかに、「又時衆二人　成一房経仏房同参之、」とあり、この時衆二人は三月十一日条の記事より尼であったことが分る。なお墓前での所作は宝篋印陀羅尼、光明真言、阿弥陀経、念仏等である(水上一九六九・湯山一九七五・貝島一九七九)。これらのうち宝篋印陀羅尼、光明真言、阿弥陀経などは、供養に伴う造塔と密接な関係を有するものであり、時宗系の宝篋印塔・五輪塔や板碑造立には、こうした所作を伴っていたことが考えられてくる。宝篋印塔・五輪塔の「混合式」塔についても、二次的にせよ意図的に積み上げたものが含まれているとしたら、こう

した雑多な作法の集合である可能性も残る。

こうした状況は、時衆本来の理念とは異なるもので、一遍聖の在世時、真教が「古徳の遺跡に廟塔を建立し堂舎を修造する事」の可否を問うた時、一遍は「在世は無相にして造化なし」と答え、入滅に際し「没後の事は、我門弟におきては葬礼の儀式をとゝのふべからず、野にすてゝけだものにほどこすべし」と遺言したが、結局、二世他阿真教は一遍の遊行に疑問を持ち、札を配り歩くのみの根無し草布教では民衆の救済が達成できないと考え定住して布教した。造塔についても、当初否定的な姿勢であったのが、「堂舎塔婆は功徳の一分なれば、人天の福業とこそなれ」「本より墓所とまうすは、在家の習ひ。親父・祖父代々の跡に残りゐて、孝養報恩をいたさゞれば孝養の志のあひだ、仏神の加護なくしてその家すたれ、子孫繁昌せず。この墓所につきて仏事善根いたさむ為なればよからむ」と述べており（大橋一九七三・赤松一九五三・大橋一九六五）、時衆系造塔の出現はこうした変質の結果であろう。

藤沢山清浄光寺には、ここを阿弥陀のいます霊山とみなして遺骨を納める風潮が十四世紀中葉からみられる。歴代の遊行上人が書き継いだ『時宗過去帳』には、観応二年（一三五一）二月一二日の条に「本阿弥陀仏畠山臣、上州林氏、当寺ニ葬ス」とあるのを初見として、応永二一年（一四一四）十月二日の条の『但阿弥陀仏柳沢出羽守分骨納」など、二一例が認められる。また遠江の過去帳記載者は二十六人にも及ぶ（大橋一九七三）。すなわち武家本貫地における宝篋印塔造営は単なる造墓供養にとどまらず、臨終の十念や『時衆過去帳』への記載・抹消、本山への納骨と一連のメカニズムを構成しており、それは「往生与奪」権として遊行上人の権威を高めていき、遊行時衆から時宗教団へと変質する過程で、教団の秩序と求心力を維持する上で役だったと思われる。しかしもともと造塔を否定していた時衆が独自にこうしたシステムをつくりあげたとは考えがたい。そこで注目されるのが一遍入寂の地、兵庫県真光寺の一遍廟塔である。当地には一遍の遺骨を納めた南北朝期の大型五輪塔がたっているが、その形態は西大寺様式を示している。遠江東部の時宗末寺の安山岩製石塔についても、律宗傘下の大蔵派石工の製作になる律系石造物に起源をもちこれに型式学的に後続するもので、こうした点から推して、時宗の教団組織・造塔を含む供養メカニズムは、十三世紀末までに教団組織・機構を確立していた西大寺流真言律に倣ったと考えるのが自然である。

すなわち時宗の阿弥陀名号宝篋印塔と本山納骨・『時衆過去帳』の記載がセットをなす供養システムは、西大寺真言律宗の五輪塔造営と本山納骨・『光明真言結縁過去帳』の記載がセットをなすシステム（桃崎二〇〇〇）を換骨奪胎したものと推定され、一遍の布教方針を転換し時宗が教団組織を整備した二世他阿真行の代にその機構や技術を受容して時宗系の石塔が出現したと考えられる。なお他阿真行からの法語の宛先には、大仏宣時が登場するが、大仏氏は執権北条氏の一族で遠江国の守護を独占していた時宗の最大のパトロンであり（保立一九八八）、北条氏の公認のもとで、得宗政権と密接な関係を有した律宗の技術が、時宗にも移植されたことが想像される。律宗・時宗はともに葬送に関与しており、葬送・石塔造営にかかわる下級の聖には、宗派を超えた往来があったと考えられる。

そして地方寺院が充実を見るなかで、本山・末寺間のみならず地域内でも完結した供養メカニズムの確立と普及を図る必要が生じたと考えられ、阿弥陀名号石塔の在地石材化もその一環と捉えられる。しかし本来遊行と都市への布教を本義とする時宗が方針転換すれば、当然その存立基盤に動揺が生じた筈である。これにいかに対処したのであろうか。搬入石材による宝篋印塔の造営は十五世紀になっても続いており、天竜川東岸、豊田町池田の時宗寺院行興寺には、謡曲「熊野」で著名な熊野御前及びその母の墓と伝わる宝篋印塔が小堂内に安置され現在も信仰されている。「熊野の墓」は総高一五三cm、「熊野の母の墓」は総高一六五cmを測る。いずれも輝石安山岩製で、典型的な関東型式塔である。いずれも小山町甘露寺の応永

七年（一四〇〇）銘塔に後続するとみられ、一四〇〇年代の前～中葉に造立されたものと考えられる（黒田一九三〇，本間一九九八）。これらの石塔は時宗の僧侶か、帰依した有力檀越の供養塔とみられるが、熊野御前の伝承が付与されている点は、特定地域寺社の開基伝承を整備し霊場化し、地域社会発展の核とするスタイルを脱却し、主要交通路とオーバーラップした広域な伝承体系を巡礼路として整備し、その一環として芸能を広め造塔することが、流通や交通とともにあった時宗の存立意義を高める機能を果たしたと考えられる。

(3) 横地太郎塔の問題点

①砂岩製大型宝篋印塔の出現

菊川町内で最も大型の石塔は伝横地太郎宝篋印塔（図版8－2）で、宝珠・単弁請花・九輪・鎬弁請花・伏鉢を完備した相輪、軒上四段・軒下二段の笠で最上段を各面二窓の框座で露盤となし、垂直隅飾を伴う。相輪と笠の計は一四五cmに達し、失われた関東型式の軸・基礎・台座を補えば、総高二二〇cm前後に達する遠江でも最大級の宝篋印塔であったと考えられる。つぶれた宝珠の相輪や軒上四段と露盤、軒下二段の笠の構成は下田市河内重福院の建武元年（一三三四）塔（図版8－10）と共通する。他県の例では、埼玉県深谷市小林家の観応二年（一三五一）宝篋印塔は相輪のタガ状九輪、肉彫の請花が横地太郎塔に類似する（埼玉県教育委員会一九九八）。この塔は安山岩製で、伊豆半島周辺の製作とみられ、阿弥陀名号の人物が十数名も結縁した結集塔で時衆の関与が推定される。また駿河北西縁の小山町菅沼旧蓮静寺の嘉慶二年（一三八八）銘塔はタガ状相輪を留めるが上請花の退化が進み横地太郎塔より新相を示す（図版9－21，石川一九九七）。こちらは掛川市本郷宗塔庵跡に所在する伝曽我十郎塔（図版8－5）に類似し、これに後出すると見るべきであろうか。この塔の石材は産地がはっきりしないが、伊豆半島より搬入された凝灰岩の可能性がある。

以上伝横地太郎塔は、伊豆半島周辺で製作された十四世紀中葉の輝石安山岩製宝篋印塔の影響を窺わせ、これらが遠江産の砂岩に材質転換したものと考えられ、十四世紀中葉～後半の比較的早い段階のものと考えられる。なお伊豆半島南部では、下田市高馬の通称「傾城塚」（図版8－14）や土肥町八木沢の嘉慶三年（一三八九）銘塔（図版8－7）など「伊豆式」と呼ばれる長大偏平な反花座の台座を伴い（尾形一九八八）、類似する台座は掛川市下本郷照月寺跡（図版8－6）や曽我五郎（図版9－20）・十郎塔（日野1968）、本川根町藤川の伝小長谷城主墓（図版9－2）などに見られる。これらは十四世紀中葉～末に遠江東部を中心に展開した砂岩製の大型宝篋印塔が伊豆半島、中でも南部地域の地域色を強く受けて成立したことを示し、両地域間の交流、ひいては伊豆安山岩石工が来遠して定着し、砂岩製石造物の製作に関与したことさえうかがわせる。

②モデルとコピーの関係

伊豆半島の輝石安山岩・凝灰岩を原形とし、各地の砂岩や凝灰岩などの在地石材でこれを模倣するモデルとコピーの関係は、伊豆半島を中心に東国全域に拡がっているが、遠江ではこの顕著な実体を見ることができる。それは、伊豆半島に近い伊豆・駿河東部・相模には、在地石材とかわらない感覚で供給されたと考えられるのに対し、遠江・駿河西部・武蔵・房総・常陸・下野では、搬入品とその模倣品が共存している。対応関係を整理すると以下のようになる。

伊豆周辺	搬入	模倣
箱根町提灯山（一二九六）	掛川市観音寺	
	榛原町中所在（一三一二）	
下田市重福院（一三三四）		菊川町伝横地太郎
横浜市上行寺（一三五二）	菊川町三光寺（一三五五）	
	榛原町勝間田（一三五二）	
下田市傾城塚		掛川市本郷照月寺
		菊川町三光寺（一三六三）

小山町菅沼（一三八八）　掛川市長福寺五郎　本川根町小長井（一三八三）
榛原町伏方中田宅　菊川町三光寺部材
豊田町行興寺部材　相良町笠名（一三九八）
小山町甘露寺（一四〇〇）　豊田町行興寺熊野　磐田市住吉遺跡部材

こうした対応関係は、十四世紀初頭～中葉を境に変化する。すなわち東遠江が、鎌倉時代以来の東国の西縁から、院政期以来の西国の東縁へのゆり戻しが起こる。その後は東国との対応関係は不明瞭になり、三河、ひいては京都をとりまく西国の影響が濃くなっていく。

(4) 宝篋印塔の小型化と三河の影響－関東形式への関西系形式の影響

駿河西部、藤枝市の真言宗鬼岩寺は、瀬戸川北岸、蓮華寺池の西方に位置する。境内には裏山から出土した四〇〇基もの石塔が並び、古式の小型砂岩製宝篋印塔・五輪塔が多い。石材は緑色変岩・輝石安山岩も含むが、大部分は砂岩で、蔵骨器も出土しており、惣墓を思わせる景観を成していたと考えられる。最大の五輪塔は、部材の組み合わせが当初のものか疑問があるが、関西風の素文繰方座に小さな納骨穴をそなえ、地輪には「奉造立地蔵結衆本願塔　応安六年七月結衆謹誌之」の銘がある。また「永徳元年（一三八一）七月二十日　矢部隼人云日」銘のある小型の宝篋印塔は、反華座を伴い側面一窓の低い台座が特徴で、十四世紀末葉の関西様式の受容を物語っている。ちなみに矢部氏は今川氏の重臣である。鬼岩寺の沿革や周辺環境を検討した磯部武男氏によれば、かつて寺奥の谷奥には「真言石」と呼ばれる大日如来種子を刻んだ巨岩があり、空海が鬼魅を封じたと伝えていたが、周囲の採石の進行で失われたという（磯部二〇〇〇）。付近の石材が石塔材となりうるかは検討の余地があるが、鬼岩寺は永仁年間（一二九三～一二九九）に鎌倉極楽寺の忍性が中興したと伝え、文献記録からも西大寺流の真言律寺であったと考えられる。さきの応安六年（一三七三）銘五輪塔は「地蔵講衆」の発願になる点は、忍性が造立に関与した永仁五年（一二九五）銘の箱根五輪塔と同様であり、西大寺様式の納骨五輪塔とみて誤りない。関西地方ではこうした結衆が宗教的講に名をかりた自治的な町衆組織の存在を示すとの指摘があり、藤枝宿の市が立った鬼岩寺門前には経済的に伸長した民衆が居住していたようだ。

西大寺律宗傘下には伊派や大蔵派などの石工集団の活動がみられ、花崗岩や安山岩など硬質石材石塔の出現に関わったことが知られているが、輝石安山岩製石塔の初期の遺品は忍性が関与した箱根周辺や、鎌倉極楽寺や金沢称名寺など律宗寺院に集中し、忍性同門で西大寺叡尊高弟の宗賢房成真の中興になる沼津霊山寺にも凝灰岩製石造物が多数あり、成真の五輪塔も「元亨三年」（一三二三）銘銅蔵骨器を伴う典型的な西大寺様式の巨大塔であるにもかかわらず、凝灰岩を用いており、硬質の輝石安山岩石塔の搬入と前後して在地産の軟質石材石塔への技術移転が起こっている。

他地域を見ると、千葉県の銚子砂岩の石造物は、初期の遺品が大栄町大慈恩寺や多古町東禅寺など律宗系寺院に偏って見いだされ、律宗は砂岩製石塔の出現にも関与していた可能性が高い。

さらに遠江・駿河西部の宝篋印塔には、十四世紀末頃から関西様式の影響が現れてくるが、これは先行して関西様式が定着していた地域から、在地の砂岩石塔にその様式が持ち込まれたと考えられる。具体的には関西様式の花崗岩・砂岩製石塔の供給元と目される三河地域から搬入品を介して影響を受けたと推定される。ただし先行して関東様式が定着していたため、関西様式の受容は部分的なものにとどまったと理解することができる。

遠江西縁に接する東三河の愛知県一宮市法圓寺中世墓群では関西様式の砂岩製宝篋印塔がみられ、ほぼ一具のものが四基ほどある。これらの宝篋印塔は丸い宝珠形の頂部、蓮弁を線刻した受花、円錐形に径が変化するタガ状九輪、複弁の受花、やや背の高い丸い伏鉢、薄い軒に軒上五段、軒下二段、外反が強い二弧の隅飾り突起、上下に出ホゾがあり蓮座・月輪を伴う梵字を刻んだ軸部、立体的な反花座と一窓の框座に線刻で格狭間を伴うという特徴がある。宝篋印塔群の中ではやや退化した特徴を示す「宗列禅

定門」銘基礎は、一宮市常念寺の寛正四（一四六三）年銘基礎と類似し、また『妙興寺文書』「坂井某書状」には寶徳四年（一四五二）頃日光川流域を洪水が襲った記事があり、この頃中世墓群を第一次埋没が覆い、十五世紀末頃まで埋葬後に完全に埋没したとみられる。集石内部への蔵骨器の埋納は十五世紀前半代で終了し、十五世紀後半以降は集石を伴わない蔵骨器と石塔からなる埋納へと変化しており、宝篋印塔群は十五世紀中葉～後半の比較的早い段階と考えられる（一宮市教育委員会一九九五）。なお法圓寺5号集石墓では十三世紀後半～十五世紀末の複数の蔵骨器とともに十五世紀中葉～末頃の花崗岩製宝篋印塔・一石五輪塔が出土しており、宝篋印塔笠には不鮮明だが二重の輪郭線が認められる。類似する花崗岩製宝篋印塔は浜名湖北岸の三ヶ日町麻訶耶寺・幡教寺跡に集中してみられる（本間一九九八）。

三光寺跡裏では五点の花崗岩製宝篋印塔部材が確認され、うち相輪・笠・軸・基礎の四点は法量や形態の相関から一具とみられる。笠は外反する隅飾突起に一弧の内抉りを施し、さらにその外周に輪郭沈線を施す二重輪郭線を伴い、搬入石材である点からも横地氏滅亡の文明八年（一四七六）より以前、十五世紀中葉～後半頃のものと推定される。これに僅かに後続する型式の花崗岩製宝篋印塔が愛知県岡崎市本宗寺の伝石川数正塔（昭和に入って境外より移築。相輪・軸は別部材）で、これより退化した型式が同寺の伝石川政康塔（完存）で「文亀二壬戌年（一五〇二）」銘があり隅飾突起は垂直に近く変化している。なお本間岳人氏は伝石川数正塔をその没年である文禄二年（一五九三）に置き、「古相を示す」伝政康塔に後続すると見ているが（本間一九九八）、むしろ組列は逆であると考えられる。

なお池上年氏の分類（池上一九八〇）を整理した本間氏よれば、宝篋印塔相輪請花が五～六葉で、笠の隅飾突起の内側に二重輪郭を持つものが西三河式で、殆どが花崗岩製であるのに対し、相輪請花が三葉に退化し、隅飾突起の内側が一重輪郭のものが東三河式に相当し、殆どが砂岩製であるという（本間一九九八）。ところが遠江の領域では、これらの影響がともに砂岩製に現れ、系譜差よりも型式学的先後関係として現れる。十五世紀中葉以降の砂岩製宝篋印塔は中型・小型のものが増大し二m級は見られなくなり、隅飾突起の線刻は十五世紀末～十六世紀初め頃に横長からΣ状に退化していくのが特徴である。三河域の岡崎市大林寺の天文八年（一五三九）銘砂岩製宝篋印塔では隅飾装飾が線刻化しているものの横長形で、これは西遠江に多い花崗岩質砂岩部材の産地推定に示唆を与える。

(5) 御堂と御館－本貫地墓地の実態

遠江の有力在庁官人層や国人領主層である横地氏や勝間田氏、井伊氏・原氏などは、本貫地に大型でしばしば紀銘のある墓塔を造営したが、横地では中世居館と石塔群が隣接関係で捉えられる。

①伊平遺跡の所在地に残る大上（おおかみ）の通称は当地の居館の遺称と考えられる。伊平遺跡では十三世紀後半～十五世紀、十六世紀、十七世紀の遺物群が出土しており、これは十三世紀後半～十四世紀の慈眼寺五輪塔群、十六世紀の延命段宝篋印塔、十六～十七世紀？の道久一石五輪塔群との対応が推定される。

②横地太郎塔は十四世紀中葉の大型宝篋印塔を中核に、十四～十五世紀代の石造物を主体とし、十六世紀の石塔も交えるものの一石五輪塔は見られない。付近は中上（ちゅうかみ）の通称を残し、伊平遺跡付近の大上と対応し、中世居館の存在を暗示している。なお横地城周辺ではいまのところ十四世紀中葉～後半に出土陶磁器の断絶期があるが、横地太郎塔付近にこの時期の居館址がみつかる可能性も残る。

③殿ケ谷遺跡（一二～十五世紀）と藤丸館（十五世紀末～十六世紀）は三光寺址裏石塔群（十四世紀前半～十六世紀）と対応し、特に十五世紀後半～十六世紀の一石五輪塔や宝篋印塔は後者との関係が推定される。

④宇藤遺跡は神尾宝珠院（十四世紀の石塔含む）との関係が推定される。

⑤段横地地区周辺では十四～十七世紀の石造物が見られ、天神森（真言宗の寺院址？）・興嶽寺（曹洞宗）は十五世紀以降、段横地常泉寺・公会

堂では十四世紀ならびに十六～十七世紀の石塔が見られる。段横地では過去に山茶碗や礎石が出土し居館の存在が推定され、興嶽寺も居館址であったとの説がある。

⑥撞照寺には十四～十六世紀の石塔群が見られ、土橋・林光寺遺跡に近い。

以上横地谷周辺の石塔群は、それぞれ対応する居館址が考えられ御堂・御館のセット関係が推定されるが、現在横地太郎塔、段横地・天神森に対応する館址は未確認である。特に横地太郎塔は十四世紀中葉の横地惣領家ゆかりのものと考えられる点から、未発見の該期居館の発見が期待される。

(6) 一ノ谷中世墳墓群への視点

『吾妻鏡』によると建久六年（一一九五）十二月、勝田玄番助成長は、遠江の国府の光堂で闘乱刃傷に及んだとの理由で幕府に召喚されている。この光堂は見付惣社西側、承安年間（一一七一―一一七五）平重盛の開基で当初は天台宗で、弘安五―六年（一二八二―一二八三）頃一遍の通過を経て真教時代に時衆化した光堂山蓮光寺と推定される。蓮光寺は明治に廃寺になり過去帳や什物は別寺院に散っており、平安時代の本尊薬師如来坐像と平重盛の位牌などが、おなじ見付の西光寺に伝えられている。

勝田成長は在庁官人として国府に勤務していたとみられるが、横地・勝間田・井伊などのトップクラスの有力在庁は、国府から離れた本貫地を墳墓の地としつつ豪族武士化していたと推定されるのに対し、国府に隣接する一の谷中世墳墓群はそれ以外の在庁官人層や都市民の共同墓地とみられている（磐田市教育委員会一九九三）。一の谷中世墳墓群の形成について、石井進氏らは光堂山蓮光寺との関係を指摘している。沼津霊山寺にある蓮光寺旧蔵の梵鐘は貞治三年（一三六四）に今川了俊が寄進した旨の銘があり、鎌倉後期～室町期の墓や石塔には時衆の関与が推定される（石井一九〇〇）。

一の谷中世墳墓群では宝篋印塔・五輪塔・一石五輪塔の部材が合計二〇七点出土しており、古式を留めた大型品はなく多様性に富んだ小型品が主流で、紀年銘塔や阿弥陀名号を刻むものもみられない。五輪塔は輝石安山岩製が十四世紀中頃、その他は凝灰岩質砂岩を中心に十五世紀以降。宝篋印塔は輝石安山岩製が十四世紀中頃、その他は花崗岩質砂岩製を中心に十五～十六世紀中頃。一石五輪塔は十六世紀中頃～末にかけて花崗岩質砂岩を主体に樹立されたとの分析結果が示されている（加藤一九九三）。

その被葬者は在庁官人層を含むと考えられているが、鎌倉後期の常陸国では大掾氏の惣領が、供僧・最勝講衆らの僧侶も含む総数六十余名の在庁グループの首位に立って、彼らを階層的に組織・支配していた。遠江国でも守護を世襲した北条氏の代官が国府に駐在し、在庁官人や惣社に仕える宗教者たちを傘下に組織していたと考えられるから、一の谷中世墳墓群における塚墓・集石墓・土坑墓はこうした階層差に対応する可能性が指摘されている。すなわち在庁を構成した武士や数多い寺院の僧侶のほか、15世紀頃から本格化な伸長をはじめた都市民衆が多数を占めると想像される。

(7) 石塔造営階層の拡大と元島遺跡の石塔

中世武士階級の「一所懸命」の象徴であった屋敷墓や造塔は、中世末～近世初頭の民衆のイエの成立に伴い、有力な「百姓」層にも拡大していく。

福田町元島遺跡出土石塔部材は、一ノ谷中世墳墓群の年代・内容と一致しており、この遺跡の都市的な傾向を窺わせるが、非常に数が少なく、また共同墓地に伴わず個別に散在している点は大きく異なっている。更に元島遺跡では、土壙墓や火葬墓も検出されており、六道銭の年代等より、十五世紀後半～十六世紀のものと推定されているが、墓はすべて各屋敷地に伴って営まれたもので、共同墓地は存在しないという。すると出土した四点の石塔部材も本来は屋敷墓として祀られていた可能性が高い。

屋敷墓の出現は、その祭祀を前提とするため、屋敷地の固定と相続にかかるイエの成立と密接に関わる。すなわち屋敷墓は屋敷地を開発した家父長を埋葬し祖先祭祀を行なうことで、屋敷地の世襲的相続を保障、もしくは正当化する象徴として発生・普及していったと考えられている（橘田一九九一）。具体的には屋敷地内・隣接地の墓の形をとり、また最初の当主

の墓が氏神として祀られることがある。屋敷墓はもともと土葬墓として現れるが、イエの永続化を荘厳する過程で、本来祖師信仰のシンボルであった石塔を祖霊信仰の標識として採用するようになる。現在も遠江の民家では、敷地内の西隅や北西隅に「地の神」を祀り、中世の石塔部材が祀られていることがある。屋敷内に中世石塔を祀る景観は現在も広く東日本の旧家に見られるが、山梨県の富士山麓では勝間田姓を名乗る家系の屋敷も含め、十五～十六世紀の入植を伝える本家筋の屋敷内にはしばしば屋敷神とともに近世屋敷墓が祀られ、中世の宝篋印塔や五輪塔が並置されていることがある。石塔は家屋の移動に際しては残されることが多く、どちらかというと土地に属した属地的・地神的性格を示しているが、例外的に移住に際して五輪塔や宝篋印塔の部材を数キロメートルも運んでいる例もある（斎藤一九九八）。

こうした状況から判断して、元島遺跡では短期間であっても、固定化した複数の家系が屋敷を相続し、帰依した宗派や家の流儀に習った屋敷墓を営む港湾集落であったと推測され、石塔の造立も行なわれたようだ。しかし出土した石塔部材が非常に少なく、かつ転用材が多いことは、集落放棄に際し、祭祀が継続していた石塔の大部分は、移転先の集落に運び去られたと推測される。

(8) 横地城落城以降の世界－曹洞禅の展開と一石五輪塔の出現

小川端渋谷家裏石塔群は一石五輪塔二三点（うち完形一六）よりなり、大型古式の一石五輪塔が多く、掛川城本丸下層墳墓（一五二三前後の築城以前）と同形態のものがみられ、完形で最大のものは全高四六cmを測り、水輪部の径が大きく、規格化された柱状石材の削り出し製品に先行するものと考えられる。また破片には更に大型のものがみられ、横地落城から近世に移行する十五世紀末～十六世紀を主体とする石塔群として注目される。小笠町正林寺の伝今川義忠墓塔（文明八年（一四七六）没）は正林寺の前身である昌桂寺が創建された永正十四年（一五一七）頃の造立が推定される（河合一九九八）。本体，四九．七cm総高五五cmを測る日坂石製の大型品で細長い形状だが、小さい台石の上に立てられており安置式に分類される（図版10－11）。これらも含め遠江の一石五輪塔で最も型式学的に遡る十五世紀末～十六世紀前半の遺品を通覧すると、ずんぐりして積上式五輪塔に匹敵する規模の安置式が目につく。

興嶽寺は曹洞宗で文明七年（一四七五）に開基したと伝える。四面に梵字を刻む大型一石五輪塔（図版10－23）は全高約五一cmを測り地輪の梵字横に「天□」銘があり、天文（一五三二～一五五五）・天正（一五七三～一五九二）のいずれかと考えられる。もし前者であれば天文二年（一五三三）七月四日に没した三世華嶽得春の墓塔の可能性も考えられる。六ケ寺の末寺のうち奥横地三光寺が三世華嶽得春（位一五〇一～一五三三）、三沢龍谷寺と段横地常泉寺が四世寛州玄泰（位一五三三～一五六九）、笹間渡宝珠寺が六世玉山秀光（位一六一〇～一六三三）、神尾正光寺が九世勝山全尊（位 ?～一六六七）の開基になるという。

三光寺は殿ケ谷遺跡と武衛原藤丸館の中間にあり、興嶽寺三世華嶽得春が天文四年（一五三五）五月五日に創建したと伝えるが、華嶽得春は天文二年（一五三三）に没したとされるので、事実上の開山は二世であったと考えられる。古式の一石五輪塔を二点交え（図版10－13・14）、形態からみて三光寺が曹洞禅寺として復興した天文年間に近い時期が考えられ、藤丸館の存在とも関わっていると考えられる。

段横地常泉寺は興嶽寺四世寛州玄泰が自ら永禄十二年（一五六九）に開基したと伝え、軒が水平な十六世紀タイプの中型一石五輪塔があり（図版10－15）寛州玄泰の墓塔や供養塔であった可能性も考えられる。

三沢龍谷寺址は興嶽寺四世寛洲玄泰によって天文年間（一五三二～一五五五）に開基されたと伝える。大型の一石五輪塔に伴う屋形形の覆屋二基があり、付近に宝篋印塔や小型の一石五輪塔などがみられる。

以上、菊川町内の一石五輪塔は十五世紀末頃に出現し、天文年間（一五三二～一五五五）以降に開基された寺院で主に造立されたと思われるが、特に初期

の大型塔は当地域の曹洞宗の展開との関連が考えられる。曹洞宗は十五世紀以降、道元の専修禅・出家主義的な傾向を改め、密教的要素を導入して祈祷や葬送に積極的に関与するようになり、貨幣経済の進展や民衆の成長に対応して埋葬費用に応じた葬送の段階化を進めていった。横地氏をはじめとする国人領主層の滅亡後、当地の曹洞宗は今川氏に協力的な態度をとり、また戦乱で荒廃した天台・真言寺院を復興、禅寺として中興し急速に教線を伸ばしている。こうして彼らは旧来の菩提所の経営を引き継ぎ、宝篋印塔や五輪塔にかわる新たな墓標石塔として一石五輪塔を採用したものと想像され、曹洞宗の本拠地であった北陸地方の風習を導入した可能性も考えられる。なお河合修氏の検討によれば、西駿河地域での古式の一石五輪塔は今川氏有力被官の菩提所（曹洞宗を多く含む）に多く見られ、また石材からみて遠江の日坂石製品が搬入された可能性があるという（河合一九九八）。すると横地落城後に当地に盛行する古式の一石五輪塔の担い手には、今川氏被官となった在地領主や新たに入植した領主・武士層を含むものと推定される。そして十七世紀に入ると、石龕を伴う夫婦墓の形態をとるものがある。藤沢典彦氏によれば、夫婦墓は「イエ」の成立と密接にかかわるという（藤沢一九〇〇）。おそらく石龕を伴う夫婦墓の夫婦墓の一石五輪塔は、当地の社会再編にともない、新たに成立した近世名主層の「イエ」を象徴するものとして、中世的な石塔を近世的に翻案したものといえよう。

(9) 石塔の再利用について

菊川町三沢龍谷寺では砥石に転用した宝篋印塔笠がみられ、こうした生活に密着した例として、元島遺跡で出土した宝篋印塔部材には、砥石もしくは摺臼への転用を示す摩耗が見受けられた。長野県佐久市前田遺跡14・19号井戸跡では大量の石塔部材が使用されているが、五輪塔水輪の上面を彫り凹め、石臼に転用したものも出土している（佐久市教育委員会一九八九）。石塔・石仏の転用はかなり頻繁に行なわれたようで、鎌倉時代の『沙石集』には親鸞門徒が本願ぼこりで行なった造悪無碍の例として、石地蔵をすりこぎとして使い摩耗を競った話がある。また戦国～近世には茶人が石塔をくり貫いて灯籠や水鉢に仕立てた例があり、京都の船岡山には大型五輪塔があったが、千利休がこれをとって庭石や水鉢としたため、祟りで没落したと伝えている（勝田一九九六）。これらは石仏や石塔の転用を防止するため仏罰を強調した伝承の例であるが、韮山町御所ノ内遺跡では宝篋印塔基礎が井戸の部材に転用されており（尾形一九八八）、金沢称名寺境内や菊川町興嶽寺では石塔台座の反花座を門柱の根巻石に見立てて礎石に転用していた。こうした転用は同時代には既に始まっていたようで、鎌倉極楽寺の忍性五輪塔の地下には不同沈下を防ぐために小型五輪塔部材が敷かれていた（極楽寺一九七七）。一ノ谷中世墳墓群では中世石塔部材を破砕したものを近世集石墓に用いている（磐田市教育委員会一九九三）。

また浜松城では、城の南東の石垣の中に一石五輪塔や宝篋印塔笠が埋め込まれていた。こうした例は各地の戦国城郭に見られるが、特に巨大な石の下や城の入り口など要所に配置されており、単なる石材の不足や宗教の否定ではなく、城郭建設に伴う祭祀の痕跡と推定されている（浜松市教育委員会一九九六）。一方龍谷寺や元島遺跡の転用のあり方は、生活に密着したものであり、こうした特別な意識はうかがえず、むしろ良好な石材の少ない環境や宗教信仰心の低下した戦国期の世相の中で、手近にあった石塔部材を有効に活用したと見たほうが良いであろう。

(10) 屋敷神としての石塔

横地から土橋にかけての民家では、敷地内の西隅や北西隅に「地の神」と称して中世の石塔が祀られていることがしばしばある。東横地坪井政則氏宅には古式の宝篋印塔笠二点、東横地長溝杉ノ谷遺跡福島唯雄氏宅石塔群は宝篋印塔笠一点五輪塔水輪一点、土橋坪井家では宝篋印塔笠、五輪塔空風輪、一石五輪塔残欠が、いずれも屋敷内の西もしくは北西に屋敷神として祭られている。これらのうちには付近から掘り出されて祭られたものと、転居に際して持ち込まれたものと二通りがある。屋敷内に中世石塔を

祀る景観は現在も広く東日本の旧家に見られるが、山梨県の富士山麓では勝間田姓を名乗る家系の屋敷も含め、十五～十六世紀の入植を伝える本家筋の屋敷内にはしばしば屋敷神とともに近世屋敷墓が祀られ、中世の宝篋印塔や五輪塔が並置されていることがある。石塔は家屋の移動に際しては残されることが多く、どちらかというと土地に属した属地的・地神的性格を示しているが、例外的に移住に際して五輪塔や宝篋印塔の部材を数キロメートルも運んでいる例もある（斎藤一九九八）。

屋敷墓は屋敷地を開発した家父長を埋葬し祖先祭祀を行なうことで、屋敷地の世襲的相続を保障、もしくは正当化する象徴として発生・普及していったと考えられている（橘田一九九一）。具体的には屋敷地内・隣接地の墓の形をとり、また最初の当主の墓が氏神として祀られることがある。浜北市宮口大屋敷では、中世居館跡に隣接し集石を伴う鎌倉後期頃の緑色片岩五輪塔が今もたっており、福田町元島遺跡では溝で区画され船入を伴う屋敷地内から十五～十六世紀代の屋敷墓が検出されているという。

中世武士階級の「一所懸命」の象徴であった屋敷墓や造塔は、中世末～近世初頭の民衆の「イエ」の成立に伴い、有力な「百姓」層にも拡大していくが、その過程ではあらたに一石五輪塔や碑石墓を建てるのと並行して、既存の古い石塔を祀る行為もしばしば行なわれたようである。

Ⅶ　小結

(1)菊川町の中世石造物は、宝篋印塔、五輪塔、一石五輪塔の三種類よりなり、五輪塔（鎌倉後期）・宝篋印塔（南北朝～室町）・一石五輪塔（戦国～）の順で出現し、これらが混在して群を構成する。

(2)石材は緑色変岩→日坂凝灰岩質砂岩→伊豆輝石安山岩→三河花崗岩→花崗岩質砂岩の順に出現。石材の九〇％以上が日坂砂岩で、ついで花崗岩質砂岩、緑色変岩、安山岩、花崗岩と続く。

(3)最古の石塔は慈眼寺の緑色変岩製五輪塔で、同種の五輪塔は太田川流域に集中し、中世前期居館の隣接地や浄土宗寺院に多い。延慶三年（一三一〇）銘の相良町平田寺宝塔も緑色変岩製石塔の年代の一端を示す。緑色変岩は天竜川上流の産出と推定され、近世の一石五輪塔や墓碑にも使用された。

(4)凝灰岩質砂岩は掛川市日坂周辺の産出で含有チャート礫の粒径や色調に幅がある。菊川・大井川両方の流域に供給され、遠江東部～駿河西部の十四～十五世紀の石塔に多用された。

(5)伊豆半島産の輝石安山岩の石塔は遠江では磐田のほか榛原町清浄寺裏山など沿岸部に多く河川水系の内陸部では急激に減少する。三光寺跡裏の「見阿弥陀仏　文和四年（一三五五）」銘基礎が示すように十四世紀前半～中葉の宝篋印塔に阿弥陀名号・年号を刻む例が多く時宗との関係が推定される。

(6)十四世紀中葉～後半に横地太郎塔や三光寺跡石塔群など砂岩製大型宝篋印塔の造営が目立ち、伊豆安山岩製宝篋印塔の様式を強く示す。

(7)愛知県岡崎市中目産とみられる花崗岩の石塔は掛川市本郷長福寺・照月寺、豊岡村永安寺に十四世紀の大型五輪塔、三光寺跡裏石塔群に十五世紀代の宝篋印塔が見られる。

(8)十五世紀後半～十六世紀代前半には石塔が急激に小型化し数量増大し、更に小型宝篋印塔に木ホゾ使用の小型五輪塔主体を多く交えるようになり、大型の一石五輪塔もこれに加わるようになる。

(9)一石五輪塔に多い花崗岩質砂岩は愛知県鳳来町玖老瀬産の可能性もあるが未確認。

(10)掛川城跡本丸下層墳墓群（一五一三前後以前）や小笠町正林寺（一五一七創建）の伝今川義忠墓など一五〇〇年前後以降に一石五輪塔が出現。十六世紀後半に小型品が増大し、十七世紀以降は大型塔の刻字が梵字「キャ・カ・ラ・バ・ア」から漢字の「地・水・火・風・空」に変化するとともに石龕が出現する。

Ⅷ　結語

横地氏は遠江の有力在庁官人層から鎌倉御家人となり、南北朝期には本拠で北朝側として戦うとともに、関西や九州での転戦を経て室町幕府の奉公衆とその性格を変化させ、室町期には本拠に戻るも滅亡以降は旧臣層や新たに入植した領主層が横地氏の旧蹟の周辺に分散しているようだが、それにつれて鎌倉時代の浄土宗、鎌倉末～南北朝期の時宗、戦国期の曹洞宗と当地の宗教環境も変化し、主体となる石塔も五輪塔→宝篋印塔→大型一石五輪塔と変化していくと考えられる。

横地地域ではまず平安末期の経塚や土橋遺跡出土品にみるような木製卒塔婆が仏教的な作善として現れるが、石塔の造営は鎌倉後期以降に開始され、十三世紀後半頃に緑色変岩五輪塔が現れ、その技術の一部は遠江砂岩の石工集団に引き継がれる。次いで十四世紀前半に伊豆半島産より搬入された輝石安山岩・凝灰岩製宝篋印塔が出現し、この技術供与によって十四世紀中葉頃に大型の凝灰岩質砂岩製宝篋印塔が成立する。鎌倉後期～南北朝にかけての石塔は殆どが関東型式を示し大型で数が少なく、横地谷の中の慈眼寺・横地太郎塔石塔群・三光寺跡裏・神尾宝珠院など幾つかの石塔群に集中する傾向があり、複数の有力家系の併存と本拠の移動を暗示する。すなわち永続的な石塔は屋敷地が居館として整備され、イエが固定化され家督相続が確立した段階で、イエの祖をまつる一族紐帯のシンボルとして出現し、その様式や石材はその段階で横地氏やゆかりの人々が帰依していた仏教諸宗派の活動を密接に反映していると考えられる。また遠隔地石材を若干含む三光寺と在地の砂岩のみからなる横地太郎塔群の差も注意され、これは家系ごとの勢力基盤や対外交渉の相違を暗示している。

これに対し、十五世紀中葉以降には隔絶した巨大石塔がみられなくなり、小型化と数の増加で地点間の格差が解消して伯仲するようになる。この時期に普及する中～小型の砂岩の宝篋印塔は、花崗岩質砂岩の産地候補にも挙げられる三河地域の影響を示し、少数の三河花崗岩製石塔の存在もそれを補強するが、三河式と細部まで同調した型式は西遠江の西縁に集中し、東遠江や西駿河では若干の搬入品を除けば遺品の大半は部分的な影響を示すにとどまる。関西型式の影響を示す小型宝篋印塔の型式変遷をみると、笠の軒上と軒下の段数が減少し、塔身部や基礎の一窓化から輪郭の消失と整形の粗略化など濫造による形骸化も進行していく。砂岩製石塔の小型化につれ受容層は徐々に拡大し、横地城が落城して惣領家を含む国人領主層が解体した十五世紀後葉以降も横地氏時代からの墓地に退化した宝篋印塔・五輪塔が依然として造立されており、滅亡を免れた旧臣層は横地氏を追慕しながら、かつてステイタスシンボルであった宝篋印塔をより広い階層で造立しつづけたと考えられる。これと併行して周縁部の興嶽寺や報恩寺に中型宝篋印塔群が現れる。しかし有力領主層なき石塔造立層の無秩序な拡大は、石塔の小型化と粗製濫造を加速させ、ますます石塔の存在意義を低下させていく。十六世紀に入ると幾つかの中世石塔群が停廃して横地谷の中心性が次第に喪失し、小川端や幢照寺に大型一石五輪塔を中核としたあらたな造塔景観が出現する。関西から新たに伝わった一石五輪塔は曹洞宗に帰依した今川氏被官を中心に新興武士層の墓標に採用され小型品も普及するが、江戸期の社会再編で新たに名主層のイエが成立すると、三沢龍谷寺や掛川市子隣角皆氏墓地などに夫婦の一石五輪塔を石龕に納めたものが現れる。しかもそこでは中世石塔の密教的な精神世界を具現した梵字にかわり、「地・水・火・風・空」の漢字が刻字されたことは、インドに由来する仏塔の本義さえも、列島の内的世界に消化されてしまったことを示している。精神の異界さえも翻訳してしまった江戸社会は、やがて磁器や銭の国産化をもなしとげ、ついには鎖国体制を実現するのである。

おわりに

横地城周辺の石塔の分布・実測調査の成果をもとに編年・石材・石工の系譜等に関する予察を行なった。横地城周辺に多い砂岩製石造物は風化の進行が危惧されてきたが、横地城保存会を中心とした各位の善意と尽力で、

着実な保護対策が徐々に成果をあげており、本調査も大きな恩恵を被っている。しかし散在している郷土の歴史的遺産を確実に保全していくには、景観保全を視野においた総合的な対策が求められる。具体的には散逸風化の防止のための継続的な分布調査を重ね個体登録を進めるのと並行して、横地城を取り巻く周辺史跡の体系的な整備保全を行なう必要がある。

本論をなすにあたり、加藤理文・塚本和弘・戸塚和美・石原玲子・渥美賢吾氏ら多くの諸氏にご教示・ご支援をいただきました。記して御礼申し上げます。

引用参考文献・註釈

赤松俊秀（一九五三）「藤沢市清浄光寺の時宗過去帳」『史林』第35巻第4号 pp. 81～83.

跡部信淵（一九三三）「五輪塔の研究」『密宗学報』第224号 京都専門學校而眞會 pp. 98～113.

網野善彦（一九九二）「中世前期の交通」『日本交通史』pp. 80～101.

家永遵嗣（一九九九）「北条早雲の伊豆征服〈明応の地震津波との関係から〉」『伊豆の郷土研究』第24号 田方地区文化財保護審議委員連絡協議会 pp. 28～38.

池上年（一九六二）『石塔の形式から見た津具盆地』岡崎石造美術研究所

池上年（一九六三）「2. 新城地方の石塔の変遷」『新城市誌』新城市

池上年（一九六六）『旭村古石塔の根元』岡崎石造美術研究所

池上年（一九六七）「1 鳳来町の石造美術」『鳳来町町誌文化財編』鳳来町

池上年（一九六九）『愛知県岡崎市周辺の歴史と石造文化財』岡崎石造美術研究所

石井進（一九九三）「一の谷中世墳墓群遺跡の歴史的背景」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市水堀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書本文編 磐田市教育委員会 pp. 447～467.

石井進（一九九三）「一の谷中世墳墓群遺跡の背景としての遠江国府」『国立歴史民俗博物館研究報告』59

石川治夫（一九九七）「東部地域の中世石造塔」『静岡県考古学会シンポジウム1996年度 静岡県における中世墓』静岡県考古学会 pp. 73～86.

石田茂作（一九六九）『日本の仏塔』講談社

磯辺武男（一九九九）「志太地域における初期仏教の様相」『藤枝市郷土博物館年報11・紀要8』pp. 73～102. 藤枝市郷土博物館

一宮市教育委員会（一九九五）『法圓寺中世墓発掘調査報告書』

今枝愛真（一九六七）「4 篤信の諸相 証阿弥陀仏－時宗－」赤松俊秀編『日本仏教史』宝蔵館 pp. 482～489.

今堀太逸（一九九五）「法然上人『伝法絵流通』と関東－仏法王法の興隆と法然の念仏－」『鷹陵史学』

牛山佳幸（一九九六）「中世律宗の地域的展開－信濃国の場合－」『信濃』pp. 48・49.

梅谷繁樹（一九八二）「中世の阿号・阿弥陀仏号について－時衆（宗）・非時衆の別及び文学、芸能とのかかわりの一面－」『仏教文学』第六号（梅谷繁樹（一九八八）『中世遊行聖と文学』桜楓社 pp. 211～225. 所収）

小野一之（一九九五）「中世武蔵府中の時宗道場」『府中市郷土の森紀要』第8号 pp. 1～9.

大石一久（一九九七）「中世の海の道－中央形式塔のなぞ－」（『長崎新聞』一九九六年十一月の連載を再録）『ひびき』1号 日本石造物学会 pp. 8～14.

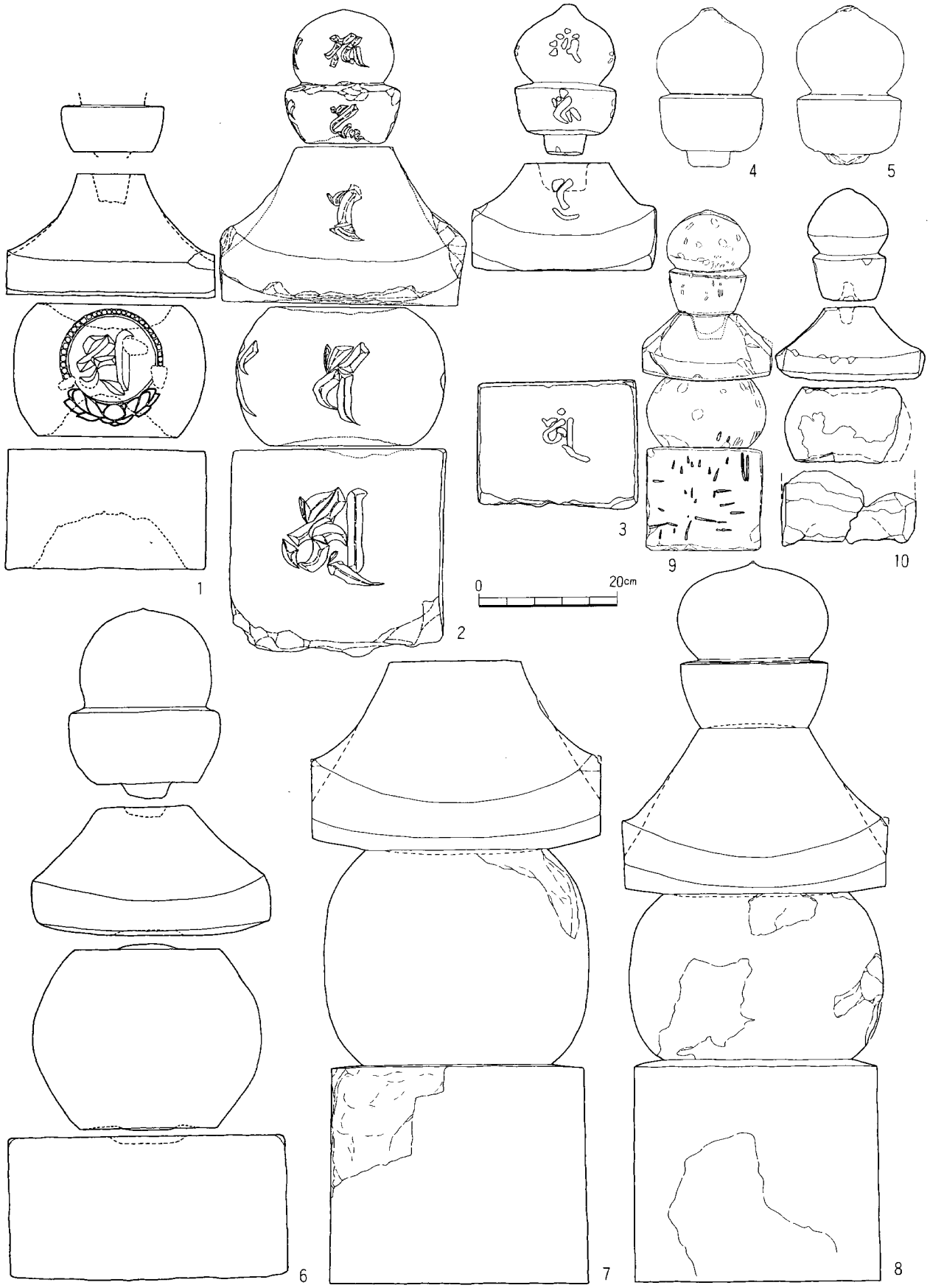
大須賀町教育委員会（一九八一）『撰要寺墓塔群』

大橋俊雄（一九九五）『時衆過去帳』時宗教学研究所 昭和四〇年

大橋俊雄校註『他阿上人法語』『他阿上人和歌集』『時衆過去帳』

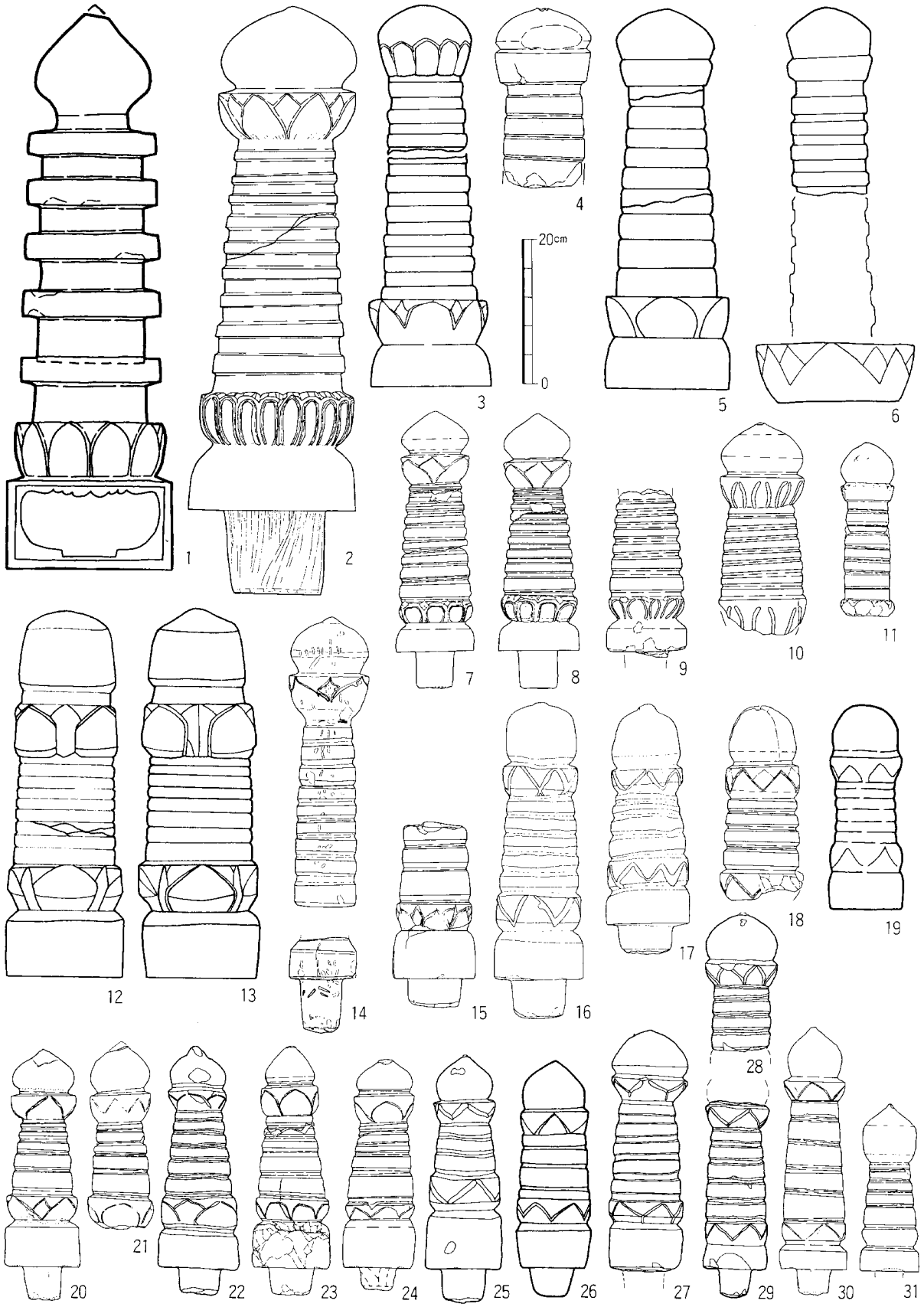
大橋俊雄（一九七三）『時衆の成立と展開』吉川弘文館
尾形禮正（一九八八）『韮山町史』第4巻　韮山町役場
貝島朋子（一九七九）「興隆期時宗教団の支持層について－特に武士階級を中心として－」『時衆研究』第81号　昭和54年　pp. 9.
掛川市史編纂委員会（一九九七）『掛川市史』上巻
掛川市教育委員会（一九九八）『掛川城復元調査報告書』
勝田至（一九九六）「「京師五三昧」考」『日本史研究』409　pp. 42～65.
加藤恵子（一九九三）「(5)石塔」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市水堀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書本文編　磐田市教育委員会　pp. 375～388.
金井清光（一九七五）「善光寺信仰と時宗」『時宗と中世文学』東京美術
金子浩之・岡田善十郎（一九九四）「伊豆石丁場遺跡調査の現状」『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会第7回大会発表要旨
金子浩之（一九九五）「生産遺跡　伊豆・石切場」『季刊考古学』第53号
河合修（一九九八）「供養塔の形態と変遷－特に西駿河の一石五輪塔について－」『静岡県考古学研究』No. 30　静岡県考古学会　pp. 309～319
川勝政太郎（一九五七）「宝篋印塔を中心とする関西型式と関東型式」『日本石材工芸史』綜芸舎
川勝政太郎（一九七〇）「駿河付近の五輪・宝篋印混合式塔について」『史跡と美術』402号
川勝政太郎（一九七三）「勝間田氏の石塔群　静岡県榛原郡勝原町道場」pp. 211～213.「平田寺の変形宝塔　静岡県榛原郡相良町大江」pp. 210・211.『石造美術の旅』朝日新聞社
川勝政太郎（一九七八）『日本石造美術事典』東京堂
北西　弘（一九七六）「3　一遍と時宗」赤松俊秀編『日本仏教史』II　宝蔵館　pp. 124～152.
橘田正徳（一九九七）「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』VII　日本中世土器研究会
木下浩良（一九九二）「高野山一石五輪塔の概要について」『関西近世考古学研究』II　関西近世考古学研究会　pp. 51～69.
久野正博（一九八七）「浜北市北野丘陵地域における中世墳墓の諸相」『静岡県考古学研究』22
極楽寺（一九七七）『重要文化財　極楽寺忍性塔（五輪塔）保存修理工事報告書』
斎藤泰三（一九九八）「地神への「埋納」目印としての本家屋敷神」『甲斐路』90号　pp. 26～34.
斎藤彦司（一九八七・六）「駿州霊山寺と石造遺品」『三浦古文化』第41号　pp. 59～72.
相良町教育委員会（一九八六）「三、平田寺宝塔」『相良町内指定文化財解説』pp. 26～29.
佐久市教育委員会（一九八九）「前田遺跡出土の石臼」『鋳物師谷遺跡群－前田遺跡（第I・II・III次）発掘調査報告書－本文編』pp. 919～953.
修善寺町教育委員会（一九六四）『伊豆修善寺の仏教遺物』修善寺町資料第三集
鈴木富雄（一九七五）「主観的な形式論－特に各部の釣合い－」『史迹と美術』pp. 458.
平祐史（一九六一）「遠州櫻ケ池譚私攷」『法然上人傳の成立史的研究三』臨川書店　pp. 169～181.
大龍山興嶽寺（一九八〇）『ふり向けば五百年』
田岡香逸（一九七五）「駿河霊山寺の正和三年宝篋印塔など－川勝博士の五輪・宝篋印混合式石塔の否定－」『史迹と美術』456
高本浅雄（一九八一）「重寺村の石切文書」『沼津市歴史民俗資料館紀要』5　pp. 1～30.
千々和到（一九八六）「上行寺と上行寺周辺の中世資料」『三浦古文化』

第40号　pp. 42～53.
千々和実（一九七二）「初期五輪塔の資料三題」『宝篋印塔の起源　続五輪塔の起源』　綜芸社　pp. 85～106.
戸塚和美（一九九五）「遠江における中世墓の一様相－峯遺跡の墳墓窟について」『静岡県考古学研究』No. 27　静岡県考古学会　pp. 61～83.
贄恵子（一九九七）「石塔の変遷－中遠地方を中心として－」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会　pp. 17～26.
野澤則幸（一九九五）「付載5　横地城跡（三光寺跡周辺）出土の石塔について」『横地城南遺跡群発掘調査報告書　伊平遺跡　小太郎砦』菊川町教育委員会　pp. 271～286.
榛原町教育委員会（一九八七）『榛原町の石造物』郷土シリーズ㉑
箱根町教育委員会（一九九三）『元箱根石仏・石塔群の調査』箱根町文化財研究紀要第25号
春野町史編さん委員会（一九九四）「下石切の宝篋印塔」『春野町史　資料編一　原始・古代・中世』
日野一郎（一九六八）「北信濃及び天竜流域における宝篋印塔形式」『日本歴史考古学論叢』　雄山閣
福沢邦夫（一九七六）「鈴木富雄氏の「主観的な形式論」に答える」『史迹と美術』　463
保立道久（一九八八）「町場の墓所の宗教と文化－和歌・時衆・謡曲・祭り」網野善彦・石井進編『中世の都市と墳墓－一の谷遺跡をめぐって』日本エディタースクール出版部　pp. 149～174.
本間岳人（一九九八）「遠江における中世石製塔婆の様相」『立正考古』第37号　pp. 45～73.
松本芳徳（一九八九）『史実横地一族』横地城保存会　pp. 64・65.
水上一久（一九六九）「阿弥陀仏号についての一考察」『中世の荘園と社会』吉川弘文館　pp. 383～384.
村井康彦（一九七九）『茶の文化史』岩波新書　pp. 106～112.
桃崎祐輔（一九九九）「石造物からみた中世の横地－横地城周辺石造物調査の成果と課題－」『横地城跡－総合調査報告書－』菊川町教育委員会　pp. 124～154.
桃崎祐輔（二〇〇〇）「忍性の東国布教と叡尊諸大弟子の活動」『叡尊・忍性と律宗系集団』　大和古中近研究会研究資料Ⅳ　pp. 111～141.
森町史　資料編別冊『森町の棟札・金石文』　pp. 17～18.
矢田俊文（一九九六）「明応地震と港湾都市」『日本史研究』412号
矢田俊文（一九九八）「明応地震と太平洋海運」『民衆史研究』第55号　pp. 46～57.
湯山学（一九七五）「『他阿上人法語』に見える武士」『時衆研究』第六三号　昭和五十年　pp. 39～40.
横田明・西山昌孝・小林義孝（一九九六・一九九七）「一石五輪塔は何を語るのか」（上）（下）『歴史民俗学』第六号pp. 139～171；第七号pp. 350～385.
吉沢悟（一九九八）「沼津霊山寺の中世石塔群の調査」『沼津市史研究』第7号　pp. 97～30.



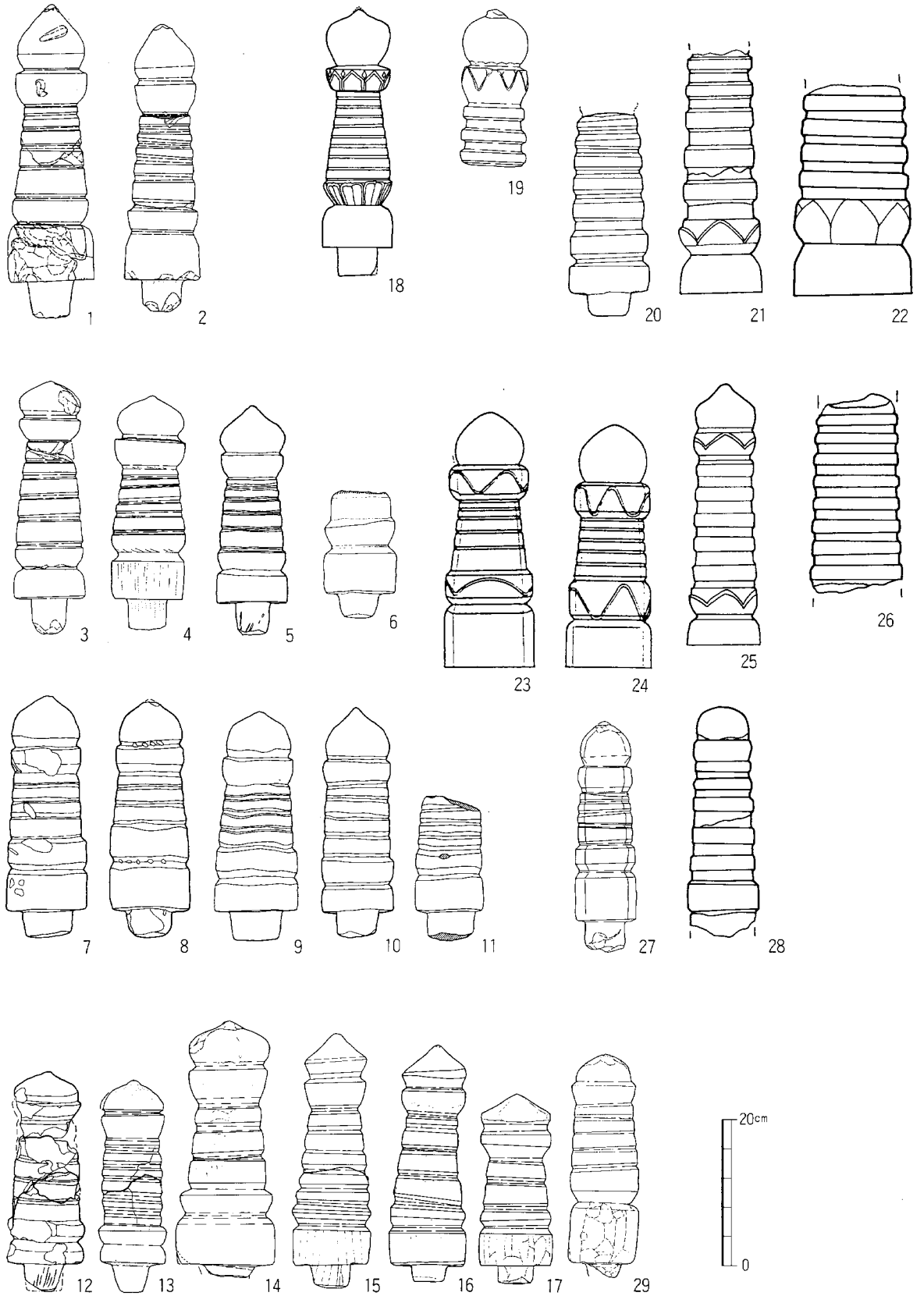
図版１　五輪塔（１・２緑色変岩、３～５輝石安山岩　６花崗岩　７～10砂岩）

１慈眼寺伝西蓮（1244没）塔　２愛知県一宮市法圓寺４号中世墓（塔下より13世紀前半の常滑壺。一宮市教育委員会1995）　３磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）　４段横地常泉寺　５段横地公会堂　６一宮市法圓寺１号中世墓（塔下より13世紀後半の常滑壺・片口鉢。一宮市教育委員会1995）　７・８榛原町勝田伏方中田宅裏山（古川久雄氏原図）　９引佐町北岡古墓（塔下より15世紀前半の常滑壺。引佐町教育委員会1994）　10磐田市一の谷中世墳墓群832号墓（磐田市教育委員会1993）



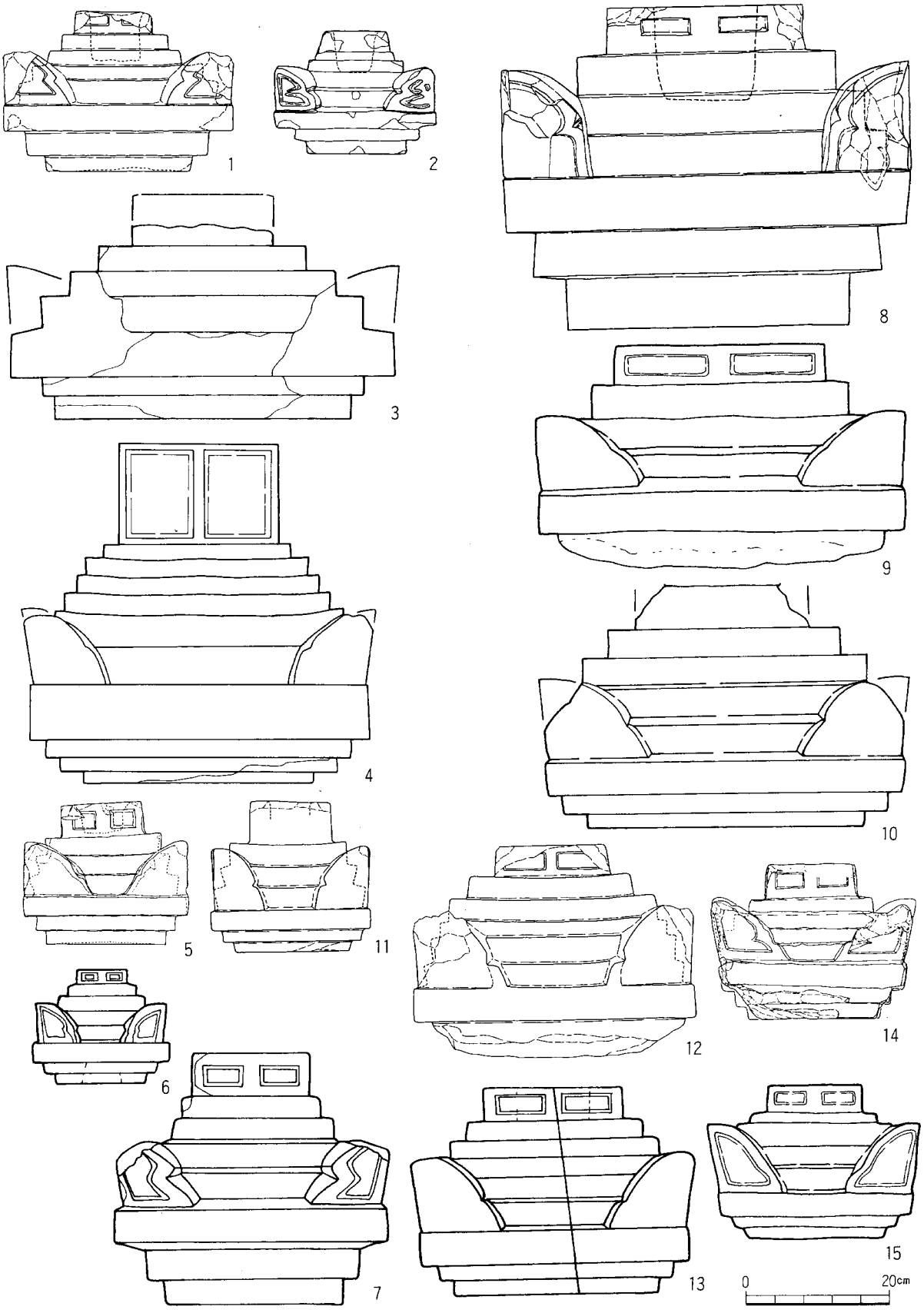
図版２　宝塔・宝篋印塔相輪の変遷（1）　（１緑色変岩　３凝灰岩？　６・11～13安山岩　他は砂岩）

１相良町平田寺延慶三年（1310）銘変形宝塔（相輪上部のみ砂岩。古川久雄氏原図）　２・７・８・23・24・30・31伝横地太郎塔石塔群　３掛川市本郷宗塔庵伝曽我十郎塔（本間1998）　４三光寺跡裏応安六年（1373）銘塔？（野澤1995・本間1998）　５本川根町小長井伝小長井長門守墓永徳三季（1383）銘塔　６掛川市本郷長福寺伝曽我五郎塔（本間1998）　９・10・15・18・21三光寺跡裏（野澤1995を補訂）　11榛原町勝田伏方中田宅裏山　12・13・26豊田町池田行興寺伝「熊野・母」塔（本間1998）　14引佐町北岡古墓（引佐町教育委員会1994）　16・17磐田市住吉遺跡（磐田市教育委員会1993）　19掛川市本郷照月寺原氏墓地　20小川端渋谷宅裏　22・25・27・28・29磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）



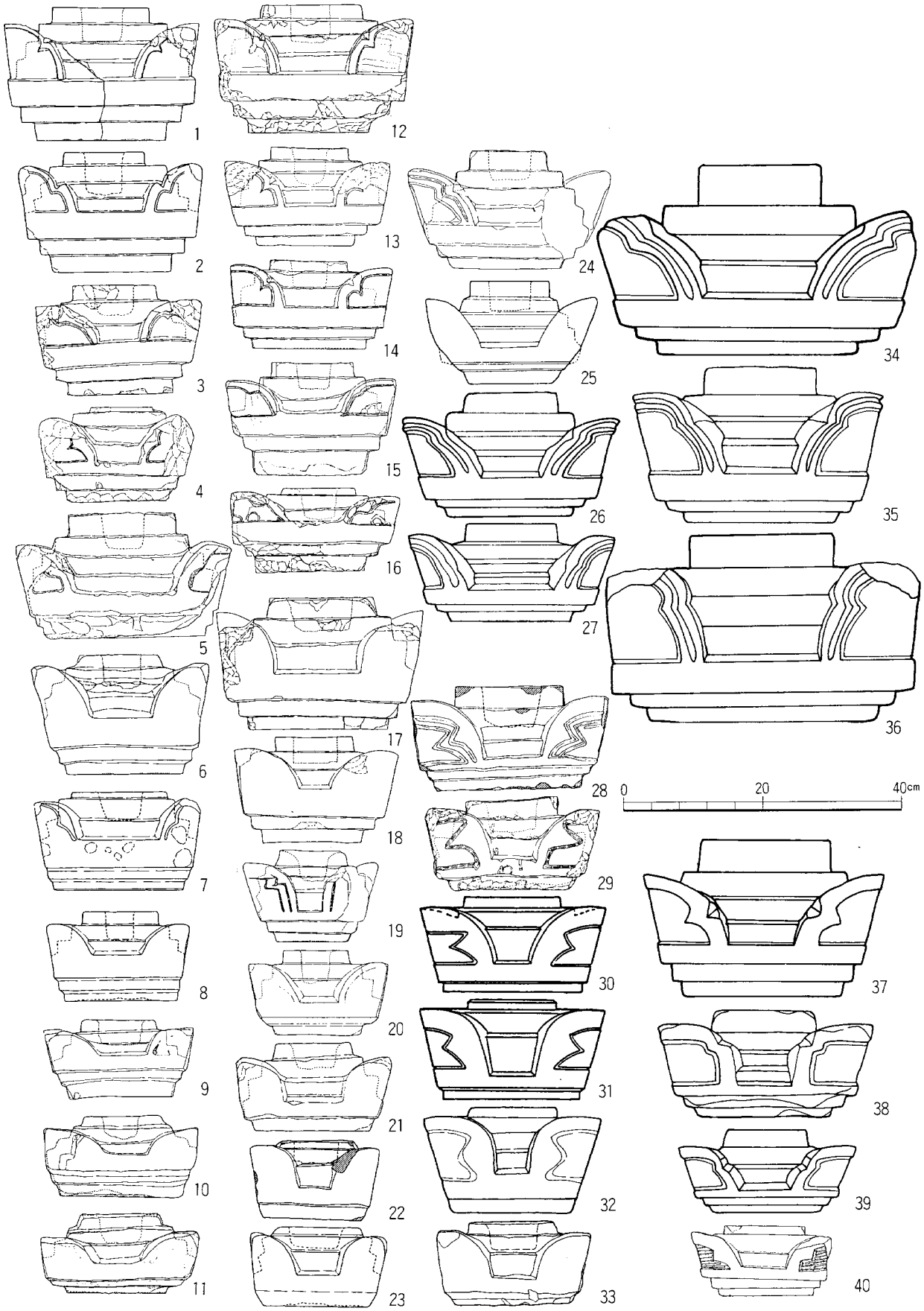
図版 3　宝篋印塔相輪の変遷（2）　（19～22・25～28花崗岩 他は砂岩）

1・2・4・15伝横地太郎塔石塔群　3三沢殿ケ谷坂　5・7～10・12磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）　6掛川城本丸下層墳墓群（永正築城（1513前後）以前，掛川市教育委員会1998）　11掛川市峯遺跡（16世紀後半，戸塚1995）　13小川端渋谷宅裏　14・16・17延命段　18愛知県一宮市法圓寺中世墓（一宮市教育委員会1995）　19・27三光寺跡裏（野澤1995を補訂）　20一宮市法圓寺5号中世墓（付近より13～15世紀後半の蔵骨壺。一宮市教育委員会1995）　21・25・28三ヶ日町幡教寺跡（本間1998）　22愛知県岡崎市本宗寺伝石川数正（1593没）塔（本間1998）　23・24春野町豊岡下石切（春野町史編さん委員会1994）　26岡崎市本宗寺伝石川政康文亀二（1501）銘塔（本間1998）　29藤谷神社下二俣家墓地（1567・1573の造立？）



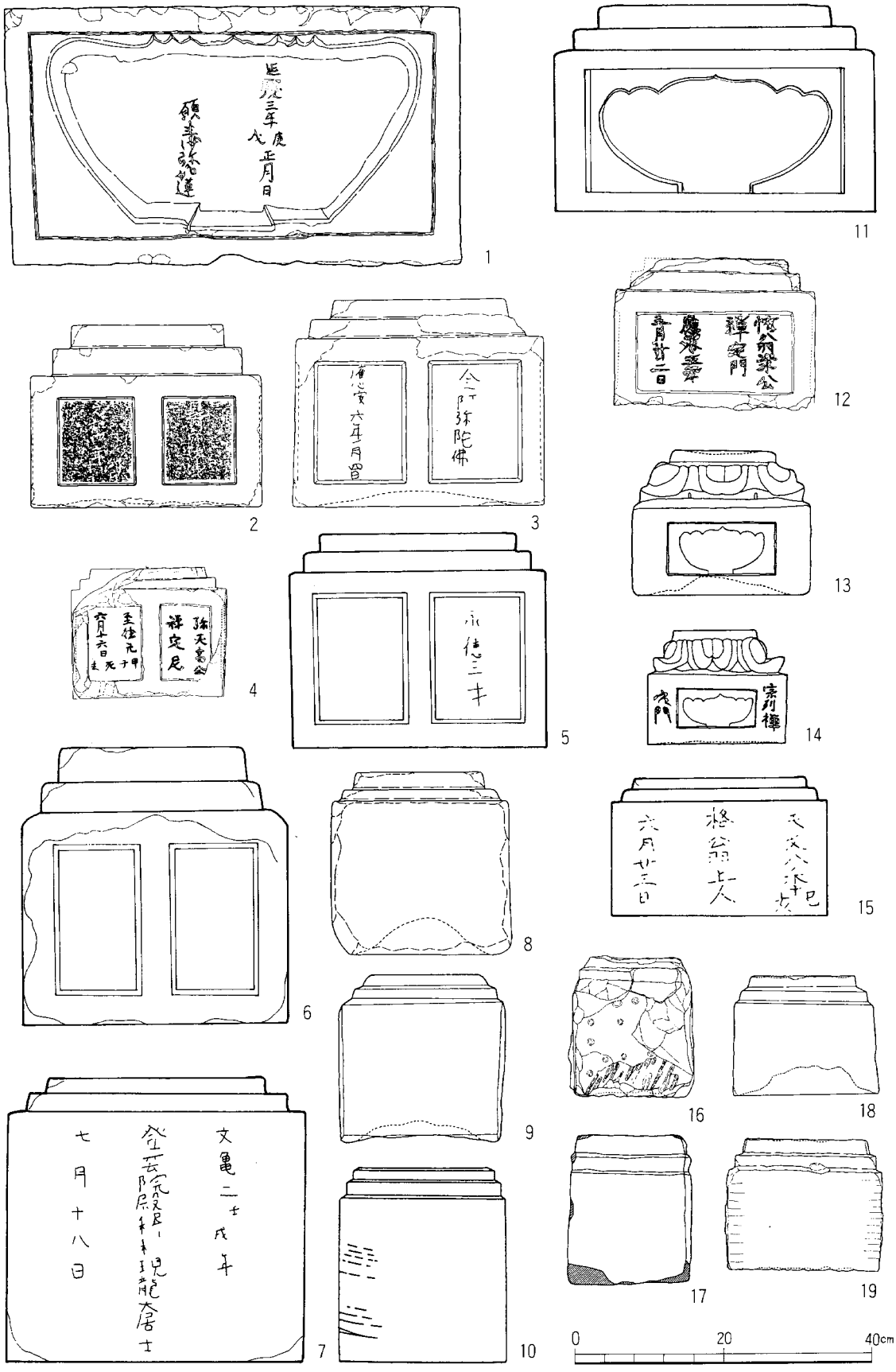
図版4　宝篋印塔笠の変遷（1）　（1～2・4～7安山岩　8～15砂岩）

1三光寺跡裏文和四年（1355）銘塔（野澤1995）　2磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）　3掛川市本郷宗塔庵伝曽我十郎塔（本間1998）　4掛川市本郷長福寺伝曽我五郎塔（本間1998）　5榛原町勝田伏方中田宅裏山　6豊田町池田行興寺伝「熊野の母」塔（本間1998）　8伝横地太郎塔　9・10・15掛川市本郷照月寺原氏墓地（本間1998）　11三光寺跡裏（野澤1995）　12三光寺跡裏応安六年（1373）銘塔？（野澤1995・本間1998）　13本川根町伝小長井長門守墓永徳三季（1383）銘塔（本間1998）　14相良町笠名應永五年（1398）銘塔



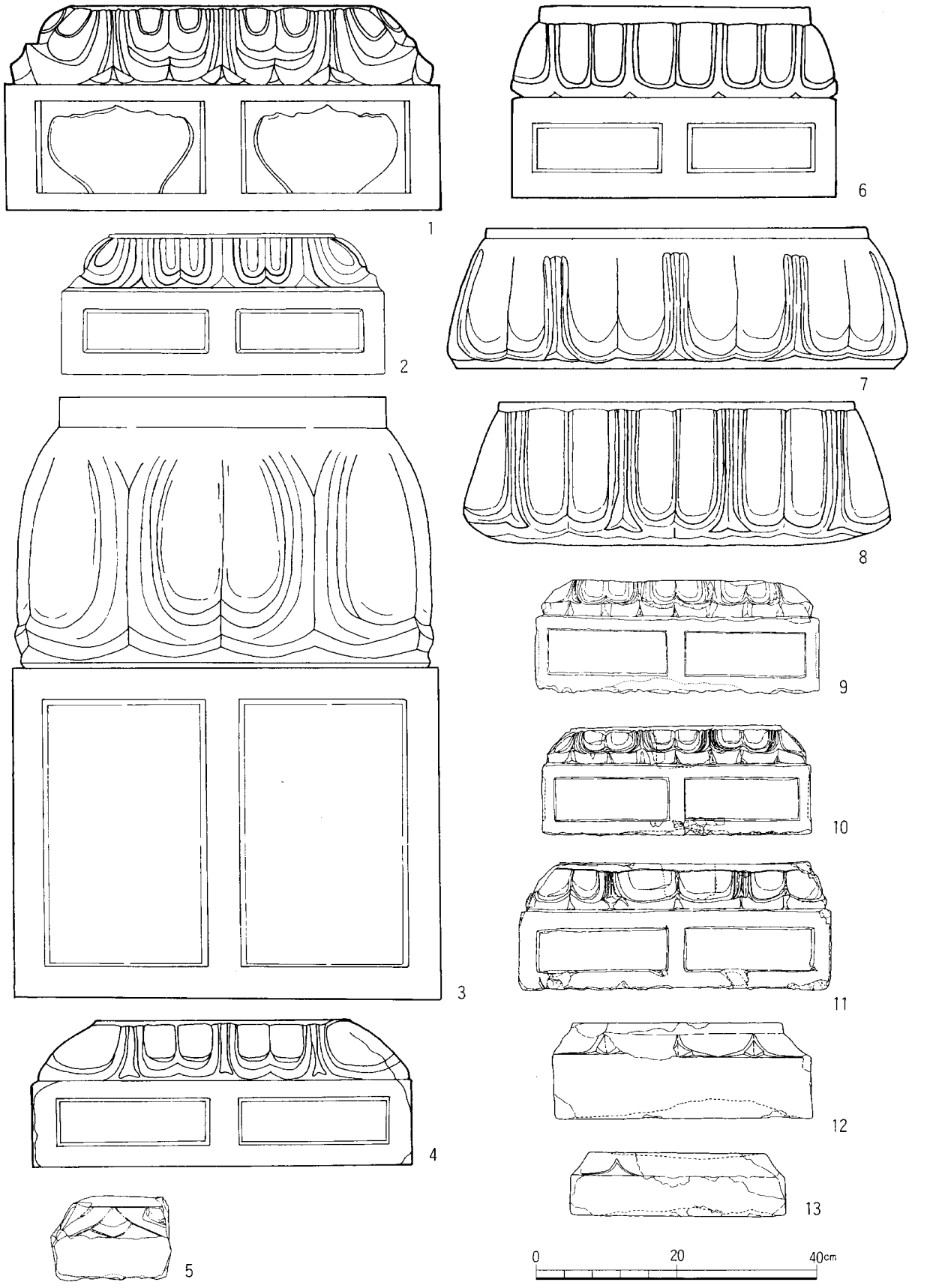
図版5 宝篋印塔笠の変遷（2）　（24～27・34～37花崗岩　他は砂岩）

1・3・9・18・20伝横地太郎塔石塔群　2・7・8・23・24三光寺跡裏（野澤1995を補訂）　4土橋山崎宅（三沢橋旧在）　5三沢太子堂　6・13・17段横地興嶽寺　10・11延命段　12・16神尾宝珠院（宇藤遺跡）（桃崎1996）　14天神森　15東横地坪井政則氏宅　19三沢龍谷寺　21藤谷神社下二俣家墓地（1567・1573の造立？）　22掛川市峯遺跡（16世紀後半，戸塚1995）　25愛知県一宮市法圓寺5号中世墓（付近より13～15世紀後半の蔵骨壺。一宮市教育委員会1995）　26・27・35・38・39三ヶ日町幡教寺跡（本間1998）　28掛川城本丸下層墳墓群（永正築城（1513）以前，掛川市教育委員会1998）　29福田町元島遺跡（桃崎1999）　30・31春野町豊岡下石切（春野町史編さん委員会1994）　32掛川市本郷長福寺（本間1998）　33磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会1993）　34愛知県岡崎市本宗寺伝石川数正（1593没）塔（本間1998）　36岡崎市本宗寺伝石川政康文亀二（1501）銘塔（本間1998）　37岡崎市大林寺天文八季（1539）銘塔（岡崎市1989）　40浜松城南東石垣裏込（1590年代築城以前，浜松市教育委員会1996）



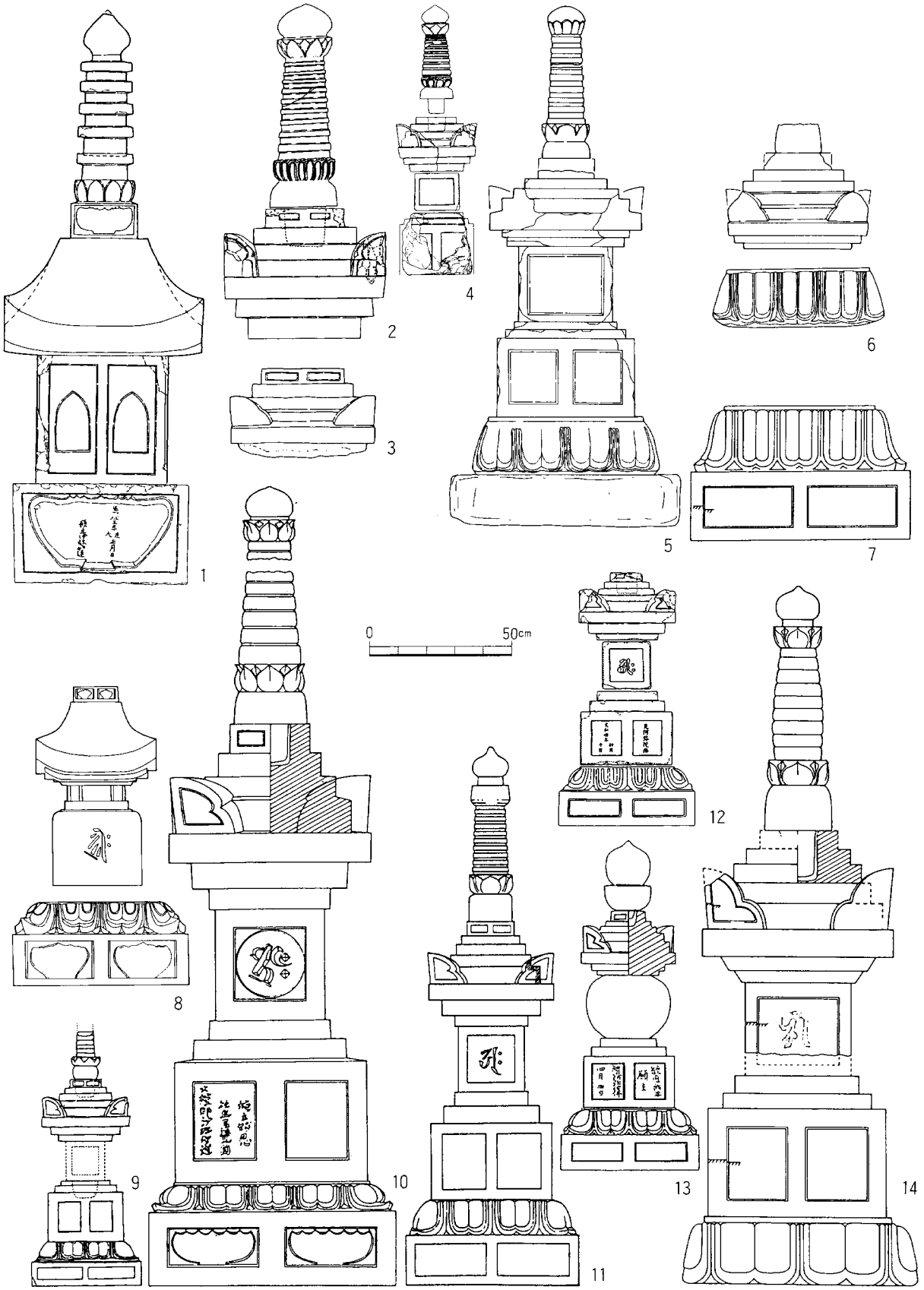
図版6　宝篋印塔基礎の変遷（1緑色変岩　2・4・6安山岩　7～9・11花崗岩　他は砂岩）

1相良町平田寺延慶三年（1310）銘変形宝塔　2三光寺跡裏文和四年（1355）銘塔（野澤1995）　3三光寺跡裏応安六年（1373）銘基礎（野澤1995・本間1998）　4浜岡町比木正福寺至徳元年（1384）銘基礎　5本川根町伝小長井長門守墓永徳三季（1383）銘塔（本間1998）　6豊田町池田行興寺伝「熊野の母」塔（本間1998）　7愛知県岡崎市本宗寺伝石川政康文亀二（1501）銘塔（本間1998）　8三光寺跡裏（野澤1995）　9愛知県一宮市法圓寺5号中世墓（付近より13～15世紀後半の蔵骨壺。一宮市教育委員会1995）　10春野町豊岡下石切（春野町史編さん委員会1994）　11岡崎市伝浄瑠璃姫墓（本間1998）　12相良町笠名應永五年（1398）銘塔　13・14一宮市法圓寺中世墓（一宮市教育委員会1995）　15岡崎市大林寺天文八季（1539）銘塔（岡崎市1989）　16福田町元島遺跡（桃崎2000）17掛川市峯遺跡（16世紀後半，戸塚1995）　18伝横地太郎塔石塔群　19藤谷神社下二俣家墓地（1567・1573造立？）



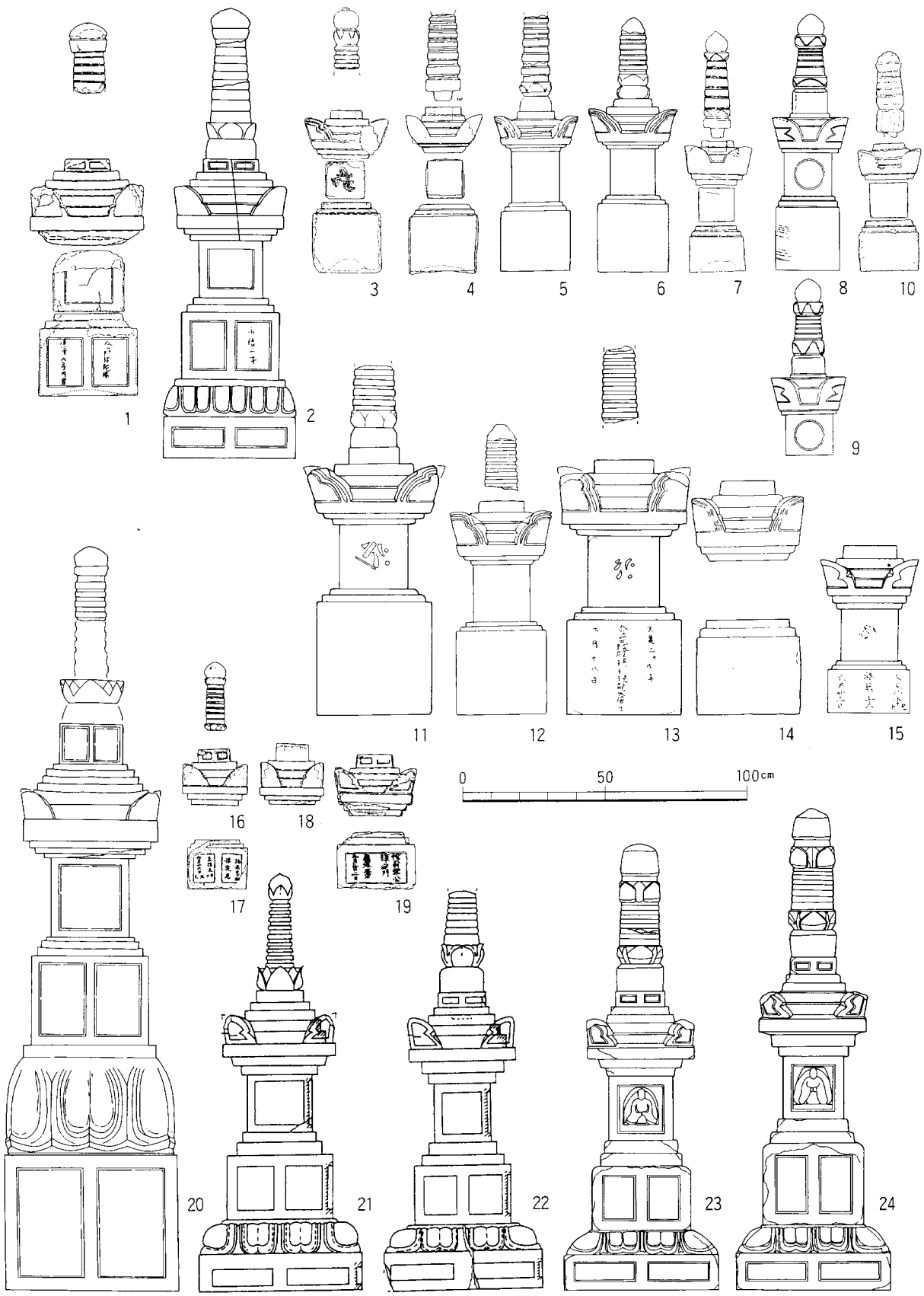
図版7　宝篋印塔台座の変遷（1～5安山岩　6・8～13砂岩　7凝灰岩？）

1磐田市西光寺宝塔（1330前後以降）　2三光寺跡裏文和四年（1355）銘塔　3掛川市本郷長福寺伝曽我五郎塔（本間1998）　4豊田町池田行興寺伝「熊野」塔（本間1998）　5・12・13三光寺跡裏（野澤1995を補訂）　6本川根町伝小長井長門守墓永徳三季（1383）銘塔（本間1998）　7掛川市本郷宗塔庵伝曽我十郎塔（本間1998）　8掛川市本郷照月寺原氏墓地　9神尾宝珠院（宇藤遺跡）（桃崎1996）　10・11段横地興嶽寺



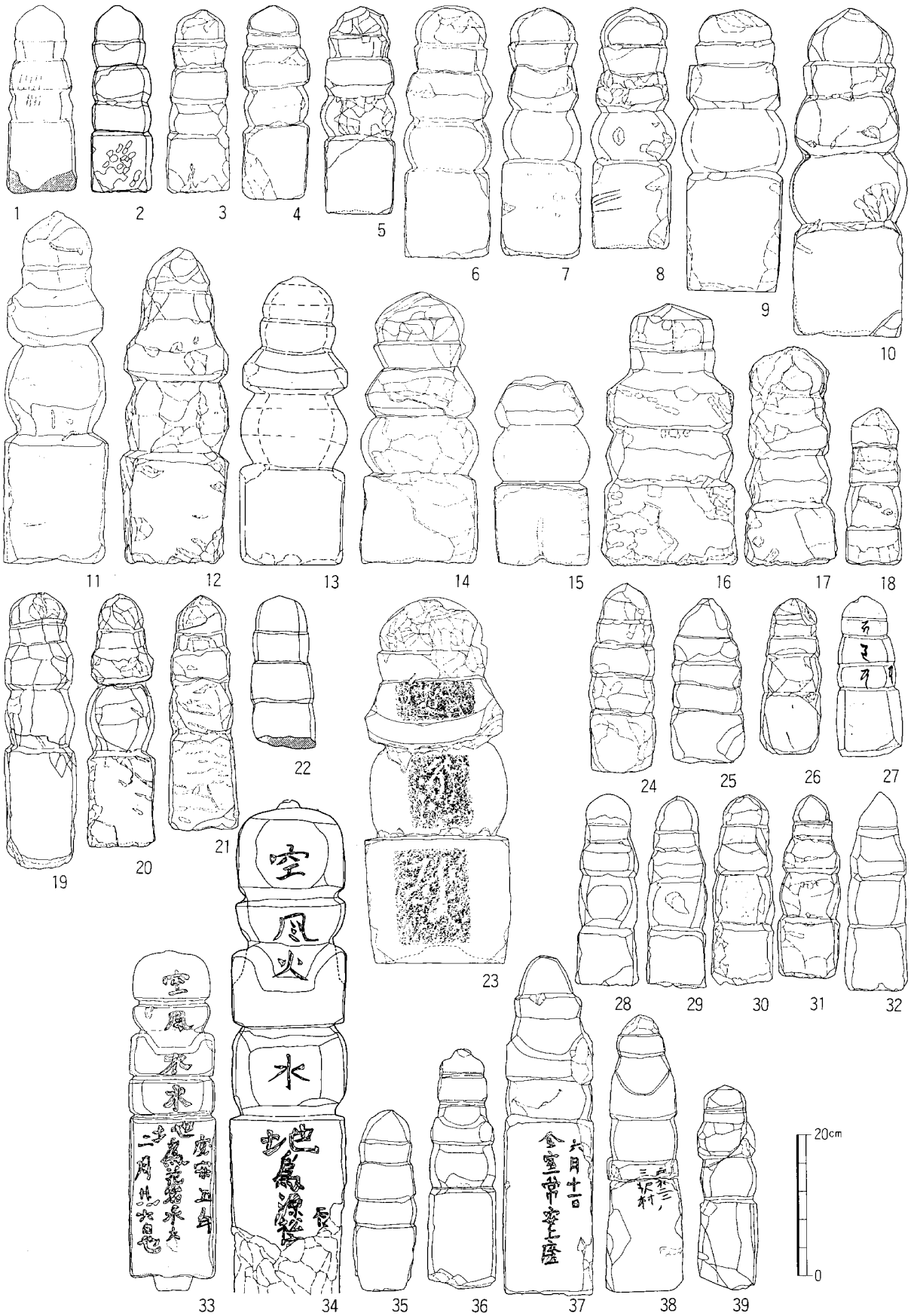
図版8　14世紀の大型宝塔・宝篋印塔（1　緑色変岩　2～4・6砂岩　5凝灰岩　7～14安山岩）

1 相良町平田寺延慶三年（1310）銘変形宝塔（193cm，相輪のみ砂岩。古川久雄氏原図） 2 伝横地太郎塔（14世紀中葉，残高145cm） 3・6掛川市本郷照月寺原氏墓地　4伝横地太郎石塔群（合成。基礎は別個体の可能性がある）　5掛川市本郷宗塔庵伝曽我十郎塔（161cm，本間1998）　7土肥町八木沢嘉慶三年（1389）銘塔　8磐田市西光寺宝塔（1330前後以降）　9熱海市東光寺建武三年（1336）銘塔（残高85cm，石川1997）　10 下田市建武四年（1334）銘覺圓尼塔（271.8cm，尾形1988）　11横浜市六浦上行寺壬辰銘（1352か）銘塔（181cm，千々和1986）　12三光寺跡裏文和四年（1355）銘塔（残高85cm，野澤1995より構成）　13榛原町勝間田氏墓所観応二年（1351）銘混合式塔（111.8cm，尾形1988）　14下田市高馬「傾城塚」塔（残高242cm，尾形1988）



図版9　14～16世紀の宝篋印塔（1～2・7～10・15・18・19砂岩，3～6・11～14花崗岩，16～18・20～24安山岩）

1三光寺跡裏応安六年（1373）銘塔（野澤1995・本間1998）　2本川根町伝小長井長門守墓永徳三季（1383）銘塔（194cm，本間1998）　3三光寺跡裏（野澤1995を補訂）　4愛知県一宮市法圓寺5号中世墓（付近より13～15世紀後半の蔵骨壺。一宮市教育委員会1995）　5～6・12三ヶ日町幡教寺跡（本間1998）　7・10伝横地太郎塔石塔群　8・9春野町豊岡下石切（春野町史編さん委員会1994）　10藤谷神社下二俣家墓地（1567・1573の造立？）　11愛知県岡崎市本宗寺伝石川数正（1593没）塔（残高123cm，本間1998）　13岡崎市本宗寺伝石川政康文亀二（1501）銘塔（残高117cm，本間1998）　14掛川市本郷照月寺原氏墓地　15岡崎市大林寺天文八季（1539）銘塔（残高110cm　岡崎市1989）　20掛川市本郷長福寺伝曽我五郎塔（推定257cm，本間1998）　21小山町菅沼嘉慶二年（1388）銘塔（140cm，蔵持1988・1991）　22小山町甘露寺応永七年（1400）銘塔（残高134cm，蔵持1988・1991）　23・24豊田町池田行興寺伝「熊野・母」塔（153cm，165cm，本間1998）



図版10　一石五輪塔の変遷（すべて砂岩）

1 掛川城本丸下層（永正築城（1513 前後）以前）　2 磐田市一の谷中世墳墓群（磐田市教育委員会 1993）　3～8，10・12，16～21・26 小川端渋谷宅裏　9・23 興嶽寺歴代住職墓地（23 に「天□」銘）11 小笠町正林寺伝今川義忠塔（1476 没，1517 昌桂寺創建）　13・14 三光寺跡裏（野澤 1995 を補訂）　15 段横地常泉寺　22 掛川市峯遺跡（16 世紀後半，戸塚 1995）　24 福田町元島遺跡（桃崎 1999）25 三沢殿ケ谷坂　27 浜松城南東石垣裏込（1590 築城以前，浜松市教育委員会 1996）　28～32 段横地公会堂（横山宅旧在）　33～39 三沢龍谷寺（33 慶安五年（1652），34 寛文四（1664），35 天和二（1682）か，36 貞享三（1686）か，37 元禄七（1694），38「宝永四」（1707），39 正徳元（1711）か）

横地城跡

総合調査報告書
資料編

平成12年10月23日　発行

発行・編集　菊川町教育委員会社会教育課
〒439-8650　静岡県小笠郡菊川町堀之内61
TEL. 0537-35-0925・2111
印　　刷　株式会社　開　明　堂